EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 3827

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

120

樗牛全集

全部六冊洋裝菊判
總クロース製頗美本
（第四卷迄出來）

文學博士高山林次郎君遺稿

各卷一冊に付正價金壹圓五十錢——郵稅金拾五錢

第一卷 美學及美術史 美學上の理想說に就いて○美感に就ての觀察○月夜の美感に就いて○宗教と美術○詩歌の所緣と其對象○日本畫の過去及び將來に就いて○歷史畫題論○歷史畫の本領及び題目○再び歷史畫の本領を論ず○坪內先生に與へて三度歷史畫の本領を論ずる書○審美綱領を評す○壯美及優美（斷片）○壯美優美外界の美（斷片）○色形自然美（斷片）總論（日本美術の特質を論ず）○奈良朝以前の美術○天平時代○平安朝時代

第二卷 文藝及史傳 文藝時評○文學と人生（近松巢林子）○第一期——廿八年九月より二十九年九月迄△雜論○第二期——三十年六月より三十三年七月迄△雜論○第三期——三十四年七月より三十五年一月まで

第三卷 文藝及史傳 釋迦○平相國○菅公傳○史傳雜纂○文藝評論補遺

第四卷 時勢及思索 第一期——倫理問題研究の時代○第二期——國家主義の時代○十九世紀總論○第二期——雜篇○第三期——信仰覺醒の時代○第三期——雜篇等

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

元祿時勢粧

文學士　笹川臨風君著

元祿は其風俗に於て最も趣味ある時代なり復興の氣運熟し革新の氣風吹きすさび社會のあらゆる方面の勃興し膨脹したる時代なり此書は即ち元祿の時代觀なり時代史なり風俗史なり文藝史なり社會史なり元祿をパノラマ的に示したるものなり二百餘年前の時勢を活動寫眞的に描きたるものなり其如何なる觀察をなしたるか如何なる筆を以て寫したるか如何なる趣味あるや如何なる興味あるや本書則ち能く語らん

全一册洋裝袖珍
正價金參拾錢
郵稅金四錢

發兌元　東京日本橋本町　博文館

文學博士 高山林次郎君著

世界文明史

並製 金四拾錢 郵稅金八錢
特製 金五拾五錢 郵稅金拾錢

發兌元 東京本町 博文館

近來歷史の著譯一にして足らず、而かも悉く政治史のみ。唯往年ギゾー氏の原著西洋文明史の飜譯を外にして、未だ一卷の文明史無きなり。是豈本邦史學の一大欠陷に非ずや。文明史は人類生活統一的歷史なり、歷史的發達の精神は是によりて、初めて釋了するを得べし。從來本邦學者の手に成れる歷史の多くは、單に事實を駢記して、是を年度と方處に繫けたるもの。讀むもの固有名詞の送迎に忙殺せられて、遂に史的發展の眞精神を會得するに由無し。是れ大に恨とすべし。著者の此著あるは、實に此欠陷を補充せむが爲めなり。乃ち筆を有史以前の民族に起し、佛蘭西大革命に到るまで、章を重ぬること十有五。主として、哲學、宗教、文藝及び政治の上より東西歷史の隱微を描破せむと擬す。殊に基督教と西洋歷史との關係に就ては、著者自ら其簡明痛切を負ふ。庶幾くは讀者をして目睹指顧の慨あらしめむか。一小冊子、素より其名に稱ふことを得ずと雖ども、參考該博、用意愼密の二點に於ては、著者敢て其力を惜まざるなり、傳記、記事、編年の外に眞正の歷史あることを知らむと欲する者は請ふ本書を讀め。若し夫れ佛蘭西革命以後十九世紀人文の歷史に到りては、事最近世に係り、殊に細心精微の研究を要す。乃ち更に筆を起して別に一卷を作り、本書と踵跡相襲がしめむと欲す。

樗牛全集

明治卅八年四月廿二日印刷
明治卅八年四月廿五日發行
明治卅九年八月十五日四版發行
明治四十年四月廿五日五版發行
明治四十年十月廿五日六版發行

著作權所有

第參卷文藝及史傳下
定價金壹圓五拾錢

編輯者 齊藤信策
發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎
印刷者 東京市神田區三崎町三丁目一番地 上村龍之助
印刷所 東京市神田區三崎町三丁目一番地 博信堂

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（大谷製本）

樗牛全集第三卷 終

派と蕪村の畫とを折衷して四條派を開く。又關東には抱一あり、水仙花に水、梅が枝に雪等の洒落なる畫を善くす。其門人には抱二の外二三人あり、居を根岸邊に構へて洒々落々の生活を送りたるが如し。

天保時代には文晁出で、日本畫の外に支那畫を學びて獨得の畫風を創む。又渡邊華山あり、西洋の油繪より趣味を得來れるが如し。此外北齋翁は諸家を學び、兼て西洋畫風を味ふ、江戸本所邊に住す。其の長崎波止場等を畫きたるものを見るに、殆ど今日の西洋畫に於ける如く遠近法も頗る整ひたり。曾て京都にて大達磨を畫く、長十丈餘幅二間ありしと云ふ。德川時代の末葉には菊池容齋あり、氣節を以て畫き、常に人をして勤王の心を起さしむ。曾て南朝の遺蹟を尋ねて後醍醐天皇の陵に謁し、三四年其傍に居る、彼は維新後に沒す。維新の際は過渡時代にして志士興起せる時なれば繪畫の事又世の顧みる所とならず、是を以て見るべきもの少し。然るに幸にも狩野派より芳崖及び雅邦翁の如きを出し、以て日本美術の面目を保つ。此外松本楓湖あり、容齋の門人なれども容齋に比すれば甚だ幼稚なるが如き感あり。

(三十三年五月)

めたる浮世繪も亦太平の世につれて次第に發達す。菱川師宣は土佐家に學び、又浮世畫を能くし、其畫頗る名高し。又光琳なるものあり、光琳派を開き、一種妙なる畫風を始む。そは木の幹などをば妙にぼかして裏より金などを鏤むるものにして、今日の美術家中此の風を學ぶものあり。この所謂元祿時代は文學に於ても大に隆盛を來し、近松巢林子の如き、將た井原西鶴の如き天才を出す。(近松の作は空前絶後の天品にして到底勉強して作り得べからざるものなり。瀧澤馬琴の如きは有名なりと雖も其作は勉強すれば必ずしも作るに難からざる事、尙今日文壇の大家なる尾崎紅葉氏の作品の如し。之に反して故一葉女史の作の如きは眞に神品にして到底何人も勉強して作り能はざるものなるが如し。密に思ふ、現今の文壇の製作物中、後世に傳ふべきもの、唯それ故一葉女史のものゝみにやあらむ。)又此時代には俳諧漸く盛に行はれ、有名なる芭蕉の外支考、去來又は謝蕪村等ありて之と共に一種の畫風も世に行はる、これ亦記憶せざるべからざる所なり。尙此時代には圓山應擧ありて繪畫界に一生面を開きたり。其門下に蘆雪、半夜翁ありしが、眼中人なきが如き行爲ありし故に終に破門せらる。又吳春なるものあり、圓山

(啓書記)、蛇足、雪舟、雪村等輩出す。これ等の人は能く東山時代を代表するものにして、其畫風は所謂る禪宗畫とも云ふべきものなり、こは數點の墨痕を以て描きたる如きものなれば、能く觀味して悟入せざれば其妙を知る事難し。其中には如拙、蛇足の如き、之に反する畫を描きたる者ありと雖ども、一般に皆簡勁の畫風也。此の影響は金閣寺の造營にも著しく現はれ、甚しく粗朴を極めて而かも神韻飛躍の妙を極む。即ち四疊半の座敷に三四人の茶人相會して月を賞するが如きは此時代の風趣なり。其他狩野家には有名なる元信あり、足利の末葉には雪村、永德、山樂あり。而して尙戰國時代より豊臣時代を代表するものは山樂にて、豊臣氏の豪邁なる事業をば、克く壯大雄偉なる筆もて發揮し、何となく覇氣の表顯するものあり、例へば杉戸等に能く猛虎を描きしが如し。

德川時代に至りては、世の太平となるに從ひて、繪畫にも此風現はれて浮世畫漸く行はる、こは岩佐又兵衛の創始せるものなり。これ美術史上の研究問題なり。又狩野家には探幽齋及び尙信起り、繼で土佐家には有名なる光起現はれ、兩家相對して大に畫界の面目を改めて以て德川吉宗時代の偉觀を爲す。岩佐又兵衛の始

堀川天皇時代の人にて土佐家の祖と稱せらる。之れと同時に鳥羽僧正あり、所謂る鳥羽繪の祖にして動物戲畫は其得意のものなり。蛙が蓮の葉を擔ひ行く樣又は躍り居る所等を描けるものの如き、運筆輕妙にして筆法頗る整ひ、爲成、基光などの到底及ぶ能はざるものなり。平安朝の後期には基光の子隆能殊に有名なり。土佐三筆とはこの隆能の子光長と光信(足利時代の末葉)及び光起(德川時代)を云ふ。此他慶恩、信實等の畫家も有名なり。

後伏見天皇、後二條天皇の頃には宅磨榮賀現はれ、雄偉なる筆致を以て佛畫、支那人物等を畫きて巧妙を極む。これには二種の原因あるが如し。宋元畫(李龍眠、顏輝)の夥しき輸入と平安朝の纖弱の風に對する反動即ち是れなり。兎に角宅摩榮賀は克く鎌倉時代の美術を文明史的に發達せしめたり。

足利時代は戰亂の世なれば美術にはあまり感心すべきもの少し。然れども詩人僧侶にて繪を能くせるも二三あり。可翁なる人あり、牧溪を學びて雅趣多し。南北朝合一し、支那との交通漸く盛になりて繪畫も多く輸入せられてより我國の繪畫界も次第に復活し來りて、見るべき作甚多し。如拙、明兆(兆殿司)、周文、眞能、啓祥

藤原時代以後の日本美術史概觀

左の一篇は故著者が明治三十三年六月十五日哲學館講堂にて日本美術史講義終了の際三時間を以て談話したるものを當時の聽講者たりし依知川才次郎氏が其梗概を覺書きにしたるものなり。此際の故著者の草稿は今存せざるが故に、依知川氏を煩はし其筆記を得參考のために左に掲ぐることゝなしぬ。

日本美術史を時代別けにすれば左の如し。

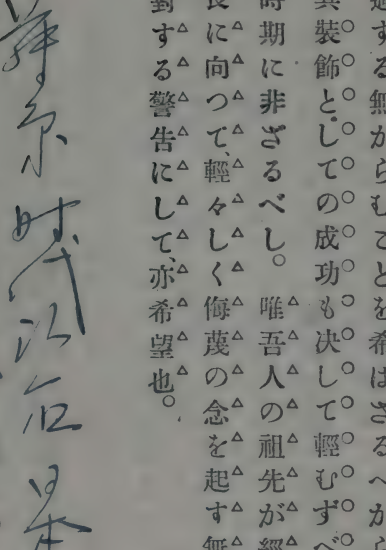
推古時代
天平時代(奈良朝)
平安時代(藤原朝)……纖弱(筆法なし、針金にて線を劃せし如きもの)
鎌倉時代(源、北條時代)……豪壯(繪は筆法、彫刻は刀法)
東山時代(足利時代)
桃山時代(豐臣時代)
江戸時代(德川時代)

白河天皇の頃より書家として有名なるものは宅磨爲成藤原基光なり。基光は

邦の美術は其の材料に於て既に甚だ非美術的たりとの誤りを免るべからざる也。

吾人は本邦の美術家が深く這般の事實に就いて省察する所あらむことを望むと同時に、斯かる非美術的事情の下にありて一面には美術獨立の地歩を失ひながら、他面に於ては却て更に美術の裝飾的方面に於て多大の成功を贏ち得たるの事實を看過する無からむことを希はざるべからす。美術の獨立や素より希ふべし、而かも其裝飾としての成功も決して輕むずべからざる也。今は兩者の得失を論ずるの時期に非ざるべし。唯吾人の祖先が經營したる永き歷史の賚たる本邦美術の特長に向つて、輕々しく侮蔑の念を起す無からむこと、是れ吾人が今の本邦美術家に對する警告にして、亦希望也。

（三十五年六月）



は裝飾上の意義を全く外にしては、何處にも存在せざりきと謂はむも不可無し。即ち一基の彫像、一幅の書幀が某々の處に裝置せらるゝは、是等の作品と其の裝置せられたる處との間に、何等かの實用上若しくは裝飾上の必須の關係ありて存せずむばあらず。單に彫像、書幅其物を翫賞せむが爲に陳列せらるゝが如きは、極めて稀に見る所の事例に屬す。故に歐洲人の所謂る美術上の『コレクション』なるものは、本邦人の殆ど想ひ及ばざりし所と謂はむも不可無き也。更に又美術品其物の構造案排等の事情に就いて見るも、所謂掛物と云ひ、屏風と云ひ、障子、襖と云ひ、天井、壁と云ひ、扇子、團扇と云ふの類、是等の物が繪畫本來の目的を達するの素地として極めて不便不利なることは、寧ろ細説の贅なるを思ふ。天地の割合に長きに失するものは掛物に非ずや。吾人の視域に現はれたる物象は、決して是の如き褊長なる境界の中に表現せらるべからざる也。平面に見るべき一幅の畫面を故らに二折し、四折し、六折し、八折して、其全面の統一を打破して顧みざるものは即ち屏風に非ずや。其の他障子襖の引手緣板に於ける、扇子團扇の形狀の不自然なる、何れか幻覺を尚び統一を重ずる繪畫の目的を破毀するものにあらざる。一言すれば本

と今の所謂る敎育とはその本領に於ておのづから相異なる所あるを免れず。殊に今の帝國敎育會の會員の大多數の如きは、俗惡凡庸を極めたる敎育家先生なることを想へば、此際美術家たるものは漫に彼等の誘掖に甘むぜず、淺近なる巧利以外に於て別に美術の自由と獨立とを自覺し、是の天職の爲に攝理せられたる自家の高尙なる本分を發揮するの覺悟あるを要す。上來說くところ、頗る學究先生の瑣談に類するを恥づと雖も、今の美術界に對するの警告として、吾人必ずしも其の無用の言に非ざるを信ずる也。

（三十五年六月）

裝飾と日本美術

本邦の美術が主として功利上の見地より評價せられしことは、其の獨立の發達の爲に喜ぶべきことには非ざりしと雖も、而かも是の實際的傾向が本邦美術に一の顯著なる特質を與へたることは看過すべからざる事實なりとす。何ぞや。他なし、裝飾としての成功是れ也。

概して言ふ時は、本邦の美術は、そが繪畫たりと彫刻たるとに論なく、實用もしく

所にして、專ら是れによりて身を立つるが如きは、狩野永納が所謂る損本務末の悖行とせられし也。名工巨匠の天才ありて是の境に遊ぶもの、若しくは眞に藝術の趣味ありて箇中に人生の樂地を求め得たる者は、素よりかゝる尋常裡に拘束せられずして其の天成の才情を暢發したるなるべしと雖も、是れを社會の大躰より見れば、美術及び美術家の地位品格は、夫の歐洲に於けるものよりも遙に下れりと謂はざるを得ざるべし。往昔止利佛師が造像の工によりて特に敕讃を給はり、又は稽文會兄弟が天照大神及び春日大明神の後身なりとせられしが如きは、是れ彼等の造作せる佛像其物の宗教上の意義に因由せるものにして、彼等が美術的才能其物の特に尊重せられしが爲に非ざる也。是の如きは、美及び美的翫賞の精神生活の上に有する意義及び價値の十分認識せられざるの致す所にして、畢竟國民固有の氣習に歸着せるものと看るを得む。

然れども是の如き氣習が近代文明の影響によりて漸く革まり、美術本來の職能に關する觀念に一改新を來しつゝあるは吾人の甚だ欽ぶ所也。近時帝國教育會が美術部を設けて斯界の誘掖に力むるの心事、吾人亦是を諒とす。然れども美術

に親むものゝ頗る奇異とする所なるべしと雖も、本邦の美術界に著しく是の氣習の存在せしむことは爭ふべからざる事實なりとす。されば白井華陽が其の畫乘要略を編するに當りても、『此の編膺筆射利の徒、好手の名ありと雖も排して取らず』と言ひ、又『此の編載する所の諸家、其の巧拙は姑らく措いて論ぜず、其の清潔偉行ある者を求めて特に是を表す』と述べ、英一蝶の至孝なる、松尾芭蕉の風流にして名利を忘れたる、池大雅の志行端直にして冲澹自ら安ぜる、若しくは僧玉翁が畫名を匿して敢て俗名を貪らざる、或は岸駒が歳十四にして其の畫を售りて父母を養へる、是の如きは華陽が其技倆の如何に關せず、特に畫家として特に是を表彰せむと欲せし所なりき。而して是の如き見地に立つものは獨り一華陽のみに非ざるや、素より言を待たざる也。

是を約言すれば、支那に於ても本邦に於ても、美術の職能は主ぱら利用厚生の上にありと思惟せられ、德敎を助け、人倫を補ひ、文獻の到らざる所を明にし、過去の史蹟風俗をさながらに表現するは、即ち其の主要なる目的とせられしが如し。是を以て美術の業たる、素と達道の君子、身に餘力ありて所謂る藝に游ぶものゝ關はる

家の中には自ら自家の職分を恥づるものさへあるに到れり。閻立本は盛唐の大家也、而かも平生其の子を戒めて『汝が曹愼みて書を習ふこと勿れ、深く丹青の嘲を愧づ』と謂ひ、敦煕亦御書院の長老の身を以てして、力めて其の子の繪事に近づくを戒めたりき。是の如きは獨り支那に於て然るのみに非ざる也。本朝書史の著者は『夙世謬詞客、前身應畫師』と云へる王摩詰の詩、及び『鄭公襆散髮如絲、酒後嘗稱老畫師』と云へる杜少陵の句を引いて『是を以て之を觀るに、畫師未だ必ずしも賤術と爲さゞる乎、非耶』と辯じ、

德放而一藝隨之、非損本務末也。

と言ひて厘かに自ら慰むるもの、本邦畫家自ら居るところ如何に卑きかを想見すべき也。即ち美術の物たる、功終り德成りて後、藝に游ぶものゝ翫好すべきもの、道德功利の事業を差置きて初めより是を專業とするが如きは、本末を誤れるものと思惟したりし也。美術其物の品隲已に是の如きを以て、美術家其人にして若し道德に違ふが如き行爲ある時は、其の畫亦重ぜられず。凡工と雖も德行に於て優るものあれば、其の作品却て藝苑に重ぜらるゝことあり。是の種の批判は眞に藝術

（同上三〇頁參照）

みやびかなるためしは、むかし頭中將なりし人のある女房に懸想したるが、せちなる思ひのかなひ難かりしかば、雪の夜みちのいと寒げなる姿を寫しいでて贈りしより、心の願ひやがてかなひて、睦まじく榮えつとなん。またいちはやくいさほしかりしは、鎌倉なる右大將の君、しらぬかたきのすみかを伺ひ、審にうつしとらせて、たはやすく討とられたりき。これらのたぐひいづれもいづれもすべてうつし繪の德になんありける。云々。（同上二八、二九頁參照）

妖怪の禍を免れ、戀愛の望を遂げ、敵人の邸地を審にする等を擧げて繪畫の功德を讃するが如き、美術に對するの理想としては極めて卑劣なるものと謂はざるべからず。是の如く、支那にありても日本にありても、美術の理想的職能は主として淺近なる功利の上に存せしを以て、そが百般の文物の間に占有せる地位は、隨つて甚だ高きものに非ざりき。されば宋の宣和畫譜には『道に志し、德に據り、仁に依り、藝に遊ぶ、藝なるものは道に志す者と雖も忘るゝ能はざる所、然れども特に之に游ぶのみ、畫も亦藝也』（叙論）と謂ひて、明に美術畢竟士君子の餘技なることを述べぬ。既に餘技なり、是を以て士君子の中には往々繪畫を賤みて墨工粟人の小技と爲し、畫

是等の文字によりて見れば、繪畫の用は主として德教を助成し、善惡を勸懲する所にあり。所謂る六籍と功を同じうするは、即ち其の理想として見るべきもの也。宋の米芾が『古人圖畫無非勸戒』(畫史唐畫編)の一語は正に繪畫の職能を端的に言明せるものと謂ふべし。而して繪畫に對するの觀念、即ち移して一般美術に對するの觀念と目するの不可無きや、素より論無き也。

是の如きは吾人の隣邦に於て獨り然るに非ざる也。試みに扶桑名畫傳の著者が其の自序に於て如何に繪畫の主旨を論述したるかを見よ。

よろづの事わざの中にも、文よむかたと、つはものとるかたとの二つの道はさるものにて、繪かきの道、はたいみじかるべし。さるは千早振るおほかみの尊きみかたはいはまくもかしこし。或は佛菩薩たちのうるはしき形と雖も、ただ一ひらの紙の上にあらはし、又いそのかみ古りにし御時、たけき武士のいくさの場にも、必ず畫どころの上手をひきゐて審かに戰ひのさまを繪がゝせ、將軍の名をしるしそへて奉るべくおきてさせ給ひ、また、さて竹の大宮の中には白澤王をゑがゝせ給ひて、あしき物の怪をも退け給ふとぞ。しかのみならず、

を代表せるものと觀むも差支へなかるべし。今是れを古來學者の言說に徵證するに、隋唐以降畫を論ずるもの丶言、何れも是の實際的意義を擺脫せる者無し。張彥遠が歷代名畫記に釋名の文を引いて。

畫掛也、以采色掛物象、故鐘鼎刻識魑魅、旂章明昭規度、而備國制、清廟肅而尊彝陳、廣輪度而疆理辨、以忠以好、書在於雲臺、有烈有勳、皆登於麟閣、見善以戒惡、足以思賢、

（櫟牛全集第一卷二部二七頁參照）

と說けるを始めとし、畫の源流を論じては、『夫れ畫は敎化を成し、人倫を助け、神變を窮め、幽微を測り、六籍と功を同じうす』と論じ、又顧光緣の言を引いては、『洎乎たる有虞繪を作る、是に於て禮樂大に開け、敎化由て興る、故に能く揖讓して天下治まる』と謂へる等、事皆經世濟民の功利に關はらざるは無し。魏の曹子建の言是の旨義を述べて最も分明なるを見る。曰く、

觀畫者、見三皇五帝、莫不仰戴、見三季異主、莫不悲惋、見纂臣賊嗣、莫不切齒、見高節妙士、莫不忘食、見忠臣死難、莫不抗節、見放臣逐子、莫不歎息、見嫉婦妬女、莫不側目、見令妃順后、莫不嘉賞、云々。

（同上二八頁參照）

美的製作として其の品位と價値との認識せられつゝあるは著しき事實也。是の事實は美學と稱する一科の學が近世學者の研鑽によりて、高尚にして獨立せる位置を精神科學の間に獲得しつゝある事實と相並びて考察せらるべきものとす。もし夫れ支那及び本邦の美術は這般の點に於て歐洲美術と大に趣を異にするものあり。

一言以て是を約すれば、支那及び本邦に於ては、美術が其の本然の上に於て享有し得べき品位と價値とは、一般民衆の間には言ふまでも無く、聰明なる士人の間に於てだも未だ認識せられざる也。例へば古今圖書集成の編者等は繪畫を『藝術』の部内に編收せり。而して彼等の所謂藝術とは佃漁、狩獵、耕作、醫術、禁厭等を包含したる一大概念にして、其の意義は英語の所謂アートの最廣義に擬すべきもの。繪畫も亦是等のものと同列たるべきものと思惟せられしより見れば、彼等が最廣義の藝術以上に於て特に美術てふ觀念を有せざりしことは、寧ろ炳焉たるに過ぐ。今夫れ古今圖書集成は近代支那の一大類書にして、其の編者の中には實に清朝一世の碩學を網羅せり、隨うて這般の分類法を以て直に支那人が美術に對する觀念

牌を惜氣もなく濫授するに比すれば果して如何ぞや。

（三十五年五月）

藝苑瑣談

近時帝國教育會が新たに美術部を設け、盛に斯道の名流を招致して諸般の事業を計畫しつゝあるは、美術界の現象として注意すべき事項なりとす。辻新次氏を會長に戴ける今の教育家先生の團躰が吾等の藝術に對して如何ばかり稗益し得べきかは、吾人の初より重きを置かざる疑問なりと雖も、今の俗惡なる世尚に反抗して自家藝術的良心の自由を維持するの覺悟を決定するは、藝術家諸君にとりて極めて必要なる事なりとす。美術局の設立も良し、美術家の團躰も可也。然れども吾人は先づ美術家其人に向つて自家天職の自覺を促がすの更に急要なるを見る也。吾人試みに暫く當世の學究先生の顰みに倣ひ、從來本邦美術家が自己の職分に對し如何の觀念を有せしかを點檢し、以て今の美術家が立脚の地を歷史的に描寫せむと欲す。

そも〳〵歐洲近代の美術が其の宗教を離れ、其の歷史を離れ、漸やく純粹なる審

を悲しむ。知らず諸子は自家の進路に就いて明瞭なる意識を有せりや。諸子の多くは自ら理想派を以て居るもの、知らず其の所謂理想は諸子の進路に何等かの光明を投じつゝあるか。吾人は諸子が時に其筆を擱きて自家の意識を檢覈せむことを望む者也。

◎展覽會の形躰に關して改良すべきもの甚だ多し。其出品に大淘汰を加ふるも亦其の一也。毎次の會場に於て眞に觀るべきもの多くとも二三十點を超えず、而して現に陳列せらるゝものは常に千餘に至る。是れ曾に觀者を苦むるのみならず、展覽會の品位を墜すものと謂はざるべからず。

◎彼と此と比較するは固より其の倫に非ざらむ。然れども英國王立美術院の年々の展覽會の如きは其の撰擇の嚴重なる、特別審査員の手に觸るゝだに既に畫家にとりて重大の名譽なりと思惟せらる。一代の英才ターナーの十七歳の作品が其の陳列の撰に上りしが如き、傳へて藝苑の逸話となれり。アルバートムアの如き名家すら死するまで是の美術院の賞典に與りしことあらざりき。是を本邦の展覽會が來者不拒の態度を以て、成るべく列品の多からむことを望み、金銀銅の諸賞

なりと謂へり。然らば則ちニイチェの研究は是より漸く起らむか。吾人亦機に臨みて論壇の人となるを辭するものに非ざる也。

三

◎近刊の早稲田學報に三上博士の德川家康論を掲ぐ。其價値の批判の如きは吾人の能くする所に非ずと雖も、勤厚精勵なる博士の學風に見て蓋し永く史界の鐵案となるべき一大論文なるべし。

◎博士は家康が佛敎諸宗に公平なりし事例を擧げて其の一美德と稱せられたり。家康果して諸宗に公平なりしや否やは吾人に於て多少疑問無きに非ず。例へばかの常樂院日經及び其の門下に對する迫害は如何。慶長十三年に於ける江府宗論の顚末に就いて、家康の態度は果して公平なりと稱するを得べき乎。吾人は三上博士が是點に關する意見を聞かむことを希ふ。

◎今年春季の繪畫展覽會は概して好成績を以て許すべからざりしが如し。殊に美術院一派の青年畫家の作品に對して吾人は滿足の意を表すること能はざる

所なりしと雖も若し博士にして眞に是の論文の著者ならば是れ予にとりて好敵手なりと謂ふべし。且つ一知半解の道學者流附和雷同の小兒輩等是の匿名の論文に附隨して漫にニイチェを排撃するを見ては一世の凡俗の爲に是の偉人の眞相を傳ふるの要を見たり。是に於て予は本年一月の本紙上に於て坪内博士に向つて馬骨人言の匿名論者が果して博士自身なりや否やを問ひ若し博士自ら我也と明言せられなば予は改めて予が見解に本づけるニイチェ論を以て博士に問ふ所あるべきを宣言したり。然ども爾來博士は予に向つて何等の返答をも給らざりき。予は匿名論者に對して論爭を挑むるの張合無きを思ひて其のまゝにして已みたり。是の如くにして予がニイチェ論は今日まで尚ほ未だ世に出づるの機會無かりし也。即ち予は此れまで毫もニイチェを紹介せしことあらざる也。

◎今や傳ふる所に據れば、ニイチェ紹介者を以て有名なる吾人の畏友登張竹風は區々たる新紙上の爭論を手緩しとなし、ニイチェの大著ザラツストラ如是說を譯して世に布き、然る後是の偉人の眞面目を發揮せむとすと謂ふ。是れ極めて可也。坪内氏も亦是の方法を以て相攻爭するの事宜に適せるを稱し、近來絕無の好論題

らざる也。去年一月の本誌に文明批評家としての文學者を論ずる文中、事例としてニイチェを援引したることありしが、素より紹介杯と稱せらるべきものに非ず。

◎客問うて曰く、然らば登張竹風が帝國文學紙上に於て、美的生活論を解するにニイチェの主義を以てせるは、子の認めざる所なる乎。答て曰く、人各々見る所あり。ニイチェに精通する竹風が予の論旨に對して是の如き見解を爲す、素より妨ぐる所に非ず。且夫れニイチェと予と等しく人也、或は其の情に於て同じき所ある、毫も怪むを要せざらむ。人は各々見る所に隨ふべし、予は即ち長へに予たらむのみ。

◎問うて曰く、子はニイチェを嘆美して措かずと謂へり、而も是を紹介せむとせざるは何ぞや。答へて曰く、美的生活論以來誤つてニイチェ唱道者の目を受けてより予は幾度びか其の謬妄を糺してニイチェに對する予の見解を公にせむと欲したり。然れども當時は畏友竹風がニイチェ論の帝國文學に連載せられつゝありし頃なれば、予は故らに是を控へたりき。然るに去年の暮に及び讀賣紙上に馬骨人言と題する匿名の長論文を掲げ、盛にニイチェを攻撃する者あり。人往々坪内博士の筆なりと傳ふ。かゝる俗惡なる論旨が博士の筆端に上るべしとは予の思惟し能はざ

道したること無し、何にぞ今にして其の聲無きを咎めらるゝの理あらむや。客遮り問うて曰く、美的生活論を忘れたりや、此れニイチェを祖述したるものに非ずして何ぞ。答へて曰く是ある哉子も亦是の如き念を爲すか。美的生活論は予が一家言のみ、一毫一銖もニイチェに待つ所無し。恐らくはニイチェを嘆美することに於て予は今の何人にも讓らざるものならむ。唯彼れは彼れたり、予は予たり。試に數言を費して客の惑を解かむか。

◎再昨年の頃、予は丁酉倫理會の席上にて『ロマンチクと人生』と題する講演を試みたることありき。是の講演の主旨は即ち美的生活論の主旨にして、予が年來抱持したる感情なりし也。同會の席にありし予が先輩朋友は皆是の事實を認知したるならむ。而して當時の予は未だニイチェの說に通ぜず、其著書の名稱をすら聞知し及ばざりき。美的生活論がニイチェに待つ所なき、寧ろ炳焉たるに過ぐるに非ずや。

◎予は多くの人よりニイチェの紹介者、もしくは私淑者と目せらる。私淑者と云ふ尙ほ可也、紹介者と云ふは全く當らず。予は未だ曾てニイチェを紹介せしことあ

も眞情を訴ふるものゝ態を見ず。

◎『有繋に他の老婆子が寂しき給仕に義務的吃飯を強ひらるゝの比にもあらず』と云ふが如きに到りては、レトリシアンの稱號さへ覺束なし。吾人は紅葉の前途を否定せじ、唯其の態度を一變するの覺悟あらむことを勸告する者也。

◎萬朝報揭ぐる所の涙香の『巖窟王』終局に近づくに隨ひて筆力ます〳〵加はれり。毫も修飾の痕なくして生氣紙上に溢れ、而かも文に一種の奇搆ありて能く讀者をして二百數十回の長篇に倦まざらしむ。殊に巖窟島伯爵が野西子爵に決鬪を申込まれ、水夫友太郎の服裝を爲して躊躇して之に向ひたる一段の如きは、原文の妙素より與りて力ありと雖も、譯筆亦奔放自在を極む。今の所謂る小說家の空文を弄して、俗目に媚びる者に比して、其の優る幾十等なるを知らず

二

◎客あり吾人を詰つて曰く、予の曩はニイチェを唱道する爾かく喧しくして、今や何ぞ寂然として聲無きや。答へて曰く、奇なる哉問や。吾人未だ曾てニイチェを唱

◎新刊小説に冷淡なりとて吾人を責むる者あり。誤れり。如何ほど今の作家を紹介し、稱揚せむと務むるも、そは吾人の力の及ばざるを如何せむ。吾人の趣味は極めて偏狭也。右手に葡萄の美酒を擧げて左手に混成酒を捨てざるが如き寛裕なる態度は、吾人の摸倣し得べき限りに非ず。

◎然らば則ち今の創作に對して見る所無き乎。曰く大に有り。唯是を口にするの、徒に他を累とならむことを患ふるのみ。小説雑誌の編輯者に非ざる吾人は、如何ほど今の狭心なる作家に怨まるゝも毫も痛痒を感ずるものに非ず。諸君にして若し望まば、吾人の批評は易々たるのみ。

◎『文藝界』載する所の眉山の『無言の聲』蓋し尚ほ近出新作中の錚々たるもの乎。少女お勝の性格は前後矛盾の誣ありと雖も、末段小公子澄男が懺悔の一節はほゞ作者所期の托想を現じ得たるに近し。而かも全篇を通じて情淺く筆到らず、畢竟盆石裏の景趣のみ。唯其の文の清艶にして才氣あると欽ぶべしとせむ。

◎近時讀賣紙上に現はれたる『金色夜叉』の續稿を見よ。是れミア、レトリックのみ。情死し想涸れ、強ひて粉黛によりて皮相を裝ふに過ぎず。宮の書狀の如き毫

極めて少く、日蓮宗の本尊は鬚題目の七字にして祖師像位がたか〳〵なれば是れ亦同斷也。されば鎌倉足利以後に佛教美術の衰へたる、亦是れ怪むに足らず。

◎日蓮上人の文章は鎌倉時代第一の大文字なるべし。種々御振舞鈔の如きは龍の口前後より佐渡流罪、身延閑居の經歷を述べたる一大敘事詩とも見るべし。氣魄あり、光焰あり、たゞ〳〵感服の外無し。三上氏等の日本文學史が上人の文章に就いて一言も無きは何故なりや、心得ず。

◎鎌倉の事を知るには新編相摸風土記さへあれば先づは澤山なるべし。こは天保年中幕府の編纂にして凡て百二十五卷あり、其中四十卷許は鎌倉の事なり。名にし負ふ紅葉山文庫の秘書を使用して奥儒者三十餘人數個年の仕事なれば、引證參據遺憾なし。一々本文出處を挿入せるなど極めて調法也。斯かる書は最早や今の世にては出來難かるべし、貴き書と謂ふべし。水戸の鎌倉志の如きは是に比すれば及ばざること遠し。

（三十四年十二月）

無題錄

雜談

◎佛像に立坐像ありて半身像なきは何故なりやとは予が多年の疑なりしが、頃日法華會義を讀みしに、其の第四卷に優婆塞戒經の文を引いて『不許造半身像』と明せるにて成程と首肯かれたり。又同經に『立佛像前不應坐、坐佛像不不應臥』とある由見えたり。立像の前に坐して讀經するを非禮とすべきにや。

◎本來佛教は美術的の宗教也。造寺造像の事は經典に其の功德を說いて到らざる所無し。法華經の方便品に十一の功德を數へたるを初めとして、一部經としては造像功德經あり、作佛像經あり、如來安像三昧經あり、造像量度經あり。前の三經は藏經中にあり、後の一經は清の乾隆中の譯也。何れも命令的に造像の事を說けるものなれば、是の宗教は世界の如何なる宗教よりも美術的なるものと謂ふを得べし。本邦の美術が佛教渡來と共に忽然として隆興せしも怪むに足らず。

◎佛教諸派の中にてとりわけて美術的なるは眞言宗なるべし。淨土眞宗、日蓮宗などは非美術的なる宗派也。淨土眞宗にては例の一佛一躰の事とて造像の事

る俗學者流に一大頓悟を與へむが爲に、取も直さずニイチェは生まれ出たのである。

◎世にはニイチェの歎美者と云へば直に其の所說の實行者として驚怖するものがあるが、まあ何と云ふ阿呆らしい事であらうぞ。如何にゲーテの崇拜者だとて、エルテルたり、ファウストたり得る者が世にあらうか。如何にバイロンの崇拜者だとて、マンフレッドやサルダナパラスが眞似らるゝものか、如何か。ハイネや日蓮の通りにしては一日も是の國には居られまい。釋迦や基督を眞似たらば直に巢鴨に送らるゝであらう。

◎吾人は吳々も世人に告ぐるのである。吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豐富にし、是によりて自ら慰め、自ら勵みかねて是世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。凡俗者流の生活する世界以上に於て吾人の理想的天地を建設するの希望は是等天才偉人の前蹤によりて少からず確かめられ、且つ勵まさるゝのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を活かし、且固むるのだ。是の間の消息は倫理見や歷史論でニイチェを批評し得たりとするの輩の窺知を許さぬことは言ふまでもないのである。

（三十四年十月）

◎馬骨先生はニイチェの何書を讀まれたのか、『イエーザイッ……』か、『フェルッング……』か、『ザラッストラ』か、是の中一卷でも慥に讀み得たと吾人に誓ふことの出來るか、如何か。英譯でファウストを讀むだとて、何でそれがゲーテ通であらう。それてニイチェがゲーテを讀むだの讀まぬのと詮義立は餘りに押が強くあるまいか。

◎そして又其の批難の方法の淺薄常套なると共に、其の書き振りの輕薄さと來ては何とも申し樣が無い。この人生の一大事の論議に、口上茶番の口吻では、どんな議論でも其の人品が思ひ出されて聞く氣にならぬ。況してや馬骨先生の是の論の如き者に於てをやだ。馬骨先生とは何れ早稻田あたりの末派でてもあらうが、お師匠樣の諷諧の筆もさう〳〵場所柄を辨へずに下手に眞似られては堪つたものでない。

◎自體ニイチェは學者では無い、其の言ふ所を學說などゝ見るが抑々の誤りだ。彼れの述ぶる所は學說以上の理想學說以上の想像、謂はゞ人間靈性の呼吸を以て直に人の肺腑に通ずるにあるのだ。其れを俗學者流が自家の例の歷史論や倫理見に照して彼れ此れ批難し得たつもりで居るのは何たる滑稽であらうぞ。斯か

◎薄田泣菫の『ゆく春』と云ふ詩集を面白く讀だ。其の優しい、哀れな調子はげにゆく春の恨を載せて讀む者の耳に暮れゆく鐘の音とも響いた。たゞ其の風格の單調和平に過ぐるのは餘り好ましからず思はれた。

* * * * *

◎世に天才を解し得ずして之を批評する程不釣合なことは多く無い。今のニイチェの批難者の如きは大抵是の類だ。

◎讀賣の『馬骨人言』と云ふのを書いて居つた匿名先生があつたが、連りにニイチェの攻撃をやつて居る。今迄の人の言ひ古るした事て何人も解し得る事だけは書いて居るが、扨て超人や轉生などの事になると流石に一言も述べて居らぬ。其批評は如何にと見るに、やれ個人主義が如何だの、やれ歴史的發達が如何だの、やれ盲目反動だのと、從來俗學者の陳套を事珍らしげに陳べて居るが、やれ〳〵斯んな手際でニイチェが批評し得らるゝものであらうか。ニイチェ一代に三段の變化などゝ人並の事は言つて居るが、ハヴロック、エルあたりのお里が見え透く樣て誠に心細い議論だ。

れぬ。面白し、唯其の所説の餘りに世間を無視せるの癖あるは惜むべし。開巻天滿宮論の如きは、既に斯く申す小生の如きも一個年前に於て辯明し置きたるところ、前人未發の説の樣に高言せられ候は餘りに人も無げなる振舞に候はずや。

○敎育菓子と申すもの新聞紙上に相見え候。珍らしき菓子に候。この有樣にては敎育煙草、敎育ラムネなども追々出來申すべくや。頑是なき小供のすなる遊戲すらも敎育的にせねばならぬ世の中には、何事も六かしき事に御座候。

（三十四年九月）

漫評

◎兆民居士の『一年有半』を讀んだ人は必ず其の『續一年有半』をも讀んだであらう。眼前の死期、不斷の病苦、而して是の冷然たる哲學的思索に耽つて無神無靈魂を說いて居るところは、眞に性命憂患の外に遊べるものならでは眞似の出來ないことだ。其の學說如何の如きは暫らく說くを要しない。讀者は須らく居士が安立の醍醐味を箇中に觀想すべきである。

の解決は美術家其人よりは、工藝化學の學者に待つ所多からむ。美術家は是の如き學者と提携して、是が指導の任に當らざるべからず。

（卅四年九月）

* * * * * * *

消息

○頃日在獨逸の友よりイルメナウに於けるゲーテ畫像を領し候。あはれこの偉人が最終の平和こそ樂しくも亦尊かりけれ。Über allen Gipfeln ist Ruh!…。嗚呼かゝる境界の吾等の身の上に落ち來らむは是世に於て望み得べきことなるか。感慨の至に御座候。

○伯林大學のグリム敎授は是程逝去せられぬ。同氏は美術史の學者にしてゲーテとミケランデェロとはその得意の題目にて候ひき。小生の座右に氏の論集一卷あり、是の報に接してさながら未見の知己を失へる心地致され候。

○近來讀むべき小說は多く關西に現はれ候樣に御座候。東都の文壇に『己が罪』『無花果』に匹すべき著作ありや。一考すべきことに御座候。

○田岡嶺雲君一人の筆に成れる『江湖評論』と題する文學雜誌、岡山にて發刊せら

啻に繪畫のみに非ざる也。極めて少數の銅像を除いては、七八百年以前の彫塑像の原形を保有するもの果して幾何ぞ。必ずしも其の乾漆たると木彫たるとを問はざる也。

啻に繪畫と彫刻とのみならず、建築に於ても、裝飾に於ても然らざるは無し。請ひ問はむ、一千年以上の古社寺にして現存するもの、果して幾何ぞ。鳳凰堂、中尊寺を見たるものは、其の裝飾の誠に果敢なきものなるを想ひたらむ。藤原時代すら尙ほ是の如し、況や天平をや、況や推古をや。

且夫れ繪畫、彫塑の古製作にして今日比較的に原形を存するものは、古社寺の庫裏に襲藏して大氣日光の接觸を避けたるに依るもの多し。今日以後の美術は是の如き事情を許さるべきに非ず。知らず、將來の美術家は如何にして其の貴重の製作を千萬年の後に傳へむとするぞ。

今日の畫家の作中、十年を待たずして其彩色の變褪せざるもの果して是れありや、吾人實に之を疑ふ也。是の如くして其の作を不朽にせむとす、危からずや。

美術の耐久的性質を如何にすべき。是れ將來美術界の一大問題也。是の問題

人の紀念を永久にすると同時に、國民をして是によりて其の人物を想望せしむるにあり。是れ其の社會風敎の上に少からざる關係を有する所以也。是の楠公像の如きもの、果して是の目的に於て遺憾なきを得べしとするや。作者が其の曠世の技巧を抱いて是の造像の第一義を逸せしは、惜みても尙ほ餘りありと謂ふべし。

然れども楠公像は既に造られたり、而して皇城門外に建てられたり。今に及びて難ずるも事既に遲し。予は唯後の美術家が是の如き恐るべき過失を再びせざらむことを希はざるべからず。近時美術家の間に古代人物の像式を一定するの計畫ありと聞く、其の主旨の那邊にあるかは予は與り知らざる所なれども、區々の卑見尙ほ多少の參考ともならば幸也。

（卅四年九月）

將來美術界の一大問題

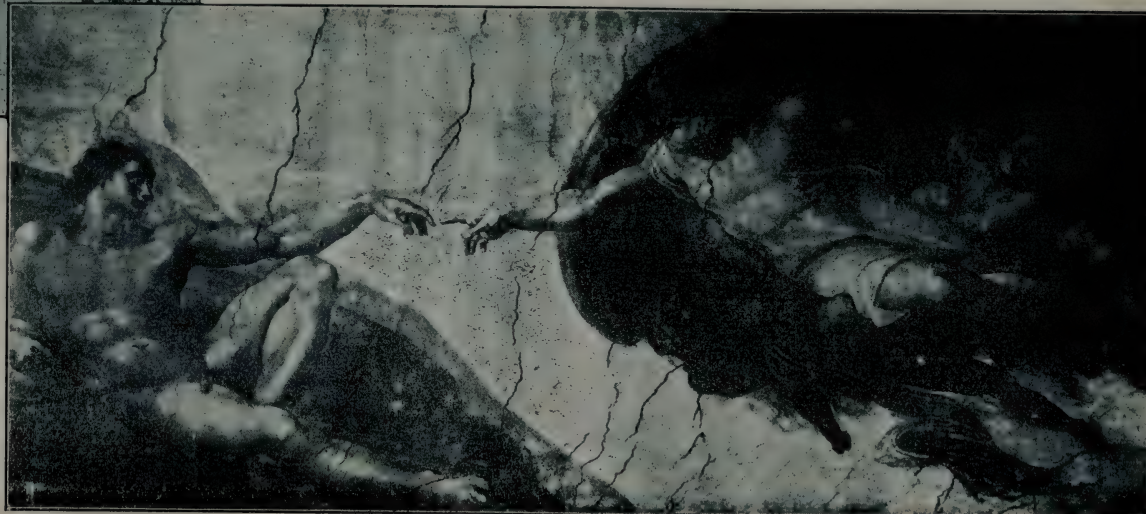
本邦美術にとりて最も悲むべき一事は、耐久的性質の缺乏也。觀よ、五六百年以上の繪畫にして完全に保存せられあるもの果して幾何ぞ。幸に其の形躰に於て闕損無きものも、其賦彩墨色の變褪せざるもの果して是れありや。

六　楠公の銅像

予は是の篇を終るに臨み、近時皇城二重橋外に建てられたる楠公の銅像に就いて一言せむ。當代第一流の彫刻家、鑄金家諸氏が苦心多年の製作たる是の銅像を失敗の作なりと評し去らむは、甚だ禮を缺くに似たり。然れども予は批評家として遂に是の無禮を忍ばざるを得ず。

予が是の像に於て最大の缺點と認むるは、其の骨相が毫も楠公の性格を表現し居らざる所にあり。見よ、其の眼、其の眉、其の口、其の頰、何處にか楠公らしき處ある。其の面相によりて試に其の人を想像せむか、短慮性急なる織田信長の亞流か、然らざれば狂勇氣を負ふ福島正則の一輩か。是を以て忠勇にして智謀あり、溫良にして恭儉なる楠公其人の人物を表現せむとす、無謀も亦甚しからずや。怪む、作者は何の見るところありてかゝる不倫の骨相をば撰びしか。是の像の摸本は京畿某寺藏する所の楠公肖像と稱する古畫なりと云ふこと、果して眞なる乎。作者の覺悟は歷史家のそれにして美術家のそれに非ざりし也。凡そ紀念像の目的は、其の

レオナルドーが基督像
（ブレラ藏、七一四頁参照）



（ヷチカノ宮天井畫、七一五頁参照）

ミケランヂエロがアダム創造の圖

からず（此の點前の清盛骨相の考に詳し、一九二、三頁）。且當時の佛工運慶が作に清盛が骨形の像あり。就いて見るに、眉目秀麗、溫雅の情外に現はる。其の容貌の果して眞を得たるや否やは明ならずと雖も、少くとも清盛が世上流布する如き惡入道の類に非ざりしことは是の像によりても略察し得べけむか。況や大日本史には、其の出處如何を審にせざれども、『姿貌美』と明記せるをや。

以上は俗間に流布せる無意識的理想化の二三の事例也。蓋し一般民衆は專門の史家に非ず、彼等は煩瑣なる史的考證を待て古人の面貌を想像せむには餘りに多忙の人たる也。是に於てか普通の傳說もしくは史蹟に顯はれたる性格より直に其の人物の骨相を表現せむと要す、是れ自然の要求なりと謂ふべし。歷史家は史上の事實に違へるの故を以て其の杜撰を咎むべきに非ず、何となれば彼等の關はる所は事實を超脫せる理想的表現なれば也。理想的表現の期する所は理と事と、精神と肉躰との一致にあり、謂はゞ偶然を攝過せる裸躰の眞理也。是の如き眞理即ち是れ藝術の要求する眞理に非ずや。

平家の公子との好對比たり。然れどもこは明に史上の事實を無視したる所謂る理想的表現也。平家物語によれば『熊谷其日の裝束には、褐の直垂、赤革縅の鎧着て紅の母衣を掛け、權太栗毛といふ聞ゆる名馬にぞ乘りたりける』。是の派手やかなるに較ぶれば、『練緯の直衣に萠木匂の鎧着たる』敦盛の裝束は、平家の公達として寧ろ質なる心地す。歷史家の眼より見れば、俗間流布するところの意匠は虛僞として排斥せらるべきも、一個美術上作品としては、毫も批難すべき點を見ず。吾人は寧ろ心なき畫家の似而非寫實に避易するもの也。

太政入道清盛の骨相の俗間に流布せるものも亦純然たる理想的表現也。たとへば顏は赤く肥え、眉は太く昇り、眼は圓くして銳く、口鬚いかめしく兩頰に橫はり、見るから剛情我慢の惡相を具へたり。清盛一生の性行より考ふれば、其の形相はげに斯くもありたらむかと想はるれども、歷史上の事實は全く是に反せり。清盛は實に世人の想像する如き惡入道に非ずして、眉目秀麗、容貌閑雅なる一貴紳たりしに相違無し。平家盛衰記を案ずるに、清盛自身の骨相に就いては特に明言する所無しと雖も、是の如きは其の父祖子孫の人品によりて、血統上より推察するに難

五　世俗の無意識的理想化

俗人の常識は時に卓拔なる美術家の想像よりも賢こきことあり。所謂る理想的表現は古來藝術の士の甚だ難しとせしところ、而かも世俗が意なくしてなすのづから是れを仕遂げたるの事例甚だ少からざるは、こゝに注意すべき一事項たり。試みに其の二三を擧げむか。

藤原時平は眉目秀麗なる貴公子なりしが、世俗の間に流布せる彼れが像は常に奸獰の相を帶びざるは無く、俳優の是に扮するものゝ如きは青面鬼相、所謂る公卿の惡の好摸本たり。既に菅公を以て溫良忠厚の君子人となせる上は、是の如き君子人を讒陷せる時平を以て如上の人物となす、寧ろ其の切當なるを覺ゆ。

熊谷敦盛の組打は畫家の好で描くところ、而して裝束を見るに熊谷の鎧は黑糸縅にして、敦盛のは緋縅なり。直垂、母衣より其の他の物の具に到るまで、熊谷のは飽まで質朴剛健の趣を有し、敦盛のは華奢優美のすがたを具へたり。是の如きは言ふまでもなく兩者の際遇性格の上より打算し來れる想像にして、源氏の武士と

り。

是の優秀なる健駄邏美術が印度に於ける希臘文明の衰退と共に、遂に三十二相式の壓倒する所となりたるは、實に佛像美術の發達を沮害せる歴史上の一恨事と謂はざるべからず。

吾人の所説少しく岐路に入りたるが如し。然れども吾人はくれ〴〵も本邦美術家の注意を促さゞるべからず。東洋に於ける佛陀の像は猶ほ西洋に於ける基督の像の如し。然らば則ち西洋美術の寶庫を飾る重もなるものが基督の像なるが如く、何故に佛陀の像は東洋美術の寶冠となる能はざる乎。國民が其の生命を托する宗教の教祖に對して適當なる一美術的表現を有せざるは、恥づべく且つ悲しむべきことに非ざる乎。三十二相式の死せる儀軌は大聖佛陀と何の關はるところぞ。美術家は須く佛陀の心を以て佛陀の形を解せざるべからず。抑々是を今日の人に望むべからずとせば忍て後世の人を待たむ。橋本雅邦氏が佛羅漢の畫の如きは腐躰の粉飾のみ。

表現を去ること頗る遠しと謂はざるべからず。本邦古今の美術家中敢て是の拘束を脫し、自家獨立の理想に本きて是の千古の大聖を表現せむと試みたるもの、果して是れありや。彼の所謂る出山の釋迦と稱するものは、普通の像式と頗る趣を異にすと雖も、多くは憔悴垂死の一乞食漢の外に何物をも現示せるものに非ず。其の無限なる慈悲と圓滿なる智慧とは何處にかある。是の如きは啻に佛陀傳中の事實に違へるのみならず、全く其の性格の注意を懈りたるものと謂ふべし。思うて此に到れば、吾人は健駄邏(ガンドハーラー)彫刻の流石に優れたりしを追慕せざるを得ず。

健駄邏彫刻とは印度の西北部なる古の健駄邏地方に殘留せる佛像彫刻の謂にして、美術史家の所謂る印度希臘式を代表するもの也。史を案ずるに、健駄邏の地は印度スキュタイ王國の遺跡にして、往時印度希臘二文明の交涉の地に當れり。是を以て歷山王歿後數百年の間は、其の美術は尙ほ著しく希臘風を帶び、其の佛陀像の如きも、後世三十二相式の死せる形式とは異なり、其の形躰に於ても、其の表情に於ても、共に希臘盛時の彫刻を見るが如し。今日ラホル博物館に藏せらるゝ佛陀の坐像(全集第一卷二部一六五頁)の如きは、一史家は評してアポロ・ムサゲーテスの遺照ありと謂へ

四　佛陀の像式と理想的表現

夫れ佛陀は基督と等しく慈悲の化身也。妻子を捨て王位を抛ち、食を路に乞ふものゝ群に入りて、偏へに眞理を求めしは、衆生の爲に解脫の道を開かむとする大慈悲心に本づけり。げに三世を通じ、人天を覆ひ、大望むべからず、高仰ぐべからざるはこの慈悲心なりき。是の如き佛陀は美術上に於て如何に表現せられけるぞ。吾人は本邦古今の美術に就いて佛陀の像を觀たるもの殆ど無數、而かも遂に一個歎美すべき表現に接せざるは吾人の大いに遺憾とする所也。畢竟和漢古今を通じて佛像の儀軌となれるは、佛典說くところの三十二相に典據とするもの、吾人の名けて三十二相式と稱するもの也。所謂る三十二相を說くところ、多くは尋常一樣の人身の記述のみ。手足細軟と云ひ、足踝跌長と云ひ、皮膚細滑金色と云ひ、四肢肩項圓滿と云ひ、四十齒悉齊直と云ひ、其目紺青と云ひ、睫如牛王と云ふが如きは、まゝ生理と自然とを無視せるの外、三世の大導師佛陀の性格と何の相關するところぞ。是の如き儀軌に憑依して違はざらむを是れ力むるもの、吾人の所謂る理想的

（運慶作、七二二頁參照）

淨海座像

は言ふまでもなく、歴代の文學が其の適當なる記述を供せざる、はた素より怪むに足らず。げにあらゆる人間の想像を超絶し、偏へに無限、圓滿、全知、全能と謂ふが如き消極的觀念によりて屢に思念せらるゝ宇宙の創造主たる大御神をば、人間の形似と色彩とを以て表現せむと擬す、事既に不倫の極みたるを免れず、其の結果の滑稽に終る無きを以て無上の幸とせむ。流石にミケランジェロは是の困難に打勝てり。唯見る、天使に圍繞せられたる一個の老翁、さながら旋風に乘じて虛空を掃ふ。其の崇嚴なる眼の輝やくところ、一手指さし來れば忽然として優麗なる一男子を創造す。空靈超絶の趣致、永く藝苑の至寶たり。其の題目や既に形躰の域を越ゆ、素より完全と稱すべからざらむも、一個畫幀に對ひてなさるべき希望に限りあるべきことを思へば、吾人は轉たミケランジェロが不世出の天才を驚歎せずむばあらざる也。

佛敎美術の中心たる佛陀の像式も亦美術上の理想的表現に關して好箇の敎訓を供ふる一事例たり。吾人は特に是の事に關して本邦美術家の注意を喚起せむと欲す。讀者說述の煩はしきを咎むるなくむば幸也。

於て長き歴史を有せるものなりき。ペルジノ、ギルランダヨ等の作は今も尚ほ殘れりと謂ふ。然れども是等は素よりレオナルドーが天品の才を指導し得べきものに非ざりしは言ふまでも無し。古傳說には基督の容貌を記せるもの無きに非ず。聖書にサマリアの婦人が形容せる言葉に、威貌と婉容とを兼ね有せりと謂ひ、イエス壯年の時、波うてる髮は葡萄の美酒の色にして、長く頸まで垂れたるをば頭の半ばにて分ち、眉秀で色白く、胡桃の色の鬚長きに過ぎずと謂へるもの、一個救世主の威容を躰現せむには尚ほ甚だ足らざるものあるを免れず。レオナルドーは果して是等の傳說に憑據して其の筆を染めたりしや甚だ疑ふべしとなす。單に形躰の上に見るも、彼れが描ける基督が其の鬚を有せざるの點に於て、少くとも古傳說を無視したるものと謂はざるべからず。況や其の眉目の精神的表現に於ては、其の無限の愛と、平和と、德義とを何處より得來りたりとかすべき。

有名なるミケランジェロがアダム創造の圖も亦他の一例として見るべけむ。是の圖に於ける怖るべき困難は、如何にして全知全能の大神を形躰の上に表現すべきかにあり。ミケランジニロが其の先人の製作に於て何等の典據を有せざりし

となり、是れに對する禮拜は國民の宗教的義務として考へられたりき。彼等は是の神像の前に跪拜し、其の祖先より傳はれる大雷神の威靈を眼のあたりに瞻仰し、其の浩大無限なる恩寵と保護に浴被して感謝の涙を濺ぎしなり。フヰデアスは如何にしてかゝる貴き神像を造り得しや。彼れは先人の製作に於て一ツォイス像を有せざりき。ホメルのイリアスには屢に三行の文字ありて是の神の威容を稱へたりしが、そはこの神の髪の波たてる時、オリムピアの山震ひきと謂へるの外、其の眉目に就いて何の言ふところも無かりき。さればツォイス神像の骨相はフヰデアスが獨創の想像に本づきしものにして、國民的崇拜の神靈に向てかゝる完全なる具躰の標的を現じたるは、一に彼れが天才の力に歸すべかりし也。

レオナルドーが最後の晩餐に於ける基督の像は、多くの美術史家が認めて空前絶後の神品とする所也。是の畫、今は腐蝕と後人の塗抹とによりて殘りなく汚瀆せられたりと雖も、今尚ほプレラに殘れる同模型の基督像によりて、其の往日を追懐するに足るべしと謂ふ。想ふにレオナルドーは如何にしてかくは秀靈比びなき基督をば描き得たりける。史家の語る所によれば、最後の晩餐の圖は、フヰレンツェ派に

幾多の除外例なきに非ず、されば外面如菩薩、內心如夜叉てふ諺すらある也。然れども大躰の上より觀れば、是の如きは所謂る原則を說明する底の除外例のみ。畢竟骨相は性格の外に現はれたるもの、性格は骨相の內に藏れたるもの、此によりて彼を想ひ、彼によりて此を察す、誤らざるもの、十中の八九に居らむ。

是の如く、骨相と性格との一致を預想する、素より妨げずと雖も、而かも是の兩者を如何にして一致せしむべきかは、一に美術家の才能に依賴せざるを得ず。是の一段に及びては、美術家は刀筆の技巧以外、一方には性格の研究者たると同時に、他方に於ては表情の技術家たらむことを要す。是の兩面の才能を兼ね備へたるものにして、初めて理想的表現に勝え得べけむ。理想的表現や、決して容易の業に非ざる也。

完全なる理想的表現が天才を待て初めて成立したるの事例は美術の歷史が吾人に語る所也。試みに其の二三を擧げむか。フヰデアスは、何人も知る如く希臘彫刻家の泰斗と稱せらる。而して彼れの一代の傑作がオリムピアに於けるツオイス神像なりしことも亦遍く知られたる事實也。是の神像や、久しく希臘國敎の中心

は其の實在の有無を疑へる史家さへもあるならずや。然れども史的研究の結果は如何にあれ、傳說的人物としての菅公、辨慶は依然として存在すべし。國民は是の如き人物の紀念の爲に、もろ〳〵の美術的方法を以て、其の景慕の情を表彰せむとするの場合もあるべし。是の如き場合に於て能く其の目的に稱へるは、史家先生の考證によりて或は成立すべき歷史的骨相にあらずして、是等の人物の傳說に由來せる所謂る理想的表現なるや、素より論無けむ。

古代人物に對する理想的表現の必要は略々右に說けるが如し。然るに美術家の中には漫に歷史的考證の結果を遵奉するを以て表現の正確を衒ふものあり。是の如きはまさしく藝術の本義を遺却せるもの、吾人は先づ是の輩に向て吾人の所論に聽くところあらむことを望まざるべからず。

三　二三の事例

以上の所說は初めより骨相と性格との一致を預想せり。是の預想を離れて理想的表現の望むべくもあらねは言ふまでも無けむ。世には是の預想に反背せる

すればやゝ憑據するの價値あるべしと雖も、多くは未熟幼稚なる覺束なき線畫にして、其の形似に於ても色彩に於ても、共に逼眞の境を去ること頗る遠きを免れず。例へば夫の京畿の古社寺が藏する所の古代人物の肖像と稱するものゝ如きは、其の十中の八九は廣額大耳的の記錄と多くの差違あるものに非ず。後世美術家の中若し是の如き肖像を摸本として其の人物を表現せむとするものあらば、是れ小兒の口供によりて人を物色するに同じかるべし。是の點より見るも、所謂る理想的表現の已むべからざる理由、亦明ならむ。

二　傳說的人物と理想的表現

而して世に歷史的人物の外に傳說的人物あり。是れ史蹟の眞實を離れ、別に口碑若しくは傳說によりて國民の間に普く信認せらるゝもの、例へば菅公、義經、辨慶、正成等の如し。所謂る理想的表現は是等の人物に對して特に必要なるを見る。若し純正なる史的研究の結果を以てすれば、菅公の如きは一個の多感なる詩人としての外に、何等多大の崇敬を價せざる人物なるやも知るべからず。辨慶の如き

を取らざるを得ず。夫れ既に史學上の見地を離れて古人の形相を現せむと擬す、若し其の形相にして其の人物の性情行爲に多少の説明を與へ得べきものに非ずむば、造像の事初めより無意義に屬すべし。畢竟紀念像なるもの、もと其の人物の性情行爲に對する一種の具象的表現とも見るべきもの、斯くてこそ國民が偉人に對する景慕の情を滿たし、かねては社會敎育の一助ともなり得べけれ。さるを慾ひに特殊なる史的研究の結果に本きて强ひて寫實を衒はむは啻に美術上の目的に稱はざるのみならず、又古人の遺德を表彰し、永く其の感化を後世に光被するの道に非ざらむ。

且夫れ傳説もしくは肖像によりて古人の形相を想像せむは極めて危險の事なるをも記憶せざるべからず。おしなべて寫實は古人の長ぜざるところ、文學に於ても美術に於ても然らざるは無し。人物の形容の如き、多くは漠然たる抽象の文字を連ぬるのみ。まゝ其の特相を記するもの無きに非ずと雖も、或は額廣しと謂ひ、或は耳大いなりと謂ふの類に過ぎず、依て以て骨相を具象にせむは思ひも寄らざるなり。肖像と稱する者の、同時代の人に成れるもの、まゝ是れあり。文字に比

是を翻して、其の骨相によりて其性格を表現すとなすも不可無し。而して美術上古代の人物に對して是の如き理想的表現を須要とするは、蓋し二箇の理由に本づく。歴史的人物が美術上の對象となるは、所謂る紀念像の場合を多しとするを以て、其の骨相は依て以て其の人物を想望せしむるに足るものならざるべからず、是れ理由の一也。歴史上に傳はれる說話若しくは肖像は、後世美術家にとりて多少の參考とは爲り得べきも、是に信賴して其の人物の具象的表現を試みむには、餘りに粗笨にして又餘りに不確實なるに過ぐ、是れ理由の二也。

如上の二箇の理由は、其の意義極めて簡明なれば、特に細說の要無かるべし。蓋し純然たる史學上の見地よりすれば、古代人物の骨相をも煩瑣なる史的研究によりて寫實的に考覈するを必要とする場合あるべく、隨うて所謂る理想的表現に反對せざるを得ざるとあるべし。然れども是の如きは、謂はゞ專門學者の特殊なる要求のみ、一般民衆の共に關知し得むには亦餘りに特殊なる知識也。美術は其の本來の性質上、爾かく特殊なるべきものにあらず。素と是れ一般民衆に對して平等の滿足を預約するものなるを以て、是の場合に於ても亦おのづから別樣の態度

美術に於ける人物の理想的表現

是の如きは一般讀者にとりて或は興味少き問題ならむを恐ると雖も、美術上より見れば極めて重要なる一事項に屬す。而して予が今日特に是の問題を呈出せるは、近時本邦美術家の間に古代人物の像式を一定せむとするの計畫あるを聞き、茲に聊か卑見を陳して諸君の參考に資せむが爲也。予は立論の順序として、先づ美術上古人に對する理想的表現の必要なる所以を一言し、次に骨相と性格との關係を指摘して、兩者一致の表現が美術家の才器に依るを說き、次に東西美術の史上に就いて二三の歷史的事例を列擧し、更に世俗の無意識的理想化の間に美術家の技倆を凌駕するものあるを述べ、終りに近時二重橋外に建てられたる楠公像の短評を以て是の篇を終るべし。

一　美術上理想的表現の必要

茲に所謂る理想的表現とは、人物の性格によりて其の骨相を形成するの義也。

嗚呼、世事萬端、亂れて麻の如し、人は茫々として爲す所を知らざらむとす。吾等須らく人生の大本に就いて沈思する所あるべき也。

（三十四年七月）

ゝの外果して本邦美術の盛衰に就いて懸念せらるゝ所ありや。宮內省の當局者が年々の美術展覽會に於てせらるゝ所謂御買上品は、其の金額甚だ大なるものに非ず。而して其れすら主として一派の團躰に限られ、今の美術界の全躰に亘りて一視同仁の措置に出でざるを恨とすべけむ。凡て大いなる保護なきところには大いなる作品あり難し。今の美術界の製作が爾かく淺薄小規模殆ど兒戲に類するもの多きは、美術家其人の覺悟の足らざるにも因るべしと雖も、畢竟其の勞に報ふるの保護無ければ也。

あゝ藝術はこの世に於ける理想の世界也。無窮を趁ふの心あるもの、現實の生に慊らざるもの、哲學の外に眞理を求むるもの、宗教の外に安心を希ふもの、麵包の外に糧を要するもの、彼等は玆に暫く其の向上の渴仰を醫するを得る也。今の世に於て藝術を說くは痴人の事と稱せらる。藝術は法律の如く國を治むる能はず、軍隊の如く敵と鬪ふ能はず、而かも尙ほ能く人を幸ならしむ。人は謂ふ藝術は遊戲のみと。誠に然りされど是の憂患に充てる人生に於て尙ほ遊戲の地を存するは、セメてもの慰籍に非ざるべき乎。

斯かる事例は和漢の史上に於ても甚だ多く見る所也。例へば吳道玄、韓幹、曹覇以下の盛唐の名手は多く明皇朝下の食賓なりき。徽宗皇帝が翡翠閣を開きて古今の珍寶を列ね、天下の才藝を招致せしことが、宋代の美術に如何の影響を與へたりしやは言ふまでも無きとならむ。我邦に於て畫官を置き、繪所を設けしは、必ずしも廣く人才を發揮するの道に非ざりしならむも、尙ほ藝術の價値を解せざる時代にありて一縷の命脈を維持し、以て從來の氣運を待ちたるの功は素より沒すべくもあらず。若し夫れかの東山將軍が當代の美術家を招致して君臺觀の珍奇を品彙し鑑賞したるの類は更にも言はず、歷代の大家が權貴の保護を待ちて其の曠足を伸ばし得たるの事例太だ尠からざるは、必ずしも吾等の絮說を要せざらむ。

顧みて今の我邦を見れば、識見ある保護者の缺乏は我が美術界の爲に甚だ悲しむべき事ならずや。帝室に於て技藝員を置かせられたるは、美術家にとりて是の上もなき名譽なるべしと雖も、吾等の所謂美術保護の目的を達するの道を離るゝ頗る遠きが如し。多くの美術上の團躰が其總裁或は會長として戴けるやむごとなき貴顯の方々は、其の名目上の義務として、一年一回の總會に祝詞を朗讀せらる

大家と雖とも多くは時の權家、法王の寛大なる給養によりて其の業に從ひし事も、亦史を讀めるもの丶熟知する所也。近代にありてはミュンヘンは獨乙に於ける美術の都府と稱せらる。其の彫刻館（グリプトテーク）と繪畫館（ピナコテーク）の蒐集するところの作品、巴里、羅馬に次て歐洲に冠絶するものあれば也。而して美術的都府としてのミュンヘンの基礎を造りたるものは國王ルードヰヒ一世に外ならざりき。彫刻館の如きは王が尚ほ太子たりし間にありて計畫せるところに係る。名高き建築家、レオ・フォン・クレンツは是の二館の造營の爲に國賓として待遇せられ、當代第一の畫家ペテル・コルネリウスはチュメルマン以下の門下を率ゐてこの二館の裝飾に當りたりき。繪畫館の第一の基礎は王自らの手によりて築かれ、式はペイヱルンの國祭と齊しき盛大なる儀禮を以て祝はれたりき。かくて王家累代の蓄積は擧げて是の中に展列せられ、更に國帑を開きて盛に古今の名品を蒐集せり。例へば今日の彫刻館收むる所のニオベ群の一躰たるイリオノイスの如きも、當時の買收に係かり、其の時價實に一萬五千兩なりきと謂ふ。ミュンヘン藝苑は實に是の如き王家の保護ありて始めて榮え得たりし也。

て、是を求むるものは迷へる乎。　希くは藝術の價値を解する人、しばらく吾等の言に聽かむ乎。

人は謂ふ、古の美術は貴族の有なり、今の美術は平民の手に移れりと。吾等は決してこの事實を無視するものに非ず、されど平民の手に移れるは實に美術の一小部分のみ。其の大部分が社會の上層に遺れること古も今も依然として異なるところ無き也。是れ美術本來の性質のおのづから然らしむるところ、想ふに複製の方便にして文學に於けるが如く完全なり得ざる限りは、永遠に然らざるを得ざるべき也。是を以て美術の發達は概ね貴族富豪の保護に待つところあり。是れ多くの場合に於て歴史上の事實也なりとす。

例へば伊太利の美術を言ふものは、先づフヰレンツェ派を說く。而してチマブウ、デオットー以下の名流は何れもメヂチ家の保護の下に生長したりし也。コシモ一世が壯大なる美術館を建てゝ當代の才能を招致せしが如きは殆んど南歐美術史の運命を決するの力ありしと謂ふべし。ミケランヂェロの如きすら、大君と稱せられたるローレンツォの保護の下に初めて其の驥足を伸ばし得たりし也。ラファエル以下の

じ、保護必ずしも須要ならざる也。唯夫れ美術は少しく是と趣を異にす。

畫家が一枚の畫幅を作るの勞は、多く文人が一篇の書冊を著はすの勞に讓るものに非ず。數年の長きに亘りて成されたる名畫の例は、東西の史上に珍らしからざる也。されど繪畫は文學の如く容易に複製し得べきものに非ず、一幅の名畫は長へに一幅たり、所詮再びしがたき自然の妙工たり。是を以て是の一幅は畫家が數月若しくは數年の勞に報ふるの價格を有し來らざるを得ず、其の百千萬金を値する、洵に已むを得ざる也。さりながら、斯る高價を拋ちて尙ほ藝術の鑑賞を擅にせむとするは、何れの世に於ても極めて稀有の例に屬す。藝術の鑑賞その物は凡ての人の欣び求むる所なるも、彼等は先づ自ら餓えざらむことを要する也。良しや彼等の前に天才の美術家あり、吾れ喜で爾等の希望を滿さむと言ふとも、彼等にしく餓えざらむと要せむか、餓ゆるものは美術家彼れ自らならざるべからず。是の如くにして秀でたる藝術は長へに世に現はれ得ざる也、憐れなる民衆は長へに藝術の靈光に浴する能はざる也。嗚呼金錢を蓄へ聲色に飽き、知識を得ば吾等の人生は以て足れりとすべきなる乎。そも〳〵藝術の樂受は空しき影の如くにし

博覽會の當局者は何が故に一も是等の名流を招致することに力めざりしや。夫れ是を力めず、上は國家の寄托に背き、下は國民の屬望を空うして、徒に物議を招く、抑〻何の見る所ありて斯かる無謀の擧に出でたる乎、吾人の解する能はざる所也。

（三十二年九月）

美術の保護者

藝術の士にとりて最も哀むべきは、其の製作が金錢によりて支配せらるゝの事實なるべし。藝術と金錢と、あゝ是れ何等の對比ぞや。されど理想の世は遠くして、餓えたる人の弱きを如何にせむ。吾等の藝術は永くこの悲しむべき事實の中に存在するを免れざるべし。

文士保護すべしとは曾て人の說けるところなりき。されど文學の事は社會多數の人の關り知るところ、且つや印刷事業の開けたる世とて、複製の事甚だ容易なれば、人は些細の金錢もて大家名流の著作をも購讀し得べき也。若し著者にして世尙を籠蓋するの伎倆だにあらば、文を賣りて其の勞に報ひむこと強ちに難から

意を強うするものありと雖も、而かも國民の屬望せる名流識者を擧げて是を逸し去りたるの一事は、吾人が林事務官長の措置として甚だ遺憾に思ふ所也。公明なる當局者が、國家の公職を私して私情の爲にすと云ふが如きは、齊東野人の語、吾人の萬々信ずる能はざる所なりと雖も、吾人は鑑査官ふて職名に對して今回の任命を大失體なりと明言して毫も憚らざる者也。

外山博士は藝術の鑑賞家として一種の卓拔なる眼識を有する人也。井上博士は學殖豊富にして廣く東西の美術に親炙す、批評家として其意見を參酌すべき人也。岡倉覺三氏はまた日本美術の歷史に精通し、鑑識の明夙に江湖に顯はる。末松博士の如きも一面文藝の士にして美術上の好尙亦見るべきものありと云ふ。坪内博士は文壇の重寄、批評の大家、美術に對して一隻の活眼必ずや群を拔くものあらむ。三宅雄次郎氏、德富猪一郎氏は、新聞記者として觀察の奇警、着眼の穩健、共に當代の異材たり、鑑査會たるもの致して其說を聞くべき也。其他九鬼隆一氏、金子堅太郎氏、松井直吉氏、高嶺秀夫氏、幸田成行氏、尾崎德太郎氏、和田垣謙三氏、小原重哉氏等、は吾人の知る所によれば何れも皆當代の鑑識家として指を屈すべき人也。

序なれば臨時博覽會鑑査官の撰任に就いて一言すべし。今回鑑査官の半數を批評家中より任命したる用意は、吾人の異議なき所なりと雖も、其の所謂批評家の人撰に就いては、言の加ふべきもの甚だ尠からざるが如し。吾人は事務官長たる林氏が是點に關して如何の辯解を有するかを審にせずと雖も、藝術評價の方法としては、甚だしき失躰たることを明言すべし。吾人は決して鑑査官に任命せられたる批評家諸氏が藝術上の學殖鑑識に就いて言ふべき要を見ず。寧ろ自信ある諸氏が安じて任命を受領したるの一事は、世人をして鑑査官として諸氏の適否を危疑するの念慮を杜絶するの力あるべきを希ふもの也。唯吾人の遺憾とする所は、林氏が更に文藝社會の上層に着眼して、第一流の批評家を網羅するの擧に出でざりし一事に存す。言ふまでも無く、博覽會の事業は國家の事業也、殊に美術作品は、博覽會出品中最も重きを爲す所なるを想はゞ、其鑑査會の組織に關しては素より當に最も愼重なる用意を盡さゞるべからず。今回任命せられたる鑑査官諸氏は國民及び藝術家が安じて重寄を托すべき品位と信用とを有せりと謂ふを得べき乎。鑑査官諸氏が其の職責を自覺して甘じて其責に當りたるは、眞に吾人の

非ず。天才と雖も修養を要すべし、是の目的の爲に坦懷以て批評家の言に傾聽するは、最も必要なる事也。唯是の如き修養は、自家の理想に對しての修養なるべきを言ふのみ。若し藝術家は天成なりてふ諺にして眞ならば、彼に於て天成なるものは其理想ならざるべからず。批評家の云爲に左右せられて其理想を抛却するが如きものは、是れ初めより藝術家たるの天資無き者也。

是を要するに、批評家の言を容るゝの襟度は、藝術家の當に有すべき所なり、然れども是を撰擇し、同化するものは飽迄彼の理想ならざるべからず。彼をして其の個人的理想を沒却するまでに虛心ならしむるは、是れ彼れに自殺を勸むる也。藝術家は自己理想に對して無上の崇敬心を有せざるべからず、一世の批評家が彼の理想を非認する場合にも、毫も其の所信を枉屈せざる底の大執着心を有せざるべからず。區々たる鑑査の結果に喜憂するが如き事は、天才あり自信ある藝術家にとりて萬々是れ有るべからざる也。

四　臨時博覽會鑑査官の撰任

なる判斷を下すに拘らず、審美上凡て誤謬の如く感ぜらるゝなれ。是の如き個人的理想は、殊に藝術家に於て最も確乎たる根蒂を有す。而して是の理想や、實に藝術家の生命也、依て以て藝術家たる所の主腦也。

凡そ世に藝術家ほど偏僻狹量なるもの無しと稱せらる、吾人を以て見れば是れ毫も怪むに足らざるべし。畢竟彼等は藝術家なる丈けに、其の個人的理想に執着することも亦通常人より強き也。執着心の強きは、即ち所謂藝術的動機Art-impulseの強き也而して皆是れ自家の理想を以て審美の極致となし、是に異なる一切を擧げて誤謬の如く感ずるの致す所也。是の如き理想は、批評家の側より見れば、或は偏狹なるものあらむ、而かも藝術の世界は是の如き理想の發揮によりて常に清新の光明を受く、是點より見れば藝術界の天才は一種の預言者也。世界中の何人も知る能はざる自家の個人的理想を發揮して藝術評價の新標準を齎らすことは彼れに於て往々見る所の事實也。藝術家にして自家の理想に執着すること無くむば、是れ己に其の生命を失へるに等し。

然れども吾人の言を誤解すれ勿れ、吾人は藝術家に修養の用なしと說くものに

の意見を參酌するは最も必要なる事なり。然れども是際藝術家が批評家の鑑査に對して飽迄獨立の態度を維持するは、藝術家たるの威嚴と天職とを保たむが爲に絕對的に必要なるを見る。是の一事は吾人が特に標榜して藝術家の注意を促さむと欲する所也。

吾人の所謂獨立の態度を保つべしと云ふは、批評家の意見を一も二もなく擯斥し去れよと云ふに非ず。批評家の說にして眞に取るべきを認めば、即ち取るべし、唯爲に自家の個人的理想を拋擲すること無く、終始其の信ずる所を奉じて敢て違はざれとの意に外ならざる也。蓋し如何なる人にありても、審美上一個の個人的理想を有せざるもの無かるべし、是の理想や既に個人的也、素より不變不易なるプラトー的超絕理想の如きものに非ずと雖も、而かも各人が審美上の絕對命令を仰ぐ所の本源也。所謂個人的嗜好とは是の理想を代表して審美上の判斷を司るものに外ならず。されば個人的嗜好の遂に改易すべからざるが如く、是の個人的理想も亦其の根蒂に於て變革を許さず。如何に卓拔なる批評家の聲も是の理想を如何ともする能はざる也。さればこそ自己の理想に適合せざる一切のものは、如何

る製作を翫味し、秤量し、判斷せる經驗あらむことを要す。第四、鋭敏なる感情と共に鋭利なる眼識を有し、而して是の感情と眼識と共に偏見を離れ、經驗に錬られ、比較に磨かれむことを要す。凡そ是の四個條の資格を具足せるものにして、初めて藝術批評家として庶幾くは永續の評價を詮定するを得む。

然れども是の如きは百歳にして一人を庶幾すべき理想的批評家のみ、實際に於て望み難しと見做さざるべからず。然らば則ち某の時代、某の國民に於ける藝術の鑑査は、是を如何せば可ならむ乎。吾人の見る所を以てすれば、是の場合に於て完全なる評價は得て望むべからず、唯最も完全に近き方法として、當代第一流の批評家の所説を綜合して、適當の參酌を加ふるの外無かるべし。是の點より見れば今回博覽會鑑査官の中に多數の批評家を加へたるの一事は最も其の措置の適當を稱すべき也

三　藝術批評家に對する藝術家の態度

以上述べたる如く、藝術に對し比較的永遠の評價を詮定する方法として、批評家

が永續の評價を有すとは、比較的に多數人民の嗜好を滿足し、而して是の滿足が比較的に長年月の間持續するの謂也。是の永續てふことが、藝術評價の客觀的標準として最も完全に近きものなることは、何人も是認する所なるべし

然れども是の如き永遠の評價を詮定し得べき批評家は、是を何處に求むべき乎。如何なる性質を以て是の如き批評家に必要なる資格とすべき乎、思ふて茲に至れば、適當なる批評家の求め難きは、猶ほ天才ある藝術家の求め難きが、如き也。藝術の鑑識は、鈍機翁物語に於けるサン、チョーバンナの友人等が酒味を鑑定せる如く爾かく容易なるものに非ず。一時代の習氣を離れ、一個人の奇癖を沒するの一事、既に普通人にとりて最大難事たり。更に百代の鉄案を下し、後昆をして其の鑑識に遺憾なからしむるしむるが如きは殆ど有限の人性に對して望み得べらかざる要求に屬す。故に卓拔なる批評家は、其數に於て自づから寥々たらざるを得ず、隨て各時代各國民の判斷を參照するの要あるなり。今吾人をして藝術批評家の格資を列擧せしめむ乎。彼は第一、時代及び個人の習癖を擺脫せざるべからず。第二、藝術に關する學理に精通せむことを要す。第三各時代各國民の歎美せる主要な

るの謂に外ならず、數學、論理學、又は自然科學の原理の如く、是を萬人に強ゐて謬らざるものと同一視すべからざる也。個人的嗜好は如何なる場合に於ても各人にとりて隨時美の標準たるべき也。ホーメル、ダンテ、沙翁が千萬人の均しく稱讃する所なるの故を以て直に他人に向つて同一の稱讃を要むるを得ず。彼れにして千萬人に反對して是等の詩人を誹謗するとするも、何人も彼れの嗜好を誤謬なりとするの權利を有せざる也。先に所謂永續は若干民人と歲時の上に作用せる結果の概括にして、一定時に於ける美的意識の現躰と毫も爲す所なし。蓋し嗜好の關する所は快と不快とのみ、快不快の感情を超越して別に美の客觀的標準を求むるは、是れ主として知性の問題也、知性の問題なるが故に翫賞者の本領にあらずして、批評家の職分也。藝術批評家の必要是に於て生ず。

二　美術批評家及び其資格

是の如く、吾人が藝術の評價を各個人の嗜好に委ぬるを以て足れりとせず、更に批評家の鑑識を要むるは、畢竟永續の評價を詮定せむとを望めば也。一個の藝術

して他面に於ては、個人性を離れて平等普遍なる美の標準あるべきを要求す。是れ論理上の矛盾なり。若し是の論理上の矛盾を調和するものあらば、即ちそは最も美の標準たるに庶幾ふ者ならむ。吾人を以て見れば、是の如きものは即ち永續てふ概念に外ならざるべし。所謂永續とは、評價の不變なるを謂ふ也、快感の永續するを謂ふ也。一個の作品に接する時、初めは太だ是に感動するも、再次、三次、漸やく感續對觀の度數を重ぬるに從ひて興味索然たるものゝ如きは、是れ評價變ずる也、快かざる也、未だ以て高級の美と稱するを得じ。美の優劣と云ひ、高下と云ふも所詮は永續の程度を謂へるに外ならざる也。一時の名聲如何に喧しきも、幾何もならずして顧みられざるものは、藝術中の劣等なるもの也。ホーメルの詩篇が千古の傑作と稱せらるゝは、其が嘗てアゼンス人スパルタ人を喜ばせし如く、今も尚ほ倫敦、巴里の人を樂ましむれば也。單に一時の評價を以てすれば、ダンテも沙翁も多く稱するに足らざるべし。是の如く見來れば永續を以て美の標準とするは大過無きに似たり。

然れども永續を以て美の客觀的標準とするは、人類の比較的多數に滿足を與ふ

は又人類の觀美意識其物の中に必然なる根據を有するものと見做すべき乎是れ問題也。既に嗜好と云ふ、即ち其量に於て個人的たり、其質に於て感情的たり。既に感情的なり、故に關する所は快と不快とならざるべからず。而して快と不快は人心の最も不定なる現象也、倏然として去來し、忽爾として昇沈す、素より一定の規矩を以て測度すべきに非ず。然らば則ち美の標準なるもの、亦素より恒久なるを得ざるべき也。然るに古より美術の批評家、又は美學者は、一方に於て嗜好の個人性を認めながら、他方に於ては如何にしても平等普遍の美的標準を求めんとせるは何故ぞ。是の傾向は、絶對又は理想の所現を以て美を說明せむとしたる獨逸派の哲學者に於てのみならず、英國經驗派の多數に於ても亦均しく認むる所也。是の如きは單に人性の不合理なる渴仰として看過すべき事なる乎、或は又觀美意識其物の本來の性質として見るべきものなる乎。

吾人の見る所を以てすれば、本來主觀的なる美に對して客觀的の標準を立せむとするは、決して迷妄に非ず、人類の美的意識の正當なる要求と觀るを妥當とす。人類の美的意識は、一面に於て隨時の嗜好以外に美の標準無かるべきを要求し、而

は、如何なる場合に於ても眞理たるを失はず。然れども美は是を評價する者を待て初めて美なることを得。雲慶の彫刻も、雪舟の山水も、是を解せざるものにとりては無價値なり、隨て非美なり、彼れにして其の價値を認めざる以上は、何人も彼に向て其の美を強ゆべき權利無し。畢竟、美の評價は翫賞によりて生じ、而して翫賞は嗜好に緣りて成る、故に美の標準は個人的嗜好に外ならざる也。

是れ寧ろ自明の理、何人も經驗上の事實として承認せざるべからざる所也。唯獨逸流の哲學者が、純理哲學の世界觀を基礎として一切を打算せむとするや、個人的嗜好を超越して別に美の客躰を立せむと擬すと雖も、觀美意識の說明としては未だ適切なりと謂ふを得ず。純理哲學の偏癖に陷らざる多くの學者は、其所說に於て必ずもし一致せざるに拘らず、嗜好の批判を以て其學說の根據と爲すは則ち一軌に出づ。是れ寧ろ當然の事理なりとす。

怪むべきは、多くの人が審美上の批判に關して、是の當然の事理を看過すること也。學者も亦常に個人的嗜好以外に美の客觀標準を立せむとるの傾向あるは、爭ふべからざる事實也。是の如き事實は單に誤謬として閑却すべきものなる乎、或

題に就き、左の順序によりて聊か卑見を陳述せむと欲す。

一　個人的嗜好。
二　藝術批評家及び其資格。
三　藝術批評家に對する藝術家の態度。
四　臨時博覽會鑑査官の選任。

一　個人的嗜好

藝術評價の標準は即ち美の標準也、美の標準如何とは即ち是れ古來美學の根蔕に横はれる一大疑問にして、今に及びて尚ほ未了の題案に屬す。然れども美其物に關する哲學上の解釋は如何にあれ、動かすべからざる事實は、美は翫賞を待つて初めて美たるの一事也。凡そ美は評價の對境たるを以て、其の本性となす、而して評價なるものは是を評價するの主躰ありて初めて生ず、故に美は最も嚴密なる意味に於て主觀的のものなり。夫の例へば數理の如きものは、人是を認むるも、又是を認めざるも、其の眞たるに於て累はさるゝ所無し。二の二倍は四なりとの眞理

藝術の鑑査を論ず

去月下旬、臨時博覽會鑑査官の任命ありてより、世人は美術の鑑査てふことに就いて稍注意し來りたるが如し。乃ち茲に是の題目に關して吾人の意見を述ぶる、必ずしも無用の業に非ざらむ乎。

所謂藝術の鑑査とは、藝術の價値を詮定するの謂也、而して價値とは比較上の概念にして、比較は標準の存在を預斷す。是に於てか藝術評價の標準如何てふ陳套の疑問起らざるを得ず。然れども此の如き標準は、到底嗜好の外に存するを得ざるべし、何となれば藝術の價は翫賞を待つて初めて生じ、翫賞は嗜好によりて起るものなれば也、而して嗜好は主觀の上に存す、即ち是れ個人的也。個人的なる嗜好は如何にして藝術の客觀的評價の標準たり得べき乎。若し嗜好にして爭論を許さゞるものならむには、所謂藝術鑑査の意義那邊に存する乎。若干人士をして藝術鑑査の事に當らしむるは、藝術の評價と如何なる關係を有する乎。而して藝術家其人は是際如何なる態度を取りて鑑査の結果に對すべき乎。吾人は以上の問

六　吾人の希望

終りに、吾人は我聰明なる當局者に對して一言する所あらむと欲す。古社寺及び古美術の保存は、國家の最も須要なる一事業也、然れども若し善良なる主義方針に據りて爲さるるに非ざれば、或は啻に有終の美を濟さゞるのみならず、時に却て千年の悔を貽さむことを恐る。古社寺保存と云ふが如き事業の爲に年々鉅額の經費を支出しつゝある我國家は、今日如何に財政に困弊しつゝあるかを思はゞ、當事者の責任亦一層の重きを加へざるべからず。顧ふに大佛殿の如きは一例ならむのみ。古社寺保存の大方針に就いて、我當局者が如何の定見を有するや、吾人はそを聞かむことを望む也。專門技巧の士各其道に於て精しき所あるべし、而かも大體の方針に就いては別に有識者の詮定に待たずむば、或は不測の失敗を招かむことを憂ふ。吾人は我當局者が是點に於て三思せむことを冀ふもの也。

（三十二年九月）

し得ざる時代は、既に〳〵過ぎ去り、今は則ち古社寺保存の時代也、而して所謂古社寺とは建築物の謂に外ならざる也。其の本尊諸佛像も亦美術として取扱はるゝ外、何物としても取扱はれざるに非ずや。一言すれば吾人は妻木氏の第二の理由を否定するものに非ず、然れども是れ殿堂保存の理由にして、非露佛説の理由に非ず、而して殿堂保存は吾人の最も希望する所たる也。

是に於て吾人は妻木氏に希望す、今回の大佛殿修繕を機會として、大佛と殿堂とを分離することにせば如何。聞くが如くむば、修繕の設計は、藥師寺、唐招提寺に於けるが如く全部を取崩して更に現形に組立つる者なりと謂ふ、果して然らば爲に適當の地を撰擇して、殿堂もしくは大佛を移轉し、兩者別々に存在することにせば如何。是の如くにして大佛の露佛と、殿堂の保存と、兩立せしむること亦可ならずや。殿堂の美は大佛に待つ所無し、大佛は却て殿堂あるが爲に瞻視の便宜を失ひ震火の禍災を被る、強ゐて兩者を結合するは、無意義の極と謂ふべし。妻木氏及び大佛非露佛論者以て如何となすや。

み。美術の標範を垂れ、歷史の徵證を存すると、先聖の遺志を繼紹するとは、全く別種の事業に屬す。且夫れ是等建立者の素願も大佛保護に外ならず、而かも殿堂が是の素願に反して、却て大佛破壞者たるの事實は、史乘に昭々たり。然らば則ち、妻木氏にして眞に建立者の素願を奉體せむと欲せば、一日も早く殿堂を撤去して露佛とすべきに非ずや。要するに氏が第一の理由は、啻に見當違ひの論なるのみならず、自家撞着の誣を免れず。

若し夫れ第二の理由は、殿堂保存說のみ、非露佛說には非る也。大佛殿が木造建築として世界有數の大造營なる事、學術の開けざる德川時代の建築物として其の巧妙なる構造の世界に誇揚すべき事、是等の事は暫く專門學者の說として吾人是を了すべし。而かも是の如き事實を認めたる必然の結果として吾人は何故に大佛非露佛說をも承認せざるべからざる乎。是の如き建築は眞に保存すべき價値あらむ、而かも殿堂の保存を須要とするが爲に、何故に同時に露佛說を否定せざるべからざる乎。殿堂にして保存すべくむば則ち保存すべし、大佛にして露佛たる可くむば則ち露佛たるべし、是間何の支障かある。殿堂が大佛を待たざれば存在

の薄弱なるに驚かざるを得ず。抑〻當局者たる內務技師が、是の如き薄弱なる理由によりて、非露佛說を公言するは、寧ろ吾人の意外とする所也。

五　妻木氏の非露佛說の批評

妻木氏が擧げたる二個條の理由は、毫も吾人の露佛說を否定せる者に非ず。吾人の主張する所は、大佛は美術上の製作及び歷史上の遺物として、又大佛其物の保存の上よりして、當然露佛たるべしと謂ふにあり。然るに妻木氏の主張する所は、聖武帝以下、殿堂建立者の本願に對し、現存殿堂の巧妙なる造構に對して、露佛たるべからずと謂ふにあり。吾人と氏と其說に於て全く把柄を異にす。畢竟氏の說は、吾人の露佛說を否定するに於て毫釐の効力無き者也。是に反して吾人は却て妻木氏の二個條の理由を否定せむと欲す。

妻木氏が擧げたる第一の理由は、全く國家が古社寺及び古美術の保存を國家事業と爲したる精神を無視せるもの也。氏は殿堂建立者たる聖武天皇、源賴朝、公慶法師の素願に對しても、露佛とすべからずと謂ふと雖も、是れ見當違ひの論なるの

四 妻木氏の非露佛説

以上は吾人が大佛露佛説の要領也。內務技師にして大佛修繕の設計者たる妻木頼黄氏は、非露佛説を以て吾人の説に反對せられたり。但し氏の説は訪問者に對する一場の談話にして、素と正式の論文に非ざるが故に、詳細を知るに由なしと雖も、尙ほ其要領を解するに餘りあり。左に是を紹介し、是に對する吾人の卑見を開陳せむ。

吾人の見る所を以てすれば、妻木氏の非露佛説は左の二個の理由に外ならざるが如し。

一 聖武天皇御本願の建立、頼朝の再造、並に公慶法師の苦心に對しても、大佛は露佛となすべきものに非ず。

二 現在の大殿は、學術未開時代の木造建築としては、造構の妙巧、世界に誇るに足る、是れ保存せざるべからず。

以上二個條の理由は、極めて明瞭也。然れども非露佛説の理由としては、吾人は其

もなく造續せられしが、爾來殿堂興らざること百三十餘年、貞享年間に到り公慶法師なるものあり、將軍綱吉を大檀越として再興を企て、寛永年間に落成せしもの、即ち今日見る所の奈良大佛殿也。

是の如く、大佛殿は曾に大佛を保護したる形跡無きのみならず、常に其の破壞者たるの觀ありき。若し東大寺藏する所の大佛木型と稱するものにして、眞に建立當初の形式を傳へ得たりとせば、金銅盧舍那佛は、其の五丈三尺の大いさを外にするも、眞に本邦藝術史の一大偉觀たり。若し是をして今日に存せしめば、技工の妙、亦恐らくは藥師寺の釋迦三尊をして其盛名を擅にせしめざりしならむ。是の如き微妙なる佛體の破壞者は、常に其の保護者の名によりて建てられたる殿堂なりき。是の如く、殿堂が大佛の破壞者たることは曾に過去に於てのみならず、將來に於ても亦然るべし。大佛保存の爲に計るに、斯かる殿堂は、一日も早く解體し其禍根を永遠に斷滅するの策に出でざるべからず。即ち大佛は其大佛たるの性質上當然露佛たるべきのみならず、其保存の上より見るも、亦當然露佛たるべきもの也。

三　大佛殿は大佛の破壞者也

且夫れ大佛殿は、大佛を保護するものに非ずして、却てそを破壞する者也。大佛自らは風雪雨露を意とするものに非ず、彼は毫も其頭上の屋蓋を德とすべき理由を有せざるもの也。

古來大佛殿建立の目的は、大佛保護に存せしならむ。然れども是の目的は全く空想にして、却て反對の結果を生ずべき者なることは、歷史上の事實是を證明して餘りあり。治承四年、平重衡南都の僧侶を征伐するや、大佛殿亦兵燹に罹り、大佛其の頭首を失へり。若し大佛をして初めより露佛たらしめば、是の如き禍素より無かるべく、隨うて凡庸なる陳和卿等を煩はして佛頭佛手を再鑄するの要も無かるべく、恐らくは今日に到るまで天平時代の純粹なる像式を保存し得たりしならむを、深く悼惜すべき也。治承四年に破壞せられたる佛體及び殿堂は、壽永、建久の間に再建せられしが、凡そ四百年を經て同一の禍炎に遭遇せり。即ち永祿年間、三好松永の亂に際し、大佛殿は再び兵火に燒かれ、佛頭復斷落せり。斷落せる佛頭は幾

史上の徴證として見るも、最も貴重すべき遺物なりとす。是の如き佛像は、國寶として保存すべきものなること、素より言を待たざる也。然れども、保存の目的は單に保存するを以て達せるに非ず、藝術上よりは當代の手法樣式を明にし、製作全體の風格を知らしむべく、歷史上よりは後人をして眞に當時の文明を追想せしむるに足るもの無かるべからず。殿堂を以て像體を掩蔽し、厘に蓮座下よりの外は全く瞻望の途を杜絕するは、是の如き目的を達する上に於て最も有害なる設備に非るべき乎。若し宗教的崇拜の眼を以てすれば、佛體を風雨中に露出することは、忍び難き事なるべし、往昔、後白河天皇が賴朝を大檀越として殿堂再建の叡願を發し給ひ、もしくは貞享年間公慶法師が大殿經營の志を起したるは、皆是れが爲なりき。然れども今日にありては、大佛の存在は、歷史の遺物、美術の標範たるの外、何等の意義をも有せざる也。若し大佛にして保存せらるべくむば、そは飽迄歷史の遺物、美術の標範たるを目的として保存せられざるべからず。即ち、其の大佛たる本來の性質上當然露佛として保存せらるべき也。

審美上凡そ大像體を近距離より觀る程醜なるはなし。彫塑にまれ、繪畫にまれ、作品の全體を一目の下に觀照し得ることは、其の審美上の完全なる效果を收むる上に於て、絕對的に須要なる條件也。此の一手を視、彼の一足を望み、補綴して想像するところのもの、是れ寄木細工のみ、是れを外にしては形體の統一と、是を內にしては感情の融合と兩ながら望み得べからず。良しや圓滿最勝の佛像たりとも、須彌壇下より是を仰視せば、見る所のものは大唇のみ、巨眼のみ、大いなる手足、大いなる胴體のみ、齊對もなく、比例もなし。況してや典雅沈靜の容姿、慈悲忍辱の相好、爭てか觀照し得らるべき。名工鉅匠の技倆も亦現はるゝに由無き也。若し是を廣濶の地に遷し、百步を隔てゝ瞻望するを得せしめば、形體眉目の秀靈、初めて看取し得べし。畢竟、大像體を近距離より仰視せしむるは、全く藝術の面目を蹂躙する者也、藝術の價値を埋沒するもの也。

今夫れ奈良の大佛は、建立以來數回の禍災に罹り、佛頭佛手舊時の物に非ず、隨うて藝術上必ずしも優秀の製作を以て許すべからずと雖も、而かも其下體蓮座の大部分は、天平勝寶の遺物にして、其手法、其樣式以て百代の遺範たるに足る。本邦歷

して見るも不可なかるべし。大佛殿に關する吾人の意見は氏が是の駁論に接したる今日に於ても毫も異なる所無きを以て、吾人は吾人の言責上より、一言氏の說を駁し、江湖識者の審判を待たむと欲す。

吾人は大佛露佛說を唱ふるもの、一人也其の主なる理由は左の如し。

一　大佛は大佛たる性質上、本來露佛たるべきもの也。

一　大佛殿は大佛保護の用を爲さずして、却て大佛破壞の害を爲すもの也。

左に是を畧說し、而して後妻木氏の意見に及ぶべし。

二　大佛は露佛たるべきもの也

吾人は今日に於て宗教的崇拜の目的物として大佛を見るの要を見ず。國家が古社寺及び古佛像の保存を國家事業となしたる精神も、亦決して宗教上の意味あるものに非ざるべし。曰く、國史の徵證を存す、曰く、美術の標範を垂る、其の目的宗教的信仰と爲す無きこと炳焉として疑を容れざる也。既に歷史上の遺物、又は美術上の製作として見る以上は、大佛は其本來の性質上當に露佛たるべき者也。

一　序言

歷史の徵證を存し美術の標範を遺さんが爲に、所謂古社寺保存の擧あるは、盛代の餘澤、洵に喜ぶべき事ながら、主義なく、識見なく、たゞ古代のものとし言へば一も二もなく修繕保存することゝならば、是上もなく無意義の業ならむかし。國家が容易ならざる財政の內より、年々巨額の經費を支出する有り難き旨趣に照らしても、斯かることは萬々有るまじき也。

吾人はかねてより今の所謂古社寺保存に就て疑を挾み、曾て是事を述べし時、奈良大佛殿保存の謂れなき由をも論じて、無主義なる古社寺保存の一例とはなしたりき。其後古社寺保存の主義に關しては、當局者は吾人の疑を解くべき何等の辯白をもなさざりしが、大佛殿の事に關しては、近時內務技師妻木博士の駁論に接しぬ。この駁論は同氏が大佛殿修繕設計の爲めに奈良に出張せる際、同地の人士に語られたるものゝ由なれど、既に去月末の各新聞に揭載せられてよゝ、今日まで同氏の正誤文に接せざることなれば、大佛殿修繕技師たる妻木氏の責任ある意見と

五　是れ國寶を土中に埋沒する也

貧富の懸隔日を追うて加はるの今日、贅澤品たる美術が富豪の倉庫に入るは、猶ほ水の低きに就くが如し、若し富豪にして是を公開すること無くむば、國民は即ち年々其の美術を失ふ也。吾人は美術の私有を難ずべき毫末の理由を有せず、然れども彼等が是れを公開せざるの一事は少くとも社會の公益を沮害するの擧動として、是を難せざるを得ず。公共的なるべき美術を富豪の倉庫に封鎖するは、即ち國家の財寶を土中に埋沒するに等しからずや。吾人は美術研究家が、爲に如何の障害を被るべきか、將た被りつゝあるかを謂はざるべし。唯斯國民の美的好尚の日に墮落すること、及び是の墮落の結果として、一國人文の上に如何の影響を見るべきかは、吾人の熟慮せざるべからざる所也。吾人は切に名譽ある我が富豪が自家の富豪たる天分に顧み、吾人の言に聽かむことを望む。

（三十二年八月）

大佛露佛說

（妻木博士の非露佛說を駁す）

用の事に屬す。美術の世界は平和の王國也、卑劣なる競爭心は萬人平等の同情に融和せられ、茲に一種の高尚なる情緒の發動を感ずる也。美術の好尚には利害の衝突無し、利害の衝突無きものは輒ち結合す、是を以て社會國家に關する大いなる一致運動は、美的感情の發動に本くもの多し。

且夫れ人文の進むに隨ひ、分業の途愈〻隔つ。是を以て個人の平生執る所の業務は、何れも偏頗のものとなり、精神上、肉體上、一面に局するの弊を致す。是に於てか社會は無趣味となり、人生の圓滿なる狀態長へに見るべからざるに到る。是の偏局の弊を醫するは、即ち美術の功也。鍬を取るものは農夫たり、劍を提くるものは兵士たり、而かも美術に對して齊しく人たる也。彼に於ては一分の人たり、此に於ては全分の人たり。是の如く偏頗の生活を補ふに美術の好尚を以てするは、社會を扶育し、人生を完全する上に於て、須要なる一條件と謂ふべし。是點より見るも、富豪が貴重なる國民的美術を私有して、公共の翫賞を杜絕するは、甚だ有害なる事なりと謂はざるべからず。

圖、一基の彫刻は、幾百萬人の均しく眺むべき所のもの也、大なる文學は其の國語を解する凡ての人に開放せらるべきもの也、音樂は苟も耳ある者の共有する所にして、普く世界の人に樂まるべきもの也、夕陽と星を眺めざるものは盲者と囚人とのみ。實に私有の競爭心を擺脫し、凡ての人類に開放せらるべきは、美なる一切の物の特質也。是の如くにして美術は人類相互の同情を喚起し、是の現實世界に一種の理想の王國を建設し得る也、美術の美術たる所以茲に存す。若し今の富豪にして、公債又は株券を有すると同一の覺悟を以て美術品を有すれば則ち知らず、苟も是を翫賞するの精神に出でたりとすれば、是を隱匿し、其樂を獨占するは彼等自らにとりても極めて不本意なる事ならざるべからず。然らば則ち何ぞ是を公開して、衆と共に其樂を同じうせざるや。吾人は我邦の富豪が是の點に就いて三思せむことを切望す。

四　社會教育と美術

更に社會教育の側より見るも、衆庶をして美術上の好尚を有せしむるは、頗る有

るものに非ず、唯夥多の美術品を蓄藏せる富豪が、其所藏品を公開せむことを望むのみ。吾人の見聞する所によれば、今日苟も富豪と稱せらるゝものは、何れも餘財を抛つて美術品を蒐集せざるは無し。例へば岩崎家の如き、年々是の目的の爲に數萬金を豫算すと謂ふに非ずや。年々是の如くにして購入せらるゝ所の珍品傑作、想ふに尠からざるべし、而して彼等は是を倉庫の中に襲藏し、容易に人に示さず、僅に自家の宴會賀筵に展列して、蓄積の豐富を知人の間に夸揚するに過ぎざる也、無意義も甚しからずや。私有は富豪にとりて一の快樂なるべし、然れども自己の名によりて其の蓄積を公開するは、決して私有の快樂を損殺するに非ず。珍品傑作を衆と共に樂むは或はモノポリーを失ふの感あらむ、然れども是れ全く美術翫賞の性質を了解せざる者也。

三　美術の公共的性質

美術品の實用品に異なる一要點は、公共的なるにあり。換言すれば、所有者と所有者ならざるとを問はず、萬人の齊しく觀て其樂受を共にするにあり。一幅の書

自己の最も大なる名譽と功德とは、社會の利福を增進することに依りて得らるべきを自覺せざる也。是の如くにして、彼等自ら自己の貴重なる天分を拋擲し、自ら好て嘲罵憎怨の標的となるの愚を致す、彼等の爲に謀るも策の最も拙きものと謂はざるべからず。

二　美術の隱匿

今の幼稚なる社會にありて、吾人は多くを富豪に望むこと無かるべし。例へば大學を興し、圖書館を興し、其他諸種の實業學校を興すが如きは、富豪の事業として最も希望すべき事なりと雖も、是を今日に責めむは即ち或は未し。吾人は玆に今の富豪にとりて最も容易に、而かも最も適當なる一事業を提供し、以て其注意を促さむと欲す。何ぞや、私立美術館の設立、是れ也。

美術は是を人に示して減損するものに非ず、美術館の公開に要するものは建物と些細なる保管の費用とのみ、是れ富豪の事業としては極めて易々たるものに非ずや。吾人は美術品を藏せざる富豪に對して是の如き美術館を設立せよと勸む

於ては議員歳費の十分の一に過ぎずと雖ども、實に一大國家的事業也。日本が世界の文明に寄與する最大貢獻の一は、是事業によりて成さるべし、されば其措置亦一段の鄭重を要すべし。是れ吾人が聊か卑見を吐露し、一は以て當局者の一顧を煩はし、一は以て輿論を喚起せむと欲する所以也。

（三十二年五月）

美術と富豪

一　富豪の天分

社會が富豪の存在を德とするは彼等が公共の利福の爲に盡し得べき大なる力を有すればも。若し富豪にして公共心無からむ乎、彼等は即ち天下の富を私する者に過ぎざるのみ。彼等は是の如くにして國民の怨府となり、社會の公敵となるも。

本邦の富豪が概して公共心に乏しきは、夙に識者の浩歎せる所也。彼等の多くは、第宅の宏壯に誇り、衣食の暖飽を樂み、徒に人生の虛榮を趁うて自ら甘ずるのみ。偶〻富豪に生まれたる身の天分として、自己の存在に如何の意義あるかを想はず、

も、躁躇することを許すに非ずや。古は祕佛と稱して容易に人に示さゞるものも、今や人をして一拜だにするなく、是を摩し是を叩くことをすら許すに非ずや。南都諸寺院を觀たる人は、何れも是の如き事實に遭遇すべし。畢竟彼等は一種の觀せ物として是等の佛像を遇するのみ、もし多額の見料をだに拂はば何事も人の爲すに任せむ也。然らば則ち政府の力を以てして、是を博物館に收容し得ざるの理あらむや。是を爲す、唯僧侶に金錢を與ふるにあり。

聞說く、往年帝國奈良博物館の建設せらるゝに當て、法隆寺は其多數の佛像を同館に寄托せむことを約せり、然れども館成りて其約を履まず、厘に其三四を納れて其責を塞ぎたりと謂ふ。畢竟僧侶の輩、國民的公共心を有せず、保存の安全、公開の利益等の理を以て是を服すること能はざる也。願ふに當時奈良博物館にして、是等佛像の觀覽料によりて得らるべき程の金錢を與へなば、法隆寺は喜で其本尊をも、祕佛をも、寄托せしならむ。吾人は是方法によりて古代美術の一切を博物館内に收容し、公開せむことを希望して已まざる也。是れ實に、日本美術の標範を恒久に垂れ、以て本邦の光華を中外に發揚する所以也。古社寺保存は其年々の經費に

美術の保存を顧みず、單に國寶と稱せらるゝものあるも他の什物と同じく一に社寺に寄托するが如きは、寧ろ奇怪なる所爲と謂はざるべからず。當局者は何故に是を帝國博物館に收容することを爲さゞるや。

吾人は佛像を拉し去りて民衆の信仰を妨碍するは不可也との反對說を知らざるに非ず、然れども、是の如き批難は、吾人を以て見れば一の杞憂のみ。今日若し本願寺の親鸞像、淺草寺の觀音像を捉へて是を博物館內に公開せば、恐らくは民衆の迷信を妨ぐること甚だ大ならむ。而かも推古、天平、弘仁、貞元の古佛像、例へば法隆寺の夢殿、金堂、五重塔、東大寺の三月堂、戒壇院等に在るものを他に移すも、自家信仰の破壞せられたるを感ずるもの、極めて少からむ。何となれば、年々善光寺、本願寺參りする佛敎信者は、其數巨萬なるも、特に奈良の古寺院に禮拜するものは、始ど其萬一にも及ばざればなり。佛像を拜する程のものは、金碧燦爛たる伽藍に於て其有難味を感ずべし、何ぞ粉黛剩落古色黝然たる古佛像に對して隨喜せむや。

且夫れ僧侶自らと雖も、今日是の如き佛像に對して特別の敬意を有する者にあらざる也。見よ、彼等は縱覽料をだに拂へば土足の儘にて、其須彌壇をも、其蓮座を

古社寺保存と謂ふ、不可なる乎。是の如き事例が大佛殿以外に存せざらむことは、吾人の萬々希望する所也。

五　古代美術と博物館

最後に古代美術の保存に就いて一言せむ。茲に謂ふ所の古代美術とは主として推古、天平より平安後期に到るまでの佛像佛畫を謂ふなり。是等の佛像佛畫は、現今多くは古寺院の中に保存せらる。吾人は我政府が古社寺保存の事業と共に、是等古美術を帝國博物館に收容するの擧に出でむことを切望するもの也。

凡そ古代の美術を博物館内に保存すれば、二個の大利益あり。其保存の安全なるは其一也、國民をして洽ねく國民的藝術の精粹に接することを得せしむるは、其二也。

是れ多言を要せざる也。是等古美術を古社寺の保管に一任するの不可なるは、累年名寺古刹の火災に罹るもの多き事、盜賊に罹る事、蟲鼠雨露の爲に損害せらるる事、等の事實によりて明なり。今や政府は偏に古社寺の保存に力めて、而して古

ふに過ぎず。名匠鉅工の伎倆も亦現はるゝに由無き也。若し是を廣濶の地に移し、百歩を隔てゝ瞻望するを得せしめば、面妙相好、歴々看取すべし。されば大佛は其の大佛たるの性質上、當に露佛たるべきもの也。

且夫れ大佛の保護の爲に殿堂を設くと謂ふも、古來大佛の害を爲せるもの、是殿堂の如きは有らず。治承年間、平重衡が南都暴動の際、熟銅七十三萬斤、鍊金一萬兩、水銀六萬兩に成れる金銅盧舍那佛をして、楚人の一炬に壞敗せしめしものは、實に其殿堂なりき。後白河天皇是を再鑄せしも、永祿年間、松永久秀の兵燹によりて佛頭佛身再び鎔壞せり、亦是殿堂の罪也。若し天平以來露佛たらしめば、金銅盧舍那佛は、其のあらゆる古式を以て鑄金の妙を今日に誇るべく、決して藥師寺の釋迦三尊をして其盛名を擅にせしめざりしならん。殿堂は畢竟大佛を保護するものにあらずして、却て破壞するもの也。宜しく一日も早く是を撤却し、大佛の爲に其禍根を絶つべき也。況んや其堂の拙惡にして而かも半ば壞敗せるをや。

是の如く、何れの點より見るも有害無益なる大佛殿は、今や政府及び奈良縣の篤實なる保護によりて修繕せられつゝある也。吾人は敢て是を評して無分別なる

今の東大寺の大佛殿は、元祿十四年、德川將軍綱吉の建造せる所、其年代に於て古しと謂ふべからず、而して其構造樣式の特に取るべきもの無く、唯其の規模の徒に尨大なるのみ。修繕技師に就いて是を問へば、上層の重量徒に過大にして、支柱梁桷の是に勝ゆる能はざるが爲に、前後兩面は左右に相傾斜して、全堂東西に捩り、兩廂の端共に波狀を呈して、上廂の左端水平を下ること凡四尺、廛に屋上に支柱を建て是を撐ぐ。外面より是を觀るも、岌々乎として危し。更に大佛頭上の架上に上れば、徑數尺の梁柱、截然として折るゝを見る。其構造も亦形式と共に、寺院建築中の寧ろ拙劣なるもの也。政府は何故に莫大の金を以て是惡大堂を保護し、奈良縣亦何が故に其修繕を力むる乎。殿堂其物の保存の爲ならば、是れ沒鑑識の極み也。蓋し堂中に安置せる大佛庇護の爲ならむ乎、果して然らば吾人別に說あり。

吾人は往年九鬼氏が論じたるが如く、大佛を露佛となすべきを主張する者也。大佛の身長、坐ながらにして、五丈三尺五寸、面の長さ一丈六尺、眉、目、口、鼻、以下是に稱ふ。是の如き偉大なる佛像を一堂の中に置き、人をして蓮座下より是を仰がしむ、慈悲忍辱の尊容如何に靈秀微妙なりとするも、吾人は唯其鼻孔を望み、其巨唇に驚

の金堂修繕の爲に國庫は貳萬五千餘圓の補助金を支出せり。一技師の言によれば、是金額を三倍すれば、新築或は望み得べしと、果して然らば、吾人の主張必ずしも行ひ難きに非ざる也。吾人は國家永遠の爲めに、區々姑息の修繕策を一變して、是新築案を斷行せむことを希望する者也。

四　無分別なる古社寺保存、奈良大佛殿

先にも述べたる如く、古社寺を保存するは、其年代の古きが爲にあらずして、其形式の美なるが爲也。藝術上はた歷史上、何等重大の意義無きも、唯其の古社寺もしくは大伽藍たるの故を以て、漫然國帑を割て是れを保存するもの、吾人是れを名けて無分別なる古社寺保存と云ふ。

無分別なる古社寺保存の一例は、奈良東大寺也。吾人は我政府が保護の特典を與へたる全國數十百の所謂古社寺に就いて、特に其當否を究めたること無しと雖も、東大寺大佛殿の一例は、慥に人をして當局者が撰擇の眼識を疑はしむるに足るものあり、乞ふ試に是を說かむ。

局者が、推古、天平の古刹を保護するの旨趣、亦是に外ならざるを信ずる也。古社寺保存の精神既に所謂古色にあらずして、其形式の上にあらば、是形式に準據して別に新建築を興す、最も善く是事業の目的を到達する所以に非ざる乎。先に所謂第一法に據らむ乎、寺院建築の史上に千古の標範を垂るゝ推古、太平二式の美觀は、遂に其の全きを觀るべからず。第二法によらむ乎、累代其修繕を累ぬるの煩あり、而して其結果は最も拙劣なるモザイックたるに了るの慨あり。兩者の弊竇を擺脫して、古社寺保存の眞精神を貫ぬくに庶幾ふものは、夫れ唯新築の一法に在る乎。而して是新築にありては、其裝飾、着色、容量等、務めて建初當代の儀型を考覈して、新に是れを回復すべきこと言ふまでも無し、是の如くにして初めて古式の眞相を會得することを得べけむ也。若し夫れ木材、石基、漆塑の類、凡そ當時の徵證となるべきものは、別に保存の途を設くるを可とすべし。

是方法の實行をして最も困難ならしむるものは、何人も想像する如く經費也。然れども是の如きは國民が其美術を尊び其歷史を重ずるの精神如何によりて決せらるべし。今日現に修繕の爲に費す所甚だ少小ならず、假令へば大和唐招提寺

るもの、其趣味や極めて庸劣なりと謂はざるべからず。吾人は想ふ、所謂古色を愛するは、美學上に所謂時間の崇美に本づく。茲に一基の佛像あり、蒼然として千年の古色を現はさば、是れ是佛像が悠々たる千年の風霜に抵抗して、其存在を持續したるの力あるを示す也。爾來歷史は常に推移し、邦家は幾びか變遷す、而して是物獨り流轉の外に超然として終始渝ること無し、所謂古色は是時間の破壞力に對抗して奮鬪したる瘡痍也。吾人が所謂古色に向ひて一種幽妙の快感を惹起するは知らず識らず、是時間的崇美の感情に打たるればなり。是故に吾人は古色を愛するの情其物は、寧ろ人性の自然に出づるものなることを認むと雖も、而かも是を以て古代建築の主なる價値とするに至ては、全く審美の埒外に逸したる、藝術上の邪見なることを主張す。

法隆寺の金堂が、本邦寺院の鉅觀たるは、決して其建物の古きが爲に非ざる也。其の外觀の古色あるが爲に非ざる也、實に其樣式の高雅、雄渾、以て百代の標範たるべきを以て也。若し審美上特に稱すべき長所なからむ乎、假令ひ幾千年の古物たりとも、何ぞ國費を以て美術の標範として保存すべき謂はれあらむ。吾人は我當

が故に特に『古』の一字に執着するの要ありや。夫れ建築は主として形式的の美術なり、既に夫れ形式的なり、即ち是れ主として外形の美也、輪廓の美也、縦横、上下、曲直、長短等、要するに數量及び重方の關係の美也。其木材の質理、着色の濃淡等は、第二義以下の制約のみ。されば單に建築美の見地より是を觀む乎、苟も其模倣にして眞に其實に違はざらむには、設令へば法隆寺の金堂と雖も、其模造と實物との間に些の軒輊無かるべき也。斯く謂はゞ多くの人は難ぜむ、新建築は其形式に於て古社寺を模倣し得べきも、其幽妙なる古色を奈何と。嗚呼古色乎、古色乎、通常世人の所謂る古社寺保存の主腦とする所、實は是の古色の保存に存する也。古色何物なれば、果して爾かく美術鑑賞家の尊重する所となる乎。

一言にして是を斷ぜむ乎、吾人は所謂古色を以て美術の優劣を品隲するの傾向を以て、敢て美的好尚の墮落となすもの也。一幅の山水、一基の佛像、良しや表情に於て缺くる所あり、形式に於て全からざるも、彩色衰褪し、刀痕磨滅し、黝然として辨知し難きものあれば、則ち以て古色蒼然たりとなし、古雅愛すべしとなし、翫賞措かざるもの、我邦人の間に常に見る所也。是の如きは美術を以て骨董品と同一視す

して所謂保存に力むる所の古寺社は、何れも五十年乃至百年を出でずして再度の大修繕を要する也。誰か其方法の姑息なるに驚かざらむや。讀者よ試に想像せよ、五十年百年毎に修繕又修繕改築又改築を重ねたる結果は、五百年千年の後に到りて如何の狀態を呈すべき乎推古天平の大梵伽藍は如何なる狀態によりて其の當初の風格氣韻を維持すべき乎。吾人は餘計補添の末所謂百結の錦繡は一帳の素布に如かざるものあらむを恐るゝ也。是れ豈古社寺保存の眞精神ならむや。

吾人は以上述べたる如き一切の缺點を控除し、古社寺保存の眞精神を貫徹するの方法として、吾人の所謂第三法を推奬ずる者也。第三法とは、先にも謂へる如く、建初の古式に準據し、而かも傳來の伽藍を離れて、別に新建築を興す者是れ也。

是の如く言はゞ人或は難ぜむ、既に古社寺保存と謂ふ、古傳の社寺を保存する、素より其の所のみ、更に新建築を興す、是れ豈所謂古社寺保存ならむやと。實に多數の人は是の如く言ふならむ。然れども吾人を以て見れば、是れ古社寺保存てふ文字に拘泥して、是事業の眞精神を遺却したるの說なるのみ。古代建築の精華を存續して、後世美術の標範を貽す、古社寺保存の大目的は是に外ならずとせば、吾人は何

にありても亦同一の現象を見るべき也。千年の星霜によりて染着せられたる、所謂古色なるものは、一朝夕にして模倣せられ得べきものにあらず、況や風雨百世の結果たる腐蝕朽敗の狀の如きは、得て擬似すべからざる也。設令ひ幸に一時の外觀を矯飾し得たりとするも、幾もならずして破綻を呈露せむ。是の如きは例へば法隆寺の夢殿、東大寺の法華堂(三月堂)等に於て、明に見る所也。吾人は今の古社寺保存の方法が、何れも是の塗抹的、僞善的なるを見て、爲に貴重なる古式の妙趣を涓せらるゝの憾無き能はず。若し數十年もしくは數百年後に至りて、是の如き保存方法の結果如何を想像せば吾人は寧ろ本邦古社寺の爲めに悵然たらずんばあらざる也。

吾人は又是の如き塗抹的方法の姑息なるを排斥せざるべからず。唐招提寺、及び藥師寺の修繕當事者の言として聞知する所によれば、設令ひ一切の組織を解剖し、腐木朽材を除去して、代ふるに新材を以てし、以て是を改築するも、更らに修繕を要するの期百年を出でざるべしと。奈良大佛殿の技師の如きは、吾人に語て目下の修繕は三十年を保護するに過ぎずと謂へり。然らば則ち、年々十五萬圓を支出

し去るは惜むべしと。素より天下の名刹を修理するの局に當るもの、後世にありても亦一世の巨匠ならむ、其製作を破却し去るは惜むべしと雖も、是あるが爲に建初當時の古式掩蔽せらるとすれば、其利害の大小日を同じうして論ずべからざる也。且夫れ是の如き一代美術の模本となり得べきものは、別に是を保存する素より可なり。況むや各時代の樣式儀型の保存せらるゝや、別に其處あり。德川時代の建築は是を增上寺、日光廟に見るべく、藤原時代の裝飾は是を鳳凰堂、中尊寺に窺ふべし、何ぞ特に推古、天平の古刹を累はして、是が保存に力むるを須ゐむや。

然れども、其の第一法たると、第二法たるとに論無く、吾人は從來の所謂古社寺保存の方法に反對すべき二個の理由を有す。從來の方法は畢竟修繕なり、補綴なり、唯古來傳襲の古堂塔の構造、裝飾に就いて其缺所を補充するにあり。熟〻其補修の跡を點檢するに、新材を拈箚して强ゐて古色を帶ばしめ、以て强ゐて腐朽の狀を裝ひ、今古の別を塗抹せむと擬するの狀、吾人を以て見れば、寧ろ醜汚の感に堪へざる也。例へば藥師寺の金堂、法隆寺の夢殿、もしくは新藥師寺等に到り見よ、塗抹の跡紛として眼を遮る。恐らくは今後修繕に着手せむとする唐招提寺以下の諸伽藍

院の建築は、推古天平に於て殆ど空前絶後の妙境を現じたり。降て平安となり、鎌倉となれば、時尚漸く衰へ、往日の高調又見るべからざる也。故に是時代の補修に係るもの、奈良王朝の高渾なる風致に對しては、概ね蛇足のみ。降て東山、徳川に至りては、時勢已に椄を渝へ、風尚已に天淵の差あり。法隆寺に於ける慶長の大修繕を見よ、金堂の兩廂間に彫龍の支柱を立てしが如きは、殆ど木に接ぐに竹を以てするの觀あり。金堂及び五重塔下の廻廊の如きは、果して何等の沒趣味ぞや。凡そ後世の添加に係るもの概ね此類のみ。古式の妙工を發揮し、美術の標範を後世に貽さむことを目的とする、所謂古社寺保存なるものは、果して是の如き沒趣味にして有害無益なる蛇足をも併せて忠實に保存すべしとする乎。單に傳來の現狀是の如きが故に、一も二もなく是を保存すべしと云ふが如きは、全く古社寺保存の目的を無視せる沒分曉の説なりと謂はざるべからず。

吾人は是點に於て第二法、即ち後人の附加に係るものを除却して、建初の古式を發揮せむとする方法の遙に優れるを認む。難ずるもの或は謂はむ、是の如くせば古式は現はれむ、然れども緣て以て後世の儀型を窺知すべき所の彫刻、裝飾を破却

しめよ。

吾人の見る所によれば、古社寺保存の方法と稱すべきもの凡そ三あり。一に曰く、古社寺の現狀を保存する也、二に曰く、建初當時の古式に準じて是を修繕する也、三に曰く、建初當時の古式に準じて是を新造する也。甲は先に述べたる法隆寺、藥師寺等の事例に於て見るが如く、建初以來幾回の補修添加を經たるをも並せて傳來のまゝ是を保存する也。乙は新藥師寺の事例に於て見る如く、後世の補綴に係るものは凡て是を除去し、力めて古式に則りて營繕を加ふる也。丙は其方針乙に等しきも、全く傳來の堂塔を離れ、新材を以て一新寺院を興す也。是三種の方法の孰れか最も善く古社寺保存の目的を充實すべき乎。吾人は斷じて第三法を取るものなり。

夫れ古社寺保存の目的は、古代建築の中より美術の模範となり、併せて歷史の徵證となり得べき優秀なるものを撰擇して、是を後世に存續するにあり。今第一法に隨ひ、偏に現狀の保存を以て能事了れりとせむ乎後世の補修は、多くの場合に於いて建初の儀型を壞亂し、其の雄渾高潔なる風尙を掩蔽するを如何せむ。本邦寺

隆寺、唐招提寺、乃至藥師寺等に於て吾人の觀たる所は、新藥師寺に於て觀たる所と、全く其の方針を異にせり。彼にありては、建築當初の儀型如何を問はず、累代幾回の修繕に何等批評的改竄を加ふること無く、單に現存の狀態を忠實に存續せむと力めたり。而して此にありては、一切後人の補修を破壞し、改作し、變造し、力めて天平當代の古式を回復せむことを旨とせり。彼にありては單純なる保存なり、此にありては批評的回復なり。當局者の方針、果して那邊に存する乎。若し古式回復の必要を認めむ乎、何故に是を法隆寺、藥師寺、唐招提寺に施さずして、獨り是を新藥師寺に行ひたる。吾人を以て見れば、建築の儀型として標範を史上に垂れ得べきもの、法隆寺を以て最となす、當局者は何故に新藥師寺に於て特に是の如き大膽なる回復を施しゝ乎。是れ吾人が古社寺保存の大方針に就いて、我當局者が定見の有無を疑ふ所以也。

三　古社寺保存の三方法

然らば則ち古社寺保存の方法を如何すべき乎、乞ふ吾人をして聊か卑見を述べ

べきを想ひ、而して後世の無見識なる修繕が、如何に推古當代の樣式を埋了せるかを惜みて、所謂古社寺保存の當事者が何故に是懸疣を掃除して本來の面目を發揮せざりしかを憾みたり。去て唐招提寺、及び藥師寺に到れば、前者の金堂及び後者の三重塔は、今や方に解體を了りて改築の途上にあり、當事者の說明に據れば、改築の方針は、單に木材の腐蝕せるものを新にするの外、他意無きものゝ如し。是に於てか藥師寺の三重塔は、再構の後に到りても尙ほ建初の高風を見る能はざる也。

次で新藥師寺に到れば、吾人は茲に別種の保存主義に遭遇せり。即ち該寺にありて古社寺保存の目的によりて再造せられたるものは、啻に朽木腐材の修補に止らず、力めて天平の古式に則りて、足利、鎌倉兩時代に於ける修繕の跡を除却し去りたるが如し。是に於てか足利彫刻の特質たる墓股の如きも、今や其跡を止めず、殆ど從來の新藥師寺と面目を異にするものを現出せり。是改築に於て天平の古式果して能く回復せられたる乎、後人の添補と建初の儀型と、果して能く甄別せられたるを得し乎。是れ別問題として暫く問はず、唯吾人は是事實によりて一個の疑惑を起したり。抑々古社寺保存に對する當局者の方針は抑々何處に存する乎。法

むか。何人も知る如く、大和法隆寺は、推古の元年より十五年に渉りて建築せられたる本邦最古の寺院なり。一千三百有餘年の星霜を經て、尚ほ幸に災異を免れたるもの、中門あり、金堂あり五重塔あり。然れども是等最古の建築が慶長年間の大營繕に遭遇するまでに、既に幾回の修補を經たりしや、夙に識者の問題となり居る所也。暫く今日現存の狀態に就いて是を言ふも、金堂及び五重塔の周圍を繞れる廻廊、及廂は素より建初のものにあらず。上下兩瓦葺間の支柱も、亦後人の添加に成れると言ふまでも無し。而して是等の支柱及び廻廊が殆ど是壯大なる伽藍の美觀を埋沒し去らむとするは、吾人の切に歎惜する所也。又中門左右の步廊及び講堂に存せる普通の圓柱も亦晩年の改造に成れることは何人も知る所也。藥師寺の三重塔も、二層及び三層間に於ける二個の裳廂の添附によりて、全く本來の面目を失墜し了せることも亦吾人の甚だ惜む所。畢竟是の如き事例は、新藥師寺、唐招提寺、法起、法輪以下の諸古寺に於て、多少是を見ざるは無し。所謂古社寺保存なるものは是等後人の手に成れる一切の補修をも並せて保存するの意乎。

頃日吾人奈良に遊び、法隆寺の堂塔伽藍を觀て、其雄渾高尙眞に百世の標範たる

五千圓を以て京畿及滋賀に於ける十八個寺の修繕に配當せり。然れども保存方法の當否に到ては、吾人の首肯する能はざるもの、一にして足らざる也。

吾人が先づ當局者に問はざるべからざるは、所謂古社寺保存の方針如何にあり。抑も古社寺を保存すとは、單に今日現存の狀態を保存するの意乎、或は又建立當初の儀型を保存するの義乎。推古、天平以來、年を經る一千有餘年、木造建築たる本邦の社寺は、必ずや累代の修補を經由せざるを得ず。是を以て法隆藥師、法起、法輪、以下の諸寺院は、何れも多少後年の添繕を被らざるはなし。所謂古社寺保存とは、是等後年の添繕を並せて單に現存の狀態を持續するの意乎。若しくは、是等後年の修補を除去して、推古、天平當時の故態を回復するにある乎。吾人は是問題に對して、當局者が一定の主義、もしくは方針を有せざるの事實を見る。吾人を以て見れば、是れ實に本邦古社寺保存の將來に關して最も重大なる問題なり。苟も是問題にして明瞭なる解釋を見るに非ずむば、或は恐る、是事業が有終の美を濟さずして、却て國家千年の悔を殘さむことを。

試に所謂古社寺なるものが、如何に後年の修補の爲めに其原型を失へるかを見

實に一國の寶のみに非ざる也。國家が是光榮ある美術の保存に力むべきは、素より當然の本務のみ。

近時古社寺保存の必要、朝野の認むる所となり、我政府が議院の協賛によりて、着々其事に從ひつゝあるは、吾人の甚だ喜ぶ所也。唯一般國民の尙ほ是事業に冷淡なるや、是を當事者に一任して殆ど顧みる所なし。敢て問はむ、古社寺保存は果して如何の方法によりて爲されつゝある乎。凡そ美術の修繕と破壞と相去る纔に一歩のみ、是際萬一當事者の措置にして其當を失はむ乎、保存の美擧は却つて千年の悔を貽さむ。國民は果して其輿論の勢力に據りて、是を監視するの要なき乎。是れ吾人が是論ある所以也。

二　古社寺保存の方法に就いて

我當局者は定見を有する乎

我政府の古社寺保存に於ける亦力めたりと謂ふべし。一昨三十年より年々十五萬圓を支出して是が經費に充て、本年の如きは殊に前年度補助費の剩餘金九萬

せば、一切人生の事業は寧ろ初めより廢棄するに如かず、何ぞ獨り一の古社寺のみに限らむや。畢竟宇宙の進程より見れば、人類生存の命數は蟪蛄旦夕の生涯ならむのみ。夫れ唯蟪蛄旦夕の生涯なり、過去文物の精華たる美術の保存は益々其必要を加ふるを見る也。

又他方より見れば、本邦が其美術を保存するは、世界の文明に對して最も榮譽ある貢献を爲す所以也。日本は世界に向て誇るべき多くのものを有するならむ、而かも其美術は常に其隨一たるを失はざるべし。無識なる外人の寧ろ無禮なる濫賞を一切度外に附し去るも、日本の美術が、アリアン諸民族の美術以外に於て永く世界の文藝史上に其標範を垂れ得べきことは、吾人の固く信じて疑はざる所也。然らば則ち國民的美術として世界最古の傳統を有し、而して西歐以外別に醇粹なる東洋的趣味によりて體現せられたる日本美術は、實に日本が世界の文明に寄與し得べき最も貴重なる財寶にあらざや。　推古以來實に一千三百有餘年、或は奈良の高渾となり、或は平安の華麗となり、或は鎌倉の爽活となり、或は東山の幽雅、桃山の豪放となり、日東文明の沿革に伴うて、乘ねて國民の氣格、歷史の徵證を示すもの、

於ける幸福の一半は、祖先の事業の回顧に存す。若し吾人に千年の過去なくむば、安ぞ獨り千年の未來あらむや、吾人が將來に有する一切の希望と、計畫と、義務と、若し是の過去に於ける事業の繼紹を外にせば、凡て無意義にして已まむのみ。吾人の精靈は、常に是三世を上下して、茲に一部人生の全意義を求めむと欲する也。夫の現在若しくは將來を見て而して過去を想はざるものは、故らに人類の永生を遮斷して、其生存の意義を短縮するものにあらずや。吾人は是點より見て、古代美術の保存に於て最も深遠なる價値を認むる也。

然るに世に一種の論者あり、古社寺の保存を難じて曰く、朽腐頽廢は日本建築の早晩遭遇すべき必然の運命なり、今日國費を以て是が修繕を加ふるも、厘に頽廢の命數に於て十年百年を延すに過ぎず、畢竟姑息の策のみ、須らく過去に於ける老廢物の保存に力むるの餘力を以て、將來の新事物を經營すべしと。時事新報記者の如きは是種の論者なり。是れ人類の全生活は、歷史に於て實現せらるべきものなるを想はず、單に現在の一面に據りて人生を規せむとするもの、吾人の見て以て甚だ偏狹なる人生觀とする所のもの也。永遠ならざるもの、悉く存續の價値無しと

古社寺及び古美術の保存に就て

一　序論

古代建築及び美術の保存、今日に於て是の必要を言ふ、最早や自明の事を語るに似たり。實に人文の沿革を討ねて美術の源流に溯れば、以て一國文運の隆替をトすべく、以て國民の品性と好尚の推移とを想ふべし。而して美術は雪り歴史の形相、人文の徽跡たるのみならず、或意味に於ては、國民生活の最も光榮ある結果として、其歴史の意義と價値とを永遠に傳ふる所以なり。古より今に到るまで、民は幾たびか興亡し、國は幾たびか存廢し、生死の巷年と共に忙はしく、流轉の人生何くにか窮まらむ、而して百代千世、依然として渝らざるもの、文藝と美術と其主なるものの一也。然らば則ち、古代美術の保存は、歴史の最も貴重なる產物を存續し、以て人類生存の意義を無究に標章する所以にあらずや。

且夫れ人類は雪に現在に於て生活するのみならず、亦過去に於ても生活するもの也。吾人に歴史無からしめよ、是れ吾人の生命を半減する也。實に吾が現世に

藍に於て初めて其妙品を悟るべし。若し是を玻璃筐内に移し、番號題名を附して商店の貨物の如くせば、恐らくは作者が一刀三禮の妙趣得て探知すべからざらむ。東山名物の梵竺儀も、四疊半を離れては多少の韻致を失ふべく、在中庵の茶入も、椅子テーブルの上にては竹を以て木に接するに等しからむ。是を以て美術の眞趣は其時代を後景として初めて了解せらるべし。吾人は是點より見て本邦美術に關して所謂時代博物館の設立を希望するものなりと雖も、一國立美術館だに存せざる今日に於て是を言ふ、尚ほ其期の早からむを恐る。是を以て吾人は、セメテは普通の美術博物館中に於て從來の無趣味なる分析法を用ゐず、成るべく綜合的方法によりて、一時代の文物境遇と當時の作品とを品彙比照せむことを望む。是の如くせば、美術に對して多少時代的後景を添ゆるを得べく、又隨て各時代に於ける樣式風格の變遷を目睹するを得む。溫古の識是によりて得らるべく、知新の道亦是によりて開かれむ。吾人は顧みて今の帝國博物館の疎雜にして統一なきを恨とする者也。

（三十二年四月）

るが爲に、腐蝕朽廢せざるもの殆ど稀なり。若し一大美術博物館ありて、事情の許す限り、是れ等の古美術を收容し、公開せば、啻に保護存續の目的を達するのみならず、一般社會に對するの利益亦顯著なるものあらむ。美術家の如きは當來の覺悟に關して特に多大の恩澤に霑ふべき也。見よコシモ一世が莊大なる美術館をフヰレンツエに建てゝ古今の精英を蒐め、徽宗皇帝が翡翠閣を築きて天下の珍寶を列ねゝ若しくは東山義政が當代の美術家を集會して君臺觀の珍奇を品彙鑑賞したるが如きは、皆是れ從來の美術に至大の刺擊を與へ、其進步興隆を促がしたる一大原因なることは、美術史家の夙に認識する所にあらずや。

美術博物館設立の必要や暫く是を了せりとせむ。吾人の次に當事者の注意を請はむと欲するは其排列の方法にあり。從來本邦の博物館にありては、物品陳列の方法一言すれば分析的なり、是の如きは少くとも美術博物館に關して其の宜しきを稱すべからず。凡そ美術は其時代の人文と相待て初めて其存在の眞意義を見るべきもの也、畢竟一幅の山水、一基の彫像の是社會に現はるゝや、其周圍の文物是を要したればなり。されば慈悲忍辱、相好圓滿の佛菩薩の靈像は、幔蓋莊嚴の伽

術は畢竟希臘に起源せるアリアン人種の美術なり、其樣式、精神、趣味、おのづから是れアリアン的也。是點より見れば、一千年の歷史を有する日本美術は、世界の藝術に向て多大の貢獻を爲したるものと謂はざるべからず。何となれば、アリアン人種の邦國以外に、完全なる美術の歷史を有するもの、渾圓球上獨り日本あるのみ。是の日本千年の美術ありて茲に世界の藝術は其のアリアン的趣味の單調を免れ、歐洲美術以外全く其風格趣味を異にせるチュラニアン的美術あることを得たればなり也。世界は當に日本に向て其一千年の美術を有せることを謝せざるべからず。日本は當に世界の爲に是貴重なる財寶を維持し、且其の圓滿なる發達を將來に計畫せざるべからず。是の如くにして日本は世界歷史の進程に向て、最大最貴の貢獻を爲し得べき也。吾人は顧みて是の貴重なる日本美術の保護、觀察、研究、進歩の爲に一大博物館の建設せられたる無きを恨みとする者也。

今や歷史上に著名なる美術は本邦の各地に散在し、空しく庫裏に襲藏せられて容易に公衆の眼に入らず、而して是等古代の美術を藏する古社寺の回祿の災に罹るもの、年々相次ぐ。幸に風霜災異の難を遁れたるものも、保管其の宜しきを得ざ

指導とを與ふるものたらむことを期せざるべからず。一言すれば從來の靜止的展覽會の組織を刷新して、活動的博物館となすにあり。今日に於て俄に是を行ふ、或は望むべからずとするも、我博物館の當事者が是精神を體認して、着々將來の設備を完成せむことは、吾人の切に希求する所也。

博物館の增設と共に、吾人は又一大美術博物館の創立を希望する者也。日本の美術は從來無學なる外國人の好奇心によりて喧しく傳稱せられたり。良し是の如き阿諛的讃美の一切を度外に附し去るも、吾人は尙ほ本邦の美術を以て日本が世界に向て誇負するに足るものゝ一なることを確信す。實に日本の美術は其國體と等しく世界に於て最古の傳統を有する者なり。歐洲の美術史は、幾多の異なりたる民族と國民とによりて經緯せられたり。其人種を言へばセミチックあり、アリアンあり。其民族を言へば猶太あり、ヘレネあり、羅甸あり、チュートン、ノルマン、スラヴあり。其國を言へば希臘あり、羅馬あり、亞剌比亞あり、以太利あり、英、佛、獨、西あり。其美術や莊大富麗、素より深く欽慕すべしと雖も、而かも能く國民的統一を保ちて一千年以上の發達を經由せるもの未だ我邦の如きはあらず。且夫れ歐洲美

而して增設と共に各地方の事情に隨て其種類を區別すること、亦極めて肝要なりとすべし。

我邦の帝國博物館の如きは素一定の主義によりて建てられたるものにあらず、故に列品の種目徒に繁雜に流れ、所謂備はらざる無くして缺けざる無きもの也。是れ東京見物の田舍者には、至極調法なる組織なるべしと雖も、專門家、事業家の參考に資し、其研究事業を裨補する所あらむが爲には、餘りに統一を缺き、精緻を缺き、斬新を缺く。若し文明の幼稚なる本邦に於て、今日尙ほ是種の博物館を要すとせば、吾人は更に分科博物館の新設を主張せざるべからず。即ち各地方の情狀に應じ、商業地には商業博物館を設け、工業地には工業博物館、美術工藝地には美術工藝博物館、農業地には農業博物館を設置すべきなり。例へば京都、奈良の如き地方には其博物館を擴張して美術的ならしめ、大阪の如き地には商業博物館、金澤の如き地には美術工藝博物館を設くべく、又た東北もしくは北海道の如き農業地方には宜しく農業博物館を設くべき也。而して是等博物館は啻に古物展覽會に止らず、世界文明の最も進步せる氣運と調攝し、能く將來に處して機先を制するの敎訓と

ル、リュクサンブール等の美術博物館あり。伯林には美術工藝博物館あり、工業博物館あり、ドレスデンにも有名なる美術博物館及び歴史博物館あり。ブルッセルには先に述べたる商業博物館あり。伊太利には羅馬のワチカノ等を初めとして、フレンツェ、ヂチア等、到る所に大美術博物館あり。是の如き著大なるものの外、更に各國到る處の都會には各種の博物館あらざるは無し。是れ啻に一國文明の精華を列ねて社會の外觀を裝ふのみならず、亦民衆の智德を開發し、其工藝を催進し、國家文運の上に間接に、直接に、尠からざる影響を與へたるや、蓋し疑ふべからざる也。

吾人は是一事を想ふも、一箇の帝國博物館は、我邦にとりて餘りに少數なるを悲まざるべからず。惟ふに我政府も人民も、共に博物館を重視せざる所以のものは、畢竟過去文物の回顧に資するを以て博物館の能事了れりとする、吾人の所謂消極的意義をのみ認めたるの弊に非ざる乎。然らば則ち是際併せて大に其積極的方面を振作し、本邦將來の美術工藝を敎訓し、指導するの大抱負を以て一大刷新を施す、可ならむ乎。吾人は先づ是目的の爲に大に國立博物館を增設し、少くとも全國各師團若しくは各高等學校所在地に各一箇を建立せむことを望まざるべからず。

が爲なりと思惟せらる。是黒子大の一小邦、歐洲諸強國の間に介立し、國運ますます發盛を極むるは、是一商業博物館與て力ありと謂はざるべからず。博物館の効用も茲に到て大なりと謂ふべき也。

顧て是を我邦に觀るに、吾人は博物館の事業に就いて言ふべき事一にして足らざるを見る。試に其の主要なるものを擧げむか、博物館の增設は其一なり、博物館の分類は其二也、一大美術博物館の建設は其三也。而して是三者を通じて是を統率する所の精神は、啻に其消極的方面に留まらず、國家將來の利福に關して飽迄積極的ならざるべからず。

今日全國中にて博物館と稱し得べきものは東京上野公園に在る一帝國博物館あるのみ。京都に、奈良に、名古屋に、金澤に、其他二三の地方に、博物館と稱するものありと雖も、其規模の小にして列品の乏しき、多く言ふに足るもの無し。而して是全國唯一の帝國博物館すら、徒に疣雜にして統一を缺けるは、世人の常に恨とする所也。是を歐洲諸國に觀るに、其の著大にして世界に誇るに足るべきもののみを擧ぐるも、倫敦にサウス・ケンシントン博物館あり、ブリチッシ博物館あり、巴里にルーブ

力を協せて美術を奬勵し、意匠圖案を研究し、茲にサウス・ケンシントン博物館を設立して工藝美術の典範を國中に示したり。是博物館建設の後は、從來工藝的貨物の輸入を一に佛國に仰ぎたる英國は、一躍して却て巨額の貨物を佛國に輸出する氣勢を示したりき。英國工藝の發達は、其因緣必ずしも一規にして律す可らざるも、而かもサウス・ケンシントン博物館の勢力少からざりし一事は、蓋し何人も爭ふ能はざる所ならむ。

白耳義に於ける商業博物館は同國富殷の源泉なりと稱せらる。是れ亦吾人が切に我當事者の留心を要めむと欲する一例也。是の博物館は主として各種の製品、半製品、及び原料の見本を陳列して商工業者の參考に供するもの、白耳義の外務省は特に是が管理の勞を取り、又特に是の一博物館の爲に數十名の領事、總領事を海外に派遣し、訂交諸國の都府要港に駐在せしむ。是れ常に外國市場の景況、貨物趣好の變遷を探知して、本國外務省に通報せむが爲なり。外務省其報を得るや、直に是を是商業博物館に通じ、以て全國の商工業者をして坐ながら世界の市場の狀勢を曉らしむ。白耳義の商業者が、常に勝を世界の商業界に制するは、主として是

博物館論

夫れ博物館は、美術工藝の精英を一堂の下に蒐め、以て一國文明の進程及び結果を具體的に標章する所以也。然れども其の影響する所は、啻に過去に於ける文物の回顧に留まらず、啻に所謂國寶の保護に留まらず、又啻に國民をして其氣風を高尚にし、其愛國心を奮さしむるに留まらず、更に是に緣りて一國の工藝を鼓舞し、美術を振作し、又進で殖産致富の道を開進するに於て尠からざる關係を有すべき也。

吾人は我政府の當事者が博物館に就いて是積極的一面を等閑視するの跡あるを見て、是を恨とするや久し矣。是れ吾人が茲に本邦博物館の將來に就いて一言せむと欲する所以也。

吾人は先づ英國に於けるサウスケンシントン博物館の成立に就いて我邦人の一顧を煩はさゞるべからず。今世紀の第五十一年に於て、萬國博覽會は初めて倫敦に開設せられたりき。當時英國人の出品は其構造堅牢なりしも、其の形式と趣味とに到ては遙に他邦の出品に劣りたりき。英人は大に是を遺憾とし、爾來上下

位置に按配し、結合せざるべからざるにあらずや。況や宙外の言によれば、是等は何れも主人公の性格と離るべからざる微妙の關係を有するを以て、其重縁眼、左の後眦の小さい黒痣、お納戸色の小倉帯、花色木綿の股引等は、凡て刑事人類學者が罪人の骨相を鑑別するが如く、最も丁寧に取扱はざるべからざる場合に於ては、其時間と勞力と益々其の多きを加ふる譯ならずや。

予は予の答辯の餘りに長くして、罪を讀者に得むことを恐る、宙外の所謂『杓子定規』の束縛を要せざる、予の所謂シルレル、コレッジョ以上の天才なる今の文學者諸君に對して、予は實に陳謝の辭を有せざる也。若し夫れ聰明なる批評家宙外に向ては、予は更に其靜養三思を促さゞるを得ず。但し『網膜の末端』『腦神經の中樞』の如き文字の『誤寫』なること、猶ほ予が『大阪毎日新聞』と『大阪朝日新聞』とを誤りたるに均しかるべきは、予の堅く信じて疑はざる所也。

（三十二年六月）

ずや。淺草の觀音と云へば、東京の人は是一語にて隨分複雜なる淺草寺の觀念を生起するを得べし、然れども是れ記憶の再生也。もし未だ是寺を見たると無き人をして、是一語を聞かしむるも、作者が希望するが如き觀念は素より生起せらるべきに非ざる也。然らば則ち、詩歌に於ける物象の具象的觀念が時間内に構成せらるゝは、自明の事ならずや。試に宙外の所謂『現時知名の小説家』にして『主人公の性格と其容貌とは、離るべからざる微妙の約束、關係を有するを示さむが爲めに、精細に描寫する』柳浪君の作中より一例を擧げむか、

色は白い方では無いが、受口の鼻附の尋常な重縁眼の左の後眦に小さい黒痣があり、それが却て愛嬌にもなつて居る。赤縞のがす雙子の袷に帶はお納戸の小倉尻端折を爲し、花色木綿の股引に雪駄掛で、鳥打帽子をやゝ前下りに被つて、手には小包を提げて居る（もつれ糸、一）

色、鼻附、重縁眼、後眦、黒痣、赤縞のがす雙子の袷、帶股引、雪駄、鳥打帽子、小包、――凡そ是等は苟も普通の經驗を有するものは文字を見て即下に任意の寫象を生起すべし。而かも是等のすべてを一身に結合せる主人公の容貌を、一個の觀念として想像せむと欲せば、多少の時間と勞力とを費して、一々是等もろ〳〵の物象屬性を適當の

方法何ぞ一に單純なる。

(三)予は言へり、詩歌は繪畫彫刻の如く視官に緣りて俱存的に感得せらるゝものに非ず、繼起的(時間的)に了解せらるゝもの也、故に觀念の活動もしくは進行の法則に適合するを要すと。然るに宙外は是を駁して曰く、『觀念には空間的の性質あり、花と云ふ文字を見る時は、吾人是に應じて空間中の物躰を心中に寫象す、殊に詩歌に用ふる文字には一時に複雜なる觀念を惹起するに足るもの多し、故に觀念の活動は空間的の性質を帶ぶ、繼起的にのみ了解せらると言ふは誤り也』と。宙外の聰明にして尙ほ是の無意義の說を爲すか。觀念に空間的物躰を寫象するの性質ありと云ふが如き事の自明なるは、予が嘗て言へるが如し。吾人が人といふ觀念を意識するは、それが視覺によりて俱存的に寫象せらるゝ場合か、又は是寫象の記憶が再生せらるゝ場合也。然れども詩人が某時某處に於ける某の人の面貌を敘述する場合にありて、讀者が同一の時處に於て同一の人を見たる事無き限りは、如何にして是人の眉目と鼻の狀態を俱存的に讀者に傳へ得べき。讀者は必ずや各部の特質を逐條結合せざるべからず、即ち是人物の觀念は時間的に構成せらるゝに非

觀念活動の法則に適へるもの、即ち詩材たりとは言はざる也。人に非ざる以上は素より學者たるを得ず、然れどもあらゆる人は必ずしも學者に非ざる也。宙外は是簡單なる論理の形式を辨知せず、重ねて予に問ふて曰く、『心念離合の法則を究むるに過ぎざる普通の心理學の立脚地より、果して詩美と非詩美とを分つに足る完全の條規は得らるべきか』と。予は是の如き疑問は聰明なる宙外の今回は必ず『誤寫』として撤回すべきものなるを疑はず。

（二）予は言へり、畫材が其所緣たる畫幀、色彩の性質によりて規定せらるゝ如く、詩歌も其所緣たる觀念によりて規定せらるべしと。宙外は是れを難じて曰く、必然の制約なり、人力の不可能なる事は是を戒むるの要無き也と。予は是批評を見て宙外が全く予の意を解せざりしを認むる也、予の說けるは必然の制約にあらずして當然の制約也、畫家は繪畫の空間的性質を無視して時間的活動を顯はさむと務むることあるべし、是の如くにして生ずる單一契點の破却は予が所謂其所緣の規定を遵奉せざるの弊也。是の如き當然の制約を守ると守らざるとは一に藝術家の用意如何に依る。宙外是を辨せず、『不可能の事は戒むるの要無し』となす、思索の

ほ吾人が沙翁、シルレル、ゲーテを愛讀するが如くなるべき也。是際吾人が杓子定規を以て事とするは、白日天に中して尚ほ燭火を乘るの痴に等しからむ。予は茲に我聰明なる批評家宙外の言に隨ひ、謹み畏みて、自家藝術の本領を意識せざる味者として是等濟々たる諸天才を諷刺したるの罪を謝し、併せて是の如き作者と、是の如き批評家と、相待て明治文壇の疑ひもなく萬々歲なるべきを祝し奉る。

下　再び宙外の惑を解く三個條

宙外が再度の批評の大半は、予が論を以て杓子定規なりとするにあり、乃ち茲に杓子定規論を草して予の立脚地を明にせり。文辭やゝ散漫に失すと雖も、聰明なる宙外は須らく予が老婆心を諒とすべき也。而して宙外の言によれば、自餘の問題は殆ど論ずるの要無しとなり、予も亦先掲の二回の說明にて略々其意を盡したりと信ずるを以て、是非を讀者の判斷に任せて、茲に贅すること無かるべし。而かも尚ほ數言以て宙外の惑を解くべきものあり。

(一)予は言へり、觀念活動の法則に適はざるものは詩材たるに適せずと、然れども、

に其言の如し、唯是の如き破却は、天才に於て初めて利あるを得べし。若し讀者の中、眞に『ラファエル、沙翁に利あるもの、安ぞ吾に不利なるの理あらむや』と言ひ得るものあらば、是れシルレル、コレジオ以上の天才也。シルレル、コレジオを束縛したる法則を以て律し能はざるや勿論也。

而して是の如き法則を以て律し能はざるシルレル、コレッジオ以上の天才が、今日の我文壇に濟々たるの事實は、予初めて宙外によりて知ることを得たり。嗚呼果して然る乎、予は讀者と共に一太白を擧げて明治奎運の萬歳を祝し、あらゆる讃美の文字を列ねて中外古今に夸耀する所無かるべからず。予が先に本邦文壇に與へたる苦言の如きは、是等シルレル、コレッジオ以上の濟々たる天才に對して實に萬死の罪を犯したるものと謂はざるべからず。嗚呼果して然る乎、然らば則ち今の文壇を寂寞なりと言ふは、全く世を知らざるものゝ言たる也。文壇の諸子を外にして、あらゆる世人は全く藝術を鑑賞するの明なきもの也。紅葉先生、柳浪先生、鏡花、天外、風葉の諸先生の大名は、其『金色夜叉』、其『紫被布』、其『三尺角』、『眦まくら』、『戀慕ながし』と共に永く後世に傳はり、百年後の歐洲文壇は、是等の傑作の翻譯を珍重すると、猶

術界に寄贈したる事は、予の寧ろ滿足に思ふ所也。敢て敎を宙外に請はむ、願くは子の所謂枸子定規ならざる、即ち天才の作品をも併せて說明し、包容して、尙ほ餘りある子の所謂原則なるもの、何物なるかを聞くを得む乎。

予は天才の祕密を許して法則の埒外に遊ばしめたり。然れども予をして一歩を進めて揣摩する所あらしめむ乎。予は潛に想ふ、若しother things equal ならむ乎、美學の原則を遵奉することは、それを蔑視し、若しくは破却することよりも恐らくは利益あるべし。是事は庸者にありても、天才にありても等しかるべき也。ラファエルの『示現』は慥に單一契點の法則を破却せり、若しラファエルにして初より是法則を破却するとなく、而して同時に先に破却せし事によりて獲得せる同一の利益を、他の方法によりて回復することを得たらむには、予は是の如くにして成れる作品が前者よりも劣るべき理由あるを見ざる也。唯曩古の天才ラファエルが、茲に出でざりしを見れば、彼は必ずや法則破却に伴へる利益が、法則遵奉に伴へる利益より多大なるを見たりしならむ。是の如く言はゞ人或は難ぜむ、利害秤量の上にて何時にても破却を利とすべき法則は、豈是れ法則と稱すべきものならむやと。良し、洵

よりて規定せられたる當然の理法也。而かも天才ある畫家にありては、二重の契點必ずして過失とならず、是れ猶ほ沙翁の史劇が所謂劇詩の法則を破却して、尙ほ且つ古今の傑作たるを失はざるが如き也。予は是の如きものを目して天才に對する除外例と云ふ、是れ尋常規矩の蔑視が天才の作品にありて却て利ありとの謂に非ず、又其作品に有害ならずとの謂に非ず、天才の作品には是尋常規矩以外に、是規矩の破却より被れる不利益を掩沒して尙ほ餘りある長所あるを謂ふのみ。何物が是の如き長所なる、是れ予が天才の神祕として暫く說明の埒外に置かむと欲する所也。我が批評家なる宙外は、苟も天才の作品を說明する能はざるあらゆる法規原則を目して杓子定規となせり。然れども、良しや沙翁を律し能はざるも、良しやラファエルを縛し能はざるも、キョルチルをも、シルレルをも、アンドレア・デル・サルトーをも、マサチヨをも、コレッジオをも、說明し、批評し得る『杓子定規』は、あはれ甚だ貴むべき『杓子定規』には非ざる乎。予は素より今の美學を以て圓滿なりと思惟するものにあらず、有體に言へば、美學てふ一箇の科學は、今日厘に其基礎を置きたるに過ぎざるを見る也。かゝる幼稚なる美學にして尙ほ能く是の如き『杓子定規』を藝

蘇生せる同一の小兒は二回まで描かれたり、即ち一は死體にして、他は其蘇生して踴躍せる狀態なり。死生の兩契點を示すが如きは、空間的藝術の爲し能はざる所、畢竟題案の撰擇其當を失せるより起りたる過失なり。所謂ロムバルド派の宗師として、繪畫史にラファエルと並び立てるコレッジオも亦是れと同種類の缺點を免れざりき。即ちアポロとマルシャスの爭鬪を現はせる一畫の如きは少くとも三個の契點を有せり。兩者の格鬪、マルシャスに對するミチルヴの難詰、及びマルシャスの刑罰是れ也（ショルダン氏以太利繪畫史卷二、二一一）。批評家ダイエル氏の如きは、ラファエル氏にも是過失ありきとなし、ヴチカノに於けるペテロの解放の壁畫を以て其の例となせり（摸倣藝術二〇頁）。文藝復興史を以て名高きブルクハルト氏の如きは、予が先に除外例として擧げたる『示現』をすら難じて曰く『馬太傳に於て、山上示現以下は鬼に憑かれたる小兒の譚也。ラファエルは何の見る所ありて是二個の契點を結合せむと企てしか』と（ブルクハルト、『チツエローチ』九一九頁）。

夫れ『契點は宜しく單一なるべし』との原則の繪畫に於けるは、猶ほ『空間的物象の敘述は當に節約せらるべし』との原則の詩歌に於けるが如き也。兩者共に其所緣に

予は先に多くの美術史家及び鑑賞家に隨ひ、ラファエルの『示現』を以て二重契點の除外例となせり。予は茲に、一の場合に於てラファエルを逸したる契點單一の原則(宙外の所調杓子定規)が、他の場合に於て如何なる人々を收容し得るかを見む。史家トルキーン氏によれば、希臘人は一個の bass-relief に於て二個以上の契點を現はしゝこと珍らしからざる也、例へばカノーサにて見出だされたる壺には、三個の契點を現はせり。即ちメロペが其魔冠を携へて其室に走るの圖、室内に於て死體となりて床上に横はる圖、及び地獄に下る圖、是三者は一面の畫中に雜然として横はること、宛も我邦の繪卷物の如き也。以太利の畫家も屢々是過失を犯せり、例せばマサチオの手に成れりと謂はるゝブランカッチ堂の貢錢の壁畫も、亦三個の契點を有せり。前面には基督と使徒等との談話の狀を示し、同じ畫面の左方には魚の一條あり、又同じ畫面の右方には貢錢を拂ふ所あり。同じくブランカッチ堂の壁畫にして、ペテロが子ロ帝の前に彈劾せらるゝ圖も、亦同一の誤謬に陷れり(ダイエル挨徴技術、一八一頁)。有名なるフヰレンツェの畫家、アンドレア・デル・サルトーも亦是過失を犯せり。即ち聖フヰリップの死に關はれるアヌンチアタの壁畫也。是壁畫にありて、是聖者の柩に觸れて

得るものと、日を同うして論ずべきに非る也。這般の理必ずしも深く述べず、予は藝術界日常の事例によりて優に宙外が急遽の推論に反省を促し得べきを信ず。

試に見よ、劇詩に形式なるものあり、是れ今日の詩學、もしくは美學が認めて劇詩の原則となすもの也。然れども沙翁の劇詩中には、殊に其史劇には、明に是形式を破却せるもの多し、是れ何人も知る所にあらずや。予は往年坪内氏の牧の方を評するに當り、そが史劇の形式に於て缺くる所あるを指摘して、氏の教を乞ひたりき。然るに氏は、予の批難に答へて曰く、『沙翁の史劇を見よ、五段劇もあるに非ずや、然らば則ち牧の方の三段劇何かあらむ。美學上に所謂劇詩の法則は、普通の劇詩に於て是に遵ふに利あり、然れども史劇は必ずしも然らざらむ。沙翁の史劇は多くの點に於て劇詩の法則を無視せるは如何』と。實に沙翁を律する能はざる法則を以て、逍遙を拘束せむとせしは、或は予の誤なりしならむ。然れども、予は今に於ても沙翁を律する能はざるの故を以て、所謂劇詩の形式則を杓子定規なりとは思惟する能はざる也。何となれば沙翁以外の多くの劇詩家は（シルレルをも併せて）實に是圈套裏に收容し得べければなり。

あらずや。恐らくはワチカノ堂上、是圖に對立せば、一氣神の如きものありて、情は粉黛の外に逸し去らむ。先の二重契點の過失も、是幽妙の感興に埋沒せられて、吾人の注意を惹起するの遑無からむ乎。想ふにラファエルが『示現』は是の如くにして『其所縁の束縛』を擺脫して、尋常規矩の外に超然たるならむ。

予は言へり、斯る天才の作品には尋常の原則を以て律すべからざるものありと。然るに予が批評家なる宙外は曰く、美學上の原則は天才の作品を容れて餘りあるべし、然らざるものは原則にあらずして杓子定規のみと。言や良に好し、唯予は飜て宙外に問はむ、製作の規範として、あらゆる天才の作品を容れて餘りある子が所謂美學の原則たり得るもの、世果して是れある乎。美學は言ふまでもなく所謂準標科學の一種也、もろもろの説明科學に於けると同一の意義に於ては、美學は一も原則を有せずと謂はむも不可無し。説明科學に於ける原則は、自然現家の必然の理法を示めせるもの、素より普通ならざるを得ず。然れども標準科學に於ける所謂原則は當然の理法なり、而て當然の理法なるものは本と吾人が評價（アキシオロジー）見に本づく、説明科學に於けるが如く、若干事例の檢證を經由したる後、直に普通の演譯を許し

曾に失敗を言はざるのみならず、却て多數の畫家が打勝ち得ざりし困難にして、且藝術批評家が許し難き形式上の過失とする二重契點をば爾かく完全に結合し得たりし技倆を歎賞して已まざる也。而して如何にして爾かく結合し得たりしやは實に天才の祕密として殘れる也。今縮影によりて是を想像するだに、吾人は一種の深妙なる感情に打たれて、更に形式の破綻に心附くの餘地なきを覺ゆ。實に是圖は天上の光明と地下の暗黑との最も著しき對比なり。『其おもて日の如く輝き、其衣白く光』れる基督は、モーゼとエリヤを右左にし、双手を擴げて天上の永遠なる光明と司配とを顯はせり。ペテロとヤコブとヨハヲとは、其無邊の祝福を仰ぎて天國の示現に隨喜せり。然るに顧みて其下を見れば、鬼に憑かれて病に狂へる小兒あり、それを懷きて救を歎願するの兩親あり。而してあらゆる信仰と經典の知識とを以てして是狂病兒を如何ともする無きの弟子あり。光景暗澹として人寰の悲慘歷々として見るべし。是を天上の光明景雲の燦爛たるに比す、何等痛切の對比ぞや。而して弟子の或者は、是煩悶の間に立ちて遙に基督の示現を指し、其境に向て慰藉の先を示せり。觀來れば、一幅の畫圖、この人生の眞相を描破せるの慨

の一例として、ラファエルが『示現』を擧げたりき。こは何人も知れる如く、馬太傳十七章中の二個の事實を結合せるもの也、即ち圖の上半部は、基督が山上の空中にて二聖を左右にして相語り、弟子等の下に仰ぎ拜する狀態を描けり。是れ聖書に、『六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ、その兄弟ヨハネを伴ひ、人を避けて高山に登り給ひしが、彼等の前にて其容貌かはり、其面日の如く輝き、其衣は白く光れり。モーゼとエリヤ現れてイエスと共に語りぬ』とあるに稱へるなり。其下半部には、是れと全く別種の事實を現はせり、多くの人が、躍り狂へる一個の少年を捉へて、其處置に惑へるの狀、即ち是れ聖書に謂へる、基督の弟子等が癲癇に苦める少年より其鬼を逐ひ出す能はざるの有樣なり。前者は基督が其光明躰を示現して二聖と語る所、後者は弟子等が一少年の鬼を逐ひ出す能はずして煩悶するところ、畢竟別種の事實にして、其時、其處、亦同じからず、而かもラファエルは契點を異にせるこの二個の事實をば一幅の畫中に結合せり。是れ形式の上より見れば、明がに二重契點の過失を犯せしもの、即ち古今の畫家が幾度となく失敗を重ねし大幣竇に陷りし者と謂ふべし。然れども怪しきかな、藝術史家、及び鑑賞家の多くは、ラファエルが是畫に就いて

せる所也。然れども吾人は『天才ある藝術家が、其所縁の束縛を披拂して向上の一路を開き、尋常規矩の外に超然たるものある』を許し、如上の原則は、凡庸藝術家を訓ふべき尋常一様の標範たるに過ぎざることを說きぬ。宙外は是點に於て悉く吾人の意を了せり、而して轉じて『是の如き除外例を容るるもの、天才を律し得ざるものは、詩歌の原則と稱するを得じ、爾か稱するは僭稱なり。高山氏の立言は原則に非ずして杓子定規のみ』と一唱し去りぬ。

有體に言へば、予は是一唱に避易せり。宙外にして既に予の言へる所を了せむ乎、問題は論旨以外に涉りて、唯二あらむのみ。曰く、是の如き場合に原則を稱するは妥當ならざる乎。曰く今の本邦の詩人小說家は是の如き原則に訓へらるゝを要せざる乎、是れ也。

予は名辭の問題に關して多く爭ふを好まざる也、唯暫く予をして美學上の法則と天才との關係に就いて言ふ所あらしめよ。予の原則が偏執不通の『杓子定規』ならずやとの宙外の疑惑も、おのづから釋然たらむ也。

予は先に、天才ある藝術家が其所縁の束縛を披拂して尋常規矩の表に超然たる

再び宙外に答ふ

上　美學の原則と天才（杓子定規論）

吾人が詩歌の對象論に向て再度の批評をものされし宙外の厚意は、予の深く謝する所也。是の十三頁に餘れる再度の批評を讀みて、予は吾論旨の未だ全く領悟せられざるを想ひ、轉た文情相盡さずして、論壇の會通甚だ難きを悲めり。さはれ宙外が私心を避けて公理を索むるの精神は、吾人の喜び了する所、唯其の說の甚だ首肯し難きものあるを恨みとするのみ。いでや簡短に再度の辯明を試みむ乎、願くは宙外心を虛うして吾人の言ふ所に聽け。

『藝術の對象は其所緣によりて規定せらる、詩歌の所緣は觀念なり、故に詩歌の對象は觀念活動の法則に最も好く適合するものならざるべからず。是の如き對象は、主觀的にしては感情思想及び意志の活動、客觀的にしては物體の運動、主觀及び客觀の兩面に涉りては人物の動作也。隨うて觀念、運動、及び動作ならざる他の物象は、詩歌の對象たるに適せず』。是れ吾人が所緣の規定より生ずる詩歌の原則と

るのみ。是れやがて空間的の物象を避けて時間的の對象を求めたるもの、能く詩歌本來の長所を會得せるものと謂ふべき也。

是の如く、予はバルンス、シェレー二氏に對して毫も駁詰の言を爲さゞるのみならず、却て熱心なる賞讃の意を述べしなり。然るに宙外は、是を正反對の意に解せり。是れ蓋し予が文字の拙劣より生ずる誤讀に過ぎざるべし。予は唯予が論の他の部分が、幸にして是の如く甚しき誤讀を免れたらむことを祈る也。

『詩歌の所縁と其對象』に關する世評に對し辯解すること左の如し。予は有體に是等の評者に告げん、諸氏の高評は予の誠に感謝する所なりと雖も、未だ予の說を搖かすに力無し。宙外の如きは、氣力甚だ勵めりと雖も更に一段の靜思を要す。最後に、是說は予の創見にあらず、レッシング氏以來、ブッシェル、キルヒマン、ダイエル、ハルトマン等、主なる美學者の意見も、予の說と大體に於て相異なるものにあらず、予は唯其正當なる結果を擴充したるに過ぎざるのみ。或は先人の說を私する誚あらむを恐れ茲に一言し置くもの也。

（三十二年三月）

數行は、却て予の說を證明するものに非ずや、如何。

以上は予が宙外に答ふる所なり。予が擧げたる四個の疑問は全然誤謬もしくは誤解より出でたること、先に明示せるが如し。聰明なる宙外は必や顧みて自ら悟る所あるべき也。理論以外予に對する子が攻撃の文字は、鋒鋩陸離として當るべからず。『高山文學士は明に古人を誣ゐて自說を飾らむ爲めの犧牲に供したる迹歷然たり』と放言せしが如きは、是種の言論の酬酢に際して禮讓を保てりと謂ふを得ずと雖も、予は子が熱心の然らしむる所として、寬恕すべき也。終に一言を要するあり、宙外の言に曰く、『高山氏はバルンス、シェレーをも緬密なる狀景敘物の筆あるを以て詩歌の本領を知らざるものと云へり』と。然れども是れ事實に正反對なり。予はバイロン卿の一節を引きて『是れ即ち形躰を變じて觀念となし、保存を移して繼起となすもの也』と述べて、次に左の如く示へり。

吾れはバルンス、シェレー二氏の作中、亦常に是を見る。殊にシェレー氏が『アラスタ』の中に與へたる幻影中の美人の如きは、形容の文字滔々二十餘行、又一字の面貌を直寫せるものなく、唯其音聲運動呼吸、もしくは心臟の鼓動を述べた

亦強ちに排すべきにあらず。されば予は預め予の立言を曲解する者あらむ事を恐れ、『言ふまでもなく詩歌の種類、題案、及契點の都合によりては是原則直に箝當すべからじ、而も以て大躰の憑據となすに妨なかるべし』と述べたりき。是れ決して予が遁辭にあらず、是の如き原則を論ずるものにとりて極めて必要なる註脚なりし也。宙外氏は公平なる讀者の容易に首肯すべき、斯る見易き事理をだも辨別せず、一意予の原則を以て萬境を說明するに足るものと假定せしは、予にとりて甚迷惑なる誤解なり。予は源氏物語中より予の記憶せる二三の個所を擧證し、『予の知れる限りにては、紫式部は一回だも後世作者のなせる如く、具さに眉目口鼻の美を述べたる事無かりき』と述べて、源氏及夕顏の形容を引き、且空蟬、紫、明石等の艷面美貌亦直接に叙述せられたるを見ずと云へりしは、或は言ひ過ぎたるなるべし。然れども浩瀚なる五十餘帖中二三の是概說に反せる所あるも何かあらむ。且夫れ問題は紫女等が是の如き形容文學を爲しゝや否やにあらずして、何人の筆にまれ、是の如き形容文字が果して完全なる詩美を現せしや否やにあり。予は是疑問に對して『否』と答ふるを躊躇せざる也。宙外が沙翁の『エニスの商人』中より引きし十

是活動の法則に從ふべきこと、又何の疑かある。聰明なる宙外が這般の單純なる事理を洞察する能はざりしは、予の意外とする所也。

第四の疑問は、予を以て見れば全く無意義の疑問也。『觀念の法則に適はざる』と云ふ事は『觀念となる能はざる』と同義にあらず。吾人は如何に精緻なる形躰の記述も、其煩勞をだに忍ばゞ緣て以て一個の觀念を構成するを得べし。但是の如きは、少くとも美學より見て、適好なる構成法に非ざるを謂ふのみ。予は是の如き無意義、もしくは言語上の疑問をさへ呈出して憚らざりし宙外が、予が論に對する批評を草するに當りて、如何ばかり熾盛なる反抗心を有せしかを想はずんばあらず。

子は更に予の擧げたる事例に就て予の提案を否定せむと力めたり。然れども予は子の文中に於て予の說に對する偏曲なる解釋の外、何物をも認むる能はざるを恨みとす。予は言へり、單に其の美はしきを表はさむが爲めに、直接に眉目の形容を言ふは天才の爲さゞる所なりと。然れども予は凡ての場合に於て眉目口鼻を敘述するを非なりと言ひし事なし。或は其容貌形躰が全篇に關して特殊の意義を有するか、又は間接に是を敘述するの遑なき乎、是の如き場合には直接の記述

と、洵に宙外の言の如し。予は今の我邦の文學者中には是消極的條件をすら辨へざる者流の多きを見て、先づ是大躰の標準を示せるのみ。是消極的條件以外に於ける積極的條件を述ぶるは、予が論の旨とせし所にあらざれば、茲に言はず。

第三の疑問に於て、予は宙外の根本的誤謬を認む。若し觀念に空間的物躰を寫すの性質徴りせば、吾人に視覺なるもの存するを得ず、是れ自明の事のみ。又具象美の顯現を尚ふ美意識が、多くの場合に於て是空間的物躰の寫象を外にして成立し難きこと、誰か是を疑ふべき。然れども詩歌の場合に就いて是を見るに、已に觀念として構成せられたる結果こそ空間的なれ、それが構成せらるゝ徑行は全然時間的なり。是れ詩歌が繪畫彫刻等と所緣の範圍を異にするによりて生ずる最も顯著なる差別の一なりとす。予が俱存的物象を詩材たるに適せずとせるも、畢竟是觀念構成の徑行に於て幾多の障害あるを以てなり。是れ予が直道氏に答へたる同一の旨趣なるを以て再び贅せず。要するに予は觀念其物に空間的物躰を寫象するの性質無しと謂ふが如き沒分曉の說を爲しゝこと無し、唯觀念の活動は全然時間的なるを言ひしのみ。凡そ觀念の活動によりて司配せらるゝ詩歌の對象が、

精しく云へば、觀念活動の法則てふ一種の形式に適へる限りに於て、凡てのものは恰好の詩材となり、もしくは詩美を現じ得るの義に解すべき也。例へば形躰の美は、其俱存的狀態のまゝにては詩材たるに適せずと雖も、そが或方法によりて觀念法則に適合するを得ば、其時初めて詩美を現じ得べきなり。予を以て見れば、是の如きは自明の理なり。例へば繪畫の場合を一考せよ、繪畫の所緣は畫幀色彩等なり、故に其材料とならむもの、もしくは畫美を現せむものは、必ずや其第一の制約として是が所緣たる畫幀色彩の性質に適合せざるべからず。故に繪畫の對象として最も恰好なるものは、視得べき物象なり。もし無形の感情思想等を現さむと欲せば、必ずや先づ視得べき物象に緣らざるを得ず、換言すれば、繪畫の所緣たる畫幀色彩の許す限りに於て初めて畫中のものと爲り得べし。是意味に於ては、詩材が其所緣たる觀念によりて制約せらるゝが如く、畫材も亦其所緣たる畫幀色彩の性質によりて規定せらるゝ也。宙外の聰明を以てして何とて是自明の理を辨ぜざるや。予の解する能はざる所也。

第二の疑問に關しては、予は詩美と非詩美とを分つ消極的條件のみを說きしこ

也。）

（三）觀念活動の法則は單に時間的なるが、學理上又實驗上、空間的の一側あるにあらずや。且又、實際美の意識は此の一面を缺きては成立たず、氏は之を奈何にか釋かんとする。（氏の所謂觀念活動の法則なるものは、單に時間的、繼續的活動と言ふに止まれるを疑へる也。）

（四）觀念と成らざる對象は吾人の心に上り得ず、故に觀念の法則に從はざる、若しくは此の法則に適はざる對象と云ふべきもの存するの筈なし。然るに氏は之を認め、之れを詩美詩材の範圍外に驅逐する爲に、此の論を立てたり。是れ疑はざるべからず。（觀念活動の法則に尤も適するを詩材に取り、適せざるを取るべからずと云へるを疑へる也。）

第一の疑問に關しては、予は子の所謂『普通の心理學の法則』の何物なるかを審にせずと雖も、觀念活動の法則に適すると否とによりて、詩材を撰擇すべしとは、予が既に論ぜる所なり。予は敢て詩材制限論を以て詩美の範圍規定論なりと云へる子の言を否定せず。但し詩材と云ひ、詩美と云ふ者、形式的の意義に解するを要す。

後藤宙外

なり。予は新小說(及大阪朝日新聞)に十數頁の長論文を掲げ、專ら攻撃的態度を取て予の論旨を否定せむとせり。予は宙外が自信ある青年小說家の一人として今の文壇の爲に抗議の筆を皷せるを壯とすると共に、氏の感情の予の論を正解するには、餘りに激揚せるを惜まざるを得ず。子は予の所論に對して左の四個の疑問を發せり。

(一)心的現象の研究に限らるゝ普通の心理學の法則に據りて、果して詩美と非詩美の甄別を完全になす事を得るか。(高山文學士が普通の心理に云ふ觀念活動の法則に依りて、詩美と非詩美を斷ずるの論據を疑へる也。)

(二)觀念活動の法則は、縱し詩美と非詩美を分つの消極的條件たり得るとするとも、積極的條件を此の以外に求めざるべからず。氏は此の缺乏を奈何に說明せんとはする。(氏が原則とせる『觀念活動の法則』に適する物の內に、詩美とすべからざる、又は詩材とならざる對象の多々なるより生じたる疑ひ

く觀念の時間的活動の法則に制約せられざるを得ず。是差別を明に了知せば、直道氏の疑惑も大方は氷解せむ。宙外の如きも全く是區別を看過し、詩歌にありても繪畫にありても觀念構成の徑行相等しとなせり。故に直道氏と同一の謬見を抱き却て予の說を『信ずるに足らず』と斷言せられしは、惜みても餘りあり。

然れども予は直道氏に向て一個の有益なる注意を與へられたるを謝せざるべからず。即ち氏は予が今の我邦の文學者は繪畫的明晰を以て詩文の極致となすと云へるに對して曰く、『否々たま〳〵斯の如く見ゆるものは我が邦文學者の技能一般に、未だ人を根として事を作成するよりも、事を根として人物を描くの術偏長せるが爲なり。主觀より人を畫かずして、却て、客觀よりうつさんとす、勢ひ周圍の物象をからざるべからず。是れやがて、やゝ裏面に繪畫的景致の多をあらはし來りたるなり』と。是れ予が立論の際想着し及ばざりし所。是れ、或は然らむ。詩歌の對象論に直接の關係なしと雖も、特に記して氏の好意を謝す。

予の所論に對して最も精細なる批評を加へたるは、

直道氏

は予の論斷を輕卒なりと云へり。曰く『詩歌の所緣が觀念なるはわれ、亦首肯す詩歌の所緣觀念にあらば、空間的物體の描寫亦おのづから簡となるべし、是れ亦われの首肯する所。然れども詩歌の領分は必ずしも時間的の柵內に限らず、色を通ずる可也、形を通ずる可也。彼れは本領を時間的に構へて、而かも空柵的の城々をも領しつゝあるものならずや』と。氏は既に詩歌の所緣の觀念なるを認めて、而して猶其領分は時間的に限らずと云へるは、想ふに觀念にも空間的物體を寫象するの性質ありとの意なるべし。吾人が花を見、石を見る時、空間中の物として是を心中に寫象す、是意味に於て觀念に空間的性質ありと云ふは是れ自明の事を語る也而かも詩歌は繪畫彫刻の如く、視官によりて俱存的に感得せらるゝものにあらずして、繼起的に了解せらるゝもの也。是に於てか觀念の活動もしくは進行の法則に適合するを要する也。既に構成せられたる觀念は空間的性質を帶ぶること勿論なり、されど詩歌によりて繼起的には、た時間的に構成せむとする場合には、全

秋山角彌氏（讀賣新聞）

の謙讓なる質疑に關しては、予は顧みて予が文字の餘りに拙劣なりしを恥ぢざるを得ず。然れども『常識を有するものゝ了解し得るやう卑近なる文體にて再び示教』せよとの求めに對しては、遺憾ながら謝絶せざるを得ず。何となれば予が論は常識無きものゝ爲に書かれたるものに非ざれば也。氏が數日に亘りて論ぜられたるは、盡く予が擧げたる本例の適否に關す。予は予が抽象說を註解せむが爲に擧げたる事例が却て氏の惑を深からしめたるを悲む。然れども一言の氏に告ぐべきあり、氏は枕草紙、落窪物語、住吉物語等に顏面の形容文字あるを述べて、予が說を否定せむとせり。然れども予は古の凡ての文學者は形物の敘述を避けたりと云ひしこと無し、唯今日大文學として推重せらるる著作の中に、是事少きは、即ち天才の契合なりと云ひしのみ。氏は予が說の根蒂を想はずして、徒に引證の末に拘泥せしにあらずや。同じく讀賣新聞に予の說を評せられたる

予は這般の事理を以て新說なりと思惟せしにあらず、唯聊か本邦文壇の時弊に感ずる所ありて敢て是常套の言を爲しゝのみ。然るに是論表れてより、以來、新聞に雜誌に、批難の說を公にせられたる人少からず、是れ予が潛に見て意外とする所也。然れども苟も好意を以て予に辯明を求めらるゝ論者に對し、默して已まむは禮にあらず、卽ち左に數言を陳ぶ。若し夫れ論旨の詳細に到りては、前論已に是を盡せりと信ずるを以て必しも及ばず。

予は先づ予が論の

萬朝報記者

が嘲罵の筆にかゝれるを悲まざるを得ず。記者は予が論を以て修辭上の一問題なりとせるは、藝術の所緣が其對象を規定するに於て如何ばかりの力あるを想はざるの言なるのみ。さらば記者はレッシング氏の『ラオコーン』には、美學上の一大問題籠らずと言ふか。斯かる記者より抽象理想主義の是非を聞かむは、予の甚だ迷惑とする所なり。

難者に答ふ

《詩歌の所緣と其對象に關して》

予は去月五日の本誌に『詩歌と人體美』(全集一卷九三以下參照)と題して詩歌の所緣と其對象との關係を論じたり。其要旨を擧ぐれば左の如し。

一。藝術の對象は其所緣によりて規定せらるゝ事。

二。詩歌の所緣は觀念なるを以て、詩歌の對象として最も適當なるものは觀念活動の法則に最も好く適合するものなる事。

三。是の如き對象は主觀的にしては感情思想及び意志の活動、客觀的にしては物體の運動、主觀及び客觀の兩面に涉りては人物の動作なる事。

四。隨て觀念運動及び動作ならざる他の物象は、詩歌の對象としては不利益なる事。

五。東西古來の大文學者は多く天才の直觀によりて是眞理に點會せる事。

六。我邦當今の文學者は全く是眞理を會得せざる事。

求めず、靜に古人を友として吟哦に耽る。是を近時の英文學者が、リードルの教師を以て自ら安ずるに比して、眞に敬服するに足るものあり。吾人は彼が自己の使命を自覺して、ます〳〵奮勵せむことを希はざるべからず。知らず、彼は吾人の言に首肯するや否や。

(三十二年六月)

晩翠の他の特性として最も著しきは、そが冥想的傾向に富めるの一事也。『天地有情』收むる所、如何なる短篇と雖も、多少の冥想（レフレクション）を含まざるもの無し。是點に於ては、彼は甚だシルレルに近きもの也。冥想的なるが故に隨て思索的也、隨て即興直感の抒情詩は、彼に於て絕て見ざる所也。彼れの詩は飽迄意識的なり、自覺的也、不用意の間に天眞を流露して、自然の妙境に詣るが如きは、彼に於て望む能はざる也。彼れの詩の多くは、抒情詩也、然れどもゲーテ、ハイネ、シェレーの即興抒情詩にあらずして、シルレル、スヰンバーンの冥想的抒情詩也。夫れ唯冥想的也、是を以て托意の高は則ち是あり、思索の幽は則ち是あり、而かも往々自然に遠かり、人情に離るゝの弊を免れず、加ふるに朦朧難解の弊に陷ることあるは甚だ惜むべきに似たり。彼は未だ嘗て敘事詩を作らず、『五丈原』の如きも、人往々目するに敘事詩を以てすと雖も、實は一種の抒情詩のみ。

然れども、『天地有情』は、晩翠にとりては例へば試毫に過ぎざるのみ。彼れ年齒尙ほ壯、才藻氣魄、共に望を後年に屬するに足る。彼は大學に入りて英文學を修め、傍ら獨、佛、伊の諸語に通じ、東西の文學略々渉獵せざる所無し、而して學を衒はず、名を

べしとする乎。即興直感を旨とする抒情詩、例へばハイネが作の如きものにありては、即ち可なるべし、晩翠の如き思索的、將た冥想的傾向を有するものにありては、寧ろ幼稚の譏を免れずとせむや。シルレルは十八世紀末の冥想的詩人なり、而かも其人生觀は是の如く簡單なるものには非ざりき。是れ『理想と人生』及び『理想』の諸篇を讀めるもの丶知る所也。吾人をして忌憚無く言はしめば、自然及び人生に對する晩翠の觀念は、尙ほ幼稚也。恐らくは彼れの哲學思想は、何等確實なる科學的研究の上に樹てられたるものに非ずして、ダンテ、ユーゴーの如き詩人の詩的想像に養はれたるものに過ぎざるならむ。是の如きは、十九世紀末の詩人が其人生觀を得たる方法としては、餘りに簡單なる方法に非ざるべき乎。見よ、テニソンの如き保守的詩人すら、尙ほ『六十年後のロックスレー堂』に於て、近世的知識を調攝するの必要を認めしに非ずや。言ふまでも無く、詩は時代に適應して初めて盛なり得べし。人文の進捗に隨て常に新しき理想を捕捉し、時代の精神に對して常に新しき解釋を與ふるに非ざれば、決して當代人心の希望と感情を滿足せしむる事能はざる也。吾人は吳々も晩翠が是點に就いて三省せむことを望む。

むや。

『自然は笑ひ、人は泣く』是のユーゴーの套語は、亦同時に晩翠の套語也。彼れの詩の根底となれる人生觀は、何れも是套語に本ける厭世の感情ならざるは無し。

天の莊嚴地の美麗、
花かんばしく星照りて、
自然のたくみ替らねど、
わづらひ世々に絶えずして、
理想の夢の消ゆるまは、
たえずも響け、とこしへに、
地籟天籟身に兼ぬる
ゆふ入相の鐘の聲。——『暮鐘』

是の種の厭世的感情は、東西古今に渉り、幾多の詩人に歌はれ、今も尙ほ大いなる慰藉を吾人に與へつゝあり。而かも潛に想ふに、二十世紀の曙光を迎へむとする現時代の詩人は、かゝる單純なる人生觀を以て、果して能く一世の人心を捕捉し得

藝術の爲に藝術ありてふ主義は、ユーゴーの取らざる所也。彼れの詩は一に人生の爲に存せり。而して彼れの所謂る人生は、理想の人生也、永遠の人生也。是理想永遠の人生に對して、進歩と、自由と、人道との福音を唱ふるもの、即ち彼れの詩也。彼れの詩は是故に哲學的なると共に宗教的也。飜て『天地有情』を繙いて、『萬有と詩人』『夕の思ひ』『浮世の戀』『造化妙工』『暮鐘』の諸篇を讀め、宛然としてユーゴー集中の遺韻に非ずや。晩翠の特徴實に茲にあり、其短所も茲にあり。

夫れ己れの物に非ざれば、人に與ふる能はず。詩人の性癖は、我れ是を如何ともする無き也。晩翠のユーゴーに私淑する、素より妨げず、唯而かもユーゴーの感情思想を移して、直に是を本邦の今日に擬す、可ならむ乎。曰く、人世は永遠也。曰く、理想は我目的也、進歩は我主義也。曰く、自然は笑ひ、人間は泣く。ユーゴーが當代の佛蘭西國に齎したる、是の如き福音は、歷史上より見れば、畢竟一時代の精神のみ。今や世移り、人渝り、國異れり。新らしき日本の詩人にして、尙ほ是陳套を反覆す、恐らくは歷史を無視せるの嫌あるに非ざる乎。晩翠にして苟も國民的詩人たらむとする乎、永遠、理想、進歩と云ふが如きものゝ外、豈幾多の新精神、新思想の歌ふべきもの無から

彼は格調に就いて苦心せしなるべし。如何にして七五調の單調を免れ得む乎、てふ問題は、彼れが他の新躰詩家と共に、少からざる工夫を施せし所なるべし。彼れが連りに漢詩調を用ひて、柔弱平板なる和歌調に雄健急促の發聲を與へむと試みたるは、即ち是工夫の結果に外ならざるべし。吾人は『友高樓のおばしま』と云ひ『露荒涼の城あと』と云ふが如き造語が、幾何の成功を齎しゝかを知らずと雖も、兎に角、彼れが詩形の爲に盡したる苦心と工夫とは、最も明なる事實なりとす。然れども是の如きは彼にありては形式のみ、躰裁のみ、彼の詩には別に形式以外の生命あり、躰裁以上の精神あり。彼は最も嚴肅なる覺悟を以て是生命と精神とを發表せむと試みたり。是に於て乎彼れの詩は即ち彼れの哲學也、理想也、宗教也。

晩翠はユーゴーの崇拜者として知らる、而してユーゴーは聖書、ホルギル、ダンテの愛讀者也。晩翠の詩が一種の宗教的、もしくは超絶的感情に富めるは、蓋し自然の勢ならむか。彼にありては藝術の眞面目なるは、毫も人生と異なるなし。されば彼れの詩は、遊戲の歌にあらずして祈禱の響也、即興の感觸に非ずして永遠の思索也。此點に於ては、彼れの詩はまさしくユーゴー、ダンテの流風也。

○『天地有情』を讀みて

今の時に當り、多少の興味を以て、『天地有情』の題名を讀み得るもの果して幾人ありや。詩の侮りを受くるや、極まれり。吾人晩翠の詩を讀みて、先づ其不遇を悲まざるを得ず。

『天地有情』の一卷は、まことに眇たる一小冊子也。裝釘の美の見るべきものあるに非ず、其價亦厘に廿五錢のみ。而かも吾人はそが我文學界に於ける近年稀有の好出版なるを疑はず。晩翠の詩は、藤村の作と並び稱せられて、夙に批評家の筆に上れり。我が幼稚なる詩壇に、新なる光と命とを齎したる彼れの使命が普ねく認められるゝ氣運は、漸く近き來れるが如し、是れ吾人の深く晩翠の爲に欣ぶ所也。然れども吾人の見る所を以てすれば、彼れの詩の眞價は、尙ほ未だ今の人に了解せられざる也。吾人久しく晩翠を知る。彼れが詩人としての性情に參して其詩を解すれば、世上批評家の言ふ所とおのづから別種の趣あるを見る。想ふに彼に就いて一言するは、吾人が當然の務めに非ざるべき乎。

吾人の第一に彼に就いて言ふべきことは、彼れの詩の極めて眞率なること也。

の如くにして西洋文物の刺戟に發生し來れる新美術も需要缺乏の爲に幾度か逡巡して遂に進む能はず、藝術家の世榮を望むもの、悉に俗尙を迎合して舊樣の胡盧に甘ずるの外無し。而して其弊根は新建築の興らざるに存する也。

然れども吾人の見る所を以てすれば、新建築は疑も無く漸く勃興すべし。其樣式の如きは預め知り難しと雖も、中等以上の市民の家屋としては、和洋折衷式の醇化せられたるもの起るべし。寺院は最早や建築界に勢力を有すると無かるべし、何となれば社會は大寺院を創起するの宗教的信仰を失ひたれば也。先づ來らむものは夫れ公共官府の建物と富豪貴紳の第宅乎。今日帝城の下大建築として見るべきものは日本銀行、三菱銀行、工科大學の數者に過ぎず。日本の新建築は先づ是方面より勃興せむ。若し夫れ中等以上の市民の家屋が如何の樣式を取るべき乎は啻に今後我建築家の關心すべき最大問題なるのみならず、日本の新美術の形式も亦是問題の解釋によりて規定せらるべき也。

（三十二年三月）

フヰレンツェの宮殿と羅馬の寺院と無かりせば、文藝復興期の美術は慥に其光彩の大半を沒了せむ。諸パラッツォの建築とリオナルド若くはミケランヂェロの繪畫とは離るべからざりし也。誠に歴史よりワチカノに於けるシスチナ寺院を除き去れ、ミケランヂェロの『最後の審判』以下の諸名畫は或は世界に現はれずして已みしやも知るべからず。將た又希臘の彫刻が其建築を離れて存在すべしとは何人も想像し能はざる所なるべし。本邦推古、天平の美術が盛名を史上に馳せしは、誰か佛敎寺院の影響に非ずと謂ひ得べき。所詮建築が繪畫彫塑の基礎たるは理の必然にして、事の實際は、過去既に然り、將來亦當に然るべし。

顧みて本邦今日の建築を見るに、文物の變遷、嗜好の動搖に伴ひて、其樣式尙ほ未だ一定するに到らず、是時に當りて獨り繪畫彫塑の淸新なる發達を望む、蓋し得べからざる也。洋畫の濃粧なるもの、未だ一般家屋の瀟洒なるに適せず。畫幅の狹少を恨みとするもの、時に方一丈の大幀を作れば、裝置するに處なし。塑形に巧なるものあるも、家屋の是を容るるものなく、彫塑は尙依然として置物根付に限らる。西洋式の裝飾術は、僅に少數なる富豪公共の建物に應用せらるゝに過ぎず。勢、是

新建築と美術

今日日本の建築が、一般文物と共に變遷時代に過しつゝあるは、爭ふべからざる事實なり。日本の新美術は、建築が是變遷時代を經過して一定の樣式を結成したる後に於て、初めて其全盛期を見るを得べき乎。

美術の精神は一代の人文によりて規定せらるべし、然れども建築には少くとも其形式を規定するの力あることを遺るべからず。是れ固に理に於て然るのみならず、又藝術史上の事實也。

蓋し美術は繪畫にまれ、彫型にまれ、凡て家屋中に於て賞翫せらるべきものなり。而して家屋は素と人生の必需に應じて存在せるものなること言ふ迄も無し。凡て餘剩（サープラス）は必要（エセンシアー）を害せざる限りに於て存在し得べきを原則とするを以て、美術存在の第一義は建築との調和にあり。是を以て美術は建築を司配する能はずと雖も、建築は常に美術の形式を規定す。大いなる美術にして建築と離れて存在せるもの、古より未だ曾て是あらざる也。

南洲の像の技巧に就いては實際家ならぬ吾人の多く言ふべき所無し。唯腰部以下の割合に短かきは餘りに寫實に執着したるの弊にあらざる乎。近代人物たる南洲の顔面こそは其實を寫すの要もあらめ、軀幹四肢の釣合の如きは藝術家が醇化の自由に任すべきものならずや。頭部も亦全體に比して大いなるに過ぎたり。吾人をして更に多きを望ましめば、是像をして高きこと五寸ならしめば、手と足と亦是につれて少しく長からしめよ。腰部の體勢をして今少しくアナトミーに稱はしめよ、顔面をして沈靜の心情を表はすこと更に一段ならしめよ。其手足餘りに張り過ぎたり。人物の大いなるを示さむが爲に全體の姿勢をしてイマ少しく寛和ならしめよ。或人は犬の人體に比して餘りに小なるを咎むれども、強ちに難すべきことにもあらざるべし。こはデオニソスの豹と均しく、人物の偉大を表はさむが爲に故らに獸類を小さくせりと見むかた妙なるべきか。

終りに一言を要するは、石臺の低きに過ぐることなり。像と高さに於て相等しきは、是種の立像に於て甚だ遠視を損ふ。若し臺と像の比例を金截法の大分と小分との割合にせば、一層の威嚴を加へたるべきか。

（三十二年一月）

には必ず吾人の言に首肯せらるゝあらむ。是正成の像の態度の是非は暫く措き、單に其顔面に就いて言はむに、作家は全く彫塑的藝術の本旨を誤れりと覺ぼし。其異形なる相貌は何の爲にせりや。作家の辯解を聞けば是れ京都某寺に藏せる是古忠臣の肖像と名くるものに準據せるなりと、こは甚だ笑ふべき辯解ならずや。正成の今を去ること幾百年ぞ、吾も人も一個の傳說的忠臣として彼を認むるに非ずや、何人も彼れの如何なる相貌を備へりしかを知るものなく、傳ふる所は唯彼れの理想的忠臣の美譚のみ。こはまさしく彫塑的藝術の好題案として其形式美の發揮を擅にすべき所、作家は何を苦みて古肖像を典據として故らに是理想的忠臣に相應はしからざる異形の面貌を作りける。何とて日本忠臣の龜鑑楠正成てふ傳說的性格より打算して、一個の抽象的理想美を現ぜむとは務めざりける。さるを是の如き遙遠なる歷史的はた傳說的人物に對して尙ほ其肖像を云々す、こは全く藝術家が自家の本領を意識せざるの弊なり。かへすゝも口惜しき事なる哉。

六　技巧

の材料は繪畫の如く如意ならざるを以て、其結果亦おのづから寫實の旨に副ひ難し。是に於て兩個の理想共に亡びて其製作に取るべき所無きに終る、是れ紀念像の通弊なり。幸にして高く塔上に立てらるれば、人皆體度輪廓の模稜の中に形式の美を認むるのみにして、顏面の委細を捉ふるに由なし、紀念像の通弊も人の感觸する所とならずして已みぬるもの、多くは是故也。南洲の像は是點に於ては偶然の幸を有せりと謂ふべし。そは是像にしてまことに彼が生前の風采を傳へたりとすれば、彼の面貌なるものは甚だ形式美の旨を得たるに近きものなればなり。彼れの太き眉と、廣き額と、巨眼と、豐頰と何れが西鄕南洲てふ歷史的人物の顯現ならざるべき。而して彼れの性格が單純にして記號的なると共に彼れの面貌も亦甚だ形式的に近きなり。フキデアスのジュピテルも是意味に於ては慥にさばかりの個性を現じたるべき也。

論じて茲に至れば、吾人は楠正成の銅像に就いて一言せざるを得ず。是銅像は未だ建設の運びに到らざれども、兩三年前上野公園なる美術學校の後庭にて縱覽を許され、近くは『日本美術』の第二號に其縮造木型の寫眞版を載せたれば、讀者の中

園に歸臥して志猶ほ天下を離れず、薩南の邊陲にありて千秋の意氣遺るに處無し。やがては天下の風雲を掀翻すべき彼れが滿腔の磊塊を現はし得るもの、亦是の一野人の姿態にあらずや。見來れば南洲が一生の史傳を語りて、其性格を躍如たらしむべきもの、實に是契點にありと謂ふべし。

南洲の銅像を成功せしめたる一の事情は、彼れの古風なる顏面にあるとを忘るべからず。先にも述べたる如く、色彩は彫塑的藝術の缺如せる所なり。されば色彩の精微を待ちて初めて顯現し得らるべき個人的特性は、全く繪畫の專有に委ぬ去り、彫塑は主ばら類型的相貌を以て甘ぜざるべからず。是れ古今の彫塑的藝術が主として神話又は古傳說中の人物を對象とする理由の一にして、又近代の建設にかゝる偉人の紀念に秀でたる佳作乏しき所以なるべし。蓋し形式美を旨とせる藝術は、おのづから寫實の上に立てる具象美の顯現と相容れざる所あり、是れ已むを得ざるなり。されど近代人物の相貌は、已に社會に流布して人皆是を熟知するが故に、猥りにそを變更するを許さず、是に於て藝術家は先づ寫實に執着せざるを得ず、形式美の理想既に是一步に於て壞られ了りたりと謂ふべし。されど彫型

像に現はれたる南洲は、左手を腰間に横へて野太刀の柄を抑へ、右手は犬を索き、濶歩直立して其巨眼を遙かの空際に放つ。滿腔の鬱勃に風雲の氣象を示せども、尚ほ其心の底に悠然として逼らざる所あり。猶波濤洶湧の下、萬尋の深淵寂として聲なきものあるが如し。靜中動を寓するの態度は、彫塑の對像としては尤も其契點の宜しきを得たるものなるべし。レッシングはラオコーンを評して『吾等は彼れの叫びを聞かずして却て其の偉大なる精神の動かざるを感ず』と謂へりき。吾人は南洲の像に於てほゞ其感を同じうする者なり。これを他日宮城門外に建てらるべしと傳へらるゝ楠正成の像の馬術家然たるに較ぶれば、殆ど同日の談に非ずと謂ふべし。

更に西郷南洲てふ一個の偉人を表現する上より見るも、是姿態を外にして別に恰好の道あるべしとも思はれず。わづか前までは、是筒袖の代りに彼れの身躰を纏ひしものは陸軍大將の正服なりき。四衛の軍馬は是犬の代りに彼の後に從へりき。今や彼れ是の一世の榮華を捨てゝ筒袖藁草履の一野人となりぬ。彼れの高潔なる心事を語り得るものは實に是の一野人の姿態にあらずや。彼れ既に田

家の夙に說きし所なり。げに彫塑の優れたるものは、古に於ても今に於ても古代の神話傳說中に其對象を求むるもの多し。そは彫塑の特性として近世が個想を現ずるに頼りあしきにも依るべけれども、形式の美が裸躰もしくは裸躰と均しき單純なる服飾に纏はれたる人躰に最も明に表はれ易きにも依るべきなり。されば こそ近世偉人の像をものする際にも、勝れたる藝術家は成るべく煩瑣なる服飾を避け、成るべく多く人躰の美に近よらむとは務むるなれ。南洲の銅像は是點に於て先づ彫型の旨を獲たり。そが一枚の寛濶なる筒袖を纏ひ、總繩のしごきを締め、腰に飾なき薩摩風の野太刀を落し指しにし、右手に獵犬の手綱を取り、素足に藁草履を穿てるさまは、希臘の昔ならでは他に多く見難き肉躰の美を現じたり。南洲が肥滿せる胸は半ば露はれ、其手足も亦披拂せる短き衣裳の外に出で、其背、腰臗の形は衣あるが爲に却て明になれるが如し。もし是像にして陸軍大將の正服などにてあらむには、其興味の如何ばかり索然たるべきぞ。吾人はかゝる恰好なる姿態を撰びたる藝術家に是像の成功の半ばを與へむと欲する也。

されど是成功の由て來る所は契點の撰擇その宜しきを得たるに歸すべし。是

は視且つ觸れ得べき物象の全形を表はすが故に、繪畫の如く前面を以て後景を掩ひ、もしくは詩歌の如く一端を擧げて其他のすべてを讀む人の想像力に委ぬるが如き自由を有せず、さればそが對象となるもの必ずしも是二者と同じからず。凡そ是等の條件は形式美を旨とする彫塑が、原則として遵奉すべき所のものなり。

以上述べたる所は、美學の一端を窺へる人の何れも知了せらるゝ所なるべけれど、茲に南洲の銅像を評するの前提として暫く其綱領を揭げつ。

五　如上の見地より觀たる南洲の銅像

吾人の批評しつゝある南洲の銅像がほゞ如上の條件を充足せるは、今の我邦の藝術界の作品として吾人の甚だ多とする所なり。

形式美を旨とする藝術として彫塑に最もよく適へる對象は、人類の裸躰を推すべし。是に次では裸躰の形式美を掩ひ盡さゞる程の單純なる假飾を有する人體なり。中世以降、彫塑術の古の如く昌へざりしは、チュートン民族の生活が古代希臘人のそれの如く彫塑の對象たるに適せざること、亦其一主因なるべしとは、美術史

必須の制約の義なり。茲に所謂材料とは彫塑の縁て以て成立する所の物質の義にして、所謂對象とは是等の材料によりて表現せらるゝ内容の義なり。彫塑は素三方面の空間藝術として、現はし得るものは主として固躰の全形なるが故に、そが第一に守らざるべからざるは、重力に關する自然法則なり。されば重量の均衡を失へるものは彫塑の對象となるを得ず、隨うて繪畫の如く地盤を離れたる空間の物象、もしくは遠隔の後景を寫すこと能はず。次に其材料は金石木牙等の固形物に限らるゝが故に、衣髪線絲の微細なるもの凡て其對象となる能はず。是に於て人躰服飾の上に於てもおのづから一定の態度樣式ありて、繪畫に見る如き自由を有せず。又彫塑は繪畫の如き彩色を有せず專ら形式美の發揮を旨とするが故に個躰的特性の十分なる表現は殆ど望み得べからざるなり。是に於て彫塑中の人物は概ね類型を現ずるを免れず。繪畫は素空間の藝術なれども、其材料の如意なるが爲に、契點の擇擇宜しきを得、技巧亦其妙を極むれば、進で時間的意義を攝取せむこと強ち難きに非ず、されど彫塑はそが材料の性質上、沈着固定して殆ど些の時間的經過を表はし得ざるを以て、其の對象は旨として靜正の態度を取る。又彫塑

る最大人物の紀念像を見れば仝長實に二、丈、餘に過ぎず。

吾人素より大いなる紀念像の絶ちに望み難き所以を知る。されど自ら大國民と稱する國民にして、苟も其理想的人物の爲に紀念像を建てむと欲せば、少しく其國民としての品位に顧みむことを要す。且夫れかゝる盆石的庭園中の物、決して國民嚮慕の心を皷舞するに力なかるべきを想へば、紀念像設立の意義既に其の半ばを沒し了れりと謂ふべきなり。遮莫、吾人は是可憐なる一小像の前に、堂々たる日東帝國の大臣宰相星の如く羅列して、森嚴なる除幕式を執行したる狀況を顧緬すれば、宛然一場の喜劇を想ひ起さずむばあらざる也。

四　彫塑の特性

一個の彫塑的藝術として見れば、南洲の像は比較的に成功せる作品なるべし。そは彫塑の形式的條件の略々是像に於て充足せられたるを見ればなり。比較的とは、言ふまでも無く現今我邦の藝術界の進程に比較しての義なり。

吾人の所謂彫塑の形式的條件とは、材料及び對象の特性によりて規定せらるゝ

米國紐育の港頭に立てる自由の神像は、其石臺を合算すれば三十丈を超ゆ、其高く擧げたる右手の食指のみにても六尺に餘れり。以太利のミラノ府に於けるレオナルド・ダ・ヴィンチの像は全長七丈に近し。倫敦のトラファルガー廣小路に於けるネルソンの紀念像は、十六丈の高さに達し同じ町のアルベルト公の紀念像は其蓋塔を合すれば亦十七丈に垂むとす。巴里のヴンドーム塔は其頂上に立てる奈破翁一世の立像を合せて十五丈を超え、同じ町の七月塔も亦其頂を飾れる自由の神像を加へて殆んど十八丈。獨乙のフランクフルト・アム・マインに於けるグーテンベルグの紀念像は六丈に達し、愛蘭土ダブリン府に於けるネルソン像は其ドリア式の臺柱のみにて十三丈、寄附金のみにて成れる其工費は七萬五千圓に上れりと謂ふ。以太利ゼノアのコロムブスの像は七丈に達し、蘇格蘭エヂンホルグに於ける詩人スコットの紀念塔亦十餘丈を數ふ。紀念像とは少しく類を異にすれども、伯林に於けるブランデンブルグ門は高さ八丈巾十九丈、巴里の凱旋門は高さ十七丈。巾十五丈、北米晩霞丘（バンカーヒル）上の獨立紀念塔に至りては無慮二十有二丈、更に巴里のエッフェル塔は實に一百餘丈の高さに達す。顧みて我邦第一の勝地に立てられた

崇拜を値打する理想的人物と思惟せらる。而して又其像の建てられたる地は、是大帝國の首府の而かも第一等の公園地なり。かくて世界の大國民が帝國の首府の第一等の公園地に建てたる理想的大人物の影像としては、南洲の紀念像の如何に小さく、見すぼらしきよ。學者、詩人、又は藝術家の像の過大ならむは、或は相應はしからじ。されど『大』南洲の如き歴史的人物の像は、其の大いなる容量を外にして如何にして其の大いなる性格を適切に表はし得べき。

且夫れ國民の品位の上より見るも、吾人の『大人物』をさばかりの大いさに表はさむは、吾人の甚だ好まざる所なり。素より我邦人にして今日の如き生活狀態を續くる間は、その建築もしくは道路との釣合上、西洋各國に見る如き大いなる紀念像を建てむは、或は望み難き事なるべし。而かも南洲の像や、其石臺を合せて高さ僅に二丈を超ゆるに過ぎず、人躰のみの高さは一丈半にも及ばざるなり。こは餘りに小さきに過ぎざる乎。吾人今西洋の紀念像を比較せば、或は不倫の笑を免れざらむ。されど吾人は茲に將來の紀念像建築者を警しめむが爲に、數言を費すも強ちに用無きに非ざるべきか。

是感化力の大いなるは、其様式技術の美妙なるが爲めのみならず、其容量の大いなる事も、須要の一條件なり。凡そ建築もしくは紀念像にして高く且つ大なるに非ずば、其技巧如何に精巧を極めたりとて、何程の影響を觀る人の精神に及ぼし得べき。縮小せる摸造品などによりて實際目睹の感情を想像し得べしとする人あらば、そはいみじき誤なるべし。かの廣大なる寺院堂塔を仰げば、技巧の是非以外に於て何物か吾人の精神を壓抑し、もしくは興奮するあるを覺ゆるは、所詮は職として容量其物の大いなるに由るなり。されば墓碑と均しく單に紀念の爲にするのみならばいざ知らず、苟も其一面に於て社會教育の意義を有せむ程の紀念像ならば、其大いさは少なくともそが表現する人物の偉大なる精神に相應はしきものならざるべからず。吾人は南洲の銅像を觀て其の小さきに驚く也。

假りに設立者の意見に隨ひ、南洲を國民の理想として景仰するに足る程の大人物なりとせむ。上野公園に建てられたる紀念像は、斯かる大人物の代表としては餘りに矮小なるに過ぎざる乎。日本國民は自ら膨脹的國民と稱し、世界の一強國として自ら任ず。而して日本歷史に比類なき尊號を有する『大』南洲は、是大國民の

むる能はず。そは吾人は如何なる場合に於ても吾人の同胞及び後昆をして一個の叛臣を崇拜せしむるを好まざればなり。又南洲は上野公園と何等の歴史的因緣を有するものに非ず。東京附近に於て彼と多少の因緣ある土地を求めなば、夫れ唯勝海舟と江戸城明渡の談判を遂げたる品川乎。所詮吾人は國民の景仰に適はず、又其土地と何等の緣故もなき南洲の銅像を上野公園に立てたるを不倫の所爲として難ぜざるを得ざる也。

されど彼の如き大人物にして一の紀念像を有する、素より當然の事のみ。吾人をして其地を相せしめば、寧ろ薩南の城山を撰ばむか。城山は彼が墳墓の地なり。彼の像若し玆に立たば、周圍の山河と相待つて其風丰に生氣を加へむこと如何ばかりぞや。蓋し紀念像を歴史上緣故なき地に建てむは、繪畫中の人物に後景を附せざると一般ならむのみ。

三　像の大いさ

吾人は先に建築と紀念像の感化力は遙に他種の藝術に勝れるよしを述べたり。

る、亦強ちに當らずとのみ謂ふべからじ。されど吾人をして忌憚なく言はしめば、彼れの爲に其紀念像を上野公園に建つるが如きは、いさゝか不倫の譏を免るべからず。私己の情實は如何にあれ、彼の一生は叛逆を以て終りたり、天恩海よりも濶く、其舊勳を錄し給ひしと雖も、遂に史上の事實を如何にすべきぞ。大義名分を辨へず、私恩の爲に王命を犯しゝは、やがて叛逆の大罪なり。廣嗣、義時に於て天人共に戴かざるの非道が、獨り南洲に於て宥恕すべしとの理由は、吾人の遂に解する能はざる所なり。げに南洲にして其志を果したらむには、或は明治の大忠臣となりしやも知るべからず。されどこは所謂『革命を制裁するの倫理無』さが爲のみ、以て平時の則とは爲し難からむ。

吾人は南洲の紀念像を建つるの不可を言ふべき權利無し、唯そを上野公園に建つるの不倫なるを言ふのみ。上野公園は帝國第一等の大公園なり。若し是處に建てらるべき紀念像あらば、そは須らく國民の理想として景仰するに足る程の人物の影像か、然らざれば其土地と特別の歴史的關係を有する人の爲ならざるべからず。吾人は南洲を許して偉人とするも、未だ國民の景仰に適へる人物なるを認

れど藝術の外に更に高大なる目的を有する社會が、己れの名によりて作れる公共の建物、もしくは紀念像等に對して社會教育の着眼を誤るべからざる、素より論なからむ。吾人はなべての藝術に於てもかばかりの實際的傾向を須要とするものなり、而して建築及び紀念像に於て殊に是事を言ふ。そは是二者に於て一般社會に及ぼす精神感化の他種の藝術に比して遙に優勝なる者あるを信ずればなり。

げに博物館裏に古名家の作品を見ざるものも、淺草觀世音の堂塔を仰がざるは稀なるべく、正倉院、法隆寺の寶物は幾何の鑑賞者を得たりとするも、南都千年の舊伽藍を見て今昔の感に打たれしものに比すべくもあらず。フヰレンツエの市に名畫は多かれど、ジョットーの鐘樓（カムパニレ）もしくはパラッツオ・エッキオの古屋と其影響に於て誰れか優劣を爭ふべき。凡て偉大宏壯なる建築像碑は、幾百千年の間無言の中に一般社會の人心を動かせしこと、蓋し想像するに餘りあり。されば社會が偉人の紀念像を建つるはやがて一個の學校を建つるなり。彼れの傳記はやがて是學校舍教科書なり。偉人は茲に萬衆に向ひて永く其無言の教訓を垂るゝなり。

西鄉南洲は不世出の豪傑なり。一部の崇拜者が呼ぶに『大』南洲の尊號を以てす

とはするぞ。吾人南洲の銅像を觀て、先づ是慨みなき能はず。

さはれ紀念像なるもの何が爲に建てらるゝ乎。そが社會教育及び一國人文との關係果して如何。其契點にはゝのづから撰擇の法あるべく、其技巧には素より優劣の則あるべし。吾人先づ這般の通義に據りて是を南洲の銅像に照準し、隗より始むるの微意を以ていさゝか批判の筆を執らむと欲す。

二　紀念像と社會教育

芳名青史の上に鏤刻せられたるを以て足れりとせば、人は何が故に偉人の爲に更に紀念の像を建てむとはするぞ。そは言ふまでなく、欲求を觀念として內にのみ認めむは更に對象として外に眺むるの適切なるに如かざればなり。さればなべての世人にとりて、形ある一個の紀念像は時に十卷の史傳よりも多くの敎訓を與ふることあるべし。世に最も大いなる感化は景仰に若くはなし、景仰の心即ち宗敎の心なればなり。紀念像と社會敎育との關係問題の起る、遂に避くべからず。

藝術家が藝術の獨立を言はむは强ちに深く咎むべきことにもあらざるべし、さ

西郷南洲の銅像を評す

一　緒言

西郷南洲の銅像新たに東京上野公園に建てられ、舊臘十八日既に除幕式を行はる。吾人是を觀て言はむと欲する所甚だ多きを覺ゆ。

そも〳〵偉人の爲に紀念の像を建つる風習は、我邦にありては昨今の事に屬す。目下建設準備の中にある二三を省き、既に其功を竣りたるものは、僅に九段坂上に於ける大村益次郎のとこの南洲のとの二つあるに過ぎず。されば紀念像その物に就いて社會の注意を喚び起すの機會尚ほ甚だ乏しく、世人の耳目と稱する新聞紙だに、僅に一通りの紹介をものしゝのみにて藝術評論家の批判の如きは遂に聞くことを得ざりき。夫れ紀念像の建設は將來の社會に於てます〳〵其流行を見るべきもの、藝術の側より見れば、正に我國民美術の上に新たなる一品題を加へたるなり。春秋二季の展覽會に於ける陳腐なる繪畫にすら新作とあればとかうの是非を怠らざる社會は、何故に是の多望なる新美術に就いて爾かく冷やかならむ

蓋し文は識を待ち、識は學を待つ、而して學なるもの世と共に進む。畢竟論文家たらむと欲する者は、徒に自家の小才を孤負するを已めて、大に學ぶ所無かるべからず。

（以上六項、三十一年十月）

しても尙ほ其侃諤を枉ぐる能はず、是れ學者の良心也。曲學阿世とは何の謂ぞ。

今の論文家

寂寞たる哉我文壇や。乏しきは獨り小說家のみならず、詩人のみならず、批評家のみならず、論文家も亦然り、蓋し大思想家なければ也。由來文名を以て推さるるもの、所詮一日半日の長短のみ。吾人未だ曾て一唱三嘆の妙文に接せしとあらず、況むや驚心眩目の大論策をや。

蘇峰の文は平凡の思想を異に言ひ顯はすに過ぎず、淺薄咀嚼に堪えず。以て一時の俗目を喜ばし得べきも、識者には兒戲のみ。雪嶺の文は漫に奇矯を衒ひて事に益なし。時に艱深の文字を用ふる所、やゝ鬼臉を被て小兒を威嚇するの弊あり。鑑三君の文は率直にして時に詩趣あれども、千篇一律波瀾なく、變化なく、思想の單純多く他に比すべきもの無し。櫻痴の文は其辨に及ばず、而して其辨や、談話比擬の妙あれども、俗氣ありて近くべからず、一種思索の工ありと雖ども、未だ以て學者を欺くべからず。餘の紛々たるもの概ね知るべき也。

終に臨て再び前言を提起せむ。美術に對する購買力の缺乏は、社會の側に於ては、美術的嗜好の缺乏を示し、美術の側に於てはそが社會的生活の根蒂を有せざるを示す、何れの側より見るも是れ美術の危機也。吾人は吳々も本邦美術家が是點に關して熟慮せられむことを望む。

一刀兩斷の制裁

勅語の徹回演說を試みたる竹越氏の『世界の日本』は、遂に發行を禁止せられたり。是輩國躰の大義を辨ぜず、嘖々然として漫に俗流と唱和す、須らく一刀兩斷の制裁を加ふべし。

曲學阿世とは何の謂ぞ

夫の俗論者流は國躰論者を目して曲學阿世と云ふ。何ぞ知らむ今の世にありて民主を曰ひ、自由を曰ふほど世俗に歡迎せらるゝこと無きを。臭い物身知らずとは彼等の事也。唯所信の爲に俗論に詬罵せらるを顧みず、時に一世の風潮に反

吾人は必ずしも今の美術家に勸めて、強ちに社會の嗜好を逢迎せよとは謂はじ。唯美術家と雖も他の一切の人類と等しく、歳時と方處の繫縛を受けて是世に生活する以上は、或程度までは是社會の生活、思想、及び嗜好と抱合せむことを要す。苟も社會人文の根蒂に接着するに非ざれば、一切の事物は爭でか是社會と共に生命ある發達を遂ぐるを得べき。されど社會にも理想ある如く、美術にも亦理想あり。故に眞に美術に忠實ならむものは、一面社會的嗜好と抱合して其存在を擔保すると同時に、他面に於ては自家の高上なる理想に本き、飜て社會の嗜好を敎育して漸次高尙の域に進ましめざるべからず。是兩面の用意ありてこそ、美術の眞正の發達は初めて期待し得らるゝなれ。

されば吾人は敢て今の美術家に告げむ。今日の美術家の最も急務とすべき所は、國民的生活を理會するにあり。而して其生活の根蒂に接觸して美術を以て其活力の一部となすにあり。是の如くにして美術は國民的生活の一要素として、永く其存在及發達を擔保せらるべし。あらゆる改善の方法は是第一歩を成就したる後に於て初めて實行せらるべきなり。

ならば、そは必ず社會の需要する所のものならざるべからず。社會已に是を需要せば、是に對して相當の報酬を要むるは素より事理の當然なり。然らば則ち學者にまれ、美術家にまれ、苟も其道の爲に盡さむものは、初めより其思想又は製作によりて衣食すべきものに非ずや。吾人は斷じて言はむ、美術家にして若し其製作によりて生活する能はざらむには、初めより美術家たる勿れと。

遮莫、吾人は吾美術家が、美術購買力に乏しき今の社會に處するの道の極めて困難なるべきを想ふ。是れ獨り美術家諸子の爲に憂ふるのみならず、是の如くにして日本美術の前途亦甚だ望少からむを憂ふる也。然らば則ち是を如何にせば可ならむ乎。

若し本邦國民にして全然美術的嗜好を缺如せば則ち已みなむ。是の如き社會が美術家の存在を許さゞること、猶ほ沙漠が植物の存在を容れざるが如き也。然れども美術國として鳴る我が邦にして如何ぞ是事あるべけむや。今日の社會が美術購買力に乏しきは、必ずや今日あるが如き美術に對して嗜好を有せざるが爲なりと見ざるべからず。本邦美術家の一考を要すべき點は即ち茲に存す。

る購買力乏しき社會に對して爭でか其技藝に忠なるを得べき。是を佛蘭西、伊太利等にありて、一萬『フラン』以上の價ある作品の盛に賣買せらるゝに比すれば、果して如何ぞや。

或は謂はむ、古書畫の中には數百金乃至數千金のもの尙ほ賣行好きに非ずや、何ぞ美術の購買力無しと謂はむやと。されどこは誤れり。今の縉紳富豪等が爭て古名家の作家を蒐集するは、多くは骨董品として愛翫するのみ、美術的嗜好と何の關する所あらむや。是の如きは彼等にとりて一種の贅澤品のみ、公債、株券、地所、家屋として其財產を有する代りに、骨董品として有するに過ぎざるのみ。如何ぞ眞に美術を賞鑑しての業ならむや。美術的嗜好の缺乏は即ち美術に對する購買力の缺乏也。

職人が其勞働によりて生活し、學者が著述と講義とによりて生活する如く、美術家は其作品を賣りて生活せざるべからず。世人動もすれば曰く、富裕の身に非ざれば學者又は美術家たるなかれと、是れ一面の說のみ。凡そ學術にまれ、美術にまれ、社會に需要なきものは決して其發達を期すべからず。若し發達し得べきもの

秋氣滿目、轉た人の心を傷む。

人は謂ふ、『彼れ文學に忠ならず』と、吁今の世に於て誰か果して文學に忠なるを得る乎。人の勞に酬ゐず、人の才を認めず、人の志を沒するもの、如何ぞ彼を要して文學に忠ならしむるの權利あらむや。

美術に對する購買力

凡て事物の進歩は社會の需要に伴ふを原則とす。されば美術も亦それを購買するの社會を待つに非ざれば、永遠の發達を期し難きこと、言ふまでも無し。

吾人の觀察にして大に誤らずむば、本邦社會の美術に對する購買力は極めて薄弱なるものなり。試に毎年二季の繪畫展覽會を觀よ、十圓以上の價を付すれば賣口甚だ悪し。況して百圓以上の作品の賣買に至りては、作者と買者との間に特別の事情あるに非れば、殆ど希有の例に屬する也。今年の例に徴するに、宮內省の特別保護の下に成立する美術協會の列品だに、賣約濟のもの尚ほ一千圓に上らず、其他の繪畫共進會、白馬會等は略々知るべきのみ。繪畫を以て職業とせむもの、斯か

むと擬す、是れ全く時世を無視したる者ならずや。其の貧少なる學識や、一度び濫盡し了れば殘れる所は渣滓のみ、而して彼れ尙ほ新衣を被り、新彩を着け、百方剪裁の末技によりて一時を塗抹せむと擬す、世の既に倦厭したるを知らざるなり。是の如くにして獨り其雜誌の繁榮を萬一に僥倖するも、豈夫れ得べけんや。

吾人は是種の雜誌の續々廢刊を吊すると同時に、寧ろ是によりて現はるゝ社會の進歩を慶する者なり。是の如き雜誌に對して『雜誌極衰の時代』ならずむは、日本の文明も前途望少しと謂はざるべからず。

人才と我文學界

若し其の勞に酬ゐざらむ乎、其才を認めざらむ乎、其志に適はざらむ乎、安ぞ永く有爲の士を留むるを得む。今の文學界は人才の久しく居るべき所に非ざる也。

道路傳ふらく、坪内逍遙は文壇より退きて身を敎育界に委ぬべしと、果して眞乎。豈獨り逍遙のみならむや、露伴も然り、鷗外も然り、荷も斯文の將來を寄托すべきものは、蕩然として殆ど文壇の埒外に逸し去らむとす。見來れば殘る所は敗荷零葉

進捗するに於て、至大の效力を有すること言ふまでも無し。

故に社會の進歩繁榮は即ち其新聞雜誌の進歩繁榮なり。若し新聞雜誌にして時代の精神を解し、其社會の希望に適ふものならば、そは必ず時代と共に進歩し、其社會と共に繁昌せむ。是れ獨り理に於て然るのみならず、歐米各國何れも事實に於て是眞理を證明せざる無し。

然るに近時我邦に於て二三雜誌の仆れたるを見、直に今の時を以て「雜誌極衰の時代」なりと云ふものあり、是れ何のタハ言ぞ。進歩の社會に新紙衰微の時代あるべき筈無し、唯時代の精神を解せず、社會の希望に適せざる新紙にとりては、何れの時代か極衰の時代ならざらむや。

社會は進歩せり、而して雜誌は依然たり、社會は多方面となれり、而して雜誌は依然として單調なり。人文開け、趣好移れり、而して雜誌の記者は依然たる吳下の阿蒙なり。是の如くにして衰亡せざらむと欲するも豈得べけむや。

試に『國民の友』を見よ、彼れは其十年の生涯に於て幾何の進歩を效しゝか。明治二十年の日本に於て成功したりしもの、彼れ尙ほ執て是を三十一年の今日に施さ

は言ふまでもなし。歷史家は是を見て珍奇の史料を得べく、美術家は是を觀て古人の典型を學ぶべく、文學家、宗教家、考古家亦それ〳〵他に得難き利益を享くべく、數十百里を旅行し、幾多の日子を消費するを要せず、一堂の下に觀覽し得べければ、學術の進歩知識の普及には缺くべからざる事なり。もし又迷信者あり偶像遺物を巡拜せむが爲めに每年莫大の時間と金額とを消費するを憚らざるもの、茲に來らば、一日の中に天下の名山古刹を巡禮すると同一の功德を受け得べし、豈便ならずや。西洋諸國にては、希臘、羅馬の古美術は猥りに私人の所有に歸せしめず、是を國有となして博物館裏に陳列して、以て公衆の觀に供ふるは、最も寶物取扱の法を得たるものなり。吾等は一日も早く我が政府が是の方法を取らむことを希望して已まざるなり。

（三十一年六月）

新聞雜誌の時代

假りに社會を有機體と見做し、交通機關を以て其循環機能に比するを得ば、新聞雜誌は偖に其神經系統に相當する者なり。新聞雜誌は人類の共同生活を統一し、

ざる事實なり。彼等の多くは佛敎々理の宣傳によりて衆生濟度を目的とする如き宗敎心の一片だに有せず、唯己れの先祖代々皆僧侶の職に居り、己れまた是職を紹ぐにあらざれば他に活計の道無きを以て、寧ろ已むを得ず其顏を圓にし其衣を緇にするのみ。されば彼等が其佛像寶物を手放すことを肯ぜさるは、商賈人が其株を手放なさゞると同じ理由により、特に佛像寶物其物に何等愛好心の執着するあるに非ず。故に若し彼等に與ふるに佛像寶物より生ずる收入以上の金額を以てせば、彼等は喜で是に應ずべし。斯くて其寺是が爲に廢るゝことあらば、彼等は寧ろ其の窮屈なる生活を捨てゝ俗界に入り、公然肉食妻帶の人となるを德とすべし。是れ寶物保存の爲に利あるは勿論、彼等僧侶も亦利便とする所なるべし。加ふるに同時に、迷信排斥の效力もある事なれば、國家道德の側より見るも最も望ましき事なり。所詮孰れの點より見るも、佛像寶物を寺院より分離することは、政府が斷然是を實行しても然るべき事ならずや。

扨て斯くして寺院より分離したる寶物を博物館に陳列し、若しくは光線中の暴露に堪えざるものは藏する事は、保存の目的を達する外に幾多の利益あること

事ならむや。古寺院の燒失や、素より番僧の不注意、放火などの災難にも因ることなるべけれども、本を糺せば古寺院其物の建築の性質上にあり。されば寶物保存の目的は所詮今の寺院の建物よりそを分離し、別に火災其他の危難の憂無き處に安置するに非ざれは到底達するの見込無かるべし。

さらば如何にして寺院の建物より分離すべきか。吾等の意見によれば、政府須らく相當の代價を以て是を買上ぐるか、又は是寶物より生ずる收入額に等しき金額を年々寺院に下附し是を政府に於て保管すべし。斯くし分離したる後、そを何處に安置すべきか。吾等は帝國博物館、もしくは地方所在の博物館を以て最も適當なる場所なりと信ず。

佛像を博物館に移せとは、既に世人の往々唱へたる所なり。されど何等の條件無くして佛像を寺院外に出さむとは、決して實行し得べからざる事なるべし。何となれば、佛像もしくは寶物は寺院收入の主なる財源にして、僧侶僧尼が依て以て衣食住を仰ぐ所なればなり。今の多くの僧侶がまことの信仰心に乏しく、宗教を見ることさながら一の商賣の如く、俗化墮落の極に達し居ることは、爭ふべから

あり。素是れ炊烟の家居に非ざるが故に、火災に罹るの憂は普通の人家に較ぶればやゝ少しと雖ども、たま〳〵祝融氏の次る所となれば、千年の古刹一朝にして灰燼となり、累代蓄積し來りたる寶物も忽焉として跡無し。而して傷むべきは、是の如き火災の、短きは數十年、長きは數百年にして必ず一過することなり。されば百數の古寺院にして其の元のまゝに殘れるは全國中指を屈するに過ぎず。斯く火炎の度毎に、其中に藏せる寶物の大部分は燒失する事なれば、日本國の寶物は古寺院にて保存せらるゝ限りは、遂に滅盡せざれば已まざるべし。如何に慨はしき事に非ずや。

例を遠きに求むるまでも無し、去月の末、寺院にはあらねど伊勢太廟の炎上を初めとして、大坂なる大念佛寺、播磨なる書寫山圓教寺の消失より、近くは本願寺の將に烏有に歸せむとしたるなど、まのあたりに是危險を見たる人、誰か吾等と憂を同じうせざらむや。殊に書寫山及び大念佛寺の消失は、古來有名の古刹の事とて、貴重なる寶物の共に失せたるもの最も多しと聞く。かゝらむは寺院僧侶の不幸のみに止まらずして、日本國民全體の不幸なり、そを何とて國家の傍觀して已むべき

さればにや、我政府先には寶物取調委員を全國に派遣して古社寺の寶物を取調べ、近くは第十議會の協賛によりて古社寺保存法を實施し、是目的の爲に多少の力を效したり。こは實に然かあるべき事なり。されどかの寶物取調委員なるものは、其名の如く取調べたるに止りて、其保存の方法に及ばず、古社寺保存法も社寺の建物を美術として保存するを旨とするなれば、其庫裏に藏せる所謂寶物の保存に關しては、多く規定する所無し。されば是れ皆吾等が茲に說ける寶物保存の目的を達するに遺憾無しと謂ふべからず。是れ吾等が是說ある所以なり。

如何にして古寺院の寶物を保存すべきや。是れ他の珍案あるにあらず、適當の方法を以て政府是を博物館裏に蒐集する事是なり。是方案は、今日に於て是を唱ふる寧ろ陳言に類す、されど是事を唱ふるの急は日に增し加はり來るを想はゞ、陳言必ずしも陳言にあらじ。吾等は政府の當局者が吾等の陳ぶる所に就いて三思する所あらむを望む。

寶物保存に就いて最も恐るべきは火災に如くは無し。本邦の寺院は盡く木造にして、風雨にだも堪えず、其建物已に不斷の修繕に待つも保存の命數に於て限り

古寺院の寶物

凡ての國には寶物と云ふものあり、こは其國の過去の文明の最も醇粹なる遺物なれば、永く後昆の紀念として傳ふべきものなり。そが何人の手に成り、何人の手に保存せらるゝやは措て問はず、かゝる寶物は、よしや私人の財産に歸するとも、國民全體の寶物として見るべきもの、されば適宜の處置によりて其保存の目的を達するは國家の事業に屬す。

我邦にも寶物と稱すべきものは種々あれど、就中古寺院に保存せられある者の中には、文藝政教の歴史上最も貴重すべき者多きは、爭ふべからざる事實なり。こは本邦寺院の緣起久しく、且つは多くの時代に於て一國文教の淵源となれりしにも因ることなるべし。何は兎もあれ本邦の最も貴重すべき寶物が、是古寺院の中に保存せられあることの事實なりとすれば、そを一人一寺の私財として見ず、國家の公寶として永遠に傳ふるは、まさしく國家が當に爲すべき事業の一なりと謂ふべし。

倫理禮法と相反するを容さゞるなり。吾等は詩人を縛するに鐵鎖を以てせむとするものに非れども、詩人は詩人として立つと共に個人として國民としての責任を重ずべきを見るなり。

是の論道德と文學との關係を說き得て餘蘊無きに庶幾し。是れ現今の文學批評家に於て道念の漸く成熟したるの證なり。殊に喜ぶべきは、地方有爲の青年が文學に就て都會文學者の聞かば漸汗すべき潔き志を持てることなり。博文館先に『少年文集』の讀者に『文學者の本領』を問ひしに其の大多數の尤も力を盡して論じたるは當今文學者の道念薄弱にして、其の作多くは淫靡殘忍たま〳〵世を墮落に導くに過ぎず、文學の本領は世道人心の推奬にありと謂ふにありき。是れ青年客氣の口吻を含まざるに非れども、其の思想の健全清潔なるは吾等の太だ喜ぶ所なり。吾等は是等の有爲なる地方青年が、文壇に馳聘するの日には我文學の氣格の如何ばかり高まるべきを思ひて、深く屬望する所あり。地方青年諸士乞ふ努力せよ。

（廿九年四月）

由と價値とを保持すべき也。唯夫れ道義を障害する時若くは障害せむとするの虞ある時、吾人は實際的產物として之を迫害し壓制するの權利を有するのみ。夫の民友記者の偏に道義に關してのみ文學の價値を認むるが如きは、遂に文學の何物なるかを解せざる者と言ふべし。蓋し寸を矯めむと欲するものは尺を枉げざるを得ず、議論の中正を得むことも亦難い哉。

（廿八年十二月）

吾文學界に於ける道義的意識

吾等は前號に於て『喜ぶべき文壇の一傾向』と題して、道義てふことに世の評家の眼の向ひたるを述べしが、是頃にいたりて是傾向は更にやゝ明になり行けるが如し。諸種の新紙に是の趨勢を認むるものから、『每日新聞』なる御荷鉾山人と名のる人の所論は、殊に最も妥當にして、吾等が心を得たり、其の說に曰く、

彼等（詩人）が情火炎々として詩心動き、而して美神と抱擁せむとするの時何ぞ前後左右を顧念するの遑あらむや。何ぞ倫理と道德とを問はむ、又何ぞ實利と實益を思はむ。然れども彼等は到底社會道德の批判を否む能はざるなり、

を絞りたるべきか。證書の不備を奇貨として其の著を重賣したる小說家、詐僞取財にて入牢せる小說家數へ來りて明治文學の道念の基礎の如何ばかり强固なるかを想はゞ、誰か憤激の情に堪ゆべけむや。『罪を容るるものは罪なり。』予輩はかゝる罪惡を寬假して其の著を歡迎し隨喜するは、社會の品位德義を維持する所以に於て大に恨無き能はず。されば社會人心の道義的意識の漸く覺醒し、人道と文學との關係に就て多少留意する所あらむとするは、我文壇の一大慶事として、予輩之を特書するに躊躇せず。然れども玆に一事の注意すべきあり。

予輩は文學美術を以て道德の奴隷と爲さむとするものに非ず。只人世實際の指導者として道德の支配を待つべしと云ふのみ。人は實際を離れて生活する能はず、生活其の物は素より人生の第一義なり、而して吾人の實際的原理となすべきものは目的と命令とを兼有せむことを要す。『美』は性質あれども目的なし、況んや命令をや。之を兼ね具ふるものは道德あるのみ、然らば則ち道德は人生の第一原理に非ずして何ぞや。然れども文學美術は常に之に隷屬し其鼻息を窺ひ、其頤使を受くべきものに非ず。苟も道德に背反せざる限りは十分其れ自らの獨立と自

說の內容は國民敎化の資として甚だ稀薄なりと曰はざるべからず。

又曰く、

莊子の盜跖を讀むもの、誰れが其議論の餘りに極端にして人を驅りて盜賊たらしめずむば止まざるの勢あるを危ぶまざらむ。現時の我小說家が社會の罪惡を鳴すこと多く、個人の責任を說くこと少なく、感情に同情すること多く、道義に謀叛すること甚しきの一事は、吾人をして轉た此の如き書を我家庭に供するの危難を感ぜしめずむばあらず。

（國民之友、二六八號）

其の矯激過張なるは暫く措き、其の言堂々、其の意切々、當代不德の文人をして慚死せしむるに足る。今は罵ることを止めて言はんとを務め居る內村鑑三君が粹人は社界に賤視せられて其頭を擡げ得ざるに及んで、風流人は月花に愚歌を呈するを止めて、國人悉く誠實を尙び、品性は之に優りて尊敬さるゝに及んで、始めて世界を風靡すべき大文學は吾人の中より望むべき也……愛と正義とに動かされずして大文學の世に出でし實例ありや。

と喝道せるは君が勃々たる道義的精神を躍らせたる筆端に幾多當世文士の漸汗

以て詩歌の職分と思惟する時は往々兒童婦人を娯ましむる所の玩具となり了るの恐れあり。蓋し造化が人間に詩歌を與へたるは單に耳目を娯ましむる所以にあらずして、幽玄不朽の理性と意志とを發揚し、兒童を導き婦人を導き、又健全熟成せる男子を導きて以て、天命宇宙の眞相を知らしむるにあり。

（十月七日、讀賣）

其の意見の妥當ならざるものありと雖も亦當代の文學の弊所に適中する所無しとせず。『國民の友』記者は常に一種功利眼を以て文學を觀るもの、其の言往々偏僻に流るゝを免れずと雖も、一個不拔の見地を有するの點に於ては慥に一面の批評家たるを失はず。去月上旬現時小說の內容を論じて曰く、

吾人は日々出版せらるゝ我幾多の小說に就て其內容を閱する毎に未だ嘗て我文學界の寂寥なるを歎ぜずむばあらず。彼等の大部分に於て吾人は濟世救民の猛志を見る能はず、不朽なる人生の眞趣を寫したるものを見る能はず。獨り斯の如きものを見る能はざるのみならず、單に其調子の平正にして其思想の健全なるものを求むるも亦甚だ稀なるを覺ゆ。一言にして言へば我小

論文に於て以爲らく

美は眞性質上前後左右を顧みざる者なりと雖も、人は美の爲にのみ左右せらるゝものに非ず、此より尙廣大なるものあり、幾多の不都合あるをも顧みず美術の爲に一身を犧牲に供すると能はざる也。……美術の爲に社會の風俗を顧みざるは社會發達の好祥に非ず。（帝國文學第七）

同じ雜誌同じ號に、芥舟漁郎と名のれる人がヨルダンの近著の部を抽譯して『戲曲と道德』と題せる一文を揭げ、期せずして元良博士の所說を贊せしも、强ち偶然のみに非じ。是等は純ぱら學理上より立論したるもの、而かも其の道德的理想の點に說き及ばざりしを恨とす。短刀直截當代文學の流弊を抉摘し、積極的に道念の文學に缺くべからざるを唱道したるもの、尙是他に少からず。桐生悠々庵と名のる人の如き其の一例なり。是人小說家の責任を論じて曰く、

人或は言ふ、美は最終の目的なり、故に美を以て生命となす所の詩歌は唯夫れ美を表顯するを以て足れりとなすと。然り、然りと雖も是等の詩歌は宇宙最終の世界に於て凱歌を奏すること能はざるなり。且夫れ唯美のみを描くを

めざる器械主義はいざ知らず、最も健全なる、最も眞摯なる思想の根據は道德の理想にあり。之れを內にしては眞心の命令となり、之を外にしては信仰の懷慕となり、人生のあらゆる關係の上に、はたあらゆる人々の行爲と思慮との上に、常に絕大の勢力を有すべきものは即ち是れ也。歷史は之によりて其の光榮を增すべく、文學、美術は是れに依りて其の品位を高むるを得べく、宗敎、哲學は之に依りて其の天分を全ふするを得べし。世人往々道德を以て卑近なる功利と同一視し、文學、美術を以て由來之と相關せざるものとなし、文學者、美術家亦多く爰に注心せず、偏に人心の弱點に投じて爲にする所あらむと欲す。一世道念の匪薄なるの致す所、獨り當事者をのみ責むべからずと雖も、予輩は明治文學百歲の爲に忡々の情に堪えざるものあり。七月以來の本紙に於て或は靑年文士の厭世觀を難じ、或は美術と道德との關係を說き、或は文學者の道念を論じ、危言世を驚かせしもの洵に已むを得ざるに出づ。頃來退て傾聽すれば世上吾人と感を同うする者漸く多く、道德と文學との關係に就て立言したるもの少からざるが如し、之れ予輩の大に喜ぶ所也。今其の二三を例せむに、元良博士は『人躰の美醜と善惡との關係』と題する卓拔なる

ば何事にもなき、些細なる感情の衝突より、遂に一家の波瀾を起し、春風和煦の庭は、一朝秋霜悲慘の野となり、夫悲みて狂し、婦恨みて死し、老母が一念の妬骨は遂に一家團欒の幸福を殺却するに終る。宙外が才筆は這般の情理を曲盡して殆ど遺憾なきに近からむとす。

高月村の田村の家にては七日の間に夫婦の葬式二つ出して其夕より廣き奥の間には老母獨り殘りぬ。

との一結は、無限の感愴に包まれ塊然として立てる憐れなる舅が心事をほのめかして餘情掬すべし。

（下畧）

（二十九年三月）

喜ぶべき文壇の一傾向

宗教、文學を問はず、哲學、美術、政治を論せず、其の活動のあらゆる種類に於て數千年の人間歷史は、今日最高級の發達を爲せる吾人の意識の上に紛ふべくもあらぬ一の光明を抛ちぬ。何ぞや、道德の理想てふ觀念是れなり。因果の外に目的を認

其觀察の周到なること其一なり、其文字の着實なること其二なり。猥に新奇を求めず、幽玄を衒はず、日常の人事に資りて、人生の裏面を表はさむとする、もの新しき作家の中にて一葉と宙外とあるのみ。蓋し年歯弱く閲歴乏しき少壯作家が、蔚勃たる功名心を抱きて文壇に立たんとするもの、其筆自ら警奇ならざるを得ず、其想自ら嶄新ならざるを得ず、彼等は平淡なる行路の上に於て到底老練なる舊作家と競爭すること能はざればなり。然れども其徑を捷にして其歩を窘にせざるもの彼等の中幾何かある。夫れ權變は久しきを得ず、世故を閲すること漸く多く、思想亦漸く老成すれば、彼等の作も亦漸く坦常和平に近く、是れ自然の勢なり。若し夫れ宙外は少しく之と撰を殊にす。吾等は彼が處女作なる『ありのすさび』を讀みて、近頃まで專門學校の學生たりしかを驚き、其筆路の老實平和なる、殆ど青年未熟の客氣を印せざるに感じぬ。宙外は青年作家の群にありて一種の異彩を放つものと謂ふべきなり。『ありのすさび』の尤も勝れたる所は、清太郎の母がお信夫妻に對して妬心を起すの條、即ち第四章以下にあり。鼻の心情を描くに於ては未だ盡さゞる所あれども、偏狹なる女性の弱點を寫し來りて、甚だ精緻を極む。底を叩け

幾年の壽命を縮め身を以て神佛に供へて合掌し瞑目して良人の本復を祈』ることを得べきか。鏡花が妻として夫に對する義務と、女子として愛情に殉せんとする感情との不斷の鬪爭を、一個お貞の胸中に描かんと務めたるは甚だ喜ぶべし。然れども彼は之を描く所以を知らざりき。憐れなるお貞が甘心して其夫を殺すに至るまでの徑路は幾多の矛盾を以て充たされざるを得ざるに至りき。あはれ鏡花の筆は其想よりも短かりし也。遽莫吾は宙外の『ありのすさび』と共に鏡花の作を以て『青年小説』の双絶となさむと欲す。

（中略）

後藤宙外の『ありのすさび』

吾等は『化銀杏』と共に『青年小説』の白眉なりと稱へむ。曾て早稲田文學紙上に紅葉、露伴、美妙、三家の細評を讀みて、吾等は初めて宙外の名を知りき。今や批評家なる宙外が『ありのすさび』の著者なるを想へば、吾等は氏が心理的解析に長じたるの偶然にあらざるを見る。吾等の宙外に於て得難しとするもの玆にあり。

是れ心狂ひ、情亂れても、胸奥一物の微、奕々として尙恒に良心を苛責する、憐むべきお貞の運命を一結し、讀者をして低回の情に堪へざらしむるものあり。鏡花は須く是一行を以て全篇の結尾となすべかりしなり、自餘の文字は蛇足のみ。

然れども其姿をのみ見て面を見ざる諸君は嘸な本意無からむ、然りながら諸君より十層二十層なほ幾十層こゝに本意無き少年あり云々。

と言ふに至りては勉て照應の妙を衒はんと欲して偶々讀者をして其の纖巧補綴に顰眉せしむるに終る。本篇に於ける少年芳三は決して斯の如き因緣を有せざるなり、お貞の性格は作者の尤も苦心せし所なるべし。第十五以上のお貞は洵に自然のお貞なり、唱隨十年、一兒をすら生みたるのお貞が依然として其夫を嫌忌す、實に潛に其死を希ふまでに厭忌す。是れ顧ふに常人の以て不自然とする所のもの、而かも吾等は鏡花が女性の幾微を穿ちて能く是大膽なる意想を搆へ得たるを多とするものなり。然れどもお貞が運命の大旋轉の樞軸たる十五回の初めに於て『時彦を嫌恐の極其死の遠かならむことを欲するの念は、良人に藥を進むるの時も、其疼痛の局部を擦る際も須臾も念頭を去りやら』ざる程のお貞は、果して『おのが

化力は洵に一種の天品に出づ。而かも彼は單に目的を以て手段を遣したる者也。是を以て彼が作は餘りに簡截にして、又餘りに抽象なるに過ぐ。驚拔新奇とは畢竟油無き燈の新奇を稱えしものにして、未だ燈の油なくしてあり得べからざることに想ひ至らざるの評なりしのみ。鏡花が從來の作は實に新奇なるものにてありき、然れども『化銀杏』に於て彼は慥に一歩を進めたり。彼は骨と共に肉を提へんと試みたり、而して彼が企の幾分は美事に成功したりき。鏡花はたしかに健全なる發達を爲したりと謂ふべし。彼は是の『化銀杏』に於て愛情の一致を缺きたる夫妻の如何に不幸なるものなるかを示し、柔婉なる女子も其愛情の自由の爲には、如何に恐るべき決心と、行動とを作爲し得べきを寫さんとせり。お貞及び其夫の性格は概して首尾よく描かれ、對話の調子の活々せる中には作者の苦心顯はれたり。「ちよいとこさ」を點出せるも妙なり。只お貞が話相手に煩はしたる御禮として、少年芳三が爲に結末の掉尾的警句を設けたるは、徒に巧を弄ぶものにして、むしろ全篇の餘情を殺ぎたるは惜むべし。

光を厭ふこと斯の如し、されば深更一纏の燈をもお貞は恐れて吹消し去るなり。

以外に青年作家が本領を叩かむことを望む。幾多の批評家は既に是風潮を預告せり。是時に當りて『青年小說』出づ。彼等はやがて文壇のプロ－ベに彼等自身の生命を托したる者に非ずや。

泉鏡花の『化銀杏』

は『外科室』と共に彼が作中の最も佳なるものとして推薦するに躊躇せざるべし。鏡花は素善く骨髓を捉るも、未だ善く皮肉を附すること能はず。彼は人を描くよりは、むしろ人の想を描く、現實の人間を取りて現實の社會に活動せしむることは、彼の素善く爲し能はざる所。彼はげに所謂る觀念小說家の摸型として見るべきものにして、其の作る所は殆ど常に理想化の極點に達せるものなり。彼れの想を搆ふるや、短刀一揮其精粹を剔りて直に讀者の理想に訴ふ。故に其肉を振ひ、其血を紋り、吐露し來る所、往々赤條々の骨架に終るものあり。彼は血肉なき精神の遂に活動する能はざること、猶油なき燈火の燃ゆる能ざるが如きことを忘れたる也。事物萬千の複雜なる形象を抽離して、直に其活動の中心を抉剔せる彼が醇

『青年小説』を讀む

『青年小説』は、『今の青年小説家が着想筆力を世に紹介して當代文運の色彩を添えむが爲に』公にせられたるものなりと曰ふ。萃むる所、曰く鏡花、曰く天外、曰く青軒、曰く宙外、花袋、曰く玉茗、風葉。皆是れ當今新作家中の錚々たるもの、明治文學の未來は是等の諸子に負ふ所甚だ多かるべし、批評家の輕々しく看過ごすべきものにあらず。流石に青年は前途を重ず、是一卷の收むる所佳作甚だ多し。勇健なる青年諸子が想を搆へ筆を執るに臨みて、將來の効果を是一篇にトしたるの意氣潛に想ひ見るべきものあり。鏡花が「化銀杏」、天外が「改良若殿」、青軒が「可憐兒」、宙外が「ありのすさび」、花袋が「無名草」、皆是れ作者が特色と長所とを瀝盡せるに庶幾きもの、中には桐生愈虐が『仲左』の如き甚しき劣作無きに非れども、さすがに『閨秀小説』の採擇の杜撰なるの比にあらず。蓋し清新奇警の世評は、未だ以て青年作家が小説壇に於ける確乎たる立脚地を造るに足らず。新奇を以て博したる世好は、幾くもなく陳腐を以て遺却せらるべければなり。今や「新奇」に倦みつゝある社會は、新奇

と、スフィンクスとニオベとは、何故にしかく其風尙を異にせりや。ラーマーヤナとイリアスとは如何なる點に於て同じく、又如何なる點に於て異なれりや。ダビテの讃歌と四吠陀とは其思想に於て如何に根本的に異なれりや。宗教無く神話なくヘルド無きの國民として支那民族の文學は如何に印度、希臘に異なる所ありや。金縢の冊祝はヨブの兒言と如何に其情思を殊にせりや。はた又詩經三百篇は支那四千年の歷史に對して如何に其解釋を與ふるや。——是等は學問上頗る興味深き研究の題目に非ずや。知識は歷史の上に立ち、歷史は關係の上に基く。眞に部分を悟了せんと欲するものは全躰を洞察するの明を要す。比較的方法によりて各國民族の特質を案定し、更に人類歷史の一部として之を達觀するに非ざれば、世界に於ける一國の關係意義を明にするを得ざるべし。是れ啻に過去の歷史の鍵鑰たるに止らず、依て以て國民未來の運命に向て經綸の光明を放つを得べし。然らば則ち獨り學者の閑事業のみに止まらざるなり。予輩は斯の如き方法を以て日本民族の歷史を研究する學者の出でむことを切望す。是れ即ち日本を中心とせる世界歷史を編するなり。

（廿八年十二月）

應用を發見すべし。然るに之に反して希伯來の宗教は何故に第一期を缺き、支那の宗教(若し宗教と名くるを得ば)は獨り直に心理的狀態に達するを得しや、はた又バレスチナに源せし三大宗教は國民的、はた人種的宗教として如何の差別を有するや。希臘思想が猶太主義を抱合して新プラトン派より基督教に到るの推移と交替一神教の吠陀が吠檀達以下の婆羅門哲學となりて遂に佛教の無神論に達せる發展とは如何に各々民族の特性を發揚せるものなりや。更に

美術文學の例

を取らむ、にセミチック、若くはハミチック民族として埃及若くはフェニシアの美術は如何に自由想像の精神と宗教的趣味とに乏しきや。同じく東洋に邦せりと雖も、印度波斯の美術は全く之と趣を異にし、其守護天使に於て、其フェローヘルに於て、其の富贍なる想像と宗教趣味とに於て、如何に明にアリアン族の特質を顯はせしか。而も其妄想誇大なることに於て、其塔婆と精舍とパゴダとに於て、如何に遙に希臘の優美閑雅に遠ざかれるか。埃及の三角塔とプリエネのアテナ堂

多少の意見を有するもの、試に其研究の例一二を述べて讀者の注意を惹起せむか。

凡て民族の特性は其民族の原的狀態に於て最も明白に顯はるゝもの也、而して其發表の形式は一にして足らずと雖も其主なるものは宗教、文學、美術、哲學の四なるべし。而して是等特性を規定するものは、之を內にして、民族の資性及び其物質的影響の二者に歸すべく、之を外にしては各民族の文化の範圍の伸張に關すべし。而して其歷史的活動の實際的根據は土地風土の上にあり。今

宗教

に就て一例を取らむに、印度の吠陀と波斯のアヴスタは共に原的アリアン族の宗教思想に本けるもの、而も彼は冥想的にして此は活動的なり。彼はデヤウスの原神を忘れてインドラ、アグニの外面的表象に走り、此は常に自然有形の域を超て善惡邪正の根本主義に入る。アフラマヅダとアングラマイニユの二主義はアヴスタの終始を貫通す、彼を以て東洋に於ける希臘とせば、此は獨逸にも似たらむか。是差別は如何にして起りしぞ。マクス・ミュラー氏がいみじくも分てる宗教發達の三大期、即ち自然的、人視的及び心理的は是等アリアン族の宗教に於て恰好なる

日本民族の特性と文學美術

國運の隆盛と共に吾人は世界の一大國民として自己を認識し、同時に世界人類に對する關係的位置を知らむを望む。我民族特性論の今日に喧しきは敢て怪むに足らざる也。然れども其所論は概ね過去數十年の歷史若くは現時の社會狀態より歸納し來れる一種の功利的見地の上に立つ。或は感激的氣質を謹むべしと云ひ(大西祝氏)、或は運命に狂屈し易く順逆轉倒の境に安心するの大勇猛心に乏しと謂ひ(姉崎正治氏)、或は武士道は柔腹剛骨を兼備し禪學と儒道とを圓融和合せる我邦人の長所なりと說き(重野博士)、或は我邦は支那の怯懦退縮に流れず、西洋の放恣橫暴に偏せず、よく東西の長所を兼併すと論ず(加藤博士)。皆之れ有用必須の文字なるには相違無しと雖も、未だ數千年の歷史を貫通してあらゆる國民的活動の中心となれる根本的特性に說き及べる者にあらず。予輩は世界歷史の精神に曉通し優に歷史的はた比較的研究を爲し得るの學者が弘く東西古今の民族に對比して吾邦人の世界的位置を案定せむ事を望むや切なり。予輩亦平生是點に向て

りと云ふ能はざらむ。吾人は信ず、是れ他なし吾人が先に讀者に注意し置きしが如く、美なるものは最も理解し易き者なるが故に能く吾人が經驗せる事實に適合せざるべからざればなり(勿論美を傷けざるの範圍内に於て)。同感の情は吾人が嘗て自ら經驗したる事情に於て最大なるもの也。彼の悲しき戲曲ほど快きは、是れ美なる(即ち樂しき)戲曲の中には自ら吾人が社會的性情を興奮すべき寫實的分子の含有しあればなり。故に吾人は悲しきが爲に樂しきに非ずして、寧ろ樂しきが爲に悲しき也。

結論。之を要するに戲曲に於ける悲哀と快感とは、各其起因する所を異にす。前者は主として社會的性情に本き、後者は主として審美的觀念に存す。決して悲哀其物が快きに非ずして悲哀なる戲曲中に存する美其物の快きのみ。吾人は美なるものを見ては只之を樂み、悲哀なる美(即ち悲劇)を見ては其悲哀を悲むと同時に其美を樂む也。

(二十五年十二月)

の情に堪えざる也。然れども之が爲に感ずる快樂の極めて薄弱なるは如何なる故ぞ。之れ豈にお辻と云ひ伊織と云ひ、一は暴露に過ぎ、一は殺伐に失し、共に只吾人が社會的性情を感動するに止りて吾人が快樂の本源なる審美的觀念を滿足する能はざるが爲に非ずや。斯の如き例は少からず、讀者若し『伊賀越』の平作の死と『太閤記』の十次郎の死を比較せば他の一例を得べき也。

(四)演劇中の惡人が何故に吾人をして不快の念を起さしめざるやは道德的觀念の說明する能はざる疑問なりき。是れ道德的觀念は只好惡の情を左右し得るも快不快の情には少も關涉する能はざれば也。吾人は信ず、戯曲中の人物は其性質の善惡正邪を論せず、其動作にして審美的ならば、吾人は其美なるの點に於て必ず多少の快樂を覺ゆる也、是を以て吾人は師直を見て惡みながらも快樂を感ずる也。

(五)吾人は信ず、悲哀の情と之に伴ふ快感とは全く其起原を異にする者なり。斯く結論すれば、難者或は問はむ、戯曲詩歌にありて悲哀の情、大なると同時に快感の之に伴て大なるは何故ぞ、其起原を異にし、個々獨立せる悲哀と快感の二物が、兩々相關するが如き狀あるは何ぞやと。此疑問を解くに非ざれば予が議論は完全な

理想中に於てのみ存在する者なればなり。

(三)若し單に社會的道德的の性情によりてのみ悲哀の快感を生ずる者とせば、演劇の快樂は一に俳優の技藝に賴り、其容貌如何の如きは少しも影響する處なかるべき理なり。吾人今『朝顏日記』の『宿屋』を見たりとせよ。若し次郎左衛門にして容姿彼が如く秀麗なるの代りに醜惡なること岩代の如く、深雪にして其顏貌渠が如く婉妍可憐なるの代りに坊間を『吹き流す』女按摩の如くならしめば如何。吾人が感ずる快樂は極めて小少なるべき也。吾人は他の容貌の美なるが故に之を憐み醜きが爲に之を惡むの理由あるか。是れ豈悲哀の快感は主として審美的觀念に存するの一證に非ずや。

社會的性情に十分の感觸を受けながら、之によりて生ずる快樂の極めて薄弱なるの例は吾人の平生演戲に於て實驗する所なり。試に見よ、彼の『志渡寺』のお辻の如き、『天下茶屋』の伊織の如き、一は其の養ひ君の爲に一身を犧牲に供し、一は父の仇を狙ひて却て仇の爲に殘殺せらる。社會上より見るも、道德上より見るも、其事情の愁傷感嘆すべき之より甚しきはなし。吾人は之れを見る毎に殆ど悲慘酸鼻

知したる所なるべしと雖も左に其要領を陳べむ。

(一)既に戯曲の審美的なるを認めながら、而して又審美的事物の吾人に快樂を與ふることを認めながら戯曲より生ずる快樂を擧げて(大西氏の如く)全然他の全く異なりたる社會的性情に歸するは、一見して其の不當なるを見るべきなり。顧ふに大西氏が所謂る『窮屈なる利己の壓束を脫して、我心は人類の大なるが如くに大に、社會の廣きが如くに廣きを覺ゆる』は、其原因の社會的性情に在らずして寧ろ審美的觀念の滿足によりて吾人が利己心を失ひ外物と合躰する狀態に非ざる乎。よし一歩を讓りて之を考ふるも、予は有限有碍なる人世を目的とせる社會的性情は果して吾人をして無意識中に絕對の理想を仰がしむるが如き宏大なる靈力ありやを疑ふものなり。

(二)何故に悲哀の快感は同感の情の薄弱なる詩歌戯曲に於て却て強大に同感の情の強大なる現在の事實に於て薄弱なりや。是れ社會的性情及び道德的觀念の共に閉口したる問題なりき。然れども審美的觀念を以てする時は明に其理由を知るを得べし。何となれば美は素人世の利害得失に關せざる、即ち現實ならざる

むる也、美の觀念は恰も人心の單一なるが如く單一なる者なり。彼の科學の複雜なるものは、何が故に吾人の多數に不快なりや、之れ他なし、吾人か單純なる本性を枉げて強て晦澁煩雜なる理論の中に導けば也。然れども美を理解するに吾人は些の盡力を要せざる也、目の見るが如く耳の聞くが如く、些の障碍なくして直に吾人が胸奥の理想に浸透し得るなり。吾人は其の何くより來り、何くに向て行き、又何か故に然るかを知らず、只其の美なるを現に認むる時に當て、吾人の心は言ふべらざるの快感を覺ゆるなり、之れ他なし吾人が單純なる本性に適合するが故のみ。

然り、美なる者は尤も容易に吾人に理解せらるゝを要す。凡て容易に理解せらるゝ者には素より幾多の要素ありと雖も、吾人の經驗せる事實に適合することも其の一要素なるは疑ふべからざる也。何となれば若し吾人が少しも見聞せざる事は之を理解するに當て自ら多少の盡力を要すべければなり。是事は後に至て吾論旨の一部を助くるものなれば、讀者の預め記憶し置かれむことを望む。

以上は予が悲哀の快感の主因なりとする審美的觀念の性質に就て畧言したるのみ。此審美的觀念が何故に悲哀の快感を起し得べきやは、炯眼の讀者の既に推

なき也。此二要素の結合する所即ち審美的快樂を生ず。

以上は美を認むるの人に就て言へるのみ。然らば則ち美なる物の要する特質如何。之れ次に研究すべき問題なりとす。

予は美なるものが具ふべき特性の主要なるものを以て『容易に人をして理解せしむること』なりと云ふを躊躇せざる也。此の容易に人に理解せらるゝことは極めて卑近なる性質なるが如しと雖も、想ふに美術の要領を擧ぐるに斯の如く簡にして盡せる者はあらざるべし。予は天上天下有形無形を論ぜず、吾人の尤も容易に理解し得るものは即ち『美』なるを信ずるものなり。一に一を加へて二となることを知るは實に容易なるに相違なしと雖も、然れども個數なる觀念が連續なる觀念と連結するに非ざれは之を能くせず、恐くは吾人が赤子の際に於ては尚解すべからざる問題なりしならん。然れども襁褓の中にありても紅色なる草花を見て之を採らんと欲せざる者はあらざる也。萬物は皆智力の判斷によりてか、若くは極めて簡單なる塲合に於て意識の直覺によりて理解せらるゝ也。然れども美は智力の判斷を要せず、否意識の直覺さへも須ひず、吾人は無意識中に於て猶之を認

審美的事物の吾人に快感あるは、此自己てふ觀念を消却し、吾人を拔て美の理想中に導けばなり。故に眞に美に感じたるの瞬間にありては、吾人は意識を失ひて純然たる知覺のみを存する也。故に只物あるを知りて自己あるを覺えず、恰も目の如く能く他物を見るも自己を見ざるなり。此境地にある吾人は身を以て外物中に沒了し、遂に主觀客觀の差別を失ひ、渾然として絶對の理想中に浮遊する也。シヨペンハウエルは審美的に事物を觀ずる二個の要素を指摘して(一)個々別々の物として之を見ずして其物が屬する種類の摸型、即ちプラトーが所謂る理想として之を見ること、及び(二)之を見るの人は意志慾望を離れ純然たる知覺のみを有すべきことなりとせり。

實に然り、是を以て自然を愛する詩人の眼には、蕭颯たる冬の枯野も、凄寥なる夜半の月も、岩根に咽ぶ流泉の響も、天半にかゝれる斷虹の影も、咲く花も、鳴く鳥も、山も海も、木も石も、其理想中の美に於ては共に別つ所なき也。美術を愛する技藝家の眼には、輪奐宏壯なる『パルセノン』の殿堂も、半身斷離せるアゼンスの古像も、左甚五郎の京人形も、圓山應擧の幽靈も、其心に感ずる主觀的美に至ては共に異なる處

は希望なるものに離るゝ能はず。彼の希望なくして生くる能はずとは實に悲むべき人生の眞相なり。而して誰か知らん、吾人が希望は一種の迷信に過ぎざるを。是れを得たるの後に於て之を想ひ見よ、之を求むるの勞苦に値する者果して幾何かある。且や之を求むるに當ては得ざらんことを之れ恐れ、之を得たるの後に於ては失はんことを之れ憂ふ。吾人は只役々として憂苦の一大波瀾に浮沈するに過ぎざる也。況や吾人が希望の十中八九は失望落膽の中に終るを常とするをや。之を求めて苦み、之を得て憂へ、之を失ふて悲む、是れ現象世界の眞相にして吾人の意識に纏ひ、形影相離るゝ能はざる所の者なり。

要するに自己てふ觀念ある間は吾人は現世現身の有限有碍なるを忘るゝ能はざる也、其最後が死に終ることを忘るゝ能はざる也。山を見ても川を見ても、如何にして自己を利せんてふ思想を脫却する能はざる也。美人を見、美形に接するも、如何にして之を我が有となさんてふ慾望に離るゝ能はざる也。此思想や此慾望や、吾人の依て生活する所以にして、又吾人の依て不幸なる所以なり。吾人は玆に至て厭世主義に合調するを覺えず。

多少の差あるは此摸型に近くことに多少の差あればなり。例令へば吾人が理想的美人は只一個の抽象的摸型のみ。吾人は之を想像中に描く能はず、之れ吾人が知らざるに非ず、之を知る吾人の理想の眠れる也。今若し絶世の佳人に遇へば、眠れる吾人の理想は忽ち覺めて、直ちに其摸型に似たるを認識し、之を美なりと感ずる也。之れ猶忘れて自ら想ひ起すこと能はざる朋友の名が、他人の我れに告ぐるに逢へば忽ち其意中の人なるを認識するが如し。斯の如く絶對の美は現世界の事物に對しては其事物各自の摸型となりて吾人の理想中に存するなり。ハルトマンが美を以て單純なるものに非ずして複雜なる理想より成れるを主張せしは絶對なる美と事物の摸型とを混同せしに非ざる乎。美の本源に關すること少きを以て之より轉じて審美的事物が吾人に及ぼす感化力を述べん。

審美的事物が吾人を樂ましむるは主として吾人が利己心を奪ひて無心識の大世界に吾人を埋沒すれば也。苟も『自己』なる觀念が胸裏に存する間は、吾人は人間の天性として決して『自己』てふことを忘るゝ能はず、幾多の慾望は蛇の如く吾人を苦むる也。一慾充つれば一願來り、一願足れば一望來る、一刹那、一彈指の間も吾人

るに歸せんのみ。

以上は本論に入るに先ち、略々大西氏の説を批評して我論點の在る所を明にしたるのみ。いでや是より一躍して我が本論に説き入らむ。

予は思ふ、悲哀の快感の主要なる原因は各人が固有せる審美的觀念に存すと。何を以て之を謂ふ、予は其理由の茲に説明するには餘り簡短に過ぐるを思ふ。望むらくは讀者の、予が解説を聞くに先ちて其心に顧みられんことを。

抑も審美的觀念とは何ぞや、之れ本論を解説するに當て確め置くべき極めて必要なる問題なり。若し讀者にして十分予が所謂る審美的觀念の性質を理解せば庶幾くは予が説の誤らざるを知らん。

審美的觀念は主として『美』と『崇高』とより成る。予は本論に關係ある『美』のみに就て言はん。『美』の本體に關してはプラトー、アリストートル以來ハルトマン、ロッツェに至るまで哲學者の説く所多少の異同あれども予はシヨペンハウエルと共にプラトーが理想説を取る者なり。曰く『美』は現實世界の萬物に對しては其摸型(タイプ)なり、吾人が或特殊の物に於て美の標準となすものは其物の摸型なり。同じ種類の物の美に

又爰に道德的觀念に就て一言を要するものあり。若し道德的觀念が正義の人物の悲哀に苦めるものに向て同感を表し、此同感によりて悲哀の快感を生ずるものとせば、吾人は此と同理によりて佞奸邪惡の人物に向て惡感（アンチパシー）を呈することによりて不快の感情を起さゞるべからず。然るに詩歌戲曲の中に於て吾人が經驗する所は之に全く反せり。いかに師直は惡くゝとも、吾人は渠が蛇の如き眼を光らして「本性なりや御身やどうする」と叫ぶ時に於ては、實に言ふに言はれぬ快樂を感ずるに非ずや。

之を要するに大西氏は重きを社會的性情と道德的觀念とに歸し過ぎたるの餘り、百尺竿頭一步を進めて其說を大成することをなさず、徒にバルク、シヨペンハッエルの間を脫する能はざりしは氏の爲に惜む所なり。氏が社會的性情は要するにバルクが『他人の悲哀を見て苦痛を感じたる時は、吾人は悲める人を救ふとにより て吾等自らを救はんことを務む』と言ひしに歸すべく、又氏が復我を論じて『人間最終の目的は假我を去りて實我に復るにあり』と言ひしはシヨペンハッエルが個人的小意志が無意識となりて宇宙的大意志に混入するを以て最上の樂境なりと說け

ペスピールが最後の演説は如何に快きも、愛蘭士義士傳中のエメットが刑臺上より其國民に訴ふる辭は如何に壯なるも、實際斷頭臺上に立て慷慨する義人を見なば、吾人いかでか孤燈の下節を打て三嘆するの快味を覺えんや。

難者或は言はん、歷史は想像の虛誕にあらず、只過ぎ去りたる現在のみ。而して吾人が例令へば『平家』を讀み、平氏沒落の段に至て俯仰今昔の嘆に堪えざるの間、壯大異常なる一種の快感を覺ゆ。之れ子が現實の悲哀には快樂なしと言へるに矛盾するに非ずやと。善哉問や。バルクも曾て過去の『オーセンチック、ヒストリー』を以て現在の『リアル、フハクト』に混じ、難者と同一の論法を用ひたりき、然れども之れ一を知て二を知らざるの言のみ。

予は言はんと欲す、現實は現在のみに存し、過去は猶未來の如きなり。吾人自ら經驗したるに非ざるよりは過去の歷史は只一の想像に過ぎざるのみ。吾人は、今日よしや敦盛と熊谷とを以て、小說的人物にして其『オーイ〳〵』の如きも皆作者の『曰く』なりと信ずるも、將た實際靑葉の笛と共に存在せりとするも、少しも平家物語の趣味を增損せざる也。

なることは、爭ふべからざるの事實なり。

大西氏の所謂社會性情とは、他人の悲哀に側憶の情を起し他人と共に哀樂する同情同感を云ふ。十分他人の悲哀に側憶同情の念を起すには、其人の受け居る悲哀の實情の極めて明晰に、極めて酷切に、我身に感じ我身自らが其境遇に立てるの思なかる可らず。而して眞に他人の心事を理解するには、想像中の假設的人物を夢みんよりは、現在事實を目擊するに如かざること素より言を待たず。然らば則ち大西氏が社會的性情は詩歌戲曲に於てよりは、實際の事實に於て最も多く發揮せらるべき理なるを以て、隨て悲哀の快感は詩歌戲曲に於てよりは實際の人物が實際に悲哀するを見る場合に於て一層大なるべき理なり。即ち大西氏の說に從へば、芝居の忠臣藏四段目を見んよりは、實際の判官の切腹を見る方遙に愉快なるべき理なり。之れ全然吾人の經驗と天性に背反するものに非ずや。芝居なればこそ朝顏の物語も面白ろけれ、詩歌なればこそオフェリヤも樂しけれ、實際薄命の盲女狂婦を見て何の快感あるべきや。

道德的觀念も亦同理にて其誤謬なるを認むるを得べし。佛蘭西革命史中の

れども予は氏が言ふ如く之を以て主なる原因なりと思ふ能はず否其最大要素に非ずして寧ろ對照變換等と共に第二位の原因を成すものに非ざるかを疑ふ也。

夫れ悲哀なる事物の吾人に快感を與ふるに要する所は種々あるべしと雖も其悲哀が假在のものにして實在のものに非ざることは第一の要素ならん。吾れ人は其悲哀なる事實の目前に實在せざることを確信するが故に其悲哀より快感を享くるを得る也。小說詩歌の中に苦める少女義人を見て快感を覺ゆるは此少女義人が現在我が目前に苦むに非ずして只我が想像中の幻影が苦み悲めるに過ぎざる事を確信すれば也。演戯は想像の活潑なる者に過ぎずして吾人が胸中に描ける幻影に假の實在(若し斯く言ふを得ば)を與ふる者のみ。吾れ人は現に號泣の聲を聞き現に愁嘆の形を見る然れ共此悲哀の間に快感を覺ゆるは之れ摸倣に過ぎずして實の人が實に號泣し實に愁嘆する者に非ざるを知れば也。若し舞臺上の判官が眞の判官にして眞に腹を切り眞の顏世御前が眞に髮を切り眞の由良の助の無念が眞に五臟六腑に浸渡らば忠臣藏四段目は徒に殺風景を呈せんのみ何の快感か之れあらん。要するに悲哀の快感は只想像の塲合に於てのみ起るもの

氏は又道德的觀念が悲哀の快感を構成するを說て曰く

吾人の感覺する悲哀の情が若し道德的の感情又觀念と相團結する時、若くは其悲哀の情あるが爲に猶一層道德的の觀念又感情の光輝を表はす時は、其悲哀の情は多少道德的の愉快を來すの緣由となるべし。假令ば高節廉潔の士が堪え難き艱苦の中にありながら、猶能く其節操を守るの有樣を見れば、一方には素より悲痛辛酸の情あれども、然し却てそれあるが爲に又一方には(即ち其艱苦悲痛にも猶能く耐え得るの點に於て)道德的心識の滿足を發揮せしむ。故に悲壯なる戲曲の主人公が正義公道を守て終にそれが爲に非命の死を遂ぐるの樣を見る時は、悲痛慘憺の狀は固より之に過ぐる者はあらざれども、然れども其慘憺たるが中にも尙一種高等なる快樂の存するを覺ゆる也。

大西君が此論は、一見ずれば委曲明晰殆ど餘蘊なきが如きも、退て沈思すれば吾人の胸中尙幾多の慊焉たらざる者ある也。理論の聲は如何程高きにも係らず、吾れ人の經驗と天性とは吾人をして容易に首肯せしめざるなり。社會的性情と道德的觀念とは、各々悲哀の快感を構成する要素の一なるは予の認むる所なり。然

憶の心より出づる者に非る乎。他人の悲哀を想念して之が爲に一滴の涙をだも灑ぐ時は、我心は恰も或壓束を脫したるが如く、譬へば堰かれたる水の其堰を取り去られたるが如き感なくはあらず。此感覺は即ち吾人の性情の發せんと欲する所に發して滿足を與へたるの心識なり。此同感又惻憶の心は即ち之れ社會的性情と名くるものにして而して此性情の滿足する所に一種高等なる快感を生じ來る也。彼の他人の悲哀を想ふて自らも共に悲哀なる所に一種無類の快感の存するは、即ち主として此社會的性情の滿足に起因するものに非る乎。我れ他の爲に泣く時は我が狹隘なる窮屈なる利己の壓束を脫して、我が心は人類の大なるが如く大に、社會の弘きが如く弘きを覺ゆ、之れ我心の一時の救濟（サルベーション）に非る乎。狹隘なる利己の心は我が本眞の性に非ず、他人の爲に涙を流して他と我との差別を忘るゝ時は、是れ我本性の光明を放つ瞬間なり。吾人は其本性に復らんことを求む、是れ之れによりて假我を去りて實我を得ればなり、是れ眞に我に復るなり。彼の社會的性情は即ち此復我の一片のみ。詩歌と云ひ美術と言ひ此大目的に向て進む者に非る乎。

に曰く、悲劇を見、或は詩人小説家の名著傑作を讀で愁嘆悲哀の陳述に至る毎に、成程我身も斯かる場合にあらば斯の如き悲愁の情を起せしならん、斯の如き嗟嘆の辭を發せしならんと思ひて、我想念と妙に相符合するが故に、我心中言ひ難きの愉快を感じ來る也、と。予は大に此説に賛成なり。讀者が茲に注意すべきは、大西氏が「成程斯かる場合にあらば、我身も斯の如く悲愁の情を起せしならん」と言へる語の中には其戯曲の工みなることを暗に包含せること也。想ふに我が言はんと欲して言ひ得ざりしことを言ひて、吾人が眠れる理想に符合するは審美的目的の一端に非ざるか。大西氏が此説は予が後に論ぜんとする審美的觀念の一部を言ひ表はしたる者に非るなきを得んや。

以上の三は大西氏の寧ろ枝葉視したる處のものにして、氏は次の社會的性情と道徳的觀念とを以て其議論の本領となせり。予は當世評論家の卑劣手段なる引用（クォーテーション）の錯誤を避けんが爲に左に原文の儘其主意を轉載せむ、

試に婦女子が芝居の愁嘆場見に行て涙を流して悦ぶ時の心を想像せよ、こは如何なる性情の作動に基ける乎、他の悲哀を見て落涙して憫れがるは之れ惻

氏は一、二、三、を以て第二位の原因とし、其主因を以て終りの二項に歸せり。今氏が說の大要を擧げんに

一、對照作用　とは、他人の悲哀を見て我身の悲哀なき現狀に對照し、比較的に其身の幸福なるを思ひて快感を生ず。然れども之れ他の不幸を見て喜ぶものなるを以て、或る限を越れば吾人の德義心を害し、却て不快の念を起さしむべしと。予は之を以て何人にも普遍なる說となす能はず。無情無慈悲なる人はいざ知らず、少くとも予は予が悲哀の快感を以て對照作用に負ふ所ありと思ふ能はざるなり。

二、變換作用　は吾人が新奇を好むの情に歸因するものにして、其の新しと言ふ一點に於て已に幾分の快感を與ふるものなり。大西氏は、假令へば阿古耶の琴責、オフェリアの發狂に對する快感を以て、齷齪たる世間の俗務を打忘れ、壯大異常なる悲哀の中に我心を埋沒せしむるに依ると言へり。予は此說の普遍ならざるを疑ふ也。何となれば吾れ人は此浮世にありて經驗する所の多くは悲哀にして快樂は極めて罕なればなり。

三、想念の符合、此點に於ては予は全然大西氏の說に同ずるものなり。氏の說

揭げられき。又數月前に至り『城南評論』と云へる一雜誌に此問題に關する一小文を見しが只大西氏が說の一部分を敷衍したるに過ぎざるが如し。吾人の記憶する所によれば、此二者の外我邦の學者が此問題に就て論究を試みたる者なきが如し。大西氏は其の該博なる學識と流麗なる文章とを以て略々滿足なる解釋を與へられたるが如しと雖も、吾人は未だ以て首肯する能はざるものあり。予は我議論を行ふの便宜の爲に、先づ氏か說の大要を批評し、然して後我說を述べんと欲す。

大西氏の論文は一般に悲哀の快感と題せしを以て、今予が題目とせる戲曲の悲哀よりは其範圍廣し。然れども氏が論旨の十中八九は戲曲の悲哀にありと云ふも不可なし。氏は悲哀の快感の主なる原因を以て左の五種に分てり

一、對照作用
二、變換作用
三、想念の符合
四、社會的性情
五、道德的觀念

戯曲に於ける悲哀の快感を論ず

芝居の愁嘆場程不思議なるものはなし。吾れ人が只悲しき運命に陥らざらんが爲に、只泣かざらんが爲に平生營々として勞苦するにも係らず、其の貴重なる貯蓄錢を割て喜で泣きに行くとは、抑も解すべからざる事に非ずや。最愛の「悴が御役に立つたる」は何故に吾人に樂しきや。「焦るゝ夫のあるぞとも」知らで焦るゝ盲目の佳人は何故に吾人に快きや。「情と義理にひしがれて」「いつそ殺して下さんせ」ともがく可憐なる貞女を見「胴慾な母樣覺えて居さつしやれ」と泣き出す薄命の孤兒を見「去年の秋の煩ひに」死に果せざりしを悔む節婦の繰言を耳にし、其のひとり子の「なぶり殺し」を現在に傍に見て居し」慈母の述懐を聞き、吾人は何故に言ふに言はれぬ快感を覺ゆるや。顧ふに愁嘆場なる者はいかなれば吾れ人の苦しき、つらき、悲しき涙をして斯くまで快く甘露の如く流れしむるにや。之れ吾人にとりて頗る面白き問題なりとす。

昨年の春文學士大西祝氏は『悲哀の快感』と題する精細なる一論文を『國民の友』に

文藝評論補遺

と思ふ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日蓮上人日女御前御返事（五二四頁參照）

（三十五年八月―十一月）

御布施七貫文送り給ひ畢。屬累品の御心は、佛虛空に立たせ給ひて、四百萬億那由他の世界に、武藏野の芒の如く、富士山の木の如く、簇々と膝をつめよせ、頭を地につけ、身をまげ、掌を合せ、汗を流し、露しげく、おはせしに、上行菩薩等……に法華經を讓らんが爲めに三度目まで頂をなでさせ給ふ。譬ば悲母の一子が頂のかみを撫づるが如し。……寶塔品の御時は多寶如來、釋迦如來十方の諸佛、一切の菩薩集まらせ給ひぬ。この寶塔品は何れの處にか只今ましますらんと、考へ候へば日女御前の御胸の間。八葉の心蓮華の內に、おはしますと、日蓮は見まいらせて候。……凡夫は見ずといへども、釋迦、多寶十方の諸佛は御覽あり。……女人の御身として法華經の御命をつがせ給ふは、釋迦多寶十方の諸佛の御父母の御命をつがせ給ふ也。

それから十方世界に及ぼして全天下を統一するのであつた。日蓮の死んだ後に、日持上人は是の大目的を繼ぎ、日本國内の事は他の諸老僧あれば事足りなん、予は是より國外に布教して祖師上人の遺志を繼ぐべしと唱へ、弟子僕從等は危難に勝えざるべしとて一切謝し去り、己れ一人にて今の北海道に渡り、それから北方亜細亜大陸に渡つて遂に其の行衛を失つたとの事である。近來或探險家の話には、浦鹽の附近で六百年前に日本僧の虐殺せられた遺跡を發見したさうだが、或は是が日持の最後ではあるまいかと想像されるが、何分確かなことが明かでない。

諸君、昔から海外から僧侶が來て我邦に布教した例は非常に多いが、我邦から海外異教の蠻族に布教に出かけた人は日持の外に誰があるであらうか。死は素より覺悟の前である、たゞ其の蠻族に妙經の福音を傳へ、一人でも二人でも眞理の光に救いたいと云ふ其の大慈悲心は實に廣大無邊と云はなければなるまい。諸君よ、我邦に六宗十宗と宗旨の數は非常に多いが、日持の如き海外布教の爲に死したる高僧を出したる宗旨は日蓮宗を除いて何處にあるか。日蓮上人の宗教的理想の廣大なることは、其の一つの感化たる日持上人の行動を見ても、よく解かること

本山で、其の開祖が即ち茲に云ふ日興上人である。

是の寺を日興が起てた因緣が甚だ壯快だ。元來法華經といふも經には迹門と本門とがあつて、前者は學校で言はうならば豫科、後者は本科の樣なものだ。日蓮宗の人に言はせると、此の本科は日蓮上人が初めて開いたので、其の以前には豫科、即ち迹門ばかりであつたのだ。そこで日興上人の考へたには、昔し傳敎大師は法華經迹門の戒壇を起す爲めにすら、比叡山に三千房を建てた。今我祖師日蓮の開かれた本門の戒壇を建てるには、須らく一萬坊を造るべしと。そこで土地を日本一の富士山にして、一萬坊を建築する繩張りまでした。其の跡が今でも萬坊が原と云つて名前だけではあるが日興上人の大計畫を後代に語るべく殘つて居る。今の大石寺は日興の當初の考では書院位の積りで、本堂は別に大々的なものを造る筈であつたとのこと。是の事は別に何でもない話の樣ではあるが、日蓮上人の敎理の廣大なる一つの感化として見ると、頗る面白いのである。

それから次は日持上人の事であるが、是の人の事蹟は日蓮主義の發表としては更に痛快だ。元來日蓮の理想は、其の妙經の眞理を以て先づ日本國を歸依せしめ、

の大勇猛心を有し、又た其の感情に於ては溫潤閑雅、所謂る大丈夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の人情を有たれたのである。

上人の教學、上人の信念、乃至所志は如何。是の問題は今茲に述ぶるには不適當であるから乞て略す。所詮かゝる偉人を雜誌の一小文で讀者に解らせやうとするは、初めから無理なことであるから、我輩はただ上人に就いて見る所の十の一を記し、少年諸君が後日の研究の助けにしやうと思ふのである。

(附)日興、日持が事

日蓮上人の事をお話した序に、我輩は是非諸君に其の二人の弟子の事に就いて話したい。坊さんの事ばかりで煩さいであらうが、暫らく辛抱して聞いて下さい。

日蓮上人に六人の高弟があつて、通例六老僧と呼ばれて居る。日興と日持とは是の六老僧中の二人であるのだ。

東海道の鈴川の停車場から五里あまり、大宮からは三里もあらうか、富士の裾に大石寺と云ふ寺がある。是の寺は餘程の大伽藍で日蓮宗富士派と稱する一派の

はあるが、其の裏面に溫潤玉の如き愛情の春の泉の樣に溢れて居つたことは、『御書』を讀んだ人、讀んで解し得た人の必ず認むる所であらう。女性に對しては常に親切を極められ、夫婦の愛情に對しても常に深厚なる同情を寄せられて、孝順の情に至つては實に後人を感動するに足る美蹟を遺された。即ち六十近き老境に到りながら、尙ほ父母を懷慕するの情に堪えず、身延の山に引籠つてからも、毎日五十餘丁もある險山を攀ぢのぼりて、遙かに生國房州の空を拜まれたとのことは、實に孝行の鑑と云ふべきではないか。是れが一日二日や、一月二月の事ではない、雨の日も雲の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたと云ふに至つては、眞に驚嘆の外は無いでは無いか。斯う云ふ慈悲愛情の話しが上人の生涯には外にも甚はだ多い。世人が折伏の側の上人のを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。されば史傳の中にも、一たび上人を拜したばかりで其の慈光に射られて其のまゝ歸依したと云ふことは度々出て居る。是を要するに上人は知識に於ては當時の如何なる碩學にも匹敵し得べき深大なる素養を有し、又た其の意力に於ては生死を顧みずして其の信念所志を貫徹する

に我邦の前後の歴史に類例の無い事であつた。

諸君よ、古人の語に一義を執つて十年を蹉ゆるものは必ず眞面目也、と云ふことがある。日蓮は二十二年の長い〳〵月日の間、常に生死の間に出入しながら其の眞理と信奉せる法華經を說いた。これ程の眞面目が又と世にあるであらうか。されば天も人も次第に是の至誠の聲になびきて、其教は漸く都鄙に擴がり、俗人の皈依するものは言ふまでも無く、淨土、禪宗等の僧侶共も追々と改宗して念佛の代りに唱題の聲きがだん〳〵と高くなつた。北條より足利の時代になつてからは是の宗門の勢はます〳〵盛大となり戰國時代にありては、天下の寺院の中にて法華その中ばを占めたとのこと。後年に至つて色々の事情から追々衰微して、今日では眞宗の全盛に壓倒されて了つたが、其れでも堂々として尙ほ日本國の大宗門たるを失はぬ。是れ皆日蓮上人の遺業の餘澤である。

それで日蓮の人物は如何であるかと云ふと、決して世人の多く信ずる樣な剛情我慢一方の人では無い。『七大寺の寺塔をば燒拂ひて彼等の頸を由井が濱にて斬らずは日本國必らず亡ぶべし』など痛言せられたあたりは、實に辛辣激越の極みで

れむとし、或は敵人に要撃せられて命を落さむとし、其他刀杖瓦石の災難其數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席煖まるに遑なく、生疵の身に絕ゆる間は殆ど無かつたとの事である。諸君よ、日蓮の受けた迫害は實に慘酷極つたものであつた。そして其時間も一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に廿二年の長い間であつた。彼は是の長い〳〵廿二年の間、絕えず自己の信じたる眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して泰然として動かなかつた。常に是の臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ糞を米に換ゆる也と言ひ、假令日本國の位を以て誘ふも、父母の頸を切らむと脅かすとも、我は決して是の眞理をば捨てじ、其の外は大難風の前の塵たるべしと宣言して、天下何の恐るゝ所なく、憚る所なく、聲の根の枯れざるかぎり、筆の毛の續かむかぎり、正々堂々と天下に呼號した。法然や親鸞の樣に朝家權門に知己あるでは無く、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧俗を敵として折伏の法鼓を鳴らし、時の執權たる北條氏を逆賊と呼ばり、僅の小島の主と卑しみ、七大寺の寺塔をば燒き拂ひて彼等の頭を由井が濱にて斬らずば日本國必ず亡ぶべしと極言して、一世の耳目を警醒せし其の態度の雄々しさ、男らしさは、實

才器品性なくして偶然に大事を成し遂たものが多い。例へば高山の上に吹き上げられた種子が其處に生長して亭々として天際に聳ゆる樣なものだ。もし揮一貫の赤裸にして突き出したならば、東家西家の權兵衛八兵衛同樣の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば彼等の多くは所謂る時勢の寵兒であるからである。

日蓮上人は其人物に於ても其事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。先づ其事蹟から考へて見ても、安房の一漁師の子に生まれ、幼より出家して清澄に上り、後叡山に學び、十二年の游學の後、當時に行はれたる佛教諸宗門の何れも教祖なる釋迦の佛意に違へるものなることを悟り、其故山に歸りて初めて法華の新宗門を開きしが、聞くもの皆狂として取り合はず、却て在來の宗門を罵詈せるを怒りて彼を殺さむとせしものすらあつた。日蓮遁れて鎌倉に至り、淨土や禪宗の全盛を極めつゝある是の大覇府の大道に立つて念佛者は無間地獄に墮つべし、禪は天魔の業ぞと大呼せしかば、執權北條氏の怒にふれて一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、其間或は暴民の爲に庵室を燒かれ、或は龍の口に引かれて首斬ら

今日も尙ほ昔の如く人の心を司配し感化して居る。春秋戰國の王覇の爭ひも支那の歷史に空しき文字を留めたばかりであるが其の當時に陳蔡の野に飢えた孔子の敎は今も尙東洋文明の根據となつて居る。世に所謂る英雄豪傑の事業は壯快は壯快であるが畢竟一時の野心家の野心を滿足せしむる外に、多く後世に影響を與ふるものでは無い。是を喩へるならば、丁度仕掛花火の一時人目を眩まして覺えず快哉を叫ばれるが、間もなく消え去つて素の暗黑に立ちかへる樣なものだ。是れを文藝や宗敎の勢力の深大にして且つ永久なるに較ぶれば、事業の價値何れか大なりやはおのづから明かであらうと思ふ。されば英國の哲人カーライルと云ふ人は、英吉利が一人のシェキスピアを有することは印度帝國を有するよりも尊いと言つた。

又人物の上から見ても、眞に大なる人物とは其理想高尙にして品性尊く、且意力情操の絶大純潔なる人を謂ふのである。世の所謂る英雄豪傑と呼ばるゝ人の中には、其の表面の仕事こそ人並以上に大きいが、其品性の是に伴うて高潔なるは極めて乏しい。つまり彼等の多くは遇境の幸なりしが爲に、己れ眞に是に當るべき

前の塵の如きものであらうと想はれる。

一〇　日蓮上人

日蓮上人のことは、此の正月の本誌に鎌倉のはなしを述べた折りにも一言したことがあるが、其の人物に於ても、事業に於ても、鎌倉時代はをろか、日本の全歴史を通じて上人に匹敵し得べき人は幾人も無からう、否全く無いかも知れぬ。

少年諸君よ、此世の中で眞に偉大なる事業を云ふのは、何も人を殺したり國を取つたりするとのみでは無い。少年の心にも兎角頼朝や太閤の様に天下を取つたり外國を征伐したりするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは左程に尊むに足らぬことの様に思はるゝであうが、是れは大いなる誤りである。人を殺し、城を屠ることも難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までも其の勢力を有するとは人間の事業としては更に大きく、又更に尊むべきとてはあるまいか。諸君よ、歴山大帝の遺業も羅馬帝國の覇權も其時々の榮落に過ずして、今日に於ては何の跡かたも無いが、アリストートルの學術や基督の教は

更に當時の時勢如何にと見ると、鎌倉覇府の出來たばかりで、東夷の時を得顔に跋扈した時だ。武士の外に人無く、弓矢の外に譽れ無き有樣で、一世を擧げて利祿にあこがれ、功名にかつゆる人のみであつた。かゝる時に西行が其豪宕の雄心を一双の簑笠に托し、飄然として天地の間に高踏せる有樣は、風神實に千古の偉觀と云ふべきである。天下は取つても俗物は免れぬ賴朝が、是の高士を提へて射御の法を問ふだに魯かしきに、餞別に銀の猫を贈つたなどは實に滑稽の極みと言はなければならぬ。鎌倉に西行の見えたのは、恐らくは掃溜に鶴の降りた樣なものであつたらうと想はれる。

西行は建久元年二月十六日、即ちきさらぎの望月の頃に死んだが、不思議なことには其前に詠んだ歌の心によく協つて居る。曾つて櫻花を詠じて

願はくは花のもとにて我れ死なん
そのきさらぎの望月のころ

あゝ西行の生涯にくらぶれば、所謂る英雄豪傑の名を成し志を遂げたるなどは多く語るに足るまい。人生是の境地に安住することが出來るならば、功名富貴は風

りては無かつた。されど義清(西行の俗名)は早くより人生の無常を感じて遁世の志已みがたく、其心がけ一つで如何なる榮華にもありつき得べき身をば、わづか二十三の壯年で妻子を捨て、祿位を抛ちて一朝圓頂緇衣の人となつた。其の昔し印度の悉達多太子の遁世と較べて、事に大小はあらうが、悟れる道に高下はあるまいと思はれる。

遁世後の西行の生涯ばかり、高潔なるものはなかつた。桑門に家なし、須らく抖擻して身を終るべしとて、爾來五十年の間身を雲水に托し、東國、西洲、地として到らざる所無く、到る處風月に會して其の意を得れば嘯咏自適して自ら樂む。其の樂みや、恐らくは天地人生の外に超絶したものがあつたらうと思はれる實に羨ましき境涯と云はなければならぬ。彼れは又能く歌を作つたが、時に感じ物に觸れて自然に其の天眞を吐き出したので、世の歌人の如くに題を設け句を探りて故らにありもせぬ感興を造り作すの類では無かつた。されば其の後世に殘せる歌集山家集を見れば、吾等は行雲流水の姿の如く、自然其物のひゞきに接するの想ひがある。歌も玆に至ては直ちに天地の心である。

因に云ふが、文覺の傳記は源平盛衰記にあるのが一番精しい樣に思ふ。そして源平盛衰記は文覺傳の有無に拘はらず、是非少年諸君の、一度は讀まねばならぬ本である。

九　西行法師

これは富士見西行の畫や銀の猫の譚で、諸君のおなじみの西行法師である。昔から公卿や武家の出家した例しは數へきれぬ程にあるが、この西行の如く、其の心事の高邁に情操の清朗な人はまたと二人はあるまいと思はれる。

或は戀の爲に、或は利祿の爲めに世を遁れて悟り顏をした人はいくらもある。例へば熊谷蓮生坊の出家の如きは古今の美談になつて居るが、其の原因は、同僚の武士と領地の境界爭ひをして訴訟に負けた爲めであるとすれば、一向に有り難いとは思はれない。斯んな例と較べると西行の出家は實に高尙なものであつた。

身は田原藤太秀鄕の嫡孫として代々名譽の武家に生まれ、夙に北面の武士となりて弓矢のほまれ一時に轟き、加ふるに和歌の道に秀でゝ鳥羽上皇の御覺も一通

あらう。これには色々歴史上の議論のある事だが、要するに文覺の力によりて源氏再興の緒の啓かれた事は爭はれぬ事實で、取も直さず文覺は其赤手を以て天下の風雲を捲抒したものと言はなければならぬ。いろ〳〵考へて見るに、ドーモ文覺は謀叛氣に充ち〳〵た、平和の嫌ひな人物であつたに違ひない。賴朝に謀叛を勸めたばかりではない。己れ自からも仕舞には守貞親王を擁立して廢立を謀つた。事現はれて佐渡に流さるゝや、始終洛の方を睨んで、物も食はずに罵り死に死んだとの事だ。六代御前との關係なども、或は其間に例の謀叛氣がからんでは居なかつたかと想はれる所がある。

然しながら、如何樣の缺點があるにもせよ、彼れの如きは實に珍らしい人物だ。如何にも狂氣じみて居る、然し斯う云ふ人物が境遇次第で所謂る天下の大豪傑大偉人となるものだ。そして境遇と云ふものは誠に偶然なもので、同じ種子でも山の上に生へるものと谷の底に生へるものとの間に非常に相違のある樣なものだ。人物の眞價は境遇などには無い。その人物の人物たる所の價値は如何なる境遇にあつても不變なものと云ふことを吾々は悟らねばならぬのだ。

た。斯んな事てとう〳〵捕へられて牢に入れられたが、彼れは少しも當初の意氣を撓めず、口を極め聲を限りに朝家皇室の無道を罵り、且つ咀つたと云ふことだ。

其れから前に述べた樣な罪で伊豆の國に流された。出發際に淸水の觀音に文を書かせたことや、天神の鳥居の柱に金を埋めたと云ふことやで、番兵共にからかつて遊んだ事は、前號の本誌に出て居つたから、讀者も記憶して居らるゝであらう。遠流の途すがら、遠州灘で暴風に遇つて船が覆へらうとした時、文覺のみは平氣で嘯ひて愉快々々と叫んだ。そこて船中の人が出家の身で居ながら人の難儀を面白がるのは怪しからんと怒つたので、それでは一つ龍神共を叱りつけて遣らうと、彼れは舷頭に立つて、龍神共よ、文覺の乘れる船なるを知らずやと高聲で呼はつて海上をぐつと睨んだ。スルト不思議や風波も忽ちに鎭まつたとの事だ。これは耶蘇の傳などにもある例で、文覺の豪膽と自信とを證するものだ。自ら佛天の上に威力を有つて居ると自信するもので無ければ、斯んな眞似は出來るものでは無い。

文覺一生の事蹟で尤も名高いのは、例の賴朝に兵を擧ぐることを勸めた一件で

て神に近づくと人は必ず悪人として罵られ、狂人として嘲けられる。文覺なども不完全ながらに此種の人物中の一人であつたのだ。

諸君は我輩の言を怪まずに、一つ彼れの傳記を考へて見るが好い。亂暴なのは彼れの子供の時からであつたが、幼にして父母を失つたので、人が其の親のことを話しをすると聲を立てゝ泣いたと云ふことだ。彼れが至情の人であつたことは明かだ。かの有名な袈裟御前の一條なども、天眞爛熳の至情の人でなくては、如何してあの樣な事が出來やうぞ。さて坊主になつて、高雄の神護寺の爲に勸進帳を提げて法皇の御所なる法住寺殿に出掛けた時、恰も管絃の御催しがあつて、文覺の願意は願みられなかつた。スルト文覺は躍り上つて奥庭の中に入り込み、兩手に勸進帳を捧げて天も震へよと計りに大音聲に讀みあげたので、折角の管絃も腰を折られて了つた。衛士等聲々にその無禮を責むれども動かず、右手に短劍を抜き放ち、眼を瞋らして殿上を睨みて、珍らしくも無き管絃に氣をとられて王法擁護の大勸進帳を疎外にするは以の外の御不覺ぞや。我れ誓つて皇家の資格によりて此の大願を果さむと欲す。願ひ叶はずむば死すとも此場を動かじとぞ呼ばはつ

るのである。

八 文覺

サア今度は文覺上人の番だ。是れは又一種奇怪な、日本の歴史中には極めて例の少ない性質を有つた荒くれ坊主であつた。

何んで其樣な荒くれ坊主が好きなのか、と讀者は問はれるであらうが、我輩は何も故らに奇怪を好む譯では決して無い。我輩の文覺に惚れたのは、清盛に於けるが如く、其の我執の一念の強くして、其の意力情熱の遙に尋常人に優れたる點にあるのだ。その事蹟によりて想像するに、文覺は清盛と同じく小兒の如く無邪氣な、天眞爛漫な、己れの欲する所必ず是を行ひ、行ひたる所必ず是を仕遂ぐる底の大煩惱心、大執着心のあつた人に違ひ無い。從來の習慣に本ける當代の道德から見れば、其行ひには隨分亂暴な事はあつたが、自ら顧みて毫も疚しい處がなく、臆面なく、躊躇なく、何事でも其所信を斷行した事は殆ど清盛と其性格を同じうして居る。我輩の眼から見れば、斯う云ふ風の人は普通の人よりも神に近づいて居る。そし

十中の八九は是の案文をば時忠の意見と想像するものである。是の請文の大意は、平家物語や外史を讀んだ人は誰も知つて居る通り、一の谷で死んだり生捕られたりした一門は重衡のみに限らない。彼れたゞ一人生還を希ふ理由は無い。法皇にして若し當家に同情を寄せられ、乃至忠盛、清盛三代の忠勤をお忘れなくば、一日も早く西國に御幸ありて共に關東の逆賊を追討せられよ。御申越の三種の神器は正統の天子一日も御身を離すべきものでは無い。鸞輿都に還らざる以上は神器も永く邊土にさすらふ外は無い。不幸にして當家の武運拙なく、官賊成敗處を異にしたらむ時には、洵に殘念ながら高麗、契丹、乃至天竺の端までも行幸の御供をしなければならぬ。悲しい哉、人皇八十餘代の間傳承あやまり無かりし日本國の靈器は、一朝にして異邦の寶とならむとは。——とまあ斯んな意味の文句であつたと思ふが、區々たる興亡成敗を意に介せず、飽くまで大義名分と共に斃るゝの決心を示したことは、實に平家の滅亡をして其榮華よりも大ならしめたものだ。かゝる崇大なる思想を抱ける時忠はまあどんな人物であつたらうか。惜しい哉、歷史は彼れに就いて多くを語らないが、我輩にはドーも心ゆくばかり床しく思はれ

はれ〳〵て九州の大宰府に行つた時に、緒方の三郎が使を遣はして、法皇の宣旨なれば已むを得ず敵對する旨を言ひ送つた。其の時、時忠は衣冠束帶して使者を引見し、一天萬乘の天子は今茲にお在しますのに、法皇の宣旨とは何事ぞ。況してや緒方は累代平家の郎黨にして故内府殿の蔭により九州の追捕使となりし者ならずや、恩を忘れ義に背く不忠の者共、やがては天罰其身に報はれむずと、大喝して使を睨み還した。此時の時忠の態度は毫も敗殘の一族を代表するの狀なく、堂々たる王者の權力を挾むものゝ如くであつた。見事なる遣りかたではないか。

一の谷で意氣地なしの重衡が生捕にされた時、狡猾なる後白河法皇は、三種の神器を都に戻せ、さらば重衡を還してやらうと、其の時は屋島に籠つて居た平家の本陣に言ひ送つた。其の時の平家の答は有名なる屋島請文とて、眞に平家の沒落史の終りのページを輝した崇大雄麗なるものであつた。此方の代表者は勿論宗盛ではあるが、愚昧の宗盛に何んで斯んな立派な考へがあらうぞ。恐らくは知盛の意見か、さなくは概ね時忠の思想に出でたるものに違ひない。我輩は前後の事情に考へ、且つ平家の外交文書を司つて居た人が時忠其人に外ならざる點から見て、

七　平時忠

平家の一族で清盛に次いで我輩の好きなのは平大納言と通稱されたかの平時忠だ。是の人の事柄は平家物語や源平盛衰記などに、處々に出て居るばかりで其の傳記の精しいところはとんと分らないが、其の屢かながらに傳はつて居る事蹟から考へれば、一風變つて時流を拔いた、一種の面白き人物であつたに違ひない。少い時に叡山の坊主の騒ぎを一片の辭令で鎭めた頓智、さてはかの一門都落の匆劇に際して、人々の心も空に顚倒して居る時に、己れのみは獨り泰然として供奉歯薄の煩はしき事共を落ちもなく指圖したる沈毅、或は又平家世盛りの頃に、此の一門に非れば人にして人に非ずと廣言せし傲慢、——是等の事蹟を合せ考へて見ても時忠は一種の立場のある、世の褒貶などには頓着せぬ我執のあつた人に違ひないと想はれる。況んや都落以來、一門流離の間に周旋して毅然として大節を維持し、安徳天皇を飽まで正當の天子ともり立て、亡びるまで大義名分を辱めなかつた其の勳功は、平家の末路に萬丈の光焔を放ちたる見事な事柄だ。例へば西國を追

は行かぬが、畢竟は己れの意志を思ふ存分に發揮したと云ふことに歸着するのだ。彼れは從來のすべての習慣道德の以上に立ちて、己れ自らの自由と威嚴を保つことを一生の事業とした。されば彼れは其一生に於て己れの本志に背いて行つたことは殆ど一つも無い。他から見て不忠と謂はうが無道と謂はうが、彼れは己れ自らの本心が眞實に認めない以上は決して己れの志を枉げたことは無つた。其胸には些の僞りも飾りも無く、眞に小兒に見る如き赤誠と眞情とがあつたばかり、其心事は常に清朗快濶で、未だ曾て後暗き哀情に疚しき事などは無かつたのだ。後世の歷史家は皆不忠不義を以て彼れを批難するけれども、皆是れ從來の倫理上から見た陳腐な議論で、是の從來の倫理を超脫して己れ自らの新倫理を有てる清盛其人の眞性格の批評としては、少しも當つて居ないのである。

此邊の精しい所は我輩が、曾つて少年諸君の爲に『平相國』と題する書物を書いて東京堂から出版してあるから、それに就いて了解して貰ひたい。茲に書き盡すには餘り問題が大き過ぎるのである。

忠度等は要するに匹夫の勇士で、トテモ大局の經綸に任ずべき者ではない。源氏の方では、頼朝は流石に人に將たるの器量はあつたが、一時の得失に眩みて永遠の計を知らず、其の襟度狹少にして、動もすれば讒奸の乘ずる所となり、自ら其の骨肉を害したる冷刻殘忍の性情は、人として實に忌はしき限りと謂はなければならぬ。良し彼れをして秀吉の雄圖あらしめ、家康の成功あらしめても、是の性情を以てしては、到底下劣の人物と評さなければならぬ。義經は梶原景時の評した如く、一介の猪武者として能く敵を殺し城を破たる、謂はゞ活ける武器の樣なものだ。木曾の冠者はいさゝか其の人物に面白い所はあつたが、是れとても死ぬるまで己れの立場が解らずに、無意味に軍をして斃れた大將たるに過ぎない。是等の人々から見ると清盛は當代を超絶せる大人物と謂はなければならぬ。

單に事業の成敗の上から見れば、清盛は頼朝に及ばない。されど是の不完全なる、偶然の出來事の多き現世では、事業は兎ても人物を評價する目安とはならぬ。清盛の大いなる點は其の心事、その性格の上にあるのだ。

清盛の性格が如何に勝れて居つたかは此の短文に於てなか〳〵說き盡す譯に

六　清盛入道

源平時代には流石に人物が多かつた。平家の方では清盛を初めとして重盛、知盛、忠度、時忠などは何れも非凡の人で、またそれに次ぐ郎黨家從の面々にも少からず英物があつた。源氏の方でも一族の頭領頼朝を中心として、武勇たぐひ無き源九郎義經、木曾の冠者義仲、又それに從へる勇士の數々は平家にも劣らず賑やかであつた。今是の兩家の人物を通觀して予の最も好める人物を擧げやうならば、我輩は先づ指を平清盛と平時忠とに屈せねばならぬ。

我輩から見れば重盛の如きは是れまで世人が崇敬する如き大人物とは思へない。謂はゞ義理人情に拘泥して一身の兩全に惱んだと云ふ境遇にいさゝか人の同情を招くの外、別に超脫非凡の才器と云ふものが少しも現はれて居ない。況んや其末路の如きは、其身の冥福を死後に求むるに急にして、此れまで折角忠孝兩全の道に苦心した帝室の事も己れの一門の事も拋却して顧みなかつた樣な形跡のあるのは、氣の毒ながら前後矛盾の薄志弱行として批難しなければならぬ。知盛、

手ならば何十萬騎でも驚かぬ爲朝も是の事を聞いては流石に驚かずには居られぬ。洛に上れば九州の權力を失ふことは分りきつて居るが、父の難儀には替へられぬ。遂に其の軍を解いて僅に二十八騎を召し連れて罪を階下に待つた。あゝ是のやさしい心ばへは九州の總追捕使よりも何程美事であるか分らぬでは無いか。

爲朝の上洛した時、時しも例の保元の亂であつた。爲朝の計にして用ひられなば軍は事も無く勝ちであつたが、惜しや賴長の爲に敗軍となつて爲朝も遂に伊豆の大島に流された。父の爲義などの死際はまことに見苦しかつたが、爲朝のみは男らしく戰ひ、男らしく敗け、又男らしく捕はれて、男らしく流された。此末が如何に男らしかつたは、諸君は馬琴の弓張月で知ることが出來るのである。

伊豆の大島で爲朝は決して死なぬ。馬琴の書いた樣に琉球に渡つたに違ひない。しかしそこに朦雲國師や鶴龜などが居つたや否やは分からないが、爲朝の後半生には實にいろ〳〵の目覺ましい事蹟があつたに違ひない。是の快男兒の後半世を捉へて弓張月を拵らへた馬琴の着眼は流石〳〵と褒むべきである。

の世に八郎爲朝が居るならば、その二十八騎の中に加はつて五人張の矢聲に耳をそらせたいものだ。

爲朝の傳記は精しくは分らないが、その分らない處に又云ひ難き面白味がある。まづ其の少年時代が鬼神の樣だ。公卿天下の京都にはあまり人物が小供ながらに大き過ぎるので、十三歲の年に九州に勘當せられた。（諸君よ昔から親に勘當せられた人に大人物が多いものだ。）するとまあ何と云ふ驚くべきことであらうぞ、十三歲の歲の三月末から十五歲の十月までわづか三歲あまりが間に、大軍をしたことが二十餘度、城を落したことが數十個所、遂に九州を攻め落して自ら筑紫の總追捕使となり、鎭西八郎爲朝と稱した。諸君よ、これは十五歲の時だ。今時の少年ならば、まだ煙草も喫へない腕白ざかりで、やつと中學校の二年生位のものだらう。是の時爲朝は其の腕の力一つで九州の總追捕使となつたのである。

然しながら強いばかりが爲朝では無い。香椎の宮の神主共が爲朝の强勢に驚いて朝廷へ上訴に及ぶと、朝廷からは爲朝の上洛を促した。それにも應ぜぬので、朝廷では卑怯にも父の爲義をして其の子の咎として官を罷めしめた。官軍の討

うならば、父の棄家が或時藤原公任と云ふ人の噂をして、吾が子供等は此人の影だに踏み得るものは無からうと歎息した。その時道長は、吾れは其影を踏まずして其面を踏まうと放言したとのことだ。又華山院が或時物すごき雨の夜に侍臣をして暗い處に行かしめしに、他の人はいづれも怖れて空しく歸つたのに、道長のみは獨り大極殿に至りて其柱を削つて證據に持つて來たと云ふ話もある。又棄家の葬式の時に門外俄に騒がしくなつて、並み居る人は何事が起つたかと色を失つた。たゞ道長のみは少しも騒がず、徐ろに人を遣はして見せしめ、何れもお騒ぎあるな、馬の逃げたるに候と申されたとの事だ。當時兵家の頭領源の頼光は道長の沈毅を歎美して眞に大將軍の氣量なりと云つたさうだ。こんな話て其の人物を想像しても、凡人てない事が分かると思ふ。

五　鎭西八郎爲朝

藤原時代の末から源平時代にかけて、武人の名あるものは隨分多いが、鎭西八郎爲朝、あゝ是れぐらひ小氣味の良い、男の中の男らしい快男兒は又とない。あゝ今

人はまづこの道長の外はあるまい。藤原氏の歴代には随分榮華を極めた人もあり、又藤原氏以外にも平清盛とか、豊臣秀吉とか、乃至徳川家康とか云ふ人は、何れも人臣の榮を極めては居るが、或は其生涯に曲折あり、奇嶇あり、或は終りを全うせざるものゝみで、道長の様に滿月の缺けたることなき様の榮えは無かつた。人間として是れぐらひ思ひのまゝに現世を送り得るものならば、先づ生き甲斐のある生涯と云つても好からう。

この世をばわが世とぞ思ふ望月の
　かけたることも無しと思へば

こんな大々的氣焰をまことに吐き得た人は、日本歴史中に先づは道長一人であらうか。

それに道長は大抵の人の想像する様に優弱な貴公子では無い。當代第一流の人物であつたに相違ない。太平の時勢を粧飾したばかりで、艱難の場合に臨まなかつたから、其人物がどれ程エラかつたかは今日から分り難るが、その傳はつて居る事蹟によりて見れば、なか〳〵の豪傑であつたらしい。その一二の例を擧げや

天平時代は我邦歴史中の最も光彩ある部分で、是に匹敵し得べきは藤原時代と徳川時代の一部とてある。支那で言へば唐の盛りの時代で、其の歳時まてよく合つて居るのも不思議だ。聖武天皇を假りに比較すれば、唐の玄宗か、徳川時代の綱吉將軍でもあらうか。但し玄宗や綱吉の惡い點に似て居らせられると云ふ譯では決して無い。其の意氣の豪放な、襟度の快濶な、且つ事業の宏大なる點に於て似通へる處なきにしもあらずと思はれるのてある。

四　藤原道長

藤原時代ては我輩は藤原道長が一番好きだ。菅公の如きは一言で云へば意氣地のない小膽な政治家、乃至泣きみそ詩人で、トント面白い處は無い。今日天滿宮などゝ千年祭などゝ騒いでやる程の人物とはドーし、ても思はれない。それから見ると菅公の敵たる時平の方がドレ程エライかわからぬ。その時平よりも又此の道長の生涯が餘程面白いと我輩は思ふのてある。

日本の歴史中で思ひのまゝに一代の榮華を極め、圓滿に生きて圓滿に死したる

る材料は銅凡そ七十四萬斤、黃金一萬兩餘、水銀凡そ六萬兩（一兩は今の凡そ百八十匁）。なんと廣大なものではありませんか。天平時代は今を去る一千二百年も昔で、採鑛冶金の術などのトント開けて居なかつたことは言ふまでも無い。それにも拘はらず、かゝる大いなる金銅佛を鑄造せられたる天皇の御志は實に勇偉盛大なものと云はねばならぬ。諸君よ、天平以後に隨分いろいろの建築物も、佛像の鑄造もあつたが、是の大佛の半分程のものすら造り得た人はない。鎌倉時代に出來た長谷の大佛は其長け奈良の大佛の三分一にも及ばない。豐臣太閤があの樣な大勢力を以てして其計畫した大佛は遙かに是れに及ばなかつた。假りに明治の明けた今日に於てかゝる大佛を造らうとしても、それは技術の點に於ても國力の點に於ても、決して容易に出來るものでは無い。それを聖武天皇が一千數百年の未開の時代に、其の熱烈なる信仰の力にてかゝる大建造物を成就せられた事は實に目覺ましい事と云はねばならぬ。啻に事業その物が目覺ましいのみならず、是によりて天皇の御志の程を想像し奉れば、申すばかりなく貴とく仰がるゝのである。

のて、其の證據には、すべての政事を擧げて佛事に關するものが十中の八九に及むて居る。つまり今日の言葉で言へば、政教一致が天皇の大理想であつたのである、諸君よ、一口で政教一致と云へば何でもない樣であるが、是れ程重大な、又高尙な思想は世の中に少ない。天地人生のあらゆる事はすべて佛意によりて支配せらるゝ、是の大慈大悲の佛意に適ひ、佛の宣傳し給へる眞理の榮光を此世に弘むるところ、其處に政治家帝王の職分がある、——少し難しい言樣だが、まあざつと斯う云ふ考へが即ち政教一致の根本の思想です。そこで聖武天皇が是の思想に基ついて凡ての政事を佛教上から行ひ、御身自らは三寶の奴と稱して佛弟子とならせ給ひ、治國安民の祈りにも、喪祭冠婚の禮儀にも、すべて佛式を用ひ、唐や天竺のはてからまでも有名な坊さんを呼び寄せて重く用ひた事などは、普通の歷史家が一言に事も無げに言ひ去る樣に、決して天皇が佛に淫したと云ふ樣な譯ではない。實に其根本には先に述べた樣な高尙な、且つ重大な思想があらせられたのである。

天皇の事業の規模の大きい事を最も明かに示めすものは、諸君も定めて話に聞いて居らるゝかの奈良の大佛である。是の大佛は丈け五丈三尺五寸、是に要した

而して是を爲さゞりしは、通例史家の謂ふ如く蘇我氏の權勢を憚りての事か。我輩は聊かそを疑ふものだ。是れにはいろ〳〵歷史上の小面倒な考證と議論とがあるが、今は言ふまい。唯諸君が是の問題に就いて研究を試みむことを希望して、一言の注意を書き留むるのである。

若し一言にして太子の人物を言ひ現はさうならば、我輩は答へむ、太子は推古時代のハイカラの大將なりと。無論このハイカラの意味は今時のもみあげを短かくして赤い襟飾を付ける連中とは違ふ。世間では往々伊藤侯をハイカラの元祖などゝ言ふが、聖德太子はこの意味に於けるよりも遙に純良な高尙な意味に於ての大ハイカラであつたのです。謂はゞ太子は後世ハイカラの手本と稱しても好いてせう。

三　聖武天皇

我邦の天子樣の中で聖武天皇ほど其精神に於ては理想が高く、其事業に於ては規模の大きい御方は稀であらうと思はれる。天皇の佛敎信仰は非常に熱誠なも

りかゝつて居る、他方には是の新文明に反對する維新前の攘夷黨の樣な頑固連も居る。太子この間に立ち、尙ほ年若の御身を以て斷然新文明の輸入を決行して、本邦の歷史に一大進歩の動機を與へた、その功績は實に千古不磨とお褒め申しても決して溢美では無い。身自ら率先して佛道に歸依し、從來我邦固有の神道を差し措いて佛像寺塔を建造し、いろ〳〵の御經の講釋などをし、且つ佛敎の精神に本づいて十七條の憲法を作るなど、其の當時の人から見たならば非常に急激な改革であつたに相違ない。すべての改革に免れざる不平や怨みは必ず此時にもあつたに違ひないが、是等の不平連を抑制し心服せしめて、是の歷史上の大改革を全うしたことは、一つは蘇我馬子の樣な有力な味方のあつた爲でもあらうが、また太子其人の偉大なる人物の力に歸せねばならぬ。まことに珍らしき大德の偉人と云はねばならぬ。

馬子が崇峻天皇を弑した時、其罪を問はなかつたと云ふ廉で、太子を攻擊するは今迄の歷史家の通例の議論であるが、これもさう手短かに斷案を下しにくいと思はれる。太子の聰明にしてかばかりのことを辨へ知らぬ譯は無論ない。知つて

予の好める人物

一 はしがき

歴史中の人物で誰が一番エライかとは、恐らく少年諸君の間にしば〳〵繰返さるゝ問題であらうと思はれるが、それは人の好き〳〵で、とても議論の干るものでは無ひ。そこで我輩は一つ日本の歴史中で我輩の好きな人物に就いて少しく諸君にお話しやうと思ふ。無論我輩が好きだからと云つて其の人が誰の目にもエライと云ふ譯は無いが、好きな我輩から見れば如何にもエラク思はれる。それには何の不思議も無い、エラク思はれゝばこそ好きにもなるのです。

二 聖徳太子

聖徳太子と云へば三尺の童子も其名を知つて居るから、こゝに事新らしく述べ立つるにも及ばないが、我邦の上代の歴史で此人位ひの大人物はあるまい。推古天皇の時代は丁度明治維新の時の様に、一方には佛敎と云ふ新文明が外國から渡

ずや。表には花と刺と別々に織りなさるれども、其裏面を見れば、花を織る絲、即ち是れ刺を織る絲に非ずや。

（三十五年七月）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

日蓮上人盂蘭盆御書（治部房の祖母に）

蠻牙（シャウガ）、燒米、瓜、茄子等、佛前にさゝげ申候事。盂蘭盆と申候事は、佛の御弟子の中に目揵連、……此人の母をば青提女と申す。其母慳貪の科（トガ）に依て餓鬼道に墮ち候ひしを、目揵連尊者の救ひ給ふより事おこりて候。……藤は松にかゝりて千尋（チヒロ）をよぢ、鶴は羽を、特みて萬里をかける此は自身の力にはあらず。治部房も又かくの如し、我身は藤の如くなれども、法華經の松にかゝりて妙覺の山にのぼりなん、一乘の羽を頼みて寂光の空にもかけりぬべし。此羽を以て父母乃至七代の末までも弔ふべき僧なり。あはれいみじき御賣は持たせ給てをはします女人かな。……

もかゝさず、一日に一度は必ず攀ぢ登りて遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳中の事實に比較し得べき美談なりや。

上人病あつくして甲州の身延より武州池上に移る時、身延所領の檀越波木井（ロさ）氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされける。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書中にも、是の馬のことをいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに『知らぬ舍人を付けて候はゞ覺束なく覺え候、罷り歸り候はんまで此の舍人を付け置き候はんと存じ候』と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、ひとへに一匹の馬を慈しむの情、たとしへなく貴からずや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃なるもの也。能く人に忍び、世に戻るをのみ偉人の業と心得るは豪傑の半面を遺れたるもの也。この情愛なくば、かの豪邁もあらじ。かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して茲に豪傑の全人格を造る也。かの美はしき薔薇の織物を見

也。この事は上人の遺書を讀めば解ることとなるが左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。是の人武士の身分ながら夙に妙法に歸依して上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て上人と共にもろ〱の迫害を被れり。上人龍の口にて斬られむとせし時は、路上に馬の轡をとりて慟哭し、刑場に從ひて殉死せむと決心せり。上人は深く是人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に靄然たる恩愛の情をたゝえ、殊に或時は『殿(四條金吾を指す)にしてもし死後地獄に墮せられなば日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとへ釋尊及び十方の諸佛手をひき袂をとらへて淨土に迎ふるとも振り却つて必ず殿と共に地獄に墮つべし』との意を述べられしが如き、其恩情の濃やかなること喩ふべきもの無し。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして他面に於て是の兒女の涕涙ある、殊に貴むべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なるは六十年の生涯を通して最も明に顯はれ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年『日本六十六箇國、島二つの内に五尺に足らざる身を一つ置處なく』して身延山の深谷に隱るゝや、九個年が間、五十餘丁の險山を一日

三日蓮

日連上人の事は予が本年初刊の本誌に寄せたる『鎌倉のはなし』の中にて、鎌倉時代のみならず、日本歷史上の何れの時代を通じてたぐひ稀なる豪傑なる由を述べ置けり。實に上人は宇宙間第一の眞理たる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はむとの大願を起し、是の大願の前には、假令へ法華の宗門を捨てなば日本國の位を讓らむと誘はるゝも、題目を已めて念佛を申さずば父母の頭を刎ねむと脅かさるゝも、ビクともせじと覺悟し、其外の大難は風前の塵に等しと傲語し、鎌倉殿の迫害に遇ふや『わづかの小島の主等が威さんに恐れては閻魔王の責をば如何すべき』と宣言し、『法華經の爲にこの臭き頭を刎ねられむは砂に黃金を換へ、糞に米を代ふる也』と喝破し、眼中國家の權勢もなく、北條氏の威武もなき、眞に高天濶地獨立獨歩の大豪傑なりしが、さりとて豪邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しきやと言ふに、大に然らず。日蓮上人が人情にあつく、恩誼に深く、其の情時としては禽獸の果にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪えざらしむるものある

達せしを見るべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

序なれば消息文のことに就いて一言すべし。消息の文は日常往復の間に、不用意にして成れるもの多ければ、隨うて其の人の眞面目のおのづから字句の間に現はるゝこと多し。普ねく世に示めし、又は後代に傳へむとして書ける文章は、良しんば書く當人に於て別に修飾の意なしとするも、知らず〳〵の間に天眞爛熳の趣を缺くことあるを免れず。況してや多くの凡人にありては初めより衒矯の意ありて書くこと多ければ、眞正の自己は邊幅の修飾に掩はれ、小人も君子に見え、鄙吝の人も寛裕の長者に見ゆることまゝあり。消息文にはかゝる弊なく、書く人の平生をありのまゝに書き現はす塲合多し。されば後世史家傳紀家が古の人物を知るには是上無き材料なりと謂ふべし。讀者諸子も古人を研究する際にはよくよく是點に注意する所無かるべからず。秀吉の消息文よりふと思ひつきたればかくは一言の注意を申す也。

すべきものありき。文祿三年に吉野山の花見の折柄

吉野山たれとむるとはなけれども
　今宵も花のかげにやどらん

と吟じ、又

歸らじとおもふ家路を入あひの
　かねこそ花の恨みなりけれ

と歌はれしなど、殆と歌人のおもかげありて其風興のこゝろざし床しく覺ゆ。其他九州征伐の途次、或は小田原陣の往返にさま〴〵の詠歌ありしは、古の英雄傑を横へて詩を賦せし風流にも似たりとや云はん。その手紙なども、三上博士の鑑定にては自筆の傳はれるもの少からず。殊に小田原在陣の中に其の母君に送れる書中に『そもじさま御ゆさん候て、さをも慰さみ、わかく御なり候て給はるべく候たのみ申候』の語の如き、博士も曾て讃嘆せられし通り、千言萬句を費すとも、子の親に對する愛情は、此の『若くなり給はれ』の一語より適切なるはあらじ。かゝる消息文尚他に多し。秀吉が恩愛の情に厚く、且つ其文章の天眞を流露して自然の妙境に

清正の手によりて造營修繕せられざるは無し。殊に池上の本門寺の如きは當時清正の手にて建立せられしもの、實に七十五間四面の大伽藍にして、落成の折には、清正かの三尺五寸の大烏帽子を冠りしまゝ直立して緣の下を通行せりと謂ふ。今の淺草の觀音樣でも十八間四面に過ぎず、七十五間四面と云へばうそらしき程の大建築なりと謂ふべし。

世には朝鮮征伐や虎退治の清正のみ傳はりて、是の法華經の大信者たる清正は多く傳はらず。惜むべきことゝ思ひたれば、予の聞知せる大要を記せること右の如し。

二　秀吉

清正の信仰につれて思ひ出だされるゝは秀吉の恩愛也。秀吉と云へば粗野、不文、智に長け、情に乏しき人の樣に想ふめれども、此頃の歷史家の取調べたるところにては、是の想像大に當らざる所あり。秀吉は如何にも大學者には非ざりしが、さりとて文盲者にはあらず。智者は大智者なりしが、恩愛の情に於て　靄然として掬

料にとて自ら法華經數部を手寫し、それを漆もて固めし也。法華經は一部八卷二十八品の大經典なれば、それを數部までも淨寫せる紙數は莫大なりしに相違なし。分捕功名の外に餘念なかるべき戰國の武士にして、かゝる宗教上の心懸ありしは誠に珍らしき例なりと謂ふべし。

かく三尺五寸の大烏帽子は手寫の法華經にて固められしのみならず、傳ふる所によれば、是の烏帽子の內部の頂上には清正が平素信仰して措かざりし日蓮上人の黃金像を安置せしと謂ふ。法華經と日蓮上人とを頭に戴ける清正の志や貴しと謂ふべし。

頭に法華經と日蓮上人とを戴ける清正は、口に南無妙法蓮華經の題目を絕たざりき。傳ふる所によれば清正は何時の頃よりか一日に數千遍の題目を唱ふることを立願し、行住坐臥、少しも是の大願を怠らず。戰場に臨み敵軍と戰ふ際にも、尙ほ一刀を下す每に南無妙法蓮華經と唱へざるはなかりしとぞ。

斯かる熱心なる法華經の行者、日蓮宗の信徒なれば、清正が是の宗門の爲に盡力せし事少からず。例へば池上の本門寺、身延山の久遠寺、京都の本國寺など何れも

豪傑の半面

一　清正

天照大神、正八幡は申すも畏こし。人臣と生まれて死後に神に祭られ、遍ねく國民に拜まるゝもの、まづ指を天滿宮と清正公とに屈すべし。天滿宮のことは人皆知れば、茲には清正公に就いて世人の多く知り及ばざる事柄を談るべし。

清正公とは言ふまでもなく加藤清正のこと也。清正と云へば豐臣太閤の幕下に忠勇無二の臣にして、殊に朝鮮征伐にて雷名をとゞろかせしことは三尺の童子も知る所なれども、世に稀なる法華經の信者なりしことは知る人多からじ。

よく繪圖に見る清正の甲の烏帽子は其長け三尺五寸ありと謂へり。この烏帽子は今も尚ほ熊本の某所に保存せられ、先年伊藤侯の巡遊せられし時試にそを冠られしに、よろけて歩み難かりしと云ふ事實によりても、そが如何に重量あるものなるかを想像すべし。かゝる重量ある三尺五寸の大烏帽子は何物にて造られしかと尋ぬるに、數部の法華經にて張り固められし也。即ち清正は其の烏帽子の材

權力にも匹敵して其の威嚴を保ち得べきことを現示せる人道上の一大事實として深く自ら省みる所あれ。諸君よ、貢を拂ふものゝみが臣下には非ざる也。吾人は吾人の心靈の支配の下に如何なる人をも、如何なる國をも征服し、其の上に君臨し得るものなることを悟れ。カイザルの物はカイザルに還せ、神の物は神に還せとはそも〳〵何事を吾人に敎ゆるか。諸君よ、自ら其中心の靈性に火を點じて古賢先聖の遺業を照せよ。個人は決して其の小弱を歎くべきに非ざる也。

予は是等の點に就いて熟考の料を供せむが爲に玆に諸君の爲に病餘の筆を驅りて『冠鐺日親』の傳を書きぬ。予をして無益に書かしめずむば幸ひ也。

（卅五年五月）

僅に出獄の諸を得ぬ。

是より後近畿の貴賤皆日親の威風に畏れ、信服するもの益々多し。幕府の力を以てして尚ほ且つ其言動を制すること能はず、天下又恐るゝに足るもの無し。是に於て折伏の法鼓いよ〳〵高く響き、逆化の幔幢ます〳〵廣く翻へりぬ。

十餘言

是より以降、八十二歳の天壽を以て其の終りを告げたるまでの日親の生涯は、法華經の行者として實に成功せるものなりき。世人は、冠鐺の一事を知つて未だ多く其の他を知らずと雖も、其の偉德高行の世に傳ふべき甚だ多かりき。されど玆には暫らく『冠鐺日親』の迫害の事蹟を記するを以て足れりとせむ。

讀者よ。日親の生涯の如きは啻に一宗教者として歎美すべきのみならず、そもそも一個人の信仰の力が如何に外來の障害に打勝ちて其の精神の自由と榮光とを保持し發揮し得べきものなるかを示す絶好の事例に非ずや。願はくは一日蓮宗の僧侶の行爲として卑むこと勿れ。個人の勢力が時としては地上の如何なる

寛漫なる、三年を經て禍に遭ふとも何ぞ必ずしも汝を惱ませるが爲ならむやと。日親乃ち答へて曰く、あゝ君三年を以て遲しとなすか、然らば則ち今より百日に滿たずして必ず法華經の現罰に中らむ。其の期に及び、悔悟して日親を呼ぶも時既に晩からむ也と。義敎聞いて且つ怒り且つ笑ひ素より深く意に介せず。

されど偶爾か、將た必然か、日親の預言は果して空しからざりき。彼れが義敎に答へしより恰も九十九日に當り、時は嘉吉元年六月二十四日、義敎俄かに赤松滿祐の爲に弑せられぬ。誰れ言ふとは無く、是れ正しく法華經の行者を苦めたる現罰なりとの說、京洛の間に普ねく傳はりぬ。義敎の遺族臣下等震ひ怖れ、俄に日親を赦して餘殃を免れむとす。然れども彼れ頑然として獄より出ることを肯ぜずして曰く、吾れ身命を捨てゝ重苦を忍ぶは一に將軍及び其の一族をして邪法を捨てて正敎に歸せしめむが爲也。諸公もし日親の罪なきを認めなば、何ぞ直ちに法華に歸依せざる。吾れの赦さるゝと否とは又何かせむ。若し將軍の一門にして改悔の實を擧げて吾法に隨はずむば、吾れ永く斷じて此獄を出でじと。百方陳謝し慰諭すれども聞かず。是に於て義敎の近親一人已むを得ず日親の門下となりて、

吃々として嬰兒の語るが如し。加ふるに冠鐺の後頭皮攣拘して赤禿となり、髪を剃ること能はず。已むを得ず。長ずるに隨つて鑷を以て是を芟る、其の形童子の頭に似たり。日親乃ち戯れて曰く、俗諺に老いて再び小兒となると云へり、それ日親の謂ひかと。

九　義教の現罰

百般の苦痛は遂に法華經の行者を如何ともする能はざるのみならず、日親の凡人に非ざるを悟りて歸依の念を起すもの漸く多し。義教憤悶自ら措く能はず、使を獄中に遣はし、日親を詰問せしめて曰く、汝が奉ずる所の法華經の明文に據れば、法華の行者を惱ますものは必ず現罰を被ると。今我れ汝を苦むること年餘、而かも我身に於て一分の障害無し。法華經の明文妄語に過ざるか、將た又汝は法華の行者に非ざるか、二者其の一に居らざるべからず、如何と。日親色を正して答へて曰く、經文何ぞ妄ならむ。吾れ將た眞に法華の行者也。あゝ將軍現罰を望むか、三年を過ぎずして必ず奇禍に陷らむと。義教聞いて笑ふて曰く汝の言何ぞ爾かく

を嘲り嗤ふものゝ如し。

八　冠鐺日親

是に於て『冠鐺』の名の由來せる一大暴行は彼れの頭上に加へられぬ。嗚呼是れ人間の想像し得べき最大の肉躰的苦惱にあらずや。

もろ〳〵の苦責一も功なきを見るや、獄吏上命を受け、一の大いなる鐺を燒きて紅色に到らしめ、以て彼れが圓顱の上に被らしむ。平生酷烈の拷問に慣れたる無情の獄吏すら皆顏を背けて敢て正視するもの無し。然れども日親少しも驚かず合掌唱題して是を忍受し鐺の冷ゆるまで毫も動搖せず。人皆驚歎してそゞろに畏怖の念を起しぬ。是れより京師の人彼を稱して『冠鐺日親』と呼びぬ。

冠鐺の責めも尙ほ日親の信仰を動かすに足らず。彼れ獄にありて日夜に正法を宣べ、旦夕題目の聲を絕たず。其の聲遠く獄外に徹して、道行くもの覺へず足を停め、爲に信歸の念を起すものすらあり。義敎乃ち命じて其舌根を拔かしむ。獄吏憐み、根を拔かずして少しく舌頭を切る。是より日親の言語往日の如くならず、

らし鐵を碎く、吾れ何ぞこの暫時の凍寒を痛みて永世の苦因を作らむやと。又高聲に題目を唱へて毫も怯辟する態無し。是の種の拷責幾度なるを知らざるも、自若として驚かず身軀亦信念の力によりてか、ます〳〵剛健を加へて少しも衰弱の兆を示さゞりしぞ不思議なる。

或時は日親をして浴室に入らしめ、戸を閉ぢて外より燒くこと凡そ半日許り。人皆彼れ既に死せりと謂ひて戸を開いて是を見れば、彼れ尚ほ熱湯中に端坐し、依然として小音に題目を唱ふ。人皆驚きて人間の業に非ずとなしき。

或時は彼を捉へて仰いで其の口を開かしめ、水を杓子に酌みて口に流し入る。三十六杯に到るまでは彼れ自ら是を數へ記したれども、其後は幾十回なるを知らず。而かも尚ほ死に到らず、從容として面に顰蹙の色をだに現はさゞりき。

或時は竹の串を陰莖に貫き、或は赤く熱せる鍬を兩脇に挾ましむる等、殆どありとあらゆる危害と苦痛とを與へたれども、迫害の目的は一も其の功を奏せざりき。日親の信仰は日にます〳〵其の强固を加ふるのみ。初めより天傷を期したる身命も亦何等の障害を受けず。奇きかな、容色亦ます〳〵怡樂を加へて、人界の苦惱

らざる苦痛なるに、其の天井裏には長さ七八寸の大釘を隙間もなく逆に打ちて小しも頭を擡ぐる能はざらしめたり。然れども是の如きは彼れが是より受くべき迫害に比すれば言ふに足らざるのみ。

或時は赫々たる炎天の日中に日親を獄庭に引き出し、薪を山の如く四方に積みて火を放ち、彼をして其の中央に坐せしめ、笞を擧げて叱して曰く、汝若しこの苦痛を免れむと欲せば宜しく題目を止めて念佛を唱ふべしと。彼れ答へて曰く、苦熱まことに忍び難しと雖も謗法の罪を作る時は無間地獄に墮す。無間地獄の惡熱は三千世界の火炎を併すも尙ほ十の一にだも及ばず。吾れ何ぞ是の小苦に勝え得ずして死後無量劫の苦因を種うるの愚を爲さむやと。泰然として法華の首題を唱へて動搖すること無し。

或時は凛々たる嚴冬の中夜に彼を戸外に曳き出し、其の衣を剝ぎ、赤裸々のまゝにして庭樹に縛し、水を灑ぎつゝ笞うつこと徹夜、而して叱して曰く汝若し是の苦寒を免れむと欲せば何ぞ彌陀の稱號を唱へざると。日親答へて曰く、寒冷眞に骨に徹す、唯邪法を信ずる時は八寒地獄に墮するを如何。八寒地獄の寒苦は火を凍

なる强言を吐くとも、若し臨むに重罪者の責を以てせば立ろに題目を棄てゝ念佛を唱ふべきのみ。願はくは將軍熟く是を計らむことをと。

素より短慮偏見にして初めより日親を惡める義教なれば、忽ち是の甘言に惑はされて宗門對決の擧を中止し、直に日親を捕へて獄に下しぬ。時維れ永享十二年二月六日。

七　大迫害

日親獄に繋がるゝこと一年半計り。後世の人を戰慄せしむべき慘酷なる迫害は此の間に行はれたり。個人の意志が如何ばかり外來の勢力に抵抗し得るものなるか、將た一念の信力が人に如何に强大なる意志を與へ得るものなるか。讀者よ、日親が迫害の事例に就て深く自ら省みる所あれ。

恐るべきは先づ獄舍の構造なりき。高さ僅に四尺五寸、廣さ僅に疊四枚を布くのみ。而して特に日親を苦めむが爲に是中に投ぜられたる四人は、獄吏の哀みて大人に減ぜしまでは實に三十六人なりき。四疊敷に三十六人、是れ既に忍ぶべか

書を作り、剰さへ佛子法臣豈公命に恐れむやと公言せりと謂ふ。是れ明に幕府の威權を無視せるもの、法に於て恕すべからざるや明けし。然れども彼れ亦深く佛法に歸依して其の所信の爲に身命を顧みざるものなりと聞く。故に我れ今彼れを刑するに先ち、彼れと諸師とを相對せしめ、法華經と餘經との深淺勝劣を我が面前に決せしめ、以て彼れが折伏の邪法を摧破せむと欲す。如何と。

淨土、禪宗の諸僧は學識信行に於て素より日親の敵にあらず。皆彼れと對論せしめられむとを恐れ、聲を齊うして答て曰く、凡そ八萬四千の敎理、一代五時の說法は皆機に應じ根に隨ひて成佛の道を敎へざること無し、何ぞ獨り法華の一經に限らむや。日親何者ぞ、みだりに私見を以て深淺勝劣の差別を立つ、其の說くところ全く佛法の眞意に達へり。何ぞ故らに相對して是非を爭ふに足らむや。且夫れ佛法と王法とは固と一體たり、されば世尊亦涅槃に臨みて法を國王大臣に付屬せり。後世佛子なるもの豈獨り公命に背いて而かも佛敎に忠なるの理あらむや。想ふに日親は輕浮狂橫の一增上慢のみ。妄りに怨嫉を抱いて諸宗を罵詈し、動もすれば身命を拋つと大言す。まことに一笑を發するに堪えたり。彼れ口に如何

さはれ、この立正治國論こそは實に日親が迫害史の端緒なりき。

六　捕縛

立正治國論稿既に脫し、將に淨書を幕府に上らむとす。この時日親を憎めるもの相謀りて義敎に讒して曰く、日親台命を蔑視し、更に公庭に爭訟せむと欲して此頃書一卷を作り、題して立正治國論と名づく。書方に成り、日ならずして閣下を驚かさむとすと聞く。彼れの不逞にして公威を輕むずること斯の如し、是をしも赦して罰せずむば、何を以て幕府の尊嚴を保たむや。閣下宜しく熟慮して計るところあれ、と。義敎聞いて憤怒に勝えず、而かも事宗門に關するの故を以て世上の物議を招かむことを恐れ、故らに輒すく刑を加へず。先づ淨土、禪宗の諸名僧を召して告げて曰く、日親法師と云ふものあり、諸宗を折伏して法訴數回に及べることは、諸師の既に知る所也。然れども我れ素より彼が言を信せず、去歲訴へし時我れ嚴かに彼れに告ぐるに、若し重ねて訴ふるあらば必ず斬に處すべきを以てせり。今聞くところに依れば、彼れ飽迄我が命を用ひず、更に公庭に爭訟せむが爲に既に一

刀杖尚汝が頭に加はらざるは我未だ命を下さゞれば也。汝若し悔ひ悛むることなく、今後重ねて訴ふるあらば、我れ必ず汝を捕へて斬に處すべし、と。日親是を聞いて曰く、吾はこれ佛子法臣たり、豈一將軍の命に恐れて大覺世尊の告敕に違はむや。『わづかの小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき』とは、高祖上人が吾等に下し給へる遺訓なり。吾れ豈身命を愛むの故に無上道を捨つるに忍びむや。吾れ今もし將軍の威嚇に恐れて諫爭を已めなば、世人は必ず言はむ、日親こそは市井に儉語すれども將軍の一言には猫の如くなれるを見よと。是の如くむば何を以てか祖師上人の遺業を紹述してこの無上大法を後世に傳ふるを得むや。死は初めより吾が期待せしところ、吾れ斷じて死を以て將軍と爭はざるべからずと。是に於て憤然筆を執りて立正治國論と題する一大論文を作る。この論文の主旨は日蓮が立正安國論に倣ひ、一代佛經に徵證して天下の治亂が宗門の正邪に依ることを證明し、法華經歸依の時機方に迫れる旨を述ぶるにあり。其の語激切にして明快、其の理着實にして透徹、日宗學者の永く感歎する所なりと謂ふ。

日親京に居ること數年にして其の敎漸く傳はり、遠近より來り聽き、或は勸請して化導を望むもの頗る多し。されど一世を風化するには先づ時の勢力の中心たる幕府を動かさむことを要す、是を以て彼れは數々書を足利將軍に上り、餘他一切の邪宗門を禁制して一佛乘の法華に歸依せむことを勸め、一日改悔の實を擧ぐること晩ければ一日國家の運命を縮むべきを極言しぬ。時の將軍は足利義敎也。彼れ未だ將軍の位に上らざりし前には義圓と號して眞言宗の僧侶にして、又天台の座主となりしこともありき。そも〳〵眞言宗と日蓮宗とは其の敎理に於て氷炭相容れず、されば日蓮は眞言を亡國の宗旨なりと罵倒し、念佛、禪宗にも增りて大折伏を加へたりき。されば平素より日蓮宗の主義を快よからず思へる眞言僧侶たりし義敎なれば、爭でか辭令激越を極めたる日親が上書を喜ぶべき。幕下の大道に於て他に宗門無からむ樣に四箇格言を唱道するだに、時の政府に對して傍若無人の振舞なるを、況してや直に書を將軍に上りて改悔を迫るが如きは、古今無双の大無禮と謂ひつべしとて、心に大に憤る處ありしが、流石に罪名なくして刑を加ふるを憚り、人をして日親に言はしめて曰く、汝が再三の上書、罪甚だ輕からず、而も

格言を絕叫し、諸宗無得道と呼號しぬ。往來の人は或は眉を揚げて怒るもあり、手を搏ちて笑ふもあり。或は瓦石を飛ばし、或は糞土を雨らし、狂漢よ、痴人よと罵りあひぬ。事の態ひとへに日蓮上人が初めて鎌倉小町の大通にて辻説法を開きしにも似たりけり。

素より法華經の爲に身命を抛ちたる日親なれば、かばかりの障害は風前の塵にも等しかりき。義を責めて言に典據あり、道を説いて論に條理あり。たま〳〵法門を爭ふものあれば喜むで是を迎へ、論難辯折、其の人を屈し、其の信を改めしめずむは已まず。熱誠面に溢れ、舌端火焔を吐くが如し。されば初めに嘲笑罵詈せるものも後には漸く敬尊の心を起し、連日法を聽くもの市の如し。攝州の富豪宇野、西村の兩人が彼れに歸依して一乘寺を建立したる等、感化の事例少からざれども、煩はしければ書かず。

かゝる間に迫害の歷史は漸く日親の身上に近づき來りぬ。

五　將軍義教への上書

到るを待ち、大折伏の法鼓を鳴らして妙經弘通の素願を果さむと期す。

四　一條戻橋の辻説法

時機は到りぬ。應永三十四年正月の末、日親初めて京師に上り、妙法七字の玄題旗を高く輦轂の下に掲げぬ。當時日蓮宗の風氣大いに衰へて人皆折伏を口にするものなし。嘗つて四箇格言を標榜して念佛者は無間地獄に墮すべし、禪宗は天魔の業ぞと叫びたる宗門は今や同席をも忌み嫉ひたる他宗の人々と往來し、彼等と同じく邪師勸請の神社に詣で、宗門に謗法の標札を押し並べ、因循姑息、偏へに一時の苟安を貪りて、かの高祖上人の樹立し給へる『一天四海皆歸妙法』の大理想を遺却し了りたり。日親京に入りてこの宗門の頽廢を眼前に視るや、憤慨に勝えず、大いに時流に反抗して折伏逆化の大法鼓を鳴らし、專ら高祖上人の遺風を紹述して一歩も假借するところ無し。かゝる有樣なれば自宗の僧俗と雖も日親を目するに邪宗を以てし、洛中を擧げて一宿を許すものだに無かりしかば、彼れは已むを得ず、一條戻橋の邊りに於て路傍に傘を立て其の下に立て、大音聲を擧げて四個

集まらむ。こは聖典の既に預め說き示めせるところ、高祖上人亦既に百世の龜鑑を垂れ給へり。吾れに於て素より悲み悔ゆるところ無し、寧ろ妙經色讀の行者として佛敎のこの身に空しからざるを喜ばむ。唯憂ふる所は此身の忍力足らずして中道にして迫害の爲に其の所信を枉ぐるあらむこと也。故に吾れ敎を弘むるに先ちて忍力を養成し、如何なる危害に遭ふとも泰然として動搖すること無き大覺悟を成就せざるべからず。

日親は是の忍力養成の手段として、殆どあらゆる苦痛を試みぬ。或は一日に一指の爪を剝ぎて針を其の跡に刺し貫き、十日に十指の爪を剝ぎ悉して、其の跡に針を刺すこと以前の如し。或は双手を沸騰せる熱湯の中に入れ、湯の冷ゆるまで是を忍ぶ。冷ゆれば復た新たに熱湯に入れて又冷ゆるを以て期となす。是の如く間斷なく双手を熱湯中に浸すこと一七日、皮爛れ肉解くれども彼れは毫も苦痛の色を示さず。是れ等の瘡傷また幾もあらずして舊に復しぬ。彼れは己れの忍力能くかゝる苦痛を甘受し得るを見、大に喜びて以爲らく、是等をしも忍ぶべくむば天下何物をか忍ぶべからざらむと。是より志いよ〳〵堅く決まり、偏へに時機の

る感化を及ぼし、其の僧侶の中には其の信仰の爲に時の社會又は政府に反抗して慘憺たる迫害を被りし事例甚だ多し。是れ我邦の宗教史上に於て日蓮宗の外には稀に見る所の事實也。今茲に述べむとする日親の事蹟は即ち是の迫害中の最も慘憺たる者の一也。

三　忍力試驗

日親の父母は審かならず。後小松天皇の御宇、應永十四年に生まれ、幼名を寅菊麿と呼べり。初めは上總國埴谷（はにや）の妙宣寺に入りしが、年十四の頃同國中山法華經寺に赴きて日進上人の弟子となりて初めて日親と名のりぬ。少にして才氣人に勝れ、膽力あり。夙に宗風漸やく衰へ祖業將に地に墜ちむとするを見て深く心に決するところあり。年二十一の頃より、一身を以て妙宗の弘通に委ね、高祖日蓮上人の遺業を繼紹して一天下を法華經の檀下に歸依せしめむとの大願を起しぬ。さりながら今の世は正邪處を換へ、權實道を違へたり。この謗法の國土に於てさしきつて妙經の眞理を說かば他宗の僧侶皆怒りをなし、百千の危難到る處に身に

の爲に反對者の迫害に遭遇せる例し一にして足らず。而して迫害忍受の模範を示して後世の同門を策勵したるものは即はち宗祖たる日蓮上人其人に外ならず。實に上人が禪、念佛、眞言の諸宗が全盛を極めつゝある鎌倉時代に於て、法華經の眞理を弘通せんが爲に如何なる迫害を忍受したりしやは、言葉も心もなか〳〵に及ばず。居處を追はるゝこと二十餘度、流罪に處せらるゝこと二度、其の間刀杖の難を被れること其の數を知らず。二十二年の長き歲月の間、一日も其の身の安きことなく、打擲の痕、刀杖の瘡身に絕ゆること無かりき。而かも上人は法華經の故に喜んで是等の迫害を忍び、此の臭き頭を法華經に捧ぐるは砂を黃金に代ゆるに等しとなし、假令ひ題目を捨てゝ念佛を唱へなば日本國の位を讓らむと誘はるゝとも、念佛を申さずば父母の頸を刎ねんと脅かさるゝとも、ビクともせじと誓ひ、その他の大難風の前の塵に等しと喝破せり。折伏逆化を以て宗門の主義とするの是非はもと佛敎々理上の問題なれば、茲には暫く說かず、唯々身命を拋ちて其の所信に殉し、嶄々乎として退讓することなき大丈夫の心事はまことに驚嘆の外無し。この日蓮上人が立宗の主旨と强毒逆化の模範とは、後世の日蓮宗の信者に偉大な

二　日蓮宗と迫害

古より宗教家がその信仰の維持の爲めに迫害を被りし事例は鮮からざれども、我邦にては日蓮宗の僧侶に於て殊に多し。是れには種々の事情あれども、その主なる原因は日蓮宗其物の立宗の主旨おのづから然らしむる也。その詳細は茲に述ぶる遑無けれども、是の宗の主義たる素と折伏にあり。折伏とは己れを立てむが爲に他を破するの謂也。即ち日蓮宗は釋迦一代の說法中法華經を以て唯一究竟の眞理と立て、他の經典を擧げてすべてこの法華經を說明せむが爲めの方便なりと爲し、隨つて是等方便の經典を典據とせる一切の宗門は權敎にして釋迦の眞意に非ずと論ず。かの日蓮上人が立宗の際に大呼したる所謂る四個の格言、即ち念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊とは是の折伏の主義を最も簡明に發表したる宣言にして、決して一時弘敎の方便などに非ず、實にこの宗門の世に存せむ限り、その生命、精神として護持すべき大主義なりとす。

かゝる折伏を主義とせる日蓮宗なれば、是の宗に屬する歷代の僧侶のこの主義

冠鐺日親

一　緒言

『冠鐺日親』とは本誌の讀者の多くにとりて恐らくは初めての名稱ならむ。されど予は望む、そが秀吉、家康の名の如く諸君に親しからざるの故を以て、小事實として輕むずる無からむことを。人を殺せる多少、國を取れる廣狹などによりて人物の大小を比擬せむは、少くとも吾等にとりては無意義の事也。苟も個人の勢力の深く、強く、若くは大きく現はれたらむ處、そこには必ず人生の眞の大いなる事實あらむ。まことに吾人の心情を動かすものは實に是の如き事實に外ならざる也。げに冠鐺日親は秀吉、家康の如く人を殺さず、國を取らず、所謂史家先生には何處に何時生死したる何人なりやをも知られざる眇たる一僧侶に相違なけれども、而かも尙ほ吾人の見て人生の大いなる事實とする所、亦この一僧侶の生涯に現はれたり。諸君は先づ予が本篇を述ぶるの趣旨を了解せざるべからず。

垂訓に基す。

是くの如きは四聖の傳記及び敎義の大要なり。嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの敎の、今尙ほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この敎に憑りて其の道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺德の高大、夫れ何を以つてか是れに比せむや。

（卅四年十二月出版中學國語讀本卷七）

は其の人の有なればなり。悲むものは福なるかな、其の人は慰められるべければなり。飢ゑ渇く如く義を慕ふものは、福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、其の人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、其の人は神を見ることを得べければなり。悪に敵する勿れ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉らして、是れに向けよ。汝の隣人を慈(愛)みて、汝の敵を愛せよ。人に見せむが爲に義を其の前に行ふ勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむる勿れ。偽善者の行に倣ふ勿れ。隠れたるを鑒たまふ神は、顯はに報ひたまふべければなり。人は神と財とに兼ぬ事ふること能はず。人を是非する勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ、然らば與へられむ。尋ねよ、然らば遇はむ。叩け、然らば啓かれむ。窄き門より入れ。沈淪に至る門は、其の路大きく、是れに入るものは多し。嗟呼いかに生命に至る門は窄く、其の路は細く、是れを得るもの丶少きぞや。凡そ是の訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、沙上に屋を架せる愚人の如し」と。基督敎の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、實に是の山上の

皆是れに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、是れを完うする能はざるもの多し、敎育の要ここに於いてかあり。既に敎育を受けて、身既に修まらば家自ら齊ふべく、家齊へば國自ら治るべく、國治れば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の敎は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの敎は、所謂る知德合一說なり。以爲らく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとは素と一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、其の實行を以つて最上の義務となさば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の滿足なり、而して靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に、人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在りと。

基督の敎は、愛の敎なりと稱せらる。所謂る山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以つて、左に其の大略を擧げむ。曰く、「心の貧しきものは福なるかな、天國

釋迦は衆生の爲に其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く「正義を信ずるものにとりて、死將た何爲るものぞ。吾れをして一日の生あらしめむか、其の一日即ち國民の迷を覺まさざるべからず」と。基督は己れを罪に陷るゝものゝ爲に、神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生まれたる處と時とを異にす。故に其の敎理にも亦多少の差違無きを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の敎理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。夫れ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり、情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脫却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是れ人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是れなり。

孔子の敎は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むるの基は孝にあり、故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、

基督豫めこの事あらむを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りて曰く、「神よ、彼れ等を許せ。彼れ等は其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭く勿れ。唯己れと己れの子との爲に哭け」と。是の如くして基督が三十三年の短き生涯は、十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後、其の弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、其の敎を天下に弘めぬ。基督敎卽ち是れなり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の內、釋迦を除いては、何れも轗軻不遇の中に、其の生を終りたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて、空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースと基督とは、何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺なりと謂ふべし。然れども、是れ等の人々の志す所は、天下後世にあり、現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏然として猶ほ歸するが如し。孔子は其の身の不幸を憂へじして、却つて「吾が道行はれずむば、吾れ何を以つてか後世に見えむ」と嗟嘆せり。

十。

基督は本名を耶蘇と云ふ。基督とは「膏灌がれたる者」と云ふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベテレヘムに生まる。其の生後四年を以つて西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリアと云ふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて、初めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歷游し、諸の迫害に屈せずして、其の福音を傳へたり。抑當時は羅馬帝國の榮華其の極みに達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐りに至りて天下寧日無し。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して、益放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。是に於いて、一世の人心は缺焉として、偉人の現出して、是の暗黑の社會を照破せむことを渴慕せり。基督是の間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然として是れに赴く。僧侶、學者、官吏等是れを喜ばず、以つて、猥りに新法異說を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。

則ち其の獨得の論法を以つて辯難攻撃して、一歩も假借せず、侃諤の正議、其の稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとして、ソクラテースを讒訴せり。其の訴狀に曰く、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を奬め、以つて人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテースが是の讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以つて國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるは無し。然れども、判官は、ソクラテースを以つて傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、曰く命のみと。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれむのみ、死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテース曰く、「爾一雞を以つてアスクレピアスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて、謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテースは、是の如くにして逝きぬ。年七

ふべし。是くの如くにして、四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず世又耳を名教に傾くるものなし。ここに於いて、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼吾が道遂に窮す。世遂に吾れを知るもの無きか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。」孔子對へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾れを知るものは夫れ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずむば、吾れ何を以つてか後世に見えむや」と。幾もなく歿す。時に年七十三。

ソクラテースは、希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。其の生まれたるは、凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること、二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは、奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂る詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に留まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテースは慨然として、時弊の救濟を以つて自ら任じ、盛に道を講じ理を談じ、諄々として倦まず、詭辯學者の輩に遇へば、

竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、其の浩大なる慈悲と、無邊なる智慧とを以つて、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み禮を習ふ。壯年の頃より、魯國の官吏となり、傍子弟を敎へて、夙に令聞あり。學德愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司空の職に就く。治績大いに擧がり、內外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ゐざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて、四方の遊說を試みぬ。當時の支那は、所謂る春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は少を併せ、權力の外に道義あるなし、敎化の凌夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、廻瀾を既倒に翻さむとす。志や高且大なりと謂

世界の四聖

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰れかこれを能くせむや。釋迦、孔子、ソクラーテス、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は、西曆紀元前凡そ五百年の頃、印度迦毘羅城の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、其の本名を悉達多と云ふ。釋迦は迦毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、其の妻子を捨てゝ、王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して、敎化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛敎は即ち釋迦一代の敎訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき、されど、徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と、慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相爭ふ所は畢

つては蝦夷の分子が大に混つて居る。第三の系統は越後より西海岸を傳ふて庄內、秋田の地方語となつて居る。第四の系統は會津より米澤、山形、新庄を經て、羽後に入り、こゝで西海岸の越後系と合併して北出羽の地方語を成して居る。

◎人種も大概言語と同一系統の上に分派されて居る。例へば庄內、秋田の人間は最上や仙臺の人間と毫末の關係もない。之れは古の所謂越の國の民族が西海岸に沿うて植民したもので、旅行者は其骨相の上に明に認め得る所である。其の他、家屋の構造にも、杉皮の屋根に石を上せ擔下を通行し得る樣にするなどは越後以北は大抵同じだ。女が夏になると乳房もあらはな袖無しと云ふものを着、又十六の娘、六十の婆さんも共に島田を結つて居る所など、丸で同だ。

◎以上は獨斷の說の樣だが、東北地方の旅行者、研究者は必ず我輩と見る所を同じうするであらう。精しい說明の如きは茲に述ぶるには餘り長いので已むを得ず略するのである。

（三十四年九月）

ては無いが、概しては朴訥を特色として居る。庄內は米澤、新庄と同國でありながら、其地理的分界の全て別國を爲して居る所から、却て越後、秋田の氣風に近い處がある。質朴剛毅の風は十分にあるが、因循姑息と偏僻嫉妬は其の明かな弱點だ。

◎仙臺は流石六十二萬石の領地だけに、何處となく大樣な所があるが、其の士風は決して貴むべきものではない。イヤに尊大で、可なり法螺を吹くことに上手で、そして狡猾な所もないではない。勿論是は弱點であるが、大藩の士風としては遙に會津、庄內の方が優つて居る。岩手、秋田の風も仙臺よりは好い所がある。

◎岩手と秋田とは妙に似た氣風を持つて居る。眞面目で、惡く言へば鈍間で、そして氣慨があり、隨分堅實な美質にも富んで居る。將來の東北より人物の出るのは是の二地方を最とすべきであらう。

◎言語の上から言へば、東北には明に四つの系統がある。一つは東海岸通りの言語で、水戸を發足點として三春、棚倉から相馬の中村邊に餘波が明に分る。是れが上州、野州より今の日本鐵道の幹線のある地方を通過して居る第二の語系を合して、仙臺語を成して居る。岩手、青森は仙臺語の更に東北化したもので、青森とな

◎先づ其の氣風の上から言ふならば、會津と福島とは同じ岩代の國でも長崎と蝦夷ほどの相違があるではないが。山形縣と云ふは決して高知縣と云ふの類ひでない、其中の米澤と山形と庄內との間に何處に類似の點があるか。仙臺と岩手とは隣國でありながら其の氣風は互に百里も隔たつて居る。一言すれば、九州には九州の氣風があり、四國には四國の特色があるが、東北には別に東北の特質として見るべきものがないのである。

◎會津の人は朴訥にして堅實の氣風を有つて居る。が、福島地方の人には全く商賣人の風がある。是れは伊達、信夫地方が昔より養蠶の土地であつた爲と、一地方の氣風を作るべき大藩の無かつた爲であらうか。二本松人は會津と福島とを折衷した樣な人である。

◎東北で會津の氣風に近いのは槍山越一つ隔たつた米澤であらう。然しながら是の米澤は鷹山公以來勸業が土人の間に行はれた餘風として、朴訥の外に一分の狡味がある。維新の際の去就は是の地方人士の弱點を示して居る。

◎山形、新庄は米澤のやゝ變化したもので、兎角はコセツイて狡猾な風も見えぬ

曰く『ゲーテは現世の寵兒なり、現世の中に最高の幸福を求めむとする人なり、彼は理想を解せず、爭でか其の中に生くるを得むや。是に反して予は飽く迄理想の子なり、現世よりも理想の世を重ずる人なり。斯かる性格を有する二人の並び立たむこと果して望み得べきことなりや。』

◎ハイヲがゲーテを誤解したるが如く、ゲーテも亦ハイヲを誤解したりき。『ハイヲは愛の外の凡ての物を有せり』と評したるゲーテは、是の諷刺家の腦中に如何なる情火を藏めしかを知らざりき。

（三十三年六月）

東北物語

◎東北と一口に言ふげれども、其の習慣、氣風、言語は素より、其の根本たる人種まても非常に懸隔せる幾多の異分子の是の一語の中に含まれて居ることを忘れてはならぬ。我輩の見る所によれば、東北は一個の地理的名辭の外に多くの特別の意味を有つて居ない。事業や黨派の上で東北人がお互ひ一致せねばならぬ樣に思ふのは大きな間違である。

人を觀察し、ありとあらゆる手段を盡したる後、辛やくにして研究の結果を得たり。其目次は(一)足の概論(二)舊世界に於ける足(三)象の足(四)ゲッチンゲン婦人の足(五)最後に能ふべくむば、ゲッチンゲン婦人の足の實物大の銅版を附する積りなり、云々。言ふまでも無く、是の嘲罵はゲッチンゲン府民を甚しく怒らしめたりき。

◎英吉利も亦ハイネの嘲罵を免れ得ざりき。曰く、予は英吉利を好まず、其處には、石炭の煙と英吉利人とあればなりと。

◎ゲッチンゲン大學教授ザールフェルドと云ふ人、奈破翁一世を手痛く攻撃せしことありき。奈破翁崇拜家たるハイネは一矢酬ゆる所なかるべからず。

即ち曰く『奈破翁の三大反對家の齊しく悲慘なる最後を遂げたるは奇ならずや。カッスルリーグは自ら其喉を突けり、ルイ十八世は其王位の上に倒れたり、大學教授ザールフェルドは依然としてゲッチンゲン大學の教授たり』と。

◎ハイネとゲーテとの會談は人よく知る所なり。『ワイマルの麥酒はげに勝れたるものなりき』と伯林なる友に言送りたる外、一言もゲーテに就て言ふ所なかりしなり。彼が其後間もなく其友に送りたる書翰は以て是間の消息を窺ふに足るべし。

ハイヂが事

◎抒情詩人としてはゲーテにも劣るまじきハイヂが、詩人に就いての述懐こそ面白けれ。かつて以太利に旅行してマレンゴーの戰場を過りし時、彼は奈破翁の大勝利を憶ひ起して喟然として歎息し、其身が一個の詩人と稱せられむよりは、寧ろ人道の義戰に仆れたる兵士たらむことを望みたりき。彼れ其の"Italien"中に是のこゝろを述べて曰く、『詩は予にとりて言ふに足らざるのみ、人若し予に與ふべき名譽あらば、願くは予が柩の上に劍を置け。そは予は人道の自由の爲に戰ひたる勇敢なる一兵士なりければなり』と。

◎ハイヂが諷刺は人のよく知れる所なるが、『ハルツ旅行記』中にゲッチンゲンを誚れる一段の如きは其の最も奇矯なる者の一なるべし。彼は是の府の住民を殘りなく嘲りて最後に左の如き言葉を添えたり。ゲッテンゲンの婦人の足の大なることは昔よりの言ひ傳へなれども、予は此の邪說を正さむが爲に少からず苦心せり。或は圖書館に入りて所藏の珍書を探索し、或はユーンデル街に立ちて通行の婦

焚の刑に處せられたり。是れ一千四百三十一年五月三十日にして、處はルアンと云へる市、ジャンヌの年は僅に十九なりき。

これ不幸なる女丈夫ジャンヌ・ダルクの生涯なり。歷史は永く、人物は多しと雖も、田舍の一少女子を以て、かゝる偉大なる功業事蹟を止めしもの、他に何處に求むべきや。ジャンヌは佛蘭西を救ひて其天の命を全うせり。されば其二十年の短生涯は、やがて佛國千年の社稷にあらずや。ジャンヌまた以て瞑すべきなり。

（三十二年十二月）

まし、凱歌を揚げて引還さむとしけるに、こは如何に、城門の懸橋は既に撤去せられ、ジャンヌは其の僅なる手勢と共に城外に殘され、遂に英軍の爲に擒にせられぬ。斯く城内の佛軍がジャンヌの歸路を絶ちたるは、偶然の錯誤なるか、又は叛逆人の所爲なるか、其事實今に至るも定かならず。されどジャンヌは其の以前より、自己の運命を覺りしものゝ如かりき。そは『聖ヨハヂの祭日の前には、己れは必ず敵軍に擒にせらるべし』とは、渠が常に知人に物語りし所なり。唯何故に、又如何にして擒にせらるゝかは、渠れ自も知らずと云へりしとぞ。又生擒せらるる數日前、教會の祈禱の後、渠は周圍の人に公言して曰ひけらく、『吾が親愛なる朋友よ、是城内に吾を敵に賣るものあらむ。斯くて吾は死に處せらるべし。されば友よ、吾が爲に神に禱れよ』と。恐らくはコムピーニュの城内に叛逆人ありて、故らにジャンヌを敵中に陷れしならむ。

ジャンヌ既に敵の手に渡りぬ。げに此一少女ありてオルレアン城の圍みを解きたればこそ、英軍の勢頓挫して振はざるに到りしなれ。ジャンヌは英國人が其肉を食ふも飽き足らずとする所なり。是に於て形ばかりの軍法會議は開かれ、直に火

も、是より後勢頓に挫け、さながら魍魎の日光に消ゆるが如く、漸く國外に退去しぬ。七月の中頃、シャール七世は凱歌歡呼の中に、ジャンヌを伴ひてランに入り、盛なる戴冠式を行ひぬ。ジャンヌが天より受けし使命は、是の言の如く茲に其の全きを告げぬ。

四　最後

扨ても佛蘭西國の救主、シャール王の恩人、ジャンヌ・ダルクの最期こそ痛はしけれ。渠は古今に稀なる、かゝる奇功を奏したる後、英吉利軍の手に渡りて火焚の刑に處せられたり。

その由來如何にと尋ぬるに、オルレアン城の圍みを解き、シャール王の戴冠式に臨みたる後、ジャンヌは自ら渠が天より受けたる使命の終りを告げたるを宣言し、王に乞うて再びドムレミーの田舍に歸らむことを求めぬ。されど英佛の戰ひ尚ほ未だ熄まず、佛蘭西が渠を要するの時機未だ去らざるの故を以て、其願ひは許されざりき。時恰もコムピェニュと云へる城尚ほ英軍の圍を受けしかば、ジャンヌは王命により援軍を帥ゐて城内に投じたり。或日の戰ひにジャンヌは城を出でゝ散々に敵を惱

に造られざればなり』と。かくて渠れ戰に臨むや、常に全軍に先ち、矢石亂飛の間を馳騁し、叱咤督勵到らざる所なし。渠に從へる前列の兵士、敵丸に中りて數十百人立地に仆るゝが中に、奇しき哉ジャンヌは身一丸一矢を受けず悠然として干戈の間を周旋する樣は、眞に人業ならず見えにけり。

英吉利軍が七ヶ月の間續けたるオルレアン城の包圍は、ジャンヌ十日にして是を潰やせり。是のめざましき勝利は、素より部下將士の忠烈に因ると雖ども、是を統率し鼓舞したるジャンヌの勢力其主因なること掩ふべくもあらず。實に是れ驚くべき勝利なりき。當時佛蘭西は國を擧げて英吉利軍の蹂躙に委ね、一向屏息して其鋒を避けむことを務めたり。オルレアン城中に圍まれたる佛の將士だに、ジャンヌの援軍に重きを置かず是包圍にして今後一月も續きたらむには、何人も苦節を維持し得べしとは思はざりき。ジャンヌが一擧して得たる是勝利は、敵も味方も奇蹟の如く驚けり。是に於てジャンヌの名は驚駭と恐怖とを以て喧傳せられ、一時絶望の淵に沈みたる佛軍の士氣は、打萎れたる草木に春雨の灑げるが如く、忽ち一道希望の光に打たれ、猛然として振ひ起れり。凡そ百年の間、向ふ所敵無かりし英軍

少女の爲に、喜んで身命を拋たんと誓はざるは無かりけり。

同じ年の四月の末日、ジャンヌはオルレアン城の下に達したり。所在の將士風を望みて相會し、愈々五月一日を以て英軍攻撃に着手せり。是一軍は道にジャンヌの故郷なるドムレミーの傍を通過せしが、渠は其舊友なる村の娘等と會し、事もなげに嬉戯して一夕を費やせしとぞ。あはれ佛蘭西國の救主も、干戈匆忙の間に一村娘となりて、牧羊犂耜の往日をしのべるは、如何にあやしき計りに旨味深き事ならずや。若し豫めジャンヌにして、將に來たらむとする悲慘なる運命を知りたらんには、其膽如何に九回したるべき。

オルレアン城の攻撃は實に目覺ましきものなりき。援軍の爲にとて來れる將士の中には、ジャンヌを戴くを好まざるもの少からざりしが、一度びジャンヌの働きを見たる後は、何人も渠が非凡の威力を信ぜざるは無かりき。ジャンヌの身戰場に立つや、一挺の軍旗を提げたるのみ。未だ嘗て劍を抜きて人を斬りたる事あらず。渠は自ら公言して曰く、『吾れは是れ神の大命によりて此國の危難を救はむが爲に是世に出でたるなり。吾前には刃も矢も其力を失ふべし。是れ我體は是世の物

ジャンヌの評判は日を追ふて遠近に傳はりぬ。或は狂と詆り、或は聖と稱へ、褒貶の聲一時に喧しかりき。されどドムレミーの一少女が佛蘭西國の救ひの爲に起てしてふ事は、均しく國民の耳目を驚かせり。僧侶の或者はジャンヌの信仰を試みしが、何れも其の燃ゆるが如き熱誠に感激して、神の威靈の眞に其身に宿れるを思ひぬ。加ふるに其頃佛蘭西には『佛蘭西は一女子に救はるゝの時あるべし』との流言、久しき前より傳はりければ、その一女子こそジャンヌならめとの信心は、何時しか多數國民の胸中に起りぬ。

されにてもジャンヌは、如何にしてオルレアン城の圍を解くべきか。是れ萬人の均しく危み且憂へし所なり。

ジャンヌの叢爾たる小軍隊は、當時英佛兩軍の規律なきに比して、實に驚くべき整正と純潔とを保ちたり。其先鋒には常に僧侶あり、嘹喨たる音樂につれて壯快幽玄なる讃歌を誦し、ジャンヌの統率せる中軍は、肅々として其後に繼ぐ、ジャンヌ自らは白馬に跨り、長劍を横へ、銀甲の粲爛たるを着け、威風あたりを拂ふてぞ見えにける。部下の兵士は、何れも先には輕侮の念を挾みしが、何時しか敬仰の情に打たれ、是一

且曰ひけらく『少女よ行け、汝の身の上に何事の起るも予の知る所に非ず』。

一千八百二十九年五月五日、ジャンヌは軍裝して馬に跨り、將軍ロベールが貸し與へたる一隊の兵士を率ゐて、オルレアン城の救ひに赴きぬ。道にシノンと云へる村を過ぎりて、國王シャール七世の恰も是村に留まれるに遇ひぬ。シャールはジャンヌの不測なる力あるを聞き、其實否を試みむと欲し、一從者と其服を換へ、自らは王座遙に從者の群に入り、而して後ジャンヌを引見せり。ジャンヌは神の聲に導かれ、直にシャールの前に跪きぬ。シャールは『予は王にあらず』と答へ、かの從者の王座に着けるを指して『シャール王こそ彼處にお在するなれ』と告げぬ。ジャンヌは頭を打振りて曰へらく、『否、佛蘭西の眞の王たらむもの、陛下を措て何處にか求むべき。是れ神の命なり』と。王はジャンヌに其名と何の爲めに來れるかと問ひぬ。ジャンヌ答へて曰く、『賢明なる王よ、妾の名はジャンヌ。陛下の戴冠式をランにて行はむが爲に神の遣り給へる處女にて侍り』と。ランは歷代の佛蘭西王が戴冠式を行ふ所なり、されど多年の戰亂の爲めに英軍の手に入り、シャール七世は尙ほ未だ是大禮を行はせ給はざりしなり。

答へぬ。

將軍よ、妾の言を信ぜよ、神は數年前より妾の前に現はれて、幾度となく『佛蘭西國の危難に赴き、是國のまことの王なるシャールを助けよ』と告げ給ひぬ。將軍願はくは、妾に假すに一隊の兵士を以てせよ。妾はそを率ゐて直にオルレアン城の圍を解かむ、將軍疑ふなかれ、是れ神の命ずる所なり。

熱誠面に顯れ、一種の神采人の心を壓して、さながら古の豫言者もかくやありけむと思はるゝばかりなりければ、將軍をはじめ並居る人々は、そゞろに畏敬の情をぞ起しける。されど教育なく門地なき牧羊者の小娘子の身を以て、よしや神通の威力を具へたればとて、今日の危機を如何かすべき。雲の如き英將猛卒も敢劒の餘弊を如何ともするなき今の時、ジャンヌ何者なれば、かくは神命を負ふてこの不敵の言を爲すや。言ひあはせねども誰しも斯く思はざるは無かりき。されど苦しき時の神頼み、百方計盡きて望失せたる時は、甲斐なしと知りつゝも萬一の僥倖を頼みて、人の助けを求むる、亦已み難き人情なり。將軍ロベールもジャンヌの言を信ぜりとにはあらねども、言はゞ物の試しにとて、言ふがまゝに一隊の兵士を貸し與へ

難を鎭めむと望む。渠を知れる人、何れも渠を狂したりと云ひしは、實に理なりけり。

三　オルレアン城の救助

今や佛蘭西國の運命はオルレアン城の上に懸りたり。是城にして陷らば佛軍は其最後の根據を失ひて、佛蘭西の社稷は永く其祀りを絕たむ。されど大厦の覆らむとするや、一木の支へ得べきにあらず。所在の將士意氣沮喪し、其敗軍を擁して徒に憤慨の日を送りける。

將軍ロベールはヲークールユールと云へる所にあり、一日佛國の前途を想ひて憂慮に沈みける折柄、容貌秀麗なる一少女、鄙びたる衣裳を着けたるが、佛蘭西の救ひの爲に來れりと告ぐ。これぞジャンヌ・ダルクなりける。

將軍は飽く迄ジャンヌを一狂女なりと思へり。引見して試に其故を問へば『妾は神の示現によりて、佛國の危きを救はむが爲に來れるなり』と答ふ。其許止動作は強ちに狂人とも見えざれば、重ねて其の求むる所如何と問へば、ジャンヌは次の如く

たく驚きて四邊を見廻せば、遙かあなたの空より、三人の聖者無數の天使に圍まれて、ジャンヌの傍に來り、親しく渠と種々の物語をなしたる末、『ジャンヌよ、汝は佛蘭西の難に赴かざるべからず』と云ひければ、渠は恐れ且驚きながら答へぬ。『聖者よ妾は助けなき愚なる田舍娘にて侍り。馬に騎る事だにかなはぬ身にて、如何でかさる事のあらるべき』。聖者は『否とよ、憂ふる勿れ、唯將軍ロベールの下に行け』と告げぬ。ロベールは佛軍の一方の大將にてありけるなり。

ジャンヌは是時より屢々かゝる幻影を目擊し、聖者は其度毎に『佛蘭西の難に赴け、將軍ロベールに行け』と渠に告ぬ。渠は初めの內は唯事の奇異なるに思ひ惑ひしが、追々其心に一種の自信を喚び起し、終には母國の危難を救ふをば、己れの天職の樣に確信するに到りぬ。父母は其子の樣子の年毎に異樣になりまさるを見て、さま〴〵に諫めしかど其効もなく、果ては狂氣じみたる行ひをさへ現はしぬ。

『オルレアン城危し』との警報は、是時渠の耳に達しぬ。ジャンヌは『時到れり、時到れり』と叫びつゝ、其の父母の呆れて止むるを聞かず單身にしてヲークルユールと云へる所に陣取れる將軍ロベールの下に急ぎぬ。十七歲の少女が赤手を揮つて其國

もなく門閥もなく、渠が其大事に當るまでに、佛蘭西中に其家族隣人の外は、何人も其名をだに知らざりし一女子にして、其年さへも僅に十八の妙齡なりき。斯く言ひたるのみにては、誰れかそを實なりとすべき。されど佛蘭西國の運命を一身に擔ひて、回天の偉業を遂げしものは、實にこの十八歳の一少女、ジャンヌ・ダルクなりしなり。さらばジャンヌ・ダルクは如何なる人ぞ。

二　おひたち

ジャンヌ・ダルクの生れたるは、佛蘭西の片田舍ドムレミーとて、羊飼の多く住へる村なり。時は一千四百十二年の正月にして、英佛の戰方に闌なる頃なりき。其父母は正直なる農夫にして、貧苦の中にも其子の養育に心を盡しけり、ジャンヌは十三歳までは、羊の群の見張りに何事もなく田舍の一少女として暮しにき。

然るに奇しくも又驚くべきことこそ、渠の身の上に起りたれ。或夏の日のことなりき。渠れ常の如く後園にありし時、寺院の方に眩き光の見ゆると同時に、何處ともなく聲ありて『ジャンヌよ、善良なれ、怠りなく寺院に詣でよ』と告げぬ。渠れはい

ジャンヌ・ダルク

一　はしがき

凡そ國家の興亡に際しては、古より奇しき事のいと多かり。是を說くもの或は神佛の威靈と云ふ、或は鬼神の魔力など稱ふるめれど、所詮は時運のおのづからなる勢に外ならざるべきか。さるにてもジャンヌ・ダルクの事蹟こそいと〳〵怪しき事の限りなれ。

今を去る四百年前、佛蘭西國は英吉利國と事ありて干戈を交へしが、佛國の武運や拙かりけむ、連戰連敗土地侵され、城壘陷れられ、國王は邊陲に蒙塵し、誰ありて興復の偉業に當るものあらざりき。今は佛軍の唯一の頼みとせしォルレアン城も存亡旦夕に逼り、さしも雄大なりし是の國の社稷も、今を限りとぞ見えにける。若し此時に當りてジャンヌ・ダルク徵りせば、佛蘭西は永く英吉利の屬國と成り果てしならむ。

而してジャンヌ・ダルクは貴族にもあらず、武士にもあらず、又男子にもあらず、敎育

人と交通し、吠陀の神話と共にベラ・ペンヌの傳說を受け取り、自己の神話と共に是を保存したりしとすれば、古事記神話の說明も一層明瞭となるべき也。然れども是の如きは極めて貧少なる資材によりて推察したるに過ぎず、加ふるに言語上の系統等より見れば、恐らくは幾多の反證を擧げ得べきやも測られず、故に暫く予が一家の設想として學者の參考に供すべきのみ。

是を要するに、予が古事記研究の結果として推察する所によれば、日本民族の起原は今のシッフェル群島、即ち、サモア、トンガー群島の邊りならむか。是等群島は南緯十四度より二十度、東經百六十八度より百七十度の間に延蔓す。若しミュルレル氏の說を證權とすれば、東南亞細亞のチュラニアン人種の一派は、印度多島海を經て是に移り、是を中心として全ポリヂシアより北方に遷移せるもの也。即ち所謂北太平洋の大潮流に乘じて、ミクロヂシアよりフリッピンに到り、更に日本海流に駕して是土に遷徙せしものに非る乎。若し夫れ古事記傳ふる所の出雲民族並に天孫民族は、既に是南太平洋の故郷を離れて今のフトリ群島の北部に留在し、更に其殖民地を北方に求めしや、亦想像し得べき也。

（明治二十年三月）

何處にありやにあり。日本民族の起原を南太平洋に存すとせる予の設想は、是問題に向て最も明瞭なる解釋を與ふる也。其要點を擧ぐれば左の如し。——

人類學者ミュルレル氏が研究の結果によれば、ポリヂシア人の故郷は亞細亞大陸の西南部にあり。それより印度多島海に蔓延し、更に遙に東南を指して今日の所謂サモア及びトンガ群島に殖民し、是二群島を中心としてポリヂシアの全躰に繁殖せしならむ(Müller, Allgemeine Ethnologie S. 325 f.)。若しミュルレル氏の説にして信に信憑すべきものならば、ポリヂシア人は、恐らくは其の東南亞細亞に在りし時、印度アリアン人、もしくは印度アリアン人に接觸して其の追ふ所となりたるドラビダ人より、吠陀の神話を收容せしならむ。是の如くにして、日本民族の神話に吠陀の分子を包含することを認むるは寧ろ自然の數のみ。印度學者ホプキンス氏の吾人に告ぐる所によれば、ドラビダ人がペラー、ペンヌ Bella Pennu とターリー Tari に關する傳説は、伊弉册尊が黄泉國より伊弉諾尊を追ふ一條に酷似するを認む。防禦の爲に物を投じ、又其人民に死あらしめむと咀ひしが如き、彼此殆ど符契を合するが如し(Hopkins, Religion of India, pp. 529-530)。若しポリヂシア人が亞細亞の故郷に於てドラビダ

王依媛との話(後に三輪神社の緣起となれり)に似、又ラータ王 Rata が海上にて種々の大難に遇ふて能く是を遁れし話は、日本の俗間に傳はれるものと甚だ近く、又(プライデレル氏が擧げたる)タンゴラが善兒を賞し惡兒を罰したる話は、八十神と大國主命と菟との話と多少似たるを見る。是の如き類似は、是等南太平洋の古民族と日本民族との間に多少の因緣あるを證せるものに非る乎。

(四)印度吠陀の神話と古事記の神話との類似が是設想によりて說明せられ得べき事　印度の神話と古事記の神話との間に類似の點ある事は、現今日本にありても有識なる學者の認むる所也。例へば諸冊二尊のヤマ、ヤミに於けるが如く、又須佐男之命の因陀羅に於けるが如き、是れ也。且つ他方より考ふれば、印度の如き熱國なればこそ嵐の神なる因陀羅を崇拜する因緣もあらめ、氣候和平なる南洋中の島嶼に住せる民族にとりては、是の如き嵐を經驗する事さへも稀なるべく、隨て崇拜する理由も無かるべし。されば須佐男之命によりて代表せらるゝ嵐の神を印度に起原せりと想像するも、强ちに理無きに非るべし。若し印度と日本とは神話上に於て同一系統を有すとせば、次に起るべき問題は、是二者を媒介せる第三者は

なり、漸次擴張す(プライテレル宗教哲學第一卷四五〇)。又曰く、天神タンゴラ Tangora 天より絲を垂れて海底の地を釣る、然れども絲常に半ばにして切斷す。故にポリヂシアの群島成れり(上仝)。前者は天の瓊牙の滴りによりて成れる淡能基呂島の傳說に似、後者は隱岐風土記にある本島と隱岐との接絲斷絕せりとの話に似たらずや。是の如く、其神誌の始めに、地質上の發達を混淆せるものはポリヂシアと我邦とあるのみ。

(Peschel, Physische Erdkunde S. 369)

南太平洋のマンガイア群島の最古の傳說なりとして、ギル・ギル氏の告ぐる所によれば、天の神なるワーテア Vätea は、二個の大なる眼を有す。其一は天上に輝きて太陽と呼ばれ、他の一は暗黑界 Avaiki を照して月と稱せらるゝ(Gill, Myths & Songs of S. Pacific, p. 4.)。是れ伊弉諾尊の左右の眼より日月の生れたると酷似せるに非ずや。ギル氏は又日月の蝕に關して須佐之男命が天照大御神を惱ませると多少相似たる神話を揭げたり(Ibid. p. 47)。

其他傳說に於てポリヂシアのと日本のと相似たるもの二三あるを見る。例へばギル氏が擧げたるチュナ Tuna とイナ Ina との話は、舊事記に傳へたる大物主神と

二十六度に到りて本流支流の二派に分る。本流は東北に轉向して日本の九州四國本土を洗ひ、支流は九州の西岸五島より對島の東に沿て日本海を東北に横ぎる。所謂る對島海流是れ也。想ふに日本民族の祖先が或は出雲に着し、或は九州に着せるもの、是日本海流に乘じだるに非ざる乎。

(二)神代卷に北方の自然現象少き事。神代卷の傳說を持ち來れるもの、若し西方又は北方の人種ならば、必ず北方の自然現象を其中に包含せざるべからず。然れども古事記には天照大御神の須佐之男命の上天を待つ所に『沫雪』の一語あるの外、絶て是れ無し。却て和邇、海霧等の南方の物象多し。是れ亦日本民族の南方より來れるの一證にあらざる乎。

(三)ポリネシアの神話及び傳說と古事記と類似多き事。日本民族を以て、南方より日本海流に駕して是土に遷徙せるものなりとせば、其發足點は何處なる乎、是に於て神話及び傳說の比較研究の必要を見る。

プライデレル氏の告ぐる所のポリネシアの世界創造說に曰く、世界の初には天と海とありて地無し、天の神タンゴラ、即ち一片の土塊を天より下せしに凝て地と

によれば、航海盛に行はれたるを以て見るも、是事益明なるべし。須佐之男命の出雲に到るや、海に航せしこと勿論なり。而して先にも述べたる如く其本國より出雲に使者の往復一再のみならず、最後に天孫降臨の時に舟師を用ひしこと疑無し。加ふるに神武東征以後、日本武の北征、仲哀神功の熊襲三韓の征伐等、何れも主として水路によりしを思はゞ、航海の術は已に太古より開けたりと見ざるべからず。航海の術は海洋民族に於て初めて其發達を見るべきなり。何れの點より見るも出雲民族及び天孫民族は其起原を海洋中に有せしこと蓋し疑ふべからざる也。

既に其故郷の海洋中にあることにして疑ふべからずとせば、そは何れの海洋中にある乎、是れ亦問題也。既に概論中に述べたるが如く、予の推察によれば是最初の故郷は南太平洋に存せるが如し。今是推察の根據を擧ぐれば次の如し。

(一)潮流　太古の民族は如何に航海術を知れりとて、潮流に逆行して植民、もしくは征服すること無し。されば日本民族の遷徙も亦潮流を利用せりと見るを妥當とすべし。地誌を案ずるに、南方より日本に向へるもの、所謂日本海流あり。其起點をフヰリピン群島の北部に發し、臺灣、琉球諸島の東部を經て北流し、琉球の南、北緯

聖なる國躰に關する誤謬の思想に本ける者也。吾人の眼より見れば、是の如き淺薄なる根據の上に我神聖なる國躰を說かむとするものこそ却て大に不敬なりと云ふべけれ。

兎にも角にも出雲民族及び天孫民族の故郷は何處なる乎、是れ問題なり。高天原や、天の石位や、又は天の浮橋や、皆是れ神話上の名稱なるを以て、地理的に討究するの便無し。吾人は唯上來述べたる神話及び歷史によりて推察するの外無き也。乞ふ左に簡單に予が研究の結果を摘錄せむ。

予が先づ肯定せむと欲するは、出雲民族も天孫民族も共に、其起原を海洋中に有すること、是也。夫れ古事記の神話は、淤能碁呂島の成立と云ひ、伊弉諾尊の御滌と云ひ、菟（ウサキ）と和邇（ワニ）の話と云ひ、海に關するもの甚だ多し。其神の名にも海に緣あるもの少からず須佐之男命は海原を知らす神也。或は大綿津見神と云ひ、或は水戶神と云ひ、或は速那藝神、洗那美神と云ひ、或は天水分神、國水分神と云ひ、其他鳥の石楠船神、底津綿津見神、中津及び上津線津見神、奥津宮、中津宮、邊津宮等、何れも島嶼海洋に關せざるは無し。是れ大陸民族の神話に有り得べからざる事なり。又其歷史

べき國土とおし、其御子天忍穗耳命を降臨せしめむとす。然れども瑞穗の國は、土豪到る處に割據し、殊に出雲には須佐之男命の一族威勢甚だ盛なるを見、先づ使を遣して招ぎ降らしむ。然れども其第一回の使者天の菩日神、及び第二回の使者天若日子等、皆却て大國主命に從ひて復命せず。第三回の使者雉名鳴女は天若日子に射殺せらる。是に於て天照大御神は建御雷神をして大船に乘じて征討せしむ。大國主命及び其子弟皆是神の威風に恐れ、戰はずして、或は敗北し或は降服す。建御雷神乃ち豐葦原の瑞穗の國平定の事を復命す。是に於てか天忍穗耳命の子日子番邇々藝命を將とし、天兒屋命等の『五伴緒』等を副とし、『天の石位を離れ、天の八重多那雲を押分て、伊都能知和岐和岐弖、天の浮橋に宇岐じまりとり立して、筑紫日向の高千穗の久士布流多氣に天降坐し』ぬ。是れ史に所謂天孫降臨の事蹟也。

日本民族の太古史に於ける最も重要なる問題茲に横はる、即ち出雲民族及び天孫民族の故郷は何處なる乎、是也。是れ古事記の讀者が當然提起すべき問題也。然るに從來我邦の國學者は、是書載する所を以て神聖犯すべからずとなし、吾人に向て其神話的傳說をも文字通りに信憑すべしと訓へたりと雖も、是の如きは我神

度希臘、獨逸等、到る處の古代史に存するを知らば、諸冊二尊、及び天の岩戸の事蹟が、半神話半歷史の傳說なること、蓋し疑を容れざるべし。

遮莫予を以て見れば、天地及び日月及び最も重要なる自然現象に關する神話は、須佐之男命の出雲行に到りて茲に一段落を告げたり、高天原の神話は、轉じて葦原の中ッ國の歷史となりぬ。是間の轉移の徑行、必ずしも劃一にして論すべからずと雖も、兎に角神話の分子漸く減退して、歷史の畛域に近けるは、最も明なる事實なりとす。然らば則ち、箇中日本民族の歷史に關して徵證べきもの果して如何。

三　日本民族の起原及び遷徙

今試に神代卷の後半より歷史上の事實として思惟し得べきものを擧ぐれば、概ね左の如くならむ。

須佐之男命流されて出雲の國に到り、其地の土豪を窮厄の中に救ひて其娘を納れ、茲に出雲民族の祖先となり給ひぬ。大國主命其後を享て威遠近に振ふ。是時須佐之男命の本國に於ける天照大御神は、豐葦原の瑞穗の國を以て天孫の司配す

爾高天原皆暗く、葦原中つ國悉々に闇し。此に因て常夜往く、於是萬の神のおとなひは、狹蠅なす皆わき、よろづの妖悉々に發りき。

是れ暴風雨の爲に六合暗濛たるの狀にあらざる乎。而して天の安河原に於ける『神つどひ』の結果として、天照大御神再び岩屋戸を出でたる時、高天原も葦原の中つ國もおのづくら照明られたるは、先にも言へる如く日光再び表はれて天地其明を回復したるの狀なると、言ふまでも無し。

是の如きは太陽神話として見たる天照大御神と須佐男之命との爭ひなり。是神話の内容となれる事柄の中には、歴史上の事實素より少からざるべし。其大躰に就いて見るも、例へば天照大御神に相當せる君主と、須佐男之命と相當せる一個の叛臣又は外敵との間に、權力上の爭ありて、一時前者の敗北に歸せるを、其臣下の力にて遂に敵者を退けて流竄に處せりと云ふが如きは、極めて有り得べき事なるべし。然れども更に是の如き事實が、當時是民族の間に流布せる神話と結合し、茲に殆ど完全なる一部の太陽神話を形成せりと見ば、太古傳說の解說法としては寧ろ遙に適切なるに非ずや。是の如き例は決して古事記にのみ存するにあらず、印

天照大御神と須佐男之命と、互に其珠其劍とを交換し、『佐賀美にかみて吹き棄つる氣吹の狹霧』を以て交々幾多の神を生出せしは、卽ち太陽と嵐と互に其優勝を爭ひたる狀を形容したるものに非る乎。『氣吹の狹霧』とは、卽ち雲霧茫々として天風に散し、日座容易に犯し難きの狀にあらざる乎。是の如くにして成れる神の名を見るに、天照大御神が『吹棄つる氣吹の狹霧』に成るものは、曰く天之菩卑能命、曰く天津日子根命、曰く活津日子根命、何れも日光に緣あり。是に反して須佐之男命の『吹棄つる氣吹の狹霧』に成れるものは、曰く多紀理毘賣命、又は奥津島比賣命、曰く市寸島比賣命、曰く多岐津比賣命、何れも嵐に緣あり。『タギリ』と云ひ『タツキ』と云ひ、海波の荒るゝ狀ならずや。是の如くにして、須佐男之命は『我心清明故に我が生めりし子手弱女を得つ』と揚言し、『我勝ちぬ』と言ひて、『勝佐備に天照大御神の營田の阿離ち、溝埋め、又其大嘗聞しめす殿に屎まり散し』、服屋の頂を穿ちて天の斑馬を剝き入れ、遂に天照大御神をして『見畏みて天の石屋戸を閉て刺にせり坐』まさしめたるは、是れ嵐の神なる須佐男之命が遂に太陽の神なる天照大御神を其暴風黑雲の中に掩蔽したるの狀として見るべからざる乎。古事記是を敍して曰く、

諾尊大に怒りて須佐男之命を放逐し給ふ。是に於て『然らば天照大御神に請して罷なむ』と言ひて、天に上る時、『山川悉に動み國土皆震ひし』と云ふもの即ち一帶の黒雲狂風に駕して將に日座を犯さむとする狀に非ずや。是時天照大御神は是を見て大に驚き、

我那勢(須佐之男命)の上り來ます由は、必ず善はしき心ならじ、我國を奪はむと欲するにこそと詔給ひて、即ち御髪を解き、御美豆羅に纏かして、左右の御美豆羅にも、右左の御手にも、各八尺勾瓊の五百津の美須麻流の珠を纏きもたして、曾比良には千入の靭を負ひ、五百入の靭を付け、また伊都の竹鞆を取佩かして、弓腹振立て、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散して、伊都の男建踏み建びて、待問ひ給はく、何故上りきませると問ひ給ひき。

是莊嚴偉大なる天照大御神の尊容は、即ち大日中天に赫灼として將に襲來せむとする暴風黒雲に對するの狀に非ざる乎。『我那勢の上り來ます由は必ず善はしき心ならじ、我國を奪はむと欲するにこそ』と詔り給ひしは、暴風が高天原、即ち空中の主權を爭奪するの勢あるを示めせしものに非る乎。

しひは、即ち嵐が一時天日を蔽へるなり。須佐之男命の『神夜良比（カムヤラヒ）』にやらはれ『天照御大神出生（イデマセ）る時に高天原も葦原の中つ國もおのづから照明（テラフアカ）り』たるは、是れ暴風退散して天日再び輝ける也。這般の事蹟、素より純然たる歷史的事實として附會し難きに非ず。然れども是の如き歷史的事實が太陽神話の中に調攝せられたるものとして見なば、尙ほ一層明白なるべき也。

日月の二神は其天神伊弉諾尊の命に從ひて其位に就きぬ。獨り須佐男之命、其命に從はず、古事記是狀を叙して曰く

故各々（カレオノモ〳〵）依さし給へる命のまゝに知ろしめす中に、速須佐男之命依さし給へる國を知らずて八拳鬚（ヤツカヒゲ）胸前に至るまで啼きいさちき。其の泣き給ふ狀は青山を枯山（カラヤマ）なす泣からし、河海は悉々（コトゴト）に泣乾しき。是を以て惡る神の音（アラブルカミノオト）なひ、狹蠅（サバヘ）なす皆湧き、よろづの物の妖ひ悉々に起りき。

是れ、風雨暴れすさびて日星光を隱し、天地慘憺たる光景として見るべからざる乎。『青山を枯山なす泣からし』と云ひ、『惡る神の音なひ狹蠅なす皆湧く』と云へるもの、人をして狂瀾四もに起りて波濤洶湧せる狀態を想起せしむること無き乎。伊弉

及び暴風雨に及びて、幾多の自然的神を想像するは、蓋し人性の本然に出づ。即ち是れ多くの民族に所謂神話の生起せる所以にして、我が諸冊二神、及び其三貴子に關する傳說も、畢竟是神話に外ならざる也。勿論風土氣候の異なるに隨ひて、其の崇拜する所の神、及び其崇拜の程度おのづから同じきを得ず。されば一の民族に於て重ぜらるゝもの、他の民族に於て必ずしも崇められず、各邦神話の特色畢竟是によりて生ずと雖も、其大躰の性質に於ては略ゞ相同じきを見る。殊に我邦に於ては、諸冊二尊の事、已に多少の歷史的事實によりて潤色せられたりと考へらるゝを以て、其形迹の詳細なるものに到ては、必ずしも神話を以て推測すべからざるものあるべし。已に述べたるが如く、於能碁呂島に八尋殿を建てゝ『美斗能麻具波比』を爲し給ひし事、若しくは二尊の黃泉國に於ける會合の如きは、慥に歷史的事實の混入せるものなるべし。

然れども、伊弉諾尊の御滌終りてより、天地の神話は茲に其終りを告げ、太陽神話の眞面目は新に開發られぬ。即ち天照大御神と須佐男之命との軋轢は、神話として見れば、太陽と嵐との空中に其優劣を爭ふなり。天照大御神が天岩戸に隱れ給

Γῆ μήτηρ の異名也)、亦何れも地の神也。其他の羅甸人のオプス Ops (又は Terra mater)、獨逸人のヘルター Hertha、フヰン人のウツカー Ukka、何れも天の神に對する地の神なること、猶ほ伊弉諾尊に對する伊弉冊尊の如し。天地の神に次で最も崇敬せらるゝものは何れの國の神話にありても太陽なり。アポロン Apollon の希臘に於ける、ミトラ Mithra の波斯に於ける、バルドル Baldor の獨逸に於ける、ラ Ra 若しくはオシリス Osiris の埃及に於ける、又はインカ Inka のペルーに於ける、皆我が天照大神と均しく太陽の神也。

太陽の神に配せられて共に崇拜せらるゝものは月の神也。是二神は多く兄弟又は夫婦として思惟せらる。バビロニアに於てはバール Baal 日神に對するイシタル Istar (月神)あり。希臘に於てはヘリオス Helios (日神)に對するセレーネ Selene (月神)あり。是れ何れも我邦に於ける天照大御神に對する月讀命に均しき也。天地日月に次で崇拜の對象となるものは嵐なり。是れ諸多の神話中、殊に印度の因陀羅に於て嵐神の著しきものを見る。是れ我邦の須佐之男命に相應する者也。太古の民族が擬人法によりて自然現象を說明せむとするに當り、先づ天地より日月、

御滌によりて生み給へる多くの神にも優りて尊貴の子と稱へられしは即ち日、月、嵐の三者が自然現象中の最も著しく且勝れたるものなるが故なり。高天原を司配する天照大御神が日の神にして、夜の國を所知する月讀命が月の神なるは言を待たず。海原を國とする須佐之男命が嵐の神なることも、暴風雨が凡て水に依りて成り立ち、且水に依りて最も明に現はるゝ事によりて知らるべし。

是の如く天地日月及び嵐を以て初まれるは神話の發達としては尤も自然の徑路なり。印度のデアウス Dyaus、是のデアウスと語原を同じうせる希臘のツィォス Zeus 及び是に父、即ちパーテルを加へたる羅馬のジュピテル Jupiter、獨逸のチオ Zio 又はチウ Tiu、匈奴のタングリ Tangri 蒙古のテングリ Tengri、支那の天、ボリヂシアのタローア Taaroa、是れ何れも初發の神にして而して何れも天の神也。而して是天の神に配して最高神の一對を成すものは、何れの神話に於ても地の神也。例せば印度のデゥシピタル Dyaushpitar 即ち天父に配せらるゝものは、プリトヒヴィー Prithivi 即ち地の神也。希臘に於ては先に擧げたる如く、ウラノスに對するガイア、若しくはツォイスに對するデメーテル Demeter 及びヘラ Hera（デメーテルとヘラとは地母即ち

るを以て、是民族並に出雲民族の遷徙以前に於て、日本連島に關する是の如き知識の存すべき理由なければ也。

原始の二神を以て天地に配したるは、吾人希臘の神話に於て是を見る、即ちウラノス Uranos は天の神也、而して同時にガイア Gaia は地の神也。是二神の結婚によりて自餘の神を生ずるは、正に諸冊二尊ありて後日、月、嵐の諸神生まれたると、其經行を等しうす。古事記によれば、伊弉冊尊を追うて黄泉國に入りたる伊弉諾尊は、御滌によりて多くの神を產みたり。而して最後に左の御目を洗ひて天照大御神を生み、右の御目を洗ひて月讀命を生み、御鼻を洗て須佐之男命を生み給へり。是時伊弉諾尊大に歡び、

吾れは御子生み〳〵て生みの終りに三種の貴子（ウヅミコ）得たりと詔給ひて、即がて其頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔給はく汝命（ナガミコト）は高天原を所知（シラセ）と事依（コサ）し給ひき。……次に月讀命に詔給（ノリ）はく、汝命は夜の食國（ヲスクニ）をしらせと事依さし給ひき。次に建速須佐之男命（タケハヤスサノヲ）に詔給はく、汝命は海原をしらせと事依さし給ひき。

勇士あらば、彼れの神話は此れの歷史に混同して、茲におのづから半神話半歷史の傳說を形成するに到る。印度の吠陀にも是れあり、希臘のヘラクレース、獨逸のグトルン、亦然り。東洋學者の或者は、釋迦の傳記も亦是種の傳說なりと說く。古事記神代卷も、亦須佐之男命に於て愷に是半神話半歷史の勇者を見る也。

予を以て見れば、古事記の神話は伊弉諾、伊弉册の二尊に到りて初めて其成形を具足せり。『天地初發の時高天原に成ませる』三神、國稚く浮脂の如くにして海月なす漂べる時、葦牙の如きものに因て成ませし二神、並に諾册二神以前の天神五代は、誰か得て是を知らむ。諾册二尊は天地の神なり。是れ後に到りて、伊弉册尊は黃泉國に到り、伊弉諾尊は御滌によりて太陽の標號たる天照太神、太陰の標號たる月讀命、及び嵐の標號たる須佐之男命を生み給ひしにても知らるべし。然れども淡能碁呂島の降臨、及び大八洲諸島の循生の事を以て是を見れば、歷史的傳說既に初より神話中に混入せられし也。大八洲の循生、册尊の墓地を出雲伯岐の國境にありとせし事、並に黃泉比良坂の傳說の如きは、少くとも其地名は後人の附會せるものに相違無し。蓋し古事記の傳說を齎らしたるものは天孫民族なること勿論な

南太平洋の多島洋中にあらむ。而して是民族が太平洋中に遷らざる前には、恐らくは東南亞細亞もしくは印度多島海に棲住せし事あらむと。

茲に一言を要する事あり、人種問題を規定するの預件は予が本論に於て關はれるもの以外にも是れあり、故に予は素より『然り』と斷言することを爲さゞるべし。予は唯古事記の神話及び傳說の研究上より推度し得らるべき結論を述ぶるのみ。而して神話及び傳說の比較研究が、這般の問題を決定する上に於て最も重大なる價値を有することは、予の深く信ずる所也。

二　神代卷の神話

多くの國學者は、神代卷の前半をも其後半と等しく歷史として解釋せむと欲すと雖も、難解の極、牽强附會の臆說を以て相爭ふに終るべく、所詮は徒勞に歸すべき也。若し是を神話として見むか、百疑立ろに解けて、更に正史の考察上に幾多の有益なる資料を加へむ。蓋し古傳說中に於て歷史と神話と相混じて消長するの例は、何れの邦國に於ても普通に見る所也。此處に一個の嵐の神あり、彼處に一個の

見む。兩者の分量に就いて言はゞ、須佐之男命の出雲行まで、卽ち舊事本記の區劃に隨へば神祇本紀の終りまでは、神話の分量歷史よりも多く、其より以下は逐次歷史の分量多きを占め、遂に神武天皇に到りて純然たる歷史に遷れるを是る。而して是神話は如何なる種類の神話なるかと問はゞ、予は答て曰はむ、アリアン諸民族に見る如き天地開闢說に連れる太陽神話なりと。

然らば則ち須佐之男命以後の神代卷は、日本の紀元前史に關して何事を訓ふる乎、是れ次に來るべき最も重要なる問題也。予は答へて、神代卷後半の訓ふる所は我日本民族の起原、及び遷徙の狀態なりと曰はむ。素より是研究に大なる助力を與へたるは、前半に於ける神話及び傳說の比較研究也。是の比較研究の結果と後半に於ける歷史的事蹟とを結合せば、予は天孫降臨以前に於ける日本民族の消息、略ゞ推察するを得べきを想ふ。

予は本論に入るに先ちて、是推察の結果を提出せむ。曰く、出雲民族の祖先たる須佐之男命も、其後日向高千穗に降臨し給へる天孫民族も其故鄕を同じうす。而して是等民族が如何の土地を經由して是土に遷徙せりとするも、其最初の故鄕は

古事記神代卷の神話及歷史

一　概論

古事記は、其編輯者たる太安萬侶の上表によりて知らるゝ如く、天武天皇の頃までは、全く口碑によりて傳はれる太古の傳說、及び歷朝の帝記也。凡て何れの邦にても、口碑傳說は正史として信憑し難きものなれば、我古事記の傳る所と雖も亦素より多少訛誤あらむ。然れども古事記其物にして本邦最古の史乘なる以上は、今日に於て何れの部分が正史の事實にして、又何れの部分が傳者の訛誤なるかを討覈せむは、殆ど爲し得べからざる事に屬す。是を以て予は是古事記を以て大躰に於て古代の傳說を忠實に輯錄せるものと假定し、是の如く假定したる古事記、殊に其神代卷が吾人に何事を訓ふるかを見むと欲す。

第一に起るは『神代卷は神話なる乎、又は歷史なる乎』てふ疑問なるべし。予は是に答へて神話歷史兩者の混淆なりと言はむ。而して如何なる方法によりて混淆せるかと言ふに、初めは純然たる神話に起り、漸次純然たる歷史に轉移せるものと

と。是に於てセダン全く敵の手に落ち、ナポレオンは普軍に護送せられてカッセルのヰルヘルスホエエに遷され、城兵八萬三千、皆虜となる。間もなくストラスブルヒ陷り、メッツ降り、巴里圍まれ、佛國は城下の盟をなすに及んで、ナポレオンは其妃ユーゼンと共に英國に赴き、田野に退隱し、遠く政界と隔てゝ一千八百七十三年正月九日其地に逝く。

本篇は予の立案により小川市太郎君の執筆せる者なり　（高山林次郎）

（明一年十二月）

バゼーヌ孤軍奮闘の益なきを知るや、シャーロンに於てマクマホンと會し、共に相輔けて獨軍と輸贏を決せんとせしが、敵の探知する所となりて又メッツに退陣す。マクマホンはメッツの危殆に陷るを聞くや、自ら手兵を携けて赴き援ひしも、是れ亦道にして普軍の爲めに襲撃せられ止むなく、セダンの城砦に入りて死力扞止す。ナポレオン深夜風雨に乘じ間道よりメッツを免れ、セダンに入る。是に於て日次勝ち誇れる普軍は恰も奔濤怒浪の如く寄せ來りて、呼噪砲撃止む時なく、マクマホン勇を皷し兵を指揮して奮闘すれども、間もなく傷を被りて退き、佛の砲兵猛健慓悍能く戰へども、衆寡敵せずして遂に潰散し、セダンは落々重圍の裡に陷る。佛將ウィッペン、マクマホンに代りて軍を督し屢々普軍を撃却せしも、大厦一木の支ふる所にあらずして圍遂に解くべからず。セダンは硝烟慘憺孤城落日の非運を見るに至れり。ナポレオン陣頭に立ちて戰況を凝視すること多時、即ち喟然として嘆じて曰く「嗚呼我れ一身の故を以て天下を誤る、願はくば一身を殺して億兆を毒するなけん」と。遂に親ら手書を裁して使を遣はし、之を普王に呈す。其書に曰く「寡人不佞にして三軍の前に死する能はず、願はくば劒を大王の脚下に置き腹心を布かん」

たり。而して普佛兩軍東西より各窖處接合して、茲に多年の怨憤を洩し、平素の力量を較せんとす。兩軍の過ぐる所旌旗空を掩ひ、三軍の士意氣斗牛を衝く。ナポレオンは獨逸軍の未だ其勢力を集注せざるに先ち、急に進みてライン河を渉り、南部獨逸に侵入し、以て北獨逸との聯絡を遮斷し、バイエルン、ヴュルテンブルヒの二王國バーデン、ヘッセの二王國を佛國に合從せしめんとせしが、佛軍の不整頓にして運動の遲緩なるより、其算籌全く豫想と反し、ラインの右岸は却て獨軍の先きに占領せる所となり、憤悶の極、空しくなすなくしてザールの谿間に滯留するもの二日、遂にメッツに退く。之に反し獨逸軍の進退敏活にして戰鬪に長せる、戰初より常に攻擊的姿勢を取り、キッセンブルヒ、ヴェルト、ザレブルック等にて切りに佛軍を破り、長驅追擊ライン河を渡りて佛國に侵入し將に國都に迫らんとするの勢あり。ナポレオン敗報の頻りに至り、大勢漸く決するに及で、鬱勃の情遣るなく、全佛軍を一處に會して、最後の決戰を試みんとせしも、普軍の防斷する所となりて成らず。又巴里に歸都して、再擧普軍に當らんとせしも、皇后ユージニの諫止する所となりて果さず。策竭き術窮し、悵々焉として遂に元帥の職を轉し、バゼーヌをして已に代らしむ。

況や其戰備又大に遜色あるに於てをや。今兩軍の有樣を對比するに、佛軍は概ね操練を缺き、部伍排列其の宜きを得ず、兵士は新式銃の用法を解せず、兵糧は一所に停滯して運搬其道を誤り、砲兵は險坂にありて迅速なる攻擊をなすを得ず、騎兵亦輕快の運動に出づる能はず。操縱の方、用兵の策、皆亦其度を失す。之を普軍が十年生聚、十年訓練、隊伍堂々、規律整々たるに比すれば勝敗の數未戰の前に決するものありしなり。

然れども歐洲の天地を震撼搖蕩したる龍蹴虎踞の大活劇は、如斯にして千八百七十年八月四日、普佛の境壤に於て演ぜられぬ。佛軍は別れて四となり、第一軍はマクマホン之に將としてストラスブルヒに向ひ、第二軍はド・フェリー之を卒ゐてビッチに向ひ、第三、第四の兩軍はバゼヌイ、ラドラル二將軍の指揮の下に各路を分ちて各メッツ、テーテムホーヘンに向ふ。總數卅三萬、ナポレオン皇帝自ら元帥たり。普軍は分れて三となり、右軍はスタインメッツ之を帥ゐてコブレンツに向ひ、中軍はフリドリーヒ・カルル親王之に將としてマインツに向ひ、左軍は皇太子之を卒ゐてマンハイムに向ふ。總軍三十八萬國王ヰルヘルム一世元帥としてモルトケ將軍之に參謀

以太利は我が恩惠によりて其獨立を致せり、必ず一臂我が舊交に報ゐん。以と結び、澳を東ね、南方獨逸と合して三面獨逸を合擊し、ベルリンを陷れ、ライン河上の地を略する易々たらんのみ。假令露西亞の普と提携するあるも、亦恐るゝに足らずと。是を以て先づ澳相ボイストと交涉して攻守同盟を結び、佛若し普と戰はば澳は佛を援けて側面より起り、澳若し普と爭はゞ佛は背後より普に迫らんと。更に進んで伊太利に說き、南方獨逸諸邦に謀る。然るに伊國應せずして僅かに中立を約し、南方獨逸諸邦皆好を普魯西亞に通ず。ナポレオンの豫想宿計全く齟齬す。是れ實に普相ビスマルクが外交上の敏腕の致せる結果にして、ナポレオンが夢想せざりし所なり。且つ露西亞帝アレキサンダー二世の母は普王キルヘルム一世の妹なるを以て、普露兩國は互に親族的關係あるのみならず、露國はクリミヤ戰爭以來ナポレオンを怨むこと甚しく、澳人がポーランド人を煽動して反亂を謀らしめたるより、澳人を惡むこと久し。故に露西亞は其間如何なる事情の存するも、普澳西と結托して、佛澳二國に當るべきは識者を待たずして明かなり。

如斯、ナポレオンは外交に於て既に普澳西に一籌を輸す、焉んぞ勝算あらんや。

端なくも普佛戰爭を挑發するの導火線とはなりぬ。

一千八百七十年、西班牙亂れ、國后エリサベス出奔せしを以て、改革黨の首領プリム等相謀りて、其年の七月四日ホーヘンツォルレルン家のレオポールドを迎立せんとす。ホーヘンツォルレルン家は普漏西王と緣戚たり。是に於て佛國の意に以爲らく、普西の二國合して一王家の配下に立つ、其勢遂に中古に於けるチャールス五世の時の如く遂に南北より佛國を控制するに至らんと、佛國の人心大に動搖す。レオポールド亦自ら後難あらんことを恐れ、竟に西班牙王の候補者たるを辭す。然るに佛國政府は猶以て慊らず、書を巴里駐劄の普公使に付し、普王は自後ホーヘンゾツォルレルン家の一族をして西班牙の王位に即かしめざるを保證せしめんとす。此の不法の要求何ぞ應答するの必用あらん、普王は斷然之を拒絕せり。是に於て佛使裝を束ねて本國に歸り、普使も亦巴里を辭して本國に歸り、一千七百七十年七月十九日を以て佛は普に向て開戰を布告せり。

此時に當りてナポレオン謂らく澳太利は普漏西に破られて怨骨髓に徹す、必ず能く我に黨せん。南方獨逸諸邦、普國の强大を嫉視する久し、亦能く我を援けん。

翻てナポレオンを顧みれば、一たびメキシコに失敗し、再び以太利に失敗してより、民望漸く落ち、自由の論、共和の說、又紛々擾々として其隙に乘じ、勢革命を誘起せずんば止まらざらんとす。ナポレオン此機を察し、國內の不平を國外に發し、以て內亂を杜絕せんと欲し、奧普戰爭の起るや、奧太利に黨して普漏西を壓し、ライン河邊の地を略せんとす。ビスマルクの烟眼、其謀を知り、ナポレオンに啖はしむるに利を以てして曰く、「若し貴國にして奧の外援たらずんば、則ち普はライン河畔の地を割て以て貴國の和好に酬ゐん」と。ナポレオン乃ち手を束ねて、局外中立を守る。事平ぎ亂治るに及んで、使を遣はしてライン河上の地を求めしめしに、ビスマーク昂然として答て曰く「其地大國能く取らば則ち自ら取れ」と。ナポレオン其の自らビスマークに賣られたるを知り、大に憤慨すれども亦奈何ともするなく、切齒陰に一劒を磨す。是に至りてナポレオンの人望殆んど全く地に墮つ、此際衆望を恢復し、屈辱を洗滌するの法、唯普漏西に報ずるあるのみ。是を以て一千八百六十八年法令を出して常備軍の員數を增加し、國債を募集して新式の銃砲を購入し、糧食を貯蓄し、武庫を設置し、戰鬪の準備をさ〳〵怠るなかりしが、西班牙相續問題は玆に

悲慘の最後を遂げぬ。此事件は歐洲の外交上其關連するところ少なしと雖ども、一たび其慘鼻酷薄なる死報の歐洲に傳播するや、大に歐洲人の同情を曳起しナポレオン三世の名聲益々落潮に傾く。

第五、普佛戰爭。虎豹同じく棲むべからず、吳越共に存すべからず、利害を異にし、强弱を爭ふ普佛、何ぞ能く長く對立するを得んや。一千八百六年、佛帝ナポレオン一世の馬蹄に蹂躙せられて、殆ど衰頽の境に沈淪せし普國は後五十年間に漸く衰運を恢復し、殊にヰルヘルム王干戈の際に即位するに及びて、臥薪嘗膽、士を禮し、鋭を蓄へ、一千六百六十三年には丁抹を擊て之に捷ち、千八百六十六年には墺太利と戰ひて之を破り、北獨逸の諸邦を聯合して、儼然自ら盟主となり、其勢將さに佛國を凌駕せんとす。獨逸全國を打て一丸となし、佛國を挫きて覇を歐洲に唱へんとするはヰルヘルム皇帝の宿志なり。然るに佛はライン左岸の地方を領し、南北獨逸の聯合を分離阻隔するを以て、普國にして佛を破るに非ずんば、到底其宿志を達するを得ざるなり。是を以てヰルヘルムは十年生聚、十年訓練、一打擊を佛に加ふるの機を待つこと久し。

の乾坤風波又靜かなり。是に於てナポレオンの夢魂は、天涯の一角南米の地に向て飛びぬ。先是佛國革命の影響は太西洋を横ぎりて、遠く南米諸國に波及し、自由共和の思想いたく州民の頭腦を刺砭し、或は西班牙の羈絆を脫して獨立を企つるあり、或は其國王を放逐して共和政府を建つるあり。一千八百十九年コロンビヤ獨立してより、四十餘年の間、南米諸州は混沌たる爭亂の渦中に捲投せられ、天下一日の平穩を見るときなかりしが、一千八百六十一年に至りて又メキシコに紛亂生じ、共和黨相議して、國王を海外に放逐し、新に大統領を迎へて共和政府を建つ。ナポレオン謂らく南米の沃壤を略取して太西洋上の海權を掌握する此機にありと。英國に說き西班牙に諮り、大軍を遣りてメキシコに上陸し、大統領を黜罰して反亂を平定し、墺帝の弟マキシミリヤンを立てゝ世襲の帝王となし、自ら其保護者となる。是より數月の間、帝は兵をメキシコに屯在せしめてマキシミリヤンの爲に盡す所ありしも、其後反撥屢々起り、費用亦巨大なりしより、帝は遂に屯兵を撤回するに至る。マキシミリヤン勢孤弱、暴徒に抗するに足らず、其妻妃をして歐洲に歸りて各國に援兵を乞はしめしも果さず、一千八百六十七年、慓悍なる反民の手に陷り、

ゼンタに挫き、次て同月廿四日ソルフェリノの激戰にて大に澳軍を破る。若し此趨勢を利導し、長驅電撃、澳太利に進撃せば、ヴヰエナを取り匈牙利を略し、馬をドナウ河畔に飲ましむる蓋し難きにあらざりしならんを、ナポレオンの婾惰なる、十一月十日、チュリヒにて澳太利と不名譽なる條約を訂結し、空手何の齎らす所なくして佛國に凱旋す。

第三、シリア事件。澳太利と平和條約を結べる後、六ケ月にしてシリアに反亂起り、耶蘇教國民の屠戮せらるゝもの數百人に及び、ダマスコにある佛國の領事館又爲めに禍難に陷る。而して土耳古の軍隊は暴徒を沈壓するの擧に出てず、却て暴徒に加擔し、益々其慘逆を逞うす。佛國の民心大に激昂し、帝に迫りてシリヤに出師を促す。帝は元より願ふ所、直ちに遠征軍を派遣して容易に暴徒を壓倒するを得たり。帝は此機運に乘じシリヤに鐵道を布設し、道路を平坦にし、港灣を開鑿し、以て東西の交通を敏活にし、佛國商業を旺盛ならしめんとせしが英國の阻隔する所となりて果さず、空しく手を拱して止みぬ。

第四、メキシコ事件。シリヤの反亂既に戡定し、佛國の天地平和の春を装ひ歐洲

んと欲する禍心を包藏せる際なりしを以て、羅馬法皇を困阨の地に拉いて佛國に於ける舊敎僧侶の歡心を買ひ、之と結托して、徐ろに事を謀らんと欲し、一千八百五十九年四月二十六日其將オーデノーに四萬五千の兵を授けて羅馬に入り、苦戰數回の末、漸く暴徒を鎭壓し、再たび羅馬法皇を羅馬に奉還し、自ら熱心なる信徒と詐稱し法王に師事せり。爾來歲月を閱する十星霜、星遷り物變りてノバラの一戰に肝腦地に塗れ、殆んど自立の見込なかりしサルデニヤは、エマヌエレ、ガブール二豪傑の下に大に其衰頽を挽回し、一たび兵をクリミヤに出して奇功を奏せしより、國威隆々、澳太利を蹴倒して沼吳の計をなす將に近きにあらんとす。時恰もナポレオン三世がクリミヤに成功して、雄心勃々禁ずる能はず、再たび佛國の軍旗を外國に飜へし、塊國の跋扈を抑へて武威を天下に輝かさんとするに會す。ナポレオン何ぞ袖手傍觀獨り以太利のなすに任ずる理あらんや。況んや英才勇邁のカブールが銳意、其間に奔走するありしに於てをや。是に於て佛以同盟は直ちに成り、サルデニヤは一千八百五十九年五月を以て澳國に向て宣戰を布告す。ナポレオン自ら其將マクマホンと三萬の兵を帥ゐて海路以太利に入り、六月四日、先づ澳太利の軍をマ

露國の強傲を挫き、一千八百五十六年三月卅日、露國をしてパリ條約に服從せしむ。此戰爭にて財を費すもの二億、人を殺すもの三萬、而して佛國の得たる所を問へば負債のみ、困弊のみ。然れども戰捷の結果、ナポレオンの威名は世界に高く、始んど列國の盟主たるの觀ありき。而して佛國國民は一時の僞聲虛譽に眩惑して自ら知らざりしなり。

第二、以太利戰爭。一難漸く排して一難來り、一亂僅かに除きて一亂生ずるは、是れ當時歐洲諸國に於ける趨勢なりき。而して間斷なく簇出湧せる此等の一難一亂こそナポレオン三世の勢權を增大して、國民の滿心を扶育する好運どこそなりしなれ。是より先一千八百四十八年、以太利國內の志士、澳太利の羈絆を脫して共和の政府を建てんとし、羅馬法皇ピオ九世に迫りて墺國に宣戰を宣告せしむ。然るにピオは法皇たるもの斯かる塵事に關係すべからずとなし、斷然之を拒絕せしより、過激なる共和黨は法皇を脅迫して、其意に從はしめんとし、隊伍を整へて羅馬に侵入し、法王の護衛兵を攻擊し、法王宮の前殿を擊碎す。法王狼狽蒼皇ゲエータに逃走す。時方にルイ・ナポレオンが大統領の地位より一躍して帝位に昇ら

の聲あるを察知するや、外國と釁端を開き、事難を外に構へて內部の瞞勃を國外に發洩せしめたり。

第一クリミヤ戰爭。歐洲の天地は、自由主義と專制主義との衝突によりて震蕩激搖せられたる間に、露西亞が獨り東方に僻在して三年鳴かず飛ばず、武を練り食を充たし、陰に其勢を養ふて扶桑萬里の風を待つもの年あり。野心燃ゆる如きニコラス皇帝の即位するや、ペトロ、エカテリナの遺圖を承ぎ、不治の病人なる土耳古を分割して、圖南の翼を張らんと欲し、之を英國に謀る。英國其深意のある所を悟りて之に應ぜず。露帝は是に於て方を易へ、策を變じて、土耳古政府がエルサレム靈地に於ける基督敎徒の特權を毀損したるを口實とし、一千八百五十三年メンシコフをコンスタンチノポリに遣り、土耳古國內の希臘敎徒を露國保護の下に置かんことを求む。然るに土耳古政府斷然之を拒絕せしより、露國のゴルチャコフは直ちに兵を帥ゐて土耳古に侵入し、シノープ港にて土耳古の艦舶を全滅し、土耳古の運命日に危殆なり。ナポレオン以て好機失ふべからずとなし、英國に說きて土耳古を扶殖するに同意せしめ、兩國同盟艦隊を遣りてクリミヤに上陸し、激戰數次、遂に

主義は帝權を維持し、家名を盛大ならしむるの道にあらずと、故に皇帝となるや、極めて自由を束縛し、言論を箝制し、專制獨斷以て其政治を行へり。今其憲法を見るに立法部は議案提出の權なくして唯帝の提出案を討議するに止まり、元老院は帝の諮詢に應答し、樞密院は帝の命令を遵奉するに過ぎず。佛國は是に至りて又全く專制政治の下に屈服するに至りぬ。何となればナポレオン三世の政府は、立憲制度の假面を被れる純然たる君主獨裁政治なればなり。

ナポレオン三世の外交

ナポレオン三世は幸にルイ・フヰリップの弊政を受け、能く一時を彌縫したるも、勢極まれば必ず變ず、昇平日久しきに及んでは亂焉んぞ生ぜざるを得ん。況んや劉轉贏蹶、朝を易へ、代を革むるは、佛國の常態なるに於てをや。然らば則ち如何にして將に背馳せんとしつゝある人心を收攬せんか、又如何にして將に離反せんとしつゝある衆望を結束せんか。之を結束し之を收攬するものは、實に外交問題に如くものなし。故にナポレオンは國民が漸く己れの治政に厭惡の色あり、社會亦不平

竊に策ちて、奮勵盡瘁、民望に協ふを得んと。然るに計らざりき、吾の不似なる、議會の信憑する所とならず、爲す所、行ふ所、皆其圖に反す。議會は我が議案に反對し、我が施政に反對し、我が方針に反對し、我が政綱に反對し、我が精神に反對し、吾れ右すれば議員左し、吾れ東すれば議會西し、萬事悉く皆支吾して枘鑿相容れず。吾れと議會とは到底兩立併存する能はざるなり。吾れ去りて議員留らんか、抑も又吾れ進んで議員退かんか。我が忠厚義烈なる國民、幸に反覆訂議して吾が去就を決せよ。

と。ルイ・ナポレオン萬歲、大統領萬歲の聲は天地を震撼して國民は皆ルイに左袒す。中にはルイの暴狀に憤昂して義周の粟を食むを屑とせざる高傑廉直の志士なきにあらざりしも、勢敵せず力抗せざるより、皆命をルイに請ふ。ルイ乃ち令を出して憲法を變更し、大統領の年期を十年とし、國務大臣は大統領に對して責任を負ふことゝし、樞密院を設け、元老院を置き、悉く大統領の配下に隷屬せしむ。而して其歲の十月嚴然南面して自ら佛國皇帝ナポレオン第三世と稱し、西班牙の皇女ユーゼヌを擧げて皇后となす。是れ實に一千八百五十二年なり。ルイ謂らく、自由

當時佛國の憲法は、大統領の在職年限を四ヶ年とし、退職後四年を經過するに非ざれば同一人を再選する能はずと規定せり。然るにルイ其勢威の赫灼として欲するところ意の如くならざるなきより、遂に爵位に戀々し、四年の在職を以て滿足する能はず、之を子孫に傳へて長く佛國に君臨せんと欲し、議會に迫りて憲法の改變を督促す。議會容れず。是に於てルイは其腹心ド・モルニー伯及びアルイ將軍等と合同し先づ私恩を賣り、軍隊の歡心を求め、一千八百五十一年十二月一日、大ナポレオン皇帝の戴冠式に當るを機とし、エルセイユの宮殿に盛宴を張り、悉く國内の政友論客を招聘して自ら其間に周旋し、深夜宴終り客散ずるに及んで、兵を遣りて反對黨の邸宅に亂入し、悉く反對黨の名士領袖を捕縛し、之を獄中に下す。シャンガルニエ、カベニャック、チェール、ビクトル・ユゴー等は、唯一片のツーデターの下に、罪なくして縲紲の辱に遇ふ。

ルイは直ちに國民議會を召集し、自ら儼然として之に臨み、特更に辭を飾り、泣て國民に訴て曰く、

吾れ謬りて國民の推擧撰擇する所となり、大統領の重職に當る。自ら謂らく、罷

らんことを恐れ、特に寛厚謹直の風を裝ひ、戰々競々として穩和の政を布き、銳意國利民福を增進するの方針に出づ。即ち彼は先づ國民の救助、孤獨の保護を始とし、必用品の課稅を輕減し、兵士の俸給を增加し、地方官に權力を賦與して、中央政府に隸屬するの弊習を匡正し、溝渠を穿ち、電信を布き、鐵道を通じ、博物館を興し、學校を建て、病院を設け、會堂を置き、殖產工業の振興を計畫し、航海貿易の發達を奬勵し、佛國をして忽ち文化煌耀、歐洲第一等の國たらしめ、其熾盛旺運一時の人心を隨喜せしむ。故に反對黨如何に口を極め、手を盡してルイを誹謗中傷するも、民心の歸する所、又如何ともする能はず、手を拱してルイの爲すに任ずるのみ。是に於てルイが欲する所得ざる無く、請ふ所滿たされざるなし。之を策すること累年にして之を今日に獲たり、眞に其期する所に負かずと云ふべし。若しルイにして期至り任滿つるに及んで、勇退高踏、田野の間に退隱し、琴書詩酒、里閭姻族と共に團欒和樂の裡に餘生を送りしならば、ルイは平和の恩人、共和政府の創設者として、百世に廟食し千歲に景仰せられたらんを、惜むべし望蜀の情と、功名の念は再たびルイを驅りて、野心の奴隸とはなしぬ。

甥として、故和蘭王の子として高く自ら標置し、謹直敬虔、溫柔滑脫、勉めて國民の好尙に投ず。此に於て碁年ならずしてルイの名聲は國內を震動し、輕佻なる佛國民は、卓眼明識の士の反對せしにも拘らず、殆んど一世ナポレオンを渴仰せるの情を移して、此一野心家を迎へ、一千八百四十八年十二月二十日、五百四十三萬票の大多數を以て佛國の大統領となす。ルイ・ナポレオンは時運に際會し、刃に劍らずして多年の宿願を達す。乃ち欣々然として神前に國民と誓て曰く「永く憲法を遵奉し、忠良なる國民の寄托に答へむ」と。何ぞ計らん、其舌未だ燥かざるに、彼は盟を易へ約を破りて、專制の君主とならんとは。

ルイ佛國の皇帝となる、並に其內治。

ルイ・ナポレオン佛國國民の人望を得て大統領となるも、國會の多數は概ねルイに反對し、殊に其の僞善を看破せる憂國の徒は、飽までルイを排斥せんとして、辯難甚だ力む。然れどもこの攻擊は常に國民の翼贊する所とならずして、ルイが大統領としての勢望隆々たること依然たり。ルイの狡猾警奇なる、民望の離反するあ

羅の巷となるに至れり。フヰリップは暴徒の勢猖獗にして容易に鎮壓すべからざるを見るや、直ちにギゾー等を免職して罪を謝せしも、時期既に遲く、暴徒は王宮に闖入し王を放逐す。是れ實に佛國に於ける二月革命なり。是に於てラ・マルテン等は假政府を設けて社會黨の紛擾を抑制し、カベンヤクは、軍を督して勞働者の暴亂を鎮壓し、僅に一時の小康を致すを得たり。

二月革命は、天實に靑雲の寵兒に幸するのときなりき。寵兒豈默々、此千歲一遇の好機會を看却するものならんや。ルイは王の遁走するを聞くや、直ちに英國より巴里に入り、假政府を助けて自ら其難局に當り、戰後の經營に軼掌せんことを請ふ。共和黨の領袖等、ルイ政府に入らば、徒らにボナパート黨の强大を致し、或は再び共和政府の轉覆を來さんことを恐れ、ルイの請を許さず。ルイは空しく志を齎らして英國に歸る。然るに國會の開始せらるゝや、ルイは巴里及び外四選擧區より議員候補者に選出せられ、ルイ・ナポレオンの聲名漸く佛國內に高し。然れどもルイは時機の未だ到らざるを察し、反對黨の勢力盛なるの故を以て一時議員を辭せしが、選擧區民の好意捨て難きより遂に議院に列す。ルイは大ナポレオン皇帝の

課して盛に工事を營み、貴族は花柳の巷に徘徊して歌舞燕安に耽り、綱紀癈頽して又濟ふべからざるに至れり。是に於て一時政府の威力に壓服せられて、伸びんとするも伸ぶる能はざりし、社會黨、共和黨は、宛も地下に潜みたる積水の罅隙を得たるが如く、決然として迸射し來れり。加るに一千八百四十五年と四十六年との二度に於ける水旱飢饉は、ルイ・フヰリップの逆政と共に暴威を逞し、遂に巴里市中王の馬車に爆烈彈を投ぜし暴徒あるに至る。或は又テユリの宮殿に荆軻を學んで七首玉躰を危ふせんとする狂人あり、刺客彷徨、盗賊横行、人其生を安せざるに至りてはルイ・フヰリップの政府も亦岌々乎として危し。一千八百四十八年十一月廿八日、國會の開始せらるゝや、アラゴ、オデヨン・バロー、ルイ・ブラン、チエール、ラ・マルテン等共和黨の首領は相共に立て政府を攻撃し、痛快淋漓を極め、劈頭第一、議員選擧法の改良を以て政府に迫る。而して政府は之に從はず。是に於て共和黨、社會黨は相共に連合して呼噪合撃せんと欲し、翌年二月廿二日を以て巴里に大會を開き、大に協議する所あらんとせしかば、政府は兵を遣りて之を解散せり。是に於て巴里の市民大に激昂し、市中壘を築きて王兵と格闘し、彈丸飛び劒火閃き、巴里は忽ちにして修

ルイ・フヰリップの治世の下に、佛蘭西は前代未聞の昇平を到せり。曩日跼蹐して控御を受けざりし共和黨も、今は聲を飲むて王の治政に默し、平素撿束を肯ぜざる過激論者も、遂に首を俛して其事に從ひ、國會は唯々として政府案に贊成し、新聞は又諾々として王政を贊助するに止まり、野に危言なく朝に諫官なし。而して人口は次第に繁殖し、商業は日を逐ふて隆盛に赴き、歳入歳出の增加、又殆んど英國を凌駕せんとするに至る。人皆謂らく、太平長く期すべく、旺盛久く樂しむべしと、然れども此れ革命後一時人心の銷磨沈滯せし結果のみ。風雲一たび地を捲きて來らば、基礎鞏固ならず、根底充實ならざる、ルイの政府何ぞ久しきを保たんや。況や中葉以後ルイの弊政其極に達し、紀綱弛み、風俗紊れ、自由共和の思想亦隱約冥々の間に形成せられつゝありしに於てをや。

蓋し十有餘年の太平は經濟の機關を膨脹せしめ、生活の程度を高尙ならしめ、爲に奢逸の風漸く萌し、富豪跳梁の弊は上下貧富を離隔して細民休養の途全く絕へ、國會の議員は收斂の吏となり、內閣の有司は惡貨を濫造するに到る。國用多端、誅求酷く、社會の腐敗と人民の困難は殆んど其極端に達せり。フヰリップは民に重稅を

き、枯淡靜寂思を幽境に馳せ、眼を讀書に曝らす、豈渾然自得する所なからむや。ハムの囹獄はルイに取りては實に大學校にして、彼が半生の學識は、概ね此裡に獲得したるものなり。而して其の蘊蓄する所、砂糖問題となり、自由貿易論となり、南米殖民論となり、パナマ地峽開鑿論となり、英國革命の歷史論となり、其才華は混々として、筆端より横迸せり。

如斯にしてルイは勤學依然、此獄舍に六裘葛を送りぬ。然るに嚴父の凶報は又突如として至れり、ルイは再次其喪に臨まんことを請へども許されず。ルイ乃ち謂へらく、如斯んば自由の身となるの期、其れ何の日にあるを知るべからずと、脫檻の念漸く萌す。獄吏コンノーなるもの、朝夕過訪しルイの爲に慰撫懇切到らざるなし。ルイ乃ちコンノーに謀り、ハムの獄舍に工事あるを機とし、服裝を變じて職工に擬し、夜に乘じてハムを脫出し、困厄疲憊の餘英國に遁走す。

佛國に於ける二月革命、ルイ・ナポレオン大統領となる

巴里の市民は虔仰の念と追慕の情に打たれて、思はず感慨の涙に暮れぬ。幽闇蕭條たる鐵窓の下に呻吟して此を聞きしルイの心中果して如何ぞや。叔父は死して能く萬民の仰瞻を受け、我れは生きて却て獄吏の凌辱に遇ふ。仰て叔父が威烈の大なるを想ひ、俯して我が宿望の蹉跎たるを察すれば、何人が能く懐抱鬱結、心腸九廻するなからんや。若し彼をして急性邀越の野心家ならしめば、憂憤悶絶の極、自頸して死せしならんのみ。然れどもルイは非常の野心家たるに拘はらず、極めて冷靜沈着の特性を有せり。彼は囹圄の裡にありて毫も怨懟苦悶の色なく、委靡衰颯の風なく、冷然として自適し、耿たる一點の希望は猶ほ蝮蛇の如き彼れの眼中に閃きぬ。

彼れ嘗て此獄中より諸友に書を與へて曰く「人生の幸福は實質界よりは寧ろ理想界に存す、身今囹圄にありて日月を觀るを得ざるも、沈思默坐、恍然として一たび理想の世界に遊べば一切の世榮又顧るに足らざるなり」と。亦以て彼が此幽囚中の襟度を知るべきなり。彼れ又人に語りて曰く「ハムの城砦は余が一生涯にとりて、少なからざる智能と學識を與へたる大學校なり」と。四壁蕭條、側に人なきのと

て共和の新政を布くを宣言す。豈圖らんや佛國民一人の來りて其軍に加ふるものなからんとは。此時佛王フヰリップはオイにありしが報を聞て、星馳巴里に還り、一擊直ちに暴徒を破りルイを虜にするを得たり。ルイ胸に成算なく、兵に訓練を缺き、突如として此輕擧妄動を逞うす。假令心を寄するの黨徒多しと雖も、未だ氣脈を通ずるなくして何ぞ俄に好結果を奏するを得んや。其の敗るゝや固より自明の數なり、佛民の應ぜざるや又宜なりと云ふべし。斯くの如くにしてルイは獄舍に送られ、貴族院にて審問せられたる後、僅に一命を助けられてハムの城砦に幽せらる。

ルイ・ナポレオンの幽囚

ルイ・ナポレオンがハムの獄舍に投ぜられて憂愁遣るなかりし頃しも、セント・ヘレナの寂寞たる棕櫚樹の下に冷夢結びあへざりし英雄の棺柩は新に發掘せられて佛國に持來され、センヌ河を溯りてインバリドの寺院に改葬せらる。招魂の砲聲は天地に轟き、一代の王侯貴族は擧げて此葬儀に列し莊麗偉觀云ふばかりなし。

碍せられざりき。彼は此際に於て「ナポレオンの理想」と題する一書を公にして、一世ナポレオンは平和の攪亂者に非ず、自由の壓服者に非ず、却て自由平和の爲めに歐洲の各國と衝突を來せる者なることを論斷し、ルイ・フヰリップの如き專横の君主は、一日も自由平和を愛する國民に君臨すべからざるを唱道せり。

當時佛國の民心は一變しぬ。天下昇平日久きに亘るの結果、偸安姑息の政治に滿足して敢て他を知らざるフヰリップの如き庸主を厭惡して、豪宕邁往世界の耳目を聳動せしナポレオン的英雄を渇仰景慕し初めぬ。或は國民相議してナポリの女皇（ナポレオンの妹）に養老金を送るあり、或は有志相謀りてナポレオンの紀念碑を建つるあり、ボナパード黨の勢力日に月に增長しぬ。佛國の宰相チエール亦民心の傾向を察し、務めて其を政府と和解せしめんと欲し、其手段として英國のパーマストン侯に諮りナポレオンの遺骸を佛國に轉葬せむことを決しぬ。ルイ、ナポレオン謂らく、一鞭直ちに佛國に至らば、叔父ナポレオンの功名に隨喜せる國民は必ず能く我を推戴して、フヰリップを倒さんと。知人モンスロンと五十餘の同士を語らい、一千餘の英兵を帥ゐて不意にブロンニュに上陸し、稅關を襲ひ、檻獄を奪ひ、專制政府を倒し

て偸安暖飽の裡に一生涯を送り得しなん。然れども彼れの功名に急なるや、再び政治雜誌を發行し、爲めに他國零遊の人となるに至りぬ。ルイは母の喪後未だ幾くもならざるに、舊友レーテ(陸軍士官)をして、一の政論雜誌を發兌せしめ、自ら筆を取りて、ストラスブルヒ事變の眞相を展盡し、佛國政府の暴情を攻難す。佛王フヰリップは彼が其誓約に背き、再び歐洲大陸に入りて佛政府の非を鳴らすを怒り、瑞西政府に命じてルイを國境外に放逐せしむ。然るに瑞西政府は、却て佛王の不法なる干涉を憤り、ルイを庇保せんとせしが、ルイは自個一人の爲めに兩國の親和を害し、不測の事變を引起さんことを恐れ、自ら瑞西を脫して英國に走る。

英國に於けるルイの生活

ルイ英國に留寓すること二歲、其間多く英國の權門貴族と往來して、時に或は談論を上下して其抱負を吐露し、又時には競馬場裏に驅馳して筋骨を鍊磨し、舞踏夜會、奏樂、演劇等ありとあらゆる公會に出入して、社交的生活を送りぬ。花月多く人を墮落せしめ、遊冶屢々一生を誤らしむる媒介たれども、ルイの大望は之が爲に障

の恥を雪がんと、ルイは是より獨り戸を閉ぢ客を謝して、法律政治の學を研鑽するもの數月、略々其堂門を伺ふを得たり。然れどもルイ又謂らく、机上の學は概ね空理空論たるに過ぎずと、更に中央亞米利加を旅行して審に習俗人情を探り、農工殖産の有樣を察し、自家の藥籠少なからざるの美果を收取して歸る。ルイが實際政治的手腕なきに拘はらず、他日佛國の內治に於て比較的に好結果を呈したるは、實に此旅行中の經驗によれるもの多しと云ふ。

時に天外飛鴻あり、來り報じて曰く、ホルタンス疾篤しと。ルイ蒼皇旅裝を整へ、亞米利加より佛國を經、晝夜兼行、瑞西の自邸に着すれば、悲むべし、母は既に不歸の人となりぬ。獨り千歲の憂を抱きて東西に漂零し、空しく大業を企圖して幾回か放謫の命に遭ひ、卅餘年叔水の歡を盡す能はざりしもの、誰か斜陽原頭一片の苔石に對して無限の感慨なからんや。ルイは此が爲めに慟哭其度を超へ、殆んど狂せんとしたりき。

ホルタンスは瑞西にて巨萬の富と、立派なる邸宅を有せしを以て若しルイをして一たび政治的野心を抛却し、田野の間に放浪せしめなば、素封家として紳士とし

ブルヒの民數奇志を得ざるもの、骫髒奇を喜ぶもの、相率ゐて來り應じ、勢頗る盛なりしが、軍中の一將校テーランドなるもの、ルイの狀貌を瞻視し冷笑して曰く、我れ豎子の欺く所となる、汝はナポレオンにあらず、ナポレオンの甥にあらず、我はナポレオン皇帝を記憶せり、皇帝と汝と何の肖たる所ある、汝はボードレーの甥なるのみ、豎子何ぞ能く我を欺罔するを得んやと。三軍の將士之を聞て彼を眞のルイ・ナポレオンにあらずとなし、未だ戰はざるに散亂し、却て戈を倒にしてルイに抗するものあるに至る。ルイ遂にボードレーと共に敵軍の爲に捕はれ、檻車巴里に護送せらる。佛王ルイ・フヰリップ之を死刑に處せんとせしが、偶々ルイの爲に命を請ふものあり、死一等を減じて亞米利加に放謫せられぬ。

ルイ・ナポレオンの放謫

一擧して當らず、再擧亦其志を得ず、僅かに餘命を保ちて天涯萬里の異鄉に放謫の怨を呑む。是れ蓋し天の我を亡すにあらずして、自ら招ける禍なり、敵の强きが爲にあらずして、我が弱きが爲なり。天を怨みず人を咎めず、いでや加餐修養、會稽

ルイ操觚者となる

ルイ博浪の一擊其功を奏せず、拊膺搏髀、今に至りて無益の悔をなすも亦及ぶべからず。彼は乃ち干戈を抛ち筆硯を取りて、國民の思想を皷舞挑發し、徐ろに回天の事業を企てんとし、一千八百三十二年に「政治評論」を著はし、翌年又瑞西の政治上軍事上に關する意見を公にし、盛に大ナポレオン時代の善政を頌し、當時佛國の弊竇を指摘攻擊す。共に是れ雄篇巨作を以て許すを得ざるも、其思想の富贍にして文章の流麗なる、大に瑞西人の賞賛を博し、ルイの名は國内に籍々としてアレヲルベルグの邸宅は訪問者の踵を集めぬ。殊に一千八百三十六年、ナポレオンの嫡子ライヒスタット侯の夭死は端なくもルイをして一層其頭を擡ぐるに至らしめ、ボナパート黨は隱に彼に意を寄せ望を屬しぬ。一篇の著述巧に案外の聲望を博し、ベルヌの知事より陸軍大尉の官職を授かりてより、ルイの心漸く誇大となり、自ら謂らく我大事を成す此時にありと。力を計らず、機を察せず、其の親炙せる少佐ボードレーと密議し、一千八百三十六年十月廿八日、ストラスブルヒに反旗を擧ぐ。ストラス

擔す。獨立軍の總督ツツキ喜び迎へ、ルイ兄弟を推して各一部隊の將となす。羅馬法皇、反黨の鋭鋒當り難きを見るや、カーデナル、ベンベヌートを遣りて反民を和解訓諭せしも反民聞かず、ベンベヌートを縛して慕然直ちに羅馬を襲撃す。羅馬法皇恐懼救を澳太利に請ふ。澳太利皇帝フランシス、將軍ラデスキーに大軍を授けて來り援けしむ。反黨の衆、其數多しと雖ども千餘に過ぎず、其勢盛なりと雖ども皆是れ烏合の兵、何ぞ能く澳國精鋭の師に敵するを得ん、一戰忽ち敗れて四方に潰亂す。此戰爭にてルイの兄は傷きて屍を山野に曝らし、ルイ亦疲憊困頓歩行する能はずして遂に敵に捕はる。ホルタンス變を聞きて馳せ至り、辛うじて途にルイを奪ふことを得、間道より迂廻して佛國巴里に逃る。始め母子此地を奔竄せしより茲に至るまで十六年なりと云ふ。然れども當時佛國政府は猶ほボナパート家放逐の法令を維持して、ルイ母子の巴里に逗留するを許さず、遂に母子を捕へて英國に追放す。ホルタンスは永く英國にあるを欲せず、暫くロンドンの客舍に呻吟したる後再び逃れて瑞西のアレネルベルグに歸る。

如何にしてボルボン王朝を倒さんか、如何にしてボナパート家を起さんか、是れルイが、造次顚沛、忘るべからざる宿志なり。此宿志を達するには文官たらんか、武人たらんか、將た又政客たらんか。亂世の文官は唾手功名の地にあらず、專制政府の下にある政黨亦驥足を伸ぶるの局にあらず、當時の如き時世にありては、干城武夫こそ實に他年の宿望を達するの好地位なれ。是に於てルイは遂に意を決して瑞西の騎兵隊に身を投じぬ。

時に一千八百三十年佛國に勃湧せる七月革命の影響として、一時地下に潛伏せる自由思想の暗潮は、決裂して迸出し、自由平等の聲歐洲の各地に響き亘り、神聖同盟國の惰眠を警戒す。而して其先鋒は以太利に於けるカーボナリ黨の反亂なりき。是より先き以太利の志士相會して祕密結社を建て、羅馬法皇を放逐し、澳太利の干涉を退けんとして經營慘憺怠るなかりしが、佛國國民がシャール十世を追放して立憲政躰を建立せしを聞くや、彼等は直に奮起して以太利の獨立を宣言し、以太利人民は、四方響應し、其勢頗る猖獗なり。日夜南天を睥睨して天下事なきを嘆ぜしルイ何ぞ默々起たざるの理あらんや、彼は忽ち奔馳星走ナポリに至りて獨立軍に加

携へて他國に奔遁せざるを得ざるの悲運に遭遇しぬ。ホルタンスも止むなく遂にルイを伴いて禍をバヽリヤに避けしが此處にも永住する能はず、道を轉じて瑞西に逃れ、アレチルベルグに高壯なる邸宅を購ひ、母子擧々、此所に拾有五年の生涯を送れり。

ホルタンスは溫厚貞淑の賢母にあらざりしも、優雅脫俗の婦人にして、頗る坐談に長じ、一たび會心の友と談ずるに及んでは、欵晤洋々、夜を徹して倦まざるものあり。殊に文筆に長し其手に成れる抒情詩の如きは流麗暢達、字句の間自ら才華の煥發して金鱗の潑溂たるを認む。他日ルイが其著作にて發表したる才藻は母の薫陶感化によるもの多しと云ふ。然れどもホルタンスは獨り彼が彫花鏤葉の師たるに止らずして又實に彼れが野心の煽動者たりしなり。ホルタンスが爐邊其家系を說明し、悲憤今昔の感を述ぶるとき、傍らに默聽するルイの頑是なき頭腦は是が爲に刺戟せられて、蕨の如き掌を握ること、幾回なるを知らざりき。

ルイ軍籍に入る

帝は皇后と共に神前に此嬰兒を抱き、恭しく其儀式を行へりと云ふ。

ルイ・ナポレオンの幼時に關しては吾人の知る所多からず。唯彼は其幼時擊戻頑固にして往々非を遂げ、決して共に親しく群兒と嬉遊するとなかりしが、穎悟敏達の稟性は能く此缺點を補綴して、家庭の愛兒たるを失はざりき。口碑の傳ふる所によれば叔父ナポレオンが最後の戰場に臨むに方り、ルイは慇懃帝の袖を扣へ戰爭の不可を述べて其出陣を止めたりと。然れども小ルイが、母に隨伴して叔父の宮殿を見舞しは、搖籃の中にある頃にして、少しく事理を辨ずるの時代に至りては、ナポレオンは兵馬倥傯、諸國に轉戰して、巴里宮殿席暖なるに暇なく、ルイは後年叔父の狀貌さへも記憶せざりしと云へば、是れ全く無根の事實、附會の說にして敢て信を措くに足らざるなり。

偶然の出來事は、此好運兒をして端なくも流離顚沛の苦楚艱難を嘗めしむるに至れり。あらゆる人生の榮華を盡して、權威飛ぶ鳥を墜落せしめし、ボナパート一族も、其主人公たるナポレオン皇帝が、運拙く一夜の賭博に打負けて、セント・ヘレナの孤島に囚はれ、ボルボン王朝代り立つに及んでは、昔日の豪奢一沫の夢と空し、老幼相

運を迎へ、巧に人心に投じたるによるのみ。然りと雖ども彼れ亦一個の可憐なる野心兒、豈尋常凡庸の品儔を以て目すべきものならんや。請ふ先づ彼れが歷史を讀め。

ルイ・ナポレオンの家系並に其家庭

蓋世の英雄ナポレオン皇帝の皇后として歷史に名高きジョセフィンの一女、ホルタンスはナポレオン皇帝の弟ルイ・ボナパート(舊和蘭王)と結婚して、同棲五歲、既に一子を設けしも、夫妻琴瑟の交睦しからざるより風波常に絕ゆることなく、ホルタンスは遂に一千八百〇七年十二月、夫を捨てゝ巴里に赴き、交際場裏に驅逐して愉快なる生活を送るうち、翌年四月廿日に至りて一男兒を擧げぬ。是なん他日風雲に際會して佛國皇帝の金冠を戴くべき好運兒、ルイナポレオンにてありき。當時ナポレオン一世の勢威は殆んど其極點に達して、ジョセフィンの光寵未だ衰へざる頃なりしを以て、此孫兒小甥は優渥なる餘榮に浴せり。殊に一千八百十年フォンテンブローにて擧行せられたる彼れの洗禮式の如きは當時稀有の壯觀にして、ナポレオン皇

時勢に乘ずるに巧なる佞兒たるなからんか。敢て奇變縱橫の才あるにあらず、雄偉卓犖の略あるにあらず、將又乾坤一擲、危局を爭ふ大ナポレオン的魂膽あるにあらず、怪腕辣手、詭變百出、能く人を翻弄するビスマーク的權數あるにあらず。而かも一たび蹴起するに及んでは、巧に人心を收攬して、大統領となり、恣に群雄を凌駕して皇帝となり、クリミヤに戰ひ、以太利に鬪ひ、普と爭ひ、露と競ひ、殆ど英雄豪傑にあらざればなし能はざる底の破天荒的大活劇を、十九世紀の舞臺に演じたるを見れば、彼は豈時勢に乘ずるに巧なる青雲の寵兒にあらずして何ぞや。

世間或は彼れの事業の宏大なるに眩惑し、佛國が一時彼れの治下に未曾有の旺盛を致したるに驚嘆し、英雄又は大政治家を以て、彼に許すものありと雖も、彼れ畢竟カーライルの所謂る撰ばるゝに巧に、知らるゝに巧なるもの、若し夫れ靑蠅も驥尾に附して千里を致すことあるを悟らば尤爵榮位、必しも技倆にあらず、大業偉勳、亦必ずしも手腕にあらざるを了知するに足らんか。ナポレオン三世が衆人の推擧する所となり、匹夫より身を挺して佛國の帝位を踐み、割合に目覺しき事業を成し遂げたるものは世人の想像するが如く、雄才大略の致す處にあらずして、能く時

り、放客となり、幽囚となり、暴徒となり、新聞屋となり、帝王となり、策士となり、僞善家となり、政治家となり、殆んど有らゆる人間の境遇を渉獵して、趣味多き一部の小說的歷史を此浮世に貢献せり。彼れの資質品性は決して左程雄猜陰狠なるにあらず、寧ろ或點に於ては天眞爛漫として愛すべきものあり。彼れの精神氣象はしかく峭嚴辣酷なるにあらず、却て靜穩親しむべきものあるにも係らず、一種の野心の爲めに蒼生を欺罔し、憲法を蹂躙し、恐ろしき大罪を犯したり。彼れの意思はそれ程迄健剛なるにあらず、彼れの忍耐は又それ迄立派なるものにあらず。然れども彼は此一種の野心の爲に能く百敗の辱に屈せずして一家を立て、一國を興し、能く一代の偉勳を奏せり。野心又野心、鬱勃胸中に燃ゆる野心こそ實に彼れの生命心髓なれ。彼は之が爲に失敗し、之が爲に成功し、之が爲に生き、又之が爲に死せり。彼れ亦憐むべく、惡むべき野心家にあらずや。

然りと雖ども如何なる野心家も、風雲に際會するにあらずんば、蹉跎跌躓徒らに憂悶の裡に一生を送らざるを得ず。僥倖にも彼は時勢の好運に乘じて、其力量以上の仕事をなしたり。即ち彼れの如きは能く時勢を作るの英雄に非ずして、寧ろ

ナポレオン三世

ナポレオン三世は何人ぞ。英雄か、英雄にあらず、愚物か、愚物にあらず、策士か、策士にあらず、痴人か、痴人にあらず。然は則ち彼れは何者ぞ。或る史家は彼れを評して、險怪隱密なる狡兒なりと云ひ、或る評者は彼れを稱して、器識超卓の敏才なりと言ふ。彼れを頌するものは、彼れに許すに靜穩謹直の政治家を以てし、彼れを譏るものは、彼れを攻むるに奸佞陰險の僞善家を以てし、或るものは彼れを崇んで英敏俊偉の傑物となし、或るものは彼れを蔑りて巧黠便巧取るに足らぬ小人となし、譏譽褒貶紛々として歸着する所なし。そも〳〵彼れは何人ぞや。余の見る所を以てすれば、彼れは憐むべく而かも、惡むべき野心家たるに過ぎざるのみ。

彼れが一生五十餘年の歷史は奇譎變幻、開闔出沒、殆んど端倪すべからざる程、不規則にして、廻轉曲折多しと雖ども、終始一貫して渝らざるものは一の野心なり。其の起るや野心を以て起り、其の倒るゝや野心を以て倒れ、出づるや野心を以てし、沒するや又野心を以てす。而して彼れは此野心あるが爲に兵士となり、捕虜とな

Von dem unsterblichen Haupt; es erhebten die Höh'n des Olympos."

(是れテーティス神の哀願を聞きての語なり、クロニオンはツォイスの又の名の一なり、クロニオンの子なればなり。)

(二十九年七月)

魔術の爲に打たれたることは、次の傳說によりて知らるべし。曰く、ツォイスの像成りて是を安置するや、フヰデアス其前に立らて凝睇多時、以て其作の巧拙如何を撿案せむとせり。俄然彼は敬畏感激の情に堪へず、覺えず像前に跪き、祈りて曰く、賤匠の作よく神意に副ふことを得たりや、乞ふ靈驗を得て其左右を知らむと。言未だ了らず、霹靂一聲、晴天に震ひ、電光閃々堂中に落ちたりと。

是の如きものをフヰデアスのツォイス像となす。嗚呼、フヰデアス彼れ眇乎たる一介の工匠のみ、而して能く是の如きを得たる所以のものは何ぞや。神は不信の胸に宿らず。神に非ざるよりは何物か能く神を作らむや。大なる美術家は、多く自己よりも大なるの製作をなすもの、豈他の故あらむや。

フヰデアスがツォイス像を表はして遺憾無きもの、實にホメロースが左の句にありと傳ふ。フヰデアス自身も恐らくは是に憑りて其の想像を構へしものならむと云ふ。錄して讀者に示す。

"Also sprach und winkte mit schwärzlichen Brauen Kronion,
Und die ambrosischen Locken des Königes walten vorwärts

左右の肩にゆりかけたる頭髪、平かに廣き額の下に、鋭くきざまれたる双の眉毛。大なる眼は活と見開きて、大千世界に照臨するが如く、端正に、高き、廣き、鼻隆は正義の師表を示すが如し。稍々開かれたる唇は、凛然たる威嚴の中に言ひがたき無量の慈悲を宿し、其の穏かに巻き縮まれる鬚髯と共に、希望と愛情を現はすが如し。凡て是れ、全希臘人が勇氣、威容、知慧、愛情に對する理想的完美を表現するものに外ならず。擬作によりてフヰデアスの故型を想像すれば、全希臘人が、中世の耶蘇教徒がパレスチナに於けるが如く、巡禮趨拜、後るゝことを是れ恐れたることの洵に當に然るべきものあるを想はずむばあらず。何となれば彼等は、彼等のホメロースに於て、彼等の祖先が中央亞細亞より齎らし來り、幾百千年の間、山明水媚のヘラス半島に於て漸く作り成したる彼等の神話に於て、渇仰讃美する所のものを、今や見得べく、觸れ得べき、塊然たる形躰の中に於て、眉睫の間に實現せられたるを認めたればなり。希臘羅馬の民は是像の前には一種の魔術を感じたり。憂ふるものは喜を得、悲める者は望を得、あらゆる地上の不滿足は、天上無限の光榮によりて解散せらるるなり。獨り是を觀るもののみならず、是を作りたるのフヰデアス自らも、實に是

こゝにはフヰデアスの傳紀を語るの遑なし。唯希臘美術の第二期としてヘラス半島が萬世に誇るに足るべきペリクレース時代の精華を一身に萃め、其の不朽なる大名の下に、あらゆる時と處との嘆美と渇仰とを擔ひ、其の世にありし時、讒姦、妬賊の爲に遂げたりし非業の最後を跡無き流に洗ひ落し、今は山緑に、空長閑なる亞典の古丘に靜臥して、美術百代の汚隆を觀じ居ることを一言すれば則ち足りなむ。

ツヲイス、即ち羅馬人のジュピテルはオリムプ神山に於ける至大至高の神にして、あらゆる神と人との父、希臘、羅馬の神話の中心なり。天を支へ、地を配し、雲を飛ばし、雷を驅り、人生と其運命とを指導する、其威力の高絶無限なるはもとより言ふまでも無し。

是の如きフヰデアスは、是の如きツヲイスを像れり、成る所果して何物なりしぞ。フヰデアスが造りしツヲイスの像は、紀元五世の頃まで、凡そ八百年の間は、事も無く其殿堂に安置せられありしが、惜しや、祝融氏の手にかゝりて壞られ畢むぬ。而も流風餘韻はさすがに幾多後人の擬作にあらはれ、今尚人をして其髣髴を想はしむ。擬作中の尤も美はしきものは、現にヴチカノにあり。嚴かに亂れかゝりて豐かに

れず、毅然として逆運の渦心に立ち、却て愛兒を懷て慈母の涙を濺ぐ。天落ち地陷るもニオベが是心を如何にすべきや。花よりも美はしく、星よりも淸らかに、滴るが如き慈愛の露によりて洗はれたる高雅端麗の顏容を以て、滔天の魔力に面して毫も其の累す所とならざるに至ては天下の大なるもの何物か是れに如かむや。ニオベが悲哀の爲に石となれりと云へるいみじき傳說も未だ這般の情事を盡して憾無きこと能はず。

是の如きものをスコパス、若くはプラキシテレースの手に成れりと云へるを、後人が其遺型を傳へたるニオベ像となす。

（二十九年七月）

三、フヰデアスのツオイス像

古より一宗一教の始祖開基となり、衆生百世の爲に救濟慈悲の明燈を揭げたるもの、大聖に非ざれば則ち鴻德、預言者に非ざれば則ち英雄。若し夫れ一把の斧鑿と、一塊の牙石とを以て、能く一代生靈の信仰を動かすものに至りては、寧ろ偉とすべきに非ずや。フヰデアスは實に是の如き人なりき。

現はせり。

彼は暴惡なるアポロ神等の迫害に對して、如何なる哀願も最早其の甲斐無きことを認めたり。其顏には失望と美の結合を示し、更に進でかよはき人間の悲哀が如何に崇高なる情趣を表はし得べきかを示したり。彼れの面上には今や恐怖なるもの無し、只悲哀深酷にして助けなき悲哀あるのみ。彼女の面上には今や憤怒なるものなし。彼女は人軀の弱少を觀じて、逃れ難き運命の手に甘じて自己と自己の愛兒とを委ねたるなり。彼女は憤怒なるものいまことに力無きことを悟りたるなり。彼女の面上にはラオコーンに見る如き身軀の苦痛を解脫せむとする我慾の片影だも見ること無し。廣大なる神の威力と甚深なる慈母の悲哀とは斯の如き劣情に心を苦むを容さゞりければ也。

彼女にありては事すべて悲哀の中に埋沒せり。彼女の滿身只涙あるのみ。怒無く怨無く、身は避くべからざる運命の中にありて、只愛兒の爲に濺ぐべき萬斛の涙を餘すのみ。彼女を苦めむとする暴神は却て彼女の爲に嘲けられたり。運命は一度び彼女を陷れて今や彼女は醜て運命を凌駕せり。迫らず、恐らず、亂れず、怕

像はシピロス山の巓にあり、慈母が悲哀の涙は泉となりて流ると云ふ。

是の哀れなる傳說に基きて、初めてニオベの像を作りし人は、今尙定かならず。或はスコパスと云ひ、或はプラキシテレースとも云へど、今は傳はらざれば知るに由なし。後人の其遺型に據りて造りたるもの、今尙以太利のフレキンツェにあり。是像によりて考ふる時は原作の巧妙實に驚くべきものなりしならむ。

想ふに、是ニオベは、疑もなく古希臘が吾等に殘したる塑像中の最も美はしきものゝ一ならむ。『トリビユン』のエヌス像の如く、婦人の全形を表はし、原作には十四人ありしを、後に摸したるものにては其最も少き女兒のみを殘したり。

是の哀れなる小兒は、其同胞と共に罹りたる不測の禍難に惶れ、あはてふためきて、方に其母近く逃げ來れり。頭は母の裳に掩はれ、一手を擧げて其救護を仰ぎたり。母は華麗なる長衣を纏ひて直立し、左手は其裾を集めて方に其兒を掩はんとせり。右手は(こは後人の補充したるものなるが)其兒を躰近く引寄せつゝ、其の柔しき壓抑もて其の安全なる救護を確めたるものゝ如し。かくして立てるニオベの顏は、吾等の想像の殆ど達し得られざる女子の威嚴と愛情との完全なる躰想を

ス時代が吾等に殘したる美術的製作物の最も名高きものに就きて、其流風遺韻を髣髴せんと欲するにあるのみ。是れくさ〴〵さの美術の漸く榮え行かむず勢ある我邦現代の美術家、批評家の參考の端ともなれかしとて、さては彼邦の美術に通ぜざらむ讀者の一粲に供へむとて、平易通俗を旨として述べたるものなり。讀まむ人之を諒せよ。

二、ニオベ像

希臘の傳說によれば、ニオベはテベスの女王なり。是女王、其夫アムフヰオンの間に十四人の美はしき小兒を有せしかば、ツォイス神の配神の一なるレトの匿に二兒を生めりしを嘲けりたり。レト神の二兒アポロンとアルテミスとは、そを此上無く口惜しきことに思ひ、ニオベの十四兒を殺して其怨を報ぜむと企てたり。かくてニオベが七男と七女は、是二神の矢先にかゝりて斃れ、ニオベの配なるアムフヰオンは其兒等の死を聞きて自殺を遂げぬ。遣り難き悲哀の一念に身石と化したる憐れなるニオベは、洪水の爲に小亞細亞の方に運び去られ、今も尙其石となりたる

南歐美術譚

一、ペリクレース時代

希臘にありて美術の最も榮えしは、何人も知る如く一ペリクレースの時代なるべし。精しくは、ペリクレースの誕生よりアリストテレースの死に至る頃まで、即ち紀元前六世紀より五世紀の頃なるべし。當時の製作にかゝるもろ〳〵の美術は、製作其物の價値より見るも、又是等の製作物が後世に及ぼしたりし感化勢力に就て言ふも、永く世界美術の歴史中に於て最も記憶すべき時代の一たるを失はざるべし。

あはれかゝる貴むべき美術の人の手に成りたる時代の文化は、道德上に於て、はた政治上に於て、そも如何に美はしかりしや。しかも斯の如き美はしき文化の俄然として亡び失せしさまの、さながら暗雲の斷間に、あるかと見れば跡も無き流星の光にも似たりしは、そも如何の事情に依れりしぞ。是等は文明史家の讀者に答ふべき所のものにして、吾等の今茲に述べむと欲する所にあらず。

吾等の茲に讀者に語らむと欲するは、古今の記錄に據り、是の美はしきペリクレー

史傳雜纂

春日行幸神泉苑、同賦花間理、
管、應製（寛平八年、公年五十三）

玄覽垂春鼇續褰、五音共理百花前、
幽蹤似遇桃源客、雅調將驚氷府仙、
羌戎情因孤竹奏、楚人恩附七絲傳、
落梅曲舊脣吹雪、折柳聲新手掬煙、
鳳咸來時徐步輩、魚聞躍處早忘筌、
君主欲得移風術、非敢慇懃喚管絃、

叙意一百韻（太宰府謫居之作、節錄、）

生涯無定地、運命在皇天、職豈圖西府、
名何替左遷、貶降輕自芥、駈放急如絃、
憮赧顏愈厚、章狂踵不旋、牛涔皆塒窄、
鳥路忽鷹鵰、老僕長扶杖、疲驂數費鞭、
臨岐腸易斷、望闕眼將穿、落淚欺朝露、
啼聲亂杜鵑、街衢塵冪々、原野草芊々、
傳送蹄傷馬、江迎尾損船、
……
嘔吐胸猶逆、虚勞脚且攣、肥膚爭刻鏤、
精魄幾磨研、信宿常羈泊、低迷即倒懸、
村翁談往事、客舘忘留連、嫉害何因避、
惡名遂欲纏、未曾邪勝正　或以實歸權、

問はむ、後集載する所の四十首中、公が一我の消息に關せざるもの果して是れありや。公の詩到る處に涙痕あり、歎聲あり、而かも其の涙痕と歎聲と公自らの事情に關せざるもの果して是れありや。公の詩に明月あり、旅雁あり、春雪あり、秋霜あり、然れども是等の物、公の悲哀を說明するの外、何處にか自然の美の顯はれたるものありや。見來れば後集四十首は悉く是れ公の今身のみ。朝に往年の榮華を憶ひ、夕に現身の否塞を悲み、展轉反側して安ずる所を知らざる公が謫居中の種々相のみ。是の如きとしも尙ほ客觀的詩人の眞相と爲すべくむば、是れ又論議の要なき也、人々其の欲する所に從て恣に名目を弄せむのみ。

吾人又多くを言ふの遑無し。唯茲には和軒の所謂る個人發展說に對しては全然首肯し難きことを告白するを以て足れりとせむ。

（三十四年十月）

陷害を恐れ、一身の危殆を憂ふるの情甚だ切なるが如き、明に以て證とすべし。是を以て高踏勇退の志ありとする、必ずしも妨げじ。但是を以て公が客觀性の然らしむる所とするに到ては、吾人の解する能はざる所也。功名榮達は主我者流の欲する所、而かも一身の危害を顧みずして是を求むるものは既に主我者流に非ざる也。既に我を主とす、其の第一義として顧慮する所は我の生命の安全也。一切の榮耀利福は是の生命の裝飾として欲求せらるゝのみ。菅公一度び其の身命の危急を自覺してより退讓の念切なりしが如きは、偶々其の主我性を一層明瞭ならしめたるに過ぎず。何ぞ是を以て客觀無我の美性を現はしたりと謂ふを得む。和軒の所謂る個性の發展なるもの、吾人其の何の謂たるを審にせず。

和軒は又菅公が流竄を以て公の性格を一層客觀化したる一大時期なりとなし、其の咏嘆の詩賦毫も主我的の臭味無しと說く。是れ吾人の全然首肯し能はざる所也。和軒が其の證左として擧げたる事實は『詩人としては咏嘆を事とし、流人として謹愼を務めたり』と云ふに過ぎず。是の如き事實が如何にして公が性格の一大變化の說明として見らるべきかは吾人の想像し得ざる所に屬す。試に和軒に

のなりとなし、壯年の菅公は如何にも主觀的主我的なりしが、藏人頭以後の菅公は其の性格一轉して客觀的となれりと爲せり。其の論據如何と見るに、公が壯年の詩文は功名榮達を希求するの念慮に充滿すれども、宇多帝の拔擢を蒙りて藏人頭に上りしより以來、却て高踏勇退の志切なりしこと、即ち是れ公が偏狹なる主我性より脫化して漸く客觀の美性を發揮したるに外ならずと謂ふにあり。吾人は是の如き理由によりて和軒の所謂る個性の發展を立證するの甚だ輕忽なるを想はざるを得ず。

主我とは何ぞや、我見に纏綿し、我慾に執着し、終始一我の滿足を以て在世の主義となすの謂也。主我的たる菅公は其の官位尙ほ卑きに當りて功名富貴を希ふの念燃ゆるが如かりき。既にして藏人となり納言となり、大將大臣となるに及びてや、官位を進めらるゝ毎に連りに表を奉りて是を辭退せり。太政大臣の內旨ありし時の如きは固辭して終に受けざりき。當時大官に任ぜらるれば必ず一再の辭讓を重ぬること、任命受領の際に於ける一種の慣例なりき。然れども公が太政大臣の辭表の如きは決して斯かる慣例的辭表として見るべきに非ず。其の敵黨の

ひ萬一予の私にして當れる所ありとするも、本書の價値は即ち別に存するあり、是の一二の是非によりて增損せらるべきに非るべし。蓋し人各々見る所あり。識見高邁、八面往く所として可ならざる無き大隈伯の史論に關して、一介白面の書生予が如き者、敢て是の如き言を爲す事甚だ不遜に類すと雖も、所信を枉ぐるは士の爲さゞる所、予は伯が下問の意亦必ず玆に存するを疑はざる也。

（三十三年七月）

『菅公論』に就て

頃日梅澤和軒、其の著『菅公論』を贈りて評を求む。吾人亦往年菅公傳の著あり。公の人物を論じて主觀的、主我的と斷じたりき。和軒の是の書是の點に關して特に吾人の說を駁せる所多し。吾人の說素と前年の著に於て盡さざる所無し。今に及びて區々の辯駁を試むるの要なしと雖も、贈答の禮に於て缺くる所あらむとを恐れ、一言すること左の如し。

和軒は菅公の性格を主我的とせる吾人の說を以て個性の發展を無視したるも

の説明に對して惑はざるを得ざる也。予を以て見れば道長の如きは其の專横に於て多く良房、基經に讓らざりしものゝ如し、然らば則ち菅公の政治的事業が藤原氏の勢力を減殺するに力ありしや否やすら尚ほ明瞭ならざる疑案なるに非ずや。

予嘗て菅公崇拜の由來を討ねしに其の多くは兩部神道者流の附會說に本きしを發見せり。即ち帝釋天の允許を受け雷火を驅りて公に無情なりし者に復讐せし事、大政威德天として十六萬八千の家屬を有せし事、筑紫にありし時無罪に苦む人を助けむと誓ひたりし事。是等は公の崇拜を普及せしためたる重要なる事由なりしが如し。予は後世の人が公の人物を醇化し、公の功業を潤飾し、以て其の崇拜の理由を是に求むるに至りたるを以て、宗教的信仰として最も自然の進化を經たるものと思惟すと雖も既に是の如く進化し來りたる後に於て、翻て歷史的事實の中に其の信仰の根據を發見せむとすることの或は徒勞に屬する無きや否やを疑はざるを得ず。

以上は予か本書を讀みて有する所の一二の疑團也。然れども是の如きは多く史家未了の問題に屬す、予は唯予の私見を具して伯の參考に供へたるのみ。設令

解答を與へたる後、尚ほ敢て保守的政治家として菅公を稱揚せらるべきや否やを知らむことを望む也。

實に政治家の門流の一定したる時代に生れて藤原氏の專横を抑制することの難事中難事なりしは、伯の說けるが如し。然ども是の如き難局に公を置きたる宇多帝の寄托の如何に重大なるかをも思ざるべからず。當に來るべき禍害を眼前に觀望しながら、敵黨に對して何の防備する所なく、兩帝の恩寵と、京師を皷動せる上下の名望と、諸司に半ばせる門弟子とを挾で毫も爲すところ無く、空しく咏歎の中に憂懷を送りたる公の心事は、政治家として予が多く尊重の意を表し難き所也。

伯は菅公崇拜の必要なる理由を公の政治的技倆の中に求め給へり。以爲らく菅公一度び藤原氏の勢力に對立してより、永く其の簒奪の非望を折き、皇室を泰山の安に置けり、是れ天滿宮の大功德なりと。伯の是の斷案が如何の事由に本きしかは予の知了せざる所なりと雖も、藤原氏の族果して曾て簒奪の非望を懷きしことありや。其の顯著なる歷史上の證蹟を示さるゝに非ざれば、予は俄に伯の是の說に同意すること能はず。隨て菅公の力、是の簒奪の禍害を未然に防遏したりと

非ず、殊に是の如き斷案中十分の事由を具備せざるもの少からざるは、予の最も遺憾とする所也。伯が菅公を以て保守的政治家と爲せるは何人も異存無き所なるべし、而かも國家に大功績ある保守的政治家とするの伯の意見に就いては、聊か感無きを得ず。公にして眞に宇多の寄托を體認して其の奉行に力めたりとせむか、機の乘ずべきもの啻に一再のみに非ざりし也。伯は以爲らく、公の進て事を企てざるは至尊の上に利あらざらむを恐れたればなりと。然れども基經死後の藤原氏が、皇位に關して危殆の意志を懷きたる歷史上の證蹟を擧示せらるゝに非ざれば、予は伯が是の解說を疑はざるを得ざる也。當時宇多帝は如何なる憤懣を以て阿衡詔勅の改作を命じ給ひし乎。何故に基經の死を待ちて公を儒臣より拔き給ひし乎。何故に基經納るゝ所の女に子無きに乘じて、俄に醍醐を太子に立て給ひし乎、而して是の冊立に際し、何故に藤原氏には諮詢せずして公一人には謀り給ひし乎。何故に公が擁立の恩誼を遺誡中に特記し、醍醐をして時平、良相を差措いて特に公に信賴せしめ給ひし乎。又何故に左大臣たる時平を超越して俄に公を太政大臣に推薦せしむとし給ひし乎。予は大隈伯が這般の問題に對して明白なる

凡そ人物の評論に於て最も難しとするは同情也。是れ無くむば則ち人の內面の生活得て描寫すべからず。唯其の位に在らざれば其の境を覺り難く、其の境を覺らざれば其の心を察し難し。英雄唯英雄の心事を知るとは即ち是を謂ふ乎。大隈伯の政治的閱歷は、少くとも其の形跡に於て菅公に類似するもの無しとせず、伯が菅公の境遇に關して常に深厚なる同情を寄せらるゝもの想ふに其の情に於ても相通ぜるものあるに因る無きを得むや。時勢を達觀して其の大體を把持せるの烱眼に於ても、予は是の篇に敬服する所無きを得ず。奈良朝以來の文物を綜攬し、政治、宗教、學術三者の關係上より菅公の時代を描破せるところ、眞に大處の着眼を誤らずと謂ふべし、是の着眼ありて公の人物亦能く活現せるを觀る。若し夫れ四百年來の系譜を有せる菅公の遠孫としての伯が菅公崇拜を目的とせる北野會に於ける演說としては、敘述論評おのづから其の法あるべし。是の篇史論の體面を保ち、而かも是の機宜に處して誤らざる技倆に到ては、予の特に敬服に堪えざる所也。

然れども本書提供する所の幾多の斷案中には予の全く首肯し難きもの無きに

大隈伯が菅公談の後に書す

大隈伯曩に菅公談を公にせられむとするや、予を召して卑見を徴せらる。菅公に關する伯の意見は、予當時の新聞紙上に於て其の要略を知るを得たり。乃ち聊か思ふ所を述べて長者下問の値遇に酬ふる所あらむとを期せしが、一度び伯と言を交ゆるに及びてや、伯の談論滔々として勢當るべからず、訥辯予の如きもの囁嚅口を開くによし無く、遂に懐抱の十一をだも暢ぶるに及ばずして蒼皇として退きぬ。爾來月を閲すること二、今や『菅公談』刻成り、將に世に布かれむとす、再び予に命じて是れが跋を作らしむ。竊かに想へらく、伯の意蓋し予が先に辟易して言ふ能はざりしを憫み、更に文筆に頼りて忌憚無く其の意を盡さしめむとする也。

乃ち拜讀再次の後、不遜を顧みず、聊か所思を陳ずること左の如し。

予の見る所を以てすれば、本書には尋常史家の容易に企及し能はざる三箇の長所あり、菅公の行藏境遇に對し最も深厚なる同情を有するは其の一也、時勢の觀察の達大なるは其の二也、能く其の著述目的に適應せるは其三也。

藤原高藤、藤原良世薨ず

延喜元　菅公五十七歳、正月七日從二位に叙せらる
正月二十五日菅公を太宰權帥に左遷す、是日源光右大臣となり藤原定國右大將となる
二月一日菅公太宰府に赴く
藤原時平三代實錄を上る

二　菅公五十八歳

三（西暦九〇三）　菅公五十九歳、二月二十五日太宰府に薨ず、薨ずる前、配居の詩を集めて紀長谷雄に送る

五　菅公死後二年
紀貫之等古今和歌集を撰む

六　菅公死後三年
藤原定國薨ず、源光右近衛大將を兼ぬ

七　菅公死後四年
藤原時平延喜格を上る

八　菅公死後五年
藤原菅根薨死す

九　菅公死後六年
藤原時平薨ず、源光左近衛大將となり、平惟範左近衛大將を兼ぬ、惟範幾もなく薨ず
藤原忠平右近衛大將を兼ぬ

十三　菅公死後十年
源光薨ず
藤原忠平左近衛大將に進み藤原直明右近衛大將を兼ぬ

十四　菅公死後十一年
三善清行封事を上る
藤原忠平右大臣に任ぜらる

十六　菅公死後十三年
三善清行卒す
寛平法皇五十の賀筵あり
烈風洪水あり

十七
二二

延長元　菅公死後二十年
菅公の本官を復す

國史二百卷、帝王系圖三卷、目二卷を上る十二月、左京大夫を兼ぬ
敕書を渤海に遣はす

五

菅公四十九歳、二月叅議に任じ式部大輔と左大辨と勘解由長官とを兼ぬ
敦仁親王を立てゝ皇太子と爲す、四月菅公春宮亮に任ぜらる
九月菅公新撰萬葉集を撰ぶ

六

菅公五十歳、八月遣唐大使を命ぜらる、紀長谷雄是に副たり、九月公上表して遣唐大使の廢止を建議す、議行はる
九月菅公の賀を吉祥院に設く、帝人をして潛に砂金を贈らしむ、十二月侍從を兼ぬ
文屋善文大に新羅の賊を破る

七

菅公五十一歳、正月近江守を兼ぬ十月從三位に叙せられ中納言に任ぜらる、式部大輔春宮亮を罷め春宮權大夫を兼ぬ
左大右源融薨ず

八

菅公五十二歳、八月民部卿を兼ぬ
藤原良世致仕す
二條皇后を廢す

九

菅公五十三歳、六月權大納言に任じ右近衛大將を兼ぬ
菅公藤原菅根を推薦す
帝獨り菅公と圖りて位を皇太子敦仁に讓る、醍醐帝是也

醍醐天皇

時平、道眞政務を執る、菅公正三位に叙せらる

昌泰元

菅公五十四歳、上皇に供奉して大和國に赴き『此たびは幣もとりあへず』云々の歌あり

二

菅公五十五歳、二月公右大臣に、時平左大臣に任ぜらる、公三度び上表して是を辭すれども聽されず
宇多上皇落飾す、寛平法皇是れ也、

三

菅公五十六歳、正月太政大臣任命の密旨を受く固辭して受けず、二月上奏し右近衛大將を辭す、聽されず、八月家集を奉る
九月十日公清涼殿に九日の後宴に侍して『丞相度」年幾樂思』の詩あり、御衣を賜ふ
三善清行革命議を上る、又書を菅公に遣りて高蹈勇退を勸む、公聽かず

上總の俘囚反す、是を平ぐ
太宰府司の怠慢を譴責す

八

菅公四十一歳、十月大嘗會御禊前次第司次官と爲る
基經帝を廢して光孝天皇を立つ

光孝天皇

百事先づ基經に稟して後奏聞せしむ
十陵五墓の別を改む

仁和元

菅公四十二歳
基經の男時平元服す、帝爲に冠を加ふ
太宰府に令して唐物の私買を禁ず

二

菅公四十三歳、正月讃岐守に任ぜらる、文章博士式部少輔加賀權守罷めらる
四月公讃岐に赴く
八幡宮鳴動す、大に邊備を修む

三

菅公四十四歳、九月暇を賜ひて京に歸りしが翌年春再び讃岐に歸る
帝崩ず、基經帝の七子定省を立つ

宇多天皇

寬平元

基經關白となり三后に准ぜらる
巨勢金岡をして弘仁以後の詩人の像を御所南廂の障子に畫かしむ
右大臣源多薨ず

菅公四十五歳、正五位下に進めらる
詔勅の文より阿衡問題起る、菅公書を基經に寄せて利害を說く
寬平大寶錢を鑄る

二

菅公四十六歳、二月任滿ちて京師に歸る
始めて正月七種の粥を獻ず

三

菅公四十七歳
一月基經薨ず
二月菅公昇殿を許され時平に代りて藏人頭に任ぜらる、上表して辭すれども聽されず
三月菅公式部少輔に任ぜられ、四月左中辨を兼任し
禁色の衣を許さる
藤原良世右大臣となる

四

菅公四十八歳、正月從五位下に叙せらる、五月類聚

惟喬親王薨ず

十六 菅公三十一歳
内殿の灌佛を停む

十七 菅公三十二歳
冷泉院火あり
下總の俘囚叛す、是を平ぐ
渡島荒狄叛す、牧密をして是を討たしむ

十八 菅公三十三歳、四月侍從に任ぜらる
帝位を陽成天皇に讓る

陽成天皇

藤原基經を攝政とす
渤海使來貢す

元慶元 菅公三十四歳、正月式部少輔に任ぜられ、十月文章博士を兼ぬ
大江音人薨ず
貞觀四季例を改めて春秋に修むることを定む

二 菅公三十五歳
出羽大に亂る藤原保則出羽權守となりて是を平ぐ津輕渡島の夷皆服す

三 菅公三十六歳、正月從五位上に進み、八月伊勢齋內親王行歳前次前第司長官と爲る
基經文德實錄を上る、菅公是が序を書く
清和上皇落飾す

四 菅公三十七歳、八月公の父是善薨ず、年六十九
山陽の諸邦をして邊備を修めしむ
清和上皇崩ず、御年三十一
高岳親王天竺に至らむとして老邁に薨ず
基經太政太臣となる

五 菅公三十八歳、公を誹謗するもの多し公乃ち『博士難』を作りて憫を遣る
奬學院、淳和院創立せらる

六 菅公三十九歳、正月加賀權守に任ぜらる、式部少輔文章博士元の如し
渤海入貢す
天皇元服し、基經三后に準ぜらる

七 菅公四十歳、四月權りに治部大輔の事を行ひて渤海使を饗す、公が贈答の詩の拙なるを誹るもの多し、公乃ち『詩情怨』を作て憤を遣る

六
菅公二十一歳
田租を減じて民徭を增す
更めて僧綱の位階を定む
天皇太政大臣良房の第に幸す

七
菅公二十二歳
大宰府對馬の銀を掘る
貢租の期に違ふ者の爲に罰則を設く

八
菅公二十三歳
應天門火あり、伴善男を伊豆に流す

九
菅公二十四歳、一月文章得業生となる
二月公正五位下を授かり下野權少掾に任ず
右大臣良相薨ず
再び南海山陽に令して海賊を捕へしむ

十
菅公二十五歳
左大臣源信薨ず
藤原良繼卒す

十一
菅公二十六歳
藤原氏の外孫貞明親王を立てゝ皇太子と爲す
藤原氏宗等貞觀格を上る
藤原良房、春澄、善繩等續日本後紀を上る

太宰府に詔して德政を施さしむ

十二
菅公二十七歳、傳へ言ふ是年の春、公都良香の許にて弓矢の術を以て儕輩を驚かす
三月菅公對策に及第して中上第を得、九月正六位上に進む
太宰少貳藤原元利麿新羅に通じて露はる
大に太宰府の邊備を嚴にす

十三
菅公二十八歳、一月玄蕃助に任ぜられ内史と爲る、三月少内記と爲る
藤原氏宗等貞觀式を上る
渤海入貢す

十四
菅公二十九歳、一月從六位下行直講美努淸名と共に存問渤海客使と爲りしが、同月十四日母伴氏の逝去に遇ひ、其職を辭す
藤原良房薨ず、其兄の子基經其家を嗣ぐ
十陵五墓の制を立つ
藤原氏宗薨ず

十五
菅公三十歳、正月從五位下に進み、兵部少輔に任ぜられ、二月民部少輔に遷る
山陰及び西海の諸州に令して戒嚴せしむ

仁壽元	菅公七歳 皇太子を立つ、生れて七箇月、藤原氏の外孫也
二	菅公八歳 勸農會を全國に頒つ 小野篁卒す
三	菅公九歳 平氏の祖葛原親王薨ず 天皇良房の第に幸す 承和十年以降調庸の未進を免ず
齊衡元	菅公十歳 陸奥反亂の兆あり是を平ぐ 左大臣源平薨ず
二	菅公十一歳初めて『月夜見二梅華一』の詩を咏ず 藤原良房、春澄、善繩等に敕して國史を修む
三	菅公十三歳 五世王の服色を制し諸臣に準ず
天安元	菅公十四歳 敕して新曆を造る五紀曆是也 相阪、大石、龍花の三關を置く 對島亂あり
二	菅公十五歳『臘月獨興』の詩を作る
三	天皇崩御、御年三十二、清和天皇即位御年九

清和天皇

貞觀元	菅公十六歳元服す、母伴氏の祝歌あり 藤原良房攝政す、攝政是より始まる 渤海入貢す
二	菅公十七歳 天下の僧尼に詔して國葬を祈らしむ 新に釋奠式を修む 春日雄繼宮中に孝經を講ず
三	菅公十八歳 宣明曆を用ふ以後八百二十三年間改曆無し
四	菅公十九歳、五月及第して文章生と爲る 海賊公行す、山陽南海二道をして追捕せしむ
五	菅公二十歳 大納言兼右大將源定薨ず 新羅人因幡に漂着す、粮を給して是を遣す 仁明紀を編む

陽の驛戶の田租は三年を限り殊に原免に從ふ

八
菅公生前四年
太宰府に詔して邊防を嚴にせしむ
藤原緒嗣等日本紀を上る
渤海來貢す

九
菅公生前三年
嵯峨上皇崩御年五十八
伴健岑橘逸勢等反して捕へらる
皇太子恒貞を廢し道康親王を立てゝ皇太子と爲す
阿保親王薨ず

十
菅公生前二年
藤原緒嗣薨ず菅公の祖父薨ず、年七十三
文室宮田麿反す
筑紫に防人を置きて新羅に備ふ

十一
菅公生前一年
橘氏公左大臣と爲る

十二（西曆八四五）
六月二十五日菅公生まる
新羅我漂民を送る

十三
菅公二歳

五畿に勅して所在の皇胤を顯錄す

十四
菅公三歳
左大臣橘氏公薨ず
慈覺唐より歸る、悉曇聲音學の祖たり

嘉祥元

菅公四歳
藤原眞房右大臣と爲る
渤海來朝す

二
菅公五歳
詔して諸國の穀價を定む
唐商船太宰府に來る
飢民を賑はし囚徒を放つ

三
菅公六歳
六衞府佐以下を分遣して大に京師の群盜を捕ふ
天皇崩ず御年四十一崩、ずる前落飾受戒す

文德天皇

文德天皇即位
藤原氏の女數人を擧げて女御と爲す
全國に詔して承和六年以前の調庸未進を免ず

菅公年表

仁明天皇

天長十

菅公の生前十二年
清原夏野令義解を奉る

承和元

菅公の生前十一年
始めて白馬節會を行ふ
藤原常嗣遣唐大使小野篁副使と爲る
詔して令義解を施行す
天皇の御名は二字と定まる

二

菅公の生前十年
壹岐國の邊防を固め新羅に備ふ
僧空海寂す
東海東山二道に船數を增して行旅に便にす
新錢承和昌寶を鑄る

三

菅公の生前九年
遣唐大使藤原常嗣等風に遭て漂廻す

四

菅公の生前八年
京城の諸寺淫濫の聞あり乃ち別當を置く
右大臣藤原夏野薨ず
陸奥課丁三千二百餘人を復すること五年

五

菅公生前七年
常嗣再び唐に赴く、藤原三守右大臣と爲る
書を能くする者をして金剛壽命陀羅尼經一千軸を冩
泉院に冩さしむ
遣唐副使小野篁を隱岐に流す

六

菅公の生前六年
勅して農を諸國に勸む又畿內に蕃蔘を植しむ
遣唐使還る
藤原貞敏唐の琵琶曲を修め歸朝す

七

菅公の生前五年
流人小野篁を召還す
京師大に盜賊起る
藤原三守薨じ源常右大臣と爲る
再び勸農令を發す
新羅の張寶高潛に使を遣して物を獻ず是を却く
佛を清涼殿に灌す灌佛是より始まる
淳和上皇崩ず御年五十五
勅して承和二年以來の調庸未進を免ず但東海東山山

相國今年滿五十、予率諸僕可設遊宴、座後所施屛風、欲致妙絶、汝作詩、藤將軍書之、巨金岡畫之、予願足矣。（菅家文草卷二右　親衛平將軍）

是によりて見れば、公は詩に於て當時の妙絶なりしも、書に於ては特に秀でざりしが如し。且今日公の眞蹟として傳ふる所のもの、一として信憑し難きを以て是を見れば、公が書に工なりとのことは恐らくは後世の訛傳ならむか。暫く疑を存して識者に質す。

（昭三年三月）

後なるが如し。慶保胤が『賽菅丞相廟願文中』に『就天滿天神廟會文士獻詩篇以其天神爲文道之祖詩境之主也』（本朝文粹巻十三）の句あり、以て證とすべし。是れ寛和二年七月の願文にして、華山帝の第二年に當る。寛弘九年の大江匡房の奉幣文、亦公を以て詩文の神となせり。其全文左の如し、

右天滿自在天神、或鹽梅於天下、輔導一人、或日月於天上、照臨萬民、就中文道之大祖、風月之本主也、翰林之人、尤可夙夜勤勞、而性愚性劇、思以涉年、露命半徂、無益嚶嚶臍、風景欲隱、不如傾首、昔彭祖七百載、己悔夭折、晩而早衰、今小子六十餘、獨恨趍朝以不幾、萬死也、一生也、只仰神眷而已、匡衡病中右筆伏地敬白、

公が文學の神と仰がるゝは、其の詩文に長じたる事、素より其の主因なるべしと雖も、或は公が意中の詩句、唐に傳播せりと云ひ、或は人の夢中に入りて讀詩の法を示せりと云ふ如き奇異譚亦與て力ありしならむか。若し夫れ公が書法の神として尊崇せらるゝは、未だ其の因由を明にせず。後世の人公の能筆を言ふもの多しと雖も、公が生前の事蹟は、毫も是のことを語らざるが如し。藤原基經年五十に滿る時『右親衛平將軍（今其の姓名を審にせず）公に語て曰く、

にて失はるべきにて有に、やがて時平の弟の貞信公、家を傳へ、內覽攝政あやにくに繁昌して、子孫たゆる事無く、今迄めでたくて過らるゝ事を深く按るに、日本國小國內覽の臣二人ならびては一定あしかるべき、その中に大神宮鹿島の御一跡はするまでたがうべき事にあらず、大職官の御跡を深く護らむとて時平の讒口にわざと入て御身をうしなひてしかも攝籙の家をまもらせ給ふ也云々。（愚管抄卷三）

三

以上述べたる外に、菅公に關して別種の崇拜あり。公を尊て文學の神と爲す是れ也。是の種の崇拜は何れの時に起因せるが、未だ審ならずと雖も、公を以て雷火の荒神と信じたるよりも、遙に後年の事ならむか。扶桑略記によれば、火雷天神の救號を賜はりしは公の薨後二箇月の後にあり。然らば當時既に公が復讐の惡靈を怖れて、崇拜するの傾向ありたるものと見ざるべからず。然れども文學の神てふ觀念の初めて文書中に顯はれたるは、華山、一條の頃、即ち公の死後凡そ八十年の

ふるは涙のさまを見てしれ

此間殿上の殿守司一人鬼間にて死に入りたり、陣の外に舁いて息出てにけり、其の後攝政人々を具して北野に詣でゝ作文和歌ありけるとぞ。（續古事談第四神社佛寺條）

其他菅公の威靈に關する臆說甚だ多し。或は謂へらく、公は右大臣より左遷せられたるが故に、後世是の官に在るもの必ず公の祟を受けむと。或は謂へらく、公の心は藤原氏を全滅するにあり、唯時平の弟忠平其の兄に異なりて、公と親み善く、配居に在し時も隨時慰問を懈らざりしが故に、其の子孫特に繁榮するを得たりと。愚管抄の傳ふる所、最も絶倒すべし。其の要は、公を以て觀音の化身、邦家を守れるものとなし、日本は小國なるが故に、內覽の臣二人並び立つは、國家の利に非ず、故に公は大職冠の子孫藤原氏を守らむが爲に、故らに時平の讒口に入れりと爲すにあり。其の文に曰く、

上略天神は疑無き觀音の化身にて、末代さまの王法をまぢかく守らむと思召てかゝる事はありけるとあらはに知らるゝ事也。中略終に時平はうせ給ひけりとこそ見えて侍めれ。此御心ならば、すべて內覽の臣攝籙の家は天神の御敵

む人を助け、有德の人を陷るゝ者を糺さむ』ことを以て、公が生前の宿願と爲し、是に因りて公が死後の威靈を信ずるものゝみ獨り、菅公崇拜の理因として稍々其體を得たるに庶幾し。正を救ひ邪を罰するは、多くの神佛の崇拜せらるゝ所以也必ずしも菅公に於て珍とするに足らずと雖も、公は其の生前に於て自ら是の如き境遇に苦みたるを以て、特に是の感應あるべしと想像するは、自然の徑行と謂ふべき也。

是の如く、世人の菅公を崇拜する所以のもの、多くは公の人物性格と何等の關係あるものに非ず、庸人の劣情によりて猥に公の心事を臆測したるに過ぎず。公の德性を傷くるや、頗る大なり。續古事談に公の神靈の嫉妬を述べたる一條あり、小ゝの揣摩眞に噴飯すべし。其文に曰く、

一條院の御時六月晦日に風吹き、雷おどろ〳〵しく鳴りける程に、母后の御方に藤典侍と云ふ人に北野天神つき給ひてのたまひける。我家破れたり、修理せらるべし。又攝政上達部ひきぐして賀茂に詣でゝ十列音樂奉らる、羨ましきよし託宣ありて、歌を讀み給ひける。

うらやみに迷ひしむねのかきくもり

を害せむとするの意志ある乎是れ公の奸惡時平よりも甚しき也。是の如くにして公の威靈を顯はし得たりとするものは、其の讒誣亦時平よりも甚しと謂ふべし。畢竟復讐の信念を以て公の威靈を言ふは、公の人品に對する大打擊と謂はざるべからず。

大政威德天として十六萬八千の眷屬を有することを以て、公の威靈を顯さむとするも、亦甚しく公の德性を傷くるものと謂ふべし。殊に生前悲泣の涙を以て日本國を浸して水海と爲し、八十年後に至りて我自ら國土を建設せむと云ひ、唯日本は佛敎國なるの功德によりて暫に是の禍害を免るゝを得たりと云ふが如きは、卽ち公を目して國賊と爲すに等し。社稷の臣たる公の面目果して何處に在るか。是れ素より佛敎者流か公に藉りて自家の爲にせる附會說に過ぎずと雖も、想はざるの甚しきものと謂ふべし。若し夫れ公が『我が形を造り、我が名を稱して、慇懃に尊重せば、我れ必ず擁護せむ』との誓詞を爲せりとの想像によりて、公の威靈を信ずるものは、是れ亦公をして尋常一般の鬼神たらしむる也。特に公の人物德性と何の關する所あるを見ず。唯先に擧げたる四箇條の中の最後の觀念、卽ち『無罪に苦

否や、是れ也。公が鬼神の力を假りて現世に報復するとの信念は、蓋し、公が憂憤の事を臆測したるに出づ、凡人の情を以て公の境遇を推察し、以て是の如き信念を造るは、寧ろ自然の事なるべし。且公が配居の詩中、徃々、死後復讐の希望あるが如く解せらるゝものあり。『未曾邪勝正』と云ひ、『人慚地獄幽冥理』と云ひ、『冥々理欲訴冥々』と云へるが如き、是れなり。後人の公の祟を言ふもの、蓋し是等の事情に基きしならむか。殊に公の清白を知りて公を陷れたる奸佞の輩にありては、其の恐怖の情一層甚しかりしなるべし。然れども斯かる推察は、當に公の眞情を解せざるのみならず、却て公の人品を下落せしめたるものと謂ふべし。公が死後の感應は、即ち公が生前の心事也。公にして死靈となりてまで讒者に復讐するの煩惱ありて、而かも一語の是を顯はすもの無かりしとする乎、則ち公は是れ隱忍卑劣の人物たる也。讒者に復讐す、猶人情の常なりとせむ、而かも讒者の言を容れて公を竄したるの故を以て、危害を主上たる醍醐帝の御軀の上に及ぼさむとすと云ふに至りては、是れ即ち公をして大不忠、大惡逆の臣たらしむる也。時平の奸惡は其の同僚を陷れたるのみ、未だ曾て主上に對して惡意を懷きしことあらず。公にして醍醐帝

むねの板まのあはむかぎりは

三

菅公の威靈に關する傳說は、概ね右に述ぶるが如し。後世公を崇拜するは、主として是の如き傳說に基きしなるべし。今公の威靈に關する觀念を概括すれば左の四箇條に歸着するを見る、

一　帝釋天の允許を受け、雷火を驅りて公に無情なりし者に復讐せし事。

二　大政威德天として十六萬八千の眷屬を有せる事。

三　『若し人我が形を造り我が名を稱して、慇懃に尊重せば、我れ必ず擁護せむ』と誓ひし事。

四　筑紫にありし時、無罪に苦む人を助け有德の人を陷る者を糺さむの誓を立てし事。

菅公が果して是の如き威靈を現ぜしや否やは、今是を問はざるべきも、茲におのづから起るべき疑問は、是の如きは、公の盛德として賞贊し、且つ崇拜すべき事なりや、

宴の地なれ。我かのほとりに移るべし、そのほとりに松を植うべし。云々。是の託宣ありて後幾もなく、右近の馬場に一夜の中に數千の松を生じ、森然として林を成す、太郎丸の父良種僧最鎭なるものと共に文子に謀り、同年六月九日神殿を建立せり。是れ即ち北野天滿宮の起源なりと傳ふ。

菅公に關する是の種の傳說尙ほ他に甚だ多し。例せば一條天皇の正曆四年十一月左大臣を追贈し、敕使太宰府に下りて宣命文を讀める時、案上縹紙の面自ら一詩を化出せりと云ふが如し。其詩に曰く、

忽驚朝使排二荊棘一、官品高加拜感成、雖悅二仁恩覃一レ遂窺、但羞不レ沒二左遷名一

翌五年正一位太政大臣を贈りたる時亦一絕の詩を託宣せられたりと傳ふ。

昨爲二北闕被一レ悲士一、今作二西都雪恥尸一、生恨死歡其我奈、今須二望足護一二皇基一、

又天慶以來內裏火あること頻也。圓融帝の時新殿方に成りし時、工人翌日承塵の板面の汚點あるを見、階に上りて是を觀るに、一夜にして蟲の蝕せる跡あり、おのづから文字を爲す。曰く

つくるとも又もやけなむ菅原や

道の罪を被りて、今は西海の波に沈むと雖も、尚ほ日夕是の地を忘るゝ能はず、潜に茲に遊ぶを以て無上の樂とせり。童女願くは我が爲に一祠を是の地に建て、我が靈をして寄る所あらしめよと。文子家甚だ貧しきを以て、神託を奉ずること能はず、唯柴廬の中に瑞籬を結びて公を祀ること五年に及べり。

然るに同一の託宣は近江國比良宮の禰宜三和良種の子太郎丸なる七才の童子に下りて右近の馬場の建祠を促せり。其の託宣に曰く、

前略 我居たゝむ所には老松して松の種をまかする也。我昔大臣たりし時、夢に先三本生て則おれぬとみしは流さるべき相也。我嗔恚のほむら天に滿ちて、諸鬼神十萬五千よろづの災變をなす、みな是等が所爲也。不信ならむ者をば蹴ころし、正直ならむ者をば護あはれむべし。みな人加茂八幡とのみいひて、我をば物ともせずおもへども、いづれの神々も我をばえおしふせ給はじ。我筑紫にありし時、佛天に仰ぎて誓ひ給ふ、露命消なば當生に我ごとく思はざる外に災に當らむ人、すべてわび悲まむともがらを助け救ひ、人を損ぜむ者をばたゞす身とならむと誓ひつゝ、思の如くなり給ふ。さても右近の馬場こそ與

せり。炎魔王の使日藏に言て曰く、肩を掩へるは延喜帝にして餘の三人は臣下也。此時帝日藏を招て曰く、冥府に有て罪無き者是れ君主也、決して我を敬ふ事勿れ。我れは父法皇の宿志に違ひ、罪無くして菅公を流せる罪によりて、今是の如き苦を受く。凡そ我が生前に五罪あり、皆菅公の事に關す。父法皇の心神を困ましめし事、其一也。我れ高殿に安居して父法皇を地に坐せしめし事、其二也。罪無くして賢臣を流せし事、其三也。久しく國位を貪りて佛法を害せし事、其四也。我が怨敵の故を以て他の衆生を殺せし事、其五也。唯善を修すること多きが故に、是の苦を忍びたる後、化樂天に生るべしと。日藏蘇生して後に具に見る所を上奏せり。所謂る三人とは時平、光、定國なるべし。是等の事譚は兩部神道者流の附會に出てたること言を俟たざる也。

公の威靈に關する神異譚は尙ほ是に盡きず。北野天神の緣起に關するもの、如きは世人の熟知する所也。是れ公の死後四十年、天慶五年七月の事に屬す。西京七條に多治比（タヂヒ）の文子（アヤコ）と云へる童女住みき。菅公の靈是の女に託宣して曰く、我れ現世に在りし時、右近の馬場に遊ぶこと年あり、甚だ其の關勝を愛しき。我れ非

游住諸處、覆護衆生、彼諸名神、常慰諭我、又愛重佛教、故不成巨害、但我十六萬八千諸眷屬、暴惡鬼神等、隨處興災、我尚難禁、我愛神慰、味法樂、故昔日怨懟少息耳、賢曰、我國人民、俱稱火雷神、尊重禮敬、猶如世尊、何有怨乎、大政天曰、國俗以我爲仇讐、誰敢尊敬、又火雷神者我第三使者、火雷氣毒王者也、非我名也、我在世時所歷官位、有人居之、我起害意、是昔怨之甚也、而今立一誓、遺本邦、上人傳之、普屬流布、若人作我形、稱我名、慇懃尊重、我必擁護、若人聞上人言、信受崇奉、我亦不爲如上之害、賢反金峰陳上事、藏王曰我令汝向彼城者、使知世間災難之根本也、又有滿德天、語賢曰、彼大政天十六萬八千眷屬、作毒害者、天下善神、不能遮止、延長八年夏藤清貫、希希世、逢雷震而死者、彼大雷氣毒王之爲也、亦崇福、法隆、延曆、檀林等諸大寺、及大內之燒災、皆是第三使者之所爲也、如是諸惡神、滅法害生、皆昌泰帝、獨受其殃、譬如衆流之宗海耳。（元亨釋書卷十八神仙條）

日藏閻羅王界に至るの傳說も、亦公の威靈譚として頗る興味あり。日藏炎魔王の使に導かれて諸地獄の狀を見る。一の地獄に鐵窟苦所と稱する所あり、四人の罪囚是に處る。一人は物を以て肩を掩ひ、三人は裸體の儘赤灰の上に蹲踞して悲泣

は盡く吾が怨敵なり吾れにして佛に歸せずむば是の恨何れの時にか忘るべき。但人吾れを信じ吾れに祈りて敢て違ふ事無くば吾れ何ぞ感應を垂れざらむやと。

是と略ゝ同一の傳說は、元享釋書亦是を傳へたり。唯年月と僧名とを異にせるのみ。其の文に曰く、

天慶四年八月、有沙門道賢借冥見金峰山金剛藏王菩薩時五色光照金峰山賢白曰、此光何祥藏王曰、今大政威德天來也須臾三間西方空中千萬人至儀衛偉如也宛似王者之郊禮也其衆畸形異貌或如金剛力士或如電夜叉羅刹甚可怖類各持器仗弓矢矛戟大政天與藏王語已而欲歸去顧賢曰將此人見我居何如藏王許之使賢乘一白馬行數百里疾如風至一大池池中有大島廣數百里中有方壇々中有蓮華臺々上有寶塔々中安妙法蓮華經塔東西壁懸兩部大曼陀羅其塔嚴麗不可言也北有大城々門禁衛甚嚴又多大政天詔賢曰我是上人本國菅丞相也忉利天帝字我呼日本大政威德天我讒配時非不動心我主國土一切疾病災難事我欲惱君臣傷人民又思以我生前悲泣之淚化爲大雨浸日本國爲水海經八十四年成立國土爲我住城然此國普賢龍猛流傳密敎之地也又應化諸聖以悲願力借名明神

普く冥府の狀を觀るに、兜率內院炎魔王宮以下の六道、毫も經典の所說に違はず。晉公は大政威德天と稱せられ、鹵簿の儀、供御の奉國王に勝れり、威風莊嚴近くべからず。其の前後を警衞する侍徒、眷屬、異類、異形の類、數ふるに遑あらず。或は金剛力士の如く、或は雷神鬼王の如く、或は夜叉羅刹の如く、其の宮殿は極樂淨土の如し。池中に島あり、花鳥樹木、阿彌陀經說く所に異ならず。島中に壇あり、壇上に蓮華あり、華上に寶塔を安ぜり、寶塔中金字の法華經あり、其の東西に兩部の曼陀羅を懸く。其の北一里許を隔てゝ大城あり、是れ即ち大政威德天の住所也。威德天日藏を召して曰く、吾れ初め以爲らく、吾が憂憤の淚を以て日本國を浸して大海となし、八十年を經て更に國土を建立し、吾れ是に王たらむと。然れども退て考ふるに、日本國は佛敎の傳播せる國土也、吾れ素佛敎を愛す、且吾が現世の怨は顯密聖敎の力によりて已に其の一分を報じ、加ふるに諸佛我を慰諭する事至れり、是を以て吾れ敢て巨害を作さざる也。但吾が眷屬に十六萬八千の惡神あり、到る處危害を行ふ、吾も亦是を奈何ともし難き也と。日藏曰く日本已に尊閣の靈を祭て火雷天神と稱し奉れり、尊閣今に於て惡意を挾むべき謂れ無かるべしと。威德天曰く、日本の國土

當時右大臣公忠なるものあり、延喜廿年四月頓に死し、三日を經て蘇生す。即ち二子に助けられて參內し、奏して曰く、臣頓死して炎魔王宮に至れり、暫く門前に佇立せし時、身長丈餘、衣冠束帶の人、申文を捧げて祈願するを耳にせり。文中數々延喜帝の所爲を彈劾するの語あり、乃ち其人の菅公なるを知る。紫衣の冥官三十人許、其の左右に並ぶ。其の一人微笑を含で曰く、若し延喜帝にして改元せば如何と、臣是の狀を見て陛下の爲に憂懼に堪えず、敢て奏すと。帝大に驚き、直に敕を下し菅公の官職を復して右大臣となし、位一階を進めて從二位となし、昌泰四年(延喜元年)一月二十五日の宣旨を盡く燒棄せしめたり。翌五月年號を改めて延長となす。

然れども菅公の祟は尙未だ熄まず。延長八年六月、清涼殿に雷火あり。大納言藏原清貫は火上衣に移りて顚倒し、右中辨平希世は顏燐爛して仆る。藤原是茂弓矢を取て是に赴きしに立ろに震死し、近衛忠包、紀蔭連等亦火焰の中に悶絕す。帝亦是より病あり。同年九月位を朱雀天皇に讓り、幾もなく崩ず。

公の神異譚は當時早く旣に佛說中に攝取せられたり。大和金峰山に僧日藏なる者あり、承和四年八月朔日頓死し、五日を經て蘇生す。其間金剛藏王に導かれて

ほ行かざること如何と。公色を變じて起ち、尊意の供せる柘榴を噛て房戸に向て吐く。柘榴忽ち火炎となりて、火將に屋に上らむとす。尊意水を灑て屋に消止することを得たり。

是の事ありてより、幾もなく、陰雲暗澹として京師を覆ひ、雷電晝夜を絶たず。人心惴々皆以て菅公の祟となす。公卿震慄、一人も殿に上るものなし。左大臣時平曰く、菅公朝に在りし時、位官吾下にあり、今薨じて靈となるも、何ぞ我に禮無からむやと。劍を抜て獨り清涼殿の階上に立つ。帝三度び宣旨を尊意に下し、災異遂に鎭まるを得たり。然れども延喜八年十月、又雷火の災あり。藤原菅根震死す。翌九年時平亦病に伏す、醫藥效無く、祈禱驗なし、時人皆菅公の祟と爲す。時に玄照律師の弟子に淨藏なるものあり、年尙壯なりと雖も法德當代に冠たり、乃ち召して時平の病を禱らしむ。一日菅公の靈、淨藏の父善相に示現して曰く、吾帝釋天の允許を受け、今や機到りて怨敵に報いむとす、然るに汝の子淨藏忽ち吾を降伏せむと欲す、汝速に是を制せよと。善相大に恐れ、是の事を淨藏に告げて出で來らしむ。時平遂に死す。其の家人一族死するもの少からず。

神怪不測、常識の能く了解し得べき限にあらざるを以て、吾人は玆に其の眞僞に就いて批判するを爲さゞるべし。唯主として北野緣起に據りて公の威靈に關する傳說を綜合し、以て菅公崇拜の由來を示さむと欲す。事素より悉く信を置くに足らざるべしと雖も、亦以て我が國民が死後の菅公に就いて如何の觀念を有せるかを測知すべし。

二

公の神異譚は、延曆寺の座主尊意に關するものより始まる。是れ公の死後幾も無き時の事也。尊意一夜壇前に靜坐せし時、房戸を叩く音連りなり。尊意戸を開いて是を見れば、衣冠束帶の人立てり、まさしく菅公の化來也。尊意恐惶公を持佛堂に迎へて來意を問ふ。公曰く吾れ洛中に入り、王城に近きて吾が生前の憂憤を晴さむと欲す、唯恐る、上人法驗によりて吾が計畫を妨げむことを、願くは宣旨上人を招ぐことあるも決して行く勿れと。尊意答へて曰く、公と吾とは年來師壇の契あり、希くは公の欲する所に從はむ。唯天下皆王土也、宣旨三度に及びて而して尙

るべし。要するに公は天成の詩人也。其の性格は全く詩人の性格也。若し詩人として生まれたるに非ずむば、公は何人としても生まれざる也。幸にして天の公に待つ所のもの、公自ら知らずして是を成せり。窮愁の間に死せりと雖も、又何の悲む所かある。今や公は天満宮の祭神として、千歳の下に廟食す、而かも公にして靈あらば、寧ろ詩人として崇拝せられざるを恨みとすべき也。

第十章　菅公の崇拝

一

生前の菅公は既に叙し畢矣。乃ち茲に死後の菅公を一言して是の巻を終るべし。

死後の菅公に關する事譚は、歴史と云はむよりは寧ろ傳説也、傳説と云はむよりは寧ろ神異譚也。是等の神異譚は、菅公の威靈を顯彰せむが爲に傳へられたるものなるべしと雖も、其の實却て公の德を傷くるもの尠からず。殊に僧侶の徒牽強附會の説を立て、以て自ら爲にする所あるは、公の爲に深く悲むべき也。事素より

を達觀せるを見る。菅公が米油の缺乏を訴へしと其の情に於て甚だ同じからざるものあり。司馬遷原を評して『淖汗泥の中に疎濯し、濁穢を蟬蛻し、以て塵埃の外に浮游し、世の磁垢を獲ず、皭然泥して滓せざる者也。此の志を推すに日月と光を爭ふと雖も可也』と稱揚せるは、必ずしも過賞に非ざるべし。

是の如く菅公と屈原とを對比し來れば、其の性情の相近きものあるに拘らず、其の人物及び情操の高潔偉大なる點に於ては菅公遂に一籌を屈原に輸せざる可らざるが如し。吾人は公の爲に深く是を悲む。是を公の詩に就いて言へば、公の詩の短所は餘りに人間らしき所にあり。時に天命を云ひ、冥理を說くもの無きに非ずと雖も、其の十中の八九は一身の榮辱に執着すること、寧ろ太だ過ぎたり。其の衣服口體の不滿を訴ふるもの、如きは、悲慘は則ち悲慘なりと雖も人をして高大なる詩的同情を起さしめ難し。是を以て公の詩は人心を現世以外に簸揚するの力に於て、少しく缺くる所あるに似たり。蓋し公の人物性格おのづから然らしむる乎、抑も是を以て公に望む、或は望むものゝ謬なる乎。

然れども是の如きは强ひて全きを求むるのみ、公に於て多く累とするに足らざ

神は、菅公の遂に及ばざる所也。公を以て感恩の人と云ふは善し、忠勇の士とするは則ち未だし。公は讒奸前に塞れども敢て掃攘せむとせず、手を空うして其の搆陷を待ちたりき。是點に於ては吾人深く公の意力の足らざるを惜むと同時に、屈原の凛乎たる精神を賞揚せざるを得ず。原其の情を抑へて自ら慰めて曰く、

朝飮木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英、苟余情其信姱以練要兮、長顑頷亦何傷(中略)謇吾法前脩兮、非世俗之所服、雖不周於今之人兮、願依彭咸之遺則

是れ一身の榮辱を超絶して、自ら安ずる所あらむとする也。『余が心の喜ぶ所なれば、九死と雖も其れ猶ほ未だ悔いず』と云ひ、『清白に伏して直に死するは因より前聖の厚うする所也』と云ひ、『人生命あり、各々錯る所あり、心を定めて志を廣うす、余何ぞ恐れむ』と云ふを見れば、其の胸中良し光風霽月の觀無しとするも、尙ほ毅然として現世の外に立つ所あり。徒に憂悶の中に憤死したるものと同日の論に非ざるを見る。吾人は是の點に於ても、我が菅公が其の末日に於て百尺竿頭一歩を進めざりしを痛恨する者也。『漁父』の一篇に到りては、更に從容自得の趣あり。畢竟原は一面に於て人生に執着せしも、其の他面に於ては窮達の外に容與として天地人生

り汨羅に至る幾多の辭賦は、是の間の煩惱を抒べたるものに外ならざりき。是の點に於ては彼れは菅公と其の軌を等しうせりと謂ふべし。

試に屈原の辭賦に就いて其の性格を見む乎、彼は離騷經の初に於て自ら敘して曰く、

帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸、攝提貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降、皇覽揆余于初度兮、肇錫余以嘉名、名余曰正則兮、字余曰靈均、紛吾既有此內美兮、又重之以脩能

先づ『高陽之苗裔』を標榜し、內美脩能を誇揚し、矜恃自ら高うするところ、菅公稍〻是に近し。進で今古の興廢、治亂の條貫を述べ、『惟黨人之偷樂兮、路幽昧以險隘、豈余身之憚殃兮、恐皇輿之敗績』と云ふに至ては其の忠篤の心、菅公稍〻如かざるが如し。

荃不察余之中情兮、反信讒而齌怒、余固知謇々之爲患兮、忍而不能舍也、指九天以爲正兮、夫唯靈脩之故也。

以爲らく、其の言行はれず其の直却て患を爲さむこと、初より知らざるに非ざれども、天に代て正を行ふ者は、利害の爲に默止する能はずと。是の凜烈たる大義の精

亂れず、悲みて狂せず、一身の軻軻を嘆じて天道の渝らざるを頼む、離騒の一篇其の辭何ぞ微にして、其の志何ぞ潔き。是れ猶ほ菅公の咏嘆に似たらずや。其の性相近く其の事亦相類す、然らば則ち屈原と菅公と全く同じき乎。吾人の見る所によれば、屈原は菅公よりも智に於て濶達に、意に於て強烈なりき、但其の傾く所は則ち同じ。

方正容られず、身流竄の人となるや、原や窮愁措く所を知らず、怨嗟の聲甚だ哀しかりき。菅公と毫も異なる無し。但原の沈淪は、自ら事を起して敗れたるに本く、菅公の全く他に動かされたると同じからず。是を以て原に在ては悲哀の中に憤慨あり、啻に君王の不明を怨むのみならず、讒奸を悪むや甚だ切也。是の意力の發動は菅公に於て見ざる所也。而して原の悲憤には尚ほ一分超絶の境地あり、彼は其の直情徑行以外に於て靜に人生を觀じて天命を樂むの理想界を有したり。菅公が終始一身の煩惱を擺脫し能はざりしに比すれば、其の識見亦一層濶達なるものあるを見る。而かも原や尚ほ人也、人として血あり、涙あり、肉體あり、情慾ありき。是を以て理に於て安立の地を得たりしも、情に於ては煩惱の奴隷なりき。流竄よ

て其の德を大成せしめ、自らは小人の汚名を取れり。是故に彼等は公の肥料となりて一の賢人を出だしゝと謂ふも不可なきり。

論じ得て剴切なりと謂ふべし。

三

菅公の性格に就いては、第三章既に是を詳說せり。讀者公が一生の事業を概觀して、再び其の性格を緬想せば、公の爲人更に明瞭なるものあらむ。菅公の人物に對する倫理上の批評は暫く措き、何人も認めざるべからざるは、公は是の如き種類の人物中に於て稀に見る所の高美なる性格を有せる事也。吾人は本邦に於て公の匹儔に想到する能はず、公に似たるものは夫れ楚の屈原乎。試に吾人をして是の二者を比較せしめよ。

夫れ屈原の爲人を觀るに、道を正して容れられず、行を直うして斥けらる。身は帝王の一族、廟堂の大夫、一朝讒奸に陷れられて江湖に放浪す。頗る菅公の事境に類す。既に罪無くして江湖に放たる。能く怨み悲む無きを得むや、而かも怨みて

つくしにも紫おふる野邊はあれど
なき名かなしむ人ぞきこえぬ（新古今集）

延喜三年二月二十五日、公は是の如き慘憺たる事情の下に病歿せり、時年五十九。京師を出でしより二箇年餘。其の墓所を安樂寺と云ふ。越て二年、公の隨臣味酒安行、始めて神殿を安樂寺に立て、天滿大自在天神と稱せりと云ふ。

是の如く、太宰府の左遷は、啻に公をして其の詩人の天分を全うせしめたるのみならず、其の人物の上にも一層の品位を加へたり。井上哲次郎氏は菅公の最も熱心なる歎美者なり、曾て是事を論じて曰く

若し菅公をして平和に生命を送り、平和に紅梅殿に薨ぜしめば、吾人は決して今日の如く公を景慕するに至らざりしならむ。但々公意外の災難に遭遇して悲むべき逆境に陷り、所謂盤根錯節の機會を得て、氷雪よりも厲しき清節を露はされたるによりて、吾人は其人格の迥に群衆に拔いて千歲に秀る者あるを知る也。果して然らば左遷豈公の爲に悲むに足らむや。因りて之を考ふるに、時の小人菅公を滅さむと欲して之を排擠せしも、其結果は反りて公をし

漢詩の外公に和歌の咏あり、又以て當詩の境遇を想ふべし。其の四五を左に錄す。

或夕をちかたに煙たつを覽て

夕されば野にも山にも立つけふり
なげきよりこそもえまさりけん（大鏡）

雲の浮き漂ふを見て

山わかれとびゆく雲のかへりくる
かげ見る時ぞなほたのまるゝ（上同）

月のあかき夜

海ならずたゞよふ水の底までも
きよき心は月ぞてらさむ（上同）

雨のふる日

あめのしたかわける程のなければや
着てしぬれぎぬひるよしも無き（上同）

野を咏ぜる歌

念々投丹歎、天道之運人、不一其平坦一、

風雨

朝々風氣勁、夜々雨聲寒、老僕要綿切、荒村買炭難、不愁茅屋破、
偏惜菊花殘、自有年豐稔、都無叶口飡一

是に依て見る時は、公の居館は落寞たる破屋にして、衣裳架上に濕ひ、書簡篋中に損ずる程なりき。年豐にして民富めるにも拘らず、公の居る所、食無き事あり。『況復厨兒訴竈頭爨煙斷』實に悲慘の極と云ふべし。加ふるに公は脚氣と瘡瘍とに苦めども、醫藥是に適するもの無く、厘に一塊の溫石と半盞の酒とあるのみ。是間尙ほ佛を念じ、書を讀みて、其の心を安ぜむとす。公の心事果して如何ぞや。時としては公は書をだに讀むこと能はざる也。『燈滅』の二絶は、讀む者をして袖を掩うて哭せしむ。

燈滅二絶

脂膏先盡不レ因レ風、殊恨光無二一夜通一、難レ得レ灰心兼二晦迹一、寒窓起就月明中。
秋天未レ雪地無レ螢、燈滅拋レ書暗淚零、遷客悲愁陰夜倍、冥々理欲レ訴二冥々一。

晩望東山遠寺

前略　未得香花親供養、　偏將水月若空觀、　佛無來去無前後、　唯願抜除我障難

偶作

病追衰老到、　愁趁謫居來、　此賊逃無處、　觀音念一廻。

然れども公は死するまで安立の地を得る能はざりき。時に或は『生涯無定地、運命在皇天』と悟り、時に或は『大奇春夏秋冬盡、爲我終無抜苦聲』と歎ず。公は是の迷悟の間に彷徨して、遂に解脫の道を得ざりし也。殊に最後の一年間は、貧苦と疾病とに苦悶し、數々憤激の情を漏せり。雨夜及び風雨の二詩具に是間の不滿を訴へたり。

雨夜

春夜漏非長、　春雨氣應暖、　自然多愁者、　時令如乖限、　心寒雨亦寒、
不眠夜不短、　失意槁我骨、　添淚流我眼、　脚氣與瘡癢、　垂陰身遍滿、
不管取諸身、　屋漏無蓋板、　架上濕衣裳、　篋中損書簡、　況復厨兒訴、
竈頭爨煙斷、　農夫喜有餘、　遷客甚煩懣、　煩懣結胸腸、　起飲茶一椀、
飲了未消磨、　燒石溫胃管、　此治遂無驗、　強傾酒半盞、　且念瑠璃光、

紙裏生薑稱藥種、竹籠昆布記齋儲、不言妻子飢寒苦、爲是還愁懊惱余、

罪無くして是の流竄に遇へりと雖も、公は一度も君王の不明を恨み、奸臣の讒搆を怨りし事あらず、偏に一身の不遇を嘆じて天命の否塞を悲みたるのみなりき。唯其の身の罪無くして汚名を千歳に遺すは公の忍ぶ能はざる所也。故に公の詩概もすれば是事に及ぶ。『惡名遂欲蠲、未曾邪勝正』と云ひ『月光似鏡無明罪』と云ひ『君察我無辜、爲我請冥理』と云ふ、皆然り。殊に是の如き境遇にありて尚ほ君恩を感謝す、亦以て公の性格の甚だ高くして且美なるを見るべき也。悲哀措く所を知らざる時は、公は其の安心を佛敎の中に求めたり。左に引く所以て證と爲すべし。

叙意一百韻（前略）

庶憂何遣恨、辛酸是宿緣、微々抛愛樂、漸々證葦膚、合掌歸依佛、

廻心學習禪、厭離今罪網、恭敬古眞筌、皎潔空觀月、開敷妙法蓮、

誓弘無誑語、福享不唐捐、熱惱煩纓滅、凉氣序罔愆、（後略）

南館夜開都府禮佛讖悔

人慚地獄幽冥理、我泣天涯放逐辜、佛號遙聞知不得、發心北向只南無

感慨を暢べたる也。

九月十日

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香、

十日去て十五日來る。月光鏡に似たるも罪を明にする無く、風氣刀の如きも愁を破るに由無し。顏容日に衰へて、千里誰にか訴へむ。即ち唱うて曰く、

秋夜

黃萎顏色白霜頭、況復千餘里外投、昔被榮花簪組縛、今爲敗謫草萊囚、月光似鏡無明罪、風氣如刀不破愁、隨見隨聞皆慘慄、此秋獨作我身秋、

公配居に到りてより三月にして、家書初めて至り、具に消息を傳ふ。公の家には夫人と女子とあるのみ。秩祿官沒せられ、家產漸く傾き、園內の樹木を賣り、家屋の一部を人に貸して僅に生活を支ふるを見る。而かも一言の飢寒の苦に及ぶもの無し、公の懷惱察すべき也。

讀家書

消息寂寥三月餘、便風吹着一封書、西門樹被人移去、北地園教客寄居、

是れ後集巻頭の詩也。公が昨今の轉變眞に一夢に較ぶべし。其の筑紫に在るや門を杜ぢて一歩も外に出でず、都府樓は近しと雖も、纔に瓦色を望み、觀音等は遠からずと雖も、只鐘聲を聞くのみ。警吏の門を守るあるに非ざるも、公自ら撿束して遙に謹愼の意を致しゝ也。其の詩に曰く、

不出門

一從謫落在柴荊、萬死競々蹋躋情、都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、
中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、此地雖身無檢繫、何爲寸歩出門行、

秋氣漸く催し、旅雁度ること頻也。憐むべし、公は尚ほ何時かは京師に還るの日あるべきを思量して、一縷の望を繫ぎし也。旅雁を見て遙に情を托す、何ぞ夫れ悽愴たる。

聞旅雁

我爲遷客汝來賓、共是蕭々旅漂身、欹枕思量歸去日、我知何歳汝明春、

重陽の佳節は來れり、而かも公は唯獨り敗屋の下に愁臥するのみ。遙に去年今夜清涼に侍するを憶へば、感慨何ぞ勝ゑむや。有名なる『九月十日』の絶唱は、實に是の

遂に公をして無告の流人たらしめき。然れども悲い哉是の如くするに非ざれば公は遂に詩人たる能はざりし也。而かも公は死に至るまで是の天分の地に居るを悲み、靜に春秋の榮落を觀じて何時かは昔日の榮華に歸る有らむ事を望みたりき。是の憂愁と希望との現はるゝ所に公の天分は遂に大成せられたり。而して公自らは毫も是を知らざりし也。嗚呼天道の冷酷無情何ぞ一に是に至るや。

太宰府に於ける公の詩は甚だ多からず、然れども一言一句と雖も精靈の聲ならざるは無し。文字時に洗鍊ならず、藻思必ずしも巧緻ならずと雖も、眞情常に紙面に汪溢して、公の面目躍如たるを覺ゆ。是を南海の詩に較ぶれば、意更に摯實、情更に痛切、感極まる處往々人をして卒讀に堪ゑざらしむ。詩も茲に到りては徒らに技工のみに非ざる也。薨ずる時集めて一卷となし、封緘して紀長谷雄に送る。長谷雄是を見、天を仰で嘆息せりと云ふ。今の所謂る『菅家後集』と稱する者是也。今左に其五六を摘錄せむ。

自詠

離家三四月、落淚百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼

期してか相會するを得む。公惜別の情を唱うて曰く、

啼かばこそ別れをいそげ鷄が音の
聞えぬさとのあかつきもがな

播磨國明石の驛に宿れる一夜驛長公を見て其の轉變の甚しきに驚く。公乃ち一聯を作て自ら慰めて曰く、

驛長莫驚時變改、一榮一落是春秋。（大鏡）

『山河遶たり行に隨て隔たり、風景黯然として路に在て移る』。長亭短亭幾びか公を送迎し、二月三月幾度びか去來して、公は遂に太宰府の配居に到る。

二

太宰府の配居は、公にとりて絶好の詩境なりき。外に名利の競爭なく、內に危殆の憂悶無し。公や靜に往時を懷慕し、現境を思料し、咏嘆によりて其の哀情を遣るべき也。天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而して先づ公に與ふるに政治家の境遇を以てせりき。公の政治家たりしや頗惱內に公を苦め、讒奸外に公を陷れ、

敕使藤原眞興は、攝津に於て公に別れ、右衛門少尉善友益友、衛士二人を率ゐて代て筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は殆ど純然たる囚人にして、任中俸給を賜ること無かりし也。其の文に曰く、

太政官符太宰府、左衛門少尉正六位上善友朝臣益友、左右兵衛各一人、右件人爲領送權帥從二位菅原朝臣、發遣如件、府宜承知之、但任中雜俸料並監從及不預釐務、依前員外帥正三位藤原朝臣吉野例行之、又山城攝津等國無給食馬、路次國亦宜准之。（政事要略）

公の前途や實に慘憺たりと謂ふべし。夫の白樂天が北窓三友を想うて、二十八韻の詩を作りたるは、蓋し是時なり。中に自ら境遇を述べて曰く、

自從敕使驅將去、父子一時五處離、口不能言眼中血、俯仰天神與地祇、
東行西行雲眇々、二月三月日遲々、重關警固知聞斷、單寢辛酸夢見稀、
山河邈矣隨行隔、風景黯然在路移、平到謫所誰與食、生及秋風定無衣。（菅家後集）

字々人の腸を斷つ。行き行いて河內國士師（ニシ）の里に到り、道明寺に次る。道明寺は菅家歷代の寺にして、當時菅公の姨覺壽尼あり。蓬萊一度び別るれば、何れの時を

延喜元年二月一日、公京師を發して太宰府に赴く。從ふ者は小男と少女と咏酒安行と名くる一門生とのみ。其子の官に在るもの、處を異にして盡く流徙せられ其の他門下郎等一人も公に伴へるもの無し。夫人女子亦隨ひ行くを許されず。敕使藤原眞興等、衛士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲慘ぞや。住み慣れし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花を見て悽惻の情に勝えず、一首を咏じて曰く、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春をわするな

又櫻樹に結び附けたる歌に、

櫻花ぬしを忘れぬものならば
ふきこむ風にことつけはせよ

京を離るゝ數日、夫人に送れる歌あり、

君がすむ宿のこずゑをゆくゝも
かくるゝまでにかへり見しかな

亦公の性格の許さゞる所なりしならむ。一身の危殆は公の尤も憂ふる所なりと雖も、兩帝の恩寵も亦帝の尤も感激する所也。退かむ乎身は安きを得べきも、君恩を空しうするを奈何。止らむ乎、君恩に背かざるを得べきも、身の危きを奈何。公や素感情の人にして意志の人に非ず、斷ぜむと欲して斷ずる能はず、空し中流に佇回して遂に讒奸の計に陷る、公が此間の心事、最も諒とすべき也。嗚呼公を禍したるものは、宇多に非ず、醍醐に非ず、時平、光定國、菅根の輩に非ず、實に公其の人の性格也。

然れども公の流竄は公の爲に悲むに足らざる也。國民は小政治家を失ひたる代りに今や大詩人を獲たり。公よ、時平等をして其の爲す所を爲さしめよ、而して安じて太宰府に行け。其處には學者よりも政治家よりも更に大なる天分の公を待ちつゝある也。

第九章　詩人菅公

一

宇多上皇の公に寄托したる大任に就ては、吾人數々是を言へり。公にして苟も是を體任せむ乎、其の地を堅め、其の位を高うし、實力に於て藤原氏を超駕せむことを務むべし。清行の言によるも、當時公の門弟諸司に半すと云ふに非ずや。公若し是の輩を糾合し、正理公道によりて嚴に自ら守らば、朝廷の事未だ俄に知るべからざる也。況や當時公の名聲京師を皷舞し、上下望を屬するもの寔だ少からざりしをや。又況や、帝寵未だ移らず、而して上皇後に在りて是を援引し給ふをや。公にして進で爲す有るの心あらば、太政大臣の內旨は實に千歲の一遇と謂ふべし、公や須らく是の恩命を拜受して、大に感憤興起する所あるべかりし也。是れ即ち外敵黨に對して機先を制し、內一身の上に安住の地を與ふる也。而して是の事必ずしも私己の爲のみに非ず、實に上皇寄托の存する所なるを思はゞ、大義名分の上に於ても、毫も累する所無かりし也。然れども是の如きは公の性格として到底望むべからずとせむ乎、公は何故に吾人の所謂る第二の道を取り、禍の未だ身に及ばざるに當り、清行の忠告に從ひて早く急流勇退を斷ぜざりし乎。是の如くせば外に止足の德あり、內に保全の利あり、公の爲に謀るに頗る可ならずや。然れども是れ

とは、時平等が申請したる左遷の詔敕中に明言せる所也。是の如く明言して公と上皇との間を疎隔するは、先にも說ける如く、藤原氏の將來の爲に必要なる事なりし也。想ふに上皇の參內を要して是を妨げしは、獨り菅根等の所爲のみに非ず、恐らくは帝の意亦玆に存せしならむか。上皇亦是を強ひ給ふこと能はず、終日草座を敷きて陣前に留まれるもの、御身の上に懸れる嫌疑に憚る所ありしか。是の想像中らずと雖も遠からざらむ。

五

吾人菅公の史蹟を想ふ毎に、公の進退に恨無き能はざる也。公の情や察すべきも、公の行や甚だ憾むべし。公が當時の地位の危殆なる、公の既に熟知せるところ、三善清行の封書を待て而して知らざる也。而して公晏然として是の間に居る、無謀も亦甚しからずや。蓋し當時公の爲に謀るに、取るべき道二あるのみ。進で太政大臣の職を拜して大に自家の權勢を張るは其の一也、退て右大臣の官を辭し、恬退靜默、自ら全うするは其の二也。

言を信じ給ひし乎。吾人は帝の少壯にして尙ほ思慮に乏しき事を以て是の疑問を說明するの外無き也。而して公に對する畏憚の情と齊世に對する猜疑の念と亦共に帝の聰明を掩ふに力ありしが如し。賴襄既に是の事を論じて頗る人情を盡せり。曰く、

夫家宰之寵於父者、其子必憎之、憎其倚父寵以制我也、以爲我自有所用、何必是、且己所用、與己年齒相若志趣相投、而父所用皆否、民庶之家且然、況人主有天下者乎、人主之所樂者、此位也、故其所忌、莫甚於兄弟之逼於己、中其所忌、以使恣其所樂、宜乎其言易入也、況出於己所用常所愛信者之口乎、故延喜之貶菅公、不必待時平之數言也、其情素然也。（日本政記卷二）

菅公を以て家宰の父に寵ある者に比し、醍醐を以て其子に比し、而して情志同じからずして己を制するの力あるもの、子必ず是を忌むべきを言ふ。賴氏の言恐らくは醍醐の心事を語り得たるものならむか。若し夫れ宇多上皇が公を救はむが爲に參內せし時、朝臣の上皇を遇し奉ること何ぞ彼が如く禮無かりしや。恐らくは嫌疑亦上皇の上に懸りしが爲なるべし。公が廢立の非謀を以て上皇の意に出づ

ずして、公獨り是を企てしとすべき乎。菅公の性格より見て、吾人萬々是事あるを信ずる能はざる也。況むや公が流竄中の詩を見るに、帝恩の無涯を感佩し、心事の清白を訴ふる者に非ざるは無し。太宰府に於ける公は眞正の詩人也、言々肺腑を絞り、語々血誠を瀝す、些の僞情の是間に交る無き也。公は平日と雖も隱忍情を矯むるの人に非ず、太宰府に於ては殊に天眞の爛漫として愁苦の間に發かるゝを見る。公にして萬一罪あらむ乎、而して其の左遷は是の罪に對する相當の制裁ならむ乎、公の詩は決して其の寃枉を訴ふる是の如く痛切激越ならざるべき也。公を以て廢立を謀りたるの人となす、知らざるも亦甚し。

以上論ずる所にして大に謬らずむば、公の左遷は全く時平等の讒搆に本けり。扶桑略記載する所の宇佐奉幣使に關する醍醐御記は、虛妄なりと斷ぜざるべからず。

四

公の罪無きは是を了せりとせむ。而かも聖明なる醍醐は何故に容易く讒者の

ざる事情は果して是れありし乎。若し是れ有りたりとせば其は何處に存すと爲す乎。公は自ら事を好むの人に非ず、若し公にして是の如き計畫を爲したりとすれば、其は宇多上皇の意を承けたるものに外ならざるべし。然らば則ち上皇は何故に醍醐帝の遜位を必要なりとせられし乎。先にも詳論せる如く、上皇の宿志は藤原氏の抑制と皇權の擴張とにあり。醍醐帝にして廢黜せらるべくむば、其の原因は帝が是の宿志に副はざる爲ならずむばあらず。而かも吾人は毫も是の如き事實を認むる能はざる也。帝の菅公を恩遇せらるゝ事、毫も上皇と異なる無し。家集を上りたる時、菅公に賜ひたる詩は明かに是を證す。而して他方に於ては、藤原氏に私して上皇の宿志を空しうするの恐あるが如き御行爲ありたること無し。況むや御齡僅に十七、其の御性行明かに定まれるにあらず、是の間に於て上皇が帝を嫌忌するが如き謂れありと信ずる能はざる也。久米氏が『醍醐帝已に御成人にて、叡慮方に朝政を振肅するに鋭ければ、上皇は世を紛亂し給はむことを憂ひ給ひて、公に已を得ざる時には讓位をさせよとの旨を喩し給ひし事のありしならむ』と說けるは少しく揣摩臆測に過ぎたらずや。然らば則ち廢立の事上皇關知し給は

清貫者讒徒也。延喜帝自元信讒故、以其徒僞忽被載御記者、是れ善く讒徒の計略を看破せるものなり。（太陽六卷第一號）

菅公に廢立の罪狀無しとするの點に於て吾人は井上氏の說に左袒せざるを得ざる也。凡そ歷史上の疑義に關して、若し正確疑ふべからざる具體の證據無き時は、是を裁決するものは、當時の情勢と人物の性格とならざるべからず。清貫は何人なりや、藤原保則の子なりと雖も、果して其父の如く公明の人なりしや否や。且つ當時宇佐の奉幣は、井上氏の說ける如く、菅公の流罪に關するものなるは、想像し得べきを以て、清貫或は上下の心を安からしめむが爲に、理伏云々を復申し、帝是を信じて御記に留められたるものなるやも知るべからず。兎に角、疑はしき證據也。さればとて『清貫者讒徒也』と斷言せる北野稿草も亦强ちに獨り信憑すべき者にも非じ。菅公神化を旨とせる文書として是の如き筆法は極めて普通に有り得べき事なればなり。潛に想ふに、是の疑問の暗黑を照すべき光明は、寧ろ當時の情勢と公の性格とに求めらるべきに非ざる乎。

今當時の政治界の情勢を窺ふに、公をして醍醐帝の廢立を行はしめざるべから

に先ち、讀者は此の兩說を對照せらるべし。井上哲次郎氏の說に以爲らく、

是れ（清貫の復命を云ふ）最も信ずべからざるの記事なり、殊に其「以理伏」といふは恰も菅公が眞に不軌の企ありて遂に之れを懺悔せられしが如きを意味するなり、若し此事あらば、豈に「去年今夜」云云の詩あらんや、凡て後集に載する所の詩は皆眞情を吐露するものにて、其罪なきを訴へざるはなし、清貫が上申は、賢人を屈辱したるが爲めに起れる悔恨を醫せんが爲めに捏造せられたる讒徒の言のみ、抑清貫は何故に宇佐御幣使となりたるか、其年の六月十四日に怪物あり、又七月二日に雷鳴大に動きしかば、人皆恐怖して神罰至れりと想像して心に安んぜざる所あり、是れ其宇佐の使ある所以なり、然るに神罰は他に原因あるにあらず、唯ゝ罪なき菅公を放逐したりといふこと良心を責めて恐ろしきなり、即ち良心苦悶の胸中に存するが爲めに如何なる天變地異も皆怖るべき者となれり、此傾向は其後益強大となれるを以て知るべきなり、若し菅公にして眞に罪ありて已に理に伏せしとせば、良心の苦悶は直に消滅するを得む、是れ清貫が上申の必要を來たせし所以なり、北野稿草に云く

と有。試に之を解するに、理伏とは思當りて理伏したるとの意ならむ、自分は謀りしこと無けれども、源善より誘引せられしことを免れず。亦上皇より毎々承和の故事を承りたることはありとの辯解と見えたり。承和の故事は嵯峨帝の讓位を云ふ、然れば廢立の事は全く形跡無きに非るなり。因て推量するに、醍醐帝已に御成人にて叡慮方に朝政を振肅するに鋭なれば、上皇は世を亂し給はむことを憂ひ給ひて公に已を得ざる時には讓位をさせよとの旨を諭し給ひしことのありしならむ。其は公去りて後の改革の發したるにて思ひ合はせらる。左遷の當日法皇馳參內裏、然左右諸陣警固不通、仍法皇敷草座於陣頭（中略）晩景還御とあるは、嫌疑の法皇にも及びたる故なり。

今の世に於て敢て斯る警拔なる史評を公の上に加ふるは、久米氏に非ずして誰か是を能くすべき。是れ殆ど神聖犯すべからずとせられたる傳說的人物に臨むに純然たる批評的態度を以てしたるは、深く多とすべき也。然れども其の所論に至ては首肯し難きものあり。清貫復命の事は大日本史の菅原道眞傳既に少しく辯明する所あり、近時井上哲次郎氏亦精細に是を駁撃せり。今吾人の意見を述ぶる

ぞ無禮彼が如かりし乎。事頗る解すべからざるに似たらずや。

想ふに是等の疑問を解釋するに當り、先づ以て明かにすべきは、菅公の罪狀也。公果して罪ありし乎、將た其の所謂る罪は時平等の讒誣なりし乎。歷史家中或は是の如き疑問を以て尙ほ公の大德を傷くるものとなさむも、而かも疑問は遂に疑問たり。先づ是の疑問を明瞭にするに非ざれば或は恐る當時の史蹟遂に解し難からむを。

世に往々菅公を以て眞に廢立を計りたりとするものあり。久米邦武氏の如きは其の一人也。久米氏は國史の大家にして識見共に尋常學者の比に非ず、其の論ずる所傾聽すべきものあり。氏が菅公を有罪と斷ずるは、主として扶桑略記に載せたる宇佐奉幣使清貫の復命を根據とし、宇多上皇が公を救はむと欲して宮に入る能はざりし事を以て其一證となせり。其文に曰く、

（前略）扨左遷は右中將源善と同時なれば其連座なりとす。扶桑略記に其七月宇佐奉幣使清貫、侯帥菅原朝臣氣色及府使等（中略）但帥見氣色、殊示窮體、前日言意既似理伏、其詞云、無所自謀、但不能免善朝臣誘引、又仁和寺御言數有奉承和故事耳

世は美作に、良岑貞成は長門に、前攝津守源兼則は阿波に、何れも、遠竄せらる(政事要略、御遊起聞書)。蓋し是等の人々は平生公と親故ありしが爲なるべし。時平尙ほ是をしも足れりとず、菅門の弟子朝に在るものを擧げて悉く是を追放せむと欲せしが、三善清行の諫止に依りて僅に事無きを得たり。

菅公の政治的生活は是の如くにして全く終りを告げぬ。宇多帝の拔擢を被りてより前後十年に亘れる公が榮達の歷史は、一朝讒者の爲に急轉直下の覆沒を遂げ畢矣。宇多上皇の宿志亦同時に水泡に歸し、藤原氏の黨與は全く其の志を得ぬ。菅公太宰權帥に左遷せられたる即日、源光は右大臣に上り、藤原定國は右大將に任ぜらる。

三

熟々菅公左遷の史蹟に就いて思料すれば、自ら疑團の禁ずべからざるものあり。醍醐の聖朝は史家の等しく認むるところ、讒奸の是の間に入る如何ぞ夫れ容易なりしや。宇多上皇は帝父たり、公を救はむと欲して參內せむと欲せし時、有司何爲

流竄なりき。恐らくは、公は早晩是事あらむとを豫期せざりしに非ざるべし、而かも一朝にして是の急激の轉變に遇ふ、働して哭するも尚ほ足らざる也。公悲みに勝ゑず、歌を上皇に奉りて其の情を哀訴す。

流れゆくわれは水屑となりぬとも
君しがらみとなりて止めよ

上皇是の歌を見て大に驚き、帝に面して公を申救せむと欲す。而かも菅根等宮門を塞いで上皇を入れず、諸陣の警衛を戒嚴し、衞士をして席を下らしめず。上皇は終日陣外に佇回せしが、遂に帝と見る能はずして還り給ふ。

是れ一月三十日の事なりき、翌日警吏公を護衛して太宰府に赴く。

公に二十三子ありき、其の幼少なるもの獨り公に從て筑紫に赴くを許され、餘は悉く公に連坐して左遷せらる。右少辨高視は土佐に、式部大丞景行は駿河に、藏人兼茂は飛驒に、文章得業生淳茂は播磨に、流徙各、其の處を異にす。菅家以外に於て公の黨與と目せられたるもの近衛中將源善は出雲に、大春日晴蔭は參河に、右大史藤原諸明は遠江に、源巖は能登に、源敏相は但馬に山口高利は伯耆に、少納言和藥貞

ことを示したるは、即ち這般の用意ならずむばあらず。

公を陷れたる讒者は言ふまでもなく、時平にして、源光、藤原定國、藤原菅根等其の重なる黨與なり。時平は藤原氏の正系を紹ぎて一族の勢力を代表するもの、公の仇敵たるは論を待たず。源光は仁明天皇第三の皇子、醍醐帝の外舅にして、門地一世に隆きにも拘はらず、官は大納言にして公の後に在り。小人光の如きもの、素より公に慊焉たる能はざる也。定國は高藤の子にして、醍醐の母兄たり。而して官は中納言右大將に過ぎず、如何ぞ公の一儒林より出でゝ臺閣の上に坐するを好まむや。若し公徵りせば、光も定國も、其の官位今の如く卑からざるべき也。菅根は式部少輔文章博士たり、官位に於て公と相去ること頗る遠し。加ふるに今の職を得たるは公の推薦に基けるを以て、時平に黨して公を陷るべき理無きが如し。唯曾て殿上に庚申の夜遊ありし時、公の意に忤ひて額を打たれしことあるを以て、平生公を怨むこと久しと云ふ。是れ時平等と共に推擧の大恩ある公を陷れたる所以ならむ。

是の如くにして公は讒者の爲に左遷せられたり。名は左遷と謂ふと雖も實は

右大臣菅原朝臣、翰林興利俄爾上利而不知止足之分有專權之心、以侵諂之情、欺惑前上皇之御意、然乎恐惶上皇之御情天欲行廢立離間父子之志破兄弟之愛、詞者順仁之天心者逆、是皆天下所知奈利不宜居大臣之位

詔勅の旨意を案ずるに、藤原氏の公に對する嫌疑嫉妬の情狀殊に昭々たり。其の罪狀を數ふれば、止足の分を知らざる事其一也。專權の心ある事其二也。上皇に諂て其の意を欺く事其の三也。廢立を行ひて帝の弟齊世親王を立てむとしたる事其の四也。廢立の事は素より時平等の讒誣に出でたりと雖も、其の餘の三者は、藤原氏が平生公に於て最も嫉惡に堪ゑざる所なり。而して徒に嫉惡するも素より左遷の罪名たるを得ざるを以て、茲に齊世親王を拉し來て廢立の一事を虛搆し、以て少帝の心を激せしむ。敵黨の心事極めて分明也。殊に注意すべきは、藤原氏が公を陷るゝとともに、宇多上皇の政治上の容吻を杜絶したるの用意也。上皇の政見は、一として藤原氏抑制の大方針より打算せられざる無し。是を以て上皇と帝との間を隔絶するは、時平等の最も須要とせし所、詔書の中に『欺惑前上皇之御意』と云ひ、『恐惶上皇之御情』と云ひ、以て暗に公の企てたる廢立は上皇の意に出でたる

革命の歳なり、故に年號を改め警衞を嚴にすべし』との意を書したるに照し、清行を以て暗に公を『君臣尅賊』の叛者に擬したるなりと論ずるものあり。一理無きに非ずと雖も、是の如きは清行を疑ふこと甚だ過ぎたるが如し。清行は始より公と親善なりと謂ふべからず。巨勢文雄が清行を薦めたる時、公は冷笑して顧みざりしが如き、又其の書中にも公と『交淺』さを言へるもの、是を證するに足れり。而かも清行を以て時平、菅根の一輩となすは或は酷ならむ。清行が是の書を送りたる意中或は公の榮達を嫉むの情はありしならむ。唯何れにせよ、此の書に資りて公が當時の境遇を察するは、毫も妨げ無かるべき也。

二

菅公は清行の勸を顧みざりき。是の如くにして昌泰三年は去り、延喜元年は來りて、時平等の志を得べき時期は遂に到達しぬ。而して菅公は俄然として太宰權帥に任ぜられて筑紫太宰府に左遷せられぬ。時は維れ延喜元年（昌泰四年）正月二十五日。其詔に曰く、

く感動し、躬ら御衣を脱して公に賜ふ、嗚呼是れ所謂る『恩賜御衣』なりし也。是の詩是の衣、果して後日の識を爲せり。翌月十日、公上表して右大臣を辭すれども聽されず。翌十一日、三善清行公に書を送りて高踏勇退を勸む。其文頗る公の當時の境遇を想はしむるものあり。

清行頓首謹言、交淺語深者妄也、居今語來誕也、妄誕之責、誠所甘心、伏冀尊閤特降寬容、昔某者遊學之次、偷習術數、天道革命之運、君臣尅賊之期、絳候之家創論於前、開元之經詳說於下、推其季紀、猶如指掌、斯乃尊閤所照、愚儒何言、但離朱之明不能視睫上之塵、仲尼之智不能知簏中之物、聊以管穴伏添蠡簡、伏見明年辛酉之運當變革、二月建卯、將動干戈、遭凶衝禍、雖未知誰是引弩射市、亦當中薄命、天數幽微、縱難推察、人間云爲、誠足知亮、伏惟尊閤挺自翰林、超昇槐位、朝之寵榮、道之光華、吉備公外無復與美、伏冀知其止足、察其榮分、擅風情於煙霞、藏山智於丘壑、後生仰視、不亦美乎、努々力々、勿忽鄙言、清行頓首謹言。

又以て公の地位の甚だ危殆に迫れるの狀を見るべし。或は清行の是の書を以て、自ら爲にする所ありとなし、翌月上りたる革命議に『明年辛酉は易の革卦によりて

むや。況むや先帝と帝と、公を招て密に太政大臣任命の旨を傳へたる事の彼れの耳に入りたるに於てをや。彼れは明に帝室の好意自家の上に在らざるを看取せり、而して是れ皆菅公が要路にありて君恩を恣にするが爲なるを認識せり。時平たるもの是に於て奮然として蹶起せざるを得むや。彼れ才幹あり、知畧あり、而して德義無し、自家の爲に謀りて利ありと信ずるもの、事として爲さゞる所無かるべき也。是の如くにして彼れは內に黨與を結び、外は菅公の行爲に注目して、偏に機の乘ずべきを期待せり。

多感なる菅公は、是時孤立の身の漸く危殆に近きたるを自覺せり。而かも公の性格として、其機先を制し、自ら進で敵黨を打破するの快擧に出づる能はず。是の將に來らむとする攻擊に對して、一も防備する所無く、唯退いて自家の憂悶を咏嘆するのみ。公の詩是より復漸く悲し。

丞相度年幾樂思、今震觸物自然悲、聲寒絡緯風吹處、葉落桐梧雨打時、
君富春秋臣漸老、恩無涯岸報猶遲、不知此意何安慰、飮酒聽琴又詠詩。

是れ左遷の前年の九月十日、淸涼殿に於て九日の後宴に於て咏ぜしもの也。帝深

眞に誇大の言に非りしなるべし。昌泰二年八月、家集二十八卷（清公集六卷、是善集十卷、道眞集十二卷）を奏進せる時、帝の賜ひたる叡感の詩の如きは、明に公の恩寵甚だ輕からざりしを證するに足る。

門風自古是儒林、今日文華皆盡金、唯詠一聯知氣味、況連三代飽清吟、琢磨寒玉聲々麗、裁制餘霞句々侵、更有菅家勝白樣、從茲拋却匣塵深（北野縁起上野）

菅家の榮譽亦極まれりと謂ふべし。菅家素と貴種に非ず、古人以來名儒林の間に高しと雖も、而かも位官の次を以てすれば宗室名流の間に立て冠蓋の榮を競ひ得べきに非ず。然るに公や、數年の間に讃岐守より累進して右大臣に上る、滿廷の耳目を聳動して嫉妬の標的となる、寧ろ自然の數なりと謂ふべし。而して是の嫉妬心の最も盛なるものは、言ふまでも無く藤原時平也。

昌泰三年、時平年二十九、才氣人に勝れ、矜高自ら持す。彼れにして藤原氏の積勢を自覺したるの時、冬嗣、良房以來の皇室の關係に想到したる時、其の父基經が二代の攝政關白を追懷したる時、而して君恩今や一儒臣たる菅公の上にありて自家の殆ど遺られむとするを見たる時、時平たるもの如何ぞ恬然として爲す所無きを得

ざる也。吾人は政治家として公を責むるの酷なるを知ると雖も、而も宇多帝の寄托に關しては遂に是の如く言はざるを得ざる也。畢竟公を擧げたる者も宇多帝なり、公を陷れたるものも亦宇多帝なり、詩人たる菅公將た何の罪する所ぞ。吾人公に恨無き能はずと雖も、而かも公の衷情は則ち深く諒恕せざるべからず。

嗚呼天道是乎非乎。吾人は是の間に於て公の天分の大成せられつゝあるを見る也。公や讃岐にありし時詩人なりき、而して京師に歸りて政治家となりき。蓋し公は政治家として大に失敗するに非ずむば、詩人として大に成功する能はざりし也。今や政治家として大に失敗すべき時は來りぬ。吾人公の爲に慶せむか、將た吊せむ乎、天道の是非俄に知るべからざる也。

第八章　政治上の菅公、其四（流竄）

一

當時菅公の一身は嫉妬の集まる所なりしが如し。公自ら『猶ㇾ踞ㇾ爐炭ㇾ以待ㇾ燒亡、履ㇾ冶氷ㇾ而期ㇾ陷沒』と云ひ、『吹毛之疵、逐ㇾ榮華ㇾ以鋒起、鎖骨之毀、隨ㇾ奇祿ㇾ以荐臻』と云へるもの、

に抜いて異數の拔擢を加へ、殊恩幾年、遂に右大臣の尊貴に上らしめしもの實に主として是の一日の任命あらむがためならずや。而して公や是を受くることを肯ぜざる也。是の職、公今受けずむば他日誰か是を受けむとする。公に代て藤原氏を制せむとする者果して何處に求むべしとする乎。公にして苟も先帝の殊遇に感じ、其の宿志を奉體せむ乎、須らく感激して是の任命を受領せざるべからず。是の任命を受領せば、公の地位は一層の危殆を增すべき也、而かも若し藤原氏百餘年の積勢を一日に折伏し、其の跋扈を永久に防遏し、以て先帝多年の憤懣を慰め得べくむば、公が一身の危殆又何かあらむ。或は是の事成らざるやも計り難し。而かも奉公の大義は、是の如くにして初めて全うせられ得べきに非ずや。公の辭したるは其の器に非るが爲乎。時平を以て公に比せば則ち如何。公にして受けずば、即がて受くべきものゝ時平なるとは、明白なる事躰に非ずや。今や國家の大事定まらむとするに際し、謙讓の虛禮を事とするは迂儒の事のみ、一身の危殆を慮るものは、忠勇の士に非ざる也。吾人深く公の爲に是を傷む。

然れども公や素詩人として生まれたるもの、政治家として生まれたるものに非

公をして太政大臣たらしめむとす。蓋し兩帝の意に以爲らく、左右大臣並立して政務を執る時は、徃々議一決せず、事却て二道あり。左大臣時平は年少氣鋭にして未だ大事を托するに足らず、公は年耳順に近く、事に老練にして學才一世に冠たり、宜しく太政大臣たらしむべしと。乃ち公を召して叡旨を告ぐ。公固く辭して受けず、奏して曰く、今日竭り臣を召して事無くむば人必ず怪まむ、乞ふ献詩の事ありて召されたるに託せむと。一詩を献じて退く（北野縁起）。嗚呼大事は遜せり長へに歸るべからず。太政大臣を辭したるとは公が謙退の德を成すに似て實は大義に於て缺くる所あるを免れず。先帝の遺憾深く察し奉るべき也。蓋し當時時平年廿八、藤原氏の勢力漸く加はらむとす今にして抑えずむば、或は遂に乘ずべきの機を失せむ。即ち公を抜いて太政大臣と爲し、以て時平の上に置かば、一時或は超次の誣あるも、大勢一決又動かすべからざるものあらむ。是の如くにして藤原氏の權勢を殺ぐを得ば、是れ宇多帝が阿衡問題以來の宿志、はじめて達せりと謂ふべき也。先帝は是の如く思惟し給ひしならむ、實に是の如く思惟し給ひしならむ。而して公や固く辭して受けざる也、先帝の無念果して夫れ如何ぞや。抑々先帝公を儒林

衷心に出でたりとせん乎、吾人は公の心事に疑無き能はず。人或は公が身の危殆を悟りたるを稱して先見の明ありとなす、然れども今の時は先帝の宿志を言ふべきの時也、私見の明晴を言ふべきの時に非ざる也。論者の思はざる甚矣。

然れども、公の性格より見れば、是の如きは多く怪むに足らざらむ乎。吾人先に第三章に於て反覆辯證したる如く、公は一身の利害に冷淡なる人に非ず、而して剛毅邁往の意力に乏しく、極めて境遇に動かされ易き人たる也。公は感情の人にして意志の人に非ず、咏嘆の人にして活動の人に非ず。理の命ずる所意是に赴て他を知らざるが如き果斷忍耐は公に於て多くを望むべからざる也。先帝の叡慮那邊に在るかは恐くは公の熟知する所、而かも多感なる公は其の境遇に感觸せられ、遂に公義の重きを捨てゝ一身の危きを憂へたるに非ざる乎。吾人は公の如き詩人に負はしむるに是の如き大責任を以てしたる宇多帝の所謂『扳攀』を多く賞賛することと能はざる也。而して吾人は公が太政大臣の推擧を受けざりし一事に於て殊に是の恨を深うす。

菅公右大臣に任ぜられたる翌年（昌泰三年）一月、天皇朱雀院に行幸し、密に先帝と謀り

えむとする先帝の宿志は公に於て或は與り知らずと謂はむか、然らば則ち公や先帝殊遇の本旨を解せざる昧者なりとの誹誣を如何にして避け得べき乎。況や今にして是の如く言ひ得べくむば公が從來の進退は、殆ど無意義に歸すべきをや。公の賢明にして、何ぞ先帝の心事を了せざるの理あらむや。帝が如何なる憤懣を以て阿衡詔敕の改作を命じ給ひし乎。何故に基經の薨去を待ちて公を儒臣より拔き給ひし乎。何故に基經時平の女に子無きに乘じて俄に醍醐を太子に立て給ひし乎、而して其時何故に藤原氏には諮詢せずして公一人に謀り給ひし乎。何故に帝は是の憤懣と希望とを懷いて早く位を新帝に讓り給ひし乎、而して何故に時平、良相を差措いて特に公に託するに後事を以てし給ひし乎。良しや宇多帝にして明に是事を言はざるも、公の賢明にして安ぞ這般の消息を悟らざるの理あらむや。夫れ悟て而して尙ほ且何故に右大臣の職を辭したる乎。藤原氏を抑ゆる者は、藤原氏と同等以上の官位を擁する者ならざるべからざるや勿論也。公にして若し先帝の本旨を體認し、今上委託の大命に背かざらむと欲せば、安ぞ一身の危害の故を以て是の重大の事局を逃避すべけむや。右大臣の辭退にして果して公の

亦復得ㇾ從ニ望於衆庶一、不ㇾ堪ニ懇欵屏營之至一、上表以聞、臣道眞誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言。（菅家文草巻十）

次表三表共に同一の意を反覆して切に職を罷められむことを懇願せり。第三表の中に曰く

臣地望荒麁、售以ニ箕裘之遺業一、天資淺薄、飾以ニ螢雪之朱光一、不ㇾ圖太上天皇拔ニ於南海前吏一、聖主陛下不ㇾ棄ニ於東宮舊臣一、吹ニ毛之疵一、逐ニ榮華一以鋒起、鎖ㇾ骨之毀隨ニ爵祿一以荐臻、嗟虞樞衣不ㇾ遑、星霜僅移ニ一十一、潤屋無ㇾ限、封戸忽滿ニ二千一、臣自知ニ其過差一、人孰怨ニ彼盈溢一、顚覆急ニ於流電一、傾頹應ニ於蹤機一而已。（菅家文草巻十）

『人心已不ニ縱容一、鬼瞰必加ニ睚眦一』と云ひ『人孰怨ニ彼盈溢一、顚覆急ニ於流電一』と云ふ、公亦自ら自家の地位甚だ危殆に瀕せるを覺り、憂慮して措かざる者の如し。

吾人は是に於て、公の心事に關して一點の疑惑無き能はざる也。公が右大臣を辭する三通の上表は、決して尋常一樣の慣例的辭表とのみ見るべきに非ず、公の衷心より起りたる決心なること寧ろ明なりとす。果して然らば、公や先帝の宿志を遺却して自家の安逸を是れ求めたるの批難を免れ得べき乎。藤原氏の暴横を抑

經の在らざるを異なりとすべきのみ。

菅公と藤原氏との關係は實に是の如くなりき。而して是のごとき關係の下に宇多は位を幼冲の醍醐に讓れり。而して醍醐に讓りたるは、來るべき藤原氏の跋扈を未然に防遏せむが爲なりき。宇多は是の目的の爲に、新帝をして公に信任せしむるの必要なるを認め、所謂『寬平遺誡』を書して公の重ずべき所以を懇示せり。冊立の功を以て公一人に歸したるが如き、明かに宇多の用意を見るべき也。

（前略）右大將菅原朝臣、是鴻儒也、又深知政事、朕選爲博士、多受諫正、仍不次登用、以答其功、加以朕前年立東宮之日、只與菅原朝臣一人論定此事、其時無其相議者一人、

醍醐即位の年（昌泰二年）時平左大臣となり、公右大臣に任ぜらる。素より宇多上皇の推薦に基けるなるべし。公三度び上表して是を辭すれども聽されず。其の初表の文に曰く、

臣道眞言、伏奉今月十四日詔旨、以臣任右大臣、仰戴天慈、不知所措（中略）謝臣地非貴種、家是儒林、偏因太上皇往年拔擢之恩、自至諸公卿今日昇進之次、無寢無食、以思以慮、人心已不縱容、鬼畏必加睚眦、伏願陛下高廻聖鑑、早罷臣官、非唯不奪志於匹夫、

遇を憐みき(保則傳)。畢竟藤原氏の爲に謀るに、英才保則の如きもの、授くるに高官を以てす可らず、功ありと雖も賞すべからざる也。橘廣相が阿衡問題の爲に迫害せられたるも、前に言へる如く藤原氏が同族以外に權勢を附與せざらむが爲也。是の如き政治的嫉妬は後代まで繼續せり。師尹の源高明を除き、兼通の中書王を退けしは皆是の類也。蓋し藤原氏は、臺閣の權柄を以て自家の世襲財産の如く思惟し、他族の是を得たるもの、若しくは得むとするものを排斥し迫害することを以て、正當防衛の如く信ぜしならむ。

菅公は是の如き事情の下に宇多帝の殊寵を受け、而して方に藤原氏の正嫡たる時平と並行して天下の大政に參與せむとする也。否寧ろ藤原氏を超駕して獨り冊立の帷籌に參畫し、曾て基經が光孝、宇多二帝に施したるもの、今は公却て是を醍醐に行ひたるの觀あり。藤原氏たるもの如何ぞ晏然として傍觀するを得むや。幸にして時平年尚弱く、自餘の碌々たるもの能く爲す無しと雖も、而かも時平にして年齡漸く加はり、能く父祖の積勢と自家の歷史とを自覺し初めむ乎、公の位地や果して依然たるを得べきか。畢竟公の地位は、安仁、保則、廣相の地位也。唯良房、基

たる事等は、前章に略々是れを說けり。即ち文德、淸和、陽成の三帝にありては、外戚の威重あり、光孝、宇多二帝にありては擁立の恩誼あり、藤原氏は是に據りて動かすべからざる勢力を扶植したりし也。而して是れをしも尙ほ足れりとせず、他方に於ては、同族以外の人材にして、他日自家の專橫の障害なるべき者は、凡て是を抑制迫害し、以て將來の憂患を未萌に防がむことを力めたり。安部、安仁の如き、藤原保則の如き、橘廣相の如き、何れも是の例に非ざるは無し。安仁は文德天皇に仕へ、良房の太政大臣攝政たりし時、右大將たり、氣宇寬弘、政務の才を以て著はれ、時流望を屬す。菅て國司となりし時、令名到る處に高し、嵯峨天皇菅て吏才を論じて、安仁を第一と稱し給へりと云ふ。是の如き人物は良房等の最も好まざる所なりし也。保則は藤原氏なりと雖も、旁系に屬して基經等と近らず。是を以て其人物材幹當代の一人なりしにも拘らず、身を終るまで志を得ざりき。出羽秋田大に亂るや、基經特に保則に懇請して鎭撫の任に當らしむ。保則秋田に赴き、一兵を勞せずして大寇を平げ、勳功赫々として京師に還る。時人皆以爲らく、朝廷必ず高官を以て殊功に酬ふるならむと。然るに基經顧みず、是を以て上下其の賞罰を譏り、保則の不

無き新帝を立て、時平等の尚ほ未だ成熟せざるに乘じて、其の宿志を果さしめむとの叡旨ならむ。而して新帝年僅に十三、素より是の如き大計を了し給ふべきに非ず、專ら補弼の任に當れるものは即ち菅公なりき。宇多帝讓位後の公の責任や重大、地位や危殆なりと謂ふべし。

若し夫れ公と宇多帝との間に如何の成約ありしや、或は暗依默契に過ぎざりし乎、今日に於て確知するに由無し。然りと雖も、公の地位より察するも、公は實に帝の志を繼紹すべき人たるなり。況や公の事蹟に就いて仔細に考ふれば、單に暗依默契とのみ見るべからざるものあるをや。

四

公の責任の重大なる事は略々是を言へり。唯公の地位の危殆なる事に就いては、少しく藤原氏と公との關係を一言せざるべからず。

藤原氏が冬嗣以來外戚政略を以て皇位を籠蓋し、以て權勢の地歩を確立したる事、並に是の政略の實行し得べからざる場合には、則ち代ふるに擁立政略を以てし

し藤原氏の反抗是間に生ぜむことを恐れたればなるべし。帝寛平遺誡中に是の時の事情を述べて曰く、

至二于今年一、告二菅原朝臣一、以二朕志必可一レ果之狀一、菅原朝臣更無レ所レ申、事々奉行、至二于七月一可一レ行之儀人口紛々、殆至二於欲一レ延二引其事一、菅原朝臣申云、大事不二再擧一事留則變生云々

是に依て見れば、禪位の事定まりし後も人口紛々として爲に一時中止せむとせられたり。然るに菅公獨り帝に勸めて斷行するを得たりしが如し。所謂る人口の紛々たるもの、其の何事なりしかは、知るべからずと雖も、或は當時已に藤原氏の間に異議を挾むものありしならむか。是の如きは藤原氏の側より見て隨分有り得べき事なれば也。菅公帝の志を體認して是の間に周旋したる事も亦疑ふべからざる事實ならむ。若し夫れ宇多帝が斯かる大計畫を立て給ひながら、何故に菅公と共に躬ら其局に當り給はざりしや。是れ他無し、帝の藤原氏に於けるや、擁立の恩あり、信賴の誓あり、基經死すと雖も、子弟一族皆存す、帝獨り是の恩誓を捨てゝ其の勢力を打擊するに忍び給はざりしならむ。是を以て、藤原氏と何等特殊の關係

歩を進めつゝあるを見る。基經の薨ずるや、直に菅公を樞要の職に擧げ、爾來時平に對して常に多く下らざる地位を保たしめたり。時平參議たりし時、菅公藏人頭たり。時平中納言右大將たれば、菅公は參議式部大輔より幾もなく中納言となり、時平大納言たれば、菅公權大納言たり。政治上に相角逐するの狀を見る。寬平五年敦仁親王を立て皇太子となすに當りてや、帝は獨り公に謀りたるのみ、一も藤原氏の族に諮詢する所無かりき。是時太子僅に八歲。是間の事情を察するに、帝の志亦自ら明なるが如し。當時基經の女溫子入りて女御となり、時平の女褒子亦侍たり、而して何れも子なし。敦仁は藤原高藤の女胤子の出なりと雖ども、高藤は藤原氏の本系に屬するものに非ず。想ふに帝は溫子、褒子の子無きに乘じ、特に幼冲の敦仁を太子に立てたるに非ざる乎。是の謀議に與りしは菅公のみなりし事、並に立太子と、同時に菅公が俄に春宮亮となりて內育の職に當りし事は、何れも是間の消息を彷彿たらしむるものにあらずや。帝が敦仁を立てゝ藤原氏の跋扈を抑ゑむとしたる事は爭ふべからざる也。寬平七年、公が帝の遜退を力爭せしは、事由明ならずと雖、後二年帝が再び讓位の意を告げし時、斷行の利あるを勸めしは、蓋

沙金を送りたるものは即ち帝なりしと謂ふ。是事にして信ならば、殊恩日に深きを見るべし。

寛平三年より九年に到るまでの公の經歷は、位階次を越て進めるのみ、他奇の記すべきもの無かりき。寛平遺誡に『多受諫正』の文字あるを以て見れば、是間諷諫献替する所少からざりしなるべし。放鷹の御遊ありし時『今年鳥獣何の罪ありて此を獵り給ふ』(續古事談)と諫めたるがごときは、蓋し其の一例ならむ

寛平九年に到りて、政治界の風雲漸く動き初めたり。公の生涯に於ける一大轉機漸く近からむとす。是年六月、公權大納言に任じ右近衛大將を兼ね、氏の長者となる。幾も無く帝公に謀りて俄に位を太子敦仁に讓る。太子年僅に十三、帝の壽亦僅に三十二。禪位に際し外議紛々として止まず、公帝に勸めて曰く、大事再び擧ぐべからず、躊躇せば變あらむと、這般の事蹟傳ふる所何の消息ぞ。

二

寛平三年以降の宇多帝の事蹟を安ずるに、帝が藤原氏を抑ゆるの計畫着々其の

更告不朝之問、終停入唐之人、中瓘雖區々之旅僧、爲聖朝盡其誠、代馬越鳥豈非習性、臣等伏檢舊記、度々使等、或有渡海不堪命者、或有遭賊終亡身者、唯未見至唐、難有阻飢寒之悲、如中瓘所申報、未然之事推而可知、臣等伏願以中瓘錄記之狀、遍下公卿博士、詳被定其可否、國之大事、不獨爲身、且陳欵誠、伏請處分、謹言。

寛平六年九月十四日大使參議勘解由次官從四位下兼守左大辨行式部權大輔春宮亮菅原朝臣某

（菅家文草巻九）

是の間官位の進むと共に帝の恩寵益々加はりし者の如し。寛平六年九月菅家の門生吉祥院に集まりて公が五十歳の賀會を開きしことあり。時に一老翁の足に草鞋を穿ちたるもの、飄然として至り、文章一通、砂金一包を堂前に置きて去る。其の文に曰く、

傳聞、菅家門客、共賀知命之年、弟子雖削跡人間、無名世上、尙數記淳敎之風、多改憃昧之過、古人有言、無德不報、無言不酬、深感彼義、欲罷不能、福田地捨此沙金、金以表中誠之不輕、沙以祈上壽之無涯、莫疑其人、可求其志、遠居北闕之以北、遙增南向之和南

（北野縁起上）

臣に上るべき登龍門の觀ありき。公の前に是の職に在りしものは藤原時平なり、時平參議に上りたるに際して、公其の後を享けたる也。

藏人頭の任命に接するや、公自らも其の異數なるに驚喜せるものゝごとし。『奉昨日任藏人頭之敕旨、夢中之想、經曉猶迷』と云へるもの、其の情を察すべし(本朝文粹卷五請罷藏人頭狀)。越て一月、再び式部少輔に任ぜられ、翌月左中辨を兼任し、禁色の衣服を許さる。翌年(寬平四年)一月、從四位下に叙せられ、同十二月左京大夫を兼ぬ。公は是間に於て學者としての一大事業を成せり類聚國史二百卷、目錄二卷、帝王系圖三卷の著述、是れ也。翌寬平五年二月參議に任じ、式部大輔と左大辨とを兼ぬ。次で又勘解由長官と春宮亮とを兼ね、女衍子を入れて女御と爲す。是間官位昇進の速なること、遙に儕輩を凌げり。翌年(寬平六年)八月遣唐大使を命ぜらる。公上表して遣唐大使廢止の議を建つ、許さる。是れ當時の歷史に於て記憶すべき一事項なるを以て、特に建議の案文を左に揭ぐ。

請令諸公卿議定遣唐使進止狀

右臣某謹案、在唐僧中瓘、去年三月附商客王訥等、所到之錄記、大唐凋弊載之具矣、

者は、藤原良世、及び時平あるのみ。良世は凡器なり、憂ふるに足らず。時平は基經の長子にして才氣ありと雖も、年尚ほ二十一、官は參議に過ぎず。實に是れ藤原氏の積勢を削るに於て乘ずべきの好機會に非ずや。基經薨後二箇月にして、菅公の擢用ありしもの、明に宇多帝の志を見るべき也。

遮莫、菅公果して是の如き寄託を全ふし得べき人なりし乎。帝の抜擢果して其人を得たりし乎。抑々詩人たる菅公が、政治家として如何の技倆を揮ひたる乎。乞ふ徐ろに是を說かむ。

第七章　政治上の菅公、其三

（菅公の榮達及藤原氏との關係）

一

藏人頭は菅公にとりて實に異數の叙任なりき。藏人所は嵯峨帝の時の創設に係り、上下の間に立ちて機密の文書を司る所にして、其の勢力太だ小ならず。藤原冬嗣初めて是藏人頭に任じてより、歷代概ね藤原氏の占むる所にして、將來參議大

位爲師範之儀曷若廣相□信有講授之勞大府大□唯爲大臣之賞曷若廣相家中有皇子之親大府攝政爲家宰之臣曷若廣相承恩有近習之故縱令聖主被逼外議豈不相近擬其內情未必爲嫌然則廣相逾構陰怨於大府聖主空飾外形於大府計之甚無謂也。云々。

是の文廣相を回護すること到れり。歷史家の中には基經是に感じて廣相の迫害を緩めたりと說く者あれど、恐らくは實を得たる說には非じ。廣相と帝との親近を叙し、大府（基經）臨時の績、廣相積日の功に曷若（イヅレ）ぞと謂ふが如き、寧ろ基經をして愈々廣相の迫害せざるべからざるを悟らしめしならむ。唯宇多帝のみ公が是文を讀みて潛に悅び給ひたるべき也。

其の原因は何れにもせよ、菅公は宇多帝の拔擢を被り、前讃岐守より一躍して藏人頭に任ぜられたり。而して是の拔擢は、基經の薨後二箇月にありしは、最も記憶すべき事なりとす。蓋し帝如何に藤原氏を抑えむと欲し給ふも、基經關白の職に在る間は、倒底手を下すに由無かるべし。恰も好し、基經は阿衡問題ありてより後二年、寬平三年一月に至りて薨ぜり。而して其の後を承けて藤原氏の中心となる

の爲に辯ずる所は、橘氏と藤原氏及び帝室との關係を知るべきものあるを以て、特に左に掲ぐ。

廣相爲當代所立者、大功一、至親三、何以謂之、閭里言曰、先皇欲立今上爲太子者數、而大府不務奉行、其間小事人皆聞之、廣相內結婚姻、外託師傅、萬方祈請、無不盡誠、斯事雖出于街談巷語、或萬分之可採用矣、詩曰無德不酬、無言不報、小言小德、猶可酬報、況爲聖主致精誠者乎、是廣相所立大功也、廣相外孫皇子有二人、今上龍潛之日、相視襄近、父子天愛也、豈無顧念乎、既愛其孫、故其祖之不可惡者可知、其至親一也、廣相女子者、今上在邸而所娶、後四年、乃爲天子、雖可不專後庭之夜、何以乍割前日之恩、既親其子、故其父之不可疎者可知、其至親二也、尙侍殿下者、今上之所母事其勞之爲重、雖中宮而不得、其功之爲深、雖大府而不得、廣相始以女子附屬尙侍、轉自尙侍奉進今上、婦人以仁爲性、不必思其大義、始屬之志寧不哀憐、故尙侍爲廣相之意今可知、其至親三也、又聞先皇晏駕之朝、今上承嗣之夕、功成漏刻、議定須臾、因緣貴府之特重、無有傍人之出言、宜哉先皇之寄顧託也、夫自非聖上不能大知、故拘常品之人亦有常識而已、大府臨時爲社稷之器、曷若廣相積日有祈禱之功、大府居

に非ず。想ふに帝は其の股肱の臣を撰拔せむが爲に苦心せられたるならむ。是時に當りて帝の聖鑑に入りたるものを菅公と爲す。

五

寬平二年二月、菅公任滿ちて讃岐より歸る。翌年三月、藏人頭に任ぜらるゝまでは、閑地に居りしが如し。公が是の時の文に、『予罷レ秩歸レ京、已爲二閑客一、玄談之外無二物形言一』と云へるを以て證とすべし（菅家文草卷四逍遙篇序）。公が宇多帝の拔擢を蒙りしは、帝が平生公の人物を欽せるに依るなるべしと雖も、其の直接の因由は、阿衡問題に關聯せるものゝ如し。是より先き同問題の京師に盛なるや、公遙に書を基經に寄せ、廣相の爲に辯じ、且藤原氏の爲に說く所あり。其文初めに『作レ文者、不二必取一經史之全說一、雖二邇近取一レ之、或斷レ章爲レ義』と說き、引用せる文字の典故必ずしも直に擬解すべからざるを論じ、次に廣相と宇多帝との關係に及び、其の『大功一、至親三』を擧げ、藤原氏の是と爭ふの不可なるを論ぜり。文辭婉曲周匝、理を爭はずして情を責め、靄然として人を動かすものあり。文章として見るも菅公集中の白眉に加ふべし。其の廣相

もすべからざる也。遂に詔敕を改作して『廣相草する所朕の意に非ず』と言ひ給ふ是れ即ち基經に對する陳謝の辭なりし也。萬乘の天子にして臣下に迫られて其の詔敕を改作し、其の意の誤れるを陳謝し給ふ、帝の衷情果して如何ぞや。帝が當時の日記に『濁世の事此の如し』と書し給ふ、御憤の程深く推察し奉るべきに非ずや。

宇多帝は王朝の英主也、剛邁果斷にして、襟度曠達、勵精治を圖り、皇權の振張を以て志と爲し給へり。斯る英明の天子にして、即位早々是の藤原氏の暴慢に遭ひて深く屈辱の憤を懷かせ給ふ、如何ぞ爲す所なくして已み給ふべけむや。潛に顧ふに、阿衡問題の結果は、帝をして切に藤原氏の跋扈を憤らしめたると同時に、是を抑制するの御決心を催し奉りたるならむ。帝が一代の大計畫は實に是の間に醞釀せられたるに非ざる無きを得むや。帝の英邁の稟資は、決して手を拱して權臣の跳梁を默過し給ふべきに非ざる也。然れども、帝は何人と共に是の志を成すべき乎。源融、源多は皇家の出なりと雖も、柔弱なる紈袴子のみ、藤原氏の顧使に是れ甘じて他意無し。而して滿庭の羣臣は皆藤原氏に謳歌して是に赴かざるを恥づ。橘廣相は帝の姻戚にして信任すべしと雖も、阿衡問題の故を以て俄に登庸すべき

る。唯單に帝の恩詔によりて罪を免るゝを得たり。是に於て基經等の意志は悉く貫徹し、藤原氏の力を以て天下何事の爲し能はざる者無きを上下に示したり。

四

藤原氏の得意に引き換へて、思ひ遣り奉るべきは、宇多天皇の御心事也。一天萬乘の天子にして、臣下に對し『小子』と稱し給ふさへ分外の事なるに、基經何者ぞ、策立の恩を賣りて暴慢無禮能く是の如くならむとは。阿衡の典故俄に斷ずべからず、廣相の言ふ所豈正理無からむや、唯上下皆藤原氏の權勢を迎合し、理非正邪其處を換ゆ、眞に浩嘆すべき也。良しや阿衡の典故實に職掌無しとするも、文を作るもの必ずしも經史の全說に據るに非ず、何ぞ字義に是れ拘泥するを須ひむや。況むや天子數〻優詔慰諭して具に聖意の存する所を告げ給ふ。基經たる者宜しく感泣して命を拜すべき也、然るに何事ぞ飽迄文義を固守して、是を承けず、天下の政務を拋却して一身の私心を貫かむとす。不忠不義言語に絕せりと謂ふべし。唯如何にせむ、藤原氏は積世の勢威を挾み、策立の大勳を負ふ、帝賢明なりと雖も亦奈何と

にと云ふに、廣相は宇多帝と姻戚の關係あり、即ち其の女は即位に先だつ四年、帝に嫁して既に二子を生めるを以て、廣相の今の位置は、外舅に均し。且帝の策立の際に於ても、百方祈請して誠を盡ざゝる無し。是を以て即位の後は深く帝の親任を被り、常に内庭に出入して文書を司れり。是れ藤原氏の最も嫉妬に堪えざる所ならずむばあらず。他日或は橘の一家、藤原氏に代て帝寵を專にする時無きを保せずとは、恐らくは藤原氏の黨與の杞憂のみに非りしならむ。阿衡問題は恰も廣相を陷れ得べき好機會を與へたり。是れ彼等が朋黨相比周して、阿衡無職掌を咆哮し、遂に帝をして詔敕變更の已むを得ざるに至らしめたる所以に非ずや（後に橘廣相と阿衡問題に關する菅公の書を參照せよ）。

以上の二者は、藤原氏が阿衡問題を提起して平地に波瀾を起したる魂膽也。而して是の魂膽は首尾能く成功せり。六月に到りて議は遂に詔敕改作に決し、重ねて關白の詔を基經に賜ふ。其中に曰く、先に廣相草する所の詔は全く朕が意を失へり、朕素より舊に仍て關白の職を公に委ね、垂拱成を仰がむと欲すと。阿衡問題は是に全く決定し、起草者たる廣相は、詔敕僞造の罪科に擬せられて其職を黜けら

藤原氏の勢權を維持し、擴張する上に於て必要なる事なりし也。

夫れ宇多天皇は、藤原氏と何等近親の緣故あるに非ず、策立の功は素より是れありと雖も、藤原氏の帝に對する關係は、最早や外戚時代の如くならず、況むや帝は賢明に在しませば、將來の事未だ俄に知るべからざる也。是時に當りて藤原氏の爲に謀るものは、新たに帝に對して一族の勢力を示し、以て確乎動かすべからざる地歩を作るの策を講ずるを利とすべき也。阿衡問題は、恰も是の計畫を實行するに好機會を與へたり。基經の頑然として動かず、名を阿衡職掌無きに藉りて飽迄帝の意に從はざるは、心素より攝政辭退を希ふものに非ず、唯帝が到底己れの職を免ずる能はざるを知るが故に、遂に詔敕變更の擧に出でざるべからざるを豫期したればなり。詔敕の變更は、一面に於て朝廷の事藤原氏に依るに非ざれば爲し能ざることを示し、他面に於ては藤原氏の勢力詔敕をだも動かし得る事を證する也。是の如くにして益々藤原氏の位地を鞏固にするは、必ずや基經等の魂膽なりし也。

而して詔敕變更に伴へる直接の目的は、先の詔敕を起草せる者、即ち橘廣相の處分也。是れ亦藤原氏の黨與が是の問題を惹起したる一主因なりき。其の故如何

く、悉く皆阿衡職掌無きを答申す、廣相獨り陳辨甚だ力めしが省みられず。基經再び上奏して曰く、阿衡既に職掌無きに決せば、攝政關白の職は一日も置くべからず。宜しく別に執奏の官を設け、天皇自ら萬機を總攬し給ふべしと。

阿衡問題は事體甚だ重大となれり。天皇數々使を基經の第に遣はし、慰諭一再に及べども、基經は固く聽かず。曰く、綸言汗の如し、臣已に無職の閑人たりと。事四月に起りて六月に到るも決せず、上下内外の政務悉く停滯し、訴訟省みられず、官奏處分せられず、地方の有司空しく愁訴すれども、是を執達するもの無し。廣相は謹愼して朝に出でず、藤原氏の一族は言ふまでも無く、公卿皆病と稱して朝せず。政務の機關全く廢止せり。

阿衡問題は何が故に是の如く容易ならざる結果を生ずるに到りし乎。聖意の存する所最も明かなるにも拘らず、基經は何が故に特に文字の形式に拘泥して爾かく帝を脅迫せむとする乎。其の原因として見るべきもの凡そ二つあり。是の問題を好機とし、新帝をして藤原氏の大勢力を認識せしめむとするは其の一也。詔勅の起草者たる左大辨橘廣相を排斥せむとするは其の二也。而して是二者は

其攝籙、朕之冲眇、重以孤煢、其萬機巨細、百官總己、皆關白於太政大臣、然後奏下、一如舊事、主者施行

文は時の儒臣にして左大辨たる橘廣相（ヒロミ）の作る所に係る。基經辭して受けず。蓋し官職の陞進に際し、再三推讓の後初めて是を受くるは、當時の慣例なりし也。基經も亦是の例に遵ひたるのみ。帝即ち廣相をして重ねて勅答を作らしむ。其中に謂へるあり、卿秉鈞奕世、佐命受遺、所謂社稷之臣、非朕之臣、宜以阿衡之任爲卿之任、と。文章博士藤原佐世、是の敕答を見て奇貨置くべしと爲し、基經に申して曰く、阿衡は空位にして職掌無し、是れ天子閣下をして攝政の職を辭せしむるなりと。基經是の言を聽き、憤然として曰く、果して然る乎、然らば則ち吾は一閑人のみと。命じて廐馬を放たしめ、奏して曰く、臣聞く阿衡には職掌無し、其の位の崇高なる恐らくは臣の堪ゆる所に非ざらむ。然れども無職の地に居るは臣の素志、乞ふ攝政關白を辭せむと。門を杜ぢて政を視ず、萬機壅滯せり。帝大に驚き、優詔して慰諭し給へども聞かず。左大臣源融、當時の博士に問ふに阿衡の典故を以てし、其の職掌の有無を考へしむ。博士等多く權勢に阿附し、敢て理に據りて廣相を助くる者な

也。宇多天皇は王朝の賢主、尚ほ且つ是事あり、當時基經を重ぜられたる、知るべき也。基經にとりて、是の勅書は即ち帝の言質なり。是の言質ありて何事をか爲し得べからざらむ。彼の驕慢漸く加はるは勢已むを得ざる也。而して帝は基經に於て如何なる驕慢あるも是を忍び給はざるべからず、宇多帝の境遇も亦憐むべからずや。

賢明なる帝は即位の喜び去ると共に、漸く是の境遇を自覺し初められたり。而して藤原氏の跋扈に對して憤懣を抱き初められたり。而して事の動因となれるものを夫の阿衡問題と爲す。

三

宇多天皇即位の後四日、基經をして關白たらしむ。其の權能良房の時に異ならずと雖も、關白の名是より始まる。其の詔書に曰く、

詔、朕以二涼德一奉二茲乾符一、臨二鳳扆一而如レ履二薄氷一、撫二龍軒一而若レ涉二淵水一、自レ非二太政大臣之保護扶持一、何得レ恢二寶命於黃圖一、正二璇璣於紫極一哉、嗚呼三代攝レ政、一心輸レ忠、先帝聖命依

經に諮稟して、後に奏せしめらるる等、藤原氏の權勢毫も外戚時代に異なるもの無し。基經の滿足想ふべき也。

然れども光孝天皇の後を如何にすべき。天皇位に即き給ひし時、年五十五、外戚政略を施さむには御年既に老いられたり。餘す所は例の擁立策あるのみ。是に於て基經たるもの再び百川の遺蹤を履みて桓武擁立の故事を以て光孝に擬せざるべからず。是に於て光孝病篤き時、帝の意を迎へて其の七子定省朝臣を立てむことを請ふ。帝大に悦ばせ給ひ、急に定省を召し、左に基經の手を執り、右に定省の手を執り、遺詔して曰く、大臣の恩誠に深し、汝能く是を服膺して其の意に戻る勿れと。定省立て宇多天皇となるや、深く基經が二代策立の偉勳を思はせられ、信賴最も篤し。基經たるもの、得意想ふべき也。即位の式畢りて基經に下し給へる勅書は、實に藤原氏の權力をして九鼎大呂よりも重からしめたる者也。

今日之事、平安令果、歡喜無涯、先有遺託之命、況余已爲孤子、而思隨敎之命耳、如此之言、若有辭退、小子不攝世間之政、拋小君之號、逃隱山林、是所念也。

萬乘の天子、臣下に對して是の如き遜退の言ある、前後の史上曾て其例を見ざる所

の實權は言ふまでもなく、擧げて基經の掌中にあり。然るに藤原氏にとりて最も痛心すべき一事件こそ起りたれ。陽成天皇の遜位を促さゞるべからざる事情ありし事、是れ也。

陽成天皇は狂暴に御在して、其の位に勝えられずと認められる。或は藤原氏の爲に謀るも、其の家の出たる故を以て是の如き天子を奉戴するは、其の永遠の利益に非ずと認められしならむ。兎に角基經は廢立を斷行せざるべからざる場合となりぬ。然れども帝の遜位を促せば、藤原氏の外戚政略は茲に其の終を告げざるを得ず。是に於て藤原氏たるもの、自家勢力維持の上よりして預め其の善後策を樹てざるべからず。基經が數多の皇族親王の中に於て、仁明天皇の皇子時康を拔き、以て皇位に擬したるものは、蓋し深く慮る所ありて也。即ち新天子をして篤く策立の德を思はしめ、己れ外に擁戴の威權を挾で上下に臨む、陽成廢すと雖も必ずしも恐るゝに足らざる也。是れ既に往昔百川が光仁、桓武の間に於て既に遺蹤を殘せる所、基經潛に是を學びしに非ざる乎。果せる哉、事凡て其の期待せる如くなりき。時康立て光孝天皇となるや、基經に委ぬるに萬機を以てし、百官の奏事先づ基

月の惟仁を冊立して太子とせり。是を清和天皇と爲す。

藤原氏の外戚たること既に二代、威權上下を壓す。清和天皇の立ち給ふ時年僅に九歳、外祖良房太政大臣を以て百政を攝行せり。藤原氏の攝政茲に始まる。良房が其の女たる清和の母后の前に詠じたる『年經れは齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし』てふ歌は實に其の滿盛の榮華と得意とを誇揚したる也。良房子無し、即ち其の兄の子基經を養うて嗣となし、又基經の妹高子を清和天皇に納れて更に外戚政略の繼續を計れり。高子の生める皇子を貞明と云ふ、清和天皇の後を繼ぎて帝位に即く、是を陽成天皇と爲す。文德以來藤原の外戚たること茲に三代而して良房に代りて是の三代外戚の積勢を負ひ、九歳幼冲の天子を輔佐し奉れるものは、即ち基經也。

二

陽成天皇位に即くや、太政大臣にして攝政たる基經の左右に大臣たるものは、源融、源多の二人也。共に柔懦なる紈袴子にして、所謂る伴食宰相に過ぎざるのみ、其

に立て給へり。藤原氏は失望せり、而して暫に事の乘ずべきを窺へり。太子亦其の位地の危殆を察して位を遜るゝに意あり。承和七年に及びて、藤原氏の以て乘ずべき機は遂に來れり。即ち伴健岑（コミネ）、橘逸勢等が、太子を奉じて亂を東國に起さむとせし事、是れ也。藤原氏の一族は手を額にして相慶せり。健岑、逸勢等は、直に捕縛せられ、太子は其の位を黜けられぬ。來るべき新太子は言ふまでも無く道康也。仁明天皇崩じて道康立つ是を文德天皇と爲す。

藤原氏の外戚政略は、文德天皇の卽位と共に、全く成就せられたり。是に於て冬嗣の子にして帝母の兄なる良房は、外舅の重望を負ひて右大臣より太政大臣と爲れり。時の左大臣は源信にして、右大臣は藤原良相也。良相は良房の弟、源信は嵯峨帝の皇子なれども、溫柔にして異を挾まざる人也。大政の斗柄一に良房の掌握する所となれり。藤原氏にとりて次に來るべき計畫は、文德天皇の太子をして亦自家の出たらしむるにあり。良房は是の目的の爲に、其の女明子を後宮に入れ、嘉祥三年到にりて惟仁親王を生めり、然れども帝既に紀名虎の女に生ましめたる惟喬親王あり、夙に賢明を以て名あり。然るに藤原氏は帝の意に反し、生後僅に九箇

ざるべからず。當時藤原氏は仲成の餘弊を受けて其の勢力に一頓挫を來せり。多嗣深く是を憂へ、百方力を盡して一族の興隆を計畫せり。或は施藥院を設けて同族の給せざるものを救濟し、或は勸學院を起して其の子弟を敎育し、或は南都興福寺内に南圓堂を建てゝ一族の幸運を祈願し、大に盡す所あり。加ふるに爲人器宇曠大材識一世に高く、時人皆是を仰げり。嵯峨天皇亦深く多嗣を信任し、官左大臣に上れり。實に多嗣の如き人物ありて其の根底を築きたるは、藤原氏にとりて無上の福祉なりと謂ふべし。然れども多嗣は、是の如き方法の外に藤原氏の大興を庶幾すべき一大計畫を運らせり。何ぞや、外戚政畧是れ也。是れ實に藤原氏の勢力に永遠不拔の基礎を置きたるものなりき。多嗣は是の目的の爲に其女順子を仁明天皇の後宮に入れたり、然れども其の計畫の實現せられたるを見るに及ばずして薨じたりき。

多嗣の外戚政略は遂に成就せられたり。順子は多嗣の薨後幾も無く皇子道康親王を生めり。然れども仁明天皇は兄弟遜位の先例に遵ひ、皇子の數多きにも拘らず、又藤原氏の出なる道康あるにも拘らず、其の兄なる淳和上皇の子、恒貞を太子

眞備深く藤原氏の跋扈を憤慨すれども、又如何ともする能はず、即ち凱切なる辭表を奉りて大に時事を諷したりき。光仁天皇立太子の事あらむとするや、百川衆望の歸する所と稱して山部親王を立てむことを乞ふ。天皇許さず。百川聲を勵まして曰く、敢て聖斷を聽かずむば、死すとも動かじと。殿前に立つこと四十餘日、天皇已むを得ず是を許し給へり。桓武天皇は是の如くにして皇位に上るを得給ひき。嗚呼、百川の爲せる所に較ぶれば、良房、基經の如きは寧ろ言ふに足らざるのみ。藤原氏一族の勢力は、是の如くにして居然として動かすべからざるものとなれり。

藤原氏の四家に就いて是を觀れば、各〻盛衰あり。京家は始めより大に興らず南家は仲麻呂に衰へ、式家は百川によりて一時大に盛なりしも仲成を出だしてより又振はず。北家は內麻呂の子冬嗣に到りて漸く興隆の氣運に向へり。弘仁、天長以後、藤原氏の勢力は冬嗣の一統に集まれりと雖も、而かも其の根抵は鎌足、不比等以來殊に百川の力によりて扶植せられたる也。其の因由する所實に悠遠なりと謂ふべし。

今貞觀、元慶、寬平に於ける基經の位置を解釋するに當りて、勢先づ冬嗣より說か

觀、元慶の際、跋扈を極めたる基經、並に其子時平等は北家の子孫なり。北家の大に起るは冬嗣に基せりと雖も、而かも藤原氏其物の政治上に權勢を扶植したるは、其の來るや頗る遠し。鎌足、不比等の事は是を言はざるも、皇室を動かすの備は、實に百川に初まる。百川は何人も知る如く、稱德天皇崩御の際、光仁天皇を擁立し奉りたる主謀者なり。而して亦光仁天皇を脅し奉りて桓武天皇を儲君に立て奉りたる發頭人也。二代の皇位實に百川の意に依りて定まる、藤原氏の勢力隱然として動かす可らざるものとなれる亦宜なりと謂ふべし。而して當時百川の意志に反對し、藤原氏の跋扈を妨げむとせしものは、儒臣より右大臣に上りたる吉備眞備なりき。稱德天皇の崩ずるや、眞備衆望の在る所を察して大市王を立てむと欲す、上下是に傾く。百川獨り是に反し、左大臣藤原永手、參議藤原宿奈麻呂、藤原繩麻呂、近衞大將藤原藏下麻呂等、同族の大官と結合して白壁王を立てむことを望む。而かも衆議大市王に決し、將に宣命を讀まむとす。百川等乃ち機に臨みて白壁王を立つるの宣命を作り、大市王の宣命と稱して群臣に示せり。光仁天皇は是の如き方法によりて百川等の擁立する所と爲り給へり、實に非道も極まれりと謂ふべし。

四十六歳の時なり。是れ菅公の政治上の生活の一轉機也。このときに當り、宇多天皇位にありて勵精治を施し、上は朝權を回復し、下は綱紀を張らむことを力む。菅公先づ帝の拔擢する所となり、京に還る翌年昇殿を許され、藏人頭に補せらる。是れより以來官位次を超て進み、帝の信任益々加はる。正に是れ池底に潛める蛟龍、一旦風雲に際會して天上に飛揚するの觀あり。今や愁緒の代りに歡樂あり、失望の代りに得意あり、公や又詩人たるの要なき也。是を以て讃州より歸りて凡そ十年の間、公の生涯は殆ど純然たる政治家の生活也。而して政治家としての公の生活を說くに當り、先づ當時藤原氏の政治上の位置と宇多天皇との關係を一言し、而して後帝が菅公に信賴したる因由を明にせざるべからず。

第六章　政治上の菅公、其二

(藤原氏の政治上の位置及び宇多天皇との關係)

一

歷史を讀める者の知る如く、當初藤原氏に南家、式家、京家、北家の四家ありき。貞

讃岐に於ける公の治蹟は、多く見るべきもの無かりしが如し。同僚公を稱して痴人と呼び、人民公を指して狂士と謂ひ、公亦『政嚴人不到』と云へるを見れば、保則の時代に比して多く威信を加へざるは明なり。蓋し公の如き人にして牧民の職に當り、衆望を得るは甚だ難事ならむ。況むや元慶以來地方の紀綱日に弛びて、盜賊連りに起り、官僚亦私曲を遂ぐるもの多し。保則は能く是の如き官民を御するの法を知れりき。其の部下官物を私するものあれば、直に是を譴責せず、陰に招ぎて温顔是を奬めて曰く、卿等薄給、國家の事に當る、給用恐らくは足らざるべし。余潜に是が計を爲すや久し、唯謹で官物を私する勿れ、他日卿等の功を擧げて必ず其の缺を補ふべしと。下僚慚愧して悦服せりと謂ふ。保則は是の法を以て下民に臨みしかば、國守となりて祖稅の返鈔卅四箇年を受け、調庸の反鈔十一箇年を受け、古來曾て見ざる好治蹟を顯はせりと云ふ(保則傳)。今菅公の爲人を考ふるに、其の政嚴正にして苟も假借せず、所謂る『政嚴人不到』とは恐らくは下民の悦服を言ひしものに非ざるべし。

公讃岐に赴きてより前後五年、任滿ちて京師に召還せらる。時に寛平二年、公が

多夜閑居

懷舊猶勝到老忘、多言且恐損中腸、交遊少白心如水　閑話令零鬢有霜、
不恨寒更三五去、無堪落淚百千行、相論前事故人在、只是當時我獨傷。

鏡

四十四年人、生涯未老年、我心無所忌、對鏡欲相親、半面分明見、
雙眉斗頓頻、此愁何以故、照得白毛新、自疑鏡浮翳、再三拭去塵、
塵消光更信、知不失其眞、未滅胸中火、空銜口上銀、意猶如少日、
只已非昔春、正五位雖貴、二千石雖珍、悔來手開匣、無故損精神。

公が當時の詩に於て、最も多く遭遇するは家を憶ふの情也。『生衣欲待家人著、』と云ひ、『兒病先悲爲遠吏』と云ひ、『燈前反覆家消息、爲客以來不安寢』と云ひ、『苦思洛下新年事、再到家門一夢中』と云ひ、『此間塵染斷、更懶問家情』と云へるもの、往々卒讀に忍びざるものあり。

四

ざる也。『空床夜々損顔容』と云ひ『其奈家君白髪新』と云ひ、『怪來日々形容變』と云ひ、『四十四年人、生涯未老身』、我心無所忌、對鏡欲相親、半面分明見、雙眉斗頓頻、此愁何似故、照得白毛新』と云へるもの、皆公が不時の老衰を嘆じたる言に非ざるは無し。然れども公の詩は是の間に於て漸く妙境に入れり。嗚呼、憂愁と白髪と詩賦と哀むべき好伴侶なる哉。左に公が當時の境遇と心情とを想ふべき五六の詩を掲載せむ。

春日獨遊二首

放衙一日惜殘春、水畔花前獨立身、唯有眤々東北望、同僚指目白癡人。
花凋鳥散冷春情、詩興催來試出行、昏夜不歸高嘯立、州民謂我一狂生。

以て吟哦に耽りたる狀を見るべし。

九日偶吟

客中三見菊花開、只有重陽每度來、今日低頭思昔日、紫宸殿下賜恩盃。

同諸小郎客中九日對菊書懷

菊爲無情籬下開、人因不樂海邊來、諸郎莫怪今朝事、口未吹花淚滿盃。

今讃岐に於ける公の行狀を察するに、官務を視るの外、主として讀書と詩賦とに耽り、時に佛典を誦するの外、他事無かりしが如し。書は春秋、老子、詩、書、易の諸經を初めとして、白氏文集、漢書等にして、官衙業終れば即ち誦讀を初め、深更に到るまで卷を釋かざることあり。詩は遣悶唯一の具にして、日夕感觸するところ、忽ち吟哦に上れり。公自ら前代の政治に比較して『自然政理雖レ無レ變、奔波之間我詠レ詩』と云ひ、『心在レ吟レ詩政不レ專』と云へるもの、如何に詩に耽りしかを證すべし。禮佛も亦詩賦に次て公の憂を托する所なりき。或は『天與レ人失、心與レ事違、非二佛力一不レ至』(管家文草卷四、蓮池篇)と云ひ、或は『歸依一萬三千佛、哀愍二十八萬人』(同上、悔會作)と云へり。蓋し一萬三千佛とは經中の諸佛を謂ひ、二十八萬人とは管內の人口を指せる也。旅館家居の狀は、『庚申夜感』最も明に是を言へり。其詩に曰く、

旅人每夜守二三戶一、況對二寒燈一不レ臥時、強勸微心雖レ未レ死、頻收落淚自爲レ悲、
舍低應レ道星穿レ壁、山近猶疑雪照レ帷、四五更來無二一事一、唉看兒童學レ吟詩」(管家文草卷三)

又以て身境の落寞を察すべきなり。人愁多ければ則ち老ゆ、管公亦老いざるを得

家書久絶吟詩咽、　世路多疑託夢占、　莫道此間無得意、　清風朗月入廬簾。（同上早秋夜詠）

又

涯分浮沈更問誰、　秋來晴倍客居悲、　老松窓下風涼處、　疎竹籬頭月落時、
不解彈琴兼飲酒、　唯堪讃佛且吟詩、　夜深山路樵歌罷、　殊恨隣鷄報曉遲（同上秋）

公の前に讃岐守たりしは藤原保則なり。保則は當代の君子にして、文武の効績甚だ多し。時人皆望を屬す。基經獨り保則を容れず、出羽の大亂を平げて歸京せる時も、一賞をだに加へざりき。保則時世の非を歎き、自ら乞うて讃岐守となる。讃岐の古老深く保則を德として、曰く、藤使君の在せる時、臥聽流るゝが如く、曉清く、春には春を行らず、春遍く達し、秋には秋を省みず、秋大に成れりと（菅家文章、卷三、路遇白頭翁）。公其の後を享け、深く保則の治蹟を德とせり。唯州內治まれりと雖も、公の胸裏の憂悶を如何ともすべからざなりき。

三

當時交通の便開けず、殊に四國は海を隔つるを以て、行程素より遲々たりしならむ。土佐日記によれば、紀貫之は十佐より京師に到るに殆ど百日を費せり。後年筑紫に赴ける時、『東行西行雲眇々、二月三月日遲々』と云へるもの亦此の行を言へるに似たり。九十春光中道に盡き、殘紅地に委して野草青し、公乃ち唱うて曰く、

春送客行客送春、傷懷四十二年人、思家淚落書齋舊、在路愁生野草新、
花爲隨時餘色盡、鳥如知意晚啼頻、風光今日東歸去、一兩心情且附陳

（同上中途送春）

宮中課題の作に較ぶれば、眞情楚々として人を動かす。是篇の如きは公が集中の絕唱に數ふべし。公が詩人の面目漸く現はれ來るを見る。蓋し公は少より京師に住し、未だ曾て遠く洛外に出でず、常に暖飽の中に居りて多く人生の崎嶇を味はず。今や年四十有二、思ひきや孤身煢々として是の天涯に流離す、旅愁深く憐むべき也。況むや任に就きてより、奉養意の如くならず、秋氣早く身に逼る、匣に淸風朗月に嘯て懷を遣るのみなるをや。

初涼計會客愁添、不覺衣衿每夜霑、五十年前心未懶、二千石外口猶拑、

公に溫情あるものゝ所爲に非ざるなり。公嗚咽して言ふ能はず、衷情眞に察すべきものあらずや。藤原佐世は基經の親近するところ、文章博士として威を儒林に振はむとす。後年橘廣相を陷れたるもの、佐世實にこれが首謀たり。其の公に贈りたる詩の如何なるものなるかは、知るに由無しと雖も、公のこれに答へたる詩は意味甚だ深きが如し。『我に贈るに何の言をか重寶と爲す、當に言ふべし汝の父昔吾が師なりと』。是れ佐世をして其の師は公の父是善なることを言はしめむとする也。蓋し佐世は素是善に學びたるもの、公離別の際に及びて、何爲れぞ佐世をして是の如き事を言はしめむとする。一見殆ど解すべからざるに似たり。潛に想ふに、公の意佐世をして公が其の舊師の子なるを憶はしめ、隨て公に對する憐憫の情を要むるに非ざる乎。是の想像甚だ過ぎたるが如し、而かも是の如く解するに非ざれば、是の一句何の意味する所ぞ。若し是の解にして謬らずむば、公が讃岐守に任ぜられたる事情、亦略々想ひ見るべきに非ずや。

是の如くにして公は京師を去れり。去るに臨みて基經に贈て曰く、

爲吏爲儒報國家、百身獨立一恩涯、欲辭東閤何爲恨、不見明春洛下花(上同)

自らの最も悲みたる所なりと雖も、實は公の天分の爲には大に祝すべき發途なりし也。

二

讃岐守に任ぜられたる年の四月七日、公惘然として任地に赴く。其の前日禁中に宴あり、公亦許されて席に列る。王公次に從て酒を詩間に行ふ。太政大臣藤原基經、次に當りて公の前に佇立するもの多時、吟じて、曰く、『明朝風景屬何人』と。一吟の後公に命じて高く咏ぜしむ。公命を被りて咏ぜむと欲するも、心神迷亂し、纔に一聲を發して流涕嗚咽す。其夜公罷て家に歸り、終夜睡らず、默然として病めるが如し（菅家文草卷三）。藤原佐世公を餞して言あり、公是に贈て曰く、

讃州刺史自然悲、悲倍以言贈我時、贈我何言爲重寶、當言汝父昔吾師（菅家文草卷三）

熟々這般の消息を察するに、公と藤原氏との關係彷彿として見るべきが如し。基經公の前に立ち、故らに公の離愁を催すの言を爲し、公をして是を咏ぜしむ。是れ

仁和元年一月、菅公讃岐守に任ぜられ、式部少輔、文章博士共に罷められる。是れ公が父祖の遺業たる儒官より轉じて政治上の生活に入れる初也。

公が是の叙任を受けたる因由は明ならず。讃岐守は官位強ちに卑からず、藤原保則の如きは出羽平定の大功を負ひたる後に於ても、甘じて是に赴きる程なれば菅公の赴任亦或は他故無かりしならむか、或は却て陞進なりしやも知るべからず。然れども一事の最も明なるは、是の赴任の大に公の素志に違ひたる事也。公は出發の前後に於ても、任地に在りし間も、居常太だ樂まず、動もすれば舊官を慕ひ、京地に歸らむことを愁訴せり。『更妬他人道左遷』と云ひ、『莫黨同門妬道眞』と云ひ、『不愁官考三年黜、唯嘆生涯萬事非』と云へる等を以て見れば(菅家文草卷三、書懷贈故人)或は藤原氏一門の嫉妬の爲に、左遷の待遇を受けたるに非ずやと想はる。

然れども公は讃岐守となりたるが爲に、其の政治的生活の首途に於て、詩人の天分を現はすを得たり。而して是れと同時に、自ら後日の爲に悲むべき先容を作りたり。蓋し天は一度び公を試むるに詩人を以てし、二度び公を試むるに政治家を以てし、而して三度び其の長處に隨て最後の運命を授けし也。讃岐守の任命は公

こと寧ろ常人に過ぎたり。而して所謂神經性の人に見るが如く、極めて多感多恨、心境共に轉々として其の間常に我執の念を捨てず、而かも意力弱くして輒ち境遇に屈從す、而して憂憤の漏るゝ所一の詩あるのみ。畢竟公は主我の人なり、感情の人なり、咏嘆の人なり、而して其の性格の天分、歸して詩人の二字に存す。世の公を稱して溫厚寬雅の君子となし、一身の毀譽に拘泥せずして名利の外に逍遙せる達人となし、公義是れ重じて私情是れ輕じたる高士となすは、少しく事實を盡さゞる批判なるに似たり。吾人の觀る所或は到らざるものあらむ、唯傳說に是れ憑據して公の爲人遂に現はれざらむことを恐る。茲に疑を存して識者に問ふのみ。願くは觀る人、予を以て時平、菅根の一輩と共に公を傷くる者とする無からむことを。若し夫れ公が才識超脫、生まれながら忠厚の念に篤きことは、天下の認むるところ、吾人に於て一辭の加ふべきもの有らざる也。

第五章　政治上の菅公、其一。（讃岐守）

一

の性に是れ依る。是を以て公の情と行と如何なる場合に於ても其の本心に背けること無し。公は是の意味に於て眞に己を欺かざるの人なりと謂ふべし。想ふに公が詩人として成功せる一主因は實に自ら欺かず、自ら飾らず、其の眞情を吐露して直に人の肺肝に訴へたるが爲にあらずや。

敘し來れば、公の意力の弱きこと、寧ろ分明なるが如し。吾人は是の間に毫も褒貶の意を挾むものに非ず、單に事實を語るのみ。想ふに意力の强大なることは必ずしも人の性格を偉大にする所以に非ざるべし。公が咏嘆の人たりし事は、却て公の性格を高且美ならしむるに於て大なる力ありしを見る。公が詩人として成功したる所以、亦實に是に存する也。

六

以上菅公の人物に就いて述べ來りたる所を約言すれば、公の爲人たる、廉直にして而して直に過ぐる所あり、明察にして而して察に過ぐる所あり、器宇寧ろ狹隘にして容易に人を納れず、矜持自ら持して輙すく人に許さず、功名榮達を顧慮せる

を超へ、上下目を側つと雖も、其の危きを見て而かも帝の意に戻ることを敢てせざりし也。恐らくは是の時期に於ける公には政治上の抱負ありて帝と共に藤原氏の跋扈を挫かむとせしやも知るべからず、而かも公は機幾度か乗ずべくして而かも斷ずる能はざりし也。藤原氏は遂に先じたり、而して公は俄然遷客として邊陲に赴けり。而かも公は是の讒奸の迫害に遇うて大に憤激する所あらざりき。若し公をして藤原廣嗣たらしめば如何。決して徒に嗟嘆して其命を受くべきに非ざる也。公の筑紫にあるや、毫も君を恨みず、人を惡まず、讒者の榮達を目して、而かも一字の憤激を漏すもの無く、偏に一身の非運を悲めるのみ。是の如くにして公は咏嘆の間に五十九歳の生涯を終りたりき。

然れども公を以て隱忍の人と爲さむは大なる誤謬なるべし。隱忍とは陽に忍びて陰に憤るの謂也。公は則ち然らず、進て物に逆はず、退いて自ら悲むは、是れ公の天眞の流露也。公や逆はむと欲するも逆ふ能はざる也。悲まざらむと欲するも悲まざるを得ざる也。是の間に些の隱蔽無く些の矯飾無し。是を物に喩ふれば公の心は如何なる場合に於ても明鏡也、其の面の曇れると明なると、一に映る物

悲むや甚だ切なり、然れども敢て是に反抗し、世事其物を改造して己れの意の如くならしめむとは爲さゞる也。凡そ公が外に向て懷く所の憂憤は、却て內に向て動く。是を以て身世一度び乖離すれば、愁緒紛々として亂れて絲の如く、萬斛の憂情雲の如く湧く。其の現はるゝ所は即ち一の詩あるのみ。是を以て公が一代の詩集は即ち公が一代の心史也。公は外に向て目覺しき活動を爲さざりし代りに、內に向ては最も多事なる閱歷を有せし也。畢竟公は行爲の人よりは寧ろ咏嘆の人也。意志の人よりは寧ろ感情の人也。是を以て公の傳記の大半を語るものは公の詩篇也。

公の博士となるや、誹謗四もに起れり。而かも公は是に反對せざりし也。公の渤海大使に接するや、贈答の詩の拙を笑ふもの多かりき。而かも公は其友人に視して其妄を訴へしのみ。匿名の詩ありて藤原冬緖を誹謗するや、公は嫌疑の衝に當れり、而かも公は憤激して讒奸を懲すこと無かりし也。讃岐守に任ぜらるゝや、流涕して命を拜せり。恐らくは奸佞の爲に左遷せられたるならむも、而かも公は一も明かに是を訴ふることを爲さゞりき。一度び寬平帝の拔擢に遇ひ、官位其次

花鳥從迎朱景老、鬢毛何被白霜侵、無人得意俱言喪、恨殺茫々一水深（菅家文草巻三）

見るべし、花鳥風月一として公が身境に隨て悲哀の相を帶びざる無きを。公が流竄中の詩に到りては、一字一句、公が斷腸の思を暢べたるものに非ざるは無し。恩愛に執着し、現世に纏綿し、死に到るまで求むる所のものは一我の滿足のみ。『千萬思量身上事』是れ公が常住の用意也（菅家文草巻四冬夜閑思）。夫の人生世界を大觀し、人間喜憂の外に逍遙するが如きは、公に於て殆ど見るを得ざる也。凡そ尋常の人、公の如き境遇に遭はゞ、おのづから超世物外の心を起し、悠然として自得する所あらむ。公や齡耳順に垂れ、而かも其の我執の念を絶たず、遂に怨嗟の中に其の生を終る、慘憺なりと謂ふべし。

然れども我執の強きに比して公の意力の寧ろ弱き事は注意せらるべき也。公は徹頭徹尾、咏嘆の人にして憤激の人に非ず、受動の人にして能動の人に非ず。公は如何なる境遇に對しても感興を有し得べき人たるなり、然れども同時に如何なる境遇に對しても服從を辭せざる人たるなり。世事意の如くならざらむか、公の

て渝らざるもの唯我執の一念のみ。

五

我執は多くの場合に於て天才の一證候也。天地人生の萬象、凡て一我の中に攝容し、一華の開くを見、一葉の零つるを聞くも、尚ほ且つ箇中に我の消息を觀ぜずむば已まず。倒底彼れは心を虛しうして外物に同ずる能はざる也。

菅公は多感多恨の人なりき。而して其の感觸し怨嗟するところのもの、多く我執の一念に基けりしが如し。公の樂む處に榮達あり公の悲む處に否塞あり、其の讃岐に在るや、賦する所の咏嘆の詩、一として公の一身に關せざるは無し。或は佳節に遇うて宮中の詩筵を憶ひ、或は家書に接して近親の越在を悲み、春夕海に遊びては『釣歌漁火非交友』と嘆きて、『抱膝閑吟、淚巾を濕ふ』し、秋日菊に對しては『天下凉陰花下冷、主人外吏故人稀』と咏じて、『徘徊未だ早く南に歸るを得』ざるを恨む。概ね是類なり。試に左に『春盡』の一首を掲げて、公が當時の情懷を示さむ、

風月能傷旅客心、就中春盡淚難禁、去年馬上行相送、今日雨降臥獨吟

在官五袴當成頌、歸路折轅莫患貧、　努力努力猶努力、明々天子恰平均

（菅家文草巻五）

一秩四年忠節を盡し、歸り來て便ち侍中の臣と爲る。文拙く政頌なる者も是の如く幸多し、努力せよ、明々たる天子上に照臨す。是の如き言を以て遠行の客を諭す、得意の狀想ふべき也。蓋し公が眞に詩人の本色を著はせし時期は、生涯に於て前後二回あり。一は公の讃岐に在りし時、他は公の筑紫に在りし時也。蓋し京師の地は公をして詩人たらしむるには餘りに安逸に、又餘りに形式的なりき。是を以て、京師にあると、讃岐又は筑紫にあるとによりて、公は殆ど別人の觀ありき。神經性なる公は際遇の異なるに隨て、毎に別樣の性情を現ぜしに非ずや。

讃岐より還りてより、筑紫に左遷せらるゝまでの十二年は、公が一代の榮華を極めたる時也。公は是間に於て、其の本領たる詩人を已めて政治家となれり。政治家として得意の絶頂に達せし時、運命は茲に一大轉換を爲し、公は俄然として失意の深淵に陷りたり。而して同時に公が詩人の天分は最も赫灼たる光明を放て、公の末路に永遠の祝福を與へたり。是の間公の心機は常に事境に隨て轉々し、而し

文草卷四夢阿蒲)。公の安立を托せる佛教も亦是を如何ともする能はざりし也。讃岐に於ける前後五年の生活は殆ど全く愁嘆の間に過されたるが如し。嘗て京に在りし時、公を喜ばせし風物、今は凡て愁緒の端となり、屢に佛教に縁りて安慰を求めしのみ。正月二十日、遙に禁中の内宴を憶うて作れるもの、宛然として謫居の詩を讀むの感あり。

寒氣逼レ身夜涙多、春風爲レ我不レ誰何、廻レ頭左右皆潮戸、入レ耳高低只棹歌、
遠憶群鶯馴二藥樹一、偏悲五馬隔二滄波一、諸兒强勸三分酒、謝レ日忘レ憂莫二此過一。
(菅家文草卷三、正月二十日有感)

自餘の詩概ね是の如し。讃岐より京師に召還せられたるは公にとりて流竄の赦免に均しかりき。公の詩を讀むものは、是の前後に於て詩情の頓に轉化せるを認むべし。『餞別奥州刺史』の一詩の如きは、公が其の得意の現狀より、樂天的に讃岐の客居を回想し、以て遠行の客を勵ますところ、殆ど公が前年の面目を留めず。

我試爲レ吏二讃州一去、且行且泣沙浪春、一秩四年盡二忠節一、歸來便作二侍中臣一、
文章我謝二君成業一、政理君嘲二我化民一、文拙政頑者多幸、況乎文巧政能循、

公の神經性を解するに於て先づ注意し置くべきは、公の健康なり。是事に就いては前章已に言ふ所ありしが、公は多病には非ずとするも、少くとも健康の人ならざりしことは、想像するに餘りあり。況むや公自らも亦『早衰蒲柳雖同願』と云ひ、『猶恨虛勞動宿痾』(菅家文草卷四 伏病閑居)の句あるをや。宿痾とは蓋し脚氣と頭痛の二病ならむ。贏弱なるもの神經性なるか、將た又神經性なるもの贏弱なるか、兎に角是兩者の相伴ふは多く見る所の事實也。

公の性情が多情多恨、英語の所謂るhypersentimentalなりしことは最も明に其の詩賦の上に顯はれたり。三十歳頃迄の公の詩の坦々として和平なること、猶ほ公の閲歷の平板多奇無きが如くなりき。内宴に侍し詩筵に上りて作るところ、概ね樂天怡悦の情あり。一旦博士となりて、世路の崎嶇に逢遭してより、其の詩調俄に悲哀を帶び、動もすれば命を傷み、世を厭ふの語あり。是れ先に說ける『博士難』『詩情怨』諸篇に於て明かに看取すべし。加ふるに當時父君の薨去に遇ひ、又其の二子を失ふ、元慶の初より末に至るまで公は常に憂愁の中に經過せしが如し。其の子阿滿の死せる時の如きは、神を怨み佛を憎み、天地身世を忘却して働哭せりと云ふ(菅家

果或は慘劇となり、或は咏嘆となる。若し夫れ事心の如くなれば、得意滿盛、揚々として樂む也。是の種の人は狂し易し、失意にも能く狂し、得意にも能く狂す。

是の如きは所謂る神經性の人に於て多く見る所の性格なり、而して詩人に於て殊に多し。バーンス、バイロンは是の種の人なりき、キーツも亦是の種の人なりき。ゲーテもハイネも亦恐くは然りしならむ。天才を以て狂したる幾多の藝術家は、大抵是の種の模型に入るべきなり。吾人は菅公に於て其の一事例を加へたるを見る。

菅公とは何人ぞやと云へる疑問に對して、最も簡短なる答案を求むる人あらば吾人は直に『詩人』と答へむ。公の天分は寧ろ學者に非ず、教育家に非ず、道德家に非ず、經濟家、政治家に非ず、而して詩人也。而して天は公に縱すに是の天分を發揮し得べき絶好の境遇を以てせり。是を以て公は政治家として失敗せしが、詩人として成功せり。公が五十九年の生涯は公にとりては其の終を全ふせるものに非ざりしと雖、實は公自ら識らずして皇天の祝福を受けし也。乞ふ、吾人をして公の神經性に就いて少しく語る所あらしめよ。

と庸直とは誰か是を疑ふべき、唯其の局量寧ろ太だ狹隘にして、我執の念慮亦淺からざることも亦明瞭なるが如し。今公の一生の事蹟と其の詩文とを綜合して、孰々其の爲人を考ふるに、公の根本性格は、世俗の所謂る神經性なるものに酷似し、而して其の氣宇の狹隘と、我執の念慮の大なるとは、是の根本性格の側面なるが如し。

今夫の所謂る神經性なるものを觀るに、心常に境と共に移る。喜べば則ち欣然として抃舞し、悲めば、則ち潸然として涕泣し、怒れば則ち赫然として擠攘す。一絲一毫己れの意の如くならざれば、動もすれば怏々として樂まず、忽ち萬端の愁緒を誘引し、憂情雲の如く湧起して、身世前後に暗澹たり。已にして心機倏忽として一轉すれば、苦悶霧の如く消え、身は忽ち光風霽月の間に立つの思あり、先の憂愁を顧みれば、恍として夢の如し。心、境を抑ゆる能はず、境常に心を制す、唯濫らざるものは我執の一念のみ。其の悲むや我の爲なり、其の喜ぶや我の爲なり、百般の哀樂我れ自ら我が爲に是を求む。是の如くするに非れば、我なるもの遂に安ずる能はざる也。萬境既に我の爲に存し、我の爲に移る、故に事心と違へば、茲に乃ち葛藤起る。而して意力強き者は進で爭はむ、意力弱きものは退いて悲まむ、是に於て葛藤の結

しと稱揚するものは、吾人少しく疑無き能はず。藤原保則は溫厚篤實の君子なり、吏才に長じ、財政に勝れ、又出羽秋田の亂に赴き、一兵を損せずして邊陲を悅服せしむ、當時得難きの人材なりしが如し。菅公任に讃岐に趣くや、保則に代れる也。當時保則公を見て潛に評して曰く、

新太守當今碩儒、非吾所測知也、但見其內心、誠是危殆之士也。（保則傳）

保則傳は、三善清行の作る所、而して清行素公と親善ならず、其の言或は誇大に失するが如き事あらむ。但若し是言をして保則の口に出でしめば、公の人物亦想見すべきものあらずや。『見其內心誠是危殆士也』とは、公が昂然として人に下らず、名譽心の甚だ熾なるを看取して是を諷せしには非ざる乎。暫く疑を存して識者に質す。

四

以上述べたる所にして大過無からむ乎、菅公は世人の思惟する如く爾かく溫厚恭謙の人に非ず、又爾かく名利の念を絕せる大雅の人にも非ざりし也。公の忠亮

愚と云ふ是れ日常の儀禮のみ、是の如き儀禮は公に於て獨り珍とすべきに非ず。藏人頭に任ぜられてより、官位累進する毎に數々上奏して是を辭せりと雖も、是の如きは當時の習慣のみ、公に於て獨り異例とするに足らざる也。否塞に處りて尙ほ君恩を感謝するは、公の性格中の最も高且美なる所、眞に仰望すべしと雖も、恭謙の性とは自ら其の類を異にす。吾人公の詩を讀めば、屢に多く恭謙自ら卑うするの意に遺はざるのみならず、一種矜恃の風あり、儼として人に許さゞるものあるを覺ゆ。已れ一度び誹謗せらるれば、輒ち他を罵りて『無才』と云ひ、『昏迷』と呼び、或は意に會せざるものあれば、怒りて『烏合之衆』と罵る、清行を嘲り、菅根を打つ、皆恭謙の所爲に非ざるなり。夫の儒林の爭を刺りて『痴鈍』と云ひ、『醉舞狂歌、罵辱凌轢』と云ふが如き、亦一種人を凌ぐの氣あり。若し夫れ『文章博士非材不居、吏部侍郎有能惟任、自余祖父、降及余身三代相承、兩官無失』と云へるは、恐らくは暗に自己の材能を標榜せるもの、徒に謙遜の謝意のみに非ざらむか。是を要するに、公は名利榮達に苦心せしこと、多く常人と異ならざりしなり。其の矜高自ら持して容易に人に許さゞること亦多く常人に異ならざりし也。世の公を以て恭謙にして名利の念無

『榮華心尠念、名利手偏執、』是れ豈公が中心の讖悔に非ずや。公の朝宴に逈りて作る所の詩は、題筌を探りて強て情を致すもの多し。唯公の生涯に於て眞詩人を見るは、讃州の客居と筑紫の流竄とにあり。然らば即ち是の如きは公の天眞の流露せるものに非ずや。

公が後年の事は今茲に詳に述べずと雖も、阿衡事件以來漸く宇多帝の知遇を受け、藏人頭より俄に累進して右大臣と爲る。是時三善清行、知足の德を述べて、公に退讓を勸めしが、聽かず、遂に藤原氏の爲に筑紫に左遷せらるゝを致せり。史家多くは以爲らく、菅公如何ぞ其の身の危きを覺らざらむや、是を覺りて而して安きに就かざるは、寬平帝の殊恩に報ひむが爲のみ、と。吾人は是の點に就きて聊か疑惑を挾まざるべからざるものあり、後章詳に是を論ずべき也。

是の如く、菅公は世人の言ふが如く、爾かく名利榮華の私念無き人には非ざりし也。世人は又多く公を以て恭謙の君子人なりとすと雖も、果して然りしや、疑ふべし。公は素と神經性の人なるを以て、情緒甚だ多端なり、而かも吾人は、公の史蹟に於て多く恭謙の事例を發見する能はざる也。人に對して輒ち自ら不才と云ひ、迂

然れども讀者は吾人の意を誤る可らず。吾人は菅公に名譽心ある故を以て私利の外何物をも願みざる人と爲すに非ず。人誰れか名利榮達を願はざるも、是を願はざるは人の情に非る也、菅公にして是事ある、寧ろ當然とすべきのみ。若し夫れ公が居常君恩の重きに感じ、報復の誠意を效しゝ事は、疑ふべからず。『余心無一德、身有三官』と謂ひ、『三官過分知恩日』と云ひ、『爲吏爲儒報國家、百年獨立一恩涯』と云ふもの、公が終生渝らざるの衷情也。唯吾人は菅公を以て曠遠恬淡、名利を以て事とせざる人と爲すの當らざるを言へるのみ。讃岐に赴くに臨みて世人の認めて左遷と爲さむことを妬めるの一事、尙ほ公の面目を躍如たらしむるに非ずや。

而して是れ獨り吾人の外より揣摩するのみに非ず、公亦自ら是を言へり。公遠く京城の煙火を離れて讃州に客たること四年、寂然として獨坐す。幾年名利の爲に競奔して、茲に暫く人生の幽味を味ふ、即ち嘆じて曰く、

少日爲秀才、光陰常不給、朋友絶言笑、妻子廢親習、壯年爲侍郎、
曉出逮昏入、隨日東西走、承顏左右揖、結綬與垂帷、孜々又汲々、
榮華心尅念、名利手偏執（菅家文草巻四苦日長）

恭謙退讓を旨とせし人には非ざりしならむ。公に對する物議は果して起りたり。匿名詩人の嫌疑公の上に懸るに及び、公憂懼措く所を知らず、百年の功名一朝の冤枉の爲に挫折し去らむことを患ふるや太だ切なり。即ち詩を作て其の情を暢て曰く、『吾は面瘢よりも寧ろ名瘢を患ふ、吾れ年尙ほ老ひず、而して功名尙未立たず。日夕願ふらく名年と共に高からむと。今に及びて不潔の名を被りて徒に憂死するを得むや』（菅家文草卷二有所思）と文辭切迫、功名の念中に燃ゆるが如きものあるを見ずや。詩人詩を作る、巧拙の批判須らく知る人に任すべし、飛廉の流言に拘泥して一々其の作を辯護するが如きは、寧ろ笑ふべき也。公は是の笑ふべき事すらも尙ほ爲すを憚らざりき。『詩情怨』（前出づ）の一篇、說くところ何ぞ夫れ一に缺々たる。況むや是の篇は公の詩友菅著作（其名を詳にせず）と紀秀才（長谷雄）とに示すもの、知己に向て『今年人謗非眞說』を說く、是れ詩人自ら安ずる行爲に非ざる也。潛に想ふに、公が爾かく世上の毀譽を意に介するものは、聲名人に誤られて或は榮達の障害たらむことを恐れたるには非ざる乎。或は『宿業頻遭世俗猜』と云ひ、或は『凡眼昏迷誰料理』と云ふもの、亦是間の消息を傳ふるものに非ざる乎。

厚の君子と爲すは、聊か其の當を得ざるに似たり。

三

公を以て毫も一身の毀譽に關せず、私己の榮達に苦慮せざる高風清節の士なりとするも、亦吾人の疑はざるを得ざる所也。吾人を以て見れば公の名譽心に富めること、寧ろ明かなる事實なり。公は素と多情多恨の人、感興到る毎に心機忽ち遷轉し、殊に悲愁の情に傾き易き、所謂る神經性の人なるを以て、其の名譽心は公の行爲に對して終生不變の動機には非ざりしなり。而かも其の生涯の或時期に於て、最も顯著なる發動を示したるは實に公の名譽心なりき。是の時に當ては、公は一身の毀譽に齷齪し、私己の榮達に煩悶せり。畢竟公は多くの詩人天才に見る如く、我執の念慮最も強かりし人也。

吾人は先に公の『博士難』を掲げたり。公年三十三、初めて文章博士となる、乃ち新に堂屋を經營し、盛に門下の慶賀を受く。父是善是を誡めて以爲らく、是の如くむば人見て倨傲となし、引いて世人の物議を招かむと。是に依て見れば公は決して

直容後來之不要、亦何可悲。（上同）

書齋中の行狀は尤も好く其の爲人を顯はすものなるべし。是の文に據りて菅公の爲人を察するに、細心丁寧、日常の瑣事と雖も、苟もせず、人の是を等閑視するものあれば、太だ是を嫌忌したるが如し。然らざれば一々友朋の非を指摘して、是を云々する是の如くならむや。

の公の氣宇是の如く小なりしを以て、交友亦甚だ多からざりしが如し。書齋記には『唯知我者。有其人三許人』ありと云ひ、讃州に在る時も『交遊少、白心如水』（菅家文草卷三冬夜閒居）と云へり。其の詩文集に就いて應酬贈答の跡を察するに、永く公と相知れるもの、田口達音、紀長谷雄等兩三人に過ぎざりしが如し。橘廣相、善淵愛成、大藏善行、三善清行等、當時の儒者少からざりしが、一も公と親善なるもの無く、清行の如きは寧ろ隱然として公の反對者たりしが如し。藤原菅根は素と公の推薦せし所なれども、幾もなく公に辱められて却て公の仇敵となれり。畢竟公の人たる察々の明あり、切々の直あり、而かも清濁並せ呑み、若くは溫雅人を容るゝの器に非ざりしが爲ならむ。公を以て廉直細心、人の惡を假借せざるの人となすは可なり、所謂る溫

し、嚴峻人に待つ事は、『書齋記』の一篇最も明に是を證す。書齋記は公が壯年の作にして、公の家塾及び書齋の狀態を誌せるものなり。初めに家屋の構造を記し、半より以下は、細かに塾生友朋の行狀を列擧し、公の勉學を妨ぐるを訴ふ。用心の緻密頗る敬服すべきものありと雖も、苟も意に稱はざるものは一々打擊を加へて假借する所無きを見る。例へば塾中刀筆を弄ぶものあるを責めて曰く、

又刀筆者、寫書刊謬之具也、至二于烏合之衆一不レ知二其物之用一、操レ刀則削二損几案一、弄レ筆忽汚二穢書籍一。（菅家文草巻七）

又抄錄の紙片を亂失するものあるを嘆じて曰く、

又學問之道、抄出爲レ宗、抄出之用、稿草爲レ本、余非二正平之才一、未レ免二停滯之筆一、故此間在々短札者、總是抄出之稿草也、而闌入之人、其心難レ察、有レ智者見レ之卷以懷レ之、無智者取レ之破以棄。（同上）

是の如く刀筆を以て案書を削汚し、或は抄出の稿草を破棄するを以て『内疾之切者也』と言へり。又訪問の友人禮無きを刺りて曰く、

又朋友之中、頗有二要須之人一、適依レ有レ用、入在二簾中一、闌入者、不レ審二先入之有一レ用、

溫厚の人に非ざりしのみならず、恐らくは狹量にして性急、己を持する事嚴なると共に、人を責むる事亦嚴なりし人ならむ。吾人を以て見れば菅公の大量の人に非ざりし事は、寧ろ明かなる事實なるが如し。巨勢文雄が三善清行を薦めて、才學時輩に超越すと言へる時、公は却て是を冷笑せり。是れ儒家分爭の餘弊なるべしと雖も、襟度宏雅の人の爲さゞるべき所也。藤原菅根庚申の節會に際し、公の意に稱はざる事あり、公笏を揮て其額を擊ちたりと云ふ（北野緣起上）。是れ亦寬厚の人の爲さゞるべき所にあらずや。文章博士となりて誹謗の聲起るや、公の憂惑措かざるの情は、『博士難』、『詩情怨』の數篇明に是を證す、無實の惡名に苦惱して僧とならむとせしが如きは大度自ら安ずるの士に非ざるべし。況してや『是れ才無くして我がために捨てられたるものゝ讒口のみ』と放言するが如きは、己を樹てゝ人を傷くるに似たり、寧ろ狹量ならずとせむや。凡そ他人の評聞に喜憂し、忡々として功名の塗きを圖り、或は行路の蹉跎に遇うて輒ち慰むる所無きは公の生涯を通じて見る所なり。是れ公をして因て以て詩人たらしめたる天與の性情なりしと雖も、而かも寬厚の德に於ては大に至らざる所ありと謂はざるべからず。又公が細心自ら持

吾人は必ずしも公の盛德を疑ふものに非ず、唯暫らく歷史研究の良心を縱して吾人の觀る所を言はしめよ。吾人は菅公の性格に關して世人の多數と其の見解を同じうせざらむことを恐る。然り、吾人實に是れを恐るゝ也。

菅公は忠良の臣なりしならむ、然れども果して爾かく溫厚の士なりし乎。公は正義を尙びたる人なるべし、然れども、果して爾かく一身の毀譽を事とせざる人なりし乎。公は恭謙寬雅の士と稱せらる、然れども公果して爾かく恭謙寬雅の士なりし乎。公が危地に處るを辭せざりしは事實也、然れども是れ公義を全うするが爲めのみなりし乎。吾人願はくは世人と共に其の盡く然るを信ずるを得む。唯是間に多少の疑團の左右を決し難きものあり、謹で吾人の所見を提供して世上識者の高鑑を仰がむ。

二

若し溫厚と云ふ事にして寬裕雅量あり、物に忤はず、能く好意を以て人に許すの性質の義に解せらるべくむば、菅公は恐らくは溫厚の人に非ざりしならむ。菅に

士也、恭謙寬雅の君子也、一身の毀譽を事とせず、公義の爲に危地に處るを辭せざるの國士なりと。概ね是の數者は、菅公の名と離るべからざる德名にして、公は殆ど人生道義の理想を一身に具足せるの觀あり。古より賢哲の士、忠良の臣、其人に乏しからず、而かも其の性格の追慕せらるゝ菅公の如きは少し。兒童走卒だも尙ほ敬語を冠せずして敢て公を言ふもの無きに至ては亦盛なりと謂ふべき也。

吾人は公の盛德を疑ふものに非ず、我邦人が臣民の理想、國士の標範として公を崇拜し、追慕するは、眞に國家の慶事なり。吾人は公の如き人物を崇拜追慕するの性情永遠に我國民の間に繼續せられ、且つ發達せられむことを希望して已まざる也。蓋し忠良を尙ぶの民にして初めて忠良の人を拜すべく、篤實を好むの民にして初めて篤實の人を崇むべし。設令ひ菅公其人の性格は歷史家の研究によりて今日思惟せらるゝ所に異なるものとなることあるも、吾人は是の史的事實の如何に係らず、一個の傳說理想の人物として、公の崇拜の永遠に持續せらるべきを疑はず。理想は外物に緣て現はるゝも而かも理想其物の本然は外物を離れたる一個の實在なれば也。

我將南海飽風煙、更妬他人道左遷、倩憶分憂非祖業、徘徊孔聖廟門前」

（菅家文草巻三、北堂餞宴）

南海に行て風煙に飽かむとは、詞人憂を隠す常套のみ。人或は目して左遷と言はむこと、是れ功名心ある公にとりて最も快からざる所なりしならむ。公の家累代儒官たり、今や式部少輔、文章博士凡て罷められ、遠く南海の地方官たらむとす、是れ公の惆悵として心を傷むる所なるべし。『倩憶分憂非祖業、徘徊孔聖廟門前』。低回顧望去るに忍びざるの情、切に想ふべき也。想ふに儒爭の弊自ら此中に在り。

菅公碩儒の家に生まれ、佛敎の世に長じ、而して儒爭の間に入り、而して今や祖業を捨て出でゝ牧民の職に就く。公の政治的生活漸やく是より初まらむとする也。吾人是を叙するに先ちて、暫く公の性格に就いて考察する所あらむとす。

第四章　菅公の性格

一

世の菅公の人物を言ふもの、多くは以爲らく、菅公は忠良無双の臣也、溫厚篤實の

公是を憂へ『詩情怨』の一篇を作りて懷を遣る。其の詩に曰く

詩情怨

去歳世驚作詩巧、今年人詩作詩拙、鴻臚館裏失驪珠、卿相門前歌白雪、
非顯名賤匿名貴、非先作優後作劣、一人開口萬人喧、賢者出言愚者悅、
十里百里又千里、駟馬如龍不及舌、六年七年若八年、一生如水不須決、
一生如水穢名滿、此名何水得清潔、天鑑從來有孔明、人間不可無則哲、
惡我偏謂之儒翰、去歲世驚自然絕、呵我終爲實落書、今年人謗非眞說、

（菅家文草卷二）

公を誹謗する者の甚だ多きを見る。公は是の如くにして紛々の間に一生を終るあらむことを患ふるの情に勝へざりし也。是の事ありてより後二年、仁和元年一月、公は其の官職たる文章博士、式部少輔を罷られ、讃岐守に任ぜらる。是の時公の作る所の詩、凡て悲愁憂悶の情を訴ふるものに非る無し、是を以て見れば、讃岐に赴任するは、公の素志に非りしこと明也。潜に想ふに謀るものありて公を左遷せしに非る乎。當時公に詩あり、曰く、

して自ら高うせるを見るべき也。

元慶六年夏の末匿名の詩を作りて藤原冬緒を誹れるものあり、詩才凡ならず。時の人多く以て菅公の手に成れりと爲す。藤原氏の反對を憂苦せる時に當りて、是の如き嫌疑は、公に取りて甚だ恐るべき結果を生ずべし。其の位置の安固を憂慮せる公が是の如き無謀の擧に出づべしとも思はれず、恐らくは藤原氏の黨與、佐世の一輩、若くは他の儒臣公に善らざるものゝ所爲ならむ。公乃ち『有所思』の長篇を賦して辨妄に代ふ、中に曰へるあり、

狂暴之人難指我、文章之士定爲誰、三寸舌端馳不及、不患顏疵患名疵、
功名未立年未老、每願名高年又耄、況名不潔徒憂死。

功名未だ立たずして讒者の爲に中道に挫折せむ事を憂ふるの情、太だ切なるを見るべし。天神地祇を要請して、其の赤心を照鑑せむことを乞ひ、若し詐あらば禍罰立ろに至らむと曰へる者、亦公が如何に是の嫌疑の爲に心を苦めしかを見るに足る。是事幸にして公を傷けざりしが、誹謗の聲は尙ほ已まざる也。渤海大使裴文籍來るや、公接遇の任に當る。時の人、公が應酬の詩の拙劣なるを誣るもの多し。

當施子孫榮、我舉秀才日、箕裘欲勤成、我爲博士歲、堂構幸經營、
萬人昔競賀、慈父獨相驚、相驚何以故、曰悲汝孤惸、博士官非賤、
博士祿非輕、吾先經此職、愼之畏人情、始自聞慈誨、履氷不安行、
四年有朝議、令我授諸生、南面纔三日、耳聞誹謗聲、今年修舉牒、
取捨甚分明、無才先捨者、讒口訴虛名、教授我無失、選擧我有平、
誠哉慈父命、誡我於末萠。（菅家文草卷二）

公既に博士となり、新に堂を構へて子弟に接す。人爭て來り賀す。父是善獨り喜ばず、公に誨て曰く、吾家門閥の援あるに非ず、自ら抑畏せずむば恐らくは禍を招かむと。蓋し最も藤原氏の嫉妬を恐れたるなり。果せる哉、大學に入りて諸生に授くるや、誹謗四もに起る。公以て才無くして捨てられたるものゝ讒口なりとし、深く是善の先見に服す。當時公が儒爭の間に立ちて嫉妬の府となれる事察するに足る。想ふに公を誹りし者は、獨り藤原氏の黨與のみに非ざりしなるべし。曾て詩を紀長谷雄に寄せて元慶以降學士の間公私の論議絶えざるを嘆きて、『風情斷織壁池波、更怪通儒四面多』（菅家文草卷二、勸吟詩寄紀秀才）の言あり、亦公が儒爭の間に立ち昂然と

藤原佐世は藤原基經の家人たり。貞觀中對策を望みし時、儒官皆是を拒て曰く、藤原氏にして博士たらば、夫れ吾曹を如何せむとすると。基經百方周旋して遂に及第するを得たり。試驗官都良香憤慨して、曰く藤原氏にして求むる所ある、何事か意の如くならざらむと。當時佐世の成績甚だ佳ならず、即ち評定して曰く『何責一日之失對、唯喜千年之得人』(都氏文集卷五)と。是れ事實に於て對策の主旨を沒し去りたるもの、良香の衷情察すべきものあり。

門閥の力遂に學閥を動かすに至りたるの例は、獨り藤原佐世に於て見るべきのみならず、亦橘廣相に於ても是を見るべし。廣相は阿衡の詔勅を草したるの故を以て、遂に藤原氏の構陷するところとなりたるもの也(事後に精しく)。菅公も藤原氏の出に非ず、故に文章博士と爲るや、廣相と同一の迫害を受けしが、事の乘ずべき無きを以て僅に免かるゝを得たり。『博士難』の一篇は是間の事情を窺ふに足るを以て、左に其の全文を掲ぐ。

博士難

吾家非二老將一、儒學代二歸耕一、皇考位三品、慈父職公卿、己知二稽古力一、

平安以降、儒家各々其の門戸を張りて獨立したるを以て、其の自然の結果として、元慶の頃より爭鬪の弊漸く現はれたり。學者各々其の宗とする所に據り、自ら矜恃して他を輕蔑し、其の門を異にするもの、其の師を戴て相傲る。其の爭有司の間に蔓延し、其の出同じき者は材に依らずして援引し、其の門異なるものは器に拘らずして排擠するに至る。儒家の中是の爭を厭ひて故らに門人を謝遣せるもの、春澄善繩の如きありと雖も、是れ異例のみ。當時の堂々たる學者は、自ら是の分爭の渦中に陷れるもの多かりき。菅公の當時に於て是の弊殊に甚しかりしが如し。三善清行は紀長谷雄と文を論じ、大に罵りて曰く、古より不才の博士無し、其の是れ有る汝に始まると（大日本史清行傳）。又清行は巨勢文雄に學びたる者なり、文雄是れを菅公に薦めしに、公是を冷笑して顧みざりしと云ふ。都良香は同臭相庇護して、逸材の顯はるゝ時無きを嘆じ、『辨薫蕕論』を作りて憤を漏して曰く、『曲阜尼丘、比培塿而無別、紫蘭紅薫、渾蕭艾而不分、何其謬乎』と（都氏文集卷第三）。又曰く『今之君子、若能杜絕鵜鳩之啄、令久其芬芳、鋤除萇莠之根、無雜其穢惡、不同器而藏、當異處而種、美種香、惡種臭、可得而明矣』と（同上）。以て當時の情實を想ふべし。文章博士

彼談小乘者、一道而二門、與此說聲聞者、異器而同響、我本朝、馳神眞際、求法道邦、先請業者、偏執律儀、後研精者、更傳圓戒、猶如前途覆車而未歸、晩進指南而必達、自後師資不絕、積習爲常、論者東西、互相矛楯、殊恨保執者自謂除非小律儀、更無大乘戒、遂毀梵網宗以爲沙彌宗、貶三聚教以爲非僧教、悲哉、知其一而未知其二、未可與談道者也。（菅家文草卷七顯揚大戒論序）

以上略々漢學及び佛教の狀態を叙述せり。今時代の上より菅公を解釋するに當て、尙ほ二事の言はざるべからざるものあり。其一は當時の政治界に於ける藤原氏の位置也。菅公が政治家として行動は、皇室及び朝廷に於ける藤原氏の勢力を知るに非ざれば、一として解すべからざる也。

他の一は當時儒家の間に於ける家門の爭也、之れ亦公の性行を明にするに於て知らざるべからず。政治界に於ける藤原氏の位置は、後文詳說する所あるべきを以て、茲には單に儒爭の狀況を一瞥せむ。

五

音菩薩、南無妙法蓮華經、如所說、如所誓、引導弟子之考妣、速證大菩提果、無邊功德、無量善根、普施法界、皆共利益。（菅家文草卷十一）

佛前に向て自ら弟子と稱するは、公にありて敢て珍とするに足らず。『弟子菅道眞』と云ひ、『佛弟子道眞』と云ふは、公の詩文に於て數々見る所なり。獨り文學の上に於てのみならず、菅は物議身邊に集まりし時、薙髮して僧侶たらむと欲せしことあり。公が菅著作の慰問に答へて、『對客頻逢珠子白、從師殆入薛衣錙』と云へるもの是れ也（菅家文草卷二子作詩情怨云々）。公自ら其の下に註して曰く、『余自聞惡名有意出俗、故云』と。以て這般の消息を解すべき也。讃岐守となりて身境落莫の嘆轉た切なりし時『天與人失、心與事違、非佛力不至』（菅家文草卷四蓮池篇序）と云ひ、『諳誦禪經三四遍、是身斗藪潔於氷』（同上）と云へるもの何れも公の衷情を見るべし。又公は心に佛を信ぜしのみならず、經典の理に通曉せること、は、當時貴紳の爲に佛事に關する願文を作りし事、甚だ多きを以ても想像すべき也。顯揚大戒論序殊に明に是を證す。顯揚大戒論は天台安慧座主の著はす所、貞觀八年公父君の命によりて是に序せる也。其の首に曰く、

夫菩薩戒者、流轉不滅之敎也。盧遮那佛傳之於前、文殊師利弘之於後、故與

善と同じく佛教を信じ、經典に通曉せり。殊に達音は初めて金剛般若經を轉讀せし時、深く是に感じ、『丈六合容一子恩、衆生誰不ㇾ賴ㇾ空門、始知佛母應ㇾ尊重、我是金剛般若孫』の詩ありき（田氏家集之中卷）。菅公の父是善が、法華經の信奉者にして、其の終生の志は佛恩に報ぜむが爲に一寺院を建立するにありしことは、先に說けるが如し。

菅公も亦是の時代の風潮に動かされ、是等先輩の轍を履みて、佛敎信者なりき。恐らくは其の祖父よりも其の父よりも、是等先輩の何人よりも、更に熱心なる信佛者なりき。公は何歲の時より佛典に親しみしか明かならずと雖も、其の信佛心は已に幼冲の時に於て成立したりしならむ。其の父母已に信者たり、其の愛見たる公のみ獨り不信者たるが如きは、恐らくは是無かるべし。三十歲の頃安才子を傷むの詩に『爲ㇾ君西向誦ㇾ彌陀』（菅家文草卷一）の句あるを見れば、當時の信仰想ふべし。公三十八歲の頃、其の子阿滿を失ひ、是を夢るの詩に『到處須彌迷ㇾ百億、生時世界暗ㇾ三千、南無觀自在菩薩、擁ㇾ護吾兒ㇾ坐ㇾ大蓮』（菅家文草卷二夢阿滿）の句あり。又先に數々述べたる吉祥院法華會願文は、最も明に公の佛願を表はせり。其の末文に曰く、

弟子無ㇾ父何恃、無ㇾ母何怙、不ㇾ怨ㇾ天、不ㇾ尤ㇾ人、身之數奇夙爲ㇾ孤露、南無觀世

ち明に神佛合體の思想なり。佛教が國體と調攝せむが爲に、數百年來苦心したる事業は、平安朝の初に於て、最澄、空海の手によりて見事に成就せられたり。是に於て日本は神國たるが如く佛國となれり。國民は其神を拜するが如く、其佛を信ぜざるべからざることゝなれり。故に曰く、平安朝は佛教の時代なりと。

四

菅公の生まれたるは、是の如き時代なりき。佛教が朝野の間に顯はしたる諸般の勢力は茲に列擧するの遑無し、唯當時の儒家が爲に如何なる影響を被りたるかを一瞥せむに、菅公の祖父なる清公が、深く佛教を信じ、晩年に及びて造像寫經を樂としたる事は、已に述べたり。道理の上より兩道の差別無きを論じ、『雖㆓默語別㆒道、辯有㆓頗異㆒、而聖哲同㆑致、何錯乎』と說きしも亦清公なりき。滋野貞主亦熱心なる信佛者にして、『禪心彌觀㆓世間空㆒』の如き思想は、其の詩中に數〻見る所也。凌雲、文華秀麗、經國、諸集を繙ける人は、無常を觀じ厭世を說ける詩句の尠からざるを發見すべし。菅公の師事したる、是善の友朋たる都良香の如き、田口達音の如き、何れも公及び是

として是に赴けり。嵯峨天皇曾て嘆じて曰く、朝家英俊無し、法侶賢才を隱すと。蓋し當時高材逸足の士、門閥の拘束を屑とせざるもの、競うて佛門に入れり。佛門に入れば、人々其の才に隨うて青雲の志を達し得べければなり。佛教は是の如く人才を收容したるのみならず、本地垂迹説を立てゝ神佛兩道を調攝するが如き、教義の應與頗る巧妙なるものあり。例令へば最澄は入唐に先ちて宇佐八幡大神の爲に法華經を神宮寺に講じ、歸朝して叡山を開くに當ては、叡山奉祀の大山咋神を山王と稱して、天台擁護の神也と宣言せり。又空海の高野山を開くに當ても、丹生都姫の神地を奪ひて、金剛峰寺を立て、以て神佛二道の同軌を明にせり。而して説て曰く、神佛素一體たり、佛は是れ神の本地、神は是れ佛の垂迹、表裏元と一體たり、權實初より二道無しと。上下悉く是の説を信じ、從來神祇に事ふる所以を以て、安じて佛法を禮拜せり。是れ佛法を禮拜する無くむば、即ち神祇に事ふる道を失へば也。神佛調和の思想は、素より當時に初まりしに非ず。聖德太子の十七憲法は、已に佛教の上に神儒の兩道を統一せむとしたるもの也。聖武天皇の東大寺を建つるや、行基伊勢の神宮に赴きて、我が本地は大日如來なりとの御神託を請けしは、即

三

漢學の隆盛は、菅公に及ぼせる時代の影響として最も注意すべし。是れと同時に公の性格を作るに於て頗る大なる勢力を有せるものを佛敎と爲す。蓋し公の時代は漢學の時代なると共に佛敎の時代也。公獨り特に佛敎を信ぜしに非ざる也。

史を案ずるに、佛敎の興隆と漢學の發達とは、決して其の道を異にせるものに非ず、漢學は寧ろ佛敎に伴うて進歩し來りしに似たり。抑々推古以來、佛敎は歷代の天皇概ね是を信じ、大臣有司亦競うて是を擁護せり、神祇伯の後たる藤原氏、實に其の尤なるものなりき。即ち聖武天皇以前に於て、鎌足は其の山科の家を捨てゝ精舍と爲し、不比等は興福寺を建てて氏の寺となせり。聖武天皇が光明皇后と共に、專念斯敎の爲に盡されしは、素より言ふまでも無し。妖僧道鏡の左遷と共に、政敎の一致全く破れ、天平以降の全盛一時の挫折を招きしが、平安朝に入りてより更に一層盛大の氣運に向ひ、最澄、空海、慈覺、智證等の名僧此間に續出し、一世の人心靡然

諸種の因緣を綜攝して、其の原動力となりたるものは、國民的精神の發動に外ならざるべし。蓋し王朝時代の後半期は、其の政治に於ても、宗教に於ても、文學美術に於ても、漢竺文明の摸倣を擺脫して是を日本化したる時代也。密敎の苦行道漸く衰へて、他力往生の易行道の起りたるは是の時代也。惠心、弘法の梵相より、金岡、春日の一派に轉じたるも是時代也。天平の佛像は再び見るべからず、却て定朝によりて風格の一變を來せしも是の時代也。是に於てか凌雲集、經國集の時代漸く去りて、古今集先づ起り、次で源氏以下の諸物語の時代漸く來らむとす。寬平以前にありては和歌國文は男子の恥辱なりき、然れども紀長谷雄の孫貫之は、土佐物語の作者にして、又古今集の撰者なり。大勢已に遷れるを見る。菅公は漢學發達の最高潮に乘じて而かも其衰頽を見るに及ばざりし也。平安朝の文學史は、公の生榮したる貞觀、寬平、延喜を境として、和漢文學の分水線を劃せり。而して是の線上に立ちて前後を俯瞰したる人は、實に公なりき。是の點に於て公は時勢の寵兒なりと謂ふべし。

文集を激賞して、『集七十卷、盡是黃金』(都氏文集卷三白樂天贊)と言ひ、或は渤海大使裴文籍が菅公の詩を評して、『道眞文筆、似白樂天也』と言へるを以て、時人是を無上の榮譽とし、菅公亦自ら誇りて『只恐前身是白樂天』と云へる等、何れも以て當時の人が如何に白樂天を崇拜せしかを推察するに足らむ。

是の如きは平安朝の初より、承和、貞觀の頃に至るまでの漢學隆興の狀態也。而して菅公は是の如き時に於て、儒宗の家に生まれし也。況むや其の天品の材能を以て、父祖三代の餘勢を受く、門地名望、嶷然として儒林の間に卓出せしは、自然の結果なりと謂ふべし。

而して菅公以後に於て、漢文學の漸く衰頽に赴けることを注意するは、公の位置を了解する上に缺くべからざる也。今茲に、其の原因を說明するの遑無しと雖も、從來詩賦の排對駢驪は、事を敘し情を抒ぶるに於て盡さゞる所あるを免れざるは其の一因なるべし。典據を連ぬ、故事を證するは、畢竟空文虛辭、毫も事の實際に益無きも其の一因なるべし。而して寬平以來遣唐使を廢してより、漢唐文物の輸入全く杜絕せられしことも漢學の挫折を來したる主因なりしならむ。而して是等

如此之時。（經國集序）。

と言へるもの、即ち是の時代の文華を誇燿したる也。菅公の祖父清公の如きも、當時儒林の耆宿たりし也。

漢學隆興の氣運に伴ひて、官立大學以外、幾多の私立學校の起りしことも亦注意すべき事實なり。和氣弘世の弘文院、菅原清公の文章院、橘皇后の學館院、恒貞親王の淳和院、在原業平の奨學院、藤原冬嗣の勸學院を初めとして、儒家大抵私學を有し、各々門戸を張て相競へり。碩學鴻儒として當世に名あるもの、累代其の人に乏からず。弘仁、天長の頃にありては、菅公の祖父菅原清公、勇山文繼、滋野貞主、桑原腹赤、南淵弘貞、安野文繼、安部吉人等、其の名最も顯はれ、承和貞觀の頃にありては、菅公の父菅原是善、田口達音、都良香、橘廣相等其の譽最も高し。菅公と年輩を同じうするもの三善清行あり、紀長谷雄あり、善淵愛成、大藏善行、藤原佐世等、亦顯はる。其の詩は概ね白樂天を師とし、力めて其の流麗典雅を摸倣せり。蓋し白氏は我が承和十一年に死せるもの、其の詩集既に早く我邦に傳はれり。其の詩の平明解し易く、流麗咏誦に適せるところ會々邦人の嗜好に投ぜしなちむか。都良香の如きは、白氏

然れども平安朝に入りてより、是の關係は漸く顚倒せり。平城、嵯峨、淳和の三朝は殊に漢學を奬勵せられ、一世靡然として風を爲せり。爾來才を言へば乃ち漢才を尚び、文を言へば則ち漢文を重ず。朝臣有司の最も主要なる資格は、支那の詩文を賦し、支那の典故を暗ずるにあり、人の又國文國史を言ふ者無きに到れり。大學に於ける紀傳道は文章道と改められ、文章生を以て進士と稱し、文章得業生を以て秀才と名け、科擧對策の法一に詩文に據れり。官文詔勅、亦概ね漢文を用ひ、朝野の縉紳漢文に非ざれば書かず、國文を用ふるを以て恥辱とせり。是を以て漢文を以て男子の文字とし、眞名或は男文字（テトコモジ）と稱して是を貴び、國文を以て女子の文字と爲し、女文字（ヲンナモジ）又は女手（ヲンナテ）と名けて是を擯斥せり。大勢既に是の如きを以て、詩文の士彬々として輩出し、嵯峨、淳和兩朝の間に撰するところの詩集三種の多きに及ぶ。經國集は凌雲、文華秀麗二集の缺を補ひたるもの、而して慶雲四年より天長四年に至るまで作者百七十八人、賦十七首、詩九百十七首、序五十一首、對策三十八首を收め、全部二十卷に亘れり。滋野貞主是れに序して

先歲昇霞之駕、叡藻猶遺當代、重輪之光、精華彌盛、臣閱史籍之卷、未有

蓋し本邦に於ける漢學の發達は、平安朝に始まりしに非ず、遠く佛法の傳播に伴うて漸く其の勢を得來りしが如し。聖德太子の十七憲法の如き、漢文の體裁大に備はれるを見る。奈良朝以前に於ける詔勅上表も、亦多くは漢文なりき。奈良朝に入りて、律令制度多く唐制に倣ひしより、漢學は大に奬勵せられ、侍讀、學士、文學等の官職新に定められ、天皇、皇太子、皇族の教育を司り、大學には明經、紀傳等の六科を置き、盛に經史を講じ、詞賦を授けたり。

天平勝寶三年に撰ばれたる懷風藻は、是の時代の詞人六十四人の詩百二十首を收めたるもの也。以て當時漢學の狀態を見るに足る。然れども國文は奈良朝に於て全く廢れたるにあらず、祝詞、宣命等、祭祀或は宮庭の大禮に關するものは、概ね國文にして、朝紳の間には和歌遙に漢詩よりも行はれたりき。萬葉集二十卷は、即ち是の時代の歌集にして、風調の雄大、古今に獨歩すと稱せらる。是を懷風藻の漢詩の幼稚未熟なるに較ぶれば、同日の談に非ざる也。是を要するに、漢學は奈良朝に於て漸く進歩の途に就けりと雖も、而かも未だ國文を凌駕するに至らず、宮庭朝紳の間に行はれたる文學は、尙ほ主として國文なりしが如し。

し本邦の文化は佛法の傳來によりて革新の端緒を啓き、大化の維新より淨見原の朝に到りて、律令制度漸く整ひ、奈良朝に入るに及びて文學美術大に振興せり。殊に天平時代の彫刻の如きは、高渾典雅、遠く後代の標範たり。文學に於ても詩賦に懷風藻あり、和歌に萬葉集あり、其他古事記、日本書紀の如き國史の撰あり。加ふるに聖武天皇は、帝威を傾けて像法の興隆に力め、至尊の身を以て三寶の奴と稱し、甘じて金仙の前に膜拜し給ひたる程なれば、佛敎の盛大前後に比無し。三笠山以西一帶の平原は、堂宇丹堊相望み、梵唄讃誦の音旦暮に相響く。小野老(オユ)が『青丹よし平城の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり』(萬葉集卷三上)とは、正に平城七代の榮華を歌ひたるものと謂ふべし。平安朝是の後を繼でより、太平恬熙の餘澤は大に文藝の上に顯はれ、燦然として煥發せる趣あり。殊に貞觀、元慶は、漢文學全盛の時期にして、本邦文學史上絶て其の倫を見ざる所。儒者としての菅公は、實に是の時勢の高潮に乘じたりし也。

二

固なるものありしが如し。其の精細は公の性格を論ずる際に於て說述すべきを以て、茲に贅せず。

以上述ぶる所によりて、讀者は略々菅公の祖先、幼時、及家庭を了解せられたるならむ。菅公は一面に於て政治家たり、他面に於ては詩人たり、而して是兩面の生涯は公に於て並立するを許されざりき。今や公年二十六、天は先づ公を導きて政治家たらしめむとす。蓋し詩人として成功せむが爲には、公は先づ政治家として失敗せざるべからざりし也。

然らば則ち政治家としての公の出處進退は如何。吾人是を語るに先ち當時の時代、並に公の性格に就いて少しく觀察する所無かるべからず。

第三章　菅公の生まれたる時代

一

菅公の生まれたる承和十二年は、仁明天皇の第十二年にして、桓武天皇平安遷都より第五十二年に當る。平安朝の文物將に其全盛期に入らむとするの時也。蓋

然れども茲に吾人の注意を要するは、公の健康なり。母伴氏臨終の際公に謂て曰く『汝幼稚之齡、得疾危困、余心不堪哀愍之深、發奉造觀音像之願、念彼觀音力、汝病得除癒』（菅家文草卷十一吉祥院願文）と。是れ幼時の病を言へるに過ぎざれども、恐らくは公は成長の後に於ても尚ほ羸弱の人なりしならむ。公の詩には其の根底に於て常に憂鬱の調あり、動もすれば風物に感じて輒ち悲哀の音を作し來る。而して心境轉々として遷り、悲愁歡樂立ろに其地を代ゆることあり、所謂る神經性の人也。是の如き氣質の人にして身體強健なる者は甚だ少し。公の詩甚だ多く病苦を言はざるも、蒲柳の質なりしことは數ゝ是を言へり。或は年四十にして顏容衰へ白絲鬢邊に懸るを嘆じ（菅家文草卷五對鏡）、或は殘菊を惜み『此是殘花何恰似、行年六八早霜鬢』（同惜殘菊）と歌ひて、其の鬢髮も亦白きを悲む等、何れも公の強健肥滿の人に非ざる證とすべし。而して晩年太宰府の謫居にありて、常に病苦に惱みしことは、其の詩の明に訴ふる所なりとす（第四章參照）。

身體の羸弱に次て、公に於て最も注意すべきことを佛敎の信奉となす。佛敎の信奉が菅家の遺法なることは、已に述べぬ。而して公にありては其の信念殊に深

以てせしことあり。菅公の父是善の如き、官參議に上りしも、其の家尚富まざりしが如し。是善が一禪院を建て、一觀音像を造らむと欲して而して容易に其の志を達し難かりしを以ても想像することを得べけむ。然れども是善は古人の如く裘葛の遺全く無かりしには非ず。是れ菅公が父公の宿願を繼續して吉祥院を建て、法華會を開きしは、是善の薨後一年餘の事なるを以て明に推察し得べき也。

父公たる是善が、一代の祠宗として上下の信任を得たる事は、其の君子人たるの事實を證するに足らむ。且公が博士となりし時却て榮達の速きを憂へて驕慢を戒めたるが如きは恭謙の人なるを證すべし。其の母君伴氏の、如何の人なりしかは、多く知る能はずと雖も、公の元服の際に詠じたる和歌、及び其の終に臨みて公に遺囑したる所を以て見れば、賢明にして慈愛ある母たりしを想ふに餘あり。殊に元服の和歌中に、公の將來を祝し、儒林の宗師たるべき希望を述べたるが如きは、實に儒宗菅原家の夫人たるに背かずと謂ふべし。想ふに公は是の賢父慈母の間に成立せる圓滿なる家庭に鞠養せられ、其の好望なる將來を夢みつゝ生育したるならむ。

責め、或は書に證して箕子の洪範九疇を述べ、或は老聃の玄聖、釋迦の妙理を論じ、或は六震動の名と三因緣の別と、念佛三昧經、大智度論等に詳なるを言ふ。博探弘搜汲々として學殖の深大を示さむとするものゝ如し。而して是の如き對策を評定せる、良香の文、亦頗る奇なるものあり。其の一節に曰く、

> 又寓言海水、難得游鳧之談、探跡幽荒、未能梟禽之怒、理窟難究、空疲五大山之往還、思風妄吹、徒共六萬歲之交載、又所引念佛三昧經、及大智度論、只擧六踊六使六體征、不分各六合三之因緣（都氏文集卷五）。

又以て對試の一端を知ると共に、菅公の學殖如何をも想見するに足らむ。即ち廿六歲の當時に於て、公は既に經書子史に通じ、略〻佛典を涉獵せしことは、是の對策によりて明なり。

公は是の如くにして對策に及第し、茲に愈々其の私生涯より公生涯に遷らむとす。吾人は茲に公の家庭及び健康に就いて一言する所無かる可らず。

菅原氏は累代富家には非りしが如し。其の祖古人は大學頭文章博士なりしが、家に餘財無く、諸子肌寒を免れず、是を以て朝庭特に其の四子に給ふに勤學の資を

集り公をして射を試みしむ。蓋し公の文事有りて武備無きを笑はむが爲也。然るに公弓矢を執て場に立てば進退悉く節に稱ひ、其の矢一として中らざる無しと（北野緣起）。是の事亦甚だ信ずべからざるに似たり。儒臣の家に武技を習ふは、當時の俗に非ず、菅公豈に獨り習はざるの技に達するの理あらむや。後年大將を辭するに當ても、身儒林に生れて武事を解せざるを言ふこと數々、是れ素より眞情ならずむばあらず。蓋し是れ後世の人、公の威靈を加へむが爲に、擬するに釋迦傳中の一節を以てせるに非る無きを得むや。

貞觀十二年三月、公廿六歲にして對策に及等し、茲に初めて進士の登龍門を經過せり。試驗官は文章博士都良香、課題は『明氏族』及び『辨地震』の二題にして、公の成績は中の上なりき。二文共に載せて菅家文草卷八にあり。今日を以て見れば、文を先にし、理を後にし、猥に故事を援引して、駢驪四六の典型を墨守するところ、空言虛辭寧ろ厭ふべしと雖も、當時是の如き文章を能くするに非れば、對策に及第する能はざりし也。地震の辭の如きは、一篇の大意天地二道の相關を說くに存するも、或は易に據りて『通三之位得一之儀』を說き、或は呂氏の十二紀を引きて、春秋を錯るを

當時都良香は大内記たり、儒門欝然として榮ふ、公就いて學びしが良香公の才に感じて其の師たるを恥ぢたりと云ふ(聖廟傳)。事或は訛誤ならむも、公の才學群を抽でたるを見るべき也。

英傑偉人の傳記に珍らしからざる如く、公の生涯を通じて幾多の神異譚の襯附せるを見る。公が五六歳の時、菅原氏の後庭に現出せりと云ふを初めとして、五十九年の一生に於て其事一にして足らず(第十參章照)。都良香に關しても、亦二個の異譚を見る。一は公を以て鬼語を知れりと謂ふにあり。都良香嘗て羅城門を過ぎ、陌頭の楊柳を見て句を得、曰く、氣霽風梳新柳髮と、沈吟久しうして次句を得ず。忽ち空中聲ありて是に續て曰く、氷消浪洗舊苔鬚と。良香大に喜び、以て己れの作の爲(つく)して、菅公に示す。公笑て曰く、上の句は卿の作なるべきも、下句は則ち鬼仙の語ならむのみと(記聖廟)。是の如きは畢竟俗人公の鬼仙に通ずるを證して、其の跡を神怪にせむとせるもの、寧ろ公の人品を傷くるものと謂ふべし。且つ良香は達者と共に公の師事せし所、何ぞ是の無禮あるべけむや。他の一は公を以て文事のみならず、又武藝に達せりとするにあり。公年廿六年、其の師良香の門にありし時、門人相

の折桂を祝したるものゝ如し。清和天皇の貞觀元年四月、公年十八、及第して文章生となる。二十三歳にして文章得業生となり、正六位下を授けられ、下野權少掾に任ぜらる。是時にありては公の學才大に進み、作る所の詩文往々成儒を壓するものあり。是善亦獨り詞賦駢驪の空辭を以て公に課せず、力めて諸史を講じて經綸の大體に通ぜしめむことを期せり。貞觀六年八月、後漢書を授けて諸生と共に公を試みたる時、公史を詠じて黄憲を得たり。其の序中に曰へるあり、

嗟虚四百之年、圖書絶筆孝獻、桓靈之弊、禮樂墜文於山陽、諸葛亮所謂、親小人遠賢士、是所以後漢傾頽者也、於是順陽范蔚宗、終紀傳而繫日月、亘唐太子賢、通注解以振膏肓、南陽故事、雖百代而可知、東觀群言、成一時之茂典、易曰、觀人文以化成天下者、文之謂哉、（菅家文草巻一）。

史乘に憑りて人文の功過を辨じ、文章によりて經世の偉業を濟さむとす。其の志すところ尋常腐儒とおのづから同じからざるものあり。病中肩に汗簡を舁て暴雨の漂流を覺ふざるものを笑て書淫となし、手に韋編を執て坑岸の顛墜を知らざるものを嘲て傳癖と曰ふが如き、公の志操の彷彿として見るべきものあるが如し。

り。何れも詩才の非凡を證するものに非るは無し。

臘月獨興

玄冬律迫正堪嗟、還喜向春不敢賒、欲盡寒光休幾處、將來暖氣宿誰家、氷封水面聞無浪、雪點林頭見有花、可恨未知勤學業、書齋窓下過年華、（菅家文草卷一）

殘菊

十月玄英至、三分歲候休、暮陰芳草歇、殘色菊花周、爲是開時晚、當因發處稠、染紅衰葉病、辭紫老莖惆、露洗香難盡、霜濃艷尙幽、低迷馮砌脚、倒惡映欄頭、霧掩紗燈點、風披匣麝浮、蜂採不如秋、已謝陶家酒、將隨鄭水流、愛看寒暑急、秉燭豈春遊、（同上）

十五にして元服を加ふ。是の夜母伴氏歌あり。曰く、

久かたの月の桂も折るばかり
家の風をも吹せてしがな、（拾遺集）。

當時試問に及第せるものに桂の枝を賜ふ、是を折桂と云ふ。伴氏の歌、蓋し豫め公

菅家御傳記以下の諸書、多くは是善の三男と爲すも亦信じ難きに似たり。或は公の出生に關して奇蹟を說くものあり。曰く、是善獨り南軒に憑れる時、庭上俄に髣髴兒あり、年五六歲、肌肉玉雪の如し。是善驚き問うて曰く、卿は是れ何れの家の子ぞ。曰く、吾れに父母無く又定住の家無し、願くは相公を親とし事へむと。是善乃ち養て子と爲すもの、即ち菅公なりと（北野緣起上聖廟記）。荒誕笑ふべしと雖も、奇蹟を假りて公の誕生を神祕にせむとせる後人崇敬の心の如何に深きかを想像すべき也。

公の幼時は史是を傳へざるを以て知るに由無しと雖も、其の早熟なりしことは國史中稀に見る所也。歲僅に十一の時、是善田口達音をして公を試みしむ。是時作れる『月夜見梅華』と題する公が最初の詩は、夙に人口に膾炙せり。

月輝如晴雲、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨、（菅家文草卷一）。

十一歲の小兒の作としては、着想措辭、共に驚嘆するに足る。田口達音は當時の一儒者にして、菅公の永く先輩として師事せし人なり。菅家文草に所謂田進士、田達音、或は田詩伯と云へるもの、何れも達音を指せる也。

天安二年、年十四にして『臘月獨興』の詩あり、貞觀十四年、年十六にして『殘菊』の作あ

以上盛述せるは、菅原氏の傳統也。菅公は即ち是の如き家門の傳統を享けて生まれたる也。古人以來儒業を以て榮え來りたる菅原氏は、公に到りて其の盛榮の絶頂に達せり。而して公の生涯は啻に一門盛榮の絶頂を飾りたるのみならず、當代歷史の大潮流に接觸して、更に國家的の意義を有し來れり。是れ公以前の菅原氏が文章經學の間に終始して殆ど時勢の經綸と爲す所無かりしに比すれば、實に一大飛躍と謂はざるべからず。清公、是善の如きは或は尙ほ歷史家を累はすに足らざるべし、菅公に到りては則ち傳記無かるべからず。

二

菅公名は道眞（ミチザネ）小名は阿呼（アコ）、是善の子なり。母を伴氏と云ふ。仁明天皇の御宇、承和十二年六月二十五日、平安菅原院に生まる（其の地は今の京都烏丸下立賣下町、今も尙菅原院あり）。公に兄弟ありしや否やは明ならず。菅原氏系譜には忠臣、輿善の二兄あり、輿善は承知元年入唐せりと記すれども、或は公の詩に「內無兄弟可相語」と云へるを以て見るも、或は諸種の記錄に絶て二兄の事を言はざるを以て見るも、事頗る疑はしきが如し。

て是善の材能に歸せざる可らず。是善著書頗る多し、文德實錄十卷は、都良香と共に撰する所、貞觀格は藤原氏宗等と共に作る所也。其他東宮切韻二十卷、銀牓輸律十卷、會文類集七十卷、有集十卷は、悉く其の自ら著す所に係る。深く佛法を尊信し夫人伴氏死して其の一週年に會せる時、法華經一部八卷、普賢觀經、無量義經各々一卷、般若心經一卷を寫して其の冥福を祈る。伴氏の冥福の爲に一禪院を建てむと欲せしも力及ばず、乃ち道眞に遺命して其の志を達せしむ。法華經は殊に其の愛誦せる所也。薨ずるに先つ一年、菅公に言て曰く、『法華大乘、寄レ汝報恩、當二共隨喜一、唯念懸車已迫、死門在レ前、須下待二明年一豫歸中于田舍上、于レ歸去之次、將聽二妙理一、妙理已、將レ結二因緣一、因緣已、余無二後累一。』と（菅家文草卷十一吉祥院法華會願文）。是の文に依て察すれば、是善は晩年田舍に歸りて講經を樂まむとせしものゝ如し。夫人伴氏も亦是善と等しく熱心なる佛敎信者なりき。其の卒する日、菅公に遺命して曰く、汝年尙ほ幼にして多病なり、吾れ死後の憂に堪ゑず、宜しく觀音像を造り奉りて祈願する所あるべしと（同上）。是によりて見れば、菅原氏の家庭に於ける佛敎の勢力略々想像するに餘りあるべし。

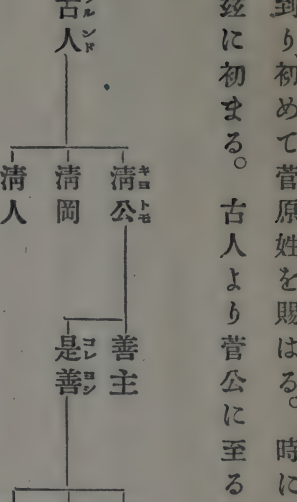
經を以て自ら樂めりと謂ふ（大日本史清公傳）。蓋し菅原氏の傳統は累代儒家たると共に佛教の熱心なる信者なりしが如し。菅公の如きは壯にして一度び薙髪を企てしが果さず、晩年に及びては緇衣を纏はざるも、殆ど一沙門の生活を爲せり。是の信佛の精神は已に公の祖父たる清公に胚胎せるを見る也。

清公の二弟清岡、清人は、其の名多く著れずと雖も、經國集に其の詩を載せたるものあるを以て觀れば、是の二人も亦文墨の人たりしが如し（經國集卷一及卷十四）。

清公二男を生む、長を善主と云ひ、次を是善（コレヨシ）と云ふ。善主年二十三、文章生となり、承和の初め唐に入る。其の名は顯はれずして已む。菅原氏の遺鉢を受けて儒業を繼ぎたる者は是善なりき。是善も亦其の子なる菅公と等しく、頗る早熟の人なりしが如し。幼にして父祖の業を享け、弘仁の末殿上に侍せりと云ふ、時年僅に十一。承和の初め文章得業生に補し、同七年大學少允となり、次で大內記文章博士となり、東宮學士を兼ぬ、前後三朝に歷事し、貞觀十四年に至りて官參議に昇る。父祖三代の餘力に據り、文章經學、共に一世の宗師たり、貴紳學士其の門に出づる甚だ多し。當時儒家門戶を張て相下らず、菅原氏是間に立ちて、家名益々隆なるは、主とし

著亦少からず、令義解は清原夏野等と共に撰ぶ所、凌雲集は小野岑守等と共に撰ぶ所、其の他文華秀麗集三卷、經國集二十卷あり。其の上表には何れも大官の名を書せりと雖も、實は清公の力最も多きに居る。今日奈良朝の末期及平安朝の初期に於ける漢文學の狀態を知らむと欲せば、必ずや是等の諸集に據らざるを得ず、然らば則ち清公の文勳獨り當代のみに限らざる也。惜むらくは史の傳ふる精しからざるを以て、其の事蹟を審にするを得ずと雖も、其の詩文に緣りて察するに、清澹高潔の生涯を送りしものゝ如し。殊に性甚だ音樂を好み、長じて尙ほ耽る。經國集に嘯賦の一篇を收む。其の序に曰く、『清公少うして音樂を好み、長じて而して尙ほ耽る。造次と云ふと雖も心未だ暫くも捨てず。然れども性好む所と背き、事意と違ふ。未だ曾て手に一絃を撫し、口に一管を吹かず。池亭景落ち、物色將に凉ならむとするや、吟咏乍ち疲れ、之に繼ぐに嘯を以てす。洪纖口に在り、脩短心に任す、曲として寫さざるは無く、歌として習はざるは無し。即ち知る音樂の妙は嘯に過ぎたる莫きを』と（經國集卷嘯賦序）。又以て其の人物の一端を想見すべきか。又文章院を建設して學を講じたるが如きは、敎育上の一事業也。晩年深く佛法を信奉し、造像、寫

人に到り、初めて菅原姓を賜はる。時に天平元年六月、聖武天皇の第六年なり。菅原姓茲に初まる。古人より菅公に至るまで四世、凡そ一百二十年、其の系譜左の如し。



古人は菅公の曾祖父なり。官遠江介に至り、侍讀たり。弘仁十年卒す。想ふに儒道を以て聖武、孝謙、弘仁の諸朝に歷事したりしならむ。菅原氏の儒家たると是より始まる。古人の後を清公と云ふ。清公に至りて菅原氏の儒業大に振ひ、僧空海亦從て其行にあり。留まること一年、歸て文章博士、大學頭となり、名聲漸く高し。天長中出でゝ播磨權守と爲る。未だ幾ならず、公卿議奏して曰く、清公は國家の元老なり、遠く都を離れしむべからずと。乃ち詔して是を召還し、再び文章博士を兼ねしむ（大日本史列傳）。又以て清公の人物如何に當代に重ぜられしかを見るべき也。其の撰

近時文學博士井上哲次郎氏、公に關する雄麗なる論文を『太陽』紙上に公にせられ、公の事蹟爲に大に顯はれたりと雖も、公の性行の批判に於ては尙ほ一段の精到を望むべきものあるが如し。吾人素歷史家に非ず、又傳記家に非ず、唯平生公の史蹟に關して興味を感ずること頗る多し。近時同人集て一叢書を出版するに當り、吾人自ら撰びて是に當る、必ずしも自得する所ありと謂はず、暫らく其の好む所に從ふのみ。

第二章　菅原氏の傳統及び菅公の少時

一

菅原氏は代々儒道の家たり。傳ふる所によれば、其の先は天穗日命十四世の孫、野見宿禰に出づと謂ふ(和歌色葉集上之二)。野見宿禰は垂仁帝の御宇の人にして、出雲國の勇士なり。當麻蹶速と角觝を試み、是を踏み殺せしかば、其の勇によりて蹶速の食邑を給はれる事、及び土偶を以て殉死に代へむことを乞ひ、依て土師姓を賜はりし事は、人の知る所也。三世の孫、身臣、改めて土師連姓を賜はる。身臣十一世の孫古

的批評に從はむことを力めむ。唯恐る、人或は吾人を以て好て異を樹て、故らに公の德を傷くるものとせむことを。然れども事の實は掩ふべからず、理の當は枉ぐべかず、信ずべきを信じ、疑ふべきを疑ふ、吾人に於て又奈何ともすべからざる也。今の世に於て歷史の研究に忠なるものは、一種の道德的惡感の爲に動もすれば社會の誹謗を受く、是れ歷史家に取りて悲むべき迫害也。一私人の時勢の大體に關せざるもの、例へば辨慶有無の問題の如きは强て言ふを要せざらむ。而かも身一世の樞要に當り、事百代の文化に關はるもの、例へば菅公の如き人物にありては、傳說的感情を離れたる史的研究の特に必要なるものあり。世人は是の如き研究に對して猥りに道德的誹謗を加ふること無かるべき也。世に溫良恭謙、忠良博雅傳ふる所の菅公の如き人物あらば、苟も本邦の民たるもの、誰か崇敬追慕せざらむや、唯菅公てふ實在的人物が是の如き性行を有せしや否やは、全く別問題に屬するを記憶せざるへからず。

從來菅公の傳記に關する書少からず、然れども零碎斷片に非ずむば、年譜緣起の類のみ、一として吾人の提供せる疑問に對して公を解釋したるものあらざる也。

菅公の一生は常に時代に接觸せり、王朝の文學政治は公の生涯に於て正に其一半の歴史を啓示せり。是を以て公の傳記を語るは即ち當時の時世を語る也。即ち公の一身は、文學上に於ては本邦に於ける漢學發達の最高潮を標榜し、政治上に於ては藤原氏の權勢に對する最後の反動を代表す。公死してより日本の漢學は永く振はず、皇家の權力全く藤氏に移れり。是の一大轉換の樞機に當りて、平安朝史の最も趣味ある部分を語るものは實に公の傳記也。

世に或は菅公を知らざる者はあらむ、而かも一人の天滿天神を拜せざるもの有らざる也。然らば則ち天滿天神とは如何なる神ぞ、如何なる威靈、如何なる功德の爾かく國民の崇拜を受くべきものありや。是の如き崇拜は菅公其人の追慕及び崇敬と如何なる關係ありや。人既に神として祀らる、其の死後の威靈は即ち其の生前の心事ならずむばあらず。是の二つの者は菅公に於て果して如何の關係かある。公の傳記を言ふもの亦是事に及ばざるべからず。

吾人は是の如き疑問の解釋として聊か公に就いて語る所あらむとする也。吾人は是の目的の爲に、暫く公に對する一切の傳說的感情を擺脫し、事に冷靜なる史

吾人は是に於て問はざるを得ざる也、菅公とは夫れ如何なる人ぞ。

實に歷史家は幾たびとなく菅公の讃美を繰り返しぬ、吾人今に及びて一字の是に加ふべきものあるを見ざる也。洵に公の人物性行果して傳ふる如くむば、正に是れ一世の賢哲、百代の龜鑑、誰かは敬して而して仰がざるべき、其の盛德を稱揚するに於て寧ろ詞人の筆の短かきを恨とすべき也。然れども菅公果して是の如き人なりし乎、其性行果して爾かく圓滿なりし乎。若し然らずとすれば、吾人は當に問ふべきなり、菅公とは夫れ如何なる人ぞ。

菅公の身世は其の一生に於て幾度か轉變せり。公は一度び學者たり、一度び政治家たり、而して二度び詩人たりき。公の天分は夫れ何處に存せし乎。殆ど歷史上の套語となれる菅公の盛德は、其の政治家たるにあるか、然らば則ち政治家としての功業德澤は如何。其の詩人たるに存する乎、然らば則ち詩人としての性情辭藻は如何。抑〻其の人物の上にある乎、然らば則ち公の人物の如何なる點か果して能く是に當るべき。是に於て吾人は問はざるべからず、菅公とは夫れ如何なる人ぞ。

第一章　序論

題して菅公傳と云ふ、或は問はむ、菅公に就いて尚ほ語るべきことありやと。實に生きては忠良の臣と稱せられて芳名を汗青に留め、死しては威靈の神と崇められて千古に廟食す。今に於て國民誰か公の名を仰がざらむ。而かも吾人を以て見れば、菅公の人物性行は、既に明かなるが如くにして、實は未だ必ずしも明かならざる也。

身儒林より起りて位三公に昇れるもの、公の前代に於て一吉備氏あるのみ、事既に異例に屬す。當時藤原氏は、外戚の餘威に誇り、攝關の門閥に乘じ、一族の權勢上下に蔓延せり。菅公一寒儒の身を以て是の間に處し、俄に天子の信任を得て聲名一時を皷動す、其の蹟尋常ならざるものあり。一朝讒奸君明を掩うて邊陲に左遷せらるゝや、榮辱忽ち處を異にせるも、而かも一語の天を怨み人を憎むもの無し、其の情亦人に異なるものあり。薨じて後、官位幾もなく舊に復し、遺靈長へに神として祀らる、天滿天神の名、何ぞ夫れ莊嚴偉大なる、其の跡寧ろ神怪なりと謂ふべし。

目次

第一章　序論
第二章　菅原氏の傳統及び菅公の少時
第三章　菅公の生れたる時代
第四章　菅公の性格
第五章　政治上の菅公、其一(讃岐守)
第六章　致治上の菅公、其二(藤原氏の政治上の位置及び宇多天皇との關係)
第七章　政治上の菅公、其三(菅公の榮達及藤原氏との關係)
第八章　政治上の菅公、其四(流竄)
第九章　詩人菅公
第十章　菅公の崇拜
菅公年表

自序

去年の秋、同人集て一叢書を出版せむことを議し、予を要して與らしむ。予書窓事多きを以て固辭すれども聽かれず、乃ち已むを得ず、菅公に關する一論文を草して責を塞ぐべきを約せり。是れ平生公の事蹟に就いて多少の興味と研究とを有するを以て也。爾來年華忽茫として去り、期を過ぐるも未だ約を果すに遑あらず、書肆同文館主人來り促すこと甚だ急なり。乃ち二月の初、大森の僑居に退き、門を杜ぢ客を謝し、終日几に隱りて筆硯を事とするもの前後九日、夜以て晝に繼ぐ。成れるものは即ち是の書也。蒼皇の間、文迫り意到らざるものありと雖も、菅公に關する平生の感想は畧ゝ披瀝し盡したるに庶幾し。潛に思へらく、世未だ菅公傳無し、尙ほ以て時文の缺を補ふに足るものあらむか。然れども予素と歷史家に非ざるを以て、平生是種の文字に慣れず、自ら顧みて深く大方に恥づと雖も、今に於て如何ともする無き也。乃ち書の成る所以を記して、卷首に序す。

明治三十三年三月十五日　東京　高山林次郎

菅公傳

からず。

又當時の佛師運慶の作に清盛が僧形の木像あり、今尚ほ京都六波羅密寺に傳はり、其の寫眞は載せて美術大觀の中にもあり。就いて見るに眉目秀麗、溫雅の情掬すべきものあり。予未だ是の像の果して運慶が手に成りしや否やを審にせず、良し然りとするも、其容貌の果して眞に迫れりや否やは討ぬるに由なし。されど少くとも清盛が世人の想像する如き惡入道ならざりしこと丈は畧ゞ察し得べけむか。況むや大日本史には、其の出處は審ならざれども、『姿貌美』と明記せるをや。

（三十四年九月）

ひ花よりも猶かうばしく、玉の簪照る月の姿、あたりも耀くばかり』なりき。七の君は嚴島の内侍の女なりしが『才藝は無かりけれども美貌は人に勝れたり。』

扨て、男子の方は如何にと云ふに、嫡子重盛は威儀堂々たる人にして、盛衰記には『容儀見つべし、進退度あり』と評せり。其の弟知盛、知度等の容貌は詳ならざれども、重衡の美男なりしは明也。重盛の嫡子維盛が父に優りて立派なる男子なりしことは、平家物語無紋の沙汰の條に『御邊は人の子にはすぐれて見え給へり』と云へる重盛の言葉によりても知らるべく、其の他富士川の條、熊野參詣の條、何れも其の絶世の美貌を稱せり。維盛の子六代はたこれ希代の美少年にして、文覺上人を恍惚たらしめ、助命の爲に奔走せしめたる事實は人のよく知る所也。

是の如く清盛が前後の族系は美女美男を以て充滿せるに、何ぞ獨り清盛を惡人道と相すべき謂はれあらむや。加ふるに平家は忠盛以下累代文藝の趣味に饒なり。その品性の優雅、愛情の纏綿、想ひ見るべし。清盛獨り粗厲無情の木强漢なりといふの謂はれあるべからず。是によりて察するにかの祇王、佛の輩は眞に清盛が意氣な入道姿に打込みて、捨てられたるが哀しさの念佛三昧なりしやも知るべ

清盛は曾に世人の想像する如き惡入道に非ざるのみならず、眉目秀麗、容姿閑雅なる一貴紳たりしに相違無し。平家物語、源平盛衰記などを案ずるに、清盛自身の骨相に就いては特に明文無けれども、其の美男子なりしことは、其の父祖子孫の人品によりて血統上より推察するに難からじ今その概畧を左に擧ぐべし。

清盛の母は白河天皇の宮女にして、後に忠盛に賜ひたる人也。帝寵を被りし程の女性なれば美人なりしは言ふまでも無からむ。父の忠盛は一目こそ眇したれ、十人並以上の美貌を具へしことは、仙洞の女房が命をかけて戀ひ焦れしにても知らるべけむ。即ち清盛の父母は共に美しかりしと假定するを得む。

源平盛衰記によれば清盛に七人の女子ありき。何れも絶世の美人なりしが如し。即ち一の君は櫻町中納言の室なりしが、左大臣兼雅垣間見て戀慕の情に堪えず、遂に御臺所に申受けし程の美人なりき。二の君は建禮門院にして國色並びなかりしは言ふまでも無し。三の君は世にも勝れたる琵琶の上手、四の君は情ある女房にて琴の名人、何れも希代の美人なりき。五の君は近衛基通の室にして、衣通姫と綽名せられし程の美人なりき。六の君は七條信隆の室にして、『翠黛紅顏の粧

早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界高麗天竺震旦のはてまでもまかりなむ。悲しい哉、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の賓とならむとは。宗盛頓首謹みて申す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

かくて平家は忘びぬ、亡びぬるまでも成敗の爲に其の名節を枉ぐることをなさゞりき。あはれ平家の世ざかりはまことに大いなりしが、其の沒落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしき哉平家、かくして滅びたりとて何の恨むところぞ。

（三十四年四月）

清盛骨相考

平清盛の骨相として俗間に流布せるものを見るに、大かたはたとへば顏赤く肥え、眉太く昂り、眼は圓くして鋭く、口鬚いかめしく兩頰に横はり、見るから剛情我慢の惡相を具へたり。清盛一生の性行より考ふればその形相はげにかくもありたらむかと想はるれども、歷史上の事實は全く是に反せり。

正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ、祖宗歴代の神靈、我君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來度々の逆亂を鎭めて九州の者共をば皆內ざまへこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をも打忘れて、あづま夷の下知に從ふこそ奇怪至極なれ。

本三位の中將一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さむとぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く院宣謹みて承り畢むぬ。道盛の卿以下、一の谷にて誅せられけるもの其數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばむや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。そも〳〵我君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷北狄の禍にあひて暫らく西國に御幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし、還幸なからむに於ては、神器などか都に還るべき。そも〳〵賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められし所なり。然るに忽にしてこの鴻恩を忘れて妄りに干戈を弄ぶ、やがて神罰其身にかへるべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思ぼし召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、

は、ゆゝしくもまた哀れの極はみなりき。

木曾は兵衛の佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ゐて院宣乞ひうけゝれども、孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合躰して兵衛の佐討つべきよしを言ひ遣りぬ。平家の答へは斯くなりき。よしや世は季になりぬとも、木曾なむどに語らはれて如何でか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく甲を脫ぎ、弦をはづし、來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきかと。あゝ何ぞ其の言辭の堂々として亡落のやからに類はざるや。平家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頽勢を廻らさむとだに思はゞかゝる時こそ乘ずべき機會なれ、さるを名分の正しきを執りて、成敗の數をかへりみず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならむも、斯くして滅びむは、垢を含みて存らへむよりも如何ばかり美はしかるべき。

太宰府に落ち行くや、緒方の三郎使して申しけるは、まことに重代の芳思を思はざるに非れども、一院の仰せ默しがたければ、九國におき奉るべき地も候はずと。平大納言乃はち衣冠束帶して出で向ひて宣ひけるは、それ我君は天神四十九世の

べしや。梶原の源太が二度のかけに、箙に梅が枝かざしゝは、源氏無二の美譚と傳ふれど、無官の太夫は薄化粧して討たれしぞかし。

一の谷に敗れてより、最後の日は日に近づきぬ。氣にはやる源九郎、はやくも四國にわたりて、平家又海に浮びぬ。阿波、讃岐既にそむきて、敵の勢日に加はれり。長汀の煙波もとの如くうるはしけれども、ことごとく敵地なれば、漕ぎよすべき渚も無し。あはれ平家かゝる時にだも風雅の遊びは忘れざりき。日暮小舟を漕ぎよせて、高く紅の扇をさし立て、柳の五衣に緋の袴きたる女房のそを射よとぞ誘うめる。那須の與一がほまれの弓勢に、兩軍舷をたゝいて相和せしが、かの船の中より平家の侍、あまりの面白さに感に堪えずやありけむ、扇立てたる所にて舞ひすましけるをば、無慚や、與一は是の侍を眞倒に射仆しけり。束えびすには人を殺す外に譽れと云ふもの無かりしぞ是非もなき。

九

平家はさすがに名門のことゝて、沒落のきわまて大義名分を執りて動かざりし

八

或は文弱と誣られもせむ、或は優情と笑はれもせむ。たゞ坂東武士のむくつけきにくらぶれば、平家の侍こそ心往くばかり床しけれ。

よしや身は西海の藻屑とはてもせよ。藻しほ草かきのこしたるこの歌の一つだに殘らざらんには、見はてぬ夢の何ぼう口惜しかるべき。こゝに沒落の怨劇に際して五條の三位をおとづれし薩摩の守、情も深う、哀れも殊に勝れたらずや。

おなじき哀れは經政が上なりき。永代の名器この身と共に亡ふべからず、この身今都を落ちて何れの日いづれの時か再び歸り來べき。こゝに鐵衣の袖に青山の琵琶をかゝへ、泣く〳〵仁和寺の御所にまかりぬるこそ、いかばり優にやさしく覺えしか。

津の國は一の谷、水島、室山の餘勢をこめて、けふぞ源平わけ目の軍、坂東武者のはやり男どもが、一二のかけを爭ふ間に、靜に管弦の樂を恣にせるなど、心ゆくばかり哀れならずや。げに東國の勢、何十萬騎かあるらめども、鎧の袖に笛もつ人のある

げに名門の最後はかくてこそあるべかりけれ。およそ邦家の滅亡、必ずしも美はしからず、たゞ平家の沒落にいたりては何物の美かよくこれに類ふべき。源氏の興亡の如き、あづまえびすの品下れる言ふばかりなし。重代の仇未だ報ひざるに、同門の隙早く開け、四海僅に一に歸せば兄弟の爭ひ直に始まる。兵衛の佐はげに智謀にたけたる大將にはおはしけれども、みやびたる優しき心、露ばかり有ち給はざりき。我執の念、餘りに強かりければにや、ねたみ深く、心ひがめり。されば讒奸やゝもすれば骨肉の間に入り、一族の連枝、時に路傍の人にも劣れり。權勢いくばくもなく臣家の手に落ち、宗廟はやく祀りを絶てども、一人の義に殉ひ、恩に死するもの無し。かくの如くにして兵威何のたのむところぞ、利運何の喜ぶところぞ、而して衰亡また何の悲むところぞ。盛衰興亡はもと人事の常、むしろ深く喜憂するに足らざらむ。たゞその運命に當るの人、心優しく情うるはしからば、何の幸かよく是れに加ふべき。あゝ吾れをして時を同じうせしめむか、願はくば源氏となりて興らむよりは、むしろ平家となりて亡びなむ。

く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼、この時、この人、想ひ果して如何。

七

古より亂雜の世には反覆の人あるを免れず、安きを求め、危きを避くるは、已みがたき人の情なれば也。さもさうず、一の池殿の大納言が、舊思をたのみとして兵衛佐が芳心を望みしを外にして、平家の一門は、上は大臣納言より、下は衛府、諸司の椽に至るまで、ともく〳〵に沒落の運命を同じうせしこそゆゝしけれ。

想へば積善の餘慶既に家に盡き、積惡の餘殃早く身に及べり。もとより賴もしからぬ行末かけて、何をか望み、何をか願はむや。たゞ十善帝の王、三種の神器を帶して今ぞ一門の末路に立たせたまふ。いでや如何ならむ野の末、海のはてまでも行幸の御供申し、先世の契りをふみ、かつは重代の芳恩にこたへなむず。あはれ故入道大相國、淨蓮大禪門も照覽あれ。世は是非なうも武運の末とこそ覺ゆれど、名門の最後はかくてこそあるべけれ。

野の山のあなたに隠れ家もなきか。いざさらば已みなむ、都の中にていかにもならむよりは、西國の御幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はむや。生死もわかぬ別れ路に、人のあはれの限もなし、また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅、池殿、西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京、白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となしはてぬるこそあはたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎むなしく殘り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元このかた、天下の榮華を盡したる花の都の故郷をやけ野の原とかへりみて、末も煙の波路をば行衛もしらずさすらうらむ。直衣束帶の身にも今は黒金の衣をのべけれども、誰かは咏歎の餘哀になれて矢弓の譽を勵むべき。さても捨てがたき命や。今こそは世にも人にも憂かりけれ、流石は忍ばるゝ昔の樣の夢に入るをば如何にせむ。翠華搖搖として西に向へば、秋風到るところ野に充てり。あゝ昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行く手の空はわかねども、身にしむ秋は歎かれず、渚によする波の音、袂にやどる月の影、いづれが心を傷ましめざるべき。月の出るさの山の端をあなたの空とや思ぼしけむ、日暮眩に笛ふ

知らず、悪所を馳すれど馬を倒さず。軍には親も討たれよ、子も討たれよ、死にぬれば乗り超え〳〵て戦ふまでなるを、あはれ西國の武士の優長さよ。親討たれぬれば子は退き、子討たれぬれば親は引く。寒しとてたぢろぎ、夏はあつしとてためらふ。凡そ東國の軍にはゆめ左様の事候はず。

かゝる柔弱の懦夫を集めて、かゝる剛健の勇士に向ふ。嵐の前の木の葉のごと、一さゝへもたまらず散りぬるこそ是非なけれ。

六

凡そ人國のつたへ遺しし史は多ほかれど、平家の都落ばかりあはれの極はみにもまた目覚ましきはあらじ。東夷北狄なんどの夢にだも知りがたき美はしき歴史はげにこれよりぞ始まりぬる。

平城の餘燼未ださめず、墨股の勝鬨尚ほひゞきぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡の前後に滿ち〳〵ぬ。宇治、淀の備へもろくも潰へて、都も今を限りとぞ見えし。こざんなれ、一門の天下、身をおくに處なく、この世のうきにみよし

宇治橋の戰ありし時、平家の方の侍大將、上總の守忠清、橋上の戰手痛きを望みて、折節五月雨の水に河渡すべき力無く、今にも敵に馳せ加はらむず南都の大衆を控へながら、淀一口、あるは河內路に廻るべくやなど詮議す。下野の國の住人、足利又太郎、あはれ優長なる軍詮議かな、目にかけたる敵を討たずして宮を南都に入れ參らする法やある。淀、河內路へは天竺震旦の武士を召して向はれ候へ、坂東武者のならひ、川を隔てたる軍に淵瀨嫌ふやうやある。續けや殿原。とて眞先にこそ打ち入れたれ。その日の勝利はげに坂東武者たる又太郎が先陣のいさほしにぞ歸すべかりける。

世はひるがへりぬ、同じ年、平家はかゝる坂東武者の敵をして富士川のほとりに對陣しぬ。宇治橋の戰に優長なる軍詮議を笑はれたる忠清は又もや侍大將たりき。千にひとつも勝たうやうのあるまじくぞ見へし。そのおり齋藤別當が申し條こそ面白けれ。

いとほしや大將軍の君にはこの實盛を强弓とばし思召し給ふにや。坂東にては大矢と申すものゝ十五束に劣りて引くは候はず。彼等馬に乘りては落つるを

々の後に祈願し給へるこそ、かへすゝも心得ね。内府かくてあらむ間は、入道が惡逆もさほどまではつのらざりしなるべく、壽永の秋に都落の哀れもなかりしなるべし。そもゝ兵衛佐が旗揚も内府世を早ふせさせ給ひければにこそ。

五

保元平治の昔には、さしも名だゝる平家の旗風の、かくも振はざらむとは誰かおもひ知るべき。泰平四百年の間に薫蒸せられたる王朝文弱の風に染みてより、わづかに三十年、黒金卷の無反は螺鈿の細身となり、素布の狩衣はいつしか禁色雜袍に、朝家のさかへを誇りぬ。あるは容儀帶佩の美に後宮の譽を望み、あるは歌舞音樂のたくみに時流の名を爭ふ。さればよし太刀とるすべは知らざるも、歌詠まざらむを恥となし、弓ひく腕は弱くとも、管弦の調べに習はざらむを恐る。かゝる間に關東の武夫雲の如く起りぬ、勝敗の數戰はずして既に分れ、沒落の運命この時はやく定まりぬ。

豈たゞに富士河の水鳥に驚ける十萬騎を怪まむや。一とせ源三位の事ありて

きを增しぬ。一夜熊野にわけ入りて、祈り申さく、平家の運命尙ほ盡きずむば、願はくは入道が惡心を和らげよ。もしさなくして、榮耀一期に限り、恥後昆に及ぶべくは、願はくは重盛が命數を縮め給へ。かくて冥願證を現はして內府病にかゝりぬ。ござんなれ、一門の運命も今を限りと覺ゆるぞ、宋醫神の如きも我れに於て世を永うするの願無し。無紋の太刀やがて後身に傳はりて來世の願ひ遙に靑王にわたりぬ。入道が最後の上なく勇ましかりしに較べていとも〳〵哀れなるは內府が末路なりけり。

四

さはれ小松殿は朝家の重臣、平門の柱石として、公私內外の望みのあつまるところ、いかなれば一身を安んずるをこれ急ぎて、この世、この人、わけてはこの君の將來を慮り給はざりしか。いかなれば佛說無常に感じて自ら世を早ふせさせ給ひしぞ。世は如何にもなりなんだゞ力を盡し忠を勵みても及ばざらむ時、かねてなき身のせんすべなからめやは。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を冥

して生くるもの入道こそはまことに古今の大丈夫にてありけれ。

三

小松の内府重盛は正しく入道が嫡統にてましませども、そのさがはいみじう違ひ給へり。入道が執着強く情剛はさに反して内府はあくまで道理に明なる人なり。よく人を察し世を思ふ人なり。身は武臣の末を以て連府槐門の位にいたり、一門の所領國郡に半ばして田園一家の進止たるさへ前代未聞の末おそろしき朝恩なるに、父の非道日につのり、はては帝座に迫り参らせむこと、まことに神慮に恐れあり。こゝに四恩十善の教に君臣の大義を説き、忠孝兩全の歎きに父子の私情を訴ふるさま申し受くる所詮は、只重盛が首を召され候らへとまでの諫言こそ、世にもあはれの極はみには覺ゆれ。

されど入道が非業はいよ〳〵つのりまさりぬ。解脫同相の衣はかたのみにして、破戒無慚の行ひ日に新なり。上下心を惱まし、災異しきりに起り、天地晴濛として世は心細くぞ見えにける。よろづ深く思ひ入り給ふ内府は、そゞろに無常の歎

しを思ふことなかりしか。更に小松の内府が身命にかへて乃父の罪業をまもりし至孝の情におもひ至りて、恩愛のきづなにうたゝ悔恨の心を動かすこと無かりしか。かりに佛門に歸依して入道と呼びなせる身の今や六慾煩惱のほだしを離れむず大事のきわに今生の名利を捨てゝ未來の淨樂を欣求するの一念を發することなかりしか。否々あらず入道こそは死に至るまで其の初念を飜へすことあらざりき。彼れはまさにその生ける如くにして死したりき。

兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそかへすゝも遺憾なれ。我れ死にたりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず。急ぎ討手を下し、頼朝が首をはねて、わが墓前に懸くべし、それぞ、今生後世の孝養にてあらむずるぞ。一念の執着に必衰の運命を物ともせず、三世の因果を身にかへても尚ほ怨敵に報ふるをなす、あはれ丈夫の心はかくこそ強くありたけれ。道に背きて心に疚しからず善惡一我の擇ぶにまかせて毫末も悔ゆる所無し。天も落ちよ地も裂けよ四海の波をひるがへしてわが頭にかくるとも、なほこの一我を如何ともするなし。六尺の渺軀こゝに至れば天地の大にも較ぶべく、運命われに於て浮塵に等し。所謂死して而

の里の哀れをとゞめけるこそなか〳〵に淺ましかりしか。

咲きも殘らず散りも初めぬ櫻花あらし無くともかくてやは已むべき。一朝東關急を傳へて、西風漸く競はず、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌木匂の鎧着て、連錢蘆毛なる馬に金覆輪の鞍おかせたる容儀帶佩こそ天晴平門隨一の貴公子にはあむなれど、富士河の水鳥に算を亂しゝ十萬餘騎は、おぞや後代の笑を留めしに過ぎず。加ふるに北士俄に雲亂れて木曾の山氣漸やく都に迫り、雨山の衆徒また既に反覆の色を示めしぬ。平家の運命日にます〳〵急なり。

時しも入道病にかゝりぬ。げに怪しき病なりしかば、生死の境、旦夕に逼りきと覺ぼし。あはれ病の床のさびしきに霜夜の鐘の枕に沈む時、安藝守のむかしより太政入道の今に到るまで六十四年の生涯を靜におもひ出でゝ時而して命の際の今の身ぞと觀ぜむ時彼れ果して如何の感慨を催しけるぞ。一代の榮華身にあまりて、保平のいさほし又かゞなうるに遑無しとは思はざりしか。己れにつらかりし人々をかくまでに惱ましゝことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かしまゐらせては軍兵を擁して法皇を幽閉し奉りしことの中にも非道の所爲なり

さるにても入道相國こそ面白き男なりけれ。人をも君をも物の數とも思はざりし不敵の根性は、げに惡逆無道の極はみにはあむなれど、その世をおのが心のまゝにして、飽まで我意をふるまへるさま、またなくぞ見えし。男たらむはかくもこそありたけれ。

弓矢のいさほしはや畢むぬ、朝家の權柄今はたさかりなり。一門殿上にのぼりて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなこゝに集る。むかしは殿上の交をだに嫌はれし人、今はこの人ならでは人に非じと唱はれ、三百の禿童は路に徃反すれど、京師の長吏爲めに目を側たつばかりなり。されば十善の帝王、かしこくも外祖の威におされ、一とせ八幡賀茂御幸は、八重の潮路を嚴島とぞふれられける。なにがしの卿が入る日をも招きかへさむず勢と書かれしもげに理なりきと覺ぼし。

不敵なる入道は私門の榮に飽き足らで、世に人なきやうに振舞はれけるこそゆゝしけれ。こゝに卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てしても、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、おたぎ

平家雑感

一

世にも哀れは平家とぞ云ふめる、まことにこの一門の盛衰を考ふれは、心も言葉もなか〳〵に及ばざりけり。

案ずれば一旦の榮華にふけりて百年の計をおもはず、秋や嵐の吹きすさばんずあしたなほ春の夜の夢おぼろにして醒めての後は、行手をば流石に浮世と觀じても、先世後代、既に棲をかえたるを如何にすべき。今を昔にかへさむ術も片糸のよりくづれたる世こそかへす〳〵も是非なけれ。

さればこゝに風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終り、かしこに恩愛に絆されては三身の現在に來世の果報を思はず。哀れは桐の一葉に散り初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。想へばくしきまでに哀れなりける運命かな。

二

其の意志を徹底す、是れ死して尚ほ生くる也。彼れが六十四年の生命は是の如くにして初めて光焔あり、意義あり價値あり、偉大ありと謂ふべし。吾人清盛の死を大なりとす。

嗚呼清盛、彼れは生まれて其の爲さむと欲する所を爲しき。天下は彼れの意志に服從せり。彼れは是の生涯に於て常に自ら安じ且自ら甘じたりき。惡逆無道の名を後世に流せりと雖も、彼れに於て素より遺憾なかるべきなり。吾人清盛の生を大なりとす。

（三十四年夏）

りと謂ふに非ずや。凡そ人間ありて以來、其體溫の沸騰點以上に達したるが如きは古今東西何處にか其の類例を見得べきや。清盛は實に是の如き大熱に罹りたり。生ながら地獄の神火を胸に燃やして人間の呼吸を炎に化するものゝ如きは古往今來清盛一人あるのみ。而して彼れは胸に是の大熱を藏して尙ほ其の一念の執着を遺却する事あらざりき。彼れは熱の爲に其の猛烈なる意力を欺瞞せらるゝことあらざりき。見よ、彼れの遺言の如何に崇大猛烈を極めたるかを。佛事の孝養堂塔の建立の如きは我が死後に於て欲せざる所なり。願ふ所は唯一のみ。急ぎ東國に討手を下し、早く賴朝が首を刎ねて我が墓前に梟せよ。今生後生の孝養何物か是に如かむやと。嗚呼是れ彼れが最後の意志なりき。

豈怪むに足らむや、彼れは其の一生の事業に於て一も悔恨すべき事を見出さゝりき。是の執着を以て生きたるの彼れ、如何ぞ是の執着を離れて死するを得む、事素より當然のみ。夫の病苦に惱みて心身を消耗し、臨終の一念によりて俄に來世を欣求するものゝ如きは、其の生命の意義莊として尋ぬべからず。清盛は是の如き薄弱の徒に非りき。彼れの意志は卽ち彼れの生命なり。彼れ死に臨みて尙ほ

政權の大を以てすれば藤原氏の連系の如きありき。然れども一人の意志を以て一代を征服し一人の傳記を以て一代の歷史を語るもの、清盛の如きは未だ曾て見れあらざりき。彼れの一生は個人の勢力が如何に時代の倫理と制裁とを無視し超越し得るかを示せる歷史上の一惡例なりき。然れども是の惡例を現示せる彼れが一生は又個人の强大なる意力の那邊に達し得べきかを示せる一好例なりき。彼れは惡むべき人なりき、然れども同時に又羨むべき人なりき。

而して彼れの一生に於て最も羨むべきは其の最後なり。彼れが其の死に臨みて現はせる猛烈なる意志は、彼れが六十四年の崇大なる生涯に對する一大掉尾にして、彼れの生命と人格とに向て一層の不朽と偉大とを加へたる者なりき。古より英雄の最後人を動かすもの甚だ多し。唯清盛の塲合の如く悲壯を極めたるものは、吾人の未だ曾て知らざる所なり。

見よ、東征の軍旅將に程に上らむとするの前夜、彼れ俄然として大熱に冒されたりと謂ふに非ずや。而して其の熱は方四五間の間、人の接近を許さゞる程の大熱なりしと謂ふに非ずや。比叡山より下せる冷水は彼れの體に觸れて忽ち沸騰せ

るや。彼れは其の孫兒の敗を以て關白を脅やかせり。鹿が谷の事あるや、彼れは公々然として法皇幽屏の已むべからざるを宣言せり。重盛の袍衣大冠して來り諫むるに遇ふや、甲冑の上に法衣を纏ふの兒戲を演じたり。建禮門院に男子の出生あるや、六十の老入道、涙を流して抃舞せり。彼れは是の喜びの餘り、法皇を遇するに一修驗者を以てするの不倫に心附かざりき。是の如く彼れの行爲は決して深謀遠慮ある者のそれに非ずと雖も、處に隨て赤心あり、熱誠あり。一言すれば大人にして、尙ほ小兒の心を失はざるものなりき。若し夫れ智を競ひ勇を較ぶれば、當代何ぞ其の人なからむ。清盛の事を成せるは門地と境遇とに由るもの多しと雖も、而かも、是の赤心と熱誠と能く一族將士を收攬するの力ありしに職由せずむばあらず。

是の如くにして彼れの一生は、彼れの主義、彼れの理想、彼れの自我の實現を以て貫通せられたり。是を以て彼れの傳記は最も嚴密なる意味に於ての彼れ自身の傳記なりき。彼れの時代は不幸にして彼の意志に服從せり。是に於てか彼れ自身の傳記は不幸にして彼れの時代の歷史となりぬ。我邦古來英傑の士少からず。

を言ひ、爲さむと欲する所は是を爲す、些の衒氣なく、些の矯飾なし。彼は僞善を解せざるのみならず、又僞惡をも解せざりき。彼れの云爲は彼れに於て唯其の自我本心の流露のみ。他の評して善と云ひ、惡と云ふもの、彼れに於て多く關する所に非りき。畢竟自我の滿足、是れ彼れにとりて最上の道義たりき。

自我の滿足、嗚呼是れ餘りに廣濶なる道義なりき。彼れが不忠、不臣、狂悖、暴戾、殆どあらゆる惡德を以て稱呼せらるゝ所以のもの、是の餘りに廣濶なる道義の遵奉者たりしが爲のみ。詮ずる所、彼れは當代の倫理を超越したる一巨漢なりき。廿世紀の言葉を以てすれば彼れは極端なる個人主義、我執主義の人なりき。即ち今の倫理學の口吻に隨へば、彼れは不道德の人に非ずして無道德の人なりき。彼れは善人にもあらず、惡人にもあらず、唯一個の巨人、一個の快男子に過ぎざりき。

彼れの無邪氣と天眞爛漫とは彼れの生涯の何れの部分にも顯はれたり。彼れは道路の誹謗を偵せむが爲に三百の禿童を市に放ちたり。何ぞ其の事の奇想天外より落ちたるや。彼れは太政入道の尊貴を以てして白拍子を弄べり。佛の姿色あるを見るや、妓王は立ろに放たれたり。何ぞ小兒の玩具を取捨すると相似た

を顧みざるを怨み、内府世襲の功田が故無くして官没せられたるを怨み、自己鬻むる所の人の顧みられずして、却て藤原氏の族の擧げられたるを怨み、而して揚言して曰く、假令ひ入道如何なる非分を申し出づるとも、老臣數十年の忠勤を憶はれなば、などか一度びは聞し召し給はざるべき。鹿が谷の事の如きは偏に君の主謀に本づく。良しや入道に多少の過怠あるも、是の一門を七代までは捨てさせ給ふべき由やある。入道存生の中にだも、尚ほ動もすれば追討の御結構あること是の如し。況してや入道の身後に及ばゞ、子孫後昆夫れ何に頼り、誰を憑みてか安きを得む。世は早や是までなり、吾れは唯吾が爲さむと欲する所を爲すべきのみと。其の言の不忠を極めたる素より論無し、唯何ぞ其の心事の率直明瞭にして其の云爲の天眞爛漫たるや。彼れはげに不忠の臣なりき、然れども彼れは又同時に無邪氣の好人物なりき。

彼れはげに無邪氣なりき。彼れは其の生涯に於て殆ど其の素志に反して事を行ひたることあらざりき。重盛の諫言に從ひたるは恐らく其の唯一の除外例なりしならむ。彼れの行ひは常に公々然たり、洞々乎たり。言はむと欲する所は是

平治以來、身命を捨ち、一家の亡滅を顧みずして偏に君の御爲を思ひたるを說いて曰へらく、君には斯くても當家の勳功を輕しとし給ふにや。如何なる人の如何なる事を申すとも、義として爭でか是の一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに何ぞや、成親如き無用のいたづら者、西光と申す下賤の無道人が恣に申すことに君の隨はせ給ひて、動もすれば是の一門滅ぼさるべき御陰謀こそ奇怪なれと。彼れの心を察するに彼れの榮達は其の勳功に對する至當の報酬のみ。朝家の今日ある、偏に吾が家の力に依れり。良しや一旦の非事あるも、君王如何ぞ義として吾が家を捨つべけむや。今や輕々しく讒口に從ひて是の久年の功勞を顧み給はず。事是に到りては、法皇の幽閉、彼れに於て自家の正當防衛に外ならざるのみ。彼れ既に君臣の大義を知らず、君君たらずと雖も臣臣たらざるべからずと謂ふが如きは、彼れの解せざる所の倫理に屬す。彼れは是の所信を明々地に告白して敢て忌憚する所なかりしなり。

更に見よ、法印靜憲に向ひて法皇の無情を鳴らしたる彼れの怨言の如何に痛激に、如何に眞率なるかを。彼れは內府中陰の際、八幡の御遊ありて毫も一門の悲歎

實現せられたり。彼れ今上の外祖として三后に准ぜられぬ。文武の勢力一身に集まり、天下の事意の如くならざるは無し。是の如きは道長、賴道等の猶ほ及ばざりし所、清盛一介の武弁を以て忽ち是に到る、滿幅の得意想ひ見るべきなり。彼れが空前の榮燿と絕後の豪華とは畢竟是の得意の裝飾に外ならず。

彼れが是の得意を妨ぐるもの、即ち彼れの死敵なり。其の前には帝王の尊なく、仁義の道無し。是を以て彼は法皇を幽屛するに於て何の踟躕する所無かりき。內府重盛が諫言の如きは、彼れ如何ぞ能く解し得べき、唯其の至孝の熱誠に動かされて一旦の執念を緩めしのみ。されば重盛の死するや、彼れの初志は立ろに實行せられたりき。故に法皇幽屛の事、人は以て暴戾不臣の極となすも、彼れ自ら省みて何の疚きし所なく、唯敵黨に對して自家の權勢を防衛する所以に過ぎざりしのみ。其の爲義、義朝たると、成親、西光たると、將た法皇たると、彼れの見て自家の敵とする所以に於て素と一のみ。是を以て彼れは是の不臣の大罪を犯すに當りて、毫も名義を矯めず、公々然として其の所信を告白せしに非ずや。

見よ、彼れが筑後の守貞能に向て言へる言葉の如何に眞率なるよ。彼れは保元

己れの爲に存せるものに過ぎざるのみ。彼れは是の間に於て自己の意志を徹底し、自己の勢力を實現するの外、別に人生の意義を認めざりき。忠と謂ひ、義と謂ひ、大義と謂ひ、名分と謂ふ、彼より見れば一種習慣上の名目に過ぎざるのみ。彼れは是の如き名目に對して自己の滿足を犧牲とすることの甚だ謂はれ無きを信ぜしなり。彼は唯だ其の猛烈なる意志を以て到る處に我執の一念を貫徹せむと試みたりき。あはれ是の如くにして狂悖暴戾たらざらむと欲するも豈得べけむや。

自家權勢の擴張は彼れの最も大いなる目的なりき。其の手段の巧拙如何は暫く措き、彼れが六十餘年の生涯を通じて終始渝る所なきは實に是の目的なりき。彼れは是の目的の爲に保元に爲義を亡ぼし、平治に義朝を殺し、源氏を仆して天下の武權を握りたりき。彼れは是の目的の爲に後白河法皇に緣し、徐ろに帝寵を博して朝家の地盤を造りたりき。關白太政大臣以下藤原氏の大官を掃蕩せしも亦是の目的の爲めに外ならざりき。而して彼れの理想は疑も無く藤原氏の盛時を移摸するに存しき。是を以て彼は其の女を納れて皇后となし、其の所生を立てゝ太子と爲し、而して遂に安德天皇の卽位を見るに及びて、彼れの理想は全く茲に

一二　清盛論

平清盛の傳記は略々叙し了りぬ。今や終りに臨み、其の人物に就いて少しく語る所あるべきなり。

世の清盛を評するもの、其の狂悖暴戻を言はざるもの無し。彼れ帝寵に狎れて政權を擅にし、法皇を幽屏し、大臣を流竄し、名を敕宣に假りて恣に遷都せり。彼れ實に狂悖暴戻の名を辭すべからざるなり。然れども彼は其の狂悖なることに於て些の矯飾無く、暴戻なることに於て些の譎詐無かりき。彼れの惡を行ふや公々然たり、照々乎たり。而して自ら顧みて其の心に疚しき所あらざりき。彼れは自ら甘ぜむが爲には如何なる事をも忌避するものに非ざりき。彼れは實に狂悖なりき、暴戻なりき。然れども狂悖と暴戻と、彼れ其の惡たる所以を解せざりき。彼の心は常に洞々然として毫も晦所無し。願ふに天眞爛漫の四字、以て彼れが心事を評すべけむ乎。

彼れは最も強烈なる意味に於て我執の人なりき。彼れの眼より見れば天下は

二月七日入道が遺骸は北邙一片の煙となりぬ。法眼圓實、骨を携へて攝津に赴き、經が島に納む。夕べあしたの濱の松風は、懺悔の聲きを鳴らせども、地下の白骨長へに寂寞として英魂今は何れの空にか休らうらん。春秋去來七百年、源平の興亡空しく舊時の夢を語れども、英雄の心事誰か能く知るものぞ。嗚呼太政入道平清盛が六十四年の一生は是の如くにしてその終りを告げたりき。

家の面目、一身の榮華、世に思ひ遺すことも無し。唯一時の恨みは兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ限りなき千秋の無念なれ。敢て一門の子孫將士に入道が最後の所存を傳ふべし。我れ死すとも、佛事孝養をも爲すべからず、堂塔をも建つべからず。唯急ぎ東國に討手を下し、早く頼朝が首を刎ねて我が墓前に懸くべし。それぞ今生後世の孝養にてあらむずるぞと。翌日遂に苦悶の中に薨じ給ふ、年六十有四。

嗚呼入道相國は是の如くにして死にぬ。數萬の軍旅庭に充つれども無常の羅刹に向ふべき刃なく、天下の富貴堂に溢るれども、天命又購ふに由なし。今は平家の柱石倒れ畢むぬ、一族の子弟又何をか頼み、誰にか憑らむ。外には強敵の闕外に逼るあり、而して祖龍俄然として内に仆る。東國追討の遺命空しく人の耳に殘れども、誰か成功を百里の外に期するものぞ。日色暗澹として赤族忽ち色あせたり。西八條の大路には車馬の響天地に轟けども、往反の客、顔に憂色あり。東征の軍旅徒に道途に彷徨して劍戟又光無し。誰れ言へりとには非れども、平家の天下今を限りとぞ見えにける。

試むるの外無きなり。是に於て宗盛を以て大將軍となし、檄を四方に傳へて出兵を促し、闔族の精銳を盡して東國の征討に向はしむ。將に十二月二十七日を以て京師を發せむとす。然るに天乎、命乎、宗盛京師を發せむとするの前夜、入道俄に病に罹りぬ。

げに怪しき病なりき。病つける日より湯水も喉に入らず、身中の熱すること恰も火の如く、其の臥床の四方四五間の中は、熱氣燃ゆるか如く人永く居り難し。冷水の中に浴すれば、水湧沸して幾もなく熱湯に化し、水管を取て體に灑げは、燒けたる鐵石に於けるが如く、水ほとばしりて附着せず。げに地獄焦熱の苦みも斯くやとばかりに思はれたり。醫官診て其の病を解せず、藥餌亦施すに由無し。一門の子弟空しく枕頭を擁して悲歎するのみ。東征の軍亦期を失して發せず。上下茫然として爲す所を知らざりき。

起えて四日、入道病革まりぬ。夫人枕により涙を流して、御大事の際も今は間もあらじとぞ見奉る。思しめす事あらば仰せ置かれよと宣ひければ、入道病み衰へながらも氣勢平生に異ならず、苦しげなる息の下にて宣ひけるは、保元平治以來、當

兵力今はかくまでに衰へたるか。東國の源氏幾十萬、戰勝の餘威に乘じて馬首西に向はば、關西又險難の是を支ふべき無けむ。是の如くにして平家は遂に如何に成り行くべきか。加ふるに北土俄に雲亂れて木曾の山氣はやく都に迫らむとす。事體急塞、又旦夕の踟躕を許さず。入道空しく煩悶すれども又如何ともするなかりき。

外敵是の如く漸やく逼り來りぬ、今は內訌の起らざらむを希ふべきのみ。福原の新都は上下の等しく嫉惡するところ、平家は爲に久しく怨望の府となりき。是に於て入道は衆議を容るゝと稱し、十二月の初め俄に舊都還幸の事を決し、且つ法皇の幽閉を釋いて院殿に安じ奉る。偏へに一門の危機に臨みて悔恨の情を現はせるなりけり。然れども事既に遲かりき輿望は既に平家を去りて遙に源氏に謳歌しぬ。人は平家の敗績を悲まずして却て源氏の戰勝を喜びぬ。近江源氏の掃蕩も、奈良興福寺の炎上も、尙ほ全局の氣勢を回復するに足らざりき。未だ曾て其の意に反して事を行はず、未だ曾て戰敗の屈辱を知らざりし入道が懊惱と煩悶とは果して如何ぞや。今は唯一門の勢力を傾倒し、興亡を一擧に賭して一大決戰を

ぬ。宇治橋の戰ひに怯懦を笑はれし忠清は、又もや侍大將たりき。勝敗の數戰はずして既に明なるに非ずや。齋藤別當實盛が惟盛の問に答へし言葉は、眞によく東西勇士の勝劣を較べしものなりき。曰く、あはれ君には實盛を大矢とばし思し召され候や。關東にては大矢と申す程の者の十五束に劣りて引くは候はず、弓の強さも五六人して張り候。かやうの精兵共なれば鎧の二三領を射透すこと誠に容易なり。且つや大名と申す程の兵五百騎に劣るはあらず。彼等馬に乘りて落つる道を知らず、惡所を馳すれども馬を倒さず。軍には親も討たれよ、子も討たれよ、屍を乘り超え〳〵て、戰ひ候ふ。西國の兵共にはかつて其の儀候はず。親討たるれば子は退き、子討たるれば親退く。夏は暑しとて休み、冬は寒しとて進まず。是れ東國武士の知らざる所なりと。かゝる優柔の懦夫を集めて、かゝる精悍の勇士に向ふ、千に一つも勝たうやうのあるまじくぞ見えし。維盛を大將軍とせる十萬の平軍は、是の如くにして富士河の水鳥の羽音に立つ足もなく逃げ歸りたりき。

維盛の逃げ歸るや入道の憤怒と懊惱とは殆ど其の限りを知らざりき。精銳十萬、敵に對して一矢を交へず、空しく風聲鶴唳に驚きて都に上りぬ。あはれ平家の

の道こそ廢れたれ、馬鞍、鎧甲、弓矢、太刀、長刀に到るまで螺鈿を鏤め、金銀を裝ひ、何れも時流の華奢を凝したる裝束は光り輝くばかりにて、珍らしかりし見物なりき。

然れども平家の武士は最早や太平の裝飾に過ぎざりき。保元平治このかた、さしも威を天下に振ひたりしこの一門の勇武は、あはれ二十年の榮華に跡も無く消え失せて、今は殿上後宮の娘子軍となりぬ。彼等如何ぞ關東武士の敵ならむや。

豈啻に富士河の水鳥に驚ける十萬騎を怪まむや。源三位事を起して宇治橋の戰ありし時、折節五月雨の引續きたるに、河水大に漲りき。平家の方の侍大將上總守忠清、大將軍知盛に謂て曰へらく、水漲り橋落ちぬ、かくて河を渡らば人馬共に多く滅びなむ。淀、一口へや向ふべき、或は河内路へや廻るべきと。時に下野の國の住人、足利又太郎忠綱、憤然として揚言して曰く、淀、一口、河内路へは天竺、震旦の兵を召して向はれ候ふべし。阪東武士の習ひ、目に懸けたる敵を討たず、川を隔てたる軍に淵瀬嫌ふやうやある。續けや殿原とて、眞先にこそ馬を打ち入れたりけれ。げに當日の勝利は阪東武者たる足利が勇武にぞ歸すべかりける。

今や平家は一年ならずして、かゝる阪東武者の敵として富士河を隔てゝ對陣し

大恩を忘れて却て當家に向ひて弓を引かむとは。其の儀ならは神明佛陀如何ぞ救し給ふべき、天譴立ころに到りて亡滅日を期して待つべけむと。

然れども、事は入道が自ら慰めし如くにあらずして、凡て其の恐れし如くなりき。賴朝の勢漸やく加はりて今は關東の草木源氏の旗風に靡かざるもの無し。甲斐、信濃の源氏亦響の如く應じぬ。かゝる間に義仲木曾に起りて北信、南越亦平家の令に從はず。年の十月には北條時政を先鋒とせる源氏の軍は、既に足柄を越へて駿州に入り、富士河の東岸に現はれぬ。諸國の源氏及び餘黨來り會するもの凡そ十餘萬、旌旗劍戟岳南の廣野を掩ひぬ。

警報連りに福原に到る。今は一日も討伐の期を延ばすべきに非ず。九月十八日、平家の勢三萬餘騎、新都を發して東征の道に向ふ。大將軍には小松の權亮少將維盛、副將軍には薩摩守忠度、侍大將には上總守忠清以下一門の精兵を集めて其の勢ひゆゆしくぞ見えし。少將維盛生年初めて二十三、赤地の錦の直垂に萠木匂の鎧を重ね、連錢足毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、袂ゆたかに打乘りたり。其の容儀の美はしく、帶佩の爽やかなる、繪に書くとも筆には及び難し。連年の榮華に弓馬

並に高倉の宮の令旨ありて、諸國源氏と氣脈を通ぜる由承りぬ。一旦戰に破れて行方を知らずと雖も、關東の諸國心を寄するもの少からず、武藏、相摸、常陸、房總の諸豪競うて敵に靡くの風聞切りなり。努め〳〵御油斷あるべからずと。

頼朝擧兵の報知は平家の耳目を聳かしぬ。若者の中には興ある事に思ひて、あはれ討手に向けられよかしなど言へるもあれど、誰れ言ひ合はさねど一門沒落の機目前に逼る心地して、陽に儆語すれども陰に憂色無きはあらず。中にも入道は報を聞いて大に怒りて曰へらく、東國の奴原は皆是れ六條判官爲義が餘類にあらずや。今や頼朝兵を擧ぐ。一門譜代の家人、何にぞ故舊主從の好誼を忘ずべき。あはれ思へば源氏の嫡流たる頼朝を何とて東國へは流しける。是れ取も直さず、八州の源氏に許して頼朝を保護し、以て當家を亡ぼさしむるに異ならず。喩へば盜に鍮を預け、虎を野に放つに均しかりき。入道一期の無念、末代の遺恨、げに是の一事ぞとて、躍り上り〳〵て罵り狂ひけり。稍〻ありて自ら慰めて曰く、抑〻かの頼朝は、去ぬる平治の戰に、父義朝が謀叛によりて既に誅せらるべかりしなり、但故池の禪尼の宥め給ひしによりて厘に頸を繼ぎ得たりき。何事ぞ、今や入道が是の

痛めしことありき。即ち入道先年安藝守たりし時、神拜の際靈夢を蒙りて嚴島大明神より授かりしと稱する白金の蛯卷したる小長刀常に枕を離さず立てられしが、一夜人の出入もなくして紛失しぬ。凡そ是等の怪異、一として平家の亡兆を暗示せるものならざるはなかりき。

事は遂に怪異のみに留まらざりき。入道が暗中の懊惱と煩悶とは更に白日の打擊となりて現はれぬ。平家十年の榮華の夢の醒むべき時は遂に來りぬ。源頼朝の起つべき時は遂に來りぬ。

一一 入道の最後

治承四年九月二日、相摸の國の住人、大場の三郎景親急使を福原に上せて申しけるは、去ぬる八月十七日、伊豆國の流人、前の右兵衛佐源頼朝、舅北條時政と共謀して伊豆の目代平の兼隆を山木の館に夜襲して是を殺し、土肥、土屋、岡崎の一族以下三百餘騎、石橋山に陣せるを、景親一千餘騎を以て押寄せ、散々に打ち敗り候ひしかば、兵衛佐は七騎に打なされて行方を知らず。大凡そ兵衛佐の旗揚げは一院の院宣

是の懊惱の際に當り、幾多奇怪の幻影は入道が夢寐の間に入りて彼れが煩悶更に其の深きを加へぬ。かの髑髏の怪異の如きは特に錄すべきなり。或るあした、入道帳臺より起き出で、妻戸を押しあけて、庭内を見渡せば、こは如何に、死人の髑髏幾十百、殆ど其の數を知らず、庭内に充ち滿ちて、上なるは下になり、下なるは上になり、或は右し或は左し、中なるは端へ轉び出し、端なるは中へ轉び入り、旋轉開閉さながら渦紋の如く旋風の如く、靜かにまろび合へりける。入道餘りの奇怪に、人やある〳〵と召されけれども、絶て答ふる者無し。斯くする間に多くの髑髏何時しか合して一團となり、其の丈け凡そ十五六丈、全庭に溢るゝ許りの一大髑髏となり、一丈ばかりの活けるが如き大なる眼、電光の如く輝やきて入道を屹と睨まへ、暫しは瞬きもせず。入道も亦面を振はず、磴と睨み返して、同じく瞬きもせず立たれければ、其の首次第〳〵に小さくなりて、譬へば露霜の朝日に消え失するが如くなりぬ。又或時は入道が祕藏して朝夕撫で飼はれける駿馬の尾に、鼠一夜の中に巢くひ、其の上に子をぞ產みたりける。陰陽師安部の泰道トして曰く、是れ遠からぬ内に天下の大事起りて當家の不利となるべき兆なりと。又是の外にも入道が最も心を

失ひて憂へ、今移れる人々は土木の煩ひを歎けり。入道は此等の不便を更に顧みず、一令斷下又區々の躊躇を許さず。さながら匆劇の事變に遇ひて遁逃するものの如しげに年近く起るべき都落ちの前兆にてやありけむと、人々後にぞ思ひ合はしける。中にも傷はしき法皇の御身なりけり。去年以來鳥羽の北殿にさながら拘禁の旦暮を送り給ひしさへあるに、今又以仁王の事あるや、入道大に憤り必定院宣の次第あればぞとて、俄に福原に迎へ奉り、三間の板屋を作りて押し込め奉り、警衛の武士前後に見張りして人の近づくを許さず。人皆牢の御所とぞ申しける。

さはれ、福原の遷都は空しく人心を騷がせしのみにして、平家に對する怨望は日にます〳〵加はりぬ。時の人相耳語して曰く、去ぬる安元よりこのかた、大臣公卿或は殺され或は流さる。法皇を城南の離宮に押し籠め奉り、剩へ第二の皇子高倉の宮討ち奉りて、今は殘る所の都遷りぞ。惡業既に極まりぬ、何ぞ其の運命の長きを望み得べきと。人の望既に離れて天の命はた漸やく遠りぬ。東國の源氏は今にも都に上らむず氣勢あり。風聞四もに起りて悉く皆平家の亡兆を傳へざる無し。入道懊惱日に切りなり。

一葉落ちて天下の秋を知る。機變の漸やく動かむとするを看取せる入道は、自家防衛の手段として先づ福原遷都の事を決行しぬ。そも〳〵京師は北嶺南都に程近くして動もすれば山門大衆の侵害を免れ難し。近く以仁王の事を擧げしも主として山僧の應援ありしが爲なりき。且つや王の令旨漸やく傳はりて、東國の源氏亦漸やく蜂起の形迹を現はしぬ。一旦事あるの日、京師は自ら衛るに山河の險なく、外を攻むるに逼塞の患あり。設令ひ天下分れて二つとなることも、福原に據り、兵庫の良港を控へたらむには尚ほ以て西海の咽喉を扼し、優に關東に拮抗するに足らむ。是れ入道が以仁王の事ありて後、倉皇として都を福原に遷しゝ所以なるか。遷都の事は、宇治橋の戰ありてより數日の後にあり。時維れ治承四年六月三日。

是の急遽の遷都はいたく上下を驚かしぬ。名は新都と云ふと雖も、街衢の經營あるに非ず。皇城の如きも暫に平頼盛が別業を以て是に充てたるのみ。況むや公卿百官の邸宅宿房に到りては一も具はれるもの無く、人皆浮雲の漂へる思ひして、偏へに舊京を顧みて流離を悲むものに似たり。元と此に住めるもの共は地を

衰へたる哉、我家の運命やと。亦以て其の心事を察すべし。治承四年、頼政年七十九になりぬ、頽齢今や旦暮を保せず、而して源家の再興は夫れ何れの日をか期すべき。平家の權勢今を盛にして衰亡の機運未だ開けざれども、老後の思ひ出に一快戰を試みて諸國同族の氣勢を振はさむも亦可ならずや。是の如く思ひたる頼政は、先づ其の主謀者として皇族の一人を擁立し、名分を天下に正さむことを要す。彼れは是の主謀者を求めて以仁王を得たりしなり。

事の顛末は茲に精しく述ぶるの遑無し。兎にも角にも、以仁王は頼政の勸めに從ひたり。入道以下一門の暴横非道を數へたる平家追討の令旨は、東海東山北陸三道諸國の源氏に宣傳せられたり。延暦、園城、興福諸大寺の大衆は概ね王に從へり。頼政は先づ南都に至りて事を擧げむと欲す。平の知盛同じく重衡詔と稱して是を追撃し、有名なる宇治橋の戰は茲に開かれぬ。衆寡敵せず、源氏遂に破れて頼政以下皆亡ぶ。以仁王南都に走らむと欲して、路に流矢に中りて薨ず。斯くて頼政が源氏再興の企ては遂に失敗に歸しぬ。然れども、是れ源氏にとりては一時の失敗にして、却て永遠の勝利なりき。頼政は決して徒死せるものに非りき。

事の由來を尋ぬるに、以仁王は法皇第二の皇子に御在せども、女院の御繼子、且つは平家に緣り無き御身とて年既に三十にならせ給へれども未だ親王の宣旨をだに下されず。三條高倉の宮に籠居し、春は花の下に傾く日影を嘆き暮し、秋は月の前に明けゆく空を怨みあかし、悒々として世を果なみてぞ御在しける。茲に源の賴政は攝津の守賴光の玄孫として源氏一流の嫡流なり。保元の亂には部下を率ゐて勤王の功ありしかば、義朝が一族の亡滅する間に、獨り其の身を全うし其の家を保ちたり。治承二年、年七十七の時清盛が奏請によりて從三位に敘せらる。されば世に源三位と稱せり。賴政既に平家の蔭によりて位を進められけれども、平家の跋扈は常に其の快しとせざる所なり。源平の兩家素等しく皇別に出でゝ共に鎭衛の任を負ひたるに、今や上下處を異にして源氏は平家の臣隷に外ならず。是れ賴政の流石に忍びざる所なりき。常に歎じて曰く、昔は大衆を防ぎ、兇徒を退け、朝賞に預り宿望を遂げしことは源平何れも優劣なかりき。然るに今や雲泥の交を隔て、主從の禮よりも尙異なれり。僅に甲斐なき命ばかり生きたれども、國には目代に隨ひ、莊には預所に仕へて公事雜役に驅り立てられ、日夜安きことなし。

勸賞を行はる。七日福原を發して明くる日都に還御せられ、直に入道が西八條の邸に入り給ふ。凡そ是の度の御幸、一として平家の感情を和らげむと力められざるは無し。誠に君臣倫を失ひ、上下道を代ゆ、入道の一念主尊を勞せしむること是の如し。彼れは以て一身の得意、私門の面目とせむ、たゞ天道の狂ぐべからざるもの、おのづから是の中にあらむ。平家榮華の極み、げに嚴島の御幸につきたりき。勢茲に極まつて天下の變漸く動き初めぬ。入道如何ぞ入る日を還し得むや。

一〇 源氏の勃興

治承四年五月の初め即ち新院嚴島の御幸ありしより越えて一月、前兵庫頭源の賴政以仁王を奉じて兵を起し、令旨を諸國に下して平氏追討の大義を唱ふ。同じ月の末、源氏宇治橋の戰に敗れて賴政及び一族平等院に自殺し、以仁王亦流矢に中りて薨ず。平家戰勝の餘威を以て南都の兩寺を燒き、畿內の源氏を掃蕩して六波羅に凱旋す。されど是れ一旦の勝利なりき。平家永遠の亡兆將た是の戰に現はれぬ。

立ち出て給ひ、草津より御船に召されて水路はるかに嚴島へ向はせ給ふ。

同じ月の二十六日、新院嚴島に着き給ふ。入道相國が最愛の内侍の宿所を以て行宮に充てらる。御逗留は二日にして、其間日夜經會舞樂を行はせらる。結願の導師公顯僧正、高座に上り鐘打ち鳴らして表白す。其の詞に、九重の都を出させ給ひ、八重の潮路をわきもちてはる〴〵と、是れまで參らせ給ひたる、御志のかたじけなさよと、高らかに申されければ、一座の君臣そゞろに感涙をぞ催されける。げに一天の君主、猥りに闕外をも踏ませ給はざる御身を以て、都門を出でゝ十數日、京城を離れて百餘里、天涯の波濤を凌いで旅漂の客とならせ給ふ。あはれ是れ何の因緣ありてぞや。偏に是れ入道相國の讐憤を和げ給はむの叡慮に非ずや。人臣の榮華古より何ぞ限らむ、唯是の如きは何處にか其の類例を求むべき。御幸に供奉せるなにがしの卿が當時の事を記して、平家の榮華をば、入る日をも招き還へさむず勢ひに書かれしも、げに理りなりきと覺えし。

結願既に終りぬれば、越えて二十九日還御の途に就き給ふ。四月二日備前の兒島に泊り、五日攝津の福原に着きて入道が別業に入り給ふ。即がて平家の一族に

と口々に罵り騒ぎける。入道辛やく宥めて幸に事なきを得たり。翌十八日新院、入道が西八條の第に入らせ給ひ、其の翌十九日いよ〳〵安藝の國に御幸なり給ふ。道すがら御輦を鳥羽の北殿に舁げて法皇と對面あり。夜未だ明けやらず、彌生半ばの有明の月は猶ほ夢の如く朧ろにして、越路をさして立ち歸る連雁の音づれは雲井はるかに哀れなり。去年の春、朝覲の爲に法住寺殿に御幸ありし時は、諸衛陣を引き、卿相列に立ち、樂師亂聲を奏して掃部道路を開きしに、今は幽宮蕭やかにして門に送迎の人も無し。新院は門前にて御車より降りさせ給ひ、あまりの事に行き惱みて御在せしが、法皇ははや新殿の階上に出で、絕えて久しき御對面を待ち詫び給ふ。新院は今年二十、容儀帶佩げに建春門院の遺照を傳へさせ給ひて其の美しさ此世の人としも覺えず。明月の光に照り添ひて、さや〳〵と歩ませ給ふ御姿、世に貴くぞ見えにける。法皇一目見て、御涙せきあへさせ給はず、御對座ありて暫くは物をも宣はで、交みに御衣の袖をぞ絞られける。衛護の武士は早く門前に立ち去りて、御前には召し使はれたる老尼のみ候ひける。何れ御物語の哀れのかず〳〵は、想ひやられて哀はれの極みにこそ。斯くて新院は夜の明くる頃、鳥羽殿を

て、黛朱の鳥居、百二十間の廻廊、七棟三殿、悉く輪奐の美を凝らし、丹碧海上に浮びて樓觀の眺め仙境の趣あり。祠官より内侍神女に到るまで永代扶持の米田を併せて一切寄進せられき。爾來是の社は平家第一の神宮にして春秋節季の度毎に奉幣祭祀嚴かに執り行はれき。中にも入道は俗體の昔より出家の今に至るまで、一門の榮華皆是の神の惠なりとて、信仰歸依最も篤かりき。今や新院都近き加茂、八幡を差し措きて、八重の潮路を遙々と嚴島の御幸を仰せ出だされしは、入道が崇拜の神に詣でなば、公武の軋轢おのづから止み、入道が心も和らぎて法皇が幽閉の解かるゝこともやとの叡慮に出でしとぞ聞こえし。一天の主上、臣下の怒を和らげむが爲に心にもなき神拜を遂げ給ふこと誠に畏れ多くこそ覺えしか。

治承四年三月十七日御幸の旨いよ〳〵披露ありければ、上下事の意外に驚きて人心何となく穩かならず。中には山門の衆徒集り議して曰く、主上位を退きて諸社の御幸初めには、加茂、八幡、春日か然らずば我が山王にこそ參籠あるべけれ。是れ先代賢王の遺例なり。嚴島とは何の神ぞ、安藝の國とは何の地ぞ。今回の御幸甚だ其の意を得ず。良し其の儀ならば神輿振り下ろし奉りて御幸を留め奉れや

位の事萬づ入道が希望に出でしとぞ聞こへし。かくて入道相國夫妻は外祖父外祖母とて准三后の宣旨を蒙り、年官年爵を給はりて上邊の待遇、下臣の仰望、偏に院宮の如し。凡そ出家の人の准三后の宣旨を蒙ること、歷史を案ずるに法興院の大入道藤原の兼家ありしのみ。今や清盛武弁の身を以て是の榮遇を受く、世に目覺ましかりし事共なり。

平家の榮華今や方に其の頂點に達しぬ。外孫帝位に即き、清盛は國母の父、今上の外祖として位三后に准ず。基房以下の藤原氏は夙に闇外に退けられて朝廷の上卿は平氏あるのみ。法皇は鳥羽に遷居して院政全く亡び、大小內外の政柄一として入道の左右に任ぜざるは無し。古より一門の繁昌を極めたるもの、是の如きは未だ曾て是れ有らざるところ、藤原氏の盛時と雖も寧ろ遙に及ばざるを見るなり。斯かりし間に新院嚴島御幸の事仰せ出だされぬ。是の御幸こそは平家一代の榮華に冠せられたる最大の榮光、無前の盛典にてありしなり。

抑〻是の御幸の由來を尋ぬるにいと〳〵恐れ多き御思召に出でたるなりけり。嚴島の宮は清盛先年安藝の守たりし時、高野大師の示現に感じて修營せし所にし

まらず。大寺の鐘聲旦暮にひゞけども、人は寂寞の中に憂思あり。西山の雪色朝ごとに鮮かなれど、舊年獨り悲を累ぬるのみ。車馬の音、巷に轟けども、宮門深く鎖して人の訪るゝを許さず。衛士の誰何又誰に向てか發せむ。年新たにして世は履正の祝賀に忙はしきも、幽宮晝靜かにして人の省みるなし。

明くれば治承四年となりぬ。入道も許さず、法皇も御謹みの身なれば、元三の祝賀にも參仕する人だになし。今上は法皇の遷居以來深く憂に沈ませ給ひ、上下の事入道の心のまゝにして朝綱振はず、國家漸やく多事ならむとするを歎き、夙に遜位の志あり。即ち潛に書を法皇に寄せての給はく、當今君には艱難の地に落させ給ふも、朕位に備はりて救ふ能はず。誠に在るに甲斐なき身なり。今や入道の外孫、早く儲位に備はれり。朕にして位を退きて世を遯れなば、外孫冊立の慶びに入道の心もなどか和らがざらむと。法皇報じて宣はく、身は拘囚の境にあるも君の位にあるは尚ほ暗夜の星火なり。芳心誠に忝きも君にして位を棄てなば朕また誰れをか頼まむと。然れど主上は間もなく位を皇太子言仁に讓りて新院と稱し給ふ。新しき帝は即ち入道が二女建禮門院德子の出にして安德天皇是なり。讓

如きはまさしく入道が心事なりしなり。かくて法皇幽閉の一大事は行はれぬ。

法印問答のありしより越て四日、治承三年十一月二十日、平家の軍兵法住寺殿に押し寄せて四面を打ち圍み、前の右大將宗盛、帶甲の武士を隨へて御輿を中門に引き寄せ、法皇の出御を促し奉る。法皇驚いての給はく、汝等朕を如何とかせむとする。成親、俊寬の如く遠島に遷さむとするか。朕に何の咎ありてか斯く平家の恨む所とはなれると。宗盛涙を流して曰く、如何ぞかゝる事の候ふべき。唯暫らく世の靜かならむまで、鳥羽の北殿に御幸をなし參らすべしと、父入道の命ありしのみと。今は兎角の猶豫もあるべきに非れば、御涙ながらに御車に召されたり。公卿殿上人一人の供奉するものなく一二北面の下﨟の車後に隨へるのみ。平家の武士劍戟を輝かして前後を擁し、驕歩蕭々として鳥羽を指す。偏に拘禁の客の如し。道路目を掩ひて能く仰ぎ見るもの無し。

鳥羽の北殿、一に城南の離宮と云ふ。秋も暮れ、冬も半ばを過ぎぬ。萬山既に黃ばみ落ちて野に悲風あり。射山の嵐梢を鳴らして、寒庭の月影徒にさやかなり。雪荒園に降り積れど、跡踏みわくる人もなく、池堅氷に閉ざされて游鳥の影だも留

谷の事、實に是れ入道か行住坐臥尚ほ忘るゝ能はざるの恨事たり。成親の卿以下黨與の輩、或は斬られ、或は流されたりと雖も、現に追討の院宣を給はり、親ら謀議の席に臨まれし法皇の斯くてあらむ間は、平家の天下一日も安きを得べからず。是れ入道が常に念頭に懸けて憂慮せし所なり。彼れは幾度びか帝座に迫りて幽閉を企てたれども、內府世に在りし間は、流石に大義名分に怯れて其の我執を貫く能はざりき。今や內府世を去りぬ、世又苦諫を以て入道を沮むもの無し。入道如何ぞ其の宿志を思ひ起さゞるべき。且や身は六十の頽齡を過ぎて餘命幾くも無しつら〳〵身後の事を慮れば、今にして其の計を爲さずんば一門の未來甚だ憂ふべきに似たり。平家の敵今や源氏に非ず、藤原氏に非ず、實に法皇なり。院宣一下して天下に號令せば順逆立ろに處を異にして名分永く立ち難からむ。今こそ當家の勢に屛息しても御在せ、入道世に無からむ後には、如何なる事を思ひ立たせ給はむも知るべからず。あはれ三十年來の忠勤もうたかたの泡と消えて一家の信任地に落ちたり。是の上は已みなむ、暴力を以て法皇を幽閉し奉り、一門の禍害を永く未然に防がむこと、入道が一期身後の計として誠に已むを得ざらむ乎。——是の

庭上に下りて門送す。法印靜づ〳〵と三間ばかり歩み出て、やがて入道の方に向ひて長揖して立歸られける。入道が憤激に恐れず、靜に道理を陳じて使命を全うす。其の機智辯舌より禮容辭令に到るまで、流石は一代の碩儒信西が遺子なりと、人々感じ合はぬは無かりけり。

九　法皇の幽屛

入道は靜憲法印が辯舌に當座の心を和げ給ひけれども、一念の執着如何でか口耳の爲に動くべき。翌日直に關白基房を初めとして太政大臣師長以下の卿相雲客、苟も平家と快からざるもの四十三人の官職を罷めて遠流閉居を命ぜらる。法印が復命によりて一時心を安うせし院中の人々、今更の如く驚き怖れて安き心もなかりけり。古より大臣の流罪は國事の重辟に依らざれば絶て其の例しなし。今はさせる罪過もなく、唯々私門の怨に任せて三鼎の重臣を罷免し、剩へ遠流に處すること前代未聞の非例たり。

然れども大臣以下の罷免は未だ以て入道が欝憤を晴らすに足らざりき。鹿が

一門の愁傷を外にして宴遊に耽り給ふとの御恨み、全く讒人の虚搆に出でしと覺えたり。是の上猶も御不審の廉あらば、八幡の別當に御尋ねあるべきなり。次に中納言の關官、二位中將殿御所望の事は強ちに御憤あるべき事ならず。前年故小松殿の御昇進の時は、官階數次を超えて遠く儕輩を凌がれけれども滿朝の縉紳入道殿を憚りて異存を申すもの一人もあらざりき。獨り今に於て他人が當次の昇進を御恨あるべき謂れやある。況してや當今の除目一に關白殿の御計らひなれば、誰か兎角の異議に及ぶべき。凡そ斯樣の事、入道殿の惡樣に聞かれ候は一に爲めにする者の讒口と覺えたり。耳を信じて目を疑ふは俗人の弊なり、小人の浮言に惑ひて眼前の朝恩を無みせむこと御家門永代の爲めならず。あはれ天心蒼々として神慮預め測り難し。下として上に逆らふこと豈人臣の禮ならむや。よくよく御愼あるべきなり。御鬱念の次第便宜を伺ひて屹度傳奏に及ぶべし。さらば暇申す、と言ひ放ちてつと立ち上りける。

入道は法印の答辯に耳を傾けて聽き居たりしが、是の時高らかに院宣の御使なり、各〻答禮申すべしと呼ばはりければ、居合はせたる一門諸士八十餘名皆一同に

宮水澄めども人下流を濁して何事か入道殿に悪様に申し入れたりと覺えたり。是の事よく〳〵思慮あるべきなり。千萬の聖慮假りに一失ありとするも、臣下の身としては偏へに其の身に過りなきを申し陳ずべきなり。古の語にも申さずや、君君たらずと雖も臣以て臣たらざるべからずと。近頃小賢しき申條ながら、法皇は君なり、入道殿は臣なり。臣として君を惱まし奉らむこと、仁義の道に於て缺くる所あるのみならず、天地神明に對して畏れ多き事ならずや。院の御出仕思ひ止りたりとの仰せ、一旦の御憤は申すに及ばねども、其の位に居りて其の祿を食みながら、出仕を停止し給はむこと、ゆめ〳〵謂はれあるべからず。抑〻御恨の條々、先づ八幡宮の御幸は偏に故內府追悼の爲とこそ承り候へ。內府世を去り給ふや、院に於ては聲色を遠け、旨味を斥けて旦夕不斷の御愁歎は法印親しく見參らせし所なり。聞けば內府命終の所願熊野にありとかや、せめては熊野と同じく西の方なる八幡に參詣して內府が未來の菩提を吊はむとの畏き叡慮ありて、扨こそ八幡の御幸とはなりけるなり。御參籠七日が間、旦暮に念佛讀經して偏に亡靈の得脫を祈られ候ひき。何ぞ是を御遊と謂はむ。入道殿の面目何物か是に加ふべき。御

四つ。あはれ是の四つの申條、君には如何に聞し召され候ぞ。入道今や子に後れて枯木の枝無きに異ならず。遠く子孫の計を慮れば君には早く滅亡の企てを凝し給ふ。今は程なき浮世に存生へて、前生後身、心を勞して何かせむ。世は早や是までなり、人も我れも如何にもありなむと思ふなりと、且怒り且泣き、思ひ切てぞ述べ給ふ。

靜憲法印流石に哀を催し、且つは恐ろしく覺えけり。げに我身も嘗て法皇に御伴申して成親が謀議の席に連りし者なり。入道それと知りてあらば如何なる憂目にや遇うやらむと、胸打騒ぎて一時は兎角の考も出でざりしが、法印もさる者にて何氣なき體を裝ひ、衣紋をつくろひて答へけるは、入道殿の仰せ恨ませ給ふところ一々御理りとこそ覺え候へ。中にも故内府存生の砌を思へば、親子恩愛の道、老少不及の歎、餘所の袂も絞り煩ひてこそ候ひしか。さりながら御恨の逐一、仙洞に於て聊か存知無きこともあり。靜憲不肖ながら苟めにも御使に立ちたる上は已むなく兎角の御答辯に及ぶ條、恐れながら心を靜めて聞し召させ給ふべきや。抑法皇の聖德は誠に三代の餘光たり。身常に近習に侍らひて日夕仰ぎ奉る所、唯、仙

何の過怠にて候ふやらむ。入道其の子に後れて更に面目を失ふ、如何ぞ快きを得むや。是れ二つ。次に中納言に關官ありし時、二位の中將頻に望みしを入道樣々に取りなし候ひしが、君には遂に御承引なくして却て基房が子を進められしは如何にぞや。假令ひ入道如何なる非分を申し出づるとも、餘命幾もなき老臣が數十年の忠勤に免じて、一度びはなどか聞し召し給はざるべき。然るを位階家嫡何れも中將に及ばざる者を取り立てゝ故らに入道を恥しめ給ふ事、誠に本意なき御取計ひにこそ候へ。入道如何ぞ不平無きを得むや。是れ三つ。次に新大納言成親の卿以下近習の人々、鹿が谷に集りて當家討伐の謀叛を企てしこと是れ全く私の事にあらず。君にも御許容ありて、自ら行幸あらせ給ひし事、入道慥に聞知する所なり。あはれ當家に何の罪何の咎ありて斯る御計畫を遊ばされ候ふやらむ。良しや多少の過怠あるも、入道が勤勞を思し召されなば、是の一門をば七代までは爭でか捨てさせ給ふべき。然るに何ぞや、入道齡耳順を超えて餘生幾年もなき一期の中だにも、動もすれば追討の御結構あること是の如し。況してや入道が身後に到らば、一門の行末果して如何あるべき。入道如何ぞ心穩かなるを得むや。是れ

内府なりき。爾來三鼎輔弼の臣となりてより、朝廷の大事、一として内府の與り聽かざるものなし。其の功、其の勳、我子ながら世に有り難くこそ想はれしか。君にも是の功勞を思し召し給はば、一個半個の御憐無くてやあるべき。昔者唐の太宗は魏徵に後れて悲みの餘りに自ら碑文を書きて立て給ひき。遠く昔を申すに及ばず、顯頼の民部の薨去ありし時は、故院殊に御歎ありて八幡の行幸延引せられ、御遊も無かりき。かゝらむは誠に賢君臣下を思はせらるゝ至情とこそ仰がれ候へ。然るに今や君には内府の遠逝をば何事とばし見そなはせしぞ。中陰の事未だ果てざるに八幡の御遊ありて御歎きの色をだも見奉らず。悲歎の涙に沈める一門にとりて如何ばかり本意なき事と思し召し給ふぞ。假令ひ内府が忠をば忘れさせ給ふとも、入道が悲みをば御憐みなかるべき。假令ひ入道が悲は物の數ならずとも、爭でか内府多年の忠勤を忘れさせ給ふべき。今や父子共に信を陛下に失ひて面目一時に亡はる、入道如何ぞ快きを得むや。是れ一つ。次に越前の國は故内府が勳功を表せむが爲に、子々孫々に傳へて永代世襲の封土たるべきよしの御敕諚は昨日の事なりしに、今や内府逝きて未だ一月ならざるに沒收せられ候は抑々

法印西八條の邸に至り具に敕定の旨を傳ふ。入道對面もせず、待つと朝より夕に及べども一答辭無し。日將に暮れむとす、其の子知盛をして言はしめて曰く、淨海老衰事に勝えず、院中の出仕爾來思ひ斷えたり、今回上洛の事別の仔細も候はずと。法印、さてこそ入道の非謀は人言に違はざりけりと驚き畏れたれども、然あらぬ體にて立ちざまに、賢相明德天に踴ると申す本文は如何にと高語して退出しぬ。入道内に是の語を聞かれけむ、急ぎ中門に出でゝ遙に歸りたる法印を呼び還す。法印は嘗て法皇に陪して鹿が谷の會合に臨みしもの、或は西光、俊寬が故轍を履むこともやと一度びは心騷がれしが、素と是れ膽力才辯共に人に勝れたるものなれば、少しも怖れず中門の廊に上りて入道と對坐す。入道顏に悲憤の色あり、屹と法印を睥睨して曰く、法印御坊、淨海が申す事果して癖事か。先づ以て内府の世を去りし事、當家の悲歎如何ばかりぞ、親父たる入道が身にもなりて考へられよ。而して君には如何ばかり叡慮を懸けさせ給ひける。抑々保元以降、亂戰踵を接して起り、君にも幾度か蒙塵の歎きに沈ませ給ひしを救ひ奉りたるもの當家に非ずや。其の折入道は唯大事の處分を司りしのみにして、身命を捨てゝ事に當りしものは

同じ月の十四日、入道相國俄に數千騎を率ゐて福原より上京す。人何の故たるを審にせず。道路相傳へて曰く、是れ入道朝家に恨あるが爲なりと。關白基房參內して謁を請うて曰く、入道が此度の上洛は恐くは基房に甘心せむが爲ならむか。去むぬる年、資盛乘合の事ありてより以來、入道の憤兎角この身に集まれり。幸に故內府存生の間はさせる事無かりしが、今や內府世を去りて入道が憚かるべき人も無し。身は攝籙の家に人となりて、今は如何なる辱を武人の手より受くるやらむとて、潛然と泣き給ふ。主上聞し召して宣はく、關白にして危からば、朕何ぞ獨り泰からむと、共に涙を流し給ふ。同じく十五日、入道朝家に恨ある事いよ〳〵信なりと聞えしかば、故少納言信西が子息、靜憲法印を敕使として入道が西八條の邸に遣はさる。其の詔に曰く、近年上下の心靜かならず、世間動もすれば蜚語を傳ふ、朕深く以て憂となす、賴む所は唯相國にあり。然るに今や故無くして帶甲を率ゐて闕下を驚かし、喧々として朝家に怨あるものゝ如く然り。是れ果して何事ぞや。相國望む所あらば何ぞ狀を具して陳奏に及ばさる、徒に軍兵を動かして世上を騷がす、朕の悲む所なりと。

の危機に際して何ぞ自ら重ぜざりしや。文覺の頼朝に說ける言に曰く、平家には小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れてゐはせしが、平家の運命茲に極まれるか去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚る所ぞ、御邊一度び起て麾かば天下靡然として從はむと。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、亦以て想ふべきに非ずや。あはれ世は如何にもなりなむ、唯力を盡し忠を勵みても猶及ばざらむ時、かねて亡き身のせむ術なからめやは。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人是に至りて遂に重盛を辯護するの辭を知らざるなり。

八　法印問答

重盛既に薨じぬ。今は誰ありて入道が所存を抑ゆるものもなし。天下漸やく事多からむとす。

治承三年十一月の七日地大に震ふ。陰陽の頭阿部の泰親急ぎ內裏に馳せ參じて天下の大事近きにあるべきを奏す。傳奏色を失ひ、君も亦叡慮を惱ませ給ふ。

ころ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼れ死せば入道が暴横はさながら悍馬の御に離れしが如けむ。帝座の危きや知るべきなり。彼れ死せば一家の望立ろに世に離るべし、一旦事あるの日誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛一身を以て是の大局を保持す、苟も其の任を知り責を重ずるもの、何ぞ區々の私情の爲に逃避すべけむや。重盛其の希世の聰明を以てして如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらむ、辨じて而して尚ほ是を敢てせざるものは其の佛說に歸依したるの致す所と謂はざるべからず。是れ重盛に取りて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは吾人の同意し能はざる所なり。其の情や誠に憐むべし、其の行や則ち大に未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めて其の身を殺したるは、即ち自ら求めて其の家を亡ぼしたるに等し。入道心剛なりと雖も齡已に耳順を越ゆ、其の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲す無きこと、重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宣一たび下らば天下の事俄に知り難し。重盛此

五百兩を以てして曰く、吾れ今汝に依りて三千五百兩の黃金を大唐に送らむと欲す、其の中一千兩は育王山の衆徒に與へ、二千兩は唐帝に奉り、外臣重盛が爲に一小堂を育王山に建てゝ其の菩提を弔はれむことを請へと。妙典敬承し、金を抱いて直に渡唐し、重盛の命の如くす。帝大に其の志を嘉みし、寶形の御堂を唐山に建て、五百町の米田を寄進し、厚く重盛が冥福を祈れりと傳ふ。

是の如く佛說に歸依せる事は、重盛にとりて、寧ろ恨事なりしと謂はざるを得ず。彼れ身は一國の大臣として奉公の大義を辯ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて而して後已むべきなり。洵に忠孝兩全の歎きありて骨肉の私情流石に絕ち難きも、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辯じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせむ。是の難關に當りて能く功を擧ぐるもの、眞に人傑と言ふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局を廻避して自ら全うすべからざりしなり。彼れの熊野に禱るの詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死して其の末路に遭遇せざらむと謂ふにあり。何ぞ其の願ひの私情に拘はることの多くして、公義に盡すことの少きや。彼れの一身は公私內外の望の依て繫ると

四十八人、常燈一基につきて一人を具へ、添油挑燈の用に當る。年二十を過ぐれば即ち交代せしむ。日沒暮鐘の頃より、是等四十八人の美女春花の裝を凝し、蘭麝の芳を新たにし、念佛禮讃の妙音を揃へて靜に四十八間の佛前を廻る。念佛禮讃終れば、六人宛相結びて鼓銅鈸子を鳴しつゝ、今樣の歌を謠ひて再び四十八間を巡拜す。其の歌に曰く、

心の闇の深きをば、　燈籠の火こそ照すなれ。
彌陀の誓ひをたのむ身は、　照さぬ所はなかりけり。

是の間重盛は堂中の中臺に坐し、耳を澄まして靜に聽く。其の狀、佛說傳ふる所の菩薩聖衆が彌陀覺王に奉仕して、或は說法化行し、或は伎樂歌詠して淨土の榮光を讃美するが如し。重盛是の異樣の趣向を運らしゝは、想ふに是の世ながらにして往生の未來を悕悅せしに非るか。是の事ありてより世重盛を燈籠の大臣と稱せりと謂ふ。

重盛は當に內地に於て佛法に皈依せしのみならず、遙に金を唐山の佛寺に送りて來世の菩提を吊ひき。曾て唐人妙典と云ふものゝ筑紫にあるを召し、賜ふに金

訓えしもの亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度びか是が爲に沮まれて君國の事爲に僅に安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしやは察するに餘りありと謂ふべし。あはれ入道が榮華は壯大極まり無かりしが、其の裏面には其の愛子を犧牲とせる慘澹たる悲劇ありき。重盛年尚ほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛說に歸依して來世を希求せしもの、其の際遇のおのづから然らしめし所、其の情や深く憐むべしとせむ。

重盛が佛法に歸依したる事に就いて二條の物語あり。亦以て其の性行を知るの一端とも見るべきを以て左に是を錄せむ。

重盛は其の邸宅たる小松殿の內に一棟の佛殿を建てしが、其の構造は通常寺觀に見る所と頗る趣を異にせり。即ち東西南北各々十二間、四方を通じて四十八間を點じ、四方の十二間、間毎に十二光佛を一體づゝ立て、四方に都合四十八體の十二光佛を鎭座せり。四十八個の燈爐佛前に具はり、粲然として晴夜の星の如し。是の佛殿に奉仕するものは何れも十六歲より二十歲の窈窕たる美女にして、其の數

詣の途上にありし清盛を初め平家の一族は、寧ろ西國に走りて再擧を圖らむと欲したりき。彼の時平家にして直に都に歸らざりせば、天下の事略々知るべきのみ。是の時に當て衆論を排して入京を唱へ、大義名分を提唱して士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の勝を論ずれば、當に功一級たるべきもの、實に重盛たり。唯是の一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乘ぜるが如きものありき。されば是の氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裡に在り。重盛が天分ますます其の高きを加へぬ。今や彼れ一武人にあらずして朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼れを待つて初めて人ありき。其の男資盛關白の儀仗を冒して辱かしめられし時、入道は大に怒りて暴慢の復讐を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られむとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを說破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の擧あらむとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を

情は寧ろ脆かりき。彼が其の材能を發揮して遺憾なからむが爲には、少くとも其の意志は更に數層の強烈を要したりき。加ふるに早く佛說に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義に於て聊か缺くる所あるを免れず。是の人にして是の弊あり、洵に惜むべしとなす。

四十三年の齡は重盛に於て決して短かきものに非りき。平家の興るや、彼れ實に其の樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼れ實に其の柱石たり。彼の一生は其の父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に情強く、眞に一世の豪傑なりしが、其の事を成すに當りて重盛に待たざること殆ど一度だも是れあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參じては、畫策を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て備はり、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼れは啻に平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の名鑑たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、重盛實に其の第一の人なりき。

惡源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は如何に勇ましかりしよ。彼れ武藝に於て人後に落つるものに非りき。信賴平家の不在を窺うて亂を興すや、熊野參

入道盛俊が復命を聞いて、重盛の遂に起たざるべきを察し、流石親子の情勝え難く、急ぎ福原より都へ上られけり。七月二十八日重盛病大に革まる。即ち出家して法名を淨蓮と稱す。越えて八月三日遂に薨し給ひぬ。年僅に四十三。未だ五十にだも到らざるに、實に惜むべき命なりけり。世は盛りとこそ見えつるに一門の柱石俄に殞落し畢むぬ。さしも剛情我慢の入道が老の嘆きは言ふも更なり、一門の内外、朝家の上下、さながら近親を失ひたらむ樣に哭き悲めり。あはれ是の大臣の世に御在すればこそ、入道が非道も和らぎて世もいさゝか穩かなりしに、是の後の天下如何に成り行くべきと心ある人々憂ひ思はぬは無かりけり。唯故内府が弟宗盛及び其の一家の人々の、やがて大將に進み給はむと勇み悦べるこそ奇怪なりけれ。

七　重盛論

小松の内府重盛は、げに智仁勇兼備の大臣なりき。是の點より見れば彼は平家第一等の人物と謂ふべかりき。唯理に明なるに較ぶれば其の意は寧ろ弱く、其の

折、權現に申し請けたる旨の候ひき。此度の所勞は神慮の計らひ、素より凡夫の是非に及ばざる所乎。且つや古を案ずるに、延喜の御門はさばかりの賢主には御在しゝが、異邦の相者を宮廷に召されしこと、末代までの本朝の恥辱と謂はるゝに非ずや。重盛身不肖なりと雖も、官三公を忝うし位二位に上れり。一國鼎相の臣を以て外邦浮遊の客に見え、其の命を托し其の術を受けむこと、身の恥、家の恥、且つは國家の恥辱に非ずや。仰せ越さるゝ醫療、重盛に於て承服し難き所なり。況むや運命素と天にありて人に非ず。されば漢の高祖黥布を討ちて流矢に中りし時、金を與へて醫師を謝したりき。重盛何ぞ獨り天命を察せずして猥りに療養を加ふべき。所勞若し定業ならば、醫療又何の爲す所ぞ。若し又非業たらば、療治を加へずともなどか治せざらむ。されば天人にも五衰の難あり。耆婆が妙技を以てして大覺世尊は猶ほ跋提河上の露と消え給ひしに非ずや。かた〳〵藥石は重盛に於て用ふる所無し。歸りて入道殿に是の由を申せとこそ宣ひけれ。盛俊返すべき言葉もなく、泣く〳〵小松殿を引下り、其時入道の御在しける福原の別業に馳せ下り、事の次第を復命に及びける。

の存する所、重盛に於て毫も恨無し。歸命頂禮大慈大悲證誠權現、仰ぎ願はくは偏に冥助を授け給へと、肝膽を碎きてぞ祈念せられける。

かくて重盛熊野より下向ありて後、幾もなく全身に惡瘡を發し給ひぬ。扨は權現に申し入れたる事共納受あるにこそと、御禮の奉幣あり、身は一室に閉ぢ籠りて更に療養の氣色だにもあらず。人々其の心を知らずして怪み惑ひけり。

斯りし程に重盛の病漸やく重くなり增りて、今は憑み少き由聞へければ、入道流石に心安からず、越中の前司盛俊を使として仰せられけるは、所勞日に大事の赴、入道心苦しくこそ存じ侍れ。聞けば醫藥祈禱をも斥けてお在すとか、何ぞ老親に先立ちて故らに不孝の罪を得むとはし給ふぞ。幸ひにも此頃宋朝より世にも勝れたる名醫渡り來れり。御身の運命尙ほ盡きずとこそ覺えたれ。彼を請じて療養を加へ給はむこと、入道切に願ふ所なりと。

重盛使命の趣を聞き畢り、入道殿の使に最後の對面とや思はれけむ、人に扶け起され、烏帽子直衣にて盛俊に對面し、答へて曰く、療養の事、敬みて承り畢むぬ。但し身の所勞醫藥を加へざるは、聊か思ふ所あればなり。そは去ぬる五月熊野參詣の

同じき年の夏、重盛熊野に詣づ。本宮誠證殿の御前に籠りて夜もすがら四曼不離の行業に一心の迷妄を鎭め、靜に禱り申されけるは、入道相國無道にして、やゝもすれば君を惱まし奉る。天恩限りなくして一族の榮華今を極みとこそ覺ゆるに、愆謝の誠足らざるのみか、凌虐の惡却て日に募れり。重盛身不肖ながら入道が長子として數〻諫を入るゝと雖も遂に其の志を飜へすに力無し。親を顯はし名を擧げむこと今に於て望絕えぬ。況して一家の繁榮を永代に續けむこと思ひもよらず。然れば私に念ふらく、親の惡を見て正す能はず、君の禍を見て救ふ能はず、かくて徒に世と共に浮沈せむは臣子の道に於て缺くる所あるに似たり。寧ろ如かじ、名を遁れ身を退き、現當の名利を拋擲して靜に來世の菩提を求めむにはと。但し重盛は凡夫、性命の道未だ能く悟り得ず、是非俄に辨へ難きを以て直に志を遂げずして以て今日に到れり。今や心安住を欲すること切りなり。南無熊野大權現、一門の繁榮永く絕えずして君寵長へに渝らずば、願はくは入道が惡心を和らげて天下の安全を得せしめ給へ。若し又榮耀一期に限り、耻後昆に及ぶべくむば、願はくは重盛が命數を縮めて早く來世の苦輪を救ひ給へ。兩箇の願ひ一代の身神慮

誕生の際、小兒の如く喜び躍り、はては嬉し涙に咽びしこそ理りなれ。皇子誕生の祝ひは、即ち平家萬歳の慶びなりき。入道が暴慢は是に於て更に加はらざるを得ず。天下の威福一己の左右に任じ、内外の賞罰、又公家の法に依らず。上下屏息して人々安き心なく、世はたゞ入道が爲さむまゝにぞ任せける。

上下人心安からざるに隨れて、天變地異の相次いで起りけるこそ奇怪なれ。中にも治承三年五月の半ば、驟風俄に中御門京極の邊より起りて坤の方へ吹き廻り、京中の人家吹き倒されたるもの方十四五町に亘りて其の數を知らず。桁、長押、柱など空中に散亂し、檜皮葺板の類を飛散する態は、さながら秋風の枯葉を捲くが如し。人畜の死傷亦夥しかりき。如何にも徒事ならず見えければ、朝廷特に神祇官、陰陽寮に命じて吉凶をトせしめられしに何れも答へて申しけるは、是れ一國の大臣、百日の中に亡せらるべき徴か。別しては佛法王法衰滅の運に迫り、兵革續いて起らなむ。正しく天下の大事近年の中にありと覺えたりと。世は平家の盛りなるに、人々何ぞ是のトを信ずべき。入道以下心にも留めず御在しけるが、重盛獨り深く心に慮る所あり。

をそろしき朝恩なるに、父の暴慢日に募り、動もすれば帝座に逼り參らせむこと、まことに天地神明に恐れあり。こゝに四恩十善の敎に君臣の公義を說き、忠孝兩全の歎きに父子の私情を訴ふるさま、申し受くる所詮は、只重盛が首を召され候へとまでの諫言こそ、世にも哀れの極みには覺ゆれ。入道流石に一旦の憤を抑へけれども、一念の執着いかでか是の儘にして已むべき。世は平家の世盛りとこそ見えつるに、獨り憂惑の情に勝えざるは重盛なりき。

げに平家の世盛りとこそ見えにけれ。先に皇后に立たせ給ひし入道が二女建禮門院は、治承の二年に目出たく皇子を擧げさせ給ひぬ。御產の惱みありと聞こえし時は、法皇親ら臨みて千手經をさへ誦讀あらせられき。是れ偏へに入道が心を迎へ給はむの御意にして、志あるもの皆涙を流しけり。是れさへあるに、御祈禱の御禮として黃金一千兩を奉りしに及びては、一天の國父、一修驗者として遇せられ給ひしこそ沙汰の限りなりけれ。

さなきだに一國武人の頭領、滿朝縉紳の首班として、文武の權勢古今に並びなかりし入道は、今は天子の外舅となりぬ。入道の滿足夫れ如何ばかりぞや。皇子御

一念は毫も渝る所なかりき。

六　重盛の最後

小松の內府重盛は、まさしく入道が嫡男にて御在しけれども、其の性はいたく違ひ給へり。入道が飽くまで情剛く我執の念強きに反して、內府は道理に明に、能く人を恕し、世を思ふ人なりき。入道が偏に願ふところは一門の榮華のみ。是の願の前には帝王の尊なく、君臣の義なし、誠に直情徑行、たゞ〳〵我意を貫くを以て自ら甘ずる人なりき。內府は則ち然らず、よく君國の大義を辨へて而かも私門の情誼を忘れず。よく事體の輕重に應じて萬全の道を求めたり。されば是の臣ありて君始めて安らかに、是の子ありて父即ち正しきを得たりき。誠に內府は朝家の重臣、平門の柱石として公私內外の望のあつまるところ。世の太平、國の利福、偏に是人をぞ頼みける。

重盛が憂ふる所は入道が非道の振舞なりき。そも〳〵身は武臣の末を以て攝籙の家を凌ぎ、一門の所領國郡に半ばして、田園一家の進止たるさへ、前代未聞の、末

知らず、爭でか內府にさる事の候べき。それにつけても今朝の御一念、御後悔あらむをこそ願はしけれと申しければ、入道首肯きて急ぎ腹巻脫き捨て、素絹の法衣に袈裟打かけて念珠讀經をぞ爲給ひける。

さる程に小松殿にては判官盛國門前に立ち出でゝ着到つげられけり。馳せ集まれる宗徒の侍三千餘人、郎黨雜色、苟も箭を負ひ刀を手ばさむもの無慮二萬餘騎。重盛靜に着到を披見したる後、中門に出でゝ侍共にの給ひけるは、汝等日頃の契約を違へず、一夜の中に斯樣に馳せ參じたるこそ神妙なれ。自今以後、亦是の如くなれ。重盛今朝別して天下の一大事を聞出しけれども事幸に訛傳に出でたりき、汝等をの〳〵家に歸りて後日の忠勤を心懸けよと。厚く勞ひて還らしむ。げに天下の一大事と觸れたるは、重盛が一時の權謀なりき。唯今朝入道を諫めける詞に隨ひて、兵士の去就如何を試み、以て入道が謀反の惡念を和げむとの謀とぞ聞えし。時の人々相傳へて深く感じ合へりける。

是の如くにして、法皇を鳥羽殿に幽せむとしたる入道が企ては、重盛が苦諫と智謀とによりて挫折せられぬ。然れどもこは一時の事なりき。剛情我慢の入道が

さしむるものに非ずして何ぞやと。諸弟能く答ふるもの無し。重盛は、去らば人々參れとて小松殿へぞ歸られける。

重盛小松殿に歸るや、主馬の判官盛國をして令を發せしめて曰く、重盛こそは今朝天下の一大事を聞き出したるなれ。我と思はむずる者共は物の具して馳せ參ぜよと。傳令四方に走りて忽ち京畿の間に擴がる。平生物に動じ給はぬ內府にして是の令あるは誠に天下の一大事なるべしとて、我も〳〵と馳せ參る。時已に夜に入れども平家一門の家從郎黨は言ふに及ばず、入道が昵近の侍まで先を爭うて小松殿に集まり、西八條に殘れるは女子老幼と刀筆の吏のみ。夜の明くる頃には、洛中白河の外、北山、西山、嵯峨、太秦、淀、羽束より、宇治、大原、加茂、大津、勢多、石山のほとりまでも、苟も志を內府に寄する兵共、或は鎧着て未だ甲をつけぬあり、或は矢負ひて未だ弓を持たぬもあり、馬は泡を吹き、人は息を切らして潮の如く小松殿の內外に馳せ集ひぬ。入道是の體を見て心潛に安からず、筑後守貞能の唯一人殘れるを召して問ふらく、內府兵を召す所存は如何に。今朝茲にて申しつる如く、淨海が許へ討手などを差向くるには非るべきかと。貞能涙を流して、君よ心安かれ、餘人は

仰せつけられ、御壺の内に引き出されて重盛が首を刎ねむこと、最と易き事に候はずや。斯くて後思ひのまゝに振舞ひ給へかし。あはれ一門の人々、重盛が申條をば如何に聞き給ふや。

重盛は直衣の袖を絞りつゝ涙ながらに斯様に諫め申されける。並み居る一門の人々首を俛して涙を流さゞるは無し。流石の入道も重盛が至誠の諫言に動かされ、暫しは俯きて御在しけるが、否とよ内府、入道が申せる事全く身の爲に非ず。餘命幾もなき浄海に於て更に何をか望むべき、唯々子孫長久の計を思ひたればなり。是の事若し人情に背き公道に外れたらば、御邊等に於て如何様にも計らひ申さるべしとて其のまゝ内に入られけり。重盛起立して中門に出で、侍共に聲高くの給ひけるは、重盛が唯今是にて申しつる事をば、汝等は如何に聞きけるぞ、汝等の中、院參の御供に加はらんと欲するものは、先づ重盛が首を刎ねよと。滿地の兵士寂然として聲無し。次に宗盛以下の諸弟に向ひて曰へらく、如何に殿原、入道殿に於て良しや斯様の御結構候ふとも、各自に於て眞に當家の爲を思はゞ、一次再次の諫止をこそ勵むべきに、猥に無謀に與みして干戈を弄ぶ、即ち是れ老父に惡事を濟

々は候ふらむ。是等の者共を召し具して、院の御所法住寺殿に籠り候はゞ、或は殊の外の御大事にこそ候はむずらめ。憶ひ起せば保元の昔、六條判官爲義は新院の御方に參り、子息下野守義朝は內裏に參りて父子弓矢を以て相向ひ候ひき。戰果てゝ後、判官は其の子の爲に朱雀大路に首刎ねられしこと、敕諚已み難しとは申しながら、惡逆無道の至り、口惜しき事に存じ候ひき。あはれ人事とのみ思ひし事の今は重盛が身の上に懸りけるよ。悲しき哉、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷廬八萬の頂よりも尙高き父の恩に背きなむ。傷ましい哉、不孝の罪を遁れむとすれば朝恩重疊の底窮め難き君の爲に不忠の逆臣となりぬべし。兩つならぬ身の忠孝並び立たず、進退維れ谷まり候ひぬ。詮ずる所の願は軍の門出に唯重盛が首を召され候へ。左候はゞ院參の御供をも仕らず、又院中をも守護し參らすべからず。重盛別に是非を分ち難し。申すも恐れあることながら、人の運命の傾かむとする時は、必ず惡事を思ひ立ち候なり。御一念の次第によりては平家の運命も今を限りとこそ覺え候へ。嗚呼槿花一朝の命に、何に望むべき榮華ぞや。何時までか存らへて家の耻、世の亂を見るべき。明日とも言はず、今日唯今、靑侍一人に

て、畏れ多くも法皇を脅かし參らせむこと、天魔波旬の聰明を暗ませ參らせしにや。天照大神正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなむず。夫れ我邦は神國なり、神は非禮を許し給ふべきにあらず。頁しや今日の御一念道理半なきに非ず、當家代々の忠勤無双の功勳を留めたるも、恩に狎れ賞に誇るは傍若無人に候はずや。幸に當家の運命未だ盡きざるが故に、御謀反既に顯れ畢むぬ。當の首謀なる成親の卿以下悉く罪科に服したる上は、退いて事の由を陳奏し、君の爲にはいよ〳〵奉公の忠勤を勵み、人の爲にはます〳〵撫育の哀憐を加へ給はゞ、君にもなどか叡慮を改め給はざるべき。然るを何事ぞ、臣として君に逼り參らせむこと、即がては天罰身に當り、後昆永く恥を被らむ。法皇を遷し參らせむの御存念、重盛身を以てあくまで爭ひ申すべし。

斯くまで諫め申しても尚ほ飽まで初念を果し給はむとならば、重盛は已む無く院中に馳せ參じて、叶はざらむまでも君を守護し奉らむ。不肖淺劣の身を以て大臣の大將を忝うす、既に國家の武臣たり、皇室事あるの日、私情また顧みるの遑あるべからず。其の儀にて候はゞ平生重盛が身に代り命を捨てむと契りたる侍共少

には仁義先王の道にも背き候ひなむず。誠に子として親に對ふ、恐れある事には候へども、願はくは御心を靜めて重盛が申す所を聞こし召されよ。總じて世に四恩の候ふ、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、是れなり、就中君恩を最も重しとなす。夫れ普天の下王土に非る無く、率土の濱王臣に非るは無し。されば彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽の山に薇を采りし人だにも、敕命背き難き禮儀をば存ずとこそ承はれ。如何に況や、倩〻當家の朝恩を惟れば心も詞もなか〳〵に及ばれね。抑〻御先祖貞盛公が平親王を誅せし時の勸賞も厘に受領に過ぎざりき。源賴義が貞任、宗任を誅したりし時、誰かは丞相の位に上り、不次の朝恩に與りしぞ。加ふるに當家は桓武の後胤とは申しながら、中比よりは官低く下國の受領をだに許されず。故刑部卿殿(忠盛)帝寵を被りて昇殿を許されし時は、人皆殿上の交を嫌ひにき。然るに御身は攝籙の家の外には曾て拜任の例を聞かざる太政大臣の尊位を極め給ふ。斯く申す重盛が如き暗愚の才を以てして大臣の大將となり、連府槐門の位に列り、剩へ六十餘州半ば一門の所領となり、田園悉く一家の進止たり。あはれ是れ前代未聞の君恩には候はずや。何事ぞ、今や是の鴻大無邊の君恩を遺却し

以て甲冑を裝へることの流石に耻かしく思しけむ、急ぎ內に入り、腹巻の上に薄墨染の素絹の衣を引き被ぎて出で向ひけるが、胸板の金物の外れて見えけるを匿さむとて、頻りに襟を引き合せける程に、却て綻びていとど閃めきて見えけり。入道やがて左あらぬ體にて重盛に向て曰へらく、是度の事、新大納言の謀叛は枝葉のみ、其の根本は一院(法皇)の胸にあること、西光法師の白狀によりて分明なり。されば暫らく世の鎭まるまでは、法皇をば鳥羽の北殿に遷し參らするか、又は當邸に迎へ參らせむは如何にと。重盛聞きもあへず、雙眼より涙をはらはらと流し暫くは物をもの給はず。入道は興醒め顏に唯內府が面を打まもるのみ。階上階下の一族子弟默然として互に顏を見合せぬ。

重盛暫くありて直衣の袖より疊紙を取出しはふり落つる涙を推拭ひ、容を改めて申しけるは、兎角の仔細は暫く擱き、是の御貌を見參らすこそうたてけれ。惟みるに天兒屋根尊の御末、朝政に與らせ給ひしより以來、太政大臣の官に在る人の身に甲冑を纏ふこと、未だ例を聞かず。況むや出家入道の御身に非ずや。解脫同相の法衣を脫ぎ捨てゝ忽ちに弓箭兵器を帶せむこと、內には破戒無慚の罪を累ね、外

つたるなれ。馬に鞍置かせよ、鎧持て參れと。聲色共に儼然たり。邸の內外に充ち〳〵たる軍馬俄に色めきて、旌旗將に法住寺殿を指して動かむとす。

事小松殿に聞こゆ。重盛大に驚き、扨は當家の大事こそ起りたれとて、烏帽子直垂にて、武裝せる從者一人も具せず、西八條へ馳せ參られけり。門に入りて眺むれば、一門の卿相雲客數十人、鎧の袖を列ね、冑の鍬を揃へて中門の廊に着し、郎黨雜色幾千騎、馬の手綱打懸け、旗竿引きそばめ、思ひ〳〵の武器を小脇にかい挾げて、一令の下に今にも打立たむず體なりけり。重盛は少しも騷がず、烏帽子直垂に大口の袴を踏みしだき、衣紋正しく悠揚として打通れば、並み居る人々事の意外に驚きける。右大將宗盛、重盛の袖を控へて、天下の大事あり、入道殿も既に甲冑を帶せられたるに、寬濶の御裝束こそ心得ねと申しければ、重盛斜に宗盛を睥睨し、皇室の重事をこそ天下の大事とこそは申せ。今日の事、入道殿が私心の振舞、一家の小事のみ。重盛、身大臣大將たり、國家皇室の大事に非ざるよりは爭でか猥りに弓箭を手にすべき。御邊は天下の大事と言ふ、朝敵は何處にある、そも〳〵何人に對つての合戰の用意ぞやと、宗盛を尻目にかけて通り過ぎぬ。入道遙に是の樣を見て、法體の身を

馬助(忠正)を始めとして一門多く新院の味方に參りにき。清盛故院の遺誡を重じ、私情を捨てゝ忠勇を勵みたりき。是れ一つの奉公ならずや。平治の亂起るや、信頼、義朝が徒、禁中に籠りて兩宮を脅かし、天下一時順逆を辨ぜざりき。清盛一門の子弟を提げてこの難局に當り、逆賊を追討して宸襟を安じ奉りたりき。凡そ是の間身命を抛ちて一家の亡滅を顧みず、偏に君の御爲を思ひたり。君にはかくても當家の勳功を輕しとし給ふにや。如何なる人の如何なる事を申すとも、義として爭てか是の一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに何ぞや、成親如き無用のいたづら者、西光と申す下賤の無道人が恣に申すことに君の隨はせ給ひて、動もすれば是の一門滅ぼさるべき御陰謀こそ心得ね。是の度の事は幸に治まれども、是の後とても讒奏するものだにあらば、當家追討の院宣を下さるゝと覺ゆるぞ。朝敵となりては悔ゆとも及ばじ。されば事を未然に拒がむ爲め、法皇を鳥羽の北殿に移し參らするか、然らずば當家に迎へ奉らむと思ふは如何に。其の儀ならば或は北面の武士共が一矢相酬ゆるやも測り難し。貞能、爾速に侍共に觸れて出馬の用意を促がすべし。今年今月今日入道こそは院の奉公ふつと思ひ切

鹿が谷の陰謀は是の如くにして敗れぬ。院中の平家に快からざるもの、是の一擧にして悉く滅びぬ。唯依然として相快からざるは法皇と清盛との間柄なり。鹿が谷の事、成親是が首謀者たりしと雖も、暗に法皇の意を迎へたること言ふを待たず、況むや法皇親しく是に臨まれたるをや。清盛夙に是の間の消息を解せるもの、素より成親、西光等の成敗を以て滿足すべきに非ず。彼れは如何にもして一つび法皇に甘心せずむば已まざるべき也。

五　重盛の諫言

西光既に斬られ、成親既に流されて事體尚穩ならず、人々耳目を側てぬ。入道は赤地の錦の直垂に黒糸縅の腹巻の白金物打たる胸板當て、先年安藝の守たりし時、嚴島の大明神より現に給はれりと稱する銀の蛭巻したる太刀の常の枕をも放たず立てられしを小脇に手挟み、中門の廊にぞ出られける。氣色決然とし、事由々しくぞ見えし。貞能と召す。筑後の守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧を着て入道が前に候ふ。入道曰く、如何に貞能、是の度の事はいかゞ思ふぞ。抑〻保元に平右

れば新大納言が謀反の事もとより與り知らずとは申すまじ。謀反には如何にも與みしたり。但し下﨟の徒、過分の官職とは耳障りの事を申さるゝものかな。抑〻御邊は故刑部卿忠盛の嫡子なりしが、十四五までは出仕もせず、京童は例の高平太とこそ云ひ囃せしか。然るを保延の頃言ふにも足らぬ海賊を搦め取りし勸賞に四位の兵衛の佐を給はりしだに、時の人皆過分と申さゞるは無かりき。然るを今は何の狀ぞ、殿上の交をだに嫌はれし人の子孫として太政大臣まで經上りたる、過分にあらずして何ぞや。西光が如き侍の檢非違使に至ること先例なきに非ず、何を以て下﨟の徒と云ひ、何を以て過分の官職とは申さるゝぞと、憚るところ無く言ひ放ちぬ。入道烈火の如く怒りて暫しは物をも言はず睨まへたりしが、其奴が首左右なく斬るな、八つ裂にせよと仰せける。松浦の太郎乃ち旨を受けて其の手足を斷ち、其の口を裂きて遂に死に到らしめぬ。慘酷言ふばかりなし。西光の子弟悉く殺され、康頼、俊寛及び成親の子成經は鬼界が島に流さる。成親は首謀者として斬らるべかりしを、其の女重盛の子維盛の室たるの故を以て僅に宥恕せられ、死一等を減じて備後の兒島に流されしが、入道人を遣はして間もなく殺されけり。

の響をなし來りぬ。右大將宗盛、三位中將知盛、頭の中將重衡、左馬の頭行盛以下一門の郎黨甲冑弓箭を帶し、陣燈篝火を輝かして西八條に集まるもの凡そ七千騎、黎明物色を辨ずる頃、旌旗粲として洛西の空を掩ひぬ。明くれば六月一日、入道人をして院の御所に到り、高言せしめて曰く、新大納言成親の卿以下、陛下近習の嬖臣擧て平家を亡ぼさんとす、清盛身苟も武將なり、爭でか坐して逮捕の恥を受けむ、一々搦め取りて屹度糺問に及ぶべし。かゝる事をば陛下爭でか知ろし召さゞるべき。清盛素より思ふ旨ありと。法皇謀の洩れたるを見、憂懼して兎角の御答もあらざりき。平家の兵、四方に走りて悉く成親以下の與黨を捕ふ。

入道先づ西光を內庭に引き入れ、大床に立ちて暫し磴（にだ）と睨まへしが、あな惡くや、當家傾けうずる謀反の奴よなとて、椽の際に引き据へさせ、土足のまゝにて其の面を散々に踏み碎き、己等が樣なる下﨟の徒を君の召し使はせ給ひて、過分の官職を當て行はるればこそ、かゝる要なき業をも仕出かすなれ。謀反の始終ありのまゝに申せよとの給ひける。西光素とより勝れたる大剛の者なりければ、神色自若として毫もわろびれず、清盛を流し目に見やりて冷笑して曰へらく、身は院の別當な

を凝しぬ。會するものは撿非違使平康頼、僧西光、西景、法勝寺の執行俊寛、武士には多田の藏人行綱、其他北面の武士等、何れも院の擧幸を被れるもの。法皇亦靜憲法印を隨へて潛に是に臨み給へり。たま〳〵山門の騒動より續いて內裏炎上の事あり、成親等暫らく氣勢を收めて時の至るを待ちぬ。然るに多田の藏人行綱は早くも事の成り難きを察し、夜潛に入道が西八條の邸に參りて、行綱こそは當家の一大事を聞出したれ、直に入道殿の見參に入りて仔細を申さんとぞ言ひ入れける。入道出でゝ其の故を問ふ。行綱曰く、此程院中の人々の兵具を整へ、軍兵を催すは、何事とばし思ひ給ふ。入道、あれは法皇の山法師攻めらるべき結構とこそ聞けと、事もなげに答ふ。行綱低聲首を振りて曰く、否々、一向當家の上にかゝれり。入道問ふ、其の事、院も知ろし召されしか。行綱答て曰く、仔細にや及ぶ、院宣既に新大納言(成親)の手にありと。かくて康頼、西光、俊寛等が事、具に陳じぬ。入道聞き終りて大に怒り、直に筑後守貞能を召して聲を勵まして曰く、當家傾けむとする謀反の輩こそ京中に充ち〳〵たんなれ、急ぎ一門の武士を招集せよ、清盛謀る旨ありと。

一令既に西八條の邸を出づ。時維れ初夏、陰暗寂々たる洛中の上下は俄に軍馬

言語に斷へたるを御覽ぜずやと。一座色を失ひ、事の六波羅に漏れむことを恐れき。然れども西光が言は必ずしも荒誕に非ざりき。清盛の放縱漸やく上下の望を失ひ、衰亡の機はやく冥々の中に動き初めしを見るべきか。法皇はた必ずしも平家追討の御意なきにも非ざりき。清盛の深く意趣を挾むもの、亦故無きに非ざりし也。かくて平家と法皇との不和、是より漸やく加はりぬ。而して鹿が谷の會合は是の不和の第一の破裂なりき。

事の起りを尋ぬるに、治承の初め、內大臣藤原師長左大將を辭せしかば、權大納言藤原實定、大納言藤原成親共に代て大將たらむことを望みぬ。然るに時の右大將重盛左に轉じ、重盛の弟、時の權中納言宗盛一躍して右大將となりぬ。大納言を經ずして大將となる、實に不次の昇進なりき。實定は宗盛の下に附くを恥ぢ、官を辭して隱居し、成親は深く憤りを含みて機の乘ずべきを伺ひぬ。成親素と院の嬖臣たり。平家勢を得てよりこのかた院政頓に荒廢し、北面不平の徒多し。成親乃ち潛に是等の徒と相結び、平家覆滅の隱謀を企てぬ。洛東鹿が谷は俊寬僧都が山庄の在る所、後は三井寺に續きて自然の城郭を成せり。成親等屢〻茲に會して謀議

永萬の夏、二條帝の崩れさせ給ひし時、大葬の事よりして興福、延暦二寺の間に爭ひ起りぬ。山門(延暦寺)の大衆、山を下りて興福寺の末寺清水寺に押し寄せしが、會〻流言あり、曰く大衆の山を下るは一院(後白河法皇)の仰せによりて平家討伐せられんが爲なりと。京中大に騒ぎ、平家の武士皆六波羅に集まる。一院も亦大に愕かせ給ひ、平家の疑を釋かむが爲に、急ぎ六波羅に幸せらる。清盛病と稱して謁せず、深く銜むところあるが如し。かくて事體分明となりて一院還御ありて後、重盛を召して曰へらく、かねて一院の意趣あればこそかゝる風説も聞ゆるなれ。吾曹今より深く慮る所無かるべからずと。重盛涙を流して申さく、あな畏れ多き御言條かな。良しや何事の候とも、この事ゆめ〳〵口外し給ふべからず、徒に世の亂れを釀さむず。たゞ〳〵叡慮に背くことなく偏に臣道の忠誠を勵み給はゞ、人の心も和らぎ、起るべき禍も鎭まらむと。然れども清盛の心は尚ほ釋けざりき。

○法皇既に六波羅より還り、近臣に向ひて、平家追討などゝ扨ても不思議の事の傳はれるものかな、昨に於て露思ひよらぬものをと仰せける。院の寵臣に西光法師なるものあり、放言して曰く、天に口無し、人を以て言はするのみ。當今平家の過分

いづれか秋に遇はてはつべき

その後妓王は世を果なみて、二十一にて尼になり、其の母と妹と共に嵯峨の奥なる山里に形ばかりなる柴の庵を結び、唱名念佛に後世を願ひ暮しけり。今は妓王に代りて入道の覺え目出たき佛御前も流石に物の哀れをや覺えけむ、露しげく月あかき秋の一夜、西八條の館を抜け出でゝ妓王が庵を訪れ、はかなき浮世の今昔を語りあひて、共に髪をぞ落しけるとなむ。凡そ入道が我執の一心はかゝるはてまでも世の哀れをぞ留めける。

四　鹿が谷の會合

私門の榮耀につれて入道が放恣はいよ〳〵募りまさりぬ。一代の豪華、やがては夢のたゝちに消えて、後昆耻に及ぶべしとは誰か知るべき。人をも君をも己が心のまゝにして、世に事なくぞ振舞はれけるこそゆゝしけれ。天子朝に在せども無きに等しく、兩代の院政はた全く荒み畢むぬ。志あるものの中には暫らく世の成行を見むとて官位を捨てゝ野に隱るゝものもありき。

じけれども、妓王の勸めにて斯くは見參に及びつるぞ、先づ今樣一つ歌ふべしとの給ふ。佛、承りて『君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松』てふ一曲を押返し押返し三度びまで心も及ばず歌ひすましける。佛年始めて十六、世にも稀なる美女にして、嬌名既に京洛を壓せるもの、一座恍然として醉へるが如し。入道思ひの外に興に入り鼓打たせて更に一番の舞を要めぬ。げに春花の姿、秋月の粧ひ、立てば玉簪の花に擬ひ、歩めば楊柳の條に似たり。多情の入道恍惚として吾にもあらで眺め入りしが、何時しか佛に心移しける。佛驚きて、こは如何に、妓王御前の情にて見參を得たる上は他に望むべきこと候はず、疾く〳〵暇を給はるべしと申しければ、良し〳〵妓王あればこそ和御前の辭退もあるらめ、其の儀ならば妓王に暇を遣はすべしと、佛の泣き詫ぶるを耳にも入れで妓王を放ち遣りしこそ無情かりけれ。あな心無の入道殿や、三年の情、一日の思ひに代へられて、今は道芝の露に棄てられけるこそ哀しけれ。なからむ跡の紀念にもとてや、妓王泣く〳〵障子に一首の歌をぞ書きつけける。

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

には赤符と鈴とを附けたる一羽の鳥を据へさせ、かゝる異形の裝束にて日夜京洛の街衢を徃返せしめたり。入道此等の童に申聞けゝるは、若し淨海に意趣を含みて惡樣に言ふものあらば聞出して申し出でよと。かゝれば入道殿が禿とし云へば洛中の門戸其の足音に屏息し、道に遇ふものはさながら御幸にも會したらむが如く、車は脇を通り人は歩を讓り、手を折り腰を僂めてぞ過ぎ行きける。是等の禿童の申し出づる事は事の實否をも糺さずして入道は許容しければ、萬人是に追從して毫も平家の事を語らず、又禿童に惡まれたる者の入道の爲に寃枉の罪に陷るもの少からざりき。

入道が奇怪は是に止まらず。賤しき遊女共を召し抱へて折花攀柳の樂を恣にし、更に世の譏、人の嘲を憚らざりき。當時京中に聞えたる白柏子の上手に妓王なるものあり、先づ入道が撰に入りて寵愛斜ならざりしが、茲に佛と呼べる白柏子加賀の國より來り、われ天下に譽あれども、當時目出たく榮えさせ給ふ太政入道殿へ召されてこそ遊びものゝ本懷なれとて西八條殿に參じて謁を求めぬ。入道妓王の勸めにて是れを招き入れ、いかに佛、今日の推參は妓王が在らむずる所には叶ふま

內大臣の左大將となり、次男宗盛は中納言の右大將三男知盛は三位中將、嫡孫維盛は四位少將を始として一門の公卿すべて十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衛府諸司六十人にも餘れり。私封全國に通じて三十餘州、田園一家の進止に依り、朝廷の除目亦入道が左右に任ず。往昔藤原氏世盛りの頃だにも、かゝる例は無かりしを、前代未聞とぞ人皆評し合へりける。げに十年前までは殿上の交をだに嫌はれし人、今は恣に禁色雜袍を聽され、かつて黑金の鎧に身を固めし人、今は綾羅錦繡を纏ひて宮廷の間に出入す、變れば變る浮き世かな。入道が妻の兄に平太納言時忠と云へるあり、揚言して曰く、今の世に、平家の一族にあらざらむものは悉く皆人非人たるべしと。これ必ずしも大言放語に非りき。朝野を問はず、都鄙と云はず、平家の一門を外にして、世に又人無くぞ見えにける。

平家の權勢の斯く盛大なるに慢じてや、其の頃の入道に奇怪の振舞多かりき。例へば年の頃十四五より十六七ばかりなる少童三百人を集め、其の頭を禿にして唯頂に少許の髮を殘し、或は長絹の直垂に褐色の布袴を着せ、或は繡物の直垂に紅の袴を着せ、梅が枝の長さ三尺ばかりなるを手もと白く汰へて右に持たせ、左の手

許さる、偏に執政の臣の如し。凡そ古より左右大臣を經ずして直に太政大臣に上れるもの、先きに藤原信長一人ありしのみ。げに驚くべき異數の昇進なりき。仁安三年の暮病に罹り、存命の爲にとて出家入道し、法名を淨海（又は靜海）と呼べり。世是を太政入道と稱す。

太政入道が榮華は更に驚くべきものなりき。さながら草木の風に靡くが如く恩怨指顧の間に報はれ、禍福進止の中に定まれり。されば苟も名利を當世に希ふものは先を爭うて入道が意を迎へ、天下の勢いつしか六波羅の朱門に集まりぬ。攝籙の家は名のみにして、四海の成敗は皆こゝに決し、兩宮の宣旨重からざるに非れども、世は偏に入道が顰笑を伺へり。されば六波羅殿の御一家の公達とし云へば、名門華族も肩を並べ面を向ふもの無し。名も無き雜人に到るまで平家の御内とだに云へば人皆路を讓り禮を厚うせり。はては烏帽子のためやうより衣紋の書き振に到るまで、萬づ六波羅樣とて、天下の人爭て學ぶ。由々しかりなむとも言ふばかり無し。

獨り入道一身の榮華のみならず、平治の時に左衛門佐に過ぎざりし嫡子重盛は

のなし。

三　一門の榮華

保元よりこのかた藤原氏の權力また言ふに足らず、朝家の事やうやく武人の手に落ちて源平の兩家互に門地を張りぬ。平治の亂是の軋轢の爲に起りて源氏の敗となりしかば、平家の勢今や世に比びなきものとなりぬ。清盛にして何を欲するも誰か是を沮み得べき。身は先きに三代の禍亂を鎭めて帝座爲に安かりき。功勳今や一世を掩ひて後ろに闔國の武力を控へたり、天下何物か意の如くならざらむ。剛情我慢の清盛が思ひのまゝに振舞ふべき時は來りぬ。

先づ驚くべきは、平治より仁安に至るまで僅に八年間に於ける清盛が官位の昇進にぞありける。平治の翌年には參議に任ぜられ、次いで應保、長寬の間には右衛門督に檢非違使別當を兼ね、間もなく權中納言となり、從二位に敍せられ、永萬には權大納言に任ぜられ、翌仁安元年には正二位內大臣に進み、翌二年には一躍して從一位太政大臣に任ぜられ、剩へ隨身兵仗を賜ひ、輦車のまゝにて宮中に出入するを

次て仁和寺に逃る。天皇、上皇既に在らず、禁裏集まるところは信頼、義朝の徒黨のみ。清盛是に於て宣言して曰く、聖天子清盛を頼みて六波羅に幸し給ふ、朝敵たらざらむと欲するものは急ぎ馳せ參ぜよと。公卿百官より衛府諸司の末に到るまで先を爭うて到る、諸國の兵亦來り會す。信頼、義朝等兩帝を逸せるを悔恨すれども及ばず。順逆の道全く別れ、勝敗の數戰はずして定まりぬ。是の月二十七日信頼は誅に伏し、義朝は東國に遁れ、幾もなく其の家臣の爲に殺さる。

平治の亂は是の如くにして始まり、是の如くにして終りぬ。其の結果として見るべきもの二あり、朝廷の大事、武家の後援なくして爲し能はざる事明となれるは其の一なり。源氏の勢力全く地に墜ちて天下の武力が平家の一門に歸せるは其の二なり。是の如くにして平家全盛時代の端緒やうやく啓かれぬ。清盛は功を以て先づ正三位に叙せられ、嫡子左衛門佐重盛は伊豫守に、太夫判官基盛は大和守に、宗盛は遠江守に、清盛の弟三河守頼盛は尾張守に任ぜらる。その他一族平定の功を以て重賞を被らざるは無し。源氏の子弟にして幸ひに死を免れたるものは義朝の三男頼朝等其の妾常盤の生める三幼兒のみ。京畿の間また源氏を言ふも

信頼何の障害をも受けずして一時其の志を遂げ得たるは、是の虚に乗じたるが爲なりき。同じく十日六波羅の急使清盛の跡を追うて事の急を告げぬ。

清盛變を聞いて心潜に惑ふ。嫡子重盛慨然として曰く、身は弓馬の家に育ちて夙に武道の頭領たり。今や眼のあたり天子逆臣に逼らるゝを聞いて爭でか國難に赴かざるを得むと。清盛是に從ひ熊野の別當湛増等をして兵を徴さしむ。集まるもの僅に百騎ばかり。たま〳〵義朝の長子惡源太義平、三千餘騎にて安部野に待つと聞ゆ、衆皆色を失ふ。清盛衆寡敵せざらんを恐れ、先づ西國に赴き兵を勒して再擧を謀らんと欲す。重盛諫止して曰く事若し延引せば、賊必ず院宣綸旨を矯めて我を討たむ。一旦朝敵となりては名義彼れにあり、悔ゆとも及ばじ。且夫れ寡を以て衆を討つは兵家の常なり、何ぞ必ずしも必敗を期せむ。如かず快よく一戰して成敗を決せむにはと。清盛意決し、奮然として京師に向ふ。途に伊勢の同族三百餘騎の出で會するに遭ひ、兵氣大に振ふ。

清盛既に京師に歸り、大に同族の兵を會して戰を議す。唯天皇上皇信頼に擁せられて宮中にあり。乃ち謀を以て先づ天皇を出だして六波羅の第に迎へ、上皇亦

病と稱して朝せず、潛に朋黨を結びて日夜復讐を計りぬ。

信頼が朋黨の重もなるものは言ふまでもなく義朝なりき。義朝既に志を朝廷に得ず、徒に平家の昌榮を目睹して嫉妬の念に堪えず。加ふるに其の婚嫁の事よりして信頼と同じく、深く信西に怨あり。彼れ驍勇氣を負へども愚昧にして大體に通ぜず。信頼の甘言以て誘ふに會ひて心潛に念へらく、事若し成らば一擧して平家の權勢を仆し、且は信西に甘心するを得むと。乃はち快く是を諾し共に事を擧ぐ。揚言して曰く、臣信頼殊恩を承くること久し、而るに今や道路傳ふる所を聞くに信西の讒によりて當に誅せらるべしと、臣自ら安ぜず、事實に已むを得ざるに出づと。兵を以て院宮を燒き、上皇及び天皇を幽し、信頼宮中に入りて自ら大臣大將となり、義朝を播摩守に任じ、一味の朋黨各〻官位を進めらる。信西變を察して南都に走りしが、遂に信頼の兵に殺されぬ。斯くて世は一時信頼の天下となりぬ。

是時清盛以下の平家の一族は何事を爲しつゝありしか。信頼の事を擧げしは平治元年十二月九日なりき。是の日に先だつ五日、清盛その一族を率ゐて紀州の熊野に詣でしかば、六波羅なる平家の營宅には然るべき武士の影さへ見えざりき。

と相結ぶを見て義朝たるもの如何ぞ憤然たらざるを得むや。義朝が不平は清盛の期待せし如くに深うなりぬ。源平兩家は漸く兩立し難き勢を示し來りぬ。而してかく敵を逆境に陷れて一擊の下に仆さむは、言ふまでも無く清盛が宿志なりき。

是の宿志の果さるべき機會は遂に來りぬ。平治の亂こそ實に是の機會なりけれ。其の顚末略ぼ左の如し。

前少納言藤原通憲、今は入道して信西と呼ばるゝは才學當代に倫なく、鳥羽帝以後數朝に歷事し、殊に其の妻は後白河帝の乳母たりし故を以て帝寵衆に勝れ天下の事與り聞かざる事無し。然るに茲に上皇(後白河)の嬖人に藤原信賴と云へるあり、信西と寵を爭ひて相容れず。信賴大將を望みて上皇將に是を聽さむとす。信西諫めて曰く、除目は國家の大典なり、其人選を誤り給はゞ上は天心に背き下は人情に離れむ。信賴驕慢にして進みて大將を望むこと甚だ分に過ぎたり、是をしも聽るし給はゞ禍亂の端恐らくは是より啓かられむと。唐の安祿山の繪圖三卷を獻じて暗に是を諷爭す。敘任の事遂に已みぬ。信賴傳へ聞きて深く信西を憤り、

を失ひ、只一人になして後、事の次に滅さむと企つるをば暁り給はぬにや、二三年を過ごし給はじ。幼かりしかども乙若が船岡にて能く言ひしと思ひ合せ給ふらむと。嗚呼乙若何者ぞ、清盛が心事を洞察して能く是の言を爲さむとは。

保元の亂是の如くにして終りぬ。白河殿の夜討にて戰功最も顯はれたるは義朝なりき。剩へ朝命已むなくして其の父と其の五弟と多くの一族とを殺したりき。されど功を論ずるに及びては僅に左馬頭を拜せしのみ。之に對して平家の一族は、是度の戰に左して爲出でたることも無きに、盡く重賞を被り、清盛は安藝守より播摩守に遷り、間もなく太宰の大貳に進み、その他子弟郎黨何れも恩賞の渥きに誇らざるもの無し。義朝心平かならず潛に平家の寵遇を嫉みて皇恩の薄きを恨みぬ。義朝にしてこの怨嗟ある、誠に平家の幸なり。機先を制するに敏なる清盛は、ます〳〵彼れが怨嗟を深からしめ、終には自滅の道を取らしめざるべからず。是に於て時の寵臣藤原信西と結托し、其の女を納れて信西が男に配し、內外相應じて源氏を沮害せり。義朝亦信西によりて勢を成さむと欲し、先に其の一子を得て女婿となさむと求めしが許されず、辭令甚だ傲然たり。而して今や間もなく平家

不思議なる。

是の匆劇の際に於ける清盛の擧措を考ふるに、彼れは曾に武人として勝れしのみならず天晴れ一箇の策士にてありき。彼れは保元の亂に乘じて愷に平家の權勢を伸ばすべき好機會を捉へぬ。一義朝を除いて源氏の一門を敵とせるは彼の最も喜びたるところなりき。げに平家の爲に計るものは勢ひ源氏の力を殺がざるべからず。彼れは戰勝の後に於て先づ爲義以下の一族を亡ぼさゞるべからず。是に於て彼は義朝をして其の父を斬らしめんが爲に先づ自ら其の伯父を殺せり。義朝累奏して其の父の死を宥めむことを請ふや、帝怒りて曰く、清盛既に其の伯父を殺したるに非ずやと。清盛の上意を迎へたる略ゞ察すべき也。愚昧なる義朝は平家の遠謀とも知らず、やがては其の身に及ぶべき禍害をも想はずして遂に其父と一族とを擧げて悉く之を殺しぬ。想ふに此の時清盛は手を額にして其の策略の思ひのまゝに中りしを慶せしならむ。爲義の末子に乙若と云へるあり年僅に十三、義朝人を船岡に遣はして之を斬る。乙若從容として歎じて曰へらく、哀れはかなき事し給ふ頭殿義朝かな。定めて清盛が讒言にてぞあるらむ。多くの弟

してかつては萬乘の位を忝くし、今はた上皇の尊きに居る。皇統の繫るところ、朕が重仁に非ずして誰ぞや。先帝是を舍きて文もなく武も無き四の宮(後白河)を立て給ひき。今や先帝昇遐し給ひぬ、朕大事を擧げむに何の憚る所かあるべきと。頼長素と其の兄忠通と權勢を爭うて志を得ざるもの、上皇の言を聞いて潜に思へらく、事成らば己れ攝關たるを失はじと。即ち上皇に勸めて直に兵を擧げしめぬ。斯くて上皇の召に應じて白河殿に集まれる武士は源爲義を筆頭として長子義朝の外源氏の一族並に清盛の伯父平忠正等なりき。爲義は志を官邊に得ず、潜に朝廷の無情を恨み、忠正また清盛と善からず、平生門地の揚らざるを快しとせざるもの、今や何れも上皇の大事に與して功を一戰の下に收めんと願ひたるなりき。

清盛が上皇の與黨と離れ、義朝と共に高松殿に赴きたるは、實に彼れが幸運なりき。かくて鎭西八郎が夜討の建策、空しく長袖公卿の沮むところとなりて、攻守の勢早やく成敗の算を定め、義朝驍勇能く戰ひて白河殿は一夜の内に灰燼となり、上皇一味の徒黨俄に亡落の徒となりぬ。而して是の亂に於て少しく勞して多く得たるものは清盛なりき。保元の亂は恰も平家興隆の爲に起りたるの觀ありしぞ

忠盛南海の賊を捕へたる年、從五位下に叙せられ、左兵衛佐に任ぜらる。保延年中、中務大輔に遷り、肥後守を兼ね、從四位下に進む。近衛天皇の久安二年正四位下に進み、安藝守に任ぜらる。時年廿八。是の間の事蹟、史に所傳なければ考ふるに由無し。唯その安藝守たりし時、世に名高き鱸の話ありき。そは一とせ伊勢の安濃の津より船にて熊野に詣でける時、大なる鱸、清盛が船中に躍り入りき。先達清盛に告げて曰く、ゆゝしき瑞相かな。昔周の武王の船にこそ白魚は躍り入りたるなれ、こは必定權現の利生なるべしと。清盛大に喜び、さしも十戒を保ちて精進潔齋の旅なりけれども、手づから調理して自らも食ひ、家從郎黨にも頒ち與へたり。是れまさしく九代の先將を超えて丞相の位に上るべき吉兆ぞと傳へられき。

かゝる間に清盛の雄飛すべき時機は來りぬ、保元の亂是也。そも〳〵事の起りを案ずるに、崇德天皇鳥羽上皇の爲に强ゐて位を下らせられ給ひしより居常甚だ樂まず。近衛帝崩じて後白河帝位に卽くや、重祚の念頻りなり。時しも保元元年の夏鳥羽法皇の崩御あり。崇德上皇親しく臨み給ひしが、遺詔として納れられず。上皇大に怒り還り、左大臣藤原頼長に仰せられたるは、朕非德と雖も先帝の嫡子と

杜とも頼み給ひたるは源平の武士なりき。彼等の向背は直に天下の大事を左右するの力ありき。清盛、義朝こゝに兩家の勢力を代表して威望當代を壓しぬ。世は既に武人の手に落ちては、こゝにおのづから武人の間に權力の爭ひ起らざるを得ず、平治の亂は是の如くにして興りき。源氏の勢力は其の頭領たる義朝と共に沒落して一世の武力は全く平家の手に落ちぬ。かくて平清盛が前代未聞の榮華を輝かすべき時代は來りぬ。是を平家興隆の由來とす。

二　清盛の前半生

清盛死せる時年六十四、その名を成せるは保元、平治以後にあり。而して保元の時年既に三十八、平治の時四十一、されば清盛の前半生は概ね韜晦の中に過ごされ、特に名の稱すべき無く、事の記すべき無きが如し。彼れ素と一代の雄、尚ほその時勢に待つある是の如きものありき。

清盛は刑部卿忠盛の子、貞盛六世の孫に當る。母は白河帝の宮女なりしが、後忠盛に給ひて清盛を生めり。長じて穎悟、姿貌また優美なり。崇德天皇の大治四年、

士に對しても論功行賞の事あらざりき。義家憤然として曰く、我家の事何ぞ朝議を煩はさむと。乃はち賊の首級を道路に捨てゝ、京師に還り、私邸を開いて盛に將士を勞ひき。關東の武士相慶して曰く、今より吾曹寧ろ朝廷に背くとも永く源氏に背くこと無からむと。武家の勢力是に至りて居然として動かざるものあるを見るべし。

藤原氏衣冠束帶を以て天下の權柄を秉れること二百年、まゝ東國北邊の禍無きに非れども天下幸に大事なかりしかば、累代の積勢尙ほ多少の力あり、攝籙の名目依然として重きを朝廷に稱しぬ。されど勢は終に極まりぬ。天下の事、最早や虛名の爲し難きものあり。是に於て武家の實力は時代の要求に應じて喚び起されぬ。事是に到れば世は官階の上下にあらずして弓矢の强弱なり。畫眉涅齒の大宮人は、禁色の素袍美はしからざるに非れども、軍陣の前には用なき人となりぬ。かくて世は武人のものとなりて源平兩家の榮ふべき時は來りぬ。而してこの氣運を速やめたるものは即ち保元平治の亂に外ならざりき。

保元平治の亂の精しきは暫らく說かじ。唯保元の際兩帝位を爭ふに當りて杖

に維衡五世の孫也。維衡の弟繁盛、その孫維茂は奥羽、信濃、越後に著はれ、城、仁科の族あり。勢力漸やく地方に布けるを見るべし。經基の子に多田新發意といへるし滿仲あり、滿仲の子に頼光、頼信あり、武名共に當代を壓せり。殊に頼信、平忠常を上總に誅してより、東國は永く源氏勢力の根據となれり。頼信の長子頼義は前九年の役に曉名を曩かし、其の孫義家は後三年の戰に武威を輝かしぬ。頼朝は實に義家の曾孫也。

源平二氏は是の如くにして何時しか弓馬の家とはなりぬ。天下事あれば討伐の任に當るもの常に是の兩家に非るはなし。藤原氏殿上の政柄を握れども、其の勢力は階下一步の外に出でず、遂に武家の跋扈を來たしたるもの、免るべからざる勢なりし也。源義家の如きは明に藤原氏の權勢を蔑視して、大に武人の爲に地步を占めたるものなりき。後三年の役、方に終り、賊魁武衡、家衡誅に伏するや、義家上表して曰く、二兒の罪貞任、宗任に過ぎたり、今官兵の調發を煩はさずして幸に討平することを得たり、速に追討の官符を下されなば、願はくば其の首を闕下に獻ぜむと。然るに朝議是の戰を目するに私鬪を以てし、遂に官符を下さず、義家以下の將

これ喜びて、梅が香に春を痛み、蟲の音に秋を悲しみ、あるは優柔これ尚びて、檐近き山の端の月をめで、前栽に匂ふ撫子花の麗しきを偲ぶ。衣冠束帶の威儀なきに非ざれども、文恬武熙の弊、やうやく極まりぬ。たゞ夢の世に夢の如き榮華を追ひ、櫻かざして暮らしつる百敷の大宮人こそいとあさましけれ。華山一條以降に及びて是の腐敗は更に甚しかりき。かゝれば朝綱いつしか地に墜ちて四方の政漸く振はず。地方には豪族跋扈して良民塗炭の苦を受け、國司亦私門を張て朝命を奉ぜず。政府力無くして又是を如何ともする能はざるに及びては、藤氏の權柄漸く空名に近づきたるを見る。源平武士の時代は是の間に於て默々の中に轉移しつつありき。

源平の武士、亦その由て來るところ頗る遠し。史を按ずるに承平、天慶以前にありては特に弓馬の家と稱するもの無かりき。將門、純友の亂あるや、朝廷勇悍の士を募りて是を討ぜしめ、許すに官爵を以てせり。弓馬の家としての平家、源氏の祖先とも見るべき平貞盛、源經基の名は是に於て初めて史上に現はれぬ。貞盛の子維衡は武名乃父に劣らず、其の子孫伊勢に住して所謂伊勢平氏と稱す。清盛は實

一　平家興隆の由來

一期の榮耀浮べる雲の如くにして、沒落の恥はやく後昆の踵につぐ。まことや祇園精舍の鐘の聲、沙羅双樹の花の色、彼れに諸行無常の響あり、此れに盛者必衰の理あり。奢れるもの久しからず、猛き心も遂には滅びぬる世の習ひなるに、平相國太政入道清盛が一生こそ、なか〳〵に心も詞も及ばれね。

そも〳〵事の次第を按ずるに平家の興れる、一日のことに非ず、世運の推移、由つて來るところ甚だ遠し。清盛武弁の家に生れ、殿上の交をだに嫌はれし身を以て、忽ち攝籙の家を凌ぎ、位人臣を極め權勢上下に並びなきを得たる一身の材器に依るもの素より多かるべきも、そも〳〵亦時勢也。

そを如何にと云ふに、昌泰、延喜のそのかみ、寛平帝の宿志を受けて藤原氏抑制の地位にありし菅公の流竄せられし頃より、天下の大權全く藤原氏の手に落ち、皇威是より永く陵替し、藤氏の一門廊廟に充ち滿ちぬ。彼等胸に何等經綸の策あるに非ず、花晨月夕、たゞ宴游の樂みに耽り、畫眉涅齒、徒に巾幗の姿を弄ぶ。あるは風騷

目次

一　平家興隆の由來
二　清盛の前半生
三　一門の榮華
四　鹿が谷の會合
五　重盛の諫言
六　重盛の最後
七　重盛論
八　法印問答
九　法皇の幽屏
一〇　源氏の勃興
一一　入道の最後
一二　清盛論

自序

この書は友人東京堂主人の切なる依囑により專ら少年諸君のためにもくろみなれば、素より大方史家に示して批判を仰ぐべき者にあらず。且つ發刊の期日に逼り、稿を脫するや再讀の遑もなくして剞劂氏に附しぬ。省みて二三の遺漏あるを認めたりと雖も、そは再刊の日を待て更に添加するところあるべし。病中の除業興加はらずして遂に會心の文字を作さゞるは著者の深く慚づる所也。

湘南に於て

著者記

明治三十四年初冬

平相國

開其難關門　空三惡趣獄　導天人無爲　經超度三世
縛阿須倫魔　勸導衆善本　雨三寶於世　往古轉輪王
自在於四方　於己不自從　免死量無爲　佛修種々業
治理法空城　濟脫塵勞賊　將至無爲城

（卅一年一月）

樹の枝を鳴しぬ。

翌日末羅族の人々佛弟子と共に佛陀の遺骸を焼きぬ。茶毘の烟日月の光を掩ひ、跋提河一帶の地は天花の爲に埋れぬ。

第十五章　附　言

是の如きは世に知られたる大聖釋迦の傳記なり。世界を以て一家とし、衆生を以て一子とし、一切現世の差別を超絶して、三世十方平等普遍の眞理を説き、法化人天に被り、遺德四生に及ぶ。何の辭を以て是に加ふべき。歳時移り、方處換り、其教今又昨の如からずと雖も、永く世界歴史の一大要素たるを失はず。只流傳三千年、佛傳の徴すべきもの甚だ少きを恨とすべきのみ。後世佛徒其功業を讃美して曰く。

佛是普世師　好首所"虚謗"　心等無"喜樂"　愚利衰毀譽
若稱"識苦樂"　八法不"能"染　猶如"水蓮花"　天上人間樂
親皆爲"不實"　觀"世如"愚戲"　有形皆空無　三惡起"衆生"

む。我れ吳々も汝等に告げむ、我道を守るものは即ち我側に侍せるなり。我に相見るを以て足れりとする勿れ、若し我道にだに從はざらむには、我と終日相接するも又何の益かあらむ。

『諸弟子よ、若し汝等の中我が死せるを見て、「主の敎は終れり」と謂ふものあらば、それは我が徒に非るなり。我れ今肉體を離れて三界の苦境を脫れむとす。我は我が法の爲に一切輪廻の作業を滅盡したり。然れど諸弟子よ、佛陀は永存すべし、我が五十年の說法と我が敎會の戒律とは、即ち汝等の師たるべし。

『我れ重ねて汝等に告げむ、集まり成れるものは遂に壞るゝの時あるべし、唯眞理のみ永遠渝ることなし。汝等が不退轉の向上心を以て精進希求すべきもの唯是れ法（眞理）のみ。』

嗚呼是の如きは佛陀が最後の說法なりき。人天三界の大救主は八十歲の老軀を殘して、沙羅双樹の下に大般涅槃（マハーパリニルヴァーナ）に入りぬ。諸弟子は齊しく泣き叫びて曰く、「嗚呼佛陀の來る何ぞ遲かりし、佛陀の去る何ぞ速かりし、世界の光は遂に滅したる乎。是時天轟き、地震ひ跋提河上の秋風は六合の悲哀を吹き度して、蕭々として沙羅双

佛陀は終焉の期近きを察し、弟子を伴ねて祈連跋提河（ヒラニヤバテー）の岸なる沙羅双樹（シャーラ）の間に憩ひ、阿難陀をして北を枕にして臥床を設けしむ。阿難陀は佛陀が高弟の一人なり。是より先き目犍連（もくけんれん）（マハーカルヤーヤーナ）は外道に殺され、舎利弗（しゃりほつ）（シャーリプトラ）と三迦葉と亦已に沒したるなり。

佛陀は臥床に横はり、諸弟子を集めて終焉の期近づけるを告ぐ。諸弟子皆悲叫して曰く、『佛陀百歳の後、我等又誰をか師とすべき』と。佛陀是に告げて曰く、『我親愛なる諸弟子よ泣き悲むを已めよ我の是世に來れるは眞理を傳へて是世を救はむが爲なり。今や眞理の王國は建てられぬ。我は我が救世の大使命を終りたるなり、何れの時是世を去るも誰かそを悲むべき理あらむや。諸弟子よ、形ある一切の物は、必ず壞るゝの時あるべし。集まり成れる一切の物は遂に散ぜざるを得ず、生あるものは遂に死せざるを得ず。唯世に法（眞理）のみ永久渝ること無かるべきなり。然れば迦毘羅國の王子悉達多は死すべし、佛陀は永く滅ぶこと無かるべし。そは佛陀は法（眞理）なればなり。汝諸弟子よ我が法（教）をだに守らば、我れ永く汝の傍に在るべきなり。

『諸弟子よ我の命は我法なり。病めるものは醫師を見ざるも、藥によりて癒され

く、佛敎最大の外護者なりければ、其崩去は是敎の宣傳の爲には一大障碍たりしこと言ふまでも無し。然れど阿闍世王は、民心の深く佛敎に歸依して、提婆達多の新敎到底行はれ得ざるべきを見て、幾もなく再び佛敎に入り、佛敎復び摩伽陀國に盛なり。阿闍世王は其父王の積勢に乘じて四方を攻略し、遂に中印度の盟主となりぬ。王は佛敎に對しては寧ろ保護者の位地に立ち、佛滅後の三藏結集には少からざる力を盡しき。然れど此時より以降、中印度の平和は永く破れ、傳道の道亦隨て困難となりしかば、弟子自ら四方に散じ、所在伍を爲して其敎を弘むるに過ぎざりき。佛陀も亦時勢の非を覺りけむ、茲に其遊化の錫を止め、唯祇園精舍と王舍城との間に往來して其弟子に說法せり。

春秋寒暑幾度びか去來して、佛陀入滅の時も漸く近きぬ。今や八十年の老齡は佛陀の双肩に掩ひかゝりて、五塵の形骸漸やく其重きを覺えぬ。顧みれば妙齡城を出でゝ山林に入り、三十道を成じてより遊化度生に盡すこと茲に五十年、一日も安逸の生を送りしこと無し。五天茲に其敎に靡き、救世の大使命方に其の完きを告げたるに庶幾し。佛陀の入滅亦恨なしと謂ふべし。

佛陀迦毘羅城に留ること七日、父王親戚に別を告げて舍衛城に赴けり。是れ須達長者の約を履めるなり。是より先き須達長者は家に歸り、地を綠樹清流の好園林に相し、茲に寺院を建て、祇園精舍（ぎをんしやうじや）（ゼータヴァナ）と名けて佛陀の巡錫を待ちぬ。佛陀は是精舍を根據として普ねく中北印度の地を遊化しぬ。成道第十五年は再び迦毘羅城に歸る。是時淨飯王已に逝きて、摩訶那摩（マハーナマ）と云へる人、其位を嗣ぎしが佛陀の歸錫を聞き、直に其門に歸依せりと云ふ。

第十四章　佛陀の入滅

佛陀晩年の事蹟は東西の經典史乘傳ふるなきを以て審にするに由無し。私に想ふに、推しなべて遊化布敎の間に平靜なる生活を送りたるならむか。今佛陀入滅前に於ける印度の大勢を述ぶれば、略次の如し。

佛陀成道してより第四十三年の頃、摩伽陀國に提婆達多（だいばだつた）（デーヴァダッタ）と云へる邪敎の勇士あり、其の勇を恃みて非望を抱き、太子阿闍世（あじやせ）に說き、其父頻毘娑羅王を弑し、母后を幽閉し、且佛陀を害して其弟子を橫領せむとせり。頻毘娑羅王は前章にも說ける如

太子自ら來り見え給ふべし』と言ひぬ。佛陀乃ち姫の室を訪ねぬ。

姫は佛陀の入り來るを一目見るより、耐へ〳〵し萬斛の悲哀、一時に迸發したらむが如く、床より轉び出で、聲を擧て其足下に泣き伏しぬ。實に耶輸陀羅姫の哀情は察するに餘りあり。其良人を失ひてより幾年の間の姫の朝夕は、佛陀が勤行の苦にも類ふべかりき。佛陀が剃髪せるを聞きては、姫亦其丈なす雲髪を切り棄て、烟脂紅粉凡て用ひず。佛陀が道服を着け跣足にして歩むを聞きては、姫亦布衣を着け、一切の裝飾手にだも觸れざりき。又佛陀が鉢を携へ食を道に乞ふを聞き、姫亦一切の美食を斥け、麁菜厲飯を以て自ら奉じき。姫が妙齡にして獨居するを憐みて、再婚を勸むるものあれば、姫は儼然として悉達多の妃なるを答へぬ。斯くて十有二年の朝夕を泣き明し、泣き暮したる姫は、今や佛陀の名を成し、道を遂げて歸來せるに遇ふ。心緒萬端亂れて絲の如く、無限の憂恨、無限の悲歎一に佛陀に向て濺ぎけるこそ道理なれ。佛陀は靜に姫の背を撫し、三世因果の理を示して其心を慰めぬ。姫が無明の煩惱も、流石に佛陀の妙音に破られけむ、後其子羅喉羅と共に佛道に歸依しぬ。

見えず、父王は流石に其滿腔の希望を述べ難てにして已みぬ。佛陀は父王の胸中を思ひ遣り、曰く、『我は誠に父王の心を勞し給ふを知る、慈愛の恩情感佩に堪えたり。然れど願くは我を以て念を爲す勿れ、我心已に世榮を離るゝこと遠し、又歸らむに道無ければなり。願くは父王我を思ふの愛を移して是國の萬民を慈め』。是に於て佛陀は父王の爲に懇に道を說きければ、父王感泣して是を聞き謝して曰く、『我れ今にして出離の道を得たり。先に我心を懊惱せしもの、今は拭へるが如く消え去りぬ。悉達多汝微りせば我永く是人生の苦悶を脫することを得ざりしならむ』。其日佛陀は獨り辭し別れて市外の林中に一夜を明しぬ。

翌日佛陀は錫を携へ、鉢を手にし、出でゝ食を市中に乞へり。迦毘羅城の市民は、往年結納に策ち、幡蓋に擁せられて市中を巡遊したる王子、今や乞丐の群に入り、戸毎に立ちさまよへるを見て、驚き悲みぬ。父王出で迎へて宮中に伴ひければ一族群臣佛陀の身邊を繞り、歡聲城に充ちぬ。然れど耶輸陀羅姬のみは見えざりき。佛陀は其の何處に在りやを問ひしに、宮女の一人答へけるは、『姬は一室に閉ぢ籠り悲歎に暮れ給へり。太子の歸來を告げ參らせしに、若し妾にして取るべきあらば、

言ふ所あらむとす。然れど佛陀の圓滿莊嚴なる顏容は日月の光の如く父王の眼を射りぬ。父王は威靈の感に打たれて言俄に出でず、覺えず車を下り恭しく其手を執て曰く、『嗚呼汝は悉達多なる乎、我れ汝を見ざること既に十二年、何の天幸ぞ今日あるを得たる』餘は言はむと欲して言ひ得ず、潸然として淚を流し、凝睇是を久しうす。觀るもの皆袂を絞らざる無し。

嗚呼是れ何等の光景ぞや。燦爛たる幔蓋瓔珞美裝せる大官貴紳、花紅葉綠、烟脂香芬の間に金冠白髯の帝王、跣足托鉢の一布衣の手を執りて涕泣するの狀、何等絶好の對比ぞや。想ふに乞丐の裝を爲せる佛陀の眼には是等一切の裝飾は猶沙漠の如く見えしならむ。

斯くて佛陀は父王と相對して坐しぬ。父王の胸中には一喜一憂相往來し、千感萬情雲の如く湧き出でぬ。嗚呼我子悉達多よ、再び老父の許に歸り來らむとの念を起せよかし、然らば我晚年の幸福如何ばかりぞや。然れど成道正覺の身にしあれば、是王國を見ること或は一塵芥の如くなることあらざる乎。父王は斯く思ひ煩ひて佛陀の容貌を見れば、端麗莊嚴、慈悲と智慧の光に輝きて名利煩惱の影だに

舍の道場に到り、佛陀に面して父王の書翰を致しぬ。佛陀披き見るに父子の恩愛切にして濃に、訴ふるが如く、恨むが如く、哀むが如く、憤るが如く、老年憂苦多くして鬢邊霜の如きを歎ち、偏に佛陀の歸來を惻怳するの情、眞に斷腸の文字なり。佛陀靜に是を看終り、命に隨て故國を訪ふべきを告ぐ。優陀夷踴躍して還り、是を復命す。

淨飯王優陀夷の報を得て大に歡び、七寶の車駕を具へ、鹵簿供奉の莊嚴を盡し一族群臣と出でゝ是を迎ふ。迦毘羅城の人亦悉達多太子多年勤行の後成道滿願し、今や弟子雲の如く名聲五天に轟きて、其故國に歸ると聞き、狂喜して道を修め家を飾り路上香華を散じ、美妓を左右に列ねて以て其一行の到るを待つ。遠近の市邑亦傳へ聞き、佛陀の行裝如何に華麗なるかを見むとて、見る者堵の如く集まりぬ。

唯見る、一介の沙門、身に極めて質素なる道衣を着け、一杖を右にし、一鉢を左にし素手跣足して步み來れるを。こは如何に此は是れ往年の悉達多太子、今の佛陀なりき。滿城の市民は其意外なるに驚きぬ。殊に父王は一世の宗師と仰がるゝ其子の一乞丐の如きを見て、憤慨の情に絕えず、滿面朱を濺ぎて太子の前に出で將に

然れど迦毘羅城内に殘されたる老父王と耶輸陀羅姫とは、是の春秋を如何に暮せしぞ。風晨月夕佛陀の事を思ひて夜眠を成さゞりしこと幾度ぞ。今や十二年の後、生死だに知られざりし其子の名が、忽然「佛陀」の尊號によりて四方に喧傳せらるゝに逢うて如何に驚喜の胸を轟かせしか。同時に懷舊思慕の念は如何に繁く且切なりしや。父王已に頽齡、餘命猶ほ風前の燈の如し、妃は羅睺羅と相擁して、朝夕如何に其果敢なき遺物を歎きしぞ。迦毘羅城中の悲嘆は、佛陀の成道宣化の爲に更に一層の痛切を加へたるなるべし。

是に於て淨飯王は、群臣の中にて騎馬に長ぜるもの九人を擇びて王舍城に赴かしめ、具に王の意を致して其の故國に歸らむことを勸めしむ。九人の使者竹林精舍に達せる時、佛陀は恰も大衆を集めて妙法を說けりき。彼等圖らず佛陀の圓滿無上の敎を聞くや、恍然として心醉へるが如く、頓に使命を忘れて、偏に佛說の微妙を味ひ、其儘留住して歸らず。王九人の使者の久しく歸らざるを以て、更に憂悶を增し、重ねて佛陀の在城時の舊友たる優陀夷をして使せしむ。其の或は又歸らざらむことを恐れ、吳々も「歸來」の二字を餞す。優陀夷馬を馳せ、晝夜兼行して竹林精

はくは形勝の地を布施して一寺を建て、佛陀及び佛弟子の爲に布敎の壇場となさむ。佛陀願はくは我が願を許せ』と。佛陀は須達長者が誠に同胞を思ふの厚きに感じて其請を許し、先づ弟子舍利弗をして須達長者の歸路に伴はしめ、舍衛城に建てらるべき寺院の地形を相せしむ。

斯かる間の佛陀の一生に於て最も記憶すべき事は起りぬ。淨飯王及び耶輸陀羅姬との再會是れなり。

第十三章　父子の再會

顧みれば、佛陀が夜半に乘じ、車匿を伴ひ乾陟に乘りて迦毘羅城を出でしは、既に十二年の昔となりぬ、爾來一念の大願に精進し、林に入り、山を攀ぢ、幾多の辛酸を嘗め盡して、遂に菩提樹下に無上正覺を成就しき。斯くて五比丘を度し、三迦葉波を從へ、摩伽陀全王國の君臣を歸依せしめ、更に四方に宣敎して駸々乎として其全勝の途を急ぎぬ。佛陀が救世の大使命、是時既に其大半を完成せりと謂ふべし。佛陀心願の滿足亦想ひ見るべきなり。

然るに茲に摩伽陀國人の中に、青年の子弟が競うて佛陀に從遊して身を宗教に委ぬるを見て、憤慨に堪えざるものあり。以爲らく、是の如くにして底止する處無くむば、凡ての臣は其君に背き、凡ての子は其父に背き、凡ての妻は其夫に背かざれば已まざるべしと。乃ち途上托鉢の比丘を罵りて曰く、『汝及び汝等の師たる佛陀は、我等の業を妨げむが爲に此國に來れり、然れど心あるもの誰れか是の如き教に從ふべき』と。佛陀是を聞きて比丘等に告げて曰く、『是の如き不平は能く幾時か續くべき、汝等再び是の如き嘲罵に遇はゞ當に答ふべし、佛陀の來れるは眞の道を教えむが爲なり、人をして心を淨うし、己に克ち、正しきを行はしめむが爲なり。誰か涅槃の光を避けて無明の闇を求むるものぞ』と。幾もなく國人其德に服し佛陀及び比丘を罵るもの無かりき。

是時摩伽陀國の北拘薩羅（コーサラ）の富豪に須達（スダッタ）即ち善施又給孤獨の名を得たる長者と云へるあり、遙に佛陀の事を傳へ聞きて摩伽陀國に到り、其教を受け、佛陀の自ら其故郷に巡錫して教化を垂れむことを請ひぬ。曰く、『我國の首都を舍衛城（シラーバスチー）と云ふ、土地膏腴にして民治まれり、唯貴き教の衆生を濟度するもの無きを恨とす。我れ願

迦(カ)の二王に下ること無かるべし。

斯く佛陀は頻毘娑羅王の外護を得、當時印度文明の中心たる摩伽陀國を根據として、其教を四方に弘めたり。爾時迦蘭陀迦(カーランダカ)と云へる一弟子は、竹園を佛陀に奉り、頻毘娑羅王は茲に一大精舍を建立して佛陀を請招せしかば、佛陀是に移り、成道後第二三年夏安居の道場となしぬ。後世佛徒の所謂る竹林精舍(ちくりんしやうじや)即ち是れなり。

是時に當り、摩伽陀國内に尚ほ二派の婆羅門あり、其宗師一を舍利弗(しやりほつ)(シャーリプトラ)と云ひ、他を目犍連(もつけんれん)(マウドガルヤーヤーナ)と云ふ。共に各二百餘人の弟子を有し、互に道場を張りて全盛を極めしが、佛弟子に誘はれ佛陀を竹林に訪ひて一び其教に接するや、何れも其妙法に歸依し、後には各佛門の高弟となりぬ。又是國の富豪に摩訶迦葉(まかかしやう)(マハーカシャパ)なるものあり。幼より學を好み、經典に通曉し、且德行圓滿にして智慧聰明なりしが、亦佛門に入りて高弟となりぬ。佛陀は常に上行第一として彼を殊遇し給ひしが、鑑識違はず、佛滅後遺弟大衆の上座となりて三藏の結集を完成したる者は、實に是摩訶迦葉なりき。

其他一代の名流概ね其教に入りしを以て、大法弘布の事業は、更に其人無きを憂へざりき。

我を苦め、人を誤りたるは、我が深く慚愧に堪えざる處なり。今や天の祝福によりて佛陀の光明に接し、翻然として昨の非なるを悟りぬ。苦行を爲し、聖火を拜し、犧牲を供ふるは愚なる哉。我は今より後佛陀の芳跟に從ひて、最勝無上の涅槃をこそ求めむと思ふなれ』。

大衆は愕然として迦葉が是宣言に傾聽せり。彼等相傳へ、相囁いて曰く、我等の神として事へたる迦葉が其足下に拜跪するを甘んずる佛陀は是れ如何なる人ぞやと。滿城呼應して佛陀の敎に歸仰せり。

摩伽陀國王頻毘娑羅（ビンビシャーラ）は、佛陀の成道して歸り來れるを聞き、群臣一族を率ゐて城外に迎へ、佛陀の脚下に拜跪して其の恙無きを祝し、直に婆羅門の古法を捨てゝ佛敎徒となりぬ。其時王は年齒厘に三十餘歲、爾來在世數十年の間、常に熱心なる三寶の歸依者として、佛陀及び其弟子を外護し、布敎の爲に力を效すこと少からざりき。當時摩伽陀國は印度第一の强大國にして、文化の度他邦に優れり。然れば其國王の外護を得たるは、佛敎傳播の爲に是上も無き好都合なりしなるべし。是を以て此を見れば、佛敎に對する頻毘娑羅王の功勳は、決して後世の阿育（アショカ）及び迦膩色（カニシ

求む。佛陀即ち神火に事ふるの謂はれなきを說示し、徐ろに四諦八正道の妙理を諭せしに、三人の迦葉及び其眷屬五百人悉く隨喜の涙を流し、歸仰奉養せむことを許さる。即ちもろ〳〵の拜火苦行の具を水中に棄て、一鉢一杖、佛陀に隨ひ、陸續として山を下る。

斯くて佛陀は三人の迦葉と其眷屬とを從へて王舍城に入りぬ。國人は預て悉達多太子の聰明得脫を耳にせしかど、如何ぞ摩伽陀國百千萬人の歸依崇奉を受けたる三迦葉よりも勝れたりと思はむや。然れど佛陀が迦葉等を弟子となして王舍城に入るべしとの報知は、滿城の耳目を聳動せり。多くの人は俄に是の報知を信ぜず。佛陀已に城市に入り三人の迦葉恭しく其後に從へるを目擊しても、尙ほ迦葉佛陀に從へるか、又は佛陀迦葉に從へるかに就いて疑惑を抱けるもの多かりき。佛陀衆人の心を慮り、卒然として迦葉に問うて曰く、『迦葉よ、汝は何の見る處ありて其の拜火の敎を棄てゝ我に從ひたる乎』。迦葉佛命を聞き、跪いて合掌し、大衆の前に立ちて告げて曰く、『我が聖火を拜して得たる處は五慾を促し煩惱を增し、輪廻轉生の苦を長じたるの一事のみ。是の邪なるを道を以て獨り尊しと信じ、多年

第十二章　王舍城に於ける佛陀

當時摩伽陀國の都、王舍城（ラージャグリハ）を西に距る事十數里伽耶山と云へる山に、三人の同胞の苦行仙人棲みけり。伯を優樓頻羅迦葉波（ウルヴィルヴァーカーシャパ）、仲を那提迦葉波（ナディーカーシャパ）、叔を伽耶迦葉波（ガヤーカーシャパ）と呼べり。何れも識博く、德高く、一世の宗師として國人之に奉事し、就いて敎を受くるもの甚だ多し。其敎は神火に事ふるを旨とし、西方波斯國の拜火敎に似たる處あり。佛陀は遊化の初めに先づ是兄弟を濟度せばやと思ひ、獨り山に登りて伯なる迦葉を訪ね、宿を請ふ。迦葉曰へらく『我に一の火窟あるのみ、是れ惡龍の棲む處なり、卿の止宿し得べき處なし』と。佛陀請ふて已まず、自ら進て火窟の中に宿す。夜に入り惡龍佛陀を見て、瞋恚の毒焰を放ち、擧室洞然として燃ゆ、然れど毫も佛身に觸れず、火おのづから滅す。佛陀は端坐正思して顏色常の如し、惡龍其德に感じけむ、佛前に稽首す。迦葉は夜窟中に火起れるを見て、佛陀の自ら計らずして龍火に死したるべきを憐み、翌朝其弟子と共に來り看れば、佛陀は既に惡龍を降して鉢中に置けり。迦葉波初めて佛陀の功德無邊なるに驚き、頓に恭敬の念を起し、其敎を

ぬ。

佛陀は若干の弟子を四方に遣はし、天晴れ節佳なる時は出でゝ遠近に托鉢遊行せしめ、夏季降雨の候には歸り安居して道を修めしむ。是れ印度地方にては夏季淫雨多くして外出に適せざればなり。是れ後世佛徒の所謂る夏安居の制なり。

今、平生日常佛陀の行狀を記さむに佛陀は一日を五時に分てり。第一、佛陀は拂曉起きて洗漱し、衣を着けて禪室に入り、觀想畢りて後袈裟を被り、市に出でゝ托鉢食を乞ふ。第二、托鉢より歸るや、佛陀は足を洗ひて堂に上り、弟子を集めて法義を說く。弟子は說法の畢りたる後、或は討議し或は靜坐して佛陀の敎を研鑽せり。佛陀は是間に食事を畢り。午後に到り四方より參詣せるものに對して法を說く。第三、大衆に對する法談畢るや、佛陀は沐浴して園林に逍遙し、歸り來りて弟子の質疑に應答す。第四、日沒後に到りて佛は諸天善神の爲に法を說きて、後夜に到る。第五、諸天善神に對する說法終りて寢に就く。是の如きは佛陀が日課行狀なり。

り。其他の四人の比丘と共に所謂三歸戒を誓ひぬ。三歸戒とは一に佛に歸依するなり。二に法に歸依するなり。三に僧に歸依するなり。佛に歸依すとは佛陀を以て人天の宗師となし、成道正覺の理想體となすなり。法に歸依すとは、佛陀の說ける解脫の方法を學び、且之を守るの謂なり。僧に歸依すとは、敎會即ち僧伽（サンガ）の團結に投じ、相携へて正法の生活を營むなり。佛法僧の三者は後世の人是を三寶と呼びなせり。

憍陳如等五人の比丘を初として、佛陀の福音漸く擴がると共に所在遠近風を傳へて來り集るもの日々に加はりぬ。佛陀は是等の弟子の中より、眞に道を會得し、且是を他人に傳ふるに勝ゆべきものを擇び、之を四方に遣はして布敎に從事せしむ。佛陀は彼等に告て曰く『汝比丘よ、我敎は人をして其獨を善くせしめむが爲に非ず、普く衆生をして平等の利益を得しめむが爲なり。汝等宜しく我是の利他の大悲を躰認し、助け無き衆生に生死の大海を脫るゝの法を知らしむべし。我敎の廣まる處、其處に即ち我れあるなり。小人道を聞て或は笑ひ嘲りなむ、汝等怒ることなく彼等の無明を憐めよ』。是に於て佛陀の敎は風雨の如く印度諸國に擴がり

ありて初めて起る。「我」は五慾の結塊なり、煩惱の源泉なり。一度び「我」を滅せむか、一切の苦は立地に消えむ。形なくして影あるもの、未だ是あらざるなり。其第四を「苦を滅するの八道」となす。苦を滅するの八道とは何ぞや。一に曰く正見、觀察の正しきを謂ふ。二に曰く正思惟、思念の正しきを謂ふ。三に曰く正語、說話の正しきを謂ふ。四に曰く正業、行爲の正しきを謂ふ。五に曰く正命、是れ生業を營むことの正しきなり。六に曰く正精進、是れ勤行の正しきなり。七に曰く正念、是れ思想の正しきなり。八に曰く正治、安心決意の地の正しきなり。是を苦を滅するの八道と謂ふ。凡そ道を學び救ひを求めむと欲するものは先づ是四つの聖諦を守らむことを要す。

佛陀は五人の比丘に四聖諦の眞理を示したる後、敎團修行の必要を說きて曰く、「道を求むる人も互に孤立せば時に誘惑の爲に退轉せむ、然れば是の如き人々は相集まりて一團となり。互に提撕し、互に戒勸せざるべからず。斯くて眞の敎に從へる人々は是世の中に正法の國を建つることを得べし」。

五人の比丘の中に憍陳如と云へるあり。佛陀の敎誨を會得せる最初の弟子な

食ふことに非ずして五慾に存することを說き、情炎慾火を滅ぼすこと無くして徒に悲慘の生涯を營むも、畢竟益無きを說き、身疲るれば心隨て亂る、健全なる身躰にして初めて圓滿なる智慧の光を點じ得べきこと即ち是れ中道なりと說きぬ。

五人の比丘は佛陀の敎を聞きて大に感動し、多年勤行の益無かりしを慚ぢ、接足作禮して佛弟子たらむことを求めぬ。佛陀は其願を容れ、更に四聖諦の眞理を說き給ひぬ。

四聖諦とは何ぞ、煩惱を斷滅して涅槃に達するの道なり。其第一を「苦」となす。夫れ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死孰れが苦に非るべき。人は時に憎むべき者とも結ばざるを得ず、愛するものとも離れざるを得ず。榮枯得失、孰れか不如意の苦惱ならざるべき。然れば現世を苦界と觀ずるは、悟りの初なり。其第二を「苦の因」となす。苦の因は五慾なり、香味我を誘ひ、聲色我を陷る。利に走り、名に狂し、是泡沫夢幻の世樂に執着して死に到る迄目覺めず。然れば現世を苦界と觀ぜるものは、是苦の因の五慾に存せるを認識せむことを要す。其第三は「苦の滅」なり。五慾を離れむと欲せば、「我」を滅せざるべからず。一切の希求、一切の執着「我」

擧ぐる能はざるを以て、殊に是を言ふのみ。

さる程に佛陀は、布教の途に就くに先ち、阿羅邏仙人等の二舊師を濟度せむと欲せしが、二仙既に逝けるを聞き、然らば先きに苦行林にて別れたる彼の五人の比丘を訓えばやと思ひ立ち、彼等の移り棲める婆羅捺斯(バーラナシ)國に赴きぬ。

是より先き五人の比丘は、佛陀が河に浴し乳糜を受けたるを以て、道心衰へて俗界に墮落したりとなし、相携へて苦行林より婆羅捺斯國なる鹿野園(ムリガダヴ)と云へるに來り、茲に其難行を繼續せり。彼等は佛陀の近づけるを見て、互に謂て曰く、『彼れを見よ、肉豐に血色鮮なるは、俗界の塵に汚れしなり。彼れ來るとも決して往時の如く師遇することなからむ。彼は誓を破り、苦行を捨て、五慾の境に歸りたればなり』。然れど佛陀の近づくに從ひ、其光耀赫奕たる威容に打たれ、齊しく畏敬の情を起さざるを得ざりき。

佛陀乃ち彼等の爲に苦行によりて解脫を得べからざるを說き、若し迷をだに離れなば、良し肉を食ひ美服を着くるとも又經典を講ぜず、僧侶に布施せず、寒熱饑餓の難行を爲さずとも、毫も解脫の道に障り無きを說き、天下の不淨なるものは肉を

と仰がるゝ所以も、實に是の廣大なる博愛に歸せざるは無し。然れば成道は佛陀の大使命にとりては方便なり、究竟の目的は一切衆生の濟度にあり。今や佛陀が一切衆生の濟度の爲に其法輪を轉ずるの時到りぬ。

凡そ聖哲の敎は猶ほ洪鐘の音の如し、問ふ者によりて其說に高下あること、猶ほ敲く者に隨て鐘の音に大小あるが如し。然れば古より聖哲の說く所、眞俗二諦の別あり。能く理を辨じ識高きものに向ひては、眞諦無二の說を述べ、蒙昧學無きものに向ひては、俗諦方便の敎を垂る、是れ其說を弘布するの方法としては、蓋し已むを得ざることならむ。佛陀に於ても亦然り、菩提樹下に開悟せる無上正覺なるものは、甚深微妙言ひ難く解し難し。漫に俗人に向つて是を說かば、猶ほ南蠻の缺舌と一般、徒に人の嗤笑誹謗を招くに過ぎざるべし。然れば佛陀一代の說法は、猶ほ孔子の門弟子に對する答案の如く、聽者の如何によりて隨類應化の別あらざるは無し。後世の佛徒法義の深淺によりて佛陀一代の說法を分類し、或は二道となし、或は二門となし、或は二敎、三敎、四敎、五敎となせるは、佛說其物に二種あるに非ず、所詮は對者の力量如何によりて別れたるものなり。是小冊子素より佛說の詳細を

我れ輪廻の鎖を斷絶して解脫の鍵となしぬ。生死の大海、無明の暗夜、我はそを照すべき光を得たり。一切人生の苦惱の源は是光によりて殘りなく看破されぬ。我は自在なり、我は圓滿なり、何物か又我を囹圄に捕へ得べき。一切衆生は我に緣りて等しく悟の道に入るを得べし。悟の道とは渝らざる眞理なり、動かざる安心なり、圓かなる福德なり、不生不死寂滅爲樂の大涅槃なり。

斯くて佛陀は四七日の間是悟の中に在りき。

第十一章　佛陀の布教

太子既に佛陀となりぬ、其の天より稟けたる救世の大使命は是より漸く果されむとす。

佛陀は一身の福德を得むが爲に、道に志しゝ者に非ざりき。實に妻子を捨て、王位を拋ちて、幾年不斷の勤行を遲しゝは、一に是の衆生の爲に解脫の道を開かむとする大慈悲心に本づけり。是大慈悲や三世を通じ、人天を掩ひ、其大、望むべからず、其高、仰ぐべがらず、佛陀の佛陀たる所以も、三千年流傳の源頭となりて萬世の宗師

て香芽となる。太子靜に右手を伸して地を指せば、掌内光明迸り炳焉として日月の如く、閻浮檀金の妙色六合に充つ。乃ち大音魔軍を叱すれば、天地震動し魔軍雲散霧消して跡なし。宇宙清朗、日月輝き、もろ〳〵の闇障凡て退き、大千世界盡く佛光に遍照せらる。空には天花を雨らし、諸天善神歡喜の聲滿空の妙樂となりて普く十方に震ふ。

魔軍の去りたる後、太子は靜に思念を凝して圓覺の道に進みぬ。今や心の淨きこと赤兒の如く、天空海濶、圓融自在の妙機を捉へ得て、生死流轉の表に超然たるを覺えぬ。情は一切の煩惱を斷ち、智は一切の妙理を觀し、身は四大を離れて天地の間に充塞す。凡そ三世萬劫の因緣、宿命、盡く通達せざる無く、輪廻の根蒂、四患の能生、及び衆生有情の隨業應報、人世一切の苦樂を擧げて悉く眼前に歷々たり。斯くの如く無明斷じ盡して東方明星出づる時、太子一生の本願圓滿して茲に無上正覺を得ぬ。是に於て迦毘羅國の太子悉達多は其救世の大使命を果さむが爲に佛陀となりぬ。

嗚呼煩惱の羈に繫がれ、生死の巷に流轉して、我や年久しくも迷ひける哉。今や

魔王事の成らざるを憤り、惡鬼、餓鬼、修羅、夜叉、羅刹等一切の眷屬を擧げて太子の成道を妨碍せしむ。是に於て魔界の惡類はあらゆる怪貌畸形を盡し菩提樹下に麕集し來る。或は虛空に大黑雲を出し、或は風を飛ばし、雨を散し、大閃電を輝かし、大雷聲を動かし、雹を下し諸山の石を雨らし、或は全身諸毛孔一切の火焰を迸發し、或は一身にして多頭なるあり、或は一目なるあり、衆眼なるあり、或は大腹にして長身、或は羸瘦にして無腸、或は長牙利爪、或は長脚大膝、或は大面横に向へるあり、被髮裸形なるあり、或は虎皮衣を着け、或は蛇皮を纏ひ、或は面色半ば白く半ば赤く、或は腰に大鈴を帶び、或は猪身馬頭なるあり。或は獅子龍象の首を有するあり。或は奔走角逐して迭に打害し、或は空中に旋轉し、或は樹間に飛躍し、或は呼び、或は吼へ、惡聲天地に震ひ、煙焰空を衝き、狂風四もに起りて山林普ねく鳴動す。

太子泰然として顏容些の異相を呈せず、猶ほ獅子王群獸の中に處るが如し、惡類益恐恚し、眥を裂き、齒を切り、亂飛驅策す。太子默然として觀ること兒戲の如し。魔類石を抱けるもの擧ぐる能はず、擧げたるもの下す能はず。飛矛空中に凝て下らず、雷震大雹を降せども化して五色の花と成り、惡龍蛇の毒煙を吹けるもの、化し

將に無上正覺の光に破られむとす。天地祥瑞を呈し、三十三天の諸善神皆共に大に歡びぬ。欲界の大魔王獨り憂惑して悅ばず。思へらく、抑菩提樹は諸佛成道宿緣の吉祥樹なり、太子をして其下に坐せしむべからず、と。

魔王即ち太子の是に居らざるに先ち、其部屬の惡鬼を役して其地を占領せむとせしが、菩提樹守護の善神の爲に一呵して退けられぬ。魔王即ち一策を案じ、自ら化して迦毘羅國の戰士となり、衣髮を亂し、方に戰亂中より逃れ來りたるの狀に擬し、急遽太子に近づき告げて曰く、『太子起たざるべからず、逆臣旣に王位を奪ひ、太子の后妃を納れ、淨飯大王を獄に繫げり』。證するに親戚の書を以てす。太子寂然として動かず、容貌刻めるが如し。魔王更に方法を變じ、其三女をして色を以て太子を動かさしむ。三女艷麗名狀すべからず、烟脂濃裝、進で菩提樹の下に至り、嬌恣媚態を盡して、百方太子の情を促さむとす。風は香芬を送りて、笑春光の如し。太子爭でか女色に迷はむや、三女乃ち歌によりて情を抒べ、聲光の樂み微妙なるを唱ふ。其聲の甘きこと蜜の如く、其調の美なる言ふべからず、太子冷然として傍ら人無きが如し。

く仆れぬ。森近く住ける牧牛の長の娘、其名の難陀（ナンダ）と云へるが、今しも河邊を通り掛りしが、太子の仆れ居るを見て、恭しく太子の足に稽首し、香乳糜を捧げぬ。太子是を受けしが神氣頓に回復し、五體俄に光澤を增したるが如し。五人の比丘は遙に是狀を見て皆以爲らく、太子河に浴し食を求めたるは、是れ正しく道心の退けるなり。あはれ吾等の師とも、菩薩とも仰ぎたる行者は、今や其苦行に得堪へずして、其高上なる目的を打忘れぬと。相伴ひ太子を捨てゝ去る。太子は五人の比丘が尙ほ其の迷ひを覺らざるを憐み、獨り林を離れ、菩提樹（ボダイジュ）の下に退きぬ。五人の比丘皆謂へらく、太子は現世の榮華を懷慕して其修行を拋ちぬと。

太子が退きたる菩提樹の下は、誠に靜思に適へる處なりき。地廣平にして軟草生じ、四時常綠の叢葉其上を擁護し、百尺黃白の幹枝は其傍を繞る。塵煙飛び至らず、靈禽空に舞ふ。太子步を移して茲に近くや地震ひ、天輝きて朝暾の雲を破るが如し。太子草を樹下に布きて成道の法座となし、結跏趺坐（けっかふざ）、東に向うて誓て曰く、道若し成らずむば終に此座を起たざるべしと。

悉達多（シッダルタ）太子が出家の大本願の滿たさるべき日は漸く近きぬ。生死（しゃうじ）の冥晴、今や

の心動かざること山の如し。難行漸く進みて、果ては一日に一粒の胡麻を食して其身を支へ得るに到り、血肉乾涸して形骸さながら枯木の如し。されど生死の大海を超越して、圓覺成道の彼岸に達せむの志は、須臾も息むと無かりき。されば太子の風評國内に傳はり、士女來り觀るもの、堵の如し。太子は澹然として冥目靜坐するのみ、山風衣を吹いて毛髮亂れ披けども六塵騷がざること死せるが如し。

然れど悲い哉、安心は尙ほ太子の心に在らざりき。是に於て太子は猛然として謂へらく、苦行に緣りて成道を願ふは愚なる哉、自ら因を修めて自ら其果を享くべし。心の淨く靜かならむこそ、無上の正道なれ、自ら飮食を絕ち、徒らに體軀を毀るは爭で解脫の眞因なるべき。今や我れ苦行六年、餘は唯死あるのみ、而して心の安からざること素の如し。我れ寧ろ飮食を取りて體力を強うし、更に大勇猛心を振起して精進すべきのみ。涅槃は智慧の光によりてのみ求め得べし、餓ゆること、ばた何爲するものぞ。

太子は斯くの如く心を決め、先づ禪河の水に沐浴しぬ、然れど多年の斷食に疲れ果て自ら支ふるの力無く蹣跚として厓に樹枝に縋りて岸に上り、其儘死せるが如

しぬ。二仙人は太子の妙慧深智誠に測り難きものあるに驚きぬ。

阿羅邏、鬱陀羅の二仙人も、太子を圓覺の光明に導き得ざりしかば、乃ち去て尼連禪河の西岸に一地を卜し、靜坐終日、觀法の念濃やかに出離の思を凝しぬ。斯くて在る事幾月の後更に貴き敎を受けばやと思ひ立ち、智慧に渴へたる出家の人は、漏樓頻螺村苦行林の中に棲める五人の比丘を訪ねぬ。

第十章　成道

太子苦行林に入り、熟五人の比丘の勤行を察するに、能く情を節し慾を抑へ、持戒嚴かにして寂靜沈默誠に達道の行者と見られたり。乃ち自ら其中に交はりて一處の冥想を共にし給ふ。五人の比丘亦太子の道を求むるに精一なるを知り、心を盡し禮を卑うして仕事甚だ力む。太子專念一向身を節して飮食を忘れ、心を淨うして齋戒を守り、寂寞として三昧に入り給ふ。五人の比丘何れも苦行を以て鳴れりと雖も、太子の勵精に及ぶ者無かりき。

太子五比丘と共に是苦行を續くること前後六年、春風秋雨幾度か去來して、太子

を捨てゝ教を求めしが、なか〳〵に卿が年壯くして信念の固きに及ぶべくもあらざりき。夫の盛年に五慾を恣にし、體力漸く衰ふるに及び俄に世榮を捨てゝ學道の徒となるが如き、畢竟凡夫のみ。今や卿青春の齡を以て富貴に惑はされず、卿の如きは眞に是れ奇特殊勝の事なり。務めて精進し決して退轉する勿れ』。太子心潛に知己の言を喜び、諸弟子と共に其教を聞きぬ。

然れど阿羅邏仙人の說ける所も遂に太子の志を滿たすに足らざりき。如何にして生老病死の四患は生じ得べき乎、是四患を免るゝの法如何にして可ならむ乎。仙人は衆生四患の根本を冥初に歸し、非想非々想の處を以て究竟解脫の地なりと謂へり。其說によれば、冥初より我慢を生じ、痴心、染愛、五塵より遂に五大に及ぶ。五大は貪慾瞋恚等のもろ〳〵の煩惱を生じ、煩惱遂に流轉して生老病死の苦患を搆ふ。是苦患を免るゝの方法、唯嚴に正戒を奉じ、閑居難行、一切欲界の繫留を擺脫し、種々の雜念妄想を排斥して所謂非想非々想の境地に入るべしと云ふにあり。然れど非想非々想なるもの、尙ほ「我」の攀緣あり、染着あり、未だ以て有無の二際を斷絕し盡さゞる所あり。太子は深く自ら思念して其の究竟の解脫に非ざるを看破

慾火に懊惱せる頻毘娑羅王の胸は、一道の凉風に打たれ、恍然として目覺めたるが如し。由來印度の諸王國にありては、王位政權の授受、平和の間に行はるゝこと稀にして、干戈により爭奪するを常とす。摩伽陀國の如きは殊に甚し。されば王の太子を見るや己れの心を以てし、己れの情によりて其意を迎へしが、却て是意外の訓誡に遇ひ、大に自ら覺る所あり。乃ち深く慚愧の色を露はし、恭しく太子の手を取りて曰ひけるは『尊き出家の人よ、我心甚だ汚れたり、又卿を强ひざるべし。唯希くは卿が成道の後、再び錫を是地に留め、我を以て卿が弟子となさむことを』。恭敬三寶の種子は、是時先づ王の心田に播かれたりけむ。

斯くて太子は頻毘娑羅王と別れ、摩伽陀國の都王舍城の北に阿羅邏仙人を訪ひ給ふ。阿羅邏仙人と云へるは、是國第一の達道にして、智慧德行共に一世の宗師なり。鬱陀羅羅摩子仙人とて同じく名高き仙人と共に、彌樓山に棲む。數多の弟子の慕ひ到れるもの、或は山林溪谷に、或は樹下石上に散居して難行をさ〳〵怠りなくぞ見えにける。阿羅邏仙人は太子の容貌誠に世の常ならざるを見、大に歡びて曰ひけるは『嗚呼善男、我れは卿の必ず大覺成道を得べきを知る。昔者明勝王、其位

切世榮の幻に等しきを見る、如何ぞ更に影を追ふて共に倒るゝを望むべき。大王よ、我れを憐むを已めよ、三界は我家たり、衆生は我子たり、又何物を足らずとせむ。願くは我を憐むを已めて、寧ろ富貴に惱み王位に苦めるものを憐めよ。人は妻子を懷かしみ、珍寶を愛し、王位を貴べり。未だ得ざるものは得ざらむことを是れ憂へ、既に得たるものは失はむことを是れ恐る。然れど人は遂に死せざるべからず、妻子と、珍寶と、王位と、果して携へ行くを得べしとする乎。良し然らば、死せる王者と死せる乞食と何の異る所あらむや』。

熱心に聞き居たる頻毘娑羅王は、是時憮然として點頭きぬ。

太子は語を次ぎて曰ひけるは、『誰か厘に毒蛇を脫れて更に是に噛まるゝを喜ぶものあらむや。誰か炬火に燒かれたる手を以て更に其落ちたるを拾ふものあらんや。然らば誰か五慾を離れたる身を以て、甘じて再び是に投ずるものあらむや。我は妻子を捨てゝ衆生を得たり、王位を捨てゝ天下を得たり。現世を捨てゝ永生を得たり。太王願くは我を以て意と爲す勿れ。唯永く正道を踏て卿の國を治めよ』。

を執るべき器量を具へながら、食を乞ふものゝ鉢を手にし跣足にして歩むは如何にぞや。凡そ心大きく志高きものは、事物の一面に拘るべからず。富貴を得、權勢を獲て而して道を覺らざらむは、素より憐むべしと雖も、富と力と道との三つを併せ有し而して擒縱活殺の自在を得ば、我れ是を呼て明主となさむ。道を求むるは宮殿に於ても山林に於ても一たるべし。出家の人若し意あらば、我れ我が國土を中分して卿を封ぜむ。若し尚ほ足らずと思はゞ、我に四兵と十軍とあり、一ぴ旗幟を揭げて麾かば、以て四境を略せむこと亦易々たらむのみ。如何に出家の人よ、留りて我國を治むるの意無き乎』。

太子溫乎として答へけるは、『大王よ、深く卿の好意を謝せむ。然れど我志は一國一城に在らずして人天三界の衆生に在り。四苦の流は天に滔り、五慾の炎は地を燎けり。悲い哉、無殘なる衆生は是間に沈湎して、永く出づる所以を知らず。我が茲に至るものは、無上解脫の正道を彼等に敎へむが爲なり、我が降生の使命亦是に外ならざるなり。大王よ、富貴と權勢は左程に望ましき者なる乎。地上に王威を振はむも、全世界を掌中に握らむも、爭てか聖者の正覺の貴きに及ばむや。我は一

し憮然として辭し歸る。

第九章　阿羅邏仙人

太子は大臣を諭して故國に歸らしめ、孤錫飄然南の方恒河の大流を渡りて摩伽陀國に入り給ふ。智慧の靈光中に輝けばにや、態度おのづから凡ならざる所あり一種莊嚴の風象四邊を拂うて不思議の尊容道路の眼を側てぬ。

抑摩伽陀國は迦毘羅國の東南に在り、境域廣大にして兵強く國富めり。時の國王を頻毘娑羅と云ふ。勇畧大志あり、夙に太子の令名を傳へ聞きしが、今や出家して其國に巡錫し來れるを聞き、潛に思惟らく彼れ誠に有爲の志と倫無き才器とを抱けり。彼が文武の英名は夙に我邦までも轟けり。今や彼れ出家して國を去りしは恐らくは其國土偏小にして、且は未だ王位を讓られざるを憤りてならむ。良し然らば用ひて以て我が大志を成さしむべしと。

頻毘娑羅王乃ち王衣を纏ひ、金冠を戴き、太子を路に迎へ、恭しく敬禮を表して曰ひけるは、『出家の人よ、汝の爲に國君の尊榮を拋ちたる殊勝の沙門よ、卿は大國の政

を抑留せしむ。大臣命を畏み、車匿の言に從ひ、直に跋伽婆の深林に向ふ。結束整ふるに遑あらず、馳驟速きこと矢の如し。跋伽婆仙に遇て太子を問へば、既に摩伽陀の國境を指して此地を去れりと答ふ。大臣輒ち馬首を轉じ、南に向ひ日暮辛うじて太子に追及しぬ。

斯くて三人の大臣は太子に追ひ着き、其の變り果てたる容貌を眺め、涙ながらに情を述べぬ。父王の悲哀、王妃の愁傷、群臣萬民の失望等、凡そ迦毘羅城に現はれたる一切の情況を擧げて、一に太子出家の爲す所なるを說き理を辨じ、情に訴へ、諄々懇々百方復び城中に還らむことを勸めたり。然れど三人の大臣の巧言は、何れも太子の爲に辯拆せられ、愈太子の成道度生の大決心を堅うするに過ぎざりき。

太子は終りに大臣に告げて曰く、『汝等歸て父王と妃と群臣と國民とに告げよ。悉達多は一國の主となるべき者に非ず、人天三界を擧て我有と爲すに非ずむば、決して退轉することなかるべし。設令ひ日月地に墜ち、須彌雪山我頭に轉ずるも、我が是大本願は決して渝ること無かるべし』と。辯鋒さながら炎の如く、威容凛然として近くべからざるものあり。三人の大臣は強ゆるに辭無く深く畏敬の情を起

寞として唯歔欷の聲を聞く。

父王の悲みは述ぶるまでも無かるべし。王妃耶輸陀羅の歎きに到ては傍人をして斷腸の思あらしめき。昨夜香閨帳裏に鴛鴦の夢を結びし人、今日三界の寡婦となりて其人遂に見るべからず。夢か幻か、誰かそを現なりと思はむや。然るにても無情の人なる哉、家を出で道を修めむとの貴き大願を妾女性の身として爭てか沮むべき。唯何が故に眞の情を以て妾に告げ、妾をして最後の名殘を惜ましめ給はざりし。あはれ五天竺に並びなき悉達多太子の配と名告れる身の天幸は、厘に一旦夕の夢に過ぎざりしか。良しや妾は素より物の數ならずとするも只是孩提の兒や、永く孤孀の身とならむを如何にすべき。嗚呼車匿何が故に其命を拒まざりし、乾陟何が故に其歩を停めざりし。方四十里に聞ゆる城門は何が故に城內の眠を醒さゞりし。天は何ぞ大に雪ふりて其前路を埋めざりし、地は何ぞ大に震ひて其前路を陷れざりし。妃は狂氣の如くなりて泣き悲みぬ。車匿を責め乾陟を罵れども遂に奈何ともする無し

是に於て父王は其大臣の巧慧才辯あるもの三人を擇び命じて駿馬に策て太子

太子は跋伽婆仙人の苦行道を疑ひ、議論一夜の後、仙人の懇留を辭してその深林を出でぬ。南方摩迦陀國に阿羅邏仙人とて、行德高潔證悟深遠なる道者棲めるを聞き行きて道を尋ねばやと思ひぬ。

行き行きて迦毘羅國の南境に到りぬ、日暮秋風前途尙ほ遙なり。唯見る遙に兩三騎の砂烟を捲いて太子の後を追ふものあるを。太子杖を停め其の近づくを見れば王師大臣迦毘羅城より王命を受けて太子を抑留せむとせるなりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是より先き車匿は太子に別れ、心悲塞し、悄々として城に歸る。先に太子と共に夜を明したる一宿の徑路、今や太子を捨てゝ空しく歸る。天候慘憺として日に光なく、城市亦憂ふるが如し。苑圃林泉、形故の如しと雖も、水清まず、木茂らず、國土寥廓として又嘗昔歡喜の相無し。城中太子の夜、城を出でたるを知りて憂感措く所を知らず、車匿の乾陟を牽ねて歸り來るを見て更に太子の共に在らざるに驚き、爭ひ馳せて其故を問ふ。父王后妃亦乾陟の聲を聞き急遽階を下りて出で迎ふれども、車匿の蕭然として白馬と共に立てるのみ。太子は遂に長へに在らず。滿城寂

太子は苦行仙人の事は預て聞き及びしが、今や初めて其實況を目擊し、心潛にそが果して解脫の眞法なりや否やを疑ひぬ。試みに其徒に問ひけるは『卿等の行狀誠に奇特なり。請ひ問はむ是の如き苦行に依りて求むる所は何ぞや』。彼等答へて曰ひけるは『そは言ふまでも無く、聖經の敎ふる所に隨ひ、苦行の因によりて、天上の樂果を得むが爲のみ』。太子復問ふて曰く『然らば問はむ、天上の樂と雖も遂に盡くる期あらむ、其時再び六道に輪廻して苦界に陷らむ。卿等如何にして是大苦報を解脫せむとする』。彼等又答ふる能はず、唯曰く『我等は唯聖經の敎ふる所に從ふのみ』。

是に於て太子熟々思惟するに、務めて生を求むるもの、生求め得れば復死に遇ふべし。然らば務めて樂を求むるもの樂求め得れば復終には苦境に沈むべけん。畢竟苦樂は相對の境、轉々互に究極すること無かるべし、唯無上の智慧を修め、苦樂兩つながら捨て寂靜無爲の境に入るに非ざれば、恐らくは絕對の眞樂に達するを得べからず。今跋伽婆仙の徒を見るに、徒に肉身を苦めて無上の眞樂を得むと欲す、あはれ木に緣りて魚を求むるに均しからずや。

樹晝尙ほ暗き迄に生ひ繁り、四境寂靜にして市塵遙に到らず。跋迦婆仙人と云へるは、久しく是林中に棲める苦行の仙人にて、從遊する學徒少からず、其名高く遠近に聞えたり。太子城に在りし時夙に其名を慕ひければ、學道の端緒として先づ是仙人を訪ひけるなり。

跋伽婆仙人の徒は、恰も古來婆羅門の一派として、印度に行はるゝ瑜伽派の人々の爲すが如く、所詮は現身の苦行を以て未來の淨樂を求むる者なり。太子跋迦婆仙に謁して熟々其徒の爲す所を觀るに、其道各々異にして服食亦相同じからず。或は草葉を衣となし、或は樹皮を服となし、或は草根木實を拾うて一日一食するあり、二日一食するあり、三日一食するあり。或は鳥に似て絕えず一脚を翹ぐるあり或は虫の如く地上に轉ぶあり。或は常に頭を水に浸し、或は魚の如く水中に沒するあり。或は荊棘の上に起臥し、或は死屍を纏ひたる襤褸を以て身を覆へるあり。或は一手を揚げ、或は直立して常住其態度を變ること無し。凡そ一切の苦行擧げて用ひざるは無し。然れば是徒何れも身體疲弊を極め、骨枯れ血渴き、見る影も無く瘦れたり。

太子乃ち諭すに世道を以てし、懇に生死會離の常理なるを說く。車匿強ゆるに語無く。涙を呑で匱に命に隨ふ。立て乾陟の轡を執らむとすれども、白馬は膝を太子の前に屈して、御足を舐り、容易に立たず、長嘶して悲哀を訴ふるものゝ如し。太子身を起し、衣を拂ひ、車匿及び白馬に最後の告別を殘して去る。車匿其衣を捉へむとして及ばず、滿眼涙を湛へて是を目送す。孤影蕭然として形漸く小なり、車匿手を擧げ、足を蹋て、聲を放て太子を呼べども、空林徒に響を返して、其人遠樹の間に隱見するのみ。白馬亦數々頭を回らし、太子の跡を望み、鳴喚するもの數次、車匿悄悶え、感極まり、白馬の頸を抱きて號哭すれども、太子遂に見えず。低回顧望是を久しうす。心茫然として自失せるが如く、倒れては復起き、起きては復倒れ、反側悲泣して歸路に就く。

第八章　佛陀の學道

太子既に車匿と乾陟とに別れ、跋迦婆仙人に遇はむとて深林を排けて入り給ふ。抑々是林は、迦毘羅城より東の方約二十里、雪山々脈の麓に在り。天に參するの老

汝等群臣と共に父王を敬せよ、我今多く言べき無し。汝速に馬を牽ねて還り復命せよ』。斯く言ひつゝ太子は、身に纏へる瓔珞寶珠の衣冠を脫し、代ふるに粗布染色の縮衣を以てし、且髮を斷ち、劍を解き、素手跣足となり、車匿に命じて其衣冠と髮と劍を持ち還らしむ。曰く、『今より後、我は是れ出家捨行の一徒弟のみ。衣冠又何かせむ。車匿よ、我容姿の窶れたるを見て泣く勿れ、天下は即て我有に歸すべきなり』。嗚呼昨は榮華の太子、今は孤孽の沙門、等の悲壯、何等の轉變ぞや。

憐れなる車匿は太子の言を聞きて欷歔是を久しうして曰く、『嗚呼悲い哉、我れ是を奈何すべき。昨夜太子の命により、奮騰として奔りて玆に到れりと雖ども、是甚深の離情に會して爭でか手を空しうして還るを得べき。太子、身深宮に人となり、身細軟にして質蒲柳なり、爭でか風雨幾年の苦行に堪へ給ふべき。良し成道の爲に其身を捨て給ふとも、老父王は其子を失ひ、王妃は其夫を失ひ、王子は其父を失ひ、迦毘羅國の民は其賢王を失へり。あはれ是瓔珞の衣、寶玉の冠は、再び脅躰に着くべからざる乎。太子希くは賢慮を再びせよ、車匿又何の面目ありて空しく無主の馬を牽きて歸るを得べきぞ』。言々肺腑を絞り、淚盡きて繼ぐに血を以てす。

第七章　車匿及び乾陟

車匿と乾陟の太子と行くこと凡そ二十里、日漸く出づる頃、東南の方彌尼迦の村を歷て跋迦婆（バーカバ）仙人の居林に入る。林木清曠にして禽獸人に親む、太子心潛に喜びて祥瑞と爲し、彼の仙人必ず我が成道に益あらむと思へり、乃ち馬より下り、手馬頭を摩して慇懃に告て曰く、『今こそ汝の大任は終りたれ。今より後、城に還りて汝の天年を全うせよ。我が出家の一大事に會し、我が爲に是大遠路を走りしは我が永く德とする所なり。乾陟よ憂ふる勿れ、悲む勿れ、泣く勿れ、汝が載せたる悉達多の、即て大果報を得て天下法界の主とならむ時、當に甘露を以て汝に頒つべし』。白馬首を垂れ、肅然として太子の言に聽く。

太子次に車匿に告げて曰ひけるは、『我忠僕よ、今や汝が事已（すで）に了（をは）れり。汝の眞情勤勞共に何物を以てか報ふべき。如今（いまし）我れ一切の世榮を抛ち、是より將に學道の緒に就かむと欲す。汝歸りて父王及び眷族に知らするに、我が是志を以てし、且我を以て意と爲す勿れと告げよ。我妃既に子を生めり、以て我に代て世嗣と爲すべし。

りと。太子諭すに救世の大事を以てせしに、車匿は泣て其命に從ひぬ。

即て名馬乾陟は太子の前に引かれぬ。乾陟は駿良を以て名あり。乘具に寶玉を鏤め、躰勢龍の如し。太子其頸を撫でゝ曰ひけるは『乾陟汝靈あらば能く我言を聞け、我父王常に汝に跨りて敵陣に臨み、向ふ所勝たざるは無かりき。我れ今遠く奔りて雪山の麓に行かむとす。單騎隨伎なしと雖ども、亦是れ衆生の爲に一大苦戰に勝たむが爲めなり。汝能く長駈して疲れ倦むこと勿れ』。乾陟耳を俛して傾聽するものゝ如し。太子徐に馬上に跨り、手綱を操て一鞭す。車匿轡を執て是に先つ。怪い哉、馬屛息して嘶かず、步武肅々として聲無し。關鑰堅固にして朝夕開閉の音四十里に聞ゆるの重鐵門、亦音無くしておのづから開放せらる。車匿と乾陟と太子と夜にまぎれて迦毘羅城を出てぬ。

嗚呼太子悉達多は斯くて一切現世の榮華を捨て、其國儲の尊位を抛ち、其他もろ〳〵の繫累を斷絶して一處不住、捨行專念の一出家となりにける。只眺むれば、夜暗うして風蕭やかに、滿天の星斗獨り花の如し。白馬と主從と、闇を衝いて流星の如く奔り逝きぬ。時に十二月第七日。

原野の石の如く、醜穢なること塚間の死屍の如し。太子是を見、憮然として惟へらく、『婦人の形容眞に是の如きに過ぎざるのみ、外粉脂を施し、其衣を綺羅にし、其容を媚悅にし、瓔珞華鬘燦然として人目を眩ますも其身躰の不淨猥醜素是の如きのみ。夫の色境に沈湎し、恣に其の誑惑するところとなる者は眞に憐れむべき哉。我今分明に是の如き眞相を觀るを得たり、當に勇猛心を振ひ起し、歡喜踴躍して不退轉の精進を遂げ、以て救ひ無き者の爲に救護を作し、養育無き者の爲に歸依を作し、家無き者の爲に屋宅を作るべし』。

斯くて太子は後宮を出で、至心一向、諸佛を念じて端然として天を仰ぎぬ。時は方に初冬の交なりき、雨期の熱候既に去て恒水河上秋風漸く老い、北の方雪山の氷雪漸く人寰を壓し來らむとす。天高く氣澄み、虛空弘大、星宿燦爛たり。

太子は御者車匿を喚び起し、愛馬乾陟を牽き來らしむ。告げて曰く、『我が心今甚だ渴きたれば、行て甘露泉を飲まむと欲す』と。車匿太子の出家せむとするを覺り、惟へらく、父王平生我に命ずるに太子の出入を看護せむことを以てせり。今太子の命に從へば父王に背き、父王の命を守らむとすれば太子に背く、進退惟れ谷まれ

らるゝ時あるべし。嗚呼耶輸陀羅よ、全法界の財貨よりも、大雪山の嶺よりも、大恒河の水よりも、貴く、高く、深き愛情を我身に盡したる我妻よ。今こそは悉達多が無盡永劫の訣別なれ。いざゝらば』。

太子は甘睡せる妻子に、餘所ながら永別の意を告げぬ。無心なる小兒の慈母の懐に何事も知らずして眠れる樣を見れば、流石に名殘の惜まれて、覺えず涙を流しぬ。されど是期に臨みて、又何をか悲まむ。太子は其大勇猛心を奮ひ起して、情絆を兩斷し、決然として出でぬ。行く〳〵宮中を四顧するに、幾千の宮女、爛睡さながら醉へるが如し。畫は烟脂紅粉端然として儀容を作れるもの、今や魂魄華胥の國に遊びて、身は革囊骨架に異ならず。或は身歪み服正しからざるものあり、或は袒げるあり、褰げたるあり。或は手頤頷を支へて眠れるあり、或は兩臂一膝を抱けるまゝ眠れるあり。或は目睫交はらず、睛瞳明かに現はるゝあり、或は仰臥して四肢を延べ口を開けるあり。或は知らずして手脚を亂打し展轉して眠れるあり、或は頭を覆ひ鼾聲四邊を動かすあり。或は蹲居首を縮めて眠り、或は齩齒の音憂々として鳴れるあり。或は大小便を失し、不淨のまゝ眠るあり。千態萬狀磊々として

が大なる慈悲心を知らざるものゝみ。

嗚呼、耶輸陀羅よ、最愛なる我妻よ、我は是世を救はむが爲に生まれたるなり。十九年の今に到るまで、我心は是が爲に憧れ、我情は是が爲に動けり。父王は常に我に告げ給へり、是世を樂め、是國を治めよと、然れど我が大いなる使命は、茲に在らざるなり。我は王冠を冠き、干戈を動かし弱き者を挫がむが爲に、是世に生まれず。百萬の枯骨によりて一戰の勝者となるが如きは我が願にあらざるなり。我は寧ろ寂寞の山林に起伏し、食を乞ふの外、一切思念を斷絶して一大事の冥想に耽らむが爲に生まれたり。我が大いなる使命實に茲に在り。我れ父王の慈愛を想へば、腸九回せむとす、然れど我は一迦毘羅國の榮華よりも、全法界の濟度をば更に大いなりとするなり。

嗚呼、我が最愛なる耶輸陀羅よ、我に代りて父無き羅睺羅を養ひ、以て父王の心を慰めよ。是より以降、永く我に就いて思念すること無かるべし。我は最早や王子にあらず、太子にあらず寂寞孤挙の一出家なり。然れど我の貧しく賤しきを憐む勿れ、全法界は將に我によりて救はれむとす。我は、他日三界の救世主として崇め

斯くて太子は出家の決心を定めしが、流石に身木石に非れば、餘所ながら最愛の妻子に永訣を告げむが爲に、靜に後室の寢殿に入りぬ。蘭燈光幽かにして、夜既に更けたり。憐れなる耶輸陀羅姬は、今にも其身の上に覆ひかゝらむず黯澹たる運命をば夢にも知るよし無く、幼兒を懷きて安らかに眠り居れり。哀れ、消ゆれば跡なき陽炎の果敢なき未來に何事を夢みるぞ。太子は憮然として其寢顏を打まもりぬ。綠なる丈なす黑髮は、誰が爲にか理めたる。玳瑁の櫛、瓔珞の飾、誰が爲に輝やける。見れば薄化粧をさへ施したるに笑ひを含める天女の顏ばせは、そも何の樂みを夢みてぞ、今や其花の如き春色は一陣の驟風に散されむとす。——太子は言葉無く帳前に佇立みぬ。

『嗚呼耶輸陀羅よ、全法界の財貨よりも、大雪山の嶺よりも大恒河の水よりも、貴く、高く、深き愛情を我身に盡したる可憐の我妻よ。今こそは悉達多が無盡永劫の訣別なれ。御身の愛を我れ永く忘るゝ時無かるべし、唯是有生衆生の限りなき苦に沈めるを如何すべき。我今御身を去るは、御身を愛するの淺きが爲に非ずして、三界衆生を慈むの情更に深きが爲なり。若し我を目して無情と詆らば、是れ未だ我

陀なり、一切衆生の宗師となり三界永劫の法主たらむもの、卿を措いて何處にか求むべき。貴い哉悉達多、闇黒なる世界は卿によりて照されむ、眞理は卿の手より迷へるものゝ頭上に降されむ。唯成道の道に一向精進して決して迷ふ勿れ、決して退轉する勿れ、百雷卿の前に落つるも驚かざれ萬魔卿の耳に囁くも聞く勿れ。日月の運行して四時の序を成すが如く、眞理の軌道を踏で過つこと勿れ。信仰によりて立ち、熱誠を以て戰ふものは、常に眞理の友たらむ。三世十方の諸善神は悉く卿の前路を擁護せむ。道を誤らざらむが爲に神智は卿の胸に宿るべし、日月よりも明なる光明は常に卿の心に輝かむ。いざさらば佛陀よ』。

幻の如き出家の人は、其の來りしが如く消え去りぬ。太子は瞥然として暫時其跡を打守りしが、即て決然として起上りぬ。『我は必ず佛陀とならむ。石の地に落つるが如く、生まれたるものゝ死するが如く、天神菩薩の言何ぞ我を欺かむや。嗚呼我は必ず佛陀とならむ』。

第六章　佛陀の出城

ものは大淨樂を大苦境に得ること亦當に是の如くなるべし。卿よ疑ふ勿れ、唯一念固く涅槃（ニルワーナ）の一大靈湖を求めよ、其處には生も無く、死も無し、一切苦境の繫縛を離れて、無始無終の淨樂を享くべきなり。池の看出されざるの故を以て、池無しとする勿れ。道に到らざるは到らざるものゝ罪にして、道の罪には非ず。惡業に苦みて天を恨むもの、何ぞ是に異ならむや』。

太子の心は幻影の人の言によりて、一道の光明を得ぬ。『實に卿は我に尊き教を齎せり、そは卿の言によりて我が本願の必ず成就せむことを悟りたればなり。唯我が老父王は、我に告げて、出家するには年尚ほ弱く、志未だ固からずと云へるは如何にぞや』。出家の人頭を掉りて曰く、『悉達多（シッダルータ）よ、惑ふ勿れ、道に入るに老幼何れの時か定まれる好機あらむ。唯發心の一轉瞬をこそ無上となすべけれ』。

太子は是言を聽て踴躍して喜びぬ。——實に道を求むべき時は到りぬ。十有九年の迷妄を擺脫（はいだつ）して眞（まこと）の道に入るべき時は到りぬ、我れ今こそは一切世榮を捨てて山林曠閑の中に入り、其處に救世の大使命を果すべきなれ。

出家の人は太子の決心を觀て讃美して曰く、『大いなる哉、悉達多、卿（なんぢ）は如來（にょらい）なり、佛（ぶつ）

太子は起て坐を閻浮樹の下に占め、眼を閉ぢて寂寞の三昧に入りぬ、何處とも無く我を呼ぶ聲す。頭を擧ぐれば、樹下に幻影ありて我に語らむと欲するものゝ如し。太子問て曰く、『卿は之れ何處の人ぞ』。幻影の如き人答て曰く、『我は是れ出家の人なり、救世の大使命を負へる卿に最後の決心を促さむが爲に來れり』。太子問ひけるは『出家の人とは是れ如何の人ぞや』。出家の人答て曰く『我は三界の苦境なるを知り、老病死を離れて解脫の道に就かむが爲に、家を出でにき。流轉無常の萬物の中、獨り亡びざるものは眞理のみ。我は是眞理の中に無爲の幸福と無窮の生命を保たむと欲す。されば我は一切世間の繫累を離れて寂寞の野に退きぬ』。

太子更に問うて曰く、『實に愛樂の空なる事は、我亦是を悟りぬ。一切の世榮何物か我にとりて苦惱の種ならざるべき、唯如何にして是苦境を脫すべき、抑々無上の圓覺は是世にて得らるべきものなるか』。

出家の人は答へて曰く、『卿の覺悟や善し、一大飛躍は卿によりて當に爲さるべし。卿が救世の大使命は、實に是によりて成し遂げらるゝなり。卿は安心の大道を疑ふか、彼の大紅蓮の華の泥より出でゝ玉よりも清きを如何とか觀る。道を悟れる

を久うす。匿に言て曰く、『太子よ、希くは其所思を翻せ、我れ卿の或は是事あらむを慮りて、憂苦眠を成さゞること茲に年ありき。卿は我鬢邊幾莖の白を如何とか見る。卿の大慈悲心や誰か頤仰せざるべき、唯卿年齒尚ほ少なり、其心固定せりと謂ふを得ず、出家成道の事、是を後年の詮考に委ぬるも遲しとせざるべし。卿は當に我に代りて國政を治め、我をして先づ出家せむべし、父を棄て宗嗣を絕ち、而して己れ獨り出でゝ道を學ぶ、是れ豈世間の法ならむや。今や我國小康を得たりと雖も、列強互に鎗を削りて隙を窺ふ、卿今國を去らば、是迦毘羅國の前途を如何すべき。我れ齡已に傾く、餘命幾も無し、卿の子尚嬰孩にして、母亦若し、我れ誰と共にか是國を治め、誰に向てか是國を托せむ。願くば又出家の事を言ふ勿れ』。太子父王の衷情を察し、再び強ゆるに忍びず、感泣して宮に還る。

然れども是れ太子の初めより期待せし所なり。其志爭でか翻へさるべきや。

夜は深く人定まりぬ、萬籟寂として天地死せるが如く、太子は獨り後宮に坐して、靜に幽思に耽り、流石に父王の愛情を思へば、心悵惕として安からざる所あり。噫世は無明の闇に鎖されぬ、救ひの光何處にある。

三苦常に身を纏うて、生死轉々際涯無し。愚なる哉、衆生や、何ぞ是永世の思念を外にして、現代の得失に拘々焉たる。

太子は斯る冥想に沈みつゝ、悄然として踵を回せり。是に於て其決心は愈々固まりぬ。妃耶輸陀羅姫太子の憂に沒めるを見、悲み泣て其故を問へり。太子答て曰く、『我は天下到る處無常ならざる無きを見たり、是を以て憂ふるのみ。或は老い、或は病み或は死す、是の如くむば人生何の樂しき事か是あらむ』。

太子時年十九、心に惟へらく、我れ既に室を迎へ又既に嗣子を擧げたれば、今にして出家するも早からじ。人生旦暮を保せず、成道一日も懈怠すべからずと。即ち一日父王に謁し、恭しく其本願を吐露して曰く、『一切世間の事、生ある者必ず滅し、會へる者必ず離る。父王希くは我をして出家學道の徒たらしめよ。三界は是れ聚苦の境、人は其無常の生を恃みて永世の爲を思はず、我れ心忍びざる所あり。恩愛集まる所煩惱あり。我れ今一切衆生をして煩惱を解脫せしめむと欲す、父王希くは我願を許せ』と。父王は豫て期せざる事にしも非れども、憂苦今更身に迫り、身戰き口囁嚅として言俄に出でず。席を起ちて太子の手を執り、紅涙千行、歔欷嗚咽是

々深く、漸く其救命の大使命を自覺し初めぬ。其の限り無き慈悲心と甚深なる悲哀の性情とは、事に觸れ物に感じて、愈々烈しくなり增りぬ。父王乃ち名門貴族の子弟にして、年少美貌なるもの一百人を撰びて、太子の側に侍せしめ、晝夜談笑慰藉し、務めて太子の沈思默念を妨げむとす。然れども猶ほ波濤洶湧の下、萬尋の深淵杳然として靜なるが如く、太子の心は遂に動かすべからざりき。

一日王太子を伴うて郊外に遊び、田畝の間を逍遙す。麗日和風、人をして歸るを忘れしむ。太子路に耕犁の人を見るに、耒鋤地に着くところ、諸蟲の死するもの算無し。太子惻愴の情に堪えず、又彼の農夫を見るに、髮を被り汗を流し、面黝骨立、身に百結の襤褸を纏ふ。亦以て平生の勤苦を想ふに足る。耕牛亦疲れ困しみ、舌を吐き、涎を垂れ、喘々焉として息ふ。太子見て歎息是を久うす。吁々三界生を享くるもの何ぞ限らむ。人耕作の故に生蟲を殺すを顧みず、何ぞ其れ無慈悲なる。彼の喘々焉たる牛や、生を保ち情を有するに於て何ぞ人類に異なる所あらむ。人其勞役を省かむが爲に、虐使して顧みず、何ぞ其れ無情なる。世界、人たるもの何ぞ限らむ、彼の農夫獨り何か故に是の如く勞苦するや。人命甚だ短かく、憂惑甚だ長し、

我に於て敬重すべき所以を知らざるなり。嗚呼世界畢竟、大苦の積聚のみ、汝何ぞ我を勸めて是中に陷れんとはする。老病死の三苦は甚だ畏るべし、吾れ是を思うて夜眠を成さず、何の遑ありてか五慾に執着して是無常の快樂を追求せむや』。言辭痛切、直に人の肺腑に徹す。優陁夷又答ふる所を知らず、唯々として退く。諸官女亦慚愧し、伎樂歌舞の具を收めて城に復る。時方に黄昏啼禽鳴を停め、暮風蕭々として枝に聲あり、先の歌舞宴樂の處、寂寞として墓域の間を行くが如し。想ふに太子の感慨一層の深きを增したるなるべし。

父王は太子の遂に憂愁を飜さゞるを聞き、心大に苦み、群臣を會して其法を問ふ。されど其の答ふる所、何れも五慾を以て其心を留めむとするにあり。優陁夷の巧慧も今や施すに術なかりき。

第五章　佛陀の決心

美妃を配し、玉殿を建て、數千の婇女をして其身邊を圍繞せしめ歡樂以外一切の思念に遑無からしめむとしたる父王の用意皆空となりぬ。太子の沈思は日に益

かすべきぞ。

其時優陀夷も供奉の中に加はりけるが、衆女の媚態も太子の情を動かし得ざるを見、預ねて父王の旨を受たる事とて、進みて太子に言ひけらく、『人の盛時知るべきのみ。其時に於て行樂せずむば將た何れの時をか期すべき。才色双絶せる太子の如き人にして聲色の美を爲す無きは、人生の一恨事と謂ふべし。且夫れ聲色の美は人情の自然に出づ帝釋、瞿曇、婆羅墮の諸大仙人、猶ほ且免れず、安ぞ獨り太子に於て累を爲さむや。太子何ぞ其憂愁を已めて、衆と共に樂まざる。區々たる形體の慾、何ぞ大人成道の障害たるを得むや。

太子、優陀夷の巧言を聞き、莞爾として是に告げて曰く、『汝我を思ふの情深く嘉すべし、唯我れ誠に汝に告げむ、世上一切の快樂は畢竟是れ無常の相のみ。若し世に老病死の三苦無く紅顏長へに渝らず青春永く續かむには我も亦當に衆と共に樂むべし。若し衆女の色をして衰變することなからしめば、我亦何を苦みてか厭離せむ。唯人生に老病死あり、漫に五慾の境に執着し旦又夕を謀らざるも、三大苦の忽然として到るを如何すべき。汝が擧ぐる所の諸仙人は、何れも墮落の凡夫のみ、

爲に一日にして破碎せられたる、孰れか美人の大威力を示したるものに非ざるべき。太子持心如何に堅固なりとも、其德行如何に淸淨なりとも、爭でか女性傾國の一笑に敵し得べき」。衆女是の優陀夷の言を聞き、何れも踴躍して其力を試むるの時を待ちしが、今や太子が園林の遊歷に際し、扨こそ種々の祕術を傾けて太子の道念を動かさむとは務めたるなりけれ。

然れども太子の心は、動かざること大盤石の如く、又猶ほ大龍象の群象に圍繞せられ、傲然其心を亂さゞるが如かりき。衆女皆太子の身邊を繞り、或は爲に衣紋を飾り、或は爲に手足を洗ひ、或は歌舞し、或は言笑し、或は眉を揚げ齒を露はし、或は美目相流盼し、或は身を傾けて密語し、或は世俗の調戲に擬し、或は情慾の事を說き、或は猥褻の形を爲し、媚態百出偏に太子の情を促さむとす。されど事總て空なりき。太子は却て靜に衆女の狀況を觀じ、喟然として大息しぬ、——危い哉、彼等の大惑や、靑春幾時ぞ、敢て是無心の樂を貪る。夫の瓔珞を貫き、華嚴を飾るもの、將又夫の紅粉を施し玳瑁を戴くもの、少壯幾年にして身は何れの境に往かむとはする。悲い哉、人は春の榮華を知りて、未だ秋の枯衰を覺らず、老病死俄然として到らば、又如何

焉ぞ園林の遊歴を事とせむ」。命じて車を廻さしむ。御者父王の怒を慮りて俄に其命に從はず、疾驅して直に園林に至る。

園林は迦毘羅城の郊外にある國王の別墅にして、佳木芳草を植え、靈禽奇獸を放ち、林間の流れは清冷にして鬚眉を鑑すべし。鳥語風聲自然の樂を奏して、芬郁四邊に飛び、光耀耳目を喜ばす。實に古にありきてふ天難陀（なんだ）の大園林も斯くやと思はるゝ計りなりけり。

太子の車駕園林に達するや、預て待設けし事とて、盛裝を凝したる數百の宮女來り迎へ、競て媚を獻じ、種々艷妖の姿態を盡して一向太子を欣ばせむと務めたり。是より先き婆羅門の子に優陀夷（ウダイ）と云へるあり。才辯を以て王に用ひられしが、一日王の旨を受けて諸宮女に說けるは、「卿等は何れも世に類稀なる美人なり、其一顰一笑は直に男子の心膽を挫ぐに足るべし、何ぞ獨り太子に對して力無きや。太子學博く識高く、常に幽玄の沈思に耽ると雖も亦是れ一個の人ならずや、如何ぞ卿等の容色媚態を以て其情を動かし得ざるの理あらむや。昔者孫陀利（ソンダリー）姬の能く大仙人の成覺を壞りて愛慾の巷に墮落せしめたる、毘尸婆（ビシバ）梵仙の一萬年の修道、天妃の

父王太子の悦ばずして歸れるを聞き、深く從者及び路上を監督するものを譴責すれども及ばず。乃ち更に珍寶を集め、美妃を納れ、百方太子の憂情を暢べむことを務む。然れども太子は紅顔を見ては則ち白髪を思ひ、媚態に接しては則ち病患を想ふ、聲色耳目に入れども笑はず、況して口體の奉養如何に善美を盡すも爭てか其心を樂め得べき。父王乃ち太子をして再び遊歷せしめむと欲し、先に東西の兩門何れも不祥の事ありしを以て、更に南門より出でしむ。道を修め、家を整へ、嚴にもろ〳〵の醜穢不淨を排去すること前よりも甚し。然るに怪い哉、忽然として四人の一輿を擔て太子の前に至るあり。太子御者に問うて曰く、「此は是れ何の輿ぞや。幡花共に華麗なれども、從者悉く憂色あり、或者は髪を被り、號哭して其後に隨ふは何故ぞ」。對へて曰く、「彼の輿中に在るは死人なり。諸根壞れて生命絕し、精神遠く離れて形骸獨り殘る。親戚故舊恩愛離別の情切なるが爲に、是の如く憂へ哭(な)くのみ」。太子聞て震慴し、身を車軾(しゃしょく)の前に伏し、大に歎息して曰く、「噫塵界の人何ぞ思はざるの甚しきや。人生何處にか死無からむ、死を免れざるの是生を持して、何ぞ獨り死に對するの用意を怠るや。吁危い哉、人生の常なきこと、電光石火の如く、

や」と。群臣太子の憂思に沈めるを見て心安からず、御者命を受けて結駟又城門に入る。太子の心既に老衰の悲哀を想ひ、一念偏に人生の悲觀に馳す。豐麗比び無き迦毘羅城も、さながら空塚の間に歸れるの思ひあり。

父王は太子を慰めむが爲に催されたる外遊の、却て太子を愁へしめたるを聞き、更に命じて西門より出でゝ重ねて遊ばしむ。鹵簿の壯嚴なること前日に勝れり。然るに圖らずも路に一病者に遇ふ。身痩せて腹部のみ大に、呼吸も絶え〳〵なるが展轉して人の憐みを求む、其狀甚だ痛むべし。太子見て御者に問うて曰く「此は是れ如何なる人ぞ、唯彼のみ是の如くにして、餘は則ち然らざる乎」。御者答て曰く、「是れ病者なり、四大亂れて其序を得ざるが故に、羸弱自ら勝ゆる能はざるのみ。是の如きは一切世上の人、貴賤貧富に論無く、皆然らざるは無し、世豈萬年の天子あらむや」。太子是言を聞き心大に動き、更に人生の無常を感じぬ。——嗚呼世間の人は愚なる哉、病患の至るや豫め其期を定めず、今日香閨の人明朝安ぞ枯骨たらざるを保せむや。漫然世榮を追ひ、嬉戲日を盡して尚ほ足らず、何ぞ心無きの甚しき。——直に車駕を廻し、惆然として宮城に入る。其狀恰も大打擊を被れる人の如し。

男女、綺羅星の如く、燦爛花に似たり。太子の車過ぐる所賓縵路傍に蔽ひ、繽紛として春風に飄り、觀者長路を挾みて、敬禮歡呼湧くが如し。遠近の市邑亦太子城を出づるを傳へ聞き、平生其盛名を慕へるもの爭ひ馳せて路傍に到り、手を額にして是百年の盛儀を拜す。忽ち路傍に一老人を觀る。太子驚き怪みて御者に問ふて曰く、「此は之れ如何なる人ぞ、頭白く眼昏く、背僂み身戰けり、僅に一枝の杖に憑りて蹌踉として歩む。是人是の如き性を天に受けたる乎。御者は此問に遇うて、心潛に躊躇せしが、僅に答へて曰く、「是れ老衰死に瀕したればなり。思ふに是翁も亦昔は紅顔の美少年のみ。青春日暮、嘻々として其五慾を恣にせしが、今や年逝き、心衰へ、悲愁多くして歡樂少し」。太子御者の言を聞き、長歎息して更に問うて曰く、「老ゆるものは彼のみにして、吾等は則ち然らざる乎」。御者曰く、「吁何ぞ然らむ、是れ人間一切の運命なり」。太子是言を聞き、慄然として震ひ驚き、頭を垂れて深く思念する所あり。以爲らく是老衰の苦早晩到らむことを思はゞ、何ぞ世上の歡樂に愛着するの違あるべき。今や目前の事證に遇うて、我が心覺めたるが如しと。即ち御者を顧みて速に車馬を還さしむ、曰く、「念々衰老の期近づく市街園林何ぞ歡ぶに足らん

然れど太子は口體聲色の美を享けながら心奕々として安からざる所あり。潜に人生の眞義を思ひて、幾度か夜半の想ひを凝したり。更深く人沈まり、一宮の春色寂として聲無き時、月下後園に逍遙して獨り三昧に入る。——嗚呼人生果して是の如き乎、月は盈縮し、四時は代謝す、青春の妙樂夫れ獨り人生に在る乎。生まれて王者の奉を受け、長じて宮掖に人となる、世亦是の如くにして、人亦是の如き乎。茫々として此間に嘻戯す。行く處夫れ何れの處ぞ。現世既に幾多の人あり、又幾多の階級あらむ。世を累ね、生を轉ず、恐らくは究極する所無けむ。人は此間に立ちて、爲す所無き、可ならむ乎。

太子の沈思は漸く人生の眞諦に接觸せむとす、先づ宮闕を出でゝ世態を見むと欲するの情甚だ切なり。父王是を聞き、即ち群臣に命じて珠玉七寶の車を備へしめ、嚴に羽儀を飾り、供奉を正し、城門の正路を坦にして、途上もろ〳〵の汚穢を去り、老病貧窶の民等凡そ多感なる太子の哀情を動かすの恐あるものは、一切之を排除せしめ、且命ずるに路傍の門戸を裝飾すべきを以てせり。準備既に成り、駟馬蕭々、鹵簿堂々として太子の車、城の東門を開いて出づ。隨ふものは何れも年少紅顔の

永く我が子孫の有たるべし」と。

父王は更に太子をして現世の榮耀を樂ましめむと欲し、地を風色絕佳の處にトし、爲に宮殿を立て、太子夫妻をして是に居らしむ。規模の宏大、輪奐の莊麗、譬ふるに物無し。高塔の空に聳ゆるものは秋雲の天を指すが如く、低廊の地に橫はるは春霞の風に靡けるが如し。飛橋時ならざるに虹霓を橫へ、林園節を待たずして芬香を送る。方圍數十里、溫凉四時に適し、時に隨て人の居を擇ぶに任す。嫁妓幾百千、樓上閣下不斷の天樂を奏し、春風秋雨又人生の愁を知らず、聲色左右に侍して人の心を樂ましむ。清淨の一宮、正に是れ人間一切の快樂を萃め來る。太子美妃を擁し、愛兒を携へて是間に居る、果して如何の人生を觀ぜむとする。

第四章　三苦

斯の如く、悉達多太子は深宮に人となりて未だ世間の實相を知らず、父王亦太子が厭世の心を發するあらむことを恐れ、百方力を盡して現世の快樂を勸めしかば、太子は尙ほ人生の悲哀を觀ずるの遑無かりき。

何なりけむや。當時の印度は列國樹立の有樣にて、動もすれば干戈を動かして搏噬侵畧を逞うせむとせり。斯かる時代に當り、智勇兼ね備はれる悉達多の如き太子を有したる淨飯王は果して如何の希望を懷きしか。げに預言者の嘗て言ひし如く、他日天下を征服し人界五天の英主として億兆に君臨せむもの太子の外にあるべからずとは、必ずや老父王の胸中に浮動して寤寐尙ほ忘るゝ能はざる歡喜と希望となりしならむ。

是に於て一族諸侯は、爭て其女を太子に獻ぜむことを望みぬ。太子は其從妹に當れる耶輸陀羅妃（ヤシヨーダラー）といへるを納れて妃となしぬ。姬は夙に賢明婉淑、當代の一人と稱せらる。春花の姿、秋月の粧、三千の宮女をして顏色無からしめき。されば太子も鍾愛斜ならず、連理同枝の情交世に淺からず見えにける。姬は間も無く胎りて玉の如き一男兒を擧げぬ、羅睺羅（ラーフラ）と名く。父王の喜び譬ふるに物なく、以爲らく、妻をも娶り子をも產みたれば、今こそ太子が遁世の念慮は跡無く消え去りしなるべし、何となれば太子の羅睺羅を慈むは、猶ほ我の太子を愛するが如かるべければなり。然らば迦毘羅王國の運命は長へに衰ふること無かるべく、釋迦族の天下亦

太子は父王の憂慮一方ならざるを見て、さらばとて一日王に請ひて曰ひけるは、「父よ我一族及び隣邦の君主等は、皆我が器能を疑へり。願はくは彼等を招集せよ、我れ彼等と角逐して我が力の如何ばかりなるかを示さなむ」と。父王喜び是れを許せり。

是に於て淨飯王の一族及び隣邦の王侯と迦毘羅國中の名士とは悉達多太子の文武の力量如何を見むとて競うて王宮に集まれり。太子は先づ客を閻浮樹下の大講堂に請じ、學者をして種々の考課を與へしむ。然れど學者の問ふ所、一も太子を苦むるに足らず、太子は却て種々の難問を以て學者を試みしが、滿堂の選良得て答ふる所を知らざりき。次に太子は客を前庭の競技場に導き、名ある武士と共に種々の武藝を試みしが、亦一も太子に敵し得る者無し。太子は乃ち獨り馬に跨りて騎射の妙技を示せしが、馳驅開閉意に任せずと云ふこと無く、環睹の衆目宛然として醉ゑるが如し。的を去ること百歩、一箭能く七鐵皷を貫きしが如きは、實に人業ならず見えにけり。

一族王侯今や太子を見ること神の如し。是盛名を眼前に觀たる父王の歡び如

の子女は未だ太子の妃たるに適せずと。實に太子の然か思はるゝは理なりき。太子は宴樂嬉戲の群を離れ、好みて後園人無き處に入り、惹々たる閻浮樹の綠陰に逍遙して深く人生の疑問に沈むを常とせるなりき。

父王は、親族及び王侯が其女を太子に娶はすを肯せざるを聞きて、心潛に憂へぬ。そは太子の居常沈鬱にして、或は遁世の志生ぜむを怖れ、早く佳偶を配して是を控制せむと欲したればなり。抑々印度古代の婆羅門族には、其生涯に就いて一種の風習あり。凡そ婆羅門族たるものは、出家成道を一生の目的とせざるべからず、然れども其前には豫め梵志、家居の二期を經過せむことを要す。梵志時代にありては、古來の經典及び其他文武の學藝を習得し、家居時代にありては妻を娶り、家を修む。是風習初めは婆羅門族にのみ限られしが、後世釋迦の時代にありては、其他の諸族間にも行はれたるが如し。淨飯王が位を太子に讓りて出家せむと言ひしも、亦是遺風に倣はんとせしならむ。又太子の遁世を氣遣ひて速く王妃を迎へむとしたるは、太子が梵志家居の二時期を經過せざる中、或は早く出家成道の生涯に入るあらむを恐れたればなるべし。

ず、五穀の熟するもの時を待たずして、收獲却て倍加し、或は懷胎するもの分娩するや身常の如く健かなり、凡て是等諸他の佳祥、奇瑞傳ふるもの擧て數ふべからず。

太子漸く長じて德貌日に新たなり。附庸の屬國及び隣邦、何れも太子の降誕を賀して爭て珍異を献じ、其心を喜ばさむと務めき。是に於て牛羊鹿馬園に充ち、佳卉珍草園に列なり、寶貨玉石宮に積む。常ならば嚴師ありと雖も玩弄に荒む齡なるに、太子は生れながら沈重にして物に動かす、心常に高遠の境に往住して、榮華逸樂に染着せず、平生好む所は只學藝にあり。父王亦其聰明穎悟、世の常ならざるを見て深く心を敎育に用ひ、名道宗師を遠近に聘し、文武の藝術一切の種類を擧げて敎えざる所無し。太子一を聞て十を知り、師資忽ちにして處を易ゆ。今や全印度の學者又太子の右に出づるもの無かりき。

太子年十七になりぬ、父王は爲に妃を迎へばやと思ひしが、親族及び隣邦の王侯何れも未だ能く太子を知らず。以爲らく、悉達多太子は年齒尙ほ弱く、體質亦强からず、常に後宮に沈思して世事に疎しと聞く。今の世にありて文武弓馬の道に兼ね長ずるに非ざるよりは、爭でか一國の主君として其王妃を保護し得べき。吾等

然れども麻耶夫人は如何なる宿縁やありけむ、王子生まるゝ後七日、歡聲嬉々の中に此世を辭し給へり。夫人終に臨みて其妹妃に告げて曰く『我妹妃よ、我れ亡き後は太子を養ふこと我の如くなれ。未來の佛陀を生めるものは、永く此世に留まるを得べからず、是れ天命なり』と。妹妃名を鉢羅闍鉢底（プラジャーパティー）と云ふ。深く王妃の言を體して悉達多を養ひぬ。王子はさながら月の光の夜毎に圓かなるに近くが如く、慈悲圓滿の性相年を追うて現はれぬ。

第三章　宮中の生活

昔時印度に摩耶（マヤ）法と云へる王ありて、日光太子を生みし時、擧國吉祥を被り、衆惡一時に息みきと傳ふ。悉達多太子の降誕も亦其の如く、幾多の祥瑞引き續きて此大救世主の將に八表に光被せむとする祝福を讃揚せり。傳へ云ふ、此時或は兇暴なる白象の一群呼ばずして自然に至り、御せざるに皆調伏し、或は宮庭の井泉自ら望湧して園林の枯木俄に紅綠の色を呈せり。或は心の邪なるもの情おのづから和ぎて、干戈疾病自然に跡無し。或は和風時雨、節に隨て至り、雷霆震はず、水火蔓ら

御齡二十を出でざるに、家を出て山林に勤行し、やがて無上正覺を開き得て、萬世群氓の爲に救濟歸命の大道を示さむ。五欲の境に執着して永世の樂を知らざるもの、衆苦の野に低迷して達道の趣を解せざるもの、妄念の闇に展轉して智慧の光に遭はざるもの、三界十方のもろ〳〵の衆生、王子の指導に緣りて永く輪廻轉生の苦艱を擺脫せむ。あゝ貴むべく慕ふべきは王子の將來なる哉、唯願みれば我れ方に年華頽齡、幾もあらずして終焉の期に達せむ。恨らくは王子の無上道を成し給ふを見ずして、是世を去るべきなり。我れ是を以て覺えず泣涕せるのみ』。

父王及び王妃は阿私陀の言を聞きて愈々王子を敬重するの念を固め、鍾愛擁護到らざる無し。先づ命名して悉達多と呼ぶ、悉達多は『圓滿なる人』(シッダールタ)の義なり。同時に天下に大赦して悉く獄囚を解放し、廣く有道の人に布施して王子の幸福を祈らしめ、國中の貧者、蓄養に施すに錢財を以てし、親族群臣皆贈與あらざるは無し。良辰吉日を擇びて、王子を本宮に遷し、立てゝ太子と爲し、翌日麻耶夫人太子を抱き、父王と共に七寶の輿に乘り、白象綠馬供奉燦然として遍ねく天神に周禮す。婇女錦の如く隨臣雲の如く、市民亦是に從ひて、迦毘羅滿城の歡聲湧くが如し。

又其頃迦毘羅城に近き森の中に、阿私陀（アシダ）と呼べる名高き苦行仙人棲みけり。淨飯王其の人を相する神の如きを聞きて、試に宮中に請ぜしむ。阿私陀召に應じて到り、王子を看ること稍々久しかりしが潸然（はら〳〵）として淚を流し、聲を放ちて王子の脚下に泣き伏しぬ。王阿私陀の悲泣するを見て驚悸座を起ち、其前に稽首して曰ひけるは『仙人よ、是子不祥の相ある乎、卿何の故に悲泣する。先に相者に見せしめしに、是子容貌極めて端嚴なり、國王とならば當に天下の主となるべく、出家とならば當に人天の師となるべしと言へりき。今や仙人何が故に悲泣するぞ。或は是子生まれて短命なる乎、或は命長うして家國に禍する乎。我餘生幾もなし、禍福一に是子の上に懸れり、吁是迦毘羅國の前途を如何すべき』。

阿私陀は双手を揚げて王の悲歎を制し、滿面に畏敬の色を作して曰く『大王悲むを已めよ、是王子こそは人天三界に並び無き福德圓滿の相好を具へらるゝなれ。其眼は世界を照すべき慈悲の光に輝けり、喩へば圓かなる月の長へに缺くる無きが如く、其顏は天地六合の主たる徵を具足せり。大王何ぞ天下衆生と共に是を慶せざる。唯つら〳〵見奉るに、國王となりて現世の政を治むることはよもあらじ。

て曰ひけるは『大王よ、王子の爲に驚き怖るゝを休めよ。人世に生まれて其子の勝れたらむより樂きは無し。今や聖運月の滿つるが如し、何の故に叡慮を傷め給ふぞ。倩々王子を見奉るに面妙相好、げに人天の奇特を具へたり。長じて國政に當らば、轉輪王となりて普く世界の主となるべく、若し又敎の爲に出家せば、必ずや無上正覺を成じて三世衆生是に緣りて救はれむ。あはれ貴くも又大なる殊勝の相なる哉。衆庶の間に交るも、喩へば須彌山の群山に王たるが如し。衆賓孰れか金に勝るべき、衆流孰れか海に及ぶべき。諸星は月を最となし、諸明は日を尤となす。今や王子の相何を以て能く喩ふべき、大王須らく歡び給ふべし。是子後に至りて人天三界の師表とならむ』。

父王是を聞きて歡ぶこと限り無し。潛に思ひけるは、我れ今是殊勝の子を得たり、長ずるを竢ちて速に迦毘羅國の王位を紹がしむべし。我れ年既に老いたれば、願くは出家して梵行を修めなむ、唯是子をして山林遁世の心を興さゞらしむべしと。蓋し父王は相者が『若し出家せば無上正覺をなさむ』と言ひし語の、他日の讖たらむを恐れたるなり。

一時に慈悲心を生じ、疾に苦めるものは癒せずしておのづから癒え、猛獸凶禽寂然として聲を潜め、萬川流を停め、水の濁れるもの悉く清む。空には一點の雲翳無く、天鼓自然に鳴りて八方世界の音等しく是救世主の降誕を讃美せり。唯欲界の大魔王のみ獨り憂ひ惱む。

嗚呼斯かる奇蹟は何事を指示せるか。當時迦毘羅國中の人誰か是を知らむや。さしも沈毅なる父王も是前代未聞の奇特を見て、流石に心安からず、一びは喜び、一びは懼れ、潜に生兒の將來と王國の運命とを氣遣へり。

麻耶夫人に到りては其の不安の情更に甚しかりき。其子の生るゝ常道に因らざるが上に、天地不測の現象をまのあたり目擊せしことなれば、事の吉凶俄に知り難く、天を拜し神に祈りて偏に其の子の安全を希念しけるぞ道理なる。年老いたる宮女等亦競て神明を要して、嬰兒の將來を祝しぬ。

其頃林の中に知相の婆羅門ありて住みけり。威儀堂々として才辯名と共に高し、能く人相を占ひて三世の吉凶を斷じ、當らずと云ふこと無し。曾て王子を見、心大に喜びて踴躍禁ずる能はず。父王の驚き怖るゝを傳へ聞き、王に謁し實を告げ

安坐し、麗かなる天光に浴して暮れ行く春の名殘を惜ませ給ひしが、夢とも無く幻(まぼろし)ともなく、形象殊好の白象其胎内に宿ると覺えて、ふと目さめたるが、五體おのづから靈泉に洗はれたるが如く、心怡ばしきこと限りなし。是より王妃身重になり給ひて、數多の瑞祥時ならざるに到り、迦毘羅國中又災厄無し。傳へ言ふ或は天に樂ありて相和鳴し、或は幢蓋幡綵宮中に展轉せりと。斯くて翌年の二月になりたれば、王妃は分娩の期近きに在るを悟り、印度の習例に從ひて其父母の家に歸らむの許を得給ひ、道に藍毘尼(ルンビニー)園と云へるを過り給へる時、圖らずも分身の期に迫りて直に床を無憂樹の下に設けたり。此時大光明天地の間に耀き、自然の皷樂六合に響き、玉の如き小兒忽然として王妃の右胎より生まれ出でぬ。是ぞ三世の導師、一代の救主、大聖佛陀なりける。

天はもろ〳〵の瑞相を下して、是一大事實を宣揚せり。蓮華繽紛として地に亂れ墜ち、人之に觸るれば妙樂全身に徹す。日月常の如く度れども、光耀ます〳〵明に、もろ〳〵の光と火と薪油無くして愈(いよ〳〵)大熾(さかん)なり。清泉自然に地より湧き出で、藍毘園の上、天樂雲の如く集まりて、樹枝時ならざるに皆花咲けり。邪曲なるものは

是時に當り、亞里安族の一派に釋迦族と云へるあり。雪山の南凡そ三十里、洋々たる恒河の一分派に沿うて國を建つ。其都を迦毘羅城と呼び、其王を淨飯大王と云ふ、南の方、摩伽陀國と並びて、國富み民榮へたり。是れ佛敎三千年流傳の源頭なる大聖佛陀の降誕せる土地にぞある。而して當時社會の氣運は其の腐敗せる宗敎と、其の糜爛せる道德と、共に方に是大救世主の出現を促しつゝありしなり、是點に於ては佛陀も亦た時勢の兒なりと謂ふべきか。

さらば佛陀は如何なる人にして、如何なる事業を爲したりしか、如何にして其の成道を得、又如何にして其の敎化を弘布せしか。

第二章　佛陀の誕生

迦毘羅國王淨飯と云へるは、智勇兼ね備はり、德行並び至れる希代の名君なりしかば、民服し國治まれり。王妃を摩耶夫人と呼べり、容顏花を欺き、心蓮よりも淸し。斯く王と王妃と天德地恩相並びて、萬民頌歌の中に幸福なる月日を送り給ひけり。

或年の事なりき。頃は四月に入りて春將に往かなむとす。王妃は獨り後園に

足るべし。

亞里安民族は中央亞細亞の故郷を出でゝ、印度征服に力を協せし頃こそ一體一族として親和團結せしなれ、地相距り國相異なるに及びては、漸く嫉妬の念を起し、干戈の軋轢已む事無かりき。加ふるに恒河地方の印度は世界に名高き豐穰の土地とて、民は勞役によらずして衣食乏しきの憂無く、氣候亦溫暖なれば四時の風物娛樂の資とならざるは無し。是を以て國人はおしなべて懶惰に陷り、奢侈宴遊の風、上は帝王より下萬民に至るまで靡然として一時の風を成しぬ。其昔し信度河邊にありし時の吠陀（ヴェーダ）の宗教は、今や信仰の熱誠いたく衰へて、徒に儀禮の末節に華美を競ふのみ。僧侶は墮落して救濟の道を知らず、衆俗と共に現世の欲求に走りて日も亦足らず、あはれ往古淳朴の風、敬虔の俗、蕩然として將に地を掃はむとせり。

當時吠陀教の後を承けたる幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を喜びて人生現未の問題に切ならず、偏に談理の幽玄と苦行の慘烈とによりて安心解脫を求めたりき。されば學ぶもの派を樹て、流を別ちて相爭ふところ、畢竟名義の優劣のみ。未だ一世の元々をして本心歸命の大道に就かしむるを得ざりき。

佛陀の傳記を語るに先ち、其時代に就いて一言せざるべからず。

耶蘇紀元前凡そ六世紀の頃、印度の東北、雪山の南、恒河の流域に沿うて、數多の王國峙立せり。是等の王國は何れも亞里安民族なり。是民族は是より先き中央亞細亞より印度に入り、信度河を超へて東に向ひ、到る處所在の土民を征服して恒河一帶の豐沃なる土地に其居を定め、茲に初めて其漂泊的生活を捨てゝ土着の民となれり。爾來年所を經るに隨ひ、山勢水理によりて習慣漸く遠く、利害漸く分れ、因襲日久しくして遂に幾多の獨立王國を生ずるに至れり。唯征服者たる亞里安人と被征服者たる土人との間には、何れの地にありても截然たる差別あり。政治上は言ふを待たず、宗教、社會の事凡て階級に從ひて一定の畛域あり、儀禮格式儼として干すべからざるものあり。精しく言へば、由來印度には所謂四姓の別あり、何れも優勝者と劣敗者との關係より起れるなり。其最高の階級を婆羅門と稱し刹帝利是に次ぎ吠舍又是に次ぐ、最下にあるものを首陀と云ふ。摩奴の法典と名くる印度古代の國法には首陀にして草葉を婆羅門の體に觸るゝものは斬に處せらるべきを規定せり。又如何に上下階級の間に嚴重なる差等ありしやを想見するに

の信者、其教を向仰するの餘り、知らず〳〵種々神怪不測の譚話を襯附して、成るべく其祖師を神聖非凡の靈體ならしめむと務むればなり。佛陀の傳に於て殊に然りとなす。されば今日に於て其の正確なる實傳を考覈せむは、何人も能くする所にあらじ。已むを得ずむば暫く古來の傳說に憑據して印度佛教者が其宗祖に對するの觀想如何を知るを以て足れりとせむ乎。こは獨り佛陀に於て然るのみならず、基督にまれ、馬哈（まはめっと）にまれ、其奇蹟と預言とを外にして誰か其傳記を吾人に語り得るものぞ。且夫れ奇蹟と謂ひ預言と謂ふも、事實の表裏に因みて譬喩寓言に出づるもの多かるべし、されば若し事を捨てゝ意を取らば、其人の性格行狀を知るに於て必ずしも累を爲さざるべきか。讀者よ佛陀が其教を擴めたる印度人は、世にも想像に富める人種なるを記せよ。其神話は飄逸にして奇異多く、其哲學は幽玄にして詩趣饒（ゆたか）なり。彼等は詩歌として佛陀の事蹟を讃唱せしのみ、傳記として記述せしにはあらざるなり。若し三十佛傳の語る所、直に取て以て佛陀の云爲となすあらば、あはれいみじき誤りなるべし。吾人亦暫く是傳說に從ふと雖ども、有識なる讀者は箇中おのづから大聖釋迦の眞傳記を領會するなるべし。

第一章　緒言

三千里外、道相距り、三千年前、時相隔つ靈鷲の山、月長へに明に、恒河の水、昔ながらに流るれども、人は生死の巷に迷ひ、世は盛衰の道を離れず。然れば祇園精舍の花、何時しか色あせて、佛陀伽耶の塔、石に苔あり。今や蕭々たる菩提樹の影、獨人杖を停めて低回するも、誰か大聖釋迦の靈蹟を告げ得べき。

然れど人死して道殘れり。法流一度び東を指すや、四百餘州風の如く靡きて十三宗蔚然として起り、更に三韓を經て日本に入るや、傳敎、弘法是が爲に立ち、法然、道元是に緣りて興り、親鸞、日蓮、是を奉じて動き、堂塔一國に洽く、圓頂都鄙に充つ、又盛ならずとせむや。今や世界を通じて佛敎徒と稱せらるゝもの、無慮六億萬人と稱せらる。素より世道渝り、人心移りたれば、其實既に失せて、其名空しく殘れるも多からむめれど、尙ほ儼然として世界文明の一大勢力たるを失はず。抑々是の一大宗敎三千年の流傳を五十年の說法に收めたる宗祖佛陀は是れ什麼の人なりしぞ。

凡そ一宗敎の開祖と呼ばるゝ人の傳記程、世に知り難きは無かるべし、そは後世

同　四百三十年　佛滅

本書の參考書は甚だ多からず、三十佛傳中、殊に佛所行讃、佛本行集經、普曜經等を取り、其他親友姉崎正治氏の印度宗教史考、藤井宣正氏の佛教小史、リス・デーヴヅ氏の印度佛教史、バウル・カールス氏の佛陀の福音等に據れり。殊に姉崎氏が最も有益なる助言を與へられたるは、著者の特に感謝の意を表する所なり。

明治三十二年一月　著者識

序

今日に於て釋迦の精確なる傳記を考證せむは、如何なる學者も爲し能はざる所なるべし。されば著者は私意を挾みて猥りに事實を添刪せむよりは、寧ろ在來の傳說に憑據するを可なりと信じ、怪奇信ずべからざる事譚をも强ちに虛僞として斥けず。そは斯る奇怪なる事譚も釋迦の眞精神を會得するに於て、多少の緣と爲り得べきを信ずればなり。

釋迦傳中の年月に關して東西古今異說甚だ多し、佛滅時に就て殊に然り。著者は通俗を旨とする本書中に於て科學的精覈を衒はずと雖も、西曆紀元前四百三十年を以て佛滅時とするの說を取り、釋迦一生の年譜を左の如しとなせり。

紀元前五百十年	佛誕
同　四百九十三年	納妃
同　四百九十一年(?)	出城
同　四百八十四年	苦行林に入る
同　四百八十年	成道
同　四百七十四年	父子再會
同　四百六十四年	再び迦毘羅城に入る

釋迦

目次

美術に於ける人物の理想的表現（卅四年九月）……七〇八
美術上理想的表現の必要、七〇八――寓說的人物と理想的表現、七一一――二三の事例、七一二――佛陀の像式」と理想的表現、七一七――世俗の無意識的理想化、七二〇――楠公の銅像、七二三。
將來美術界の一大問題（卅四年九月）……七二四
消息（卅四年九月）……七二六
漫評（卅四年十月）……七二七
雜談（卅四年十二月）……七三三
無題錄（卅五年五月）……七三三
藝苑瑣談（卅五年六月）……七四〇
裝飾と日本美術（卅五年六月）……七四八
藤原時代以後の日本美術史概觀（講義筆記、卅三年六月）……七五一

同上再び宙外に答ふ（卅二年六月）……六三四
美學上の原則と天才、六三四――再び宙外の惑を解く三個條、六三五。
博物館論（文）（卅二年四月）……六四〇
古社寺及古美術の保存に就て（卅二年五月）……六四九
序論、六四九――古社寺保存に就て當局者は定見を有するか、六五二――古社寺保存の三方法、六五六――無分別なる古社寺保存、奈良大佛殿、六六五――古代　術と博物館、六六八。
美術と富豪（卅二年八月）……六七一
富豪の天分、六七一――美術の隱匿、六七二――美術の公共的性質、六七三――社會教育と美術、六七四――是れ國寶を土中に埋沒する也、六七六。
大佛露佛說（文）（卅二年九月）……六七六
妻木博士の非露佛說を駁す……六七六
序言、六七七――大佛は露佛たるべき者也、六七八――大佛殿は大佛の破壞者也、六八一――妻木氏の非露佛說、六八三――妻木氏の非露佛說の批評、六八四――吾人の希望、六八七。
藝術の鑑査を論ず（卅二年九月）……六八八
個人的嗜好、六八九――美術批評家及び其資格、六九三――臨時博覽會鑑査官の選任、六九八。
美術の保護者（卅四年七月）……七〇一

吾が文學界に於ける道義的傾向（廿九年四月）……五六七
古寺院の寶物（三十一年六月）……五六九
新聞雜誌の時代（廿一年）……五七四
人才と我文學界（同）……五七六
美術に對する購買力（同）……五七七
一刀兩斷の制裁曲學阿世（同）……五八一
今の論文家（同）……五八二
西鄕南洲の銅像を評す（廿二年一月）……五八四
緒言、五八四——紀念像と社會教育、五八五——像の大いさ、五八八——彫塑の特性、九二——如上の見地より見たる南洲の銅像、五九四——技巧五九九。
新建築と美術（廿二年三月）……六〇一
『天地有情』を讀みて（廿二年六月）……六〇六
（全集二卷六七六頁以下參照）
詩歌の所緣と其對象に關して難者に答ふ（廿二年三月）……六一一
（全集一卷九三頁以下參照）

予の好める人物（廿五年八月―十一月「中學世界」）……四九六
聖德太子……四九六
聖武天皇……四九八
藤原道長……五〇一
鎭西八郎爲朝……五〇三
清盛入道……五〇六
平時忠……五一〇
文覺……五一三
四行法師……五一六
日蓮上人……五一九
日與日持が事……五二五

文藝評論補遺

戲曲に於ける悲哀の快感を論ず（廿五年十二月「文學會雜誌」）……五二九
日本民族の特性と文學美術（廿八年十二月以下皆「太陽」）……五三一
『青年小說』を讀む（二十九年三月）……五五一
泉鏡花の『化銀杏』五五六――後藤宙外の『ありのすさび』五五九、
喜ぶべき文壇の一傾向（廿八年十二月）……五五五
……五六一

概論、四一九――神代巻の神話、四二一――日本民族の起原及遷徙、四三一。

ジャンヌ・ダルク（廿二年十二月「中學世界」）……四四〇

はしがき、四四〇――おひたち、四四一――オルレアン城の救助、四四三――最後、四四九。

ハイ子が事（廿三年六月「明星」）……四五二

東北物語（廿四年九月「太陽」）……四五四

世界の四聖（廿四年十二月出版「中學國語讀本」）……四五八

冠鐺日親（廿五年五月「中學世界」）……四六八

緒言、四六八――日蓮宗と迫害、四六九――忍力試驗、四七一――一條戻橋の辻說法、四七三――將軍義教への上書、四七四――捕縛、四七七――大迫害、四七九――冠鐺日親、四八二――義教の現罰、四八三――餘言、四八五。

豪傑の半面（廿五年七月「中學世界」）……四八七

清正……四八七

秀吉……四八九

日蓮……四九二

の菅公、三五〇。
菅公年表……三五五
大隈伯が菅公談の後に書す（三十三年七月）……三六一
『菅公論』に就て（三十四年十月）……三六六

史傳雜纂……三七一

南歐美術譚（二十九年七月「中學世界」）……三七三
一　ペリクレース時代……三七三
二　ニオベ像……三七四
三　フヰデアスのツオイス像……三七七
ナポレオン三世（廿一年十二月「中學世界」）……三八二
ルイ・ナポレオンの家系幷に其家庭、三八五――ルイ軍籍に入る、三八七――ルイ操觚者となる、三九〇――ルイ・ナポレオンの放謫、三九一――英國に於けるルイの生活、三九三――ルイの幽囚、三九五、――佛國に於ける二月革命、ルイ・ナポレオン大統領となる、三九七――ルイ佛國の皇帝となる、幷に其內治、四〇一――ナポレオン三世の外交、四〇五――普佛戰爭と末路、四一一。
古事記神代卷の神話及歷史（廿二年三月「反省雜誌」）……四一九

第八章　政治上の菅公其二(流竄)……三〇〇
公に對する嫉妬、三〇〇――時平、三〇一――菅公の憂慮、三〇二――三善清行の書、三〇三――菅公の左遷、三〇四――左遷の罪狀、三〇六――公の連累、三〇七――公果して罪ありしか、三〇九――久米氏の說、三〇九――井上氏の說、三一一――公の左遷は斷じて讒構也、三一三――公と醍醐帝、三一五――公の進退の批評、三一六。
第九章　詩人菅公……三一八
公太宰府に赴く、三一九――護送の官符、三二〇――太宰府の境遇、三二一――菅家後集、三二二――公の詩、三二二――貧苦と疾病、三二七――「燈滅」三二七――公の病沒、三二九――太宰府の左遷と公の人物、三二九――菅公と屈原との比較、三三〇――詩人としての菅公、三三四。
第十章　菅公の崇拜……三三五
延曆寺座主尊意に關する神異譚、三三六――清涼殿の雷火、菅根の震死、三三七――時平の病死、三三七――右大臣公忠の冥府談、三三八――僧日藏の冥府談、三三八――大政威德天としての菅公、三四〇――北野天神の緣起、三四二――官位追贈と託宣、三四四――菅公の神異譚と公の人物、三四五――兩部神道者流の附會說、三四七――菅公の威靈に關する諸種の臆說、三四八――文學の神として

二六一——讃岐に於ける公の行狀、二六三——公の吟詩、二六三——公の老衰、二六四——公の治績、二六六——公の歸京、二六七。

第六章　政治上の菅公其二（藤原氏の政治上の位置及び宇多天皇との關係）……二六七

藤原氏の勢力の由來、二六七——百川、二六八——吉備眞備の反抗、二六八——冬嗣の計畫、二六九——外戚政略、二七〇——其成功、二七〇——文德天皇と良房、二七一——清和天皇、二七二——基經、二七二——陽成天皇の廢立、二七三——光孝天皇の擁立、二七三——擁立政略の繼續、宇多天皇、二七三——阿衡問題の顚末、二七五——阿衡問題に對する藤原氏の二大魂膽、二七八——詔勅改作、二七八——橘廣相の排斥、二七九——宇多天皇の憤懣、二八〇——皇權振張の大計畫、二八一——菅公の登庸、二八二。

第七章　政治上の菅公其三（菅公の榮達及藤原氏との關係）……二八五

異數の叙任、二八五——公の歡喜、二八六——類聚國史、二八六——遣唐使廢止の議、二八六——君恩優渥、二八七——宇多帝の讓位、二八八——讓位の魂膽、二八九——宇多帝と菅公、二九〇——藤原氏の門閥政略、二九一——菅公の位地の危殆、二九三——右大臣、二九四——右大臣辭退の批評、二九五——太政大臣任命の密旨、二九八——公の固辭、二九八——大事は去れり、二九八——天道是乎非乎、三〇〇。

菅原氏の祖先、二〇三——系譜、二〇四——古人、二〇四——清公、二〇六——是善、二〇六——菅公の幼時、二〇八——早熟、二〇九——教育、二一一——對策及第、二一三——公の家庭、二一四——公の健康、二一六。

第三章　菅公の生れたる時代……二一七

平安朝の文華、二一七——奈良朝の漢學、二一九——平安朝の漢學及儒者、二二〇——白樂天、二二一——菅公以後の漢學、二二二——菅公と佛教、二二四——平安朝は佛教の時代也、二二四——菅公の信佛及經典上の知識、二二六——儒門の爭、二三〇——「博士難」、二三一——「詩情怨」、二三四——菅公の南海行、二三四。

第四章　菅公の性格……二三五

菅公の人物に關する疑惑、二三五——菅公崇拜と國民性、二三六——菅公は溫厚の人に非ず、二三六——菅公は大度の人に非ず、二三八——菅公は名譽心に富めり、二四一——菅公は遜退の人に非ず、二四四——神經性、二四六——菅公は神經性の人也、二四八——菅公と我執の念、二五二——菅公の意力は薄弱也、二五三——結論、二五六。

第五章　政治上の菅公其一（讃岐守）……二五七

讃岐守任命の因由、二五八——菅公と藤原氏、二五九——詩人菅公、

九　法皇の幽屏……一四二
一〇　源氏の勃興……一五〇
一一　入道の最後……一五六
一二　清盛論……一六五
平家雜感（三十四年四月）……一七五
　世にも哀れの平家、一七五――入道相國、一七六――小松の內府、一七九――小松殿の早世、一八〇――平家の侍と關東武者、一八一――平家都落、一八三――平家の沒落、一八五――平家の風雅、一八七――沒落と大義名分、一八九、
清盛骨相考（三十四年九月）……一九一
菅公傳……（三十三年三月單行）……一九五
第一章　序論……一九九
　菅公に關する疑問、一九九――菅公傳の目的、二〇一――歷史上の批評と道德上の批難、二〇一。
第二章　菅原氏の傳統及び菅公の少時……二〇三

第十二章　王舍城に於ける佛陀……六六
第十三章　父子の再會……七一
第十四章　佛陀の入滅……七七
第十五章　附言……八一

平相國……(三十四年十一月單行)……八三

一　平家興隆の由來……八七
二　清盛の前半生……九一
三　一門の榮華……一〇〇
四　鹿ヶ谷の會合……一〇五
五　重盛の諫言……一一一
六　重盛の最後……一一三
七　重盛論……一二七
八　法印問答……一三四

目次

釋迦……（卅二年一月單行）……一
第一章　緒言……五
第二章　佛陀の誕生……九
第三章　宮中の生活……一五
第四章　三苦……二〇
第五章　佛陀の決心……二八
第六章　佛陀の出城……三四
第七章　車匿及び乾陟……四〇
第八章　佛陀の學道……四二
第九章　阿羅邏仙人……四八
第十章　成道……五三
第十一章　佛陀の布教……九九

と共に著者の信仰思索に關係多き者なれば重ねて第四卷の末にも收めん。

本卷に揭げたる著者の肖像は仙臺第二高等學校に敎授たりし時代の撮影にかかる。その他の事項は前卷の例に依る。尙美術史補遺の聽講筆記を寄せられたる依知川才次郎君と『菅公傳』の出版者同文館、『平相國』の出版者東京堂、及『世界の四聖』を編載せる中學國語讀本の出版者金港堂とがその轉載を諾せられたるとに對してその好意を感謝す。

本卷校正の終に近づく頃、編者の一人齋藤信策は事を以て故鄕に歸りしを以て、この序言は予一人の記す所なり。

明治三十八年三月三十一日

五年前予が故著者に別れし日

駿州興津にて

姉崎正治

き點なきも、其等は何れも著者が何等かの方面より同情し或は尊敬したる人物の事を記したる者なれば、讀者が單に其の文章以外更に著者の精神的傾向に注目せられん事を望む。故著者の精神信仰につきては、全集第四巻に收むべき材料は特にその發展經過の跡を示すも、彼れにありては、著者の心情と理性との關係、或る場合には背反せる者あるに反して、此巻に收めたる史傳諸篇にては著者が直に自己の胸臆に訴へて同情したる人物を寫し出だしたる者多きが故に、編者は特に讀者に這般の注意を望むなり。

文藝評論の補遺は第一巻なる美學上の研究中にも第二巻の文藝評論中にも編し難かりし者と、先に第二巻編纂の時一時削除したる者とその後の發見に係る者とを一括して收めたり。その多數は著者が太陽にて公にせし者にして、その中「文藝評論」にて重刊せし者二三あり。それ等の區別は第二巻に於けると同じ。但しこの巻にありては、評論の論題多端に亘り、特に時期の區分をなして著者が精神上の發達に關聯するの必要なしと認めたるが故に、全體を單に年代に從て順列したり。その中、末項のニーチェに關する雜談は、第二巻の最後に掲げたる末段の雜談

序言

樗牛全集の第三卷、即ち文藝及史傳の下には、史傳幷に其に關係ある雜論と文學、美術に關する評論類を蒐集せり。中にも『平相國』の一篇は故著者がその編述の筆を執り始めて數日にして脫稿したる者なるも、平家物語は著者が少年時代よりの愛讀書にして、平家の興亡に對する著者の同情は甚だ深かりし者なれば、この一篇は『平家雜感』と共にその心血の熱き迸りといふも過言にあらず。『釋迦』は從來の釋迦傳を少年讀者の爲に編したる者に過ぎずと雖も、大聖釋尊に對する著者が尊信の情は稍その文中に見るべく、『世界の四聖』と共に著者晩年の信仰に豫告をなせる者なきにあらず。『菅公傳』は史傳として著者が批評的判斷に鑄冶せられし者にして、著者が聊か創見發明の自信を有せし者なり。『ナポレオン三世』はその文章より云へば故著者の全集中に編すべき者にあらざれど、著者はこの一篇立案の頃(卅一、二年)には特に十九世紀文明史の研究に從事し居たる事なれば、その研究の餘瀝とも見るべき者なり。その他史傳諸篇に就きては特に記すべ

PL
817
A43
1912
v.3
LIBRARY
JUL 25 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

故高山林次郎著

樗牛全集

第三卷 文藝及史傳 下

明治三十八年

東京 博文館

PL
817
A48
1912
v.3

East
Asiatic
Studies

Takayama, Chogyū
Chogyū zenshū

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

吾人は須らく現代を
超越せざるべからず

高山林次郎